平安京左京北辺四坊

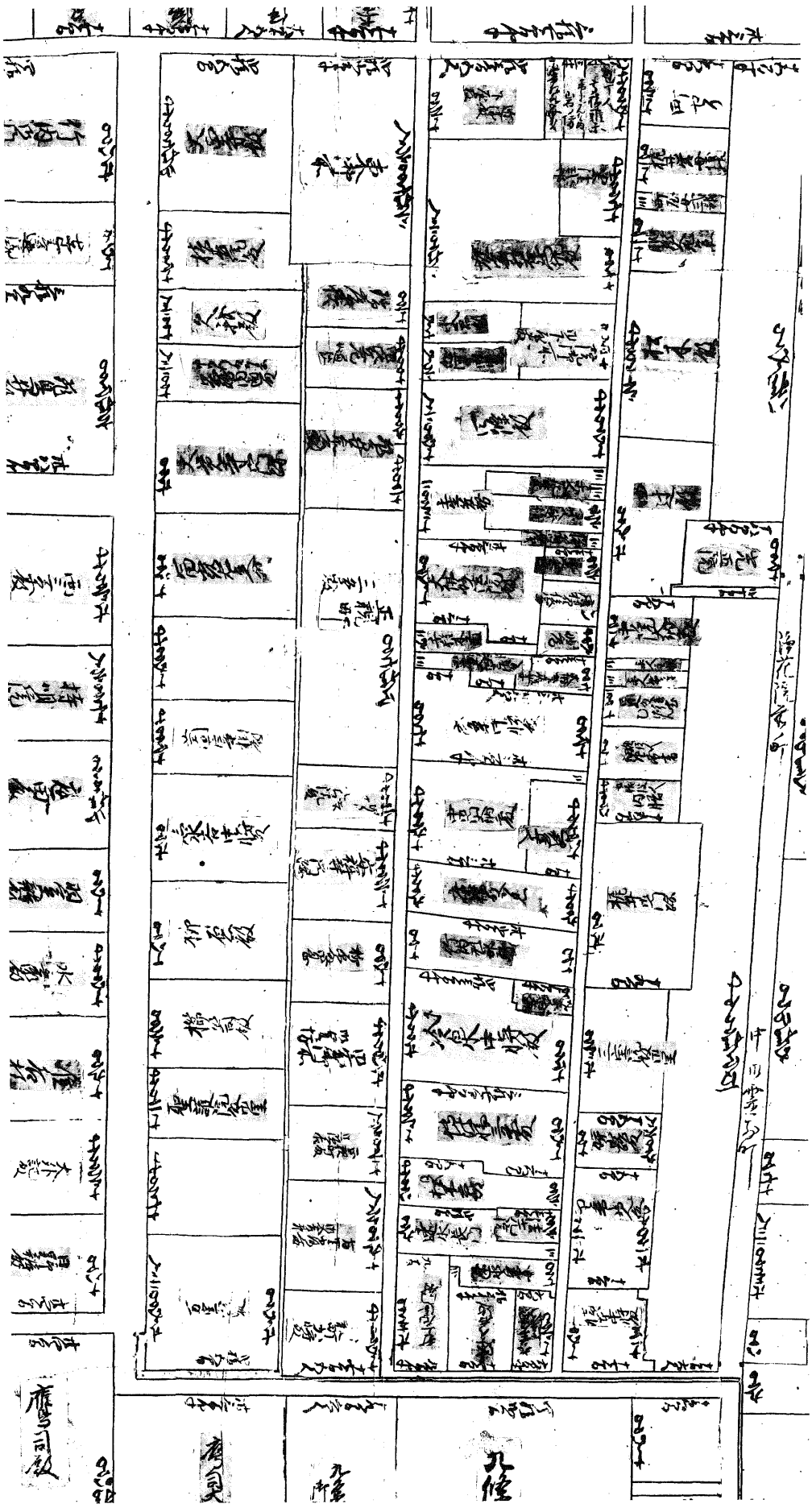
－第２分冊（公家町）－

本　文

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊

2004

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所



『洛中絵図　寛永後万治前』京都大学附属図書館蔵

平安京左京北辺四坊

－第２分冊（公家町）－

本　文

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊

2004

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

目　次

第７章　公家町の歴史と宅地割

第１節　公家町の歴史 …… 1

第２節　古絵図からみた調査地付近の街路と宅地割 …… 4

第８章　遺　構

第１節　Ａ区・Ｍ区 …… 10

第２節　Ｂ区・Ｎ区 …… 14

第３節　Ｃ区 …… 17

第４節　Ｄ区 …… 22

第５節　Ｅ区・Ｌ区 …… 24

第６節　Ｆ区 …… 31

第７節　Ｇ区 …… 39

第８節　Ｈ区 …… 56

第９節　Ｉ区 …… 60

第10節　Ｊ区 …… 61

第11節　Ｋ区 …… 63

第12節　Ｏ区 …… 64

第13節　Ｐ区 …… 65

第14節　Ｑ区 …… 66

第15節　Ｒ区 …… 67

第16節　Ｓ区 …… 71

第17節　Ｔ区 …… 75

第18節　Ｕ区 …… 76

第19節　Ｖ区 …… 76

第20節　Ｗ区 …… 77

第21節　Ｘ区 …… 78

第22節　Ｙ区・Ｚ区 …… 80

第９章　遺　物

第１節　土器・陶磁器類 …… 82

1　土器・陶磁器類の記載について …… 82

2　年代基準とした土器・陶磁器類 …… 89

3　各調査区出土土器・陶磁器類 …… 143

（1）A区 ……143
（2）B区 ……145
（3）C区 ……150
（4）D区 ……153
（5）E区 ……156
（6）F区 ……163
（7）G区 ……168
（8）H・M・N区……185
（9）J区 ……192
(10) P区 ……192
(11) R・S・V・X区 ……193
第2節 瓦類 ……197
第3節 その他の遺物 ……213
1 貨幣 ……213
2 金属製品 ……216
3 骨製品 ……228
4 鋳型 ……228
5 石製品 ……229
6 ガラス製品 ……233
第4節 賢瓶とその内容物 ……238
1 賢瓶埋納土壙検出状況 ……238
2 賢瓶の本体及び内容物の理化学的調査 ……239

第10章 立会調査の成果 ……245

第11章 まとめ
第1節 公家町の成立と構造の変遷 ……253
1 北半部 ……253
2 南半部 ……265
第2節 饗宴殿について ……269
第3節 近世の土師器皿 ……273
第4節 出土陶磁器の様相 ……286
第5節 穴蔵G749出土陶磁器について ……294
第6節 公家町の瓦 ……298
第7節 その他の遺物 ……305

第12章　発掘調査の成果と課題 ……309

付章１　出土ガラス製品の定性分析と保存に関する基礎的調査 …315
付章２　出土ガラス製品の化学分析 ……330
付章３　出土漆器資料の材質と製作技法に関する調査 ……333
付章４　動物遺存体の分析 ……342

英文要旨 ……357

図 版 目 次

巻頭図版			『洛中絵図　寛永後万治前』京都大学附属図書館蔵
図版１	遺物	1	Ｆ区土壙Ｆ1605出土遺物
		2	Ｃ区穴蔵Ｃ548Ｂ出土遺物
図版２	遺物	1	Ｆ区土壙Ｆ1432出土遺物
		2	Ｂ区土壙Ｂ725出土遺物
図版３	遺物	1	Ｆ区土壙Ｆ1455出土遺物
		2	Ｆ区土壙Ｆ1244出土遺物
図版４	遺物	1	Ｆ区穴蔵Ｆ1387出土遺物
		2	Ｂ区土壙Ｂ776出土遺物
図版５	遺物	1	Ｈ区土壙Ｈ166出土遺物
		2	Ｈ区土壙Ｈ271出土遺物
図版６	遺物	1	Ｅ区土壙Ｅ45出土遺物
		2	Ｂ区土壙Ｂ716出土遺物
図版７	遺物	1	Ｇ区土壙Ｇ348出土遺物
		2	Ｂ区土壙Ｂ687出土遺物
図版８	遺物	1	Ｈ区土壙Ｈ15出土遺物
		2	宅地５・６（柳原家）出土肥前磁器（鍋島様式）
図版９	遺物		Ｇ区穴蔵Ｇ749出土遺物
図版10	遺物	1	Ｇ区穴蔵Ｇ749出土染付碗・皿
		2	Ｇ区穴蔵Ｇ749出土白磁皿
		3	Ｇ区穴蔵Ｇ749出土染付皿
		4	Ｇ区穴蔵Ｇ749出土錆絵染付皿
		5	Ｇ区穴蔵Ｇ749出土遺物（国産磁器）
図版11	遺物	1	Ｇ区穴蔵Ｇ749出土青花小鉢
		2	Ｇ区穴蔵Ｇ749出土青花鉢
		3	Ｇ区穴蔵Ｇ749出土青花碗
		4	Ｇ区穴蔵Ｇ749出土椀・皿
		5	Ｇ区穴蔵Ｇ749出土遺物（国産陶器）
図版12	遺物	1	Ｇ区土壙Ｇ1157出土漆器
		2	Ｇ区土壙Ｇ747出土京焼碗
図版13	遺跡	1	Ａ区江戸時代中期・後期全景（北東から）
		2	Ａ区南西部江戸時代中期・後期全景（西から）
図版14	遺跡	1	Ａ区溝Ａ７（西から）

2　A区池A57（西から）

3　A区井戸A107（西から）

4　A区竈A329（西から）

5　A区埋納土壙A45出土状況（南から）

図版15　遺跡　1　A区江戸時代前期全景（西から）

2　A区建物A1086（西から）

図版16　遺跡　1　A区塀A1093（西から）

2　A区井戸A374（西から）

3　A区集石A367（東から）

4　A区土壙A282（南西から）

5　A区井戸A289（南から）

図版17　遺跡　1　B区江戸時代中期・後期全景（北東から）

2　B区溝B678（前）・溝B675（後）（南西から）

図版18　遺跡　1　B区土取穴群（北から）

2　B区溝B769・塀B1095（西から）

3　B区瓦組土壙B636（西から）

4　B区集石群（東から）

図版19　遺跡　1　B区建物B1094（西から）

2　B区塀B1097・B1098（東から）

3　B区石組土壙B875

図版20　遺跡　1　C区江戸時代後期全景（北から）

2　C区側溝C10・溝C135（北西から）

図版21　遺跡　1　C区側溝C10と塀C1411（北から）

2　C区溝C35（東から）

3　C区溝C113と瓦組枡C153（北東から）

図版22　遺跡　1　C区江戸時代中期全景（北西から）

2　C区穴蔵C570（東から）

3　C区埋納土壙C342（北西から）

4　C区井戸C660（北東から）

図版23　遺跡　1　C区江戸時代前期全景（北西から）

2　C区溝C918（北から）

3　C区溝H270（北から）

図版24　遺跡　1　D区江戸時代後期全景（北から）

2　D区溝C156（北から）

3　D区塀D637（西から）

図版25　遺跡　1　D区江戸時代中期全景（北から）
2　D区溝D189（北から）
3　D区塀D303（東から）
4　D区井戸D535（東から）
図版26　遺跡　1　D区江戸時代前期全景（北西から）
2　D区溝H270南部（北から）
3　D区井戸D438（東から）
図版27　遺跡　1　E区饗宴殿（北東部）基礎跡（北から）
2　E区江戸時代後期全景（北東から）
図版28　遺跡　1　E区能舞台E2664（北から）
2　E区能舞台E2664埋甕（北から）
3　E区溝E30（東から）
図版29　遺跡　1　E区池E25（北東から）
2　E区池E25内円形窪瓦廃棄状況（北から）
3　E区池E25下層（北東から）
図版30　遺跡　1　E区石組土壙E22（北から）
2　E区穴蔵E355（東から）
3　E区竈E140（東から）
4　E区石組土壙E12（東から）
5　E区竈E185上面（北から）
6　E区竈E185下面（北から）
図版31　遺跡　1　E区江戸時代前期・中期全景（北から）
2　E区石組E259（南から）
3　E区井戸E255息抜穴（東から）
4　E区土壙E268獅子口出土状況（東から）
5　E区賢瓶出土状況（北東から）
図版32　遺跡　1　F区饗宴殿（南東部）基礎跡（北から）
2　F区江戸時代中期・後期全景（北東から）
図版33　遺跡　1　F区北西拡張区中筋通路面（東から）
2　F区南西拡張区中筋通路面・溝F1392（南東から）
図版34　遺跡　1　F区池E25（東から）
2　F区池E25完堀状況（東から）
図版35　遺跡　1　F区漆喰溝F970（東から）
2　F区石組土壙F1153（北から）
3　F区集石F1060（東から）

4　F区石組土壙F1156（東から）

図版36　遺跡　1　F区溝F1250（北から）

2　F区塀F2668（東から）

3　F区井戸F1275蓋石（南から）

4　F区土壙F1159（南から）

5　F区井戸F961（西から）

6　F区石組土壙F1315（東から）

図版37　遺跡　1　F区江戸時代前期全景（北から）

2　F区建物F2665（北から）

図版38　遺跡　1　F区建物F2666（北東から）

2　F区建物F2667（東から）

3　F区塀F1047（東から）

4　F区溝F2030（北から）

図版39　遺跡　1　F区溝F1090（東から）

2　F区池F1685（北から）

3　F区池F1685内埋甕F2210（北西から）

4　F区埋納土壙F2383（西から）

5　F区南西拡張区中筋通路面（東から）

6　F区埋納土壙F2390（東から）

7　F区埋納土壙F2390下層（西から）

図版40　遺跡　G区江戸時代後期全景（北から）

図版41　遺跡　1　G区二階町通路面G２・溝C10・C156（北から）

2　G区溝C10（北から）

3　G区溝C156（北東から）

図版42　遺跡　1　G区道路C1417と溝G535（西から）

2　G区集石G370（西から）

3　G区石組土壙G500（西から）

4　G区石組土壙G392（東から）

5　G区溝G77と石組土壙G393（東から）

図版43　遺跡　1　G区溝G４Bと石組土壙G277（北東から）

2　G区溝G４（西から）

3　G区井戸G420（東から）

4　G区埋納土壙G573（北西から）

5　G区埋納土壙G1221（南西から）

6　G区埋納土壙G660（北から）

7　G区土器廃棄土壙G348（北西から）

図版44　遺跡　1　G区蔵G110（北から）

2　G区池G250・G364（北東から）

3　G区池G250内埋甕1（北から）

4　G区池G250内埋甕2（北から）

図版45　遺跡　1　G区池G364（北東から）

2　G区池G253B・石組土壙G3690（東から）

3　G区池G253（東から）

4　G区池G253内埋甕（東から）

5　G区井戸G3691（北から）

図版46　遺跡　1　G区江戸時代中期全景（北から）

2　G区石組土壙G1015（西から）

3　G区石組土壙G430（西から）

図版47　遺跡　1　G区埋納土壙G1090（南東から）

2　G区埋納土壙G1257（北から）

3　G区溝G281と石組土壙G235（北から）

4　G区建物G3750（東から）

図版48　遺跡　1　G区江戸時代前期全景（北から）

2　G区溝R150（北から）

3　G区道路G1850と溝G1195（北から）

図版49　遺跡　1　G区石列G986（南から）

2　G区井戸G2071Aと集石G2071B（北西から）

3　G区溝G1635（西から）

4　G区蔵G1097（北から）

図版50　遺跡　1　G区穴蔵G749（北東から）

2　G区穴蔵G749セクション（北から）

3　G区石組土壙G1606（東から）

4　G区穴蔵G1805（東から）

5　G区埋甕G1262（東から）

図版51　遺跡　1　G区蔵G694（北から）

2　G区池G1234A全景（北西から）

図版52　遺跡　1　G区池G1234A（北西から）

2　G区池G1234B（北から）

図版53　遺跡　1　G区池G1234Aの立石（北西から）

2　G区石組G1936と溝G1964（南東から）

3　G区溝G1961（北西から）

4　G区階段G2000（南東から）

図版54　遺跡　1　G区井戸G2455（北東から）

2　G区池G2485（南東から）

3　G区塀F1740・F1740B（東から）

図版55　遺跡　1　G区池G1972（北西から）

2　G区溝G1983（北から）

3　G区土壙G1447断面（北東から）

図版56　遺跡　1　G区池G2180（北西から）

2　G区堀G1940（北から）

図版57　遺跡　1　H区江戸時代後期全景（北東から）

2　H区南西部江戸時代後期全景（北から）

図版58　遺跡　1　H区石組土壙H25・H65・溝H45・H78（東から）

2　H区穴蔵H97（西から）

図版59　遺跡　1　H区土壙H166遺物出土状況（北から）

2　H区土壙H485（西から）

図版60　遺跡　1　H区塀H914（北から）

2　H区溝H30・H78（北東から）

3　H区塀H916（北から）

4　H区石組土壙H20（北から）

5　H区石組土壙H103（北から）

6　H区蔵H50（西から）

7　H区埋甕H52（東から）

図版61　遺跡　1　H区江戸時代前期全景（南東から）

2　H区溝H500（北から）

3　H区溝H500排水施設（東から）

図版62　遺跡　1　H区北西拡張区塀A1093（東から）

2　H区土壙H267土器出土状況（西から）

3　H区北西拡張区溝A７（南から）

4　H区溝H270（南から）

5　H区堀G1940（北から）

図版63　遺跡　1　Ｉ区江戸時代中期全景（北から）

2　Ｉ区江戸時代前期全景（北から）

図版64　遺跡　1　Ｊ区江戸時代後期全景（北から）

2　Ｊ区江戸時代中期全景（北から）

図版65　遺跡　1　Ｊ区江戸時代前期全景（北から）
2　Ｊ区石組土壙Ｊ１（南から）
3　Ｊ区石組土壙Ｊ５（東から）
4　Ｊ区石組土壙Ｊ57（東から）
5　Ｊ区石組土壙Ｊ54（西から）
図版66　遺跡　1　Ｋ区江戸時代後期全景（北から）
2　Ｋ区江戸時代前期全景（北から）
図版67　遺跡　1　Ｌ区江戸時代前期全景（東から）
2　Ｍ区江戸時代前期全景（北から）
3　Ｎ区江戸時代中期全景（北から）
図版68　遺跡　1　Ｏ区北部江戸時代前期～後期全景（北から）
2　Ｏ区南部江戸時代前期～後期全景（北から）
図版69　遺跡　1　Ｐ区江戸時代後期全景（北から）
2　Ｐ区江戸時代前期全景（西から）
図版70　遺跡　1　Ｐ区石組土壙Ｐ82（南から）
2　Ｐ区井戸Ｐ69（南西から）
3　Ｐ区塀Ｐ266（西から）
4　Ｐ区溝Ｈ270（北から）
5　Ｐ区土壙Ｐ117（西から）
6　Ｐ区桃山期全景（北西から）
図版71　遺跡　1　Ｑ区江戸時代前期（１）全景（北から）
2　Ｑ区江戸時代前期（２）全景（東から）
図版72　遺跡　1　Ｒ区北部江戸時代中期・後期全景（北から）
2　Ｒ区北部江戸時代前期（３）全景（北から）
図版73　遺跡　Ｒ区南部江戸時代前期（３）全景（北東から）
図版74　遺跡　1　Ｒ区溝Ｒ150と路面（北東から）
2　Ｒ区溝Ｒ150石組（北東から）
3　Ｒ区溝Ｒ150（北から）
4　Ｒ区溝Ｒ1050（南東から）
図版75　遺跡　1　Ｒ区北部江戸時代前期（２）全景（北から）
2　Ｒ区南部江戸時代前期（２）全景（北から）
図版76　遺跡　1　Ｒ区溝Ｒ150下層（北から）
2　Ｒ区溝Ｒ150下層石組（北東から）
3　Ｒ区南部江戸時代前期（１）全景（北から）
図版77　遺跡　1　Ｓ区東部江戸時代中期・後期全景（東から）

		2	S区東部江戸時代中期・後期全景（西から）
		3	S区溝S１（南東から）
図版78	遺跡	1	S区西部江戸時代前期（３）全景（東から）
		2	S区溝S１と礎石群（北東から）
		3	S区埋桶S８－１～４（北西から）
図版79	遺跡	1	S区西部江戸時代前期（２）全景（東から）
		2	S区西部江戸時代前期（１）全景（東から）
図版80	遺跡	1	V区江戸時代前期全景（東から）
		2	V区溝V１（東から）
		3	V区溝V１（北から）
図版81	遺跡	1	W区江戸時代前期・中期全景（西から）
		2	W区江戸時代前期全景（西から）
		3	X区江戸時代中期全景（東から）
図版82	遺跡	1	X区江戸時代前期全景（東から）
		2	Z区江戸時代後期全景（北から）
図版83	遺物	1	肥前磁器　禁裏注文品（18世紀初頭　外面）
		2	肥前磁器　禁裏注文品（18世紀初頭　内面）
図版84	遺物	1	肥前磁器　禁裏注文品（18世紀後半　外面）
		2	肥前磁器　禁裏注文品（18世紀後半　内面）
図版85	遺物	1	肥前磁器　禁裏注文品（19世紀初頭　外面）
		2	肥前磁器　禁裏注文品（19世紀初頭　内面）
図版86	遺物	1	京焼　禁裏注文品
		2	B区土壙B674出土肥前磁器
図版87	遺物	1	能舞台埋甕E23
		2	能舞台埋甕E33
		3	能舞台埋甕E34
		4	能舞台埋甕E37
		5	能舞台埋甕E38
		6	能舞台埋甕E74
図版88	遺物		土壙C916出土瓦
図版89	遺物		土壙B725出土瓦
図版90	遺物		土壙S43出土瓦
図版91	遺物		土壙O１出土瓦
図版92	遺物		土壙S６出土瓦
図版93	遺物		土壙R21出土瓦

図版94　遺物　　土壙Ｒ87出土瓦
図版95　遺物　　天明大火以降の遺構出土瓦
図版96　遺物　　金箔瓦
図版97　遺物　　家紋瓦１
図版98　遺物　　家紋瓦２
図版99　遺物　　家紋瓦３
図版100 遺物　　棟端瓦１
図版101 遺物　　棟端瓦２
図版102 遺物　　棟端瓦３
図版103 遺物　　井戸Ｆ1280井戸枠瓦
図版104 遺物　　刻印瓦・文字瓦
図版105 遺物　　貨幣１
図版106 遺物　　貨幣２
図版107 遺物　　貨幣３
図版108 遺物　　金属製品１
図版109 遺物　　金属製品２
図版110 遺物　　金属製品３
図版111 遺物　　金属製品４
図版112 遺物　　金属製品５
図版113 遺物　　金属製品６
図版114 遺物　　金属製品７
図版115 遺物　　金属製品８
図版116 遺物　　骨製品・鋳型
図版117 遺物　　石製品１
図版118 遺物　　石製品２
図版119 遺物　　石製品３
図版120 遺物　　石製品４
図版121 遺物　　石製品５
図版122 遺物　　ガラス製品１
図版123 遺物　　ガラス製品２
図版124 遺物　　ガラス製品３
図版125 遺物　１　賢瓶
　　２　賢瓶Ｘ線写真
　　３　賢瓶内容物取出作業
　　４　賢瓶内容物

図版126 凡例　1　A・M区平面図配置図
2　B・N区平面図配置図
3　C区平面図配置図
4　D区平面図配置図
図版127 凡例　1　E・L区平面図配置図
2　F区平面図配置図
3　G・I・J・K区平面図配置図
4　H区平面図配置図
図版128 凡例　1　O・P・Q区平面図配置図
2　R区平面図配置図
3　S区西部・V・W区平面図配置図
4　S区東部・T・U・X・Y・Z区平面図配置図
図版129 遺構　A・M区桃山期遺構平面図
図版130 遺構　A・M区江戸時代前期遺構平面図
図版131 遺構　A・M区江戸時代中期遺構平面図
図版132 遺構　A・M区江戸時代後期遺構平面図
図版133 遺構　1　A区建物A1086実測図
2　A区集石A367実測図
3　A区建物A1087実測図
4　A区竈A329実測図
5　A区集石A157・A165・A205実測図
図版134 遺構　1　A区塀A1091・A1092実測図
2　A区塀A1093実測図
図版135 遺構　A区建物A1088実測図
図版136 遺構　1　A区溝A7（第1面）実測図
2　A区溝A7（第2面）実測図
3　A区埋納土壙A45実測図
4　A区埋納土壙A341実測図
5　A区池A57実測図
図版137 遺構　1　A区石組土壙A6実測図
2　A区石組土壙A97実測図
3　A区井戸A354実測図
4　B区建物B1094実測図
図版138 遺構　B区北部・N区桃山期遺構平面図
図版139 遺構　B区南部桃山期・江戸時代前期遺構平面図

図版140 遺構　　Ｂ区北部・Ｎ区江戸時代前期遺構平面図
図版141 遺構　　Ｂ区北部・Ｎ区江戸時代中期遺構平面図
図版142 遺構　　Ｂ区南部江戸時代中期・後期遺構平面図
図版143 遺構　　Ｂ区北部・Ｎ区江戸時代後期遺構平面図
図版144 遺構　1　Ｂ区塀Ｂ1095実測図
　　2　Ｂ区塀Ｂ1096実測図
図版145 遺構　1　Ｂ区塀Ｂ1097実測図
　　2　Ｂ区塀Ｂ1098実測図
　　3　Ｂ区塀Ｂ1099実測図
図版146 遺構　1　Ｂ区土壙Ｂ725実測図
　　2　Ｂ区溝Ｂ675実測図
　　3　Ｂ区溝Ｂ678実測図
　　4　Ｂ区瓦組土壙Ｂ636実測図
　　5　Ｂ区埋納土壙Ｂ778実測図
図版147 遺構　　Ｃ区西部桃山期遺構平面図
図版148 遺構　　Ｃ区東部桃山期遺構平面図
図版149 遺構　　Ｃ区西部江戸時代前期遺構平面図
図版150 遺構　　Ｃ区東部江戸時代前期遺構平面図
図版151 遺構　　Ｃ区西部江戸時代中期遺構平面図
図版152 遺構　　Ｃ区東部江戸時代中期遺構平面図
図版153 遺構　　Ｃ区西部江戸時代後期遺構平面図
図版154 遺構　　Ｃ区東部江戸時代後期遺構平面図
図版155 遺構　1　Ｃ区塀Ｃ1416実測図
　　2　Ｃ区塀Ｃ1415実測図
図版156 遺構　1　Ｃ区溝Ｃ918実測図
　　2　Ｃ区塀Ｃ1414実測図
図版157 遺構　1　Ｃ区井戸Ｃ661実測図
　　2　Ｃ区井戸Ｃ952実測図
　　3　Ｃ区埋納土壙Ｃ494実測図
　　4　Ｃ区埋納土壙Ｃ342実測図
　　5　Ｃ区井戸Ｃ1192実測図
図版158 遺構　1　Ｃ区井戸Ｃ660実測図
　　2　Ｃ区溝Ｃ113・瓦組枡Ｃ153実測図
　　3　Ｃ区溝Ｃ35実測図
　　4　Ｃ区穴蔵Ｃ570実測図

図版159 遺構 1 C区溝C10実測図
2 C区溝C156実測図
図版160 遺構 D区桃山期遺構平面図
図版161 遺構 D区江戸時代前期遺構平面図
図版162 遺構 D区江戸時代中期遺構平面図
図版163 遺構 D区江戸時代後期遺構平面図
図版164 遺構 1 D区井戸D535実測図
2 D区井戸D438実測図
3 D区井戸D318C実測図
4 D区石組土壙D346実測図
5 D区塀D303実測図
図版165 遺構 1 D区井戸D296実測図
2 D区穴蔵D200実測図
3 D区塀D637実測図
図版166 遺構 E区北部・L区桃山期遺構平面図
図版167 遺構 E区南部桃山期遺構平面図
図版168 遺構 E区北部・L区江戸時代前期遺構平面図
図版169 遺構 E区南部江戸時代前期遺構平面図
図版170 遺構 E区北部・L区江戸時代中期遺構平面図
図版171 遺構 E区南部江戸時代中期遺構平面図
図版172 遺構 E区北部・L区江戸時代後期遺構平面図
図版173 遺構 E区南部江戸時代後期遺構平面図
図版174 遺構 1 E区竈E140実測図
2 E区竈E185実測図
3 E区埋甕E158実測図
4 E区埋甕E89実測図
5 E区埋甕E68実測図
6 E区埋甕E59実測図
7 E区埋甕E43実測図
図版175 遺構 1 E区土壙E1実測図
2 E区石組土壙E354実測図
3 E区石組土壙E12実測図
4 E区穴蔵E355実測図
図版176 遺構 1 E区集石E203実測図
2 E区集石E430実測図

3　E区集石E136実測図
4　E区集石E257実測図
5　E区集石E234実測図
6　E区集石E134実測図
7　E区石組土壙E123実測図
8　E区石組土壙E371実測図
図版177 遺構　E区溝E35実測図
図版178 遺構　E区溝E30（新・古）実測図
図版179 遺構 1　E区能舞台E2664実測図
2　E区埋甕E33実測図
3　E区埋甕E34実測図
4　E区埋甕E37実測図
5　E区埋甕E38実測図
6　E区埋甕E74実測図
7　E区埋甕E155実測図
8　E区埋甕E23実測図
9　E区集石E86実測図
10　E区集石E102実測図
図版180 遺構 1　E区石組土壙E345実測図
2　E区井戸E210実測図
3　E区石組土壙E22実測図
4　E区集石E 3 実測図
5　E区集石E70実測図
図版181 遺構　F区北部桃山期～江戸時代後期遺構平面図
図版182 遺構　F区西部桃山期遺構平面図
図版183 遺構　F区東部桃山期遺構平面図
図版184 遺構　F区西部江戸時代前期遺構平面図
図版185 遺構　F区東部江戸時代前期遺構平面図
図版186 遺構　F区西部江戸時代中期遺構平面図
図版187 遺構　F区東部江戸時代中期遺構平面図
図版188 遺構　F区西部江戸時代後期遺構平面図
図版189 遺構　F区東部江戸時代後期遺構平面図
図版190 遺構　F区塀F1740実測図
図版191 遺構　F区建物F2665実測図
図版192 遺構　F区建物F2666実測図

図版193 遺構　1　Ｆ区建物Ｆ2667実測図
2　Ｆ区竈Ｆ1555・土壙Ｆ2208実測図
図版194 遺構　1　Ｆ区池Ｆ1685実測図
2　Ｆ区埋甕Ｆ2210実測図
図版195 遺構　1　Ｆ区埋納土壙Ｆ2390実測図
2　Ｆ区竈Ｆ1680実測図
3　Ｆ区埋納土壙Ｆ2383実測図
4　Ｆ区集石Ｆ2396実測図
5　Ｆ区埋甕Ｆ1582実測図
6　Ｆ区集石Ｆ2195実測図
7　Ｆ区土壙Ｆ1980実測図
図版196 遺構　1　Ｆ区塀Ｆ2668実測図
2　Ｆ区穴蔵Ｆ1387実測図
3　Ｆ区塀Ｆ2669実測図
図版197 遺構　Ｆ区溝Ｆ1250実測図
図版198 遺構　1　Ｆ区塀Ｆ2671実測図
2　Ｆ区溝Ｆ2030内柱列実測図
図版199 遺構　1　Ｆ区井戸Ｆ1385実測図
2　Ｆ区井戸Ｆ1799実測図
3　Ｆ区漆喰敷Ｆ1268実測図
4　Ｆ区集石Ｆ1060実測図
5　Ｆ区井戸Ｆ1275実測図
6　Ｆ区石組土壙Ｆ1496実測図
図版200 遺構　1　Ｆ区漆喰溝Ｆ970実測図
2　Ｆ区溝Ｆ1392実測図
3　Ｆ区石組土壙Ｆ1153・Ｆ1386実測図
4　Ｆ区石組土壙Ｆ980実測図
5　Ｆ区石組土壙Ｆ1315実測図
6　Ｆ区土壙Ｆ1159実測図
図版201 遺構　Ｅ・Ｆ区池Ｅ25実測図
図版202 遺構　Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｇ区北西部桃山期遺構平面図
図版203 遺構　Ｇ区北東部桃山期遺構平面図
図版204 遺構　Ｇ区南西部桃山期遺構平面図
図版205 遺構　Ｇ区南東部桃山期遺構平面図
図版206 遺構　Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｇ区北西部江戸時代前期遺構平面図

図版207 遺構　　G区北東部江戸時代前期遺構平面図
図版208 遺構　　G区南西部江戸時代前期遺構平面図
図版209 遺構　　G区南東部江戸時代前期遺構平面図
図版210 遺構　　Ⅰ・J・K・G区北西部江戸時代中期遺構平面図
図版211 遺構　　G区北東部江戸時代中期遺構遺構平面図
図版212 遺構　　G区南西部江戸時代中期遺構平面図
図版213 遺構　　G区南東部江戸時代中期遺構平面図
図版214 遺構　　Ⅰ・J・K・G区北西部江戸時代後期遺構平面図
図版215 遺構　　G区北東部江戸時代後期遺構平面図
図版216 遺構　　G区南西部江戸時代後期遺構平面図
図版217 遺構　　G区南東部江戸時代後期遺構平面図
図版218 遺構　1　G区池G2180実測図
　　2　G区池G2385実測図
図版219 遺構　1　G区石列G3689実測図
　　2　G区溝G1983実測図
図版220 遺構　1　G区溝R150実測図
　　2　G区塀G3738実測図
図版221 遺構　1　G区塀G3739実測図
　　2　G区塀G3740北半実測図
図版222 遺構　1　G区塀G3740南半実測図
　　2　G区塀G3741実測図
図版223 遺構　1　G区塀G3742実測図
　　2　G区塀G3743東半実測図
図版224 遺構　1　G区塀G3743西半実測図
　　2　G区塀G3744実測図
　　3　G区塀G3745北半実測図
図版225 遺構　1　G区塀G3745南半実測図
　　2　G区塀F1740実測図
図版226 遺構　　G区塀F1740B実測図
図版227 遺構　1　G区井戸G2071A・集石G2071B実測図
　　2　G区集石G1150実測図
　　3　G区集石G817実測図
　　4　G区集石G1319実測図
　　5　G区集石G1175実測図
　　6　G区集石G1059実測図

図版228 遺構 1 G区穴蔵G749実測図
2 G区集石G1222実測図
3 G区石組土壙G1606実測図
4 G区穴蔵G630実測図
5 G区穴蔵G1805実測図
図版229 遺構 G区蔵G1097実測図
図版230 遺構 1 G区埋甕G1262実測図
2 G区池G625実測図
3 G区池G1234A実測図
4 G区石組G1936実測図
5 G区溝G1961実測図
図版231 遺構 G区池G1234C・G2485・井戸G2455実測図
図版232 遺構 G区池G1234B・石組G1936・溝G1961・階段G2000実測図
図版233 遺構 G区池G1234A実測図
図版234 遺構 1 G区瓦組土壙G1366実測図
2 G区井戸G2455実測図
図版235 遺構 G区池G1972実測図
図版236 遺構 1 G区溝G862実測図
2 G区溝G535B実測図
3 G区塀G3746実測図
4 G区塀G3747実測図
図版237 遺構 1 G区塀G3748実測図
2 G区塀G3749実測図
図版238 遺構 1 G区集石G429実測図
2 G区集石G1116実測図
3 G区集石G819実測図
4 G区井戸G2815実測図
5 G区石組土壙G1015実測図
6 G区集石G737実測図
7 G区埋納土壙G637実測図
8 G区集石G725実測図
9 G区石組土壙G430・集石G505実測図
10 G区埋納土壙G1221実測図
図版239 遺構 1 G区井戸G741実測図
2 G区埋納土壙G573実測図

3　G区埋納土壙G660実測図
4　G区石組土壙G415実測図
5　G区石組土壙G952実測図
6　G区埋納土壙G1090実測図
7　G区埋納土壙G1257実測図
8　G区埋納土壙G2700実測図
9　G区井戸G3691実測図
図版240 遺構　1　G区池G1070実測図
2　G区井戸G626実測図
3　G区蔵G694実測図
図版241 遺構　1　G区溝G887実測図
2　G区土壙G327実測図
3　G区石組土壙G235・溝G281実測図
4　G区建物G3750・土壙G736実測図
図版242 遺構　G区溝C10実測図
図版243 遺構　G区溝C156実測図
図版244 遺構　1　G区集石G370実測図
2　G区石列G485実測図
3　G区石列G650実測図
図版245 遺構　1　G区石組土壙G392実測図
2　G区石組土壙G500実測図
3　G区溝G77・石組土壙G393実測図
4　G区集石G482実測図
5　G区集石G528実測図
図版246 遺構　1　G区井戸G420実測図
2　G区溝G4実測図
3　G区溝G4・石組土壙G277実測図
4　G区池G460実測図
5　G区集石G307実測図
6　G区埋甕G439実測図
7　G区埋甕G387実測図
8　G区溝G590実測図
図版247 遺構　1　G区埋納土壙G339実測図
2　G区池G253実測図
3　G区池G253B・石組土壙G3690実測図

図版248 遺構　　G区池G250実測図
図版249 遺構　　G区池G364実測図
図版250 遺構　　G区蔵G110実測図
図版251 遺構　1　G区建物G572実測図
　　2　G区石組土壙G103実測図
　　3　G区埋甕G240実測図
　　4　G区埋甕G258実測図
　　5　G区埋納土壙G182実測図
図版252 遺構　　G区土壙G348実測図
図版253 遺構　　H区北部桃山期遺構平面図
図版254 遺構　　H区南部桃山期遺構平面図
図版255 遺構　　H区北部江戸時代前期遺構平面図
図版256 遺構　　H区南部江戸時代前期遺構平面図
図版257 遺構　　H区北部江戸時代中期遺構平面図
図版258 遺構　　H区南部江戸時代中期遺構平面図
図版259 遺構　　H区北部江戸時代後期遺構平面図
図版260 遺構　　H区南部江戸時代後期遺構平面図
図版261 遺構　1　H区塀H912実測図
　　2　H区塀H913実測図
　　3　H区塀H914実測図
　　4　H区塀A1093実測図
図版262 遺構　1　H区塀H917実測図
　　2　H区溝H270・堀G1940断面実測図
　　3　H区溝H500実測図
図版263 遺構　1　H区溝A７実測図
　　2　H区土壙H166実測図
　　3　H区穴蔵H97実測図
　　4　H区蔵H50実測図
図版264 遺構　1　H区土壙H485実測図
　　2　H区石組土壙H65実測図
　　3　H区石組土壙H25実測図
　　4　H区井戸H27実測図
　　5　H区埋甕H52実測図
　　6　H区埋甕H53実測図
　　7　H区埋納土壙H35実測図

8　H区塀H916実測図
図版265 遺構　1　J区石組土壙J54実測図
2　J区溝R150実測図
3　J区石組土壙J115実測図
4　J区石組土壙J 5実測図
5　J区石組土壙J57実測図
6　J区石組土壙J 1実測図
7　I区穴蔵I 6実測図
図版266 遺構　1　N区塀N 1実測図
2　N区石列N 5実測図
3　N区池N21実測図
4　N区柱穴N 9 ・N10・石列N 3実測図
図版267 遺構　O区江戸時代前期～後期遺構平面図
図版268 遺構　P区桃山期～江戸時代中期遺構平面図
図版269 遺構　P区江戸時代後期・Q区江戸時代前期～中期遺構平面図
図版270 遺構　1　P区塀P266実測図
2　P区塀G3745実測図
図版271 遺構　1　P区井戸P69実測図
2　P区石組土壙P82実測図
3　P区土壙P177実測図
図版272 遺構　1　P区集石土壙P49実測図
2　P区集石土壙P126実測図
3　P区溝P 8実測図
図版273 遺構　1　Q区建物Q96実測図
2　Q区建物Q95・石組土壙Q10実測図
図版274 遺構　R区江戸時代前期（1）遺構平面図
図版275 遺構　R区江戸時代前期（2）遺構平面図
図版276 遺構　R区江戸時代前期（3）遺構平面図
図版277 遺構　R区江戸時代中期・後期遺構平面図
図版278 遺構　R区塀R1130実測図
図版279 遺構　R区柱列R1131実測図
図版280 遺構　R区溝R150実測図（1）
図版281 遺構　R区溝R150実測図（2）
図版282 遺構　R区溝R150実測図（3）
図版283 遺構　1　R区石列R297実測図

2　R区埋甕R1041・R1042実測図
3　R区池R1002実測図
4　R区石組土壙R1032実測図
5　R区礎石S1012実測図
図版284 遺構　S区西部江戸時代前期（1）遺構平面図
図版285 遺構　S区西部江戸時代前期（2）遺構平面図
図版286 遺構　S区西部江戸時代前期（3）遺構平面図
図版287 遺構　S区西部江戸時代中期・後期遺構平面図
図版288 遺構　S区東部・T・U区江戸時代前期（1）遺構平面図
図版289 遺構　S区東部・T・U区江戸時代前期（2）遺構平面図
図版290 遺構　S区東部・T・U区江戸時代中期・後期遺構平面図
図版291 遺構　S区溝S1実測図
図版292 遺構　V・W区江戸時代前期遺構平面図
図版293 遺構　V・W区江戸時代中期・後期遺構平面図
図版294 遺構　X区江戸時代前期（1）・（2）・中期・後期遺構平面図
図版295 遺構　1　X区塀X83・X84柱列実測図
2　X区集石土壙X32実測図
3　X区集石土壙X33実測図
4　X区集石土壙X42実測図
図版296 遺構　Y・Z区江戸時代後期遺構平面図
図版297 遺物　F区土壙F1605出土遺物1
図版298 遺物　F区土壙F1605出土遺物2
図版299 遺物　F区土壙F1605出土遺物3
図版300 遺物　C区穴蔵C548B出土遺物1
図版301 遺物　C区穴蔵C548B出土遺物2
図版302 遺物　C区穴蔵C548B出土遺物3
図版303 遺物　F区土壙F1432出土遺物1
図版304 遺物　F区土壙F1432出土遺物2
図版305 遺物　F区土壙F1432出土遺物3
図版306 遺物　B区土壙B725出土遺物1
図版307 遺物　B区土壙B725出土遺物2
図版308 遺物　B区土壙B725出土遺物3
図版309 遺物　B区土壙B725出土遺物4
図版310 遺物　B区土壙B725出土遺物5
図版311 遺物　B区土壙B725出土遺物6

図版312 遺物　　B区土壙B725出土遺物7
図版313 遺物　　B区土壙B725出土遺物8
図版314 遺物　　B区土壙B725出土遺物9
図版315 遺物　　F区土壙F1455出土遺物1
図版316 遺物　　F区土壙F1455出土遺物2
図版317 遺物　　F区土壙F1455出土遺物3
図版318 遺物　　F区土壙F1455出土遺物4
図版319 遺物　　F区土壙F1455出土遺物5
図版320 遺物　　F区土壙F1244出土遺物1
図版321 遺物　　F区土壙F1244出土遺物2
図版322 遺物　　F区土壙F1244出土遺物3
図版323 遺物　　F区穴蔵F1387出土遺物1
図版324 遺物　　F区穴蔵F1387出土遺物2
図版325 遺物　　F区穴蔵F1387出土遺物3
図版326 遺物　　F区穴蔵F1387出土遺物4
図版327 遺物　　B区土壙B776出土遺物1
図版328 遺物　　B区土壙B776出土遺物2
　　H区土壙H166出土遺物1
図版329 遺物　　H区土壙H166出土遺物2
図版330 遺物　　H区土壙H271出土遺物1
図版331 遺物　　H区土壙H271出土遺物2
図版332 遺物　　H区土壙H271出土遺物3
図版333 遺物　　E区土壙E45出土遺物1
図版334 遺物　　E区土壙E45出土遺物2
図版335 遺物　　E区土壙E45出土遺物3
図版336 遺物　　E区土壙E45出土遺物4
図版337 遺物　　E区土壙E45出土遺物5
図版338 遺物　　E区土壙E45出土遺物6
図版339 遺物　　B区土壙B716出土遺物1
図版340 遺物　　B区土壙B716出土遺物2
図版341 遺物　　B区土壙B716出土遺物3
図版342 遺物　　B区土壙B716出土遺物4
図版343 遺物　　B区土壙B716出土遺物5
図版344 遺物　　B区土壙B716出土遺物6
図版345 遺物　　G区土壙G348出土遺物1

図版346 遺物　G区土壙G348出土遺物2
図版347 遺物　G区土壙G348出土遺物3
図版348 遺物　B区土壙B687出土遺物1
図版349 遺物　B区土壙B687出土遺物2
図版350 遺物　B区土壙B687出土遺物3
図版351 遺物　B区土壙B687出土遺物4
図版352 遺物　B区土壙B687出土遺物5
図版353 遺物　B区土壙B687出土遺物6
図版354 遺物　B区土壙B687出土遺物7
図版355 遺物　B区土壙B687出土遺物8
図版356 遺物　B区土壙B687出土遺物9
図版357 遺物　B区土壙B687出土遺物10
図版358 遺物　B区土壙B687出土遺物11
図版359 遺物　H区土壙H15出土遺物1
図版360 遺物　H区土壙H15出土遺物2
図版361 遺物　H区土壙H15出土遺物3
図版362 遺物　H区土壙H15出土遺物4
図版363 遺物　H区土壙H15出土遺物5
図版364 遺物　A区土壙A282出土遺物
A区井戸A233出土遺物
A区溝A72出土遺物
A区側溝A213出土遺物
図版365 遺物　A区溝A7出土遺物
図版366 遺物　A区井戸A354出土遺物
A区池A57出土遺物
図版367 遺物　A区整地A3出土遺物1
図版368 遺物　A区整地A3出土遺物2
A区その他出土遺物1
図版369 遺物　A区その他出土遺物2
図版370 遺物　B区土壙B1000出土遺物
B区土壙B674出土遺物1
図版371 遺物　B区土壙B674出土遺物2
図版372 遺物　B区土壙B674出土遺物3
図版373 遺物　B区土壙B674出土遺物4
図版374 遺物　B区土壙B674出土遺物5

図版375 遺物　Ｂ区土壙Ｂ674出土遺物６
図版376 遺物　Ｂ区土壙Ｂ674出土遺物７
図版377 遺物　Ｂ区土壙Ｂ674出土遺物８
図版378 遺物　Ｂ区土壙Ｂ721出土遺物１
図版379 遺物　Ｂ区土壙Ｂ721出土遺物２
図版380 遺物　Ｂ区土壙Ｂ721出土遺物３
図版381 遺物　Ｂ区土壙Ｂ721出土遺物４
図版382 遺物　Ｂ区土壙Ｂ721出土遺物５
図版383 遺物　Ｂ区土壙Ｂ718出土遺物
Ｂ区土壙Ｂ720出土遺物
Ｂ区瓦組土壙Ｂ636出土遺物
Ｂ区その他出土遺物１
図版384 遺物　Ｂ区その他出土遺物２
図版385 遺物　Ｃ区溝Ｃ918石組出土遺物
Ｃ区溝Ｃ918埋土出土遺物
Ｃ区溝Ｈ270出土遺物１
図版386 遺物　Ｃ区溝Ｈ270出土遺物２
図版387 遺物　Ｃ区土壙Ｃ628出土遺物１
図版388 遺物　Ｃ区土壙Ｃ628出土遺物２
図版389 遺物　Ｃ区土壙Ｃ628出土遺物３
図版390 遺物　Ｃ区その他出土遺物１
図版391 遺物　Ｃ区その他出土遺物２
図版392 遺物　Ｄ区井戸Ｄ335出土遺物１
図版393 遺物　Ｄ区井戸Ｄ335出土遺物２
Ｄ区溝Ｈ270出土遺物
図版394 遺物　Ｄ区穴蔵Ｄ200出土遺物
Ｄ区土壙Ｄ252出土遺物
図版395 遺物　Ｄ区土壙Ｄ451出土遺物１
図版396 遺物　Ｄ区土壙Ｄ451出土遺物２
図版397 遺物　Ｄ区土壙Ｄ451出土遺物３
図版398 遺物　Ｄ区その他出土遺物
図版399 遺物　Ｅ区土壙Ｅ310出土遺物１
図版400 遺物　Ｅ区土壙Ｅ310出土遺物２
図版401 遺物　Ｅ区土壙Ｅ235出土遺物１
図版402 遺物　Ｅ区土壙Ｅ235出土遺物２

図版403 遺物　E区土壙E235出土遺物3
図版404 遺物　E区土壙E235出土遺物4
図版405 遺物　E区土壙E235出土遺物5
図版406 遺物　E区土壙E302出土遺物1
図版407 遺物　E区土壙E302出土遺物2
E区竈E140出土遺物
E区竈E185出土遺物
E区穴蔵E355出土遺物
図版408 遺物　E区土壙E211出土遺物1
図版409 遺物　E区土壙E211出土遺物2
図版410 遺物　E区土壙E211出土遺物3
図版411 遺物　E区土壙E211出土遺物4
図版412 遺物　E区土壙E211出土遺物5
図版413 遺物　E区土壙E265出土遺物
図版414 遺物　E区土壙E188出土遺物1
図版415 遺物　E区土壙E188出土遺物2
図版416 遺物　E区土壙E188出土遺物3
図版417 遺物　E区土壙E188出土遺物4
E区土壙E297出土遺物
図版418 遺物　E区土壙E76出土遺物1
図版419 遺物　E区土壙E76出土遺物2
図版420 遺物　E区土壙E76出土遺物3
図版421 遺物　E区土壙E76出土遺物4
図版422 遺物　E区土壙E76出土遺物5
E区溝E30出土遺物
E区池E25出土遺物
図版423 遺物　E区能舞台E2664出土遺物1
図版424 遺物　E区能舞台E2664出土遺物2
図版425 遺物　E区石組土壙E12出土遺物
図版426 遺物　E区溝E50出土遺物
図版427 遺物　E区土壙E48出土遺物
図版428 遺物　E区その他出土遺物1
図版429 遺物　E区その他出土遺物2
図版430 遺物　F区土壙F2200出土遺物
F区埋納土壙F2390出土遺物

	Ｆ区埋納土壙Ｆ2383出土遺物
	Ｆ区土壙Ｆ1980出土遺物
図版431 遺物	Ｆ区土壙Ｆ1779出土遺物
	Ｆ区竈Ｆ1555出土遺物
	Ｆ区土壙Ｆ2208出土遺物
図版432 遺物	Ｆ区穴蔵Ｆ1475出土遺物１
図版433 遺物	Ｆ区穴蔵Ｆ1475出土遺物２
図版434 遺物	Ｆ区穴蔵Ｆ1475出土遺物３
図版435 遺物	Ｆ区穴蔵Ｆ1475出土遺物４
図版436 遺物	Ｆ区井戸Ｆ950出土遺物１
図版437 遺物	Ｆ区井戸Ｆ950出土遺物２
	Ｆ区土壙Ｆ1265出土遺物１
図版438 遺物	Ｆ区土壙Ｆ1265出土遺物２
図版439 遺物	Ｆ区土壙Ｆ1265出土遺物３
図版440 遺物	Ｆ区土壙Ｆ1400出土遺物１
図版441 遺物	Ｆ区土壙Ｆ1400出土遺物２
	Ｆ区井戸Ｆ1280出土遺物
	Ｆ区溝Ｆ1392出土遺物
図版442 遺物	Ｆ区池Ｅ25出土遺物
図版443 遺物	Ｆ区その他出土遺物１
図版444 遺物	Ｆ区その他出土遺物２
図版445 遺物	Ｇ区堀Ｇ1940出土遺物
	Ｇ区井戸Ｇ2690出土遺物
	Ｇ区池Ｇ2385出土遺物
図版446 遺物	Ｇ区土壙Ｇ2418出土遺物
	Ｇ区池Ｇ2180出土遺物
	Ｇ区井戸Ｇ3073出土遺物
図版447 遺物	Ｇ区土壙Ｇ2148出土遺物
	Ｇ区土壙Ｇ1156出土遺物１
図版448 遺物	Ｇ区土壙Ｇ1156出土遺物２
図版449 遺物	Ｇ区土壙Ｇ1164出土遺物１
図版450 遺物	Ｇ区土壙Ｇ1164出土遺物２
図版451 遺物	Ｇ区土壙Ｇ1164出土遺物３
図版452 遺物	Ｇ区土壙Ｇ1164出土遺物４
	Ｇ区井戸Ｇ2455出土遺物

G区池G1972出土遺物
図版453 遺物 G区土壙G1157出土遺物
G区池G1234A出土遺物
図版454 遺物 G区穴蔵G749出土遺物1
図版455 遺物 G区穴蔵G749出土遺物2
図版456 遺物 G区穴蔵G749出土遺物3
図版457 遺物 G区穴蔵G749出土遺物4
図版458 遺物 G区穴蔵G749出土遺物5
図版459 遺物 G区穴蔵G749出土遺物6
図版460 遺物 G区穴蔵G749出土遺物7
図版461 遺物 G区穴蔵G749出土遺物8
図版462 遺物 G区穴蔵G749出土遺物9
図版463 遺物 G区整地G3751出土遺物1
図版464 遺物 G区整地G3751出土遺物2
図版465 遺物 G区整地G3751出土遺物3
図版466 遺物 G区整地G3751出土遺物4
図版467 遺物 G区整地G3751出土遺物5
図版468 遺物 G区土壙G1447出土遺物1
図版469 遺物 G区土壙G1447出土遺物2
図版470 遺物 G区土壙G1447出土遺物3
図版471 遺物 G区土壙G1447出土遺物4
図版472 遺物 G区土壙G1447出土遺物5
図版473 遺物 G区土壙G1447出土遺物6
図版474 遺物 G区土壙G1447出土遺物7
図版475 遺物 G区土壙G1447出土遺物8
図版476 遺物 G区土壙G1447出土遺物9
図版477 遺物 G区土壙G1447出土遺物10
図版478 遺物 G区土壙G1447出土遺物11
図版479 遺物 G区土壙G1447出土遺物12
図版480 遺物 G区土壙G1717出土遺物1
図版481 遺物 G区土壙G1717出土遺物2
図版482 遺物 G区土壙G1717出土遺物3
G区土壙G1716出土遺物1
図版483 遺物 G区土壙G1716出土遺物2
図版484 遺物 G区土壙G1716出土遺物3

図版485 遺物　G区土壙G1716出土遺物4
図版486 遺物　G区土壙G1716出土遺物5
図版487 遺物　G区土壙G1716出土遺物6
図版488 遺物　G区土壙G1370出土遺物1
図版489 遺物　G区土壙G1370出土遺物2
図版490 遺物　G区土壙G1273出土遺物1
図版491 遺物　G区土壙G1273出土遺物2
図版492 遺物　G区土壙G1133出土遺物1
図版493 遺物　G区土壙G1133出土遺物2
図版494 遺物　G区土壙G1133出土遺物3
図版495 遺物　G区土壙G1133出土遺物4
図版496 遺物　G区土壙G1133出土遺物5
図版497 遺物　G区土壙G639出土遺物
図版498 遺物　G区整地G3752出土遺物1
図版499 遺物　G区整地G3752出土遺物2
G区土壙G747出土遺物1
図版500 遺物　G区土壙G747出土遺物2
図版501 遺物　G区土壙G593出土遺物1
図版502 遺物　G区土壙G593出土遺物2
G区石組土壙G1015出土遺物
図版503 遺物　G区土壙G302出土遺物1
図版504 遺物　G区土壙G302出土遺物2
G区土壙G555出土遺物
図版505 遺物　G区井戸G741出土遺物1
図版506 遺物　G区井戸G741出土遺物2
G区井戸G824出土遺物
図版507 遺物　G区土壙G471出土遺物1
図版508 遺物　G区土壙G471出土遺物2
図版509 遺物　G区池G250出土遺物1
図版510 遺物　G区池G250出土遺物2
G区池G364出土遺物
G区石組土壙G392出土遺物
G区埋納土壙G182出土遺物
図版511 遺物　G区池G253出土遺物
G区石組土壙G3691出土遺物

	G区溝C156出土遺物
図版512 遺物	G区溝C10出土遺物
図版513 遺物	G区土壙G45出土遺物1
図版514 遺物	G区土壙G45出土遺物2
図版515 遺物	G区土壙G45出土遺物3
図版516 遺物	G区土壙G45出土遺物4
	G区その他出土遺物1
図版517 遺物	G区その他出土遺物2
図版518 遺物	H区掘G1940出土遺物1
図版519 遺物	H区掘G1940出土遺物2
図版520 遺物	H区溝H270出土遺物1
図版521 遺物	H区溝H270出土遺物2
図版522 遺物	H区溝H270出土遺物3
図版523 遺物	H区溝H270出土遺物4
	H区土壙H267出土遺物
図版524 遺物	H区土壙H33出土遺物1
図版525 遺物	H区土壙H33出土遺物2
図版526 遺物	H区土壙H33出土遺物3
図版527 遺物	H区土壙H211出土遺物
図版528 遺物	H区井戸H27出土遺物
	H区溝E50出土遺物
	H区溝H220出土遺物
図版529 遺物	M区土壙M12出土遺物
図版530 遺物	H区土壙H222出土遺物
	宅地5・6出土肥前磁器（鍋島様式）
	宅地3・4出土肥前青磁
図版531 遺物	H・M・N区その他出土遺物1
図版532 遺物	H・M・N区その他出土遺物2
図版533 遺物	P区石組土壙P82出土遺物1
図版534 遺物	P区石組土壙P82出土遺物2
	P区井戸P69出土遺物1
図版535 遺物	P区井戸P69出土遺物2
図版536 遺物	P区井戸P69出土遺物3
図版537 遺物	R区溝R241出土遺物
	R区塀R243出土遺物

		Ｒ区溝Ｒ1050出土遺物
図版538	遺物	Ｒ区堀Ｇ1195Ｂ・溝Ｇ1195出土遺物
図版539	遺物	Ｒ区溝Ｇ1195出土遺物
図版540	遺物	Ｒ区溝Ｒ150下層出土遺物
図版541	遺物	Ｒ区溝Ｒ150上層下部砂層出土遺物
図版542	遺物	Ｒ区溝Ｒ150上層上部埋土出土遺物
図版543	遺物	Ｒ区土壙Ｒ21出土遺物１
図版544	遺物	Ｒ区土壙Ｒ21出土遺物２
図版545	遺物	Ｒ区土壙Ｒ21出土遺物３
図版546	遺物	Ｒ区土壙Ｒ1043出土遺物
図版547	遺物	Ｒ区井戸Ｒ1034出土遺物
図版548	遺物	Ｓ区土壙Ｓ43出土遺物
図版549	遺物	Ｓ区土壙Ｓ６出土遺物
		Ｓ区礎石Ｓ1012掘形出土遺物
		Ｓ区溝Ｓ１出土遺物
		Ｖ区溝Ｖ１出土遺物
		Ｘ区その他出土遺物
図版550	遺物	墨書土器１
図版551	遺物	墨書土器２
図版552	遺物	土壙Ｃ916出土瓦
図版553	遺物	土壙Ｂ725出土瓦
図版554	遺物	土壙Ｓ43出土瓦
図版555	遺物	土壙Ｏ１出土瓦
図版556	遺物	土壙Ｓ６出土瓦
図版557	遺物	土壙Ｒ21出土瓦
図版558	遺物	土壙Ｒ87出土瓦
図版559	遺物	天明大火以降の遺構出土瓦
図版560	遺物	金箔瓦
図版561	遺物	家紋瓦１
図版562	遺物	家紋瓦２
図版563	遺物	家紋瓦３
図版564	遺物	棟端瓦１
図版565	遺物	棟端瓦２
図版566	遺物	井戸Ｆ1280井戸枠瓦
図版567	遺物	刻印瓦１

図版568 遺物　刻印瓦２・文字瓦
図版569 遺物　貨幣１
図版570 遺物　貨幣２
図版571 遺物　金属製品１
図版572 遺物　金属製品２
図版573 遺物　金属製品３
図版574 遺物　金属製品４
図版575 遺物　金属製品５
図版576 遺物　金属製品６
図版577 遺物　金属製品７
図版578 遺物　金属製品８
骨製品
図版579 遺物　鋳型
図版580 遺物　石製品１
図版581 遺物　石製品２
図版582 遺物　石製品３
図版583 遺物　石製品４
図版584 遺物　石製品５
図版585 遺物　石製品６
図版586 遺物　ガラス製品１
図版587 遺物　ガラス製品２

挿図目次

図１　「中むかし公家町之絵図」（『慶長 昭和 京都地図集成』より）…… 2
図２　「新改内裏之図」（『慶長 昭和 京都地図集成』より）…… 3
図３　「増補再版京大絵図」（『慶長 昭和 京都地図集成』より）…… 3
図４　「改正再刻京都区組細図」（『京都歴史アトラス』より）…… 4
図５　江戸時代前期宅地割図 …… 5
図６　江戸時代中・後期宅地割図 …… 6
図７　Ａ区江戸時代前期建物復元図 …… 11
図８　Ａ区土壙Ａ1101断面図 …… 12
図９　Ｃ区堀Ｇ1940・溝Ｈ270・溝Ｃ918断面図 …… 18
図10　Ｃ区溝Ｃ10断面図 …… 21

図11　C区溝C156断面図 …… 21
図12　江戸時代後期宅地５・６遺構配置図 …… 28
図13　能舞台推定復元図 …… 29
図14　F区土壙F2200平面図 …… 31
図15　中筋通路面断面図 …… 32
図16　江戸時代前期宅地７建物遺構配置図 …… 33
図17　F区土壙F1432断面図 …… 35
図18　G区堀G1195B・溝G1195・路面断面図 …… 40
図19　G区堀G1940北壁断面図 …… 41
図20　G区土壙G1447実測図 …… 47
図21　G区溝C10実測図 …… 52
図22　H区堀G540・溝H270・溝H500断面図 …… 57
図23　I区堀G1195B・溝G1195実測図 …… 60
図24　J区堀G1195B・溝G1195・溝G1080・路面断面図 …… 61
図25　K区堀G1195B・溝G1195・路面断面図 …… 63
図26　R区中央部東西断面図 …… 67
図27　S区東部南壁断面図 …… 72
図28　S区溝S１実測図 …… 73
図29　V区溝V１平面図 …… 77
図30　W区南壁断面図 …… 78
図31　X区北壁断面図 …… 79
図32　Y区北壁断面図 …… 80
図33　Z区溝C10東石組実測図 …… 81
図34　遺物計測部位 …… 84
図35　穴蔵F1387土層観察用アゼ出土遺物産地組成 …… 85
図36　土壙F1605出土遺物産地組成 ……138
図37　穴蔵C548B出土遺物産地組成 ……138
図38　土壙F1432出土遺物産地組成 ……138
図39　土壙B725出土遺物産地組成 ……139
図40　土壙F1455出土遺物産地組成 ……139
図41　土壙F1244出土遺物産地組成 ……139
図42　穴蔵F1387出土遺物産地組成 ……140
図43　土壙B776出土遺物産地組成 ……140
図44　土壙H166出土遺物産地組成 ……140
図45　土壙H271出土遺物産地組成 ……141

図46　土壙Ｅ45出土遺物産地組成 ……141
図47　土壙Ｂ716出土遺物産地組成 ……141
図48　土壙Ｇ348出土遺物産地組成 ……142
図49　土壙Ｂ687出土遺物産地組成 ……142
図50　土壙Ｈ15出土遺物産地組成 ……142
図51　土壙Ｂ674出土肥前系磁器器形分類 ……146
図52　穴蔵Ｇ479出土のタイ産四耳壺 ……172
図53　Ｈ区堀Ｇ1940出土遺物産地組成 ……185
図54　溝Ｈ270出土遺物産地組成 ……185
図55　井戸Ｈ120出土青花皿 ……190
図56　土壙Ｊ２出土輸入陶器実測図 ……192
図57　賢瓶出土状況実測図 ……238
図58　柳原邸屋敷範囲と賢瓶出土位置 ……238
図59　賢瓶実測図 ……239
図60　箔粉蛍光Ｘ線分析チャート ……240
図61　賢瓶蛍光Ｘ線分析チャート ……240
図62　立会調査地点図① ……245
図63　立会調査地点図② ……246
図64　公家町成立直前の遺構概要図 ……254
図65　公家町成立期から宝永大火までの遺構概要図 ……256
図66　宝永大火後から天明大火以前の遺構概要図 ……260
図67　天明大火後の遺構概要図 ……264
図68　公家町成立期から宝永大火までの遺構概要図（南半） ……265
図69　宝永大火後の遺構概要図（南半） ……268
図70　昭和大礼での饗宴殿の位置 ……269
図71　饗宴殿とその東側の建物配置 ……270
図72　饗宴殿基礎 ……271
図73　皿Sbの口径変化 ……277
図74　Ⅺ期土師器 ……279
図75　Ⅻ期土師器 ……280
図76　ⅩⅢ期土師器 ……281
図77　ⅩⅣ期土師器 ……282
図78　溝Ｈ270出土遺物産地組成 ……287
図79　土壙Ｂ725肥前系磁器器形分類 ……287
図80　京焼及び京・信楽系陶器（碗・皿）変遷図１ ……292

図81　京焼及び京・信楽系陶器（碗・皿）変遷図２ ……293
図82　茶の湯道具 ……296
図83　煎茶道具 ……296
図84　総破片数分類 ……297
図85　陶磁器種類別組成 ……297
図86　陶磁器器形別組成 ……298
図87　家紋瓦の分布１（宝永大火以前） ……302
図88　家紋瓦の分布２（宝永大火以後） ……303
図89　表面に析出する風化生成物のＸ線回析図 ……332
図90　漆塗り構造の分類 ……335
図91　赤色系漆及び蒔絵材料の電子線マイクロアナライザー（EPMA）の分析結果 ……336
図92　本遺跡をはじめとする各近世遺跡一括出土漆器の組成（集計例） ……338
図93　各種蒔絵及び梨子地加飾の粉形態
１蒔絵粉　２梨子地粉Ａ　３蒔絵及び梨子地粉　４梨子地粉Ｂ ……341
図94　各種蒔絵及び梨子地加飾の断面観察
１透過写真　２偏光落射写真 ……341
図95　十六花弁菊御紋の蒔絵及び梨子地加飾の一例
１蒔絵及び梨子地加飾の粉形態　２同左断面観察 ……341
図96　貝類（集合写真） ……354
図97　魚・獣骨類（集合写真） ……354
図98　ウマ上顎臼歯 ……355

表目次

表１　公家屋敷変遷表 …… 8
表２　主要遺構時期別対照表 …… 85
表３　土壙Ｆ1605出土遺物１ …… 99
表４　土壙Ｆ1605出土遺物２ …… 99
表５　土壙Ｆ1605出土遺物３ ……100
表６　穴蔵Ｃ548Ｂ出土遺物１ ……100
表７　穴蔵Ｃ548Ｂ出土遺物２ ……101
表８　穴蔵Ｃ548Ｂ出土遺物３ ……101
表９　土壙Ｆ1432出土遺物１ ……101
表10　土壙Ｆ1432出土遺物２ ……103

表11　土壙Ｆ1432出土遺物３……103
表12　土壙Ｂ725出土遺物１……103
表13　土壙Ｂ725出土遺物２……105
表14　土壙Ｂ725出土遺物３……105
表15　土壙Ｂ725出土遺物４……106
表16　土壙Ｂ725出土遺物５……106
表17　土壙Ｂ725出土遺物６……107
表18　土壙Ｂ725出土遺物７……107
表19　土壙Ｂ725出土遺物８……108
表20　土壙Ｂ725出土遺物９……108
表21　土壙Ｆ1455出土遺物１……108
表22　土壙Ｆ1455出土遺物２……109
表23　土壙Ｆ1455出土遺物３……109
表24　土壙Ｆ1455出土遺物４……110
表25　土壙Ｆ1455出土遺物５……110
表26　土壙Ｆ1244出土遺物１……110
表27　土壙Ｆ1244出土遺物２……111
表28　土壙Ｆ1244出土遺物３……112
表29　穴蔵Ｆ1387出土遺物１……112
表30　穴蔵Ｆ1387出土遺物２……114
表31　穴蔵Ｆ1387出土遺物３……114
表32　穴蔵Ｆ1387出土遺物４……115
表33　土壙Ｂ776出土遺物１……115
表34　土壙Ｂ776出土遺物２・土壙Ｈ166出土遺物１……116
表35　土壙Ｈ166出土遺物２……117
表36　土壙Ｈ271出土遺物１……117
表37　土壙Ｈ271出土遺物２……118
表38　土壙Ｈ271出土遺物３……119
表39　土壙Ｅ45出土遺物１……119
表40　土壙Ｅ45出土遺物２……120
表41　土壙Ｅ45出土遺物３……121
表42　土壙Ｅ45出土遺物４……122
表43　土壙Ｅ45出土遺物５……122
表44　土壙Ｅ45出土遺物６……123
表45　土壙Ｂ716出土遺物１……123

表46　土壙Ｂ716出土遺物２……124
表47　土壙Ｂ716出土遺物３……125
表48　土壙Ｂ716出土遺物４……126
表49　土壙Ｂ716出土遺物５……126
表50　土壙Ｂ716出土遺物６……126
表51　土壙Ｇ348出土遺物１……127
表52　土壙Ｇ348出土遺物２……128
表53　土壙Ｇ348出土遺物３……129
表54　土壙Ｂ687出土遺物１……129
表55　土壙Ｂ687出土遺物２……130
表56　土壙Ｂ687出土遺物３……131
表57　土壙Ｂ687出土遺物４……132
表58　土壙Ｂ687出土遺物５……132
表59　土壙Ｂ687出土遺物６……133
表60　土壙Ｂ687出土遺物７……133
表61　土壙Ｂ687出土遺物８……134
表62　土壙Ｂ687出土遺物９……134
表63　土壙Ｂ687出土遺物10……135
表64　土壙Ｂ687出土遺物11……135
表65　土壙Ｈ15出土遺物１……135
表66　土壙Ｈ15出土遺物２……136
表67　土壙Ｈ15出土遺物３……136
表68　土壙Ｈ15出土遺物４……137
表69　土壙Ｈ15出土遺物５……137
表70　Ａ区のその他土器・陶磁器類……145
表71　Ａ区のその他土器・陶磁器類……145
表72　土壙Ｂ674出土肥前系粗製磁器碗・皿分類表……146
表73　Ｂ区のその他土器・陶磁器類……149
表74　Ｂ区のその他土器・陶磁器類……149
表75　Ｃ区のその他土器・陶磁器類……152
表76　Ｃ区のその他土器・陶磁器類……153
表77　Ｄ区のその他土器・陶磁器類……155
表78　Ｅ区のその他土器・陶磁器類……162
表79　Ｅ区のその他土器・陶磁器類……162
表80　Ｆ区のその他土器・陶磁器類……167

表81　Ｆ区のその他土器・陶磁器類 ……167
表82　Ｇ区のその他土器・陶磁器類 ……184
表83　Ｇ区のその他土器・陶磁器類 ……184
表84　宅地５・６出土の鍋島様式皿一覧表 ……189
表85　Ｈ・Ｍ・Ｎ区のその他土器・陶磁器類 ……191
表86　Ｈ・Ｍ・Ｎ区のその他土器・陶磁器類 ……191
表87　土壙Ｃ916出土瓦観察表 ……199
表88　土壙Ｂ725出土瓦観察表 ……200
表89　土壙Ｓ43出土瓦観察表 ……201
表90　土壙Ｏ１出土瓦観察表 ……202
表91　土壙Ｓ６出土瓦観察表 ……203
表92　土壙Ｒ21出土瓦観察表 ……204
表93　土壙Ｒ87出土瓦観察表 ……205
表94　天明大火以降の遺構出土瓦観察表 ……205
表95　金箔瓦観察表 ……207
表96　家紋瓦観察表１ ……207
表97　家紋瓦観察表２ ……208
表98　家紋瓦観察表３ ……208
表99　棟端瓦観察表１ ……209
表100　棟端瓦観察表２ ……209
表101　井戸Ｆ1280井戸枠瓦観察表 ……210
表102　刻印瓦観察表 ……211
表103　刻印瓦・文字瓦観察表 ……212
表104　貨幣観察表１ ……214
表105　貨幣観察表２ ……215
表106　金属製品観察表１ ……216
表107　金属製品観察表２ ……218
表108　金属製品観察表３ ……219
表109　金属製品観察表４ ……220
表110　金属製品観察表５ ……222
表111　金属製品観察表６ ……222
表112　金属製品観察表７ ……224
表113　金属製品観察表８ ……226
表114　骨製品観察表 ……228
表115　石製品観察表１ ……229

表116　石製品観察表２ ……230
表117　石製品観察表３ ……230
表118　石製品観察表４ ……232
表119　石製品観察表５ ……232
表120　石製品観察表６ ……233
表121　ガラス製品観察表１ ……233
表122　ガラス製品観察表２ ……236
表123　立会調査一覧表 ……247
表124　土師器皿出典遺構一覧表 ……283
表125　土師器皿出典リスト ……284
表126　基準資料一覧表 ……286
表127　「仁清」刻印資料一覧表 ……294
表128　遺構概要表 ……312
表129　遺物概要表 ……314
表130　ガラス分析結果表 ……318
表131　分析試料一覧表 ……330
表132　分析結果一覧表 ……331
表133　漆器分析結果一覧表 ……334
表134　分析した動物遺存体群の帰属遺構と年代 ……342
表135　京都御所関連遺跡出土動物遺存体種名表 ……342
表136　動物遺存体出土量表 ……344
表137　出土ハマグリの貝殻成長線分析結果 ……348
表138　京都御所関連遺跡出土ハマグリWalfordの定差図 ……349
表139　主要動物遺存体に基づく土壙の分類 ……352

第７章　公家町の歴史と宅地割

第１節　公家町の歴史

現在の京都御苑は、南北は今出川通と丸太町通の間、東西は寺町通と烏丸通の間に広がり、およそ94万㎡の面積に及ぶ。御苑は、築地塀や石塁で市街地と区画され、内部には京都御所と仙洞御所、大宮御所などが配されるが、その他の地域は、昭和24年（1949）から国民公園として親しまれている。調査地は御苑内の北東部にあたり、京都御所の東、仙洞御所の北に位置している。具体的には饗宴場跡グランド・ゲートボール場及びその周辺緑地帯より、御苑内通路を経て、清和院御門、梨木神社前に至る地域が該当する。調査区の平安時代から公家町形成以前までの歴史的環境は、第１分冊で概述されており、ここでは公家町成立期より、明治時代の京都御苑に至る過程を概観する。

公家町の形成は、天正13年（1585）関白に就任した豊臣秀吉が行なった、京都改造事業によるところが大きい。秀吉は、天正14年の聚楽第造営、天正19年（1591）の御土居の築造、寺社町の形成など、急速に統一国家の拠点都市としての骨格を形作っていく。それは平安京以来の町割である一町四方の条坊制を廃して短冊地割に変更するなど、旧来の京都の景観を一新するものであった。公家町周辺も天正13年の院御所造営に始まり、天正17年の新造ともいえる御所の修復と続き、それに伴ない皇族や公家の屋敷地再編が進められる。この公家町の集約と固定化は、徳川幕府にも継承され、慶長10年（1605）の院御所建設に始まる公家町形成の事業でほぼ完了する。

こうした都市改造によって、御所周辺に配置された公家町の様子がわかる最初の史料は、「中むかし公家町之絵図」（図１）である。この慶長末年から元和元年（1615）頃の成立とされる絵図からは、本調査地点である二階町、梨木町周辺に公家町が形成されていた状況がうかがわれる。これより先、『義演准后日記』の慶長15年（1610）７月25日条には「公家衆屋敷之替地相渡ニ来而、二階町梨木町ニ替渡之[1)]」とあり、慶長15年～慶長末年頃にはほぼ公家町としての景観が整っていたものと思われる。以後、江戸時代を通して調査地周辺は、大規模な火災などを契機として宅地割を変えていく。寛文・延宝期の火災以降の絵図である延宝５年（1677）の「新改内裏之図」をみると、二階町の通りに面した屋敷地が「杉之坊」「柳原」などを残して変化しており、宅地割の変更が行なわれたことがうかがわれる（図２）。ただ最も大規模な町割の変更は、宝永５年（1708）の大火を契機に行なわれたものである。少し時代は下がるが、寛保元年（1741）の「増補再版　京大絵図　乾」を見ると、最初に目に付くのは、公家屋敷地と道路の拡大である（図３）。内裏南西部の町家はなくなり、公家町の外郭に設けられていた６箇所の門が現在も残る９箇所に増やされている。防災に重点が置かれた整備であろうが、内裏を中心とした公家町も、制度的に確立した時期といえよう。調査地周辺でも屋敷地が整備されており、二

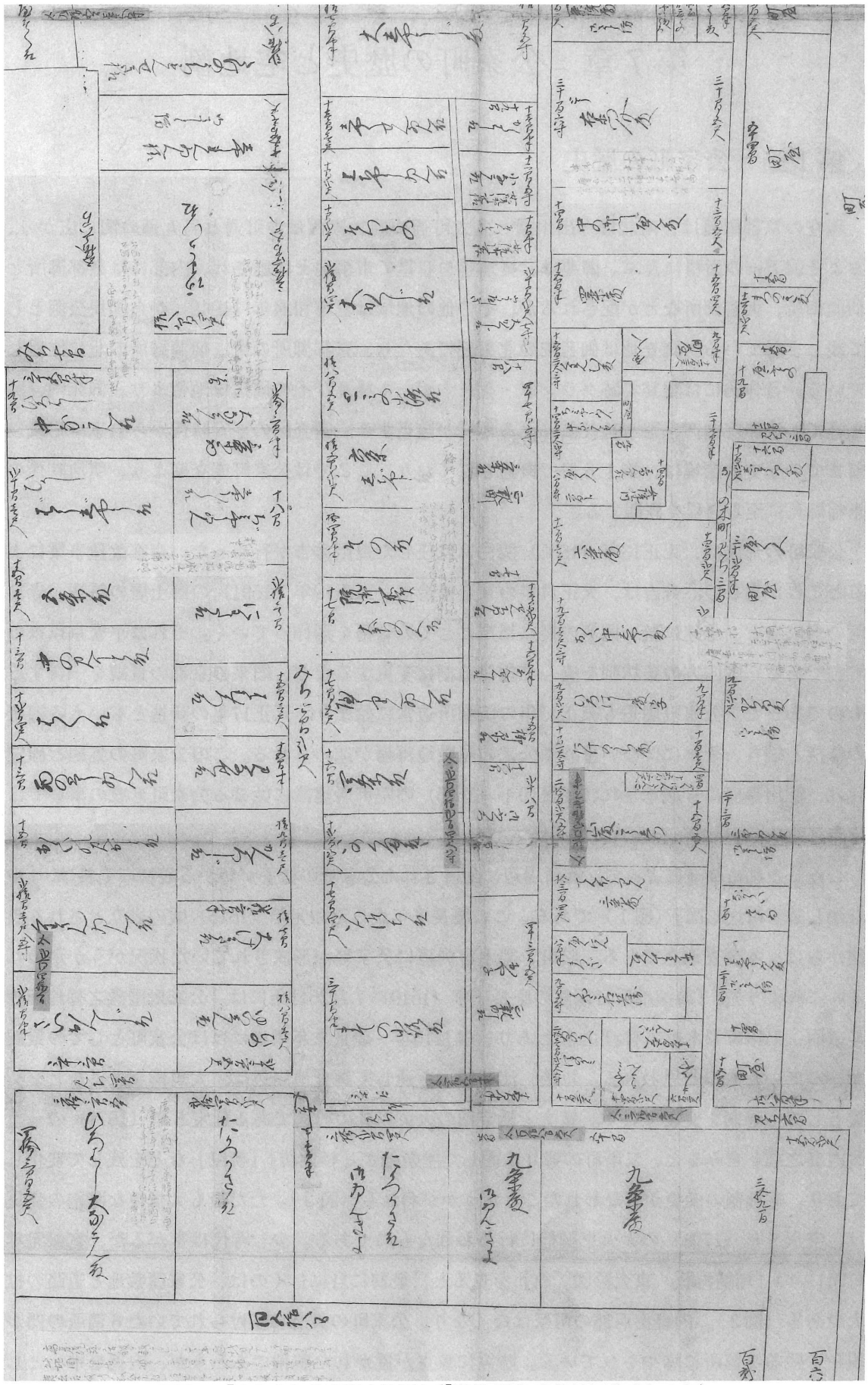


図１　「中むかし公家町之絵図」（『慶長 昭和 京都地図集成』より）

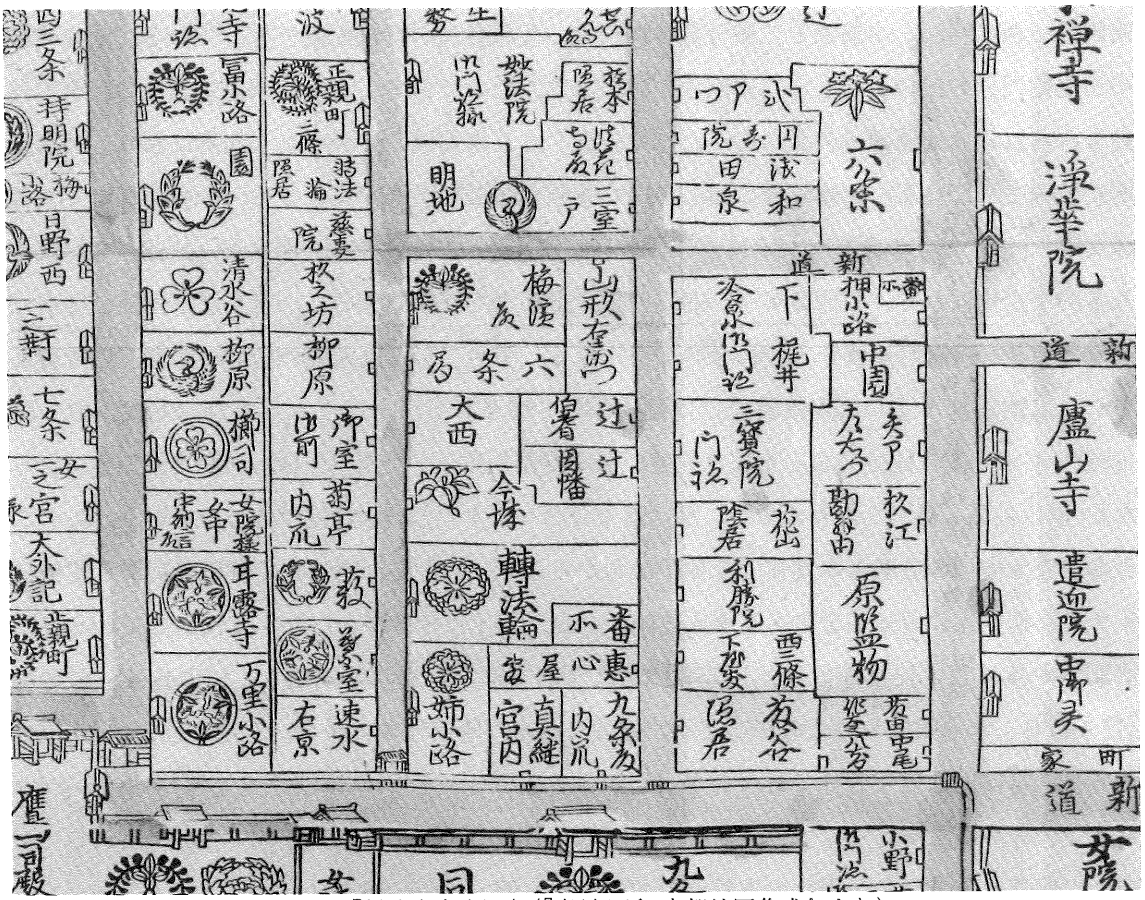


図２　「新改内裏之図」（『慶長 昭和 京都地図集成』より）

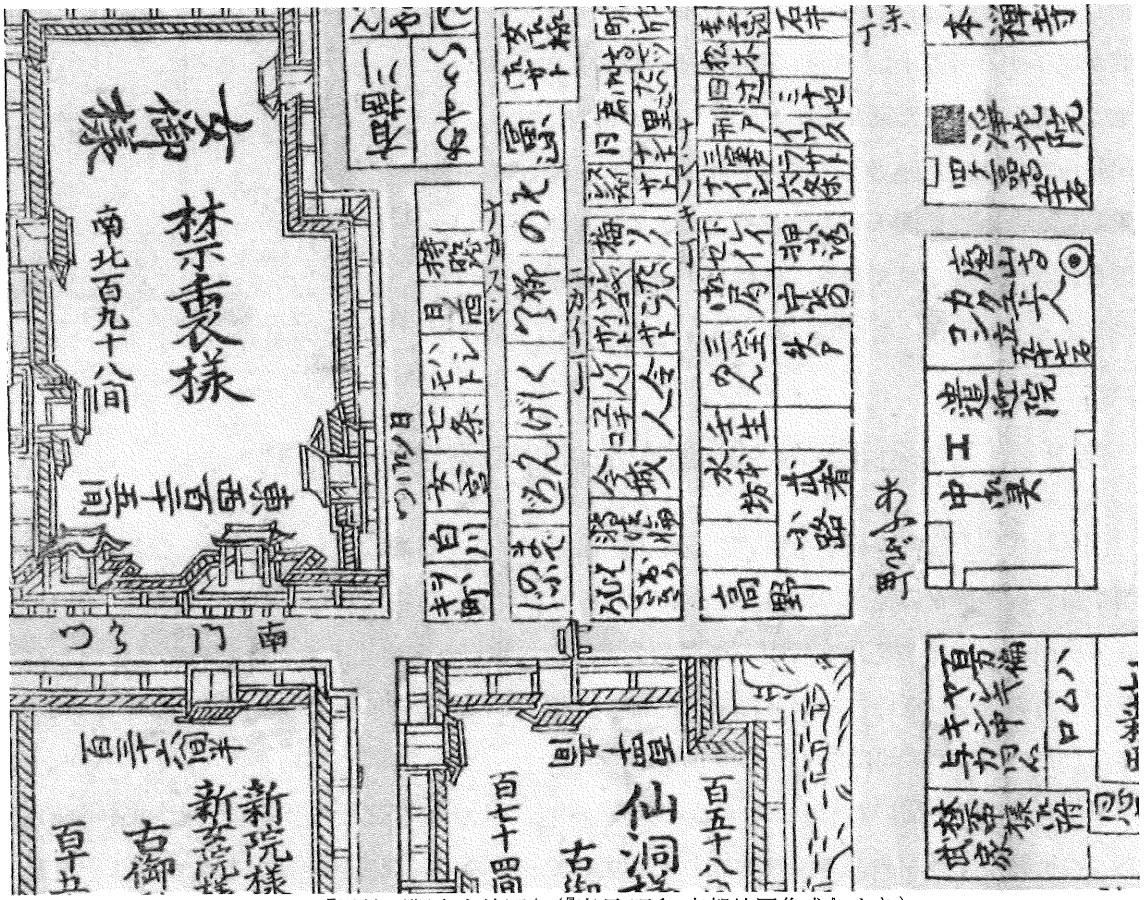


図３　「増補再版京大絵図」（『慶長 昭和 京都地図集成』より）

階町通を西に移し、中筋通と二階町通の間にあった屋敷地の背割配置を廃している。内裏東側の日之御門通の拡幅とともに、火除地が確保されたためである。また、調査地周辺の屋敷の移動もみられる。仙洞御所の北にあった「九条殿」と「鷹司殿」がいずれも他所に移り、仙洞御所が拡幅されている。二階町通に面していた背割東側の屋敷群がなくなる。背割西側の「女院様女中」「清水谷」の両屋敷がそれぞれ移動している。この宅地割は天明大火（1788年）以降も基本的な変化はなく、明治２年（1869）の東京遷都まで存続している。東京遷都以降は御所は空殿となり、公家町は留守宅が目立つようになる。明治３年には九門の内側は京都府の所管とされ、上地された元の公家屋敷などは建物が取り壊される。一部では「桑畑にして、お公卿（公家）さんのお立退きになった家は、廉い値段で売り払う、ただ（無償）同様でもろうて行った」「屋根の瓦も落ちておりますし、壁は落ちております[2)]」という状態であったという。このころの調査地周辺の公家町の具体的な様子はわからない。しかし、明治８年（1875）から明治11年まで、柳原家の留守宅をアメリカ人教師Ｊ．Ｄ．デイヴィスが住居として使用している（明治10年からは女学校兼寄宿舎としても使用）、『同志社百年史　通史編１』によれば、屋敷は「畳も朽ち、床も敷居もいたみがひどく、修理に相当の時間とエネルギーを注ぐ必要があった[3)]」とあり、ほぼ同じ様な有様であった事がわかる。このような公家町の荒廃を受けて、明治10年（1877）には内裏の保存と公家町の公園化の方針が打ち出され、明治13年には現在みられるような、石積土塁と九門の移設が完了する（図４）。以後、調査地周辺は御苑内の緑地となるが、大正天皇と昭和天皇の２度の即位礼の際、朝集所や饗宴殿用地として利用される。特に、昭和３年に行なわれた昭和天皇の即位礼では、饗宴殿本体と附帯施設が建設されており[4)]、即位礼の後は饗宴殿跡グランドとして現在に至っている。

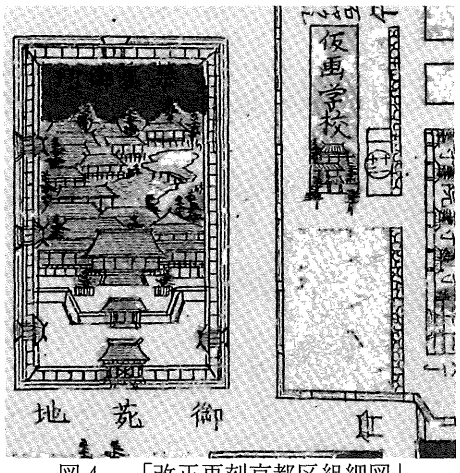


図４　「改正再刻京都区組細図」
（『京都歴史アトラス』より）

第２節　古絵図からみた調査地付近の街路と宅地割

江戸時代の公家町の様子を描いた多くの古絵図が存在する。これらの中には、公家町の宅地割が描かれ、個々の宅地の家主が記されているものもある。古絵図からわかる情報は、発掘調査で検出した街路や宅地を特定の街路や公家屋敷に比定してゆく上で、きわめて有益である。そこで、調査地付近の古絵図情報を年代順に整理して、遺構を解釈する上での手掛りとすることにした。作業の手順は以下の通りである。

まず、公家町を描いた最も古い絵図である「中むかし公家町之絵図」を基準として、公家町当初の街路と宅地割の基本図を作成した。次いで、その上に調査区を落とし込んだ。その際、江戸時代から移動していないと考えられる寺町通と現在の清和院御門から西に延びる通路の位

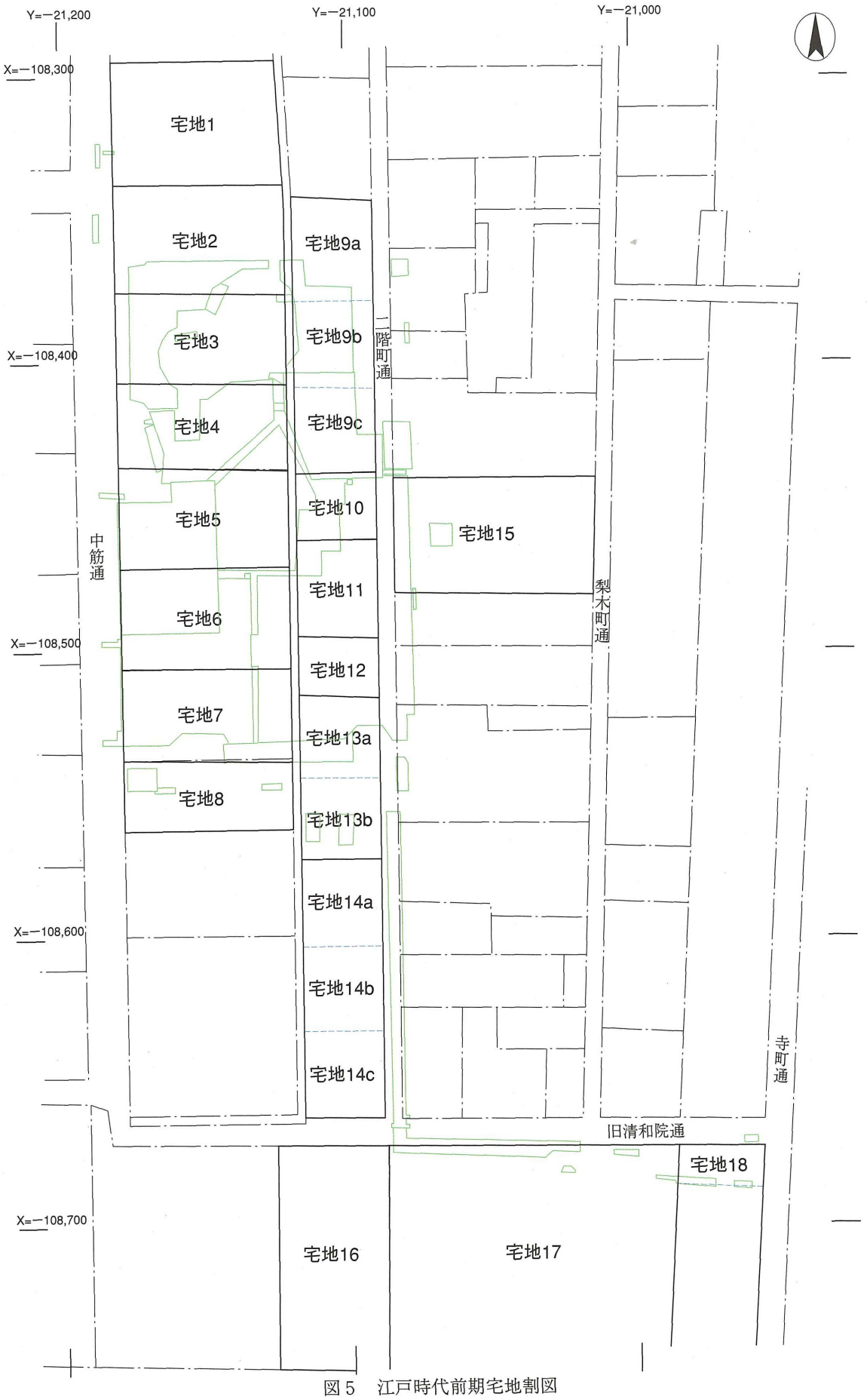


図５　江戸時代前期宅地割図

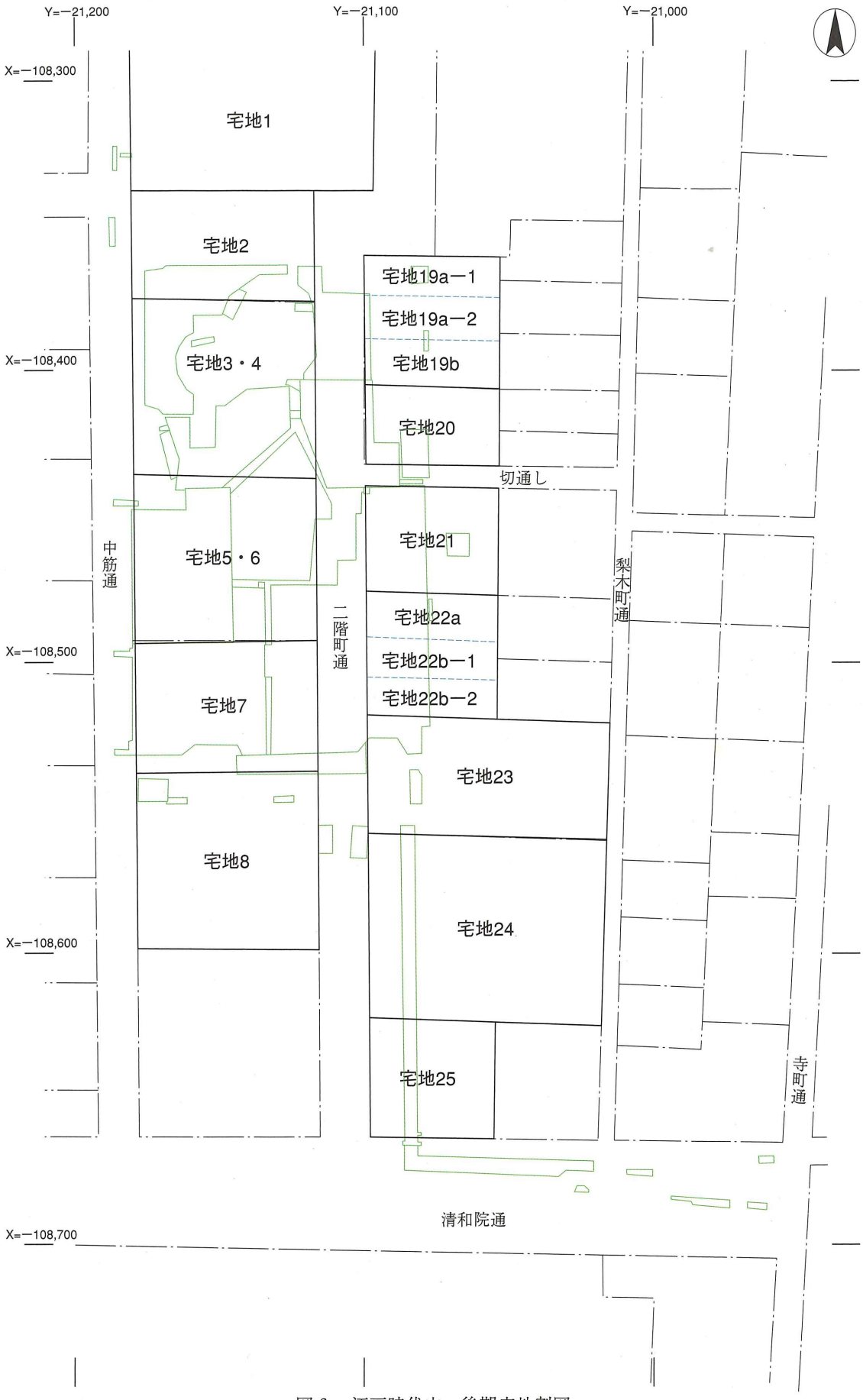


図６　江戸時代中・後期宅地割図

置とを参考にし、これに調査で検出した中筋通の位置を考慮して、両者を重ね合わせた。この作業によって推定された宅地境の位置は、一部でズレがあるものの、発掘調査の成果とよく合致した。これによって同絵図が比較的正確に描かれていることと、調査区の落とし込み作業が妥当なものであることが確かめられた。これを受けて、同絵図に描かれた宅地のうち、調査区内で検出していることが予測されるものに、宅地１から宅地18までの番号を与えた（図５）。次いで、宝永大火までの各年代の古絵図を古い順に見てゆき、宅地と家主の時代的変化を追った。その結果、宝永大火以前の公家町の宅地割の変化は、当初の宅地を複数統合したものか、一つの宅地を分割したものかのどちらかであることが判明した。複数の宅地が統合された新宅地は、統合前の宅地番号を併記して記載することとした。例えば17世紀の中頃から後半頃に宅地３と宅地４は一つの宅地に統合されるが、これを「宅地３・４」とした。また、分割された宅地については、旧宅地番号にアルファベットの小文字を付して区分した。例えば、宅地９は、17世紀の中頃から後半頃に３つの宅地に分割されるが、これをそれぞれ「宅地９ａ」「宅地９ｂ」「宅地９ｃ」とした。

宝永大火後の区画整理は、街路の移動を伴なう大きな変化であったことは前節で既に述べた。しかし、古絵図からの情報によれば、中筋通沿いは宅地の統合がみられるだけで、江戸前期の宅地割を踏襲していることが明らかである。変化がみられるのは二階町通の東側で、街路の移動に伴なって、新たな宅地群が出現する。これらに対して新たに宅地19から宅地25の番号を与えた。上記と同様、宅地が分割される場合にはアルファベットの小文字を付し、そこからさらに分割される場合は再度アラビア数字を付して表記した。例えば、宅地19は18世紀に宅地19ａと宅地19ｂとに分割され、宅地19ａは19世紀にさらに二分されるが、これをそれぞれ「宅地19ａ－１」「宅地19ａ－２」とした（図６）。なお、宝永大火以降の公家町絵図には正確な寸法で描かれたものがなく、上記江戸時代前期の宅地割図に発掘調査で判明した二階町通をはめ込んで復元したものである。こうして得られた25区画の宅地における家主の変化を、各時代の古絵図情報から導いた（表１）。

以上の作業から明らかになった点を述べておきたい。まず、17世紀前半に家主の大幅な変化がみられる。宅地３、５、６、７、14、15で家主が変わる。この変化の原因を説明する材料を持たない。次に、17世紀後半の画期を指摘できる。この時、宅地３と宅地４が統合され、宅地９と宅地13は分割される。また、宅地８、10、11、14、15で家主の変化がみられ、宅地16はなくなり、女院御殿にとり込まれている。こうした大幅な変化を可能にしたものは、寛文元年（1661）及び寛文11年（1671）の公家町火災による公家屋敷の焼失であったであろう。宝永大火後は、中筋通側の宅地１から宅地８は江戸時代を通じて、家主が変わることなく維持される。二階町通東側では、宅地21、23、24、25で家主が変わることなく明治期をむかえる。他方、宅地19、20、22は分割されながら、頻繁に家主が変化する。天明大火時には、すべての宅地が全焼したものと想像されるが、これに伴なう大幅な区画や家主の変化は観取できない。

以上のように、各宅地は、公家町成立当初の区画を基にしつつ、宅地割や家主が変化する。

そこで本報告の以下の記述では、以上の手法による宅地名を用いて、各宅地を示すものとする。

表１　公家屋敷変遷表

					←宝永大火					←天明大火				
	中むかし公家町之絵図 1615頃	寛永十四年洛中絵図 1637	寛永後万治前洛中絵図	新改内裏之図 1677	内裏之図 1709	新板増補京絵図 新地入 1709	享保年間の公家町古図 (別冊太陽掲載)	増補再板京大絵図 1741	御築地辺絵図 1776～1780	改正京町絵図細見大成 1831	禁闕内外全図 1837 補刻	内裏図 1863	校正再版内裏細見之図 1866	改正京町御絵図細見大成 1868
宅地1	大覚寺門跡				准后（女院･女御）御里御殿									
宅地2	富小路													
宅地3	六条侍従	千種	空き地	園										
宅地4														
宅地5	院御所	清水谷		柳原										
宅地6	やうりんいん													
宅地7	四条	櫛笥												
宅地8	猪熊	□□院	聖護院	女院様女中中納言	甘露寺									
宅地9-a	正親町三条			難波										
宅地9-b														
宅地9-c				転法輪三条隠居										
宅地10	ぜんち院			滋受院										
宅地11	安禅寺（杉之坊）													
宅地12	柳原													
宅地13-a	?	御室御所里坊												
宅地13-b				菊亭内流										
宅地14-a	正親町	正親町		藪										
宅地14-b		葉室	万里小路舎弟	葉室										
宅地14-c		正親町		速水右京										
宅地15	大炊	中御門		梅渓										
宅地16	九条隠居			女院門										
宅地17	九条													
宅地18	空白		町家	小野門跡										
				宅地19a-1	園	冷泉	三室戸	?	蓮華院	高松				山科
				宅地19a-2										
				宅地19b					勧寿院?	堤				
				宅地20	近衛	?	女院女中	ｽｲｼﾝ□	甘露寺?	三室戸	?	空白	三室戸	甘露寺
				宅地21	梅園									
				宅地22a	白川照光院	?	白川照光院		聖護院里坊					
				宅地22b-1		大西	辻	レイ人	今城?	空白				
				宅地22b-2				ｴチコ						
				宅地23	今城									
				宅地24	三条転法輪									
				宅地25	葉室									

註

1）京都市編『京都の歴史５　近世の展開』学芸書林、1972年、P.291。

2）下橋敬長『幕末の宮廷』平凡社、1979年、P.43。

3）『同志社百年史　通史編１』学校法人同志社、1979年、P.88。

4）調査地内の昭和即位礼の遺構については、本報告書第11章第２節で触れている。

参考文献

『昭和大禮京都府記録』京都府、1924年。

京都市編『京都の歴史４　桃山の開花』学芸書林、1969年。

京都市編『京都の歴史５　近世の展開』学芸書林、1972年。

森忠文「明治初期における京都御苑の造成について」『造園雑誌』41－３、1978年。

『同志社女子部の百年』同志社女子部創立百周年記念誌編集委員会、1978年。

大塚隆編『慶長 昭和 京都地図集成　1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』柏書房、1994年。

足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社、1994年。

鎌田道隆『近世京都の都市と民衆』思文閣、2000年。

第8章　遺　構

第１節　A区・M区（図版13～16・67・129～137）

（１）概要

A区は現地保存予定の大径木の保護と調査範囲の制約から、不定形の調査区を設定した。調査に先立って行なわれた樹木移植に伴なう立会調査の所見から、江戸時代後期の遺構はほぼ失われていることが予想されたため、江戸時代前期の整地層を目安に重機掘削を行なった。桃山時代の公家町建設に伴なう土壙A282、江戸時代前期の建物A1086～1088、江戸時代後期の宅地境に関連する溝A７などを検出した。江戸時代中期から後期の遺構は削平されており、建物遺構は検出していない。M区の調査は西側の大径木保護作業が終了した後、土壙A1101の範囲確認などを目的に行なった。

（２）桃山時代

土壙A282（図版16）　北東部の江戸時代前期の建物跡A1086、A1087の下層を中心に検出した大規模な土取穴である。部分的にサブトレンチを設け堆積状況を確認したが、最深部で２mに達することから重機で中位まで掘下げた後、手掘りで範囲を確認した。掘形は概ね地山の黄褐色粘土層の下部まで達し、砂礫層の上で止まっている。出土遺物は平安時代から桃山時代までのものが出土したが、いずれも細片で図示できるものは極端に少ない（図版364）。公家町建設に伴なう土取穴である。

土壙A370　中央部南端で検出した。A区では土壙北側の一部のみであったが、H区調査の際検出した土壙H530、H550と合わせて、一つの大きい土取穴であった可能性が高い。調査区の南壁断面で約９mの範囲で確認し、深さは約0.5mである。土壙A282と同様、出土遺物は平安時代から桃山時代まで幅広い。

井戸A233　中央部南端、土壙A1101の東端に連なる土壙A184の底で検出した。土壙A184の形状は直径４mを超える擂鉢形を呈するが、深さが１mで止まっており、井戸A233の存在が確認できた時点で、土取作業を中止したものと思われる。井戸A233は直径約1.8mの円形掘形である。検出面から約２m掘下げたところで安全確保のため作業を中止したため、石組の有無が確認できていない。17世紀初頭の遺物が出土している（図版364）。

井戸A289（図版16）　北東部の東壁際で検出した。井戸の掘形の平面形は約２mの隅丸方形で、検出面から深さ約0.5mで、石組を検出している。大きさ30cm程度の河原石が小口を内側にして積まれており、井筒は内法約1.2mの円形である。調査区壁際でもあり安全確保のため約２mで、掘下げを断念したため底は不明である。室町時代の遺物が少量出土したが、一部桃山時代のものが含まれており、公家町建設の際に埋められたものである。

（3）江戸時代前期

建物A1086（図版15・133）　中央部北寄りで検出した。南北2間（2m）、東西5間（5.4m）の礎石建物で、南東側に東西3間（3m）、南北3間（1.5m）の張出し部を持つ。柱間は一定しない。各礎石は平坦面が揃えられており、約30cm四方の自然石が主であるが、北側列はやや大きく長軸40cmを超えるものを並べる。江戸時代後期の井戸により、建物中央が壊され、束柱の全容は不明であるが、張出し部では束柱の礎石が残る。東側雨落ち溝と推定できる溝A322、南側に屋敷内通路A1090、南東隅には雨落施設と思われる集石A367がある。通路A1090の礫敷面から17世紀前半代の遺物が出土しており、建物A1086は江戸時代前半には建てられていたと思われる。

建物A1087（図版133）　建物A1086を西側と南側に拡張する建物である。礎石の残存状況から南北3m、東西8mの東西棟に復元できる。礎石は、建物A1086のものに比して一回り小さく、建物下の薄い整地面が、建物A1086の礎石を越えて広がらなかったので、拡張された建物と推定した（図7）。

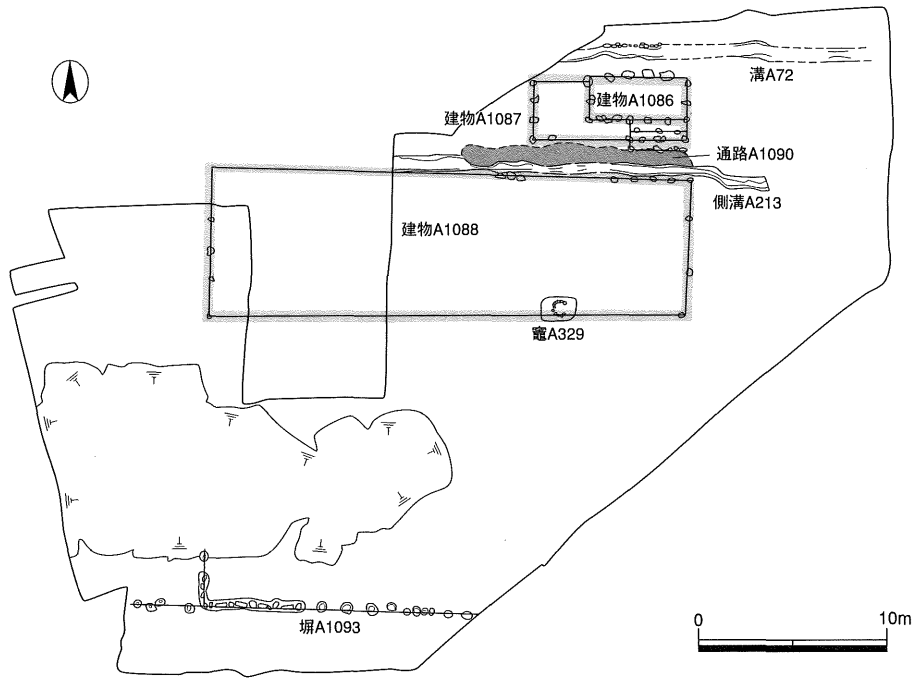


図7　A区江戸時代前期建物復元図

建物A1088（図版135）　調査区の中央部で検出した。東面は礎石を4石検出し、礎石間は2m等間である。北面の礎石を東から1m等間で4間分検出した。建物該当部分に未調査部分があり、推定の域をでないが、調査区の西側に南北方向の礎石列があり、これまでを建物範囲とすると、南北約6m、東西約25mの東西棟に復元できる。

溝A72　調査区東側の北壁沿いで検出した。幅は約0.7m、深さは0.1～0.2mの東西溝である。溝の北側には石組が一段残り、本来は石組溝であったと思われる。この溝は、B区調査の際検出した塀B1096、溝B769と、ほぼ同じライン上にあり、江戸時代前期の宅地境溝と考えられる。

埋土から17世紀中頃の遺物が出土した（図版364）。

塀A1093（図版16・134）　調査区南部で検出した東西方向の塀である。検出した柱穴は22基で、切り合いがある柱穴があり、部分的に修復が行なわれたものと思われる。また塀の中央付近にはL字状に北に延びる布堀柱列があり、これも塀に取付く目隠しの塀と認識した。柱穴は直径約0.5m、深さ0.2～0.4mで、一箇所のみ礎石が残り、他ではみられない。西側は調査区外に延び、中筋通に取付くものと思われる。東側はH区調査の際、続きを検出している。宅地境の施設に伴なう塀と考えられる。目立った出土遺物はない。

（4）江戸時代中期

溝A7（図版14・136）　調査区南部で検出した宅地3・4と宅地5・6境の東西石組溝である。この溝は、江戸時代中期から後期にかけて継続した遺構である。江戸時代中期の段階では、幅1.5～1.7m、深さ0.5mで、溝の東側北壁には最大で3段の石組が残り、西側はすべて抜取られている。石組は自然石と花崗岩の切石からなり、小口で面を揃えている。この溝は江戸時代後期頃に再度石組を構築して作り替えられている。溝の西半分には石組は残らないが、東半分には南壁に花崗岩の切石を主とする2段の石組が残る。江戸時代後期の溝の幅は約1.0m、深さは約0.3mで、やや北側に作り替えられている。作り替えに応じて、約0.3mの嵩上げ整地が行なわれている。天明大火に伴なうものと思われる。江戸時代中期の溝埋土からは、18世紀代の土師器が少量出土しているが、図示していない。江戸時代後期の溝埋土からは幕末期から明治時代初頭の遺物が出土している（図版365）。

集石A157・A165（図版133）　調査区中央で検出した。どちらも、幅1.0～1.2m、深さ0.1～0.2mの東西に長い集石遺構である。西端は近代の撹乱に壊されており不明であるが、長さは7.0mを越えないと推定できる。残存状態が悪く、特に南に位置する集石A165は底部のみの検出であった。遺構の性格を決定しがたいが、建物の床下に掘られた湿気抜きの可能性がある。

土壙M12　M区の中央部で検出した。A区では、複合した土壙群を土壙A1101として一括掘

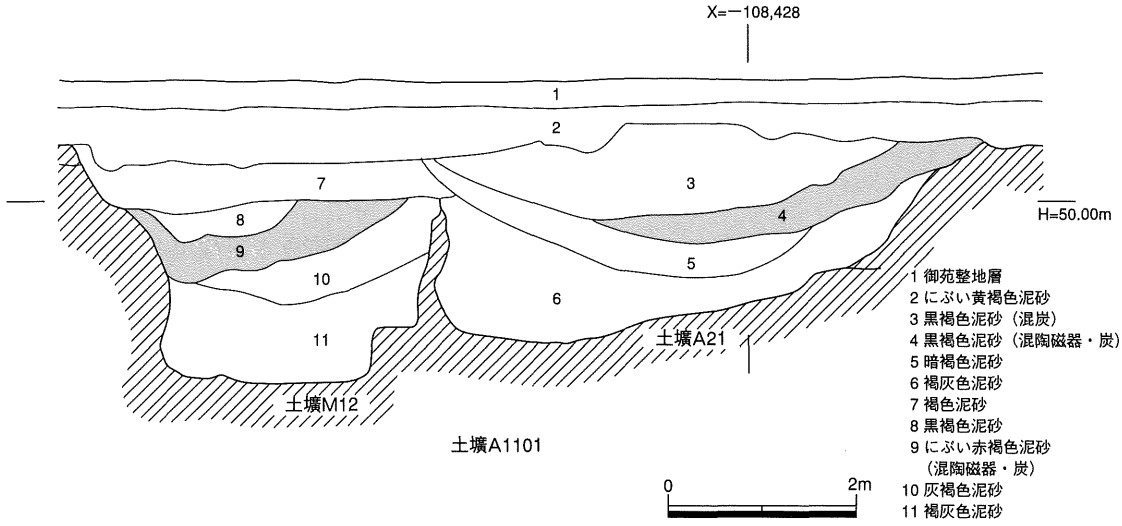


図8　A区土壙A1101断面図

下げした部分の西端部にあたり、土取穴を利用したごみ穴で、M区の西壁でほぼ収束することが確認できた。A区と併せると南北約10m、東西約12mあり、最深部で検出面から約1.8mある。M区の調査で、土取が宝永大火以後と天明大火以後に二度行なわれたことを確認した。後の土取の際に埋土が撹乱され、錯綜した様相を示しており、土壙M12と、天明大火以降の土取穴とそれを利用したごみ穴である土壙A21を区別するのは困難であった（図8）。

（5）江戸時代後期

塀A1091・A1092（図版134）　江戸時代中期から存続する溝A7の北側と南側で検出した東西方向の塀である。北側の塀をA1091、南側をA1092とした。柱穴は直径約0.4mで7基を約1.0m等間で検出しており、ほとんどに礎石が残る。礎石は0.2mほどの自然石が主である。塀A1091は、西端から柱穴が北に延びており、塀A1091に取付く何らかの建物を想定できる。西端の柱穴から調査区外に延びる可能性があるが、確認できなかった。塀A1092は8基の柱穴を検出した。柱穴は、A1091と溝A7を挟んで対応する位置にあり、時期を同じくして設けられた塀の可能性が高い。出土遺物からは時期を決定できないが、整地層の年代から、天明大火以降の江戸時代後期に属する遺構である。

池A57（図版14・136）　調査区南壁際で検出した。池は内側を漆喰で固めており、北側肩口に約40cmの踏石を2石配している。長径約1.5m、短径約0.4mで、深さは0.1m程度が残っている。東隅を擂鉢状に深くし、鉄釉の小型の甕を正位置で埋め込む。底部などに穿孔はみられない。小さな池と考えるが、蹲居の可能性もある。

埋納土壙A341（図版136）　調査区南壁沿いで検出した。掘形は約0.3mの円形で、中央に胞衣壷が据えられている。掘形が浅かったためか、蓋は細かく割れていたが元位置は保っていると思われる。壷内部には目立った遺物はなく、掘形内にも遺物はない。

整地A3　調査区南東隅で検出した屋敷廃絶時の整地である。南北11m以上、東西6.5m以上の広がりをもつ。漆喰、瓦、炭などが混然として調査区の南東部を広範囲に覆っていた。明確な掘形がなく不定形で調査区外にも広がる。底部は地山の黄褐色粘土層まで達しており、最深部は検出面から0.8mに達する。埋土は暗黒褐色泥土で遺物量は少なく、19世紀前半から中頃を中心とした遺物が出土した（図版367・368）。

井戸A1　調査区北東隅で検出した。周辺には公家町廃絶期の瓦が堆積しており、土壙A5、土壙A1102などとともに瓦の廃棄坑として利用されたものである。約2m掘下げたが石組は残っておらず、出土遺物は瓦のみである。

井戸A354（図版137）　調査区南西部で検出した石組井戸で、掘形は約1.8mの円形である。検出面から1.6mで底部に達する。中位から下に石組が残り、内法約1.0mの井筒内は黄褐色砂泥の比較的しまった層が堆積していた。他の井戸と比べて浅いため、石組の排水施設の可能性も高い。宅地境溝A7の南側にあたり、宅地5・6の柳原邸に属する施設である。イギリス製白磁皿・ヨーロッパ製のガラスボウル・ランプの火屋など、遺物のほとんどが上層の暗褐色砂泥層から出土しており、屋敷廃絶の際、廃棄穴として利用されたものである（図版366・587）。遺

物の様相から、この井戸は同志社大学教師Ｊ・Ｄ・デイヴィス邸及び同志社女学校の仮校舎兼寄宿舎の時期にも存在した可能性がある。

第2節　B区・N区（図版17～19・67・137～146）

（1）概要

B区は現地保存が予定された楠の大径木があり、A区同様不定形の調査区を設定した。B区は、この大径木の他に松・桜などからなる樹林帯であったため、すべての樹木が調査前に移植された。その移植作業によって江戸時代中期から後期の遺構の多くは失われた。そのため、調査では江戸時代前期の整地層を目安に重機掘削を行なった。桃山時代の遺構としては公家町建設に伴なう土取穴の土壙B1000などを検出した。江戸時代前期の建物関連施設としては建物B1094、塀B1099、塀B1095、宅地境施設の塀B1097、塀B1096、溝B769などを検出した。江戸時代中期から後期の遺構では、大規模な土壙B674、B716、B721、天明大火に伴なう瓦整理の土壙B1103などが調査区の西側に連続しており、明確な建物遺構は検出できなかった。N区の調査は、B区調査で検出した宅地境施設や土壙B725などの範囲確認を主眼に調査区を設定し、江戸時代の遺構のみ調査した。

（2）桃山時代

土壙B1000　調査区北東部に広がる大規模な土取穴で、南北30m以上、東西34m以上ある。公家町建設に伴なう大規模な整地作業の一環である。部分的に南北方向の掘形単位が観察されたが、基本的には連続したものであり、一括して土壙B1000として掘下げている。土壙はそれほど深くなく、検出面から0.5～0.7mである。出土遺物はそのほとんどが平安時代から室町時代のものであるが（第1分冊図版88・89）、若干の16世紀末から17世紀初頭の遺物がある（図版370）。

（3）江戸時代前期

建物B1094（図版19・137）　調査区中央北端で検出した。東側に残る2列の礎石列と西側に残る2列の礎石列、その礎石列に挟まれた土間状の整地から建物と推定した。東西は約10.5mあり、南北は5m以上に復元できる。礎石には掘形はなく、土間状の整地上に据えられている。礎石は40cmを越えるものはなく、小規模な建物が想定できる。整地層から17世紀前半代の遺物が出土している。

塀B1095（図版18・144）　調査区南端で検出した東西方向の柱穴列で宅地4の施設である。西側、東側とも調査区外に延びるが、東側はA区調査の際には検出していない。11基の柱穴を検出しており、礎石を持つものとないものが混在しており、部分的な補修が行なわれていると思われる。柱穴は約0.4mの円形で、柱間は不揃いである。

塀B1096（図版144）　調査区南側で検出した東西方向の柱穴列で、江戸時代前期の宅地境推定ライン上にあり、板塀状の施設が想定できる。8基の柱穴を検出したが、江戸時代後期の

遺構で中央部が壊されている。柱穴は約0.4mの円形で、明確な礎石を持つものはなく深さも一定でない。隣接する溝Ｂ769に先行する。

塀Ｂ1097（図版19・145）　調査区北寄りで検出した東西方向の布掘柱列である。溝の西側は調査区外に延び、宅地境の施設と考えられる。溝東側は削平されているが、12基の柱穴を確認した。深さ約0.1mの溝底部に柱穴がある。溝西部では、柱穴は掘形が浅いためか検出されず不明である。柱穴は約0.5mの隅丸方形で、柱間は1.2～1.8mと不揃いである。

塀Ｂ1098（図版19・145）　塀Ｂ1097の北側に並列する柱穴列である。９基の柱穴を検出した。柱穴の形状は不揃いで、柱間もばらつきがある。本来は西側にも柱列は延びていた可能性があるが、江戸時代中期以降の宅地境の石組の溝Ｂ678と重なり検出されなかった。

塀Ｂ1099（図版145）　調査区北寄りで検出した、南北方向の柱穴列である。柱穴は約0.4mの円形で、柱間は1.0～1.4mの間で不揃いである。柱穴の掘形は0.3～0.4mの深さがあり、礎石はない。部分的に撹乱されるが、８基の柱穴を検出した。柱穴内からは時代の推定できる遺物は出土しなかった。検出層位と他の遺構との位置関係から、江戸時代前期の遺構と考えられる。

石敷Ｂ1100　塀Ｂ1098の北側、塀Ｂ1099の西側の区画で検出した。江戸時代中期以降の撹乱により、範囲は明確でない。最大幅約4.0mで北側は調査区外に延びている。石敷の整地面は一面で、厚さは約５cmである。屋敷配置から推定して、宅地２の玄関前の庭部分に相当し、塀Ｂ1099が目隠塀になるものと思われる。

土壙Ｂ725（図版146）　調査区北東部の宅地２内で検出した大型廃棄土壙である。南北約6.5m、東西約7.5m、深さ約1.6mである。Ｂ区調査の際、土壙の東側が調査区外に延びるため、Ｎ区で補足調査を行なった。検出面では円形を呈するが、底部では比較的明確な方形である。当初からごみ穴として造られたものと思われる。埋土中層部に炭化物・焼土を多量に含む２層のレンズ状の堆積があり、この２層に挟まれた間に大部分の遺物が含まれていた。土壙は宝永大火の火災整地層に覆われている。1660～70年代を中心とした遺物が出土している（図版２・306～314）。

池Ｎ21（図版266）　調査区の北隅で検出した。後世の土壙で壊されているため、規模はわからないが、周縁の組石が１石残り、池底は厚さ10cm程度の粘土が張付けられている。調査区の東壁際の池底には丹波産の擂鉢が据えられている。

（４）江戸時代中期

溝Ｂ675（図版17・146）　調査区北寄りで検出した、宅地境に関連する東西方向の石組溝である。石組は北側の東部のみ２段分が残存していた。溝の掘形幅は約0.7m、深さは約0.2mである。石材の大きさは、20～30cmである。西側は調査区外に延びるが、東端は樹木移植に伴なう撹乱で壊されている。溝の埋土から18世紀代の遺物が少量出土した。

溝Ｂ678（図版17・146）　溝Ｂ675の南に並行する石組溝である。両端とも撹乱されており、検出できたのは調査区内の約７m分だけである。溝北側に石の小口を揃えた石組が残っており、石材の大きさは30～40cmである。ただ、溝の南側は天明大火以降の土取穴で壊されており、不

明である。溝の埋土から18世紀代の遺物が少量出土した。

土壙B776　宝永大火以降の宅地境溝B675の北で検出した。東西約4m、南北約3mで平面形は不定形で深さも一定ではなく、小規模な土取穴をごみ穴に利用したものと思われる。下層は土取の際に捨てられた不用な表土で遺物は少ない。中層は遺物が集中し、享保一分金（1716～1735年）と思われる金貨が出土している。規模が比較的小さく、遺物集中層も18世紀前半でまとまりがあり、短期間のごみ穴で遺物の一括性は高いと推定できる（図版4・327・328）。

土壙B674　宅地2の西南隅で検出した土壙で、土取穴が廃棄土壙に利用されたものである。土壙の西側が一部調査区外に延びており、全体の形状は不明であるが、南北約8m、東西7m以上、深さ約1.5mの大規模なものである。底は凹凸があり聚楽土の採取痕を留めていた。宝永大火後の整地面を切込んでおり、中層位に約0.5mの厚さで、大量の土師皿を中心とした土器類や陶磁器類が帯状に集中していた。下層の約0.7mには黄褐色の粘土ブロック・焼土が多く混入しており、土取作業の際に不用な土を埋戻したものと考えられる。出土遺物は18世紀前半のものが主体である（図版370～377）。

柱穴N9・N10・石列N3（図版266）　調査区北側で検出した。東で北へ約20°振る東西方向に柱穴N9と柱穴N10が並んで、その間を石列N3が連なる。柱穴の間隔は約3.1mである。石列N3の北側は小礫が敷かれている。建物施設の南端部と推定するが、B区調査の際には検出しておらず、全体の平面形も不明である。

（5）江戸時代後期

土壙B1103　調査区南寄りで検出した。南北約9m、東西約10m、深さは約2mである。重機掘削の際から検出しており、その規模の大きさから、公家町廃絶期の瓦廃棄土壙と誤認して重機で掘下げた。出土遺物はほとんどが桟瓦であったため取り上げていないが、遺物整理段階でサンプルとして残した若干の陶磁器を検討したところ、18世紀後半代の様相であった。天明大火に伴なう瓦整理土壙である。

土壙B716　土壙B687の下層で検出した土取穴で、ごみ穴に利用されたものである。東西約5m、南北約3.5mの楕円形土壙で検出面から深さ約1mである。底は凹凸があり砂礫層の直上で止まっている。土取穴の特徴を示している。埋土は土師器類、陶磁器類、炭・焼土、貝殻などを多量に含む黒褐色砂泥が、レンズ状に堆積する。他の遺構との重なりがなく、出土遺物に一括性があるものと判断した。18世紀末から19世紀初頭の基準資料とした（図版6・339～344）。

土壙B718　調査区中央部で検出した。土壙B703・B721などに連なる大型土取穴の一単位である。不定形な平面形である。18世紀末から19世紀初頭の遺物が出土している（図版383）。

土壙B721　天明大火後の土取穴である。土壙B703・B718などが連続し、一連の土取穴を形成する。ごみ穴に利用されており、南北約8m、東西約6m、深さ約1.8mの不定形を呈する。下層の約0.6mは土取の際の不用土で、瓦や焼土ブロックを多量に含む。中層からごみ穴として利用され多量の遺物が出土している（図版378～382）。このごみ穴群は宅地3・4内の北西隅にあたり、調査範囲内では他に江戸時代後期に属する大規模なごみ穴はない。この一連のごみ穴

上層部にあたる土壙Ｂ687も含めると、天明大火以降19世紀中頃まで、ごみ穴として利用されたものと思われる。

土壙Ｂ687　調査区中央、宅地３・４の北西隅で検出したごみ穴で、土壙Ｂ703・Ｂ716・Ｂ720などの上層部にあたる。南北約12m、東西約９mの長方形で深さ約１mである。埋土は概ね暗褐色砂泥で、湿地状の堆積をしており下層のごみ穴群が機能を停止した後、広範囲に窪んだ所をごみ穴として利用したものと思われる。19世紀前半主体の遺物が出土した（図版７・348～358)。

瓦組土壙Ｂ636（図版18・146）　調査区中央西寄りで検出した。南北約1.3m、東西約2.2m、深さは約1.3mである。検出面から約0.5mの深さから下に、桟瓦組を四方に確認した。底部は瓦はなく、土壙の四隅や中央付近に杭跡があり、瓦組の内側に横板組の痕跡も確認した。明治時代初頭の公園化に伴なう整地層の上から掘込まれており、明治10年代以降の遺構である。19世紀後半の遺物が出土している（図版383)。

塀Ｎ１（図版266）　明治時代初頭の公園化に伴なう整地層の直下で検出した。外側に面を持つ２列の石列で、花崗岩の切石で構築されており、幅は約0.7mである。その構造から築地基礎と思われる。宅地境施設と考えられるが、Ｂ区調査の際には検出されておらず不明である。Ｄ区の塀Ｄ637と一連の遺構の可能性が高い。出土遺物は18世紀後半以降のものである。

石列Ｎ５（図版266）　調査区の南で検出した自然石１段の南北石列である。塀Ｎ１に直角に取付く何らかの区画施設と思われる。遺物は出土していないが、塀Ｎ１と同時期と思われる。

第３節　Ｃ区（図版20～23・147～159）

（１）概要

Ｄ区の南、Ｇ区の北にそれぞれ接する。平面形は南で東に屈曲する鍵形の調査区である。ゲートボール場であったため、競技場区画基礎が東西・南北方向に走る。さらにゲートボール場以前の樹木の抜取穴が点在する。南東の一部に粘土質の地山層が認められるが、それ以外は砂礫層の地山となる。桃山時代には、西端に南北方向の堀Ｇ1940があり、その東肩には塀Ｃ1416がある。塀の東側には井戸、土壙などがある。江戸時代前期には、東端に溝Ｇ1195が南北に通る。調査区内はほとんどが宅地９内にあたる。西端の塀Ｃ1415が西側の宅地４との境になる。また、南側の塀Ｃ1414で南側の宅地10との境になる。宅地内の主要な遺構には石組井戸、土壙などがある。西端には、溝Ｈ270が作られ、後に作り直された溝Ｃ918は、切石を積んだ溝である。ここでは宅地の東西幅が検出できた事が大きな成果である。江戸時代中期には、中央に南北方向の道路Ｃ12Ｂがあり、その両側溝には溝Ｃ10Ｂ・Ｃ156Ｂがある。道路の東側には宅地20があり、西側には宅地３・４がある。宅地20内には穴蔵Ｃ570、土壙Ｃ573などがある。宅地３・４内では埋納土壙Ｃ342・Ｃ494がある。南端には東西道路Ｃ1417Ｂとその北側溝Ｃ135Ｂがある。江戸時代後期には、中期と同様に中央に道路Ｃ12がある。道路の両側溝Ｃ10・Ｃ156は切

石による石組溝に改修されている。両溝ともに3段程度の石組が遺存する。塀C1409・C1411は溝C10の東側直近に位置し、南北に連なる。東西方向の塀C1410は、宅地境としてこの時期に設定されたものとみられる。道路の西側には塀C1413がある。南端には東西道路C1417の北側溝C135がある。この溝の北側には東西方向の塀C1412がある。

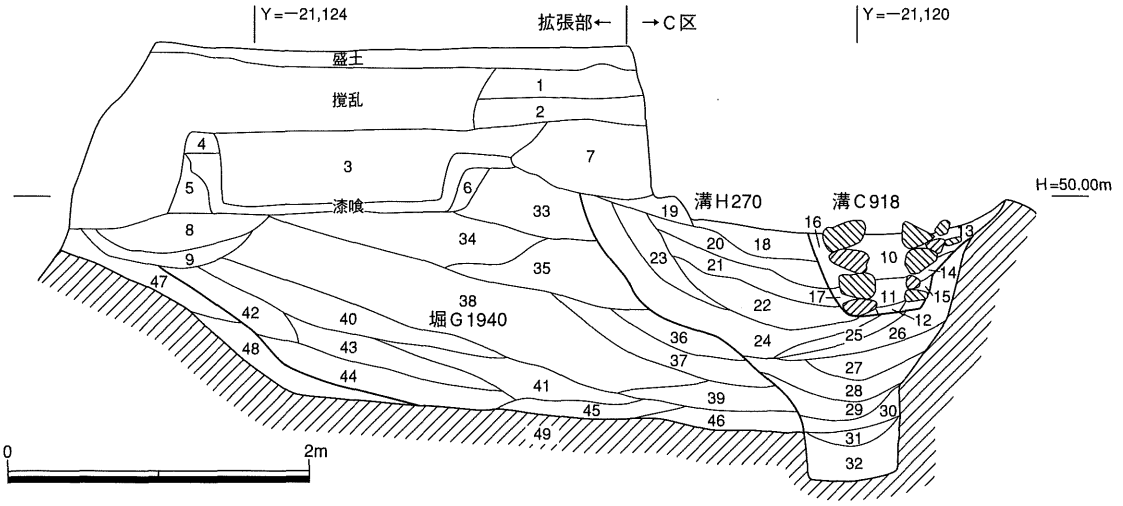
（2）桃山時代

堀G1940　西部で検出した南北方向の堀である。東肩のみが調査区内にあり、西肩・北側・南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約16m、幅約5.5m、深さ約1.6mである。断面は逆台形を呈し、素掘りである。レンズ状の堆積で、下層は砂礫層である。水が流れていたと思われる（図9）。XI期古段階までの土師器皿と陶磁器が出土した。

塀C1416（図版155）　西部で検出した南北方向の塀である。堀G1940の東肩に南北方向に柱穴が並ぶ。北側・南側とも調査区外に延びる。検出した柱穴は6基で、検出分の長さは約11mである。柱穴は直径0.5～0.6m、深さ0.2～0.4mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東西方向に少しずれる柱穴もある。16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した。

土壙C972　西部で検出した。東西約4m、南北約6m、深さ約0.5mの平面形が不定形の土壙である。埋土は暗黄灰色砂泥で、炭・焼土を含む。漳州窯系の青花大皿がXI期古段階の土師器皿と共伴して出土した（図版390・391）。

井戸C1047　南部で検出した石組の井戸である。南半が調査区外であるが掘形の直径は約1.6mの円形に復元できる。深さは1.1mまで確認できた。石組は大きさ20～40cmの河原石を小口



1 暗褐色砂泥（炭・焼土）　11 暗オリーブ褐色泥砂（炭）　21 暗オリーブ褐色砂泥（炭）　31 黒褐色泥砂（炭・焼土）
2 灰黄褐色砂泥（炭・焼土）　12 暗オリーブ褐色泥砂　22 黄灰色砂泥（炭）　32 暗褐色泥砂（炭・焼土）　41 灰黄褐色砂泥（炭・焼土）
3 黒褐色砂泥（炭・焼土）　13 黄褐色砂泥（炭）　23 暗オリーブ褐色砂泥　33 暗オリーブ褐色砂泥（炭・焼土）　42 にぶい黄褐色砂泥（炭）
4 灰黄褐色砂泥（炭・焼土）　14 にぶい黄褐色砂泥　24 褐灰色砂泥（炭）　34 にぶい黄褐色泥砂（炭・焼土）　43 黒褐色砂泥（炭・焼土）
5 灰黄褐色砂泥（炭・焼土）　15 にぶい黄褐色砂泥（炭）　25 にぶい黄褐色砂泥　35 黒褐色砂泥（炭・焼土）　44 灰褐色砂泥（炭・焼土）
6 黒褐色砂泥(炭・焼土)　16 にぶい黄褐色砂泥(炭)　26 黄褐色砂泥(炭・焼土)　36 黒褐色砂泥(炭)　45 灰褐色砂泥（炭・焼土）
7 黒褐色砂泥（炭・焼土）　17 暗灰黄色砂泥　27 にぶい黄褐色砂泥　37 灰黄褐色砂泥（炭・焼土）　46 オリーブ褐色砂泥
8 暗褐色砂泥（炭・焼土）　18 にぶい黄褐色砂泥（炭）　28 黒褐色砂泥（炭・焼土）　38 褐灰色砂泥（炭）　47 灰黄褐色砂泥
9 灰黄褐色砂泥（炭・焼土）　19 灰黄褐色砂泥（炭・焼土）　29 灰黄褐色砂泥（炭・焼土）　39 黒褐色砂泥（炭）　48 灰黄褐色砂泥
10 灰黄褐色砂泥（炭）　20 暗灰黄色砂泥　30 黒褐色泥砂　40 黒褐色砂泥（炭・焼土）　49 にぶい黄褐色砂礫（地山）

図9　C区堀G1940・溝H270・溝C918断面図

面を内側にして円形に積上げる。内径は約0.8mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した。

（3）江戸時代前期

溝H270（図版23）　西部で検出した南北方向の溝である。東肩のみが調査区内にあり、西肩・北側・南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約16m、幅約2.6m、深さ約1.9mである。断面はV字形を呈し、素掘りである。XI期古から中段階の土師器皿が出土した（図版385・386）。

溝C918（図版23・156）　西部で検出した南北方向の石組溝である。北側・南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約17mで、北側でやや西へ振る。掘形の最大幅は約1.5m、深さ約1.6mである。河原石と花崗岩切石を積上げて護岸する。内法約0.3m、石積みは3段が確認できる。西側壁の石材は約30cmである。当初の溝H270を埋めてその東肩部分に作り替えられたものである。石組溝内の堆積は暗褐色泥砂が主体で、炭・焼土をやや多く含む。石組溝内からXI期中段階、掘形からはXI期古段階の土師器皿が出土した（図版385）。

塀C1415（図版155）　西部で検出した南北方向の塀である。溝C918の東肩に柱穴が並ぶ。北側・南側とも調査区外に延びる。検出した柱穴は7基で、検出分の長さは約8mである。柱穴は直径0.5～0.8m、深さ0.4～0.9mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東西方向に少しずれる柱穴もある。17世紀前半の遺物が出土した。

塀C1414（図版156）　南部で検出した東西方向の塀である。東側・西側とも調査区外に延びる。検出した柱穴は18基で、検出分の長さは約26mである。西側でやや北に振る。柱穴は直径0.5～0.8m、深さ0.4～0.6mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、南北方向に少しずれる柱穴もある。17世紀前半の遺物が出土した。

井戸C660（図版22・158）　南部で検出した石組の井戸である。掘形は東西約2.3m、南北約2.1mのほぼ円形で、深さは約3.7mである。石組は大きさ約30cmの河原石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約1.1mで、下部がわずかに狭くなる。下部は、木製の桶を倒立させて井戸枠とする。桶の直径は90cm、高さは65cmである。埋土は褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。XII期古段階の土師器皿が出土した。

井戸C661（図版157）　北部で検出した石組の井戸である。掘形は東西約1.6m、南北約1.8mのほぼ円形で、深さは約3.7mである。石組は大きさ約20～40cmの河原石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約0.8mで、下部がわずかに広くなる。底部の石は長軸を縦方向に使用する。埋土は暗褐色砂泥である。XII期古段階の土師器皿が出土した。

井戸C952（図版157）　中部で検出した石組の井戸である。掘形は東西約1.7m、南北約1.9mのほぼ円形で、深さは検出面から約1.8mである。石組は大きさ約20cmの河原石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約0.8mで、下部がわずかに狭くなる。下部に大きい石材を使用する。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。XI期新段階の土師器皿が出土した。

井戸C1192（図版157）　中部で検出した石組の井戸である。掘形は直径約2.2mの円形で、

深さは約3.7mである。石組は大きさ20～40cmの河原石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約１mで、下部がわずかに狭くなる。下部は、木製の桶を倒立させて井戸枠に使用する。桶の直径は約１m、高さは85cmである。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。Ⅻ期中段階の土師器皿が出土した。

穴蔵Ｃ548Ｂ　北東部で検出した。掘形は南北約４m、東西約６mの長方形で、深さは検出面から約２mである。石が抜取られている。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を含む。Ⅺ期新段階古相の土師器皿が出土した（図版300～302）。

（４）江戸時代中期

穴蔵Ｃ570（図版22・158）　北東部で検出した。東端は調査区外に延びるが、掘形は南北約1.8m、東西約2.1mの長方形に復元できる。深さは検出面から約0.4mで、大きさ20～30cmの石を積上げる。内法は南北約1.2m、東西約1.5mである。２段から３段の石組が遺存する。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。浅い構造とみられる。Ⅻ期古段階の土師器皿が出土した。

埋納土壙Ｃ342（図版22・157）　北西部で検出した。平面形は直径約0.4mの円形で、深さ約0.2mである。中央に胞衣壷、南東側には土師器皿３個体が重ねて埋納されていた（図版390の１～５）。埋土は暗褐色砂泥で、焼土を少量含む。宅地３・４の東端に位置する。土師器皿は、Ⅻ期中段階である。

埋納土壙Ｃ494（図版157）　北西部で検出した。平面形は直径0.3～0.35mの楕円形で、検出面から深さ0.1mである。中央に胞衣壷が埋納されていた（図版390の６・７）。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。宅地３・４の東端で、埋納土壙Ｃ342の北約1.8mに位置する。他の遺構との位置関係から、江戸時代中期の遺構と考える。

土壙Ｃ628　南西部で検出した。平面形は南北約1.6m、東西2.5m以上の不定形で、深さは約0.7mである。埋土は黒褐色砂で、炭・焼土を少量含む。「明和元年」銘の陶器蓋とともにⅫ期中段階の土師器皿が出土した（図版387～389）。

（５）江戸時代後期

道路Ｃ12　中央部で検出した南北方向の路面である。東西に石組側溝がある。東側が溝Ｃ10、西側が溝Ｃ156である。道路幅は約16mである。北側・南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約37mである。東側３分の１が小礫を堅く敷詰めた堅固な路面となる。中央から西側には土壙が多く作られている。小礫敷から19世紀中頃の遺物が出土した。

溝Ｃ10（図版20・21・159）　東部で検出した南北方向の道路東側溝である。検出分の長さは約39mである。掘形の幅は約1.8m、深さ約0.2mである。大きさ10～40cmの河原石を組んで溝を護岸する。内法は約0.6mである。石組は２段遺存する部分もある。道路側の石組が比較的良く遺存する。X＝－108,436m以南では、約70cmの大きな石材を約４mにわたって使用する部分がある。この部分は溝の底部も約20cm低くなっており、暗渠となっていたと考えられる。X＝－108,440m以南では底部に切石を敷く部分がある。数箇所に排水口や取水口が設けられる。断面観察からは常時水が流れていたことがわかった（図10）。埋土は褐灰色泥砂が主体で、ⅩⅣ

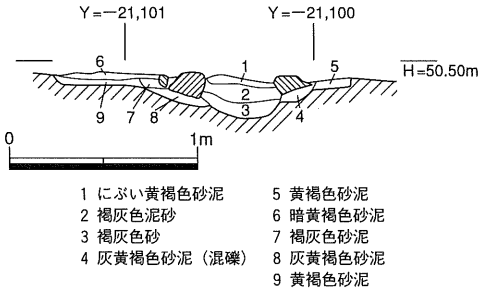


図10　C区溝C10断面図

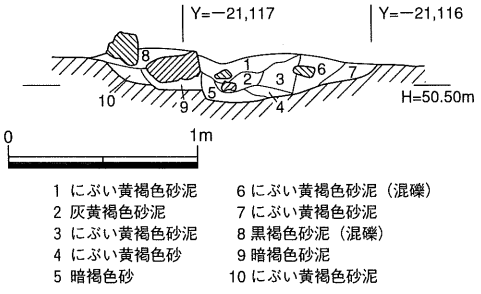


図11　C区溝C156断面図

期中段階の土師器皿が出土した。

溝C156（図版159）　西部で検出した南北方向の道路西側溝である。検出分の長さは約27mである。掘形の幅は約1.4m、深さ約0.3mである。大きさ10～20cmの河原石や花崗岩の切石を組んで溝を護岸する。内法は約45cmである。数箇所に排水口や取水口が設けられる。埋土はにぶい黄褐色砂泥が主体で、炭が混じる。断面観察からは常時水が流れていたことがわかる（図11）。XV期中段階の土師器皿が出土した。

塀C1409　東部で検出した南北方向の柱穴列である。溝C10の東肩に並ぶ。北側は調査区外に延びる。検出した柱穴は8基で、検出分の長さは約8.5mである。柱穴は直径約0.4mで、深さ約0.3mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東西方向に少しずれる柱穴もある。XV期中段階の土師器皿が出土した。

塀C1410　東部で検出した東西方向の柱穴列である。東側は調査区外に延びる。西側は、塀C1409の南端にL字形に取付く。検出した柱穴は2基で、直径約0.4m、深さ約0.3mである。底には礎石が据えられている。XV期中段階の土師器皿が出土した。

塀C1411　東部で検出した南北方向の柱穴列である。溝C10の東肩に並ぶ。北側は、塀C1409に連なる。検出した柱穴は25基で、検出分の長さは約24mである。柱穴は直径0.3～0.4mで、深さ約0.3mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東西方向に少しずれる柱穴もある。XV期中段階の土師器皿が出土した。

塀C1412　南部で検出した東西方向の柱穴列である。東側は調査区外に延びる。西側は、塀C1411の南端にL字形に取付く。検出した柱穴は9基で、検出分の長さは約11mである。西側でやや北に振る。柱穴は直径0.2～0.4mで、深さ約0.4mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、北南方向に少しずれる柱穴もある。XV期中段階の土師器皿が出土した。

塀C1413　西部で検出した南北方向の柱穴列である。溝C156の西肩に並ぶ。北側・南側とも調査区外に延びる。検出した柱穴は6基で、検出分の長さは約18mである。柱穴は直径0.2～0.4mで、深さ約0.3mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東西方向に少しずれる柱穴もある。XV期中段階の土師器皿が出土した。

道路C1417　南東部で検出した東西方向の路面である。東側は調査区外に延びる。西側は、道路C12に取付く。検出分の長さは約12mである。堅くしまった小礫敷が数層ある。19世紀中

頃の遺物が出土した。

溝C135　南部で検出した東西方向の素掘溝である。東側は調査区外に延びる。西側は、溝C10に取付く。検出分の長さは約12mである。道路C1417の北側溝である。埋土はにぶい黄橙色泥砂で、炭が混じる。XIV期古段階の土師器皿が出土した。

溝C35（図版21・158）　中央部で検出した瓦組みの溝である。東側は調査区外に延びる。検出分の長さは約3.1mである。掘形は幅約0.2m、深さ約0.2mである。内法は約0.1～0.2mである。西側で北に約15°振れる。西側に向かって低くなっている。西は側溝C10につながり、取付部は丸瓦を合わせて円筒状とする。宅地内から水を流し出す構造である。埋土は黒褐色砂泥で、XIV期古段階の土師器皿が出土した。

溝C113（図版21・158）　西部で検出した石組の溝である。溝C156に斜めに取付く。掘形は幅約1.1m、深さ約0.3mで、全長4.9mである。河原石を組んで護岸する。内法は約0.5mである。南西側に向かって低くなっている。南西端には瓦組枡C153がある。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土が少量混じる。XIV期古段階の土師器皿が出土した。

瓦組枡C153（図版21・158）　西部で検出した瓦組の枡である。掘形の直径約0.8m、深さ約0.3mである。中には平瓦で円形の枡を組み、底にも瓦を敷く。枡の内径は約0.6m、深さ約0.2mである。下部が狭くなる。側溝から宅地内に取り入れた水を溜める構造と思われる。埋土は暗褐色砂泥で、炭が混じる。XIV期古段階の土師器皿が出土した。

第4節　D区（図版24～26・160～165）

（1）概要

C区の北に接する。桃山時代には土壙がある。江戸時代前期には溝、塀、井戸、穴蔵、土壙などがある。江戸時代中期には調査区の8割が道路となるため、建物跡の遺構は検出されなかった。また、江戸時代中期以降の撹乱で、道路部も約4m幅のみが残存するだけである。東側溝の石組の痕跡も一部確認された。江戸時代後期には道路、溝、塀などがある。

（2）桃山時代

土壙D538　北壁際で検出したため、北半部分は調査区外である。東西約3.1m、南北約1.7m、深さ約0.3mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、獅子形の金製飾金具とXI期古段階の土師器皿が出土した。

（3）江戸時代前期

溝H270　北西部と南西部で検出した。幅は上端では1.9m以上、底部では約0.5mのV字形を呈する。埋土は灰黄褐色砂泥で、XI期中段階の土師器皿が出土した。

井戸D535（図版25・164）　北東部で検出した石組の井戸である。掘形は直径約2.8mの円形で、20～40cmの河原石が6段ほど残存していた。深さは検出面から約4mである。埋土は黒褐色泥土で、肥前陶器などとXI期中段階の土師器皿が出土した。

井戸D438（図版26・164）　中央部の東寄りで検出した石組の井戸である。西側は撹乱を受けているが、一辺1.8mほどの方形の掘形であると推定される。石組は検出面から約1.5m下で検出され、内径は一辺約0.8mの方形である。石組は5段で約0.6mが残存していた。最下部は25cm幅の横板が1段組まれていた。検出面から約2.7m下で井戸底を確認した。埋土は灰黄褐色砂泥で、XI期中段階の土師器皿が出土した。

井戸D318C（図版164）　北東部で検出した石組の井戸である。掘形は直径約0.9mの円形である。上部は撹乱されていたが、下方の石組が2段ほど残存していた。深さは検出面から約1.0mである。埋土は暗褐色砂泥で、遺物は細片のため時期は確定できない。周辺遺構との重なりから、江戸時代前期と考える。

石組土壙D346（図版164）　北東部で検出した。掘形は東西約1.5m、南北約1.3m、深さ0.5mのほぼ方形である。内法は東西約0.8m、南北約0.7mである。20～40cmの河原石が2段程度が残存していた。下部はやや狭まる。埋土は黒褐色砂泥で、XI期新段階の土師器皿が出土した。

塀D303（図版25・164）　北東部の東壁際で検出した東西方向の塀である。幅約1.1m、検出長は約2.8mで西側は撹乱を受け、東は調査区外に延びる。北・南縁には約20cmの河原石が並び、中央には直径約0.3m、深さ0.2mの柱穴を3基検出した。柱間は約1mである。上面には17世紀後半の焼土層が堆積していた。

穴蔵D200（図版165）　南東部で検出した。掘形は東西約3.0m、南北約1.8m、深さ約0.9mの長方形である。内法東西約1.7m、南北約0.8mである。20～30cmの河原石を小口面を内側に向け積んでいる。3段ほどが残存していた。埋土は暗褐色砂泥で、XI期新段階の土師器皿が出土した。

土壙D451　中央部の西寄りで検出した。一部が撹乱されていた。掘形は南北約2.8m、東西約2.7m、深さ約0.4mの不定形である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、XI期新段階の土師器皿が出土した。

井戸D296（図版165）　北西部で検出した石組の井戸である。掘形は直径約2.2mの円形である。内径は約1.0mで上部の石は抜取られていた。10～40cmの花崗岩の切石を8段まで確認した。深さは検出面から約3.7mである。埋土は暗褐色砂泥で、XII期新段階の土師器皿が出土した。

（4）江戸時代中期

溝D189（図版25）　北西部で検出した南北方向の漆喰溝である。検出した長さ南北約5.8m、掘形は幅約0.7m、深さ約0.3mである。内法は0.2mである。北側は撹乱を受け、南側は調査区外となる。溝の北寄りで南北約0.5m、東西約0.3mの方形の枡が確認された。宅地内の排水施設と考えられる。

（5）江戸時代後期

溝C10　西部で検出した南北方向の石組溝である。検出した長さは約26m、掘形の幅は約1.3m、内法は約0.6m、深さ約0.5mである。20～30cmの花崗岩の切石が主に積まれていた。石組は1段から2段が残存していた。C区で検出した溝の北延長である。埋土は暗褐色砂泥で、XIV

期中段階の土師器皿が出土した。

溝Ｃ156（図版24）　東部で検出した南北方向の石組溝である。一部調査区外になるが、検出した長さは約34mである。掘形幅は約1.6mである。石組は20～60cmの河原石を積み、北部の西側で良く残る。Ｃ区で検出した溝の北延長である。埋土は暗褐色砂泥で、ⅩⅣ期古段階から中段階の土師器皿が出土した。

道路Ｃ12　中央部西寄りで検出した南北方向の道路である。道路幅は約15mであるが、西側は江戸時代後期以降の土壙が多数検出され、小礫敷の路面が確認されたのは東側の約4.5m幅である。

塀Ｄ637（図版24・165）　調査区の中央部西の拡張区で検出した、東西方向の塀の基底部である。外側に面を持つ２列の石列である。長さは東西約10m、幅は約0.6mで、両縁には20～40cmの主として河原石が据えられる。塀の東端は溝Ｃ156に接する。一部を掘下げ、先行する石列を確認した。先行する石列の上面には焼土層が確認された。

第５節　Ｅ区・Ｌ区（図版27～31・67・166～180）

（１）概要

Ｅ区は饗宴殿跡グランドの西北部にあたり、南北46.5m、東西35mの長方形区画と、北東部に南北7.0m、東西15.5mの張出し部分を持つ調査区である。調査開始前に遺構残存状況を確認するため、Ｅ区・Ｆ区の東端に試掘坑を設けた。その結果、饗宴殿関連の整地と撹乱が広範囲に及んでいた（図版27）。公家町成立期以前の桃山時代の遺構は極めて少ない。井戸Ｅ452・Ｅ459・Ｅ737の３基の井戸と公家町造成の整地などである。整地層からの出土遺物は平安時代から桃山時代まで幅広く、広汎な整地が行なわれたことが想像できるが、特筆すべき遺構はない。江戸時代前期では土取穴などを、江戸時代中期では土取穴、穴蔵、竈などを、江戸時代後期は能舞台、蔵、池などを検出したが、いずれの時代も屋敷の主要建物は残存していなかった。Ｌ区の調査区は中筋通の路面と側溝確認のため設定した調査区である。饗宴殿の基礎撹乱で路面は確認できなかったが、東側溝の掘形基底部を確認した。

（２）江戸時代前期

井戸Ｅ210（図版180）　調査区北寄り江戸時代中期の土壙Ｅ188の底で検出した。掘形約1.5mの円形である。石組は不整形の方形で自然石の小口を揃えている。内法は約0.8mあり、雑に積む。井筒内埋土と掘形から17世紀前半の遺物が出土した。

埋甕Ｅ43（図版174）　調査区中央北寄りで検出した。信楽の甕が据えられており、底部約10cmが残っていた。甕の底部内面には付着物があり、便槽として利用されたものと思われる。信楽の鉄釉甕、及び掘形の遺物から17世紀代のものである。

埋甕Ｅ89（図版174）　調査区中央西寄りで検出した。備前の甕の下半が残っていた。内面底部から体部にかけて付着物があり、便槽として利用されたものと思われる。残存する甕底部

からは時代を推定できないが、甕内部の埋土から、江戸時代前期の遺物が少量出土している。

埋甕Ｅ158（図版174）　調査区中央東寄りで検出した。口径約34cm、器高約37cmに復元できる丹波産の鉄釉甕が据えられていた。掘形が深く口縁端部まで残っていた。甕の年代観から17世紀末から18世紀前半である。

埋甕Ｅ68（図版174）　調査区中央南寄りで検出した。底部から20cmほどが残存する瓦質の甕が据えられていた。体部破片は甕内部に落ち込んでいたが、口縁部は見つからなかった。便槽として利用されたものと思われる。甕内の埋土から長さ約８cmの金製針が出土している（図版576－43)。共伴する肥前磁器片から17世紀代の遺構である。

埋甕Ｅ59（図版174）　調査区中央東寄りで検出した。信楽の鉄釉甕が据えられていた。北と西側の掘形が撹乱されており、底部から約15cmが残存する。甕の内側に体部が砕かれて落ち込んでいた。鉄釉陶器片が共伴しており、17世紀末以降の遺構である。

土壙Ｅ235　調査区中央西寄りで検出した。北東部は土壙Ｅ165に、北西部は土壙Ｅ280に大きく削られており、全体の平面形はわからないが、南北約８m以上、東西約７m以上の不定形の土壙である。埋土は炭化物や焼土を多く含む暗黄褐色砂泥で、火災整理土壙の様相を示している。最深部は検出面から約0.6mで、浅い擂鉢形をしている。出土遺物は周辺の遺構からの混入品があり時代幅があるが、概ね17世紀後半のもので占められる（図版401～405)。寛文元年もしくは寛文11年の火災整理土壙と思われる。

土壙Ｅ310　調査区南西部に連続する土取穴で、前期の宅地６内では南端部にあたる。北に隣接する土壙も同様の土取穴で、土取作業単位の違いで時期的な差ではない。規模は南北約６m、東西約８m、深さ約1.6mあり、連続する土取穴群では最大である。一連の土取穴は一様に埋戻されており、ごみ穴に利用された形跡はない。層序は上下に大きく分けられる。下層は地山の黄褐色粘土を多く含む黒褐色の比較的しまった埋土である。上層は大きなブロック単位の埋土で、地山砂礫が集中する層や炭や焼瓦の混じった層で構成されている。このような大規模な敷地内の土取作業は、火災などの災害後の全面的な屋敷再建に伴なうものと思われる。出土遺物は17世紀後半の様相を示している（図版399・400)。公家町周辺では寛文期に二度の火災記録があり、そのどちらかに伴なうものと思われる。

土壙Ｅ302・Ｅ315　調査区南西部で検出した連続する土取穴である。一辺約1.9mのほぼ正方形で、深さ約１mの土取穴が、３列で合計９箇所確認できた。西列の４基を土壙Ｅ315とし、中央列と東列を土壙Ｅ302とした。一つの土取穴が作業単位を表していると推定できる。ごみ穴に利用される事もなく一時に埋戻されており、出土遺物も少ない。土壙Ｅ302から17世紀後半代の遺物が出土した（図版406・407)。

集石Ｅ134（図版176）　調査区南東部で検出した。西側が撹乱されているが、一辺約２mの方形の平面形に復元できる。逆「凸」字状の土壙掘形で、内部には10～30cmの礫が無造作に投げ込まれている。下段の礫の間には泥土の堆積がみられ、雑排水処理の機能があったものと思われる。17世紀代の遺物が少量出土した。

石組土壙E371（図版176）　調査区南東部で検出した。直径約1.5mの円形石組土壙で、検出面から約1.1mで地山砂礫層の底になる。上部の石は抜取られているが、石組は6段残っており、花崗岩の切石を含む角ばった自然石が丁寧に積まれていた。井戸ではなく、用途は不明である。17世紀後半代の遺物が出土した。

（3）江戸時代中期

穴蔵E355（図版30・175）　調査区中央東端で検出した。最下段に花崗岩の切石による石組が残る穴蔵である。南北約3.5m、東は調査区外に延びるが、東西3.5m以上の規模である。深さは検出面から約2.4mある。H区調査の際、東端確認のために拡張したが、饗宴殿に伴なう撹乱に重なり不明であった。埋土のほとんどが天明大火の廃棄に伴なう焼土と瓦で占められている。周辺の遺構からの混入があったようで、17世紀から18世紀にかけて幅広い時代の遺物が出土した（図版407）。

竈E140（図版30・174）　調査区中央部で検出した。後世に撹乱されており残りが悪いが、馬蹄形の竈基底部をL字形に6箇所確認した。当初1～3の東西列の3連竈であったものを、4～6の南北方向の3連竈に作り替えられている。4、5、6の竈内径はそれぞれ65cm、50cm、50cmで、比較的残りの良かった5の竈の底部には、石材が敷詰められていた。出土遺物が少なく年代根拠に乏しい（図版407）。天明大火の整地層下であったことから、江戸時代中期の遺構である。

竈E185（図版30・174）　調査区中央北東寄りで検出した。北側は平瓦を立て、南側は花崗岩の切石で区画されている中に、2基の竈の基底部が残る。西側と東側が撹乱され、本来の規模は不明であるが、南北方向の竈施設範囲は約2.5mである。2基の竈は、レンガ状の角石を馬蹄形に組み、粘土を張付ける構造が良く残っていた。南側に開口するそれぞれの竈内壁は、非常によく焼しまっており、長期の使用期間がうかがえる。竈内埋土に含まれていた土師器皿はⅫ期新段階であり、江戸時代中期と推定できる（図版407）。

集石E257（図版176）　調査区北西部で検出した。上部が撹乱されており、検出面から約0.5mの深さしか残存していない。本来的な平面形は不明であるが、南北1.7m、東西1.6mの範囲で集石があり、石組などはみられない。排水施設と考えられる。出土遺物は18世紀代のものである。

集石E234（図版176）　調査区南寄り東壁際で検出した。南北約2.2m、東西約1.0mの長方形集石遺構で、深さは約0.6mである。底から検出面まで拳大の礫で埋められており、排水施設と考えられる。18世紀中頃以降の遺物が少量出土した。

集石E136（図版176）　集石E234の西側で検出した。直径約1.1mの掘形内に、直径約0.8mの円形に丸瓦を並べ、その中に拳大の礫を入れている。深さは約0.4mである。形状から雨落施設とみられる。他に出土遺物がなく遺構年代はよくわからないが、集石E234と関連する施設と思われる。

集石E430（図版176）　調査区中央、竈E185の北で検出した。約0.8mの方形の集石遺構で、

深さは約0.5mである。中にある石は30cmほどの大きなものが多い。竈E185の附帯施設かと思われるが、具体的な用途はよくわからない。

石組土壙E354（図版175）　調査区南寄りで検出した。掘形は約1.5mの円形で、掘形一杯に自然石を積む。石組はやや擂鉢状で、底部付近では内法約0.7mになる。底は地山の粘土層で止まっており、井戸の機能はなかったものと思われる。18世紀前半代の遺物が出土した。

土壙E45　宅地５・６の中央北寄りで検出したごみ穴で、東側の一部はH調査区の西壁で確認した。東西約８m、南北約５m、深さ約１mの規模である。上層は礫・瓦・陶磁器が多く混入する黒褐色泥砂、下層は褐灰色から灰黄褐色泥砂である。規模は大きいが、平坦な底の状態から、ごみ廃棄土壙であったと思われる。18世紀中頃から後半の遺物が出土している（図版６・333～338）。

土壙E76　宅地５・９で検出した火災整理土壙で、天明大火に伴なうものである。南北約10m、東西約６m、深さ約１mの不定形で明確な掘形はない。埋土はほとんどが焼土と瓦で、宅地５・６の南西部に広がる広範囲な整地層と一連である。出土遺物は瓦類がほとんどであったが、18世紀前半から後半までの幅広い年代の陶磁器も多く含んでおり、二次的に火を受けたものも多い（図版418～422）。

土壙E265　宅地５・６で検出した火災整理土壙で、天明大火に伴なうものである。南北約3.5m、東西約４m、深さ約１mの方形で比較的明確な掘形である。多量の瓦と焼土・炭を含んでいる。この焼土層は、土壙E76や明和八年銘の棟端瓦が出土した土壙E268などの埋土とともに、宅地５・６の敷地西側全体に広がる広範囲な整地層と一連である。出土遺物は瓦類がほとんどであるが、17世紀後半から18世紀後半までの幅広い年代の陶磁器も多く含んでいる（図版413）。

土壙E297　調査区のほぼ中央で検出した。東側を撹乱され、土壙の全容はわからないが、残存範囲では南北約2.7m、東西約1.6m、深さ約1.0mある。出土遺物はさほど多くなく、土壙規模も小さいことから、短期間使用されたごみ穴と考えられる。18世紀中頃の遺物が出土している（図版417）。

土壙E188　調査区の北東部で検出した。南北約８m、東西約６m、深さ約1.2mの不定形の土壙で、土取穴であろう。大規模な土壙であるが下層に先行する遺構があり、地山の粘土層も薄く、実際には土取に適さなかったものと思われる。18世紀中頃を主体とする遺物が出土した（図版414～417）。

土壙E211　調査区北壁際で検出した。北側の一部が調査区外に延びるが、南北約6.5m、東西約6.0mの不定形土壙に復元できる。土壙内には３箇所の窪みがある。土取穴を利用したごみ穴と判断した。18世紀前半を主体とする遺物組成であるが、時代幅があり、ごみ穴として利用された期間が長いものと思われる（図版408～412）。

（４）江戸時代後期

能舞台Ｅ2664（図版28・179）　調査区中央南寄りで検出した。関連する遺構は、斜めに据えられた埋甕７基、土壙、集石、柱穴、溝などである（図13)。埋甕Ｅ33とＥ38は土壙Ｅ64を挟んで向かい合い、埋甕Ｅ34・Ｅ37は土壙Ｅ64の中心に向いている。また、埋甕Ｅ155も土壙Ｅ64の中心に向いており、埋甕Ｅ23とＥ74は向かい合って設置されている。土壙Ｅ64や７基の埋甕が、能舞台床下の反響装置と推定されたことから、既存の能舞台を参考にして上部構造を復元した。本舞台は埋甕Ｅ33・Ｅ38を結ぶ中心線から京間３間四方、後座1.5間で復元し、橋掛りは埋甕Ｅ23、Ｅ74、Ｅ155を手掛かりに、本舞台東側平行に想定した。集石Ｅ86とＥ102は雨落排水施設とした。ただ、建物に伴なう礎石類は検出されず、比較的掘削深がある遺構のみ残存していたため、上記の復元は推測の域を出ない。また、池Ｅ25と能舞台に時期差がないため、同時期に存在していたと考えられる。従って、通常の能舞台のように後座後方に延びる橋掛りを

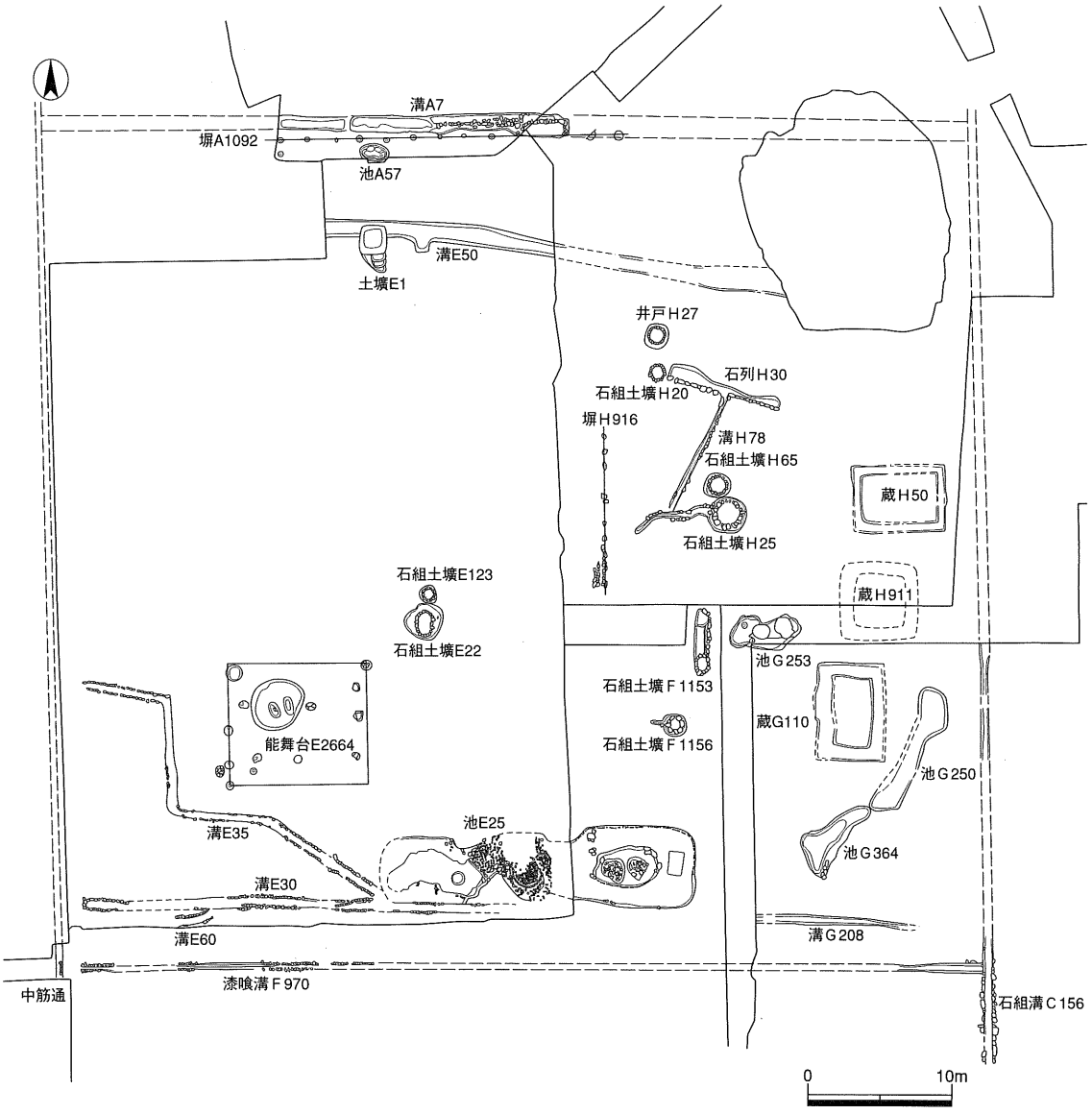


図12　江戸時代後期宅地５・６遺構配置図

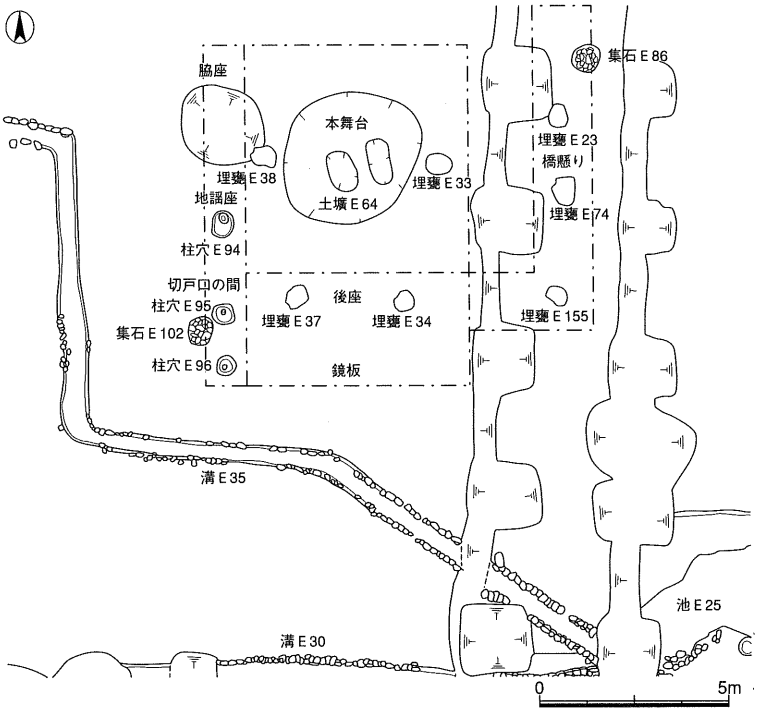


図13　能舞台推定復元図

設けることは困難である。南に屈曲する溝E35と後座との間に一ノ松・二ノ松などを見立てるものがあった可能性を考えた。能舞台は江戸時代を通して、屋外の独立建物であることから、屋敷地の前庭部分を舞台北側の見所に該当する空間地と想定した。各遺構は天明大火の整地層上に成立しており、土壙E64出土遺物が19世紀前半代であることなどから、18世紀末から19世紀前半の遺構である。

池E25（図版29・34・201）　E区とF区で検出した池で、南北約5.0m、東西約20mの規模がある。中筋通側溝につながる屋敷内溝E35から導水されていた可能性があるが、饗宴殿の基礎により撹乱されており不明である。E区では漆喰で作られた高さ0.1mの堰によって、池の構造が二つの部分に分けられる。西半は底部を漆喰張りし、周縁部に景石をめぐらしており、南側に一部景石が残っていた。鉄釉甕が一箇所汀に据えられており、植物を植えていたと思われる。中央部には漆喰で構築した円形の凹部がある。東半は拳大の玉石を敷詰めた構造になっており、高低差から西半から堰を越えた水が、西から東へ流れる構造になっていたと推定できる。東半部にも漆喰張りの周縁に玉石を張った円形凹部があり、水が滞留する構造である。F区では池は中島をもつ構造になり、池の周縁は竹杭を隙間なく打ち込んで護岸する。中島には2箇所に土壙があり、東側の土壙は集石土壙であった。この2つの土壙は、植栽痕か灯籠のような重量物の据付穴と思われる。中島北西部の池底には上面が平坦な石が3石残っており、飛石を形成していた。池の東には南北約1.7m、東西約1.1m、深さ約0.5mの内側に長方形の漆喰枡が作られている。枡の側面から石が不規則に出張る特殊な構造であるが、具体的な用途を想定できない。F区の池の幅やE区の玉石部に、部分的な作り替えが確認できる。出土遺物は幕末期のものが主体であった（図版422・442）。天明大火整地層の上で検出されていることを考慮すると、18世紀後半以降、公家屋敷廃絶期まで機能していた池であるといえる。なお、排水施設は不明である。

石組土壙E22（図版30・180）　調査区中央で検出した。掘形は約2.5mの円形であるが、石組は南北約2.0m、東西約1.2mの楕円形である。深さは約1.8mで地山砂礫層まで達しており、検出面から約0.3mで石組を検出した。特異な形状であるが、雑排水施設と思われる。19世紀前半の出土遺物がある。

石組土壙Ｅ123（図版176）　石組土壙Ｅ22の北側で検出した円形石組土壙である。石組土壙Ｅ22と同じく、花崗岩の切石で構成されている。石組は約１m残り、底は石組の途切れたところから約0.2m掘下げられており、地山砂礫層に達している。出土遺物から石組土壙Ｅ22とほぼ同時期に構築されたものである。

石組土壙Ｅ345（図版180）　石組土壙Ｅ22の東側で検出した直径約1.0mの円形石組である。石組は５段残り、約0.7mの深さである。遺構の周辺は饗宴殿関連施設の撹乱が深く、関係はよくわからないが上記の石組土壙Ｅ22・Ｅ123と関連する遺構と推定される。

集石Ｅ70（図版180）　調査区の中央、能舞台の北で検出した。浅く不定形な平面形で、上面には比較的大きな石の平坦面が揃えられていた。能舞台のキザハシ（正面の階段）に関連する遺構の可能性もあるが、根拠に乏しく不明である。19世紀代の遺物が出土している。

集石Ｅ３（図版180）　調査区北寄りで検出した。南北約1.0m、東西約0.7mの長方形の集石遺構である。深さは約0.5mで、集石は、長軸を立てて埋め込まれている。縦方向の石組意図がわからず用途も不明である。19世紀中頃の遺物が出土している。

集石Ｅ203（図版176）　調査区北寄りで検出した集石遺構で、約0.8mの円形掘形内部には拳大の石が詰まっている。深さは約0.3mで、小型の集石である。19世紀代の遺物が出土している。

土壙Ｅ48　調査区北東部、グランド整地層直下で検出した。東西約2.5m、南北約2.0m、深さ約0.3mの不定形の土壙である。幕末期のごみ穴、もしくは公家屋敷廃絶に伴なう廃棄土壙である。「安政三年」銘の陶器製の行平が出土している（図版427)。

溝Ｅ50　調査区北端のグランド整地層直下で検出した東西溝である。幅約1.2m、深さ約0.4mである。溝底は東へわずかに下がっており、西端と東端では５cmの高低差がある。西は調査区外に延びるが、東側はＨ区の調査で続きを検出している。水の流れていた痕跡は確認できず、黒褐色砂泥で埋戻されている。出土遺物は少なく、19世紀中頃のものが主体である（図版426)。

石組土壙Ｅ12（図版30・175）　花崗岩の切石で積まれた円形石組土壙である。石組の内径は約1.1m、深さは検出面から約1.0mである。地山の砂礫を掘り込んでいるが、井戸としての機能はなく、雑排水施設のようなものであろう。天明大火整地層の上から掘り込まれており、18世紀後半の比較的一括性の高い遺物が出土している（図版425)。

溝Ｅ30（図版28・178）　調査区南端で検出した石組溝である。内法は約0.5m、深さは平均0.1mである。西側は饗宴殿の基礎で壊されており不明であるが、中筋通の東側溝まで通じていたと思われる。東側は削平されており、Ｆ区調査の際には検出できなかった。Ｇ区ではこの溝の延長線上に溝Ｇ208が検出されており、二階町通西側溝まで通じていたものと推定される。西側は部分的に石組が作り替えられており、この部分を溝Ｅ60とした。天明大火整地層の上層にあり、天明大火以降の宅地５・６の宅地境に関連する遺構である。西から東に若干の高低差があり、中筋通から二階町通へ通水していたと思われる。

土壙Ｅ１（図版175）　調査区北張出し部で検出した。南側に２段の階段状の削出し部があり、土壙規模は南北約2.0m、東西約1.8mの長方形で、深さは約1.7mである。内側の壁面が赤く焼け

ている。19世紀代の遺構である溝Ｅ50を壊して構築されており、ほぼ幕末期に限定できる遺構である。明治初年の公園化の際に、廃材などを焼却する穴であった可能性が高い。

溝Ｌ２　Ｌ区は中筋通路面の確認を目的に設定したが、饗宴殿の基礎が深く、路面は削平されており残っていなかった。しかし、東側溝の掘形と考えられる溝Ｌ２が検出された。石組などはみられなかったが、出土遺物は18世紀から19世紀のものであり、江戸時代中期から後期の遺構である。

第６節　Ｆ区（図版32～39・181～201）

（１）概要

調査区は饗宴場跡グランドの南西部にあたり、南北39.0m、東西45.5mの区画と、北東部に南北約19mの張出し区画を設定した。また調査範囲外であったが、中筋通の路面確認のため西側に２箇所の拡張区を設けた。調査区の南側は一部大径木保護のため範囲を狭めた。

調査区の西側半分は、饗宴殿の基礎と整地に伴なう撹乱で、江戸時代中期から後期の建物に関する遺構は検出できなかったが、江戸時代前期の建物遺構は比較的良好に残っていた。

（２）桃山時代

土壙Ｆ1605　Ｆ区の北東隅で検出した土壙である。東側は幕末期の土壙Ｆ1153などに壊され、また北側は調査区外であったため全容はつかめない。残存規模は東西約８m、南北約３m、深さ約1.2mである。土壙上面を覆う砂礫を多く混入した層は、周囲の層序から公家町成立時の整地層と考えられることから、土壙は公家町建設に先行する遺構と判断した。埋土は黒褐色もしくは暗褐色の砂泥で、多量の炭が混じっていた。16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土したが、土壙規模の割には出土遺物は少ない。この付近の公家町成立の時期を決定する重要な遺物といえる（図版１・297～299）。

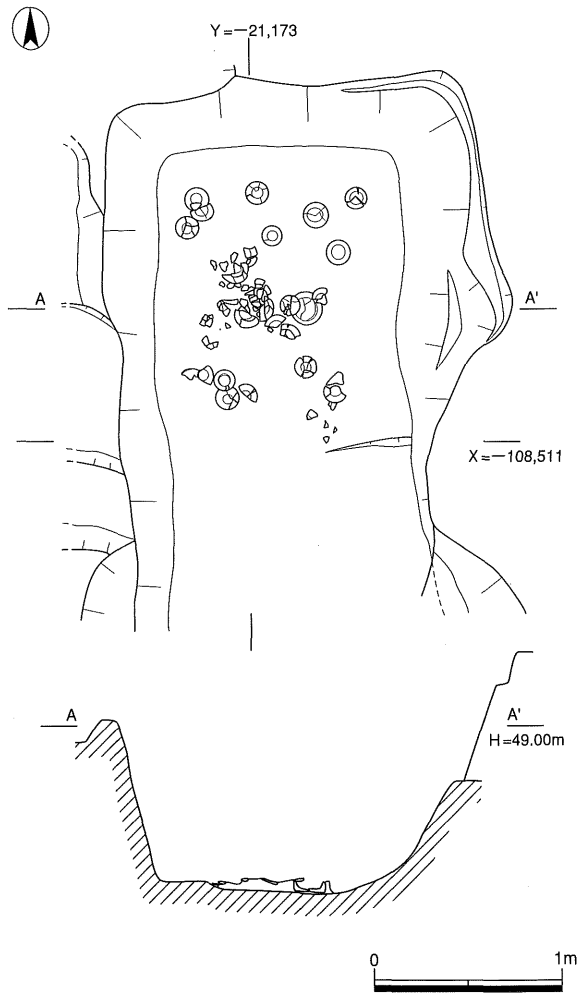


図14　Ｆ区土壙Ｆ2200平面図

埋納土壙Ｆ2390（図版39・195）　調査区中央部で検出した。直径約0.8m、深

さ約0.15mの円形土壙である。土壙内のやや西寄りに、平坦面を上にした自然石9個を3個ずつ3列に据え、その上から完形の土師器皿45枚が出土した。土師器皿はすべてが正位置を保っていなかったが、それぞれの石の上に5枚ずつ重ねられた状態を復元できる。検出位置が富小路通上にあり、公家町建設に伴なって富小路通を廃絶するため、何らかの祭祀が行なわれたことを示しているが、他の遺物は出土していない。土師器皿はXI期古段階のものであり、16世紀末から17世紀初頭のものである（図版430）。

土壙F2200　調査区中央西寄りで検出した。南側を井戸F1385により撹乱される。南北約2.7m以上、東西約2.0m、深さ約0.8mの長方形土壙である（図14）。完形の土師器皿などが底に貼付くように出土している（図版430）。16世紀末から17世紀初頭の公家町建設以前の遺構である。

埋納土壙F2383（図版39・195）　調査区中央西寄りで検出した。直径約0.4mのほぼ円形で、深さは約0.2mである。土師器の皿を4ないし5枚ずつ重ね、合計24枚が埋納されていた。土師器皿以外の出土遺物はない。土師器皿の年代はXI期中段階である。公家町建設に関わる何らかの祭祀遺構と思われる（図版430）。

土壙F1779　調査区南端東寄りで検出した。西側が一部調査区外で平面形は不定形である。最深部は約0.6mある。公家町建設に伴なって部分的に整地された窪みと考えられる。16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した（図版431）。

土壙F2020・F2028　調査区南西隅の拡張区で検出した。中筋通の路面下の土壙で、公家町建設に先行する土壙と考えられる（図15）。幅1.5mの拡張区のため遺構の平面形などは不明である。出土遺物が少なく図示していないが、16世紀末から17世紀初頭の肥前陶器や焼塩壷片が含まれており、路面成立時期を限定する遺物である。

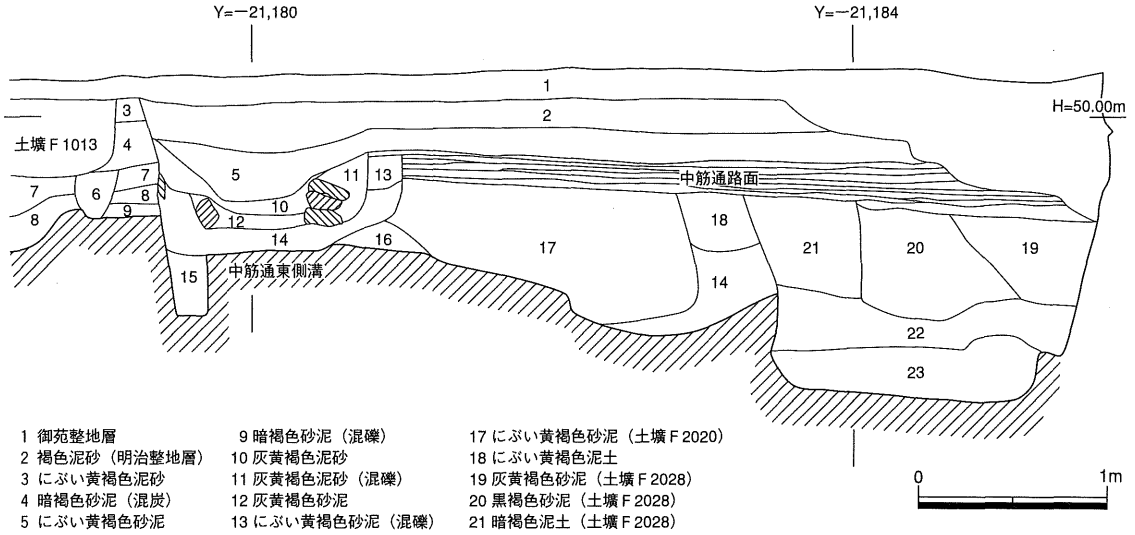


図15　中筋通路面断面図

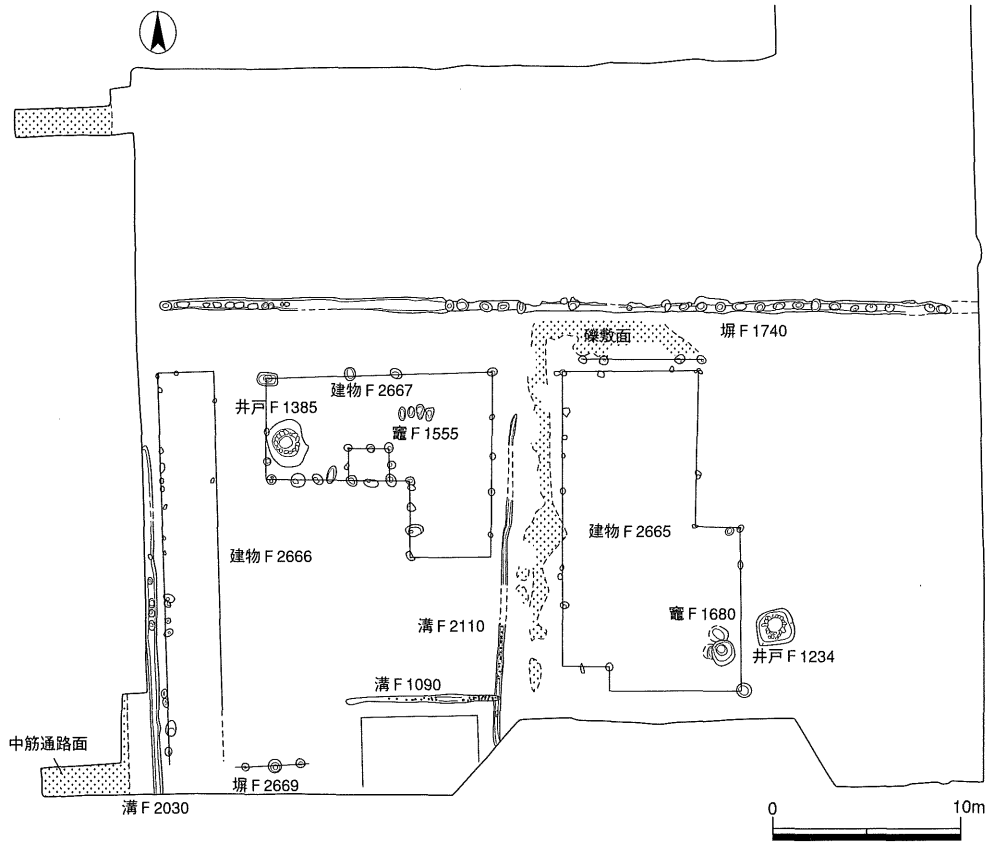


図16　江戸時代前期宅地７建物遺構配置図

（３）江戸時代前期

建物Ｆ2665（図版37・191）　調査区の中央で検出した、宅地７の中心的な建物遺構である。礎石列などから南北約17m、東西約9.5mに復元した。北側と西側にＬ字状の礫敷整地面があり、屋敷内通路と考えられた。建物はいくつかの区画に分割できると思われるが、残存する礎石からは復元できなかった。建物に付属する施設には、北側に東西方向の塀Ｆ1740、竈Ｆ1680、井戸Ｆ1234などが想定できる。

竈Ｆ1680（図版195）　建物Ｆ2665内南東隅で検出した。竈本体は残っていないが、馬蹄形の焼土分布範囲から２連の竈が想定できる。遺物は出土していない。

集石Ｆ2396（図版195）　調査区中央の礫敷面上で検出した。直径約0.5mの円形集石遺構である。周囲を比較的大きな石や瓦がめぐり、その内側には拳大の石が詰まる。位置からみて建物Ｆ2665の雨落施設の可能性が高い。時期のわかる遺物は出土していない。

建物Ｆ2666（図版38・192）　調査区の西部で検出した。南北21m以上、東西約3.0mの南北建物である。建物内には土間が部分的に残る。建物の中央付近に土壙Ｆ1031・Ｆ1039・Ｆ1094からなる掘立柱の門があり、中筋通に面する長屋建物と考えた。中筋通に面する西側の柱列の残りが良く、門から南が掘立柱列、北側が礎石列である。柱列の違いは、時期差によるものか、構造によるものか不明だが、一連の建物として復元した。

埋甕Ｆ1582　建物Ｆ2666の西側柱列南寄りで検出した。瓦質土器の甕を据えている。残りが悪く、底部から20cm程度が残存していた。道路側から汲取りできる位置に設置された便槽であ

る。建物F2666の付属施設である。瓦質土器甕は、17世紀代のものである。

建物F2667（図版38・193）　建物F2665と建物F2666の間にある掘立柱建物で、南北約10m、東西約12mのL字状に復元した。南面に2間四方の区画がある。建物内に竈F1555、井戸F1385があり、台所のような建物が想定できる。

竈F1555（図版193）　調査区中央西寄りで検出した。東西両端が撹乱される6連の竈である。それぞれの竈は残存状況が悪く、基底部のみ検出した。中央4基の内法は東からそれぞれ0.45m、0.4m、0.4m、0.4mである。両端の竈の規模は不明であるが、東端の竈は他のものより、一回り大きいものであった可能性がある。竈本体の粘土層から、17世紀前半の遺物が出土している（図版431）。

土壙F2208（図版193）　竈F1555の南で検出した。南北約0.7m、東西約1.5mの長方形土壙で、深さは約1.0mである。南面する竈焚き口前の土間状の床面を掘り込んでいる。薪炭類の貯蔵施設である可能性が高い。土壙内の出土遺物は少ないが、遺物の年代は17世紀前半代である（図版431）。

井戸F1385（図版199）　建物F2667内で検出した石組井戸である。掘形は南北約2.5m、東西約2.0mの楕円形を呈し、石組の内法は約1.0mである。石組は約40cm角の大型の自然石が多く、堅牢に組まれている。約2mの深さで掘下げを中止した。石組掘形からの出土遺物から、17世紀前半のものである。

溝F1090　調査区中央南寄りで検出した。長さ約8.5m、幅約0.3mの東西溝で、溝内には5～10cmの礫が敷詰められており、雨落溝と推定できる。建物本体は、溝F1090の南側に想定できるが、礎石や柱穴は検出していない。17世紀代の土師器皿片が少量出土した。

塀F2671（図版198）　調査区中央で検出した東西柱穴列で、30基の柱穴を確認した。南側を一時期新しい塀F1740が重なる。西側は撹乱や塀F1740との重複で不明であるが、柱痕跡の残る部分では、柱間はほぼ1mである。柱穴で礎石のあるものはない。最初に設置された宅地境施設である。

塀F1740（図版190）　調査区中央で検出した布堀柱列で、中筋通からF区・G区を経て背割溝である溝G1983まで続く。塀F2671に後続する宅地境施設である。柱穴の重なりから2時期の柱列が確認できたが、新期の柱には礎石のあるものが多い。江戸時代前期を通して何度も修復されていたものと思われる。17世紀代の遺物が少量出土している。

塀F2670　塀F1740から北へ約3mの地点で検出した東西柱穴列である。柱間は1m程度のものが多く、柱穴の規模にばらつきがある。宅地境施設ではなく宅地6内の施設と考えた。

溝F2030（図版38・198）　江戸時代前期の中筋通東側溝である。掘形の幅は本来1.3mほどであったと考えられるが、西肩は江戸時代中期以降の中筋通東側溝により壊されている（図15）。深さは約1.5mである。石組などの痕跡はなく、素掘溝であった可能性が高い。埋土からの出土遺物は、17世紀代のものである。

塀F2669（図版196）　調査区南西隅で検出した3基の柱穴列で、それぞれの柱穴には礎石

がある。中央の柱穴規模が約0.35mと一回り大きい。南壁際を中心に他の柱穴を精査したが、検出できなかった。建物の柱列ではなく宅地内の区画施設と推定した。

池Ｆ1685（図版39・194）　調査区北張出し部で検出した。南側を土壙Ｆ1475に壊され、全体形は不明である。東側は調査区外に延びるため、調査終了後に範囲確認のために補足調査をした。南北約3.0m以上、東西約7.5mに復元できる。池の底は厚さ約10cmの黄褐色粘土が全面に張付けられており、最も深い所で約0.2mである。池の中央付近に石仏が倒れ込んでおり、その下に埋甕Ｆ2210とした丹波産の甕が据えられていた。甕には水生植物などが植えられていたと思われ、石仏とともに池の景色とされたものと考えられる。池の埋土からは出土遺物が少ないが、池Ｆ1685を壊す土壙Ｆ1475が1670年代から80年代であることから、それ以前の宅地６の施設である。

井戸Ｆ1799（図版199）　調査区北東寄りで検出した石組井戸である。掘形は約1.9mの円形で、石組の内法は約0.9mである。長軸30cmほどの自然石の小口を揃えて積まれている。石組が不安定なため1.7m付近で掘下げを中止した。17世紀前半代の遺物が埋土から出土した。

土壙Ｆ1980（図版195）　調査区中央の東寄りで検出した。南北約1.1m、東西約2.0m、深さ約1.0mの長方形土壙である。土壙上層はほとんど遺物を含まない暗褐色砂泥層であったが、中層部に完形の土師器皿が正位置で集中していた（図版430）。土師器集中層より下は有機質の黒色泥土であった。便所遺構と推定した。土師器類は便所の廃棄に伴なうもので、17世紀前半のものである。

土壙Ｆ1432　調査区東南部で検出した宅地７のごみ穴である。南北約5.0m、東西2.0m以上、深さ約1.5mあり、東側はＧ区との境で未調査であるが、平面形は長方形に復元できる。整った形状や堆積状況から、当初からごみ穴として掘られたものである。土壙上部約0.6mは土壙Ｆ1427とした焼土、炭、瓦などを大量に含んだ火災整理土壙で覆われ、土壙Ｆ1432の肩を壊している（図17）。土壙Ｆ1427に含まれる陶磁器・土師器類は、寛文期の火災に伴なうものと考えられる。土壙Ｆ1432の土師器や肥前磁器などの様相から、1650年代の前半を中心としたごみ穴と

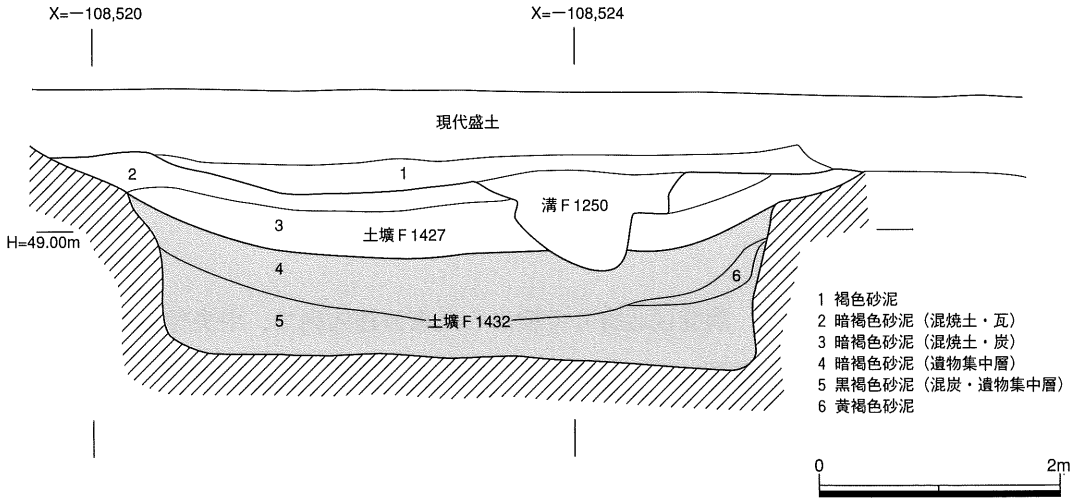


図17　Ｆ区土壙Ｆ1432断面図

推定される（図版303～305）。

土壙F1455　調査区北西部で検出した宅地6のごみ穴である。南半は19世紀代の土壙F1400により大きく壊され、西側も明治初頭の公家町解体に伴なう廃棄土壙に壊されるため全容はわからない。残存規模は、東西約4.0m、南北約6.0m、深さ約1.0mである。下層の黒褐色泥土約0.3mにほとんどの遺物が集中していた。土壙最上部には、宝永大火後の薄い整地層が残り、上層と中層は土壙埋土沈下に応じた埋め土である。17世紀後半の遺物が出土している（図版315～319）。

穴蔵F1475　調査区北東の宅地6の範囲で検出した。穴蔵をごみ穴に利用したものである。池F1685を取り壊して作られており、西北部に地山を削り出した階段部が7段残っている。地下室部分は南北約3.0m、東西4m以上、深さ約2.7mである。東側が調査区外に延びているため、正確な土壙規模はよくわからない。階段や壁面部に石材などは検出されていない。またごみ穴として機能したのは、断面の堆積状況から底部1m位までと考えらる。多量の炭や土師器主体の土器・陶磁器類を含む暗褐色砂泥が、レンズ状に堆積していた。中層部には焼瓦と焼土が約1mの厚さで堆積しており、宝永大火の廃棄土壙と推定される。また、上層には比較的均一な灰黄褐色砂泥層が小礫混じりで堆積している。出土遺物は1670年代から80年代が中心である（図版432～435）。

土壙F1244　調査区の東南隅で検出した宅地7のごみ穴である。南端部が調査区外に延びていたが、拡張したところ壁面から20cmほどで立上がることが確認できた。東西約2.0m、南北約4.0m、深さ約0.7mである。ごみ穴としては小規模である。出土遺物は土師器皿を主体として、一括性が高く1680年代の様相を示す（図版320～322）。土壙F1432、穴蔵F1387とあわせて17世紀代の陶磁器組成の変遷を知る資料である。

穴蔵F1387（図版196）　調査区南東部で検出した穴蔵で、ごみ穴に利用されたものである。北側に6段の削り出しの階段部が残存していたが、石組や木材の痕跡などは残っていない。井戸F1275と井戸F1331に壊されており、土壙西側や東側の一部の平面形はわからないが、規模は南北約5.0m、東西約2.5m、深さ約1.4mである。埋土は上層約0.5mが、無遺物の黄褐色砂層である。中層から底部までは、遺物整理箱で120箱を超える土師器皿主体の土器・陶磁器類で埋め尽くされていた。遺物の年代は17世紀末から18世紀初頭で、土壙規模も小さく、この時期の良好な一括遺物といえる（図版323～326）。宅地7のごみ穴は、土壙F1244から穴蔵F1387へと変遷することが想定される。

（4）江戸時代中期

塀F2668（図版36・196）　調査区北寄りで検出した東西柱穴列で、中央付近は2時期が確認できる。合計30基の柱穴を確認しており、柱穴の規模は約0.4mの円形で、約0.2mの柱痕跡のものが多く、柱間は約1.2mである。西側は削平されているが、中筋通まで延びていたものと思われる。東側は柱穴の掘形が浅くなり、調査区内で途切れる。出土遺物は少なく、時期は不明であるが、宝永大火以後の新たな宅地境施設である。

溝Ｆ1250（図版36・197）　調査区南東部を斜めに横切る瓦積溝で、北に行くほど浅くなり消滅する。溝の掘形は約0.8mで、溝の内法は約20cmである。平瓦を利用して面を揃えているが、調査区の東壁際では、長さ約50cmの花崗岩の切石積になり、溝の深さも0.5mを超える。調査区の東壁内に延びるため、調査終了後に確認のため拡張したが、大きく撹乱され不明であった。溝内埋土に出土遺物が少なく、時期は不明であるが、検出層位などから、江戸時代中期の遺構と考えた。

井戸Ｆ950　調査区中央西側で検出した。掘形は長径約2.3m、短径約2.1mのほぼ円形である。検出面から約２mで、安全確保のため掘下げを中止した。掘下げた範囲内では石組はないが石組井戸と思われる。かなりの深さまで石材は抜取られていたと思われる。18世紀初頭を中心とした遺物が出土している（図版436・437）。

石組土壙Ｆ1315（図版36・200）　調査区中央北寄りで検出した石組土壙である。掘形は約1.4mの円形で、内側に石組がある。石組は２段残存してしており、深さは約0.3mである。西側に、ほぼ同時期の排水遺構と考える集石土壙があり、一対で何らかの水回りの遺構と推定される。本遺構のような浅い石組土壙は、調査区内に比較的多く、いずれも用途を特定しづらい。18世紀前半の遺物が出土している。

（５）江戸時代後期

溝Ｆ1392（図版200）　２つの西拡張区で検出した中筋通の東側溝である。北拡張区では饗宴殿の基礎のため石組は残っておらず、掘形の検出に留まった。南拡張区では石組が残っていた。道路側の石組が良く残っており、20cm程度の切石が３段残っていた。溝内は19世紀中頃の遺物を含み、公家町廃絶期まで残っていたものである（図版441）。

漆喰溝Ｆ970（図版35・200）　塀Ｆ2668のやや南で検出した。塀Ｆ2668に後続する宅地境に関連する石組溝である。石組の崩れた中央部を漆喰で補修している。溝幅は内法で約0.2mで、西に向かう緩い傾斜があり、中筋通の側溝に排水していたものと思われる。東側は調査区の中央付近で削平されており不明である。19世紀中頃の遺物が出土している。

井戸Ｆ1275（図版36・199）　調査区南東寄りで検出した。重機掘削の際、井戸を塞ぐ３石の蓋石を検出しており、蓋石の内部は空洞で残っていた。掘形は約1.1mの円形で、石組の内法は約0.6mと狭い。石材は小型の切石が主で、隙間に瓦を詰めている。掘形が狭く約1.3mで掘下げを中止した。19世紀前半代の出土遺物がある。

石組土壙Ｆ1496（図版199）　Ｆ区池Ｅ25の北辺下で検出した。掘形は約1.3mで、底から約0.6mまでが石組である。上層約0.6mを瓦が混じった礫が詰まり、その下が石組になっている。石組内も上層と同じく瓦混じりの礫が多く、排水施設である可能性が高い。18世紀後半代の遺物が出土している。

集石Ｆ1060（図版199）　調査区南西寄りで検出した集石土壙である。南北約1.2m、東西約2.2mの菱形の平面形で、深さは約0.6mである。10～30cmの大きさの礫が詰まり、上層には石灯籠の笠が落込んでいた。用途不明の遺構である。遺構年代を示す遺物が出土しておらず時期は

不明であるが、江戸時代後期である。

集石F2195（図版195）　南壁沿いの拡幅部で検出した。南は調査区外に延び平面形は不明である。南北約0.8m、東西約1.1mの範囲で、深さは約0.5mである。土壙内は10～20cmの大きさの礫が詰まる。用途不明の遺構である。19世紀前半代の遺物が出土した。

土壙F1159（図版36・200）　調査区北張出し部で検出した。掘形は約1mの円形で、深さは約0.3mある。内部は瓦を差込むように立て、隙間を礫で詰める雨落施設とみられるが、周辺に建物遺構を検出できていない。18世紀末の遺物が出土している。

漆喰敷F1268（図版199）　調査区中央東寄りで検出した。南北約1.2m、東西約2.4mの長方形の範囲に、厚さ約5cm程度の漆喰を施す。中央には直径約0.4m、深さ0.4mの窪んだ部分があり、底のない信楽の甕が据えられている。長軸方向中央の両端に小穴が穿たれ、南辺部にも2箇所の小穴がある。用途は不明である。なお本遺構の北、約14m付近にある土壙F1249も同様の遺構である。信楽の甕は18世紀後半以降のものである。

石組土壙F980（図版200）　調査区中央西寄りで検出した石組土壙である。掘形は約1.1mの円形で、深さは約0.35mである。石組は30cm程度のものを1段、立組にしている。石の上面の高さが揃っており、当初から1段であった可能性もある。用途を特定できない。

井戸F1280　調査区中央部東側で検出した。瓦組で、平瓦風の瓦の凹面を内側に向けて組む（図版566）。一段を11枚で組み、直径は約0.9mに復元できる。井戸枠検出面から約2mで、安全確保のため掘下げを中止した。井筒内からは桟瓦を中心に19世紀前半の遺物が出土している。

土壙F1265　調査区中央北部で検出した。西側が饗宴殿関連の撹乱で壊されており、全容は不明であるが、残存範囲では、南北約4.5m、東西約6.5m、深さ約0.9mである。埋土は大量の焼瓦と焼土が中心である。周辺には天明大火後の整地層が広く覆っており、天明大火に伴なう大型の廃棄土壙と考えられる。出土遺物は18世紀後半のものが主体である。一部18世紀末頃の遺物が含まれるが、天明大火整地層より上に暗褐色泥土がレンズ状に堆積しており、窪んだところを二次的に埋め戻す際に混入したものと思われる（図版437～439）。

土壙F1400　調査区西側の宅地7敷地北端で検出した、一辺約2.0mの方形土壙である。深さは約0.5mある。宅地境の漆喰溝F970に沿うように掘られている。小規模なごみ穴である。19世紀前半から中頃の遺物が出土している（図版440・441）。

石組土壙F1153・石組土壙F1386（図版35・200）　調査区北張出し部で検出した。石組土壙F1153は調査区外に延びるため、北東部を2m拡張した。幅0.6m、長さ2.3mの隅丸長方形をした漆喰枡の片側を踏石状の石列が並ぶ。石組土壙F1386は、石組土壙F1153の南側に取付く直径約1.5m、深さ約1.5mの石組土壙である。石組土壙F1386の埋土は、黒色の有機質を多量に含む泥土層である。出土遺物は19世紀中頃のものである。同志社大学のアメリカ人教師J・D・デイヴィス邸時代に使用されていた施設の可能性がある。石組土壙F1386は便槽、石組土壙F1153は小便用施設と見なし、全体を便所遺構と考えた。

第7節　G区（図版40～56・202～252）

（1）概要

C区の南、F区の東にそれぞれ接する。平面形は南で東に屈曲する鍵型の最も面積の広い調査区である。饗宴殿の基礎跡や関連の配管などの施設により東西南北に撹乱溝が走る。また北西部には饗宴殿の解体に伴なう大規模な撹乱坑がある。樹木の抜取穴も多く認められる。C区で検出した堀、溝、路面などの延長部や公家屋敷の宅地境の施設を検出することを主眼とした。

桃山時代には、西側に大規模な南北方向の堀G1940がある。また東側には南北方向の堀G1195Bがある。この部分には、南北に長い形状の池や井戸、土壙などがある。また、堀G1195Bのさらに東側にも、土壙などが認められる。江戸時代前期には、街路と宅地内に関係する遺構がある。調査区の東端付近には、南北方向の道路と溝G1195と溝R150がある。溝G1195は堀G1195Bの上部にあたり、この時期まで存続したものである。溝R150は、17世紀後半の道路西側溝である。この道路の西側には、石組の背割溝G1983を境にして2列に宅地が並ぶ。東側の宅地内では、公家屋敷の境界に想定できる施設を確認した。塀G3739、塀G3741、塀G3743があり、これによって4つの宅地に分割できる。宅地内には井戸、穴蔵、土壙、池、溝などが認められる。西側の宅地では、石列G3689と塀F1470があり、これによって2つの宅地に分割できる。宅地内には井戸、穴蔵、土壙、池、溝などが認められる。江戸時代中期には、調査区の中央に、石組の側溝をもつ道路が南北に通る。この道路の東西に宅地が配置される。また、北端には東西方向の路面とその南側溝がある。道路東側の宅地境の遺構には塀G3746、塀G3747があり、これにより3つの宅地に分けられる。宅地内には井戸、穴蔵、土壙、溝などが認められる。道路西側溝の西側には塀G3748、塀G3749がある。これらは側溝に直交する柱穴列であり、宅地境と考えられる。宅地内には建物、井戸、穴蔵、土壙、溝などが認められる。江戸時代後期には、中央に、中期と同様に石組の側溝をもつ道路が南北に通る。側溝は、東側溝C10、西側溝C156である。この東西両側に宅地が配置される。道路東側の宅地境の遺構には集石G370と石列G485があり、これにより3つの宅地に分けられる。宅地内には井戸、穴蔵、土壙、池、溝などが認められる。道路西側溝C156の西側には、宅地境の施設とみられる石列G650と溝G276があり、これによって2つの宅地に分割できる。宅地内には井戸、穴蔵、土壙、池、溝などが認められる。

（2）桃山時代

堀G1195B　東部で検出した南北方向の堀である。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約91m、幅は0.9m以上ある。深さは約1.6mを復元する。断面形がV字形を呈し、底部は深く非常に狭い（図18）。埋土は褐色泥砂が主体で、XI期古段階の土師器皿が出土した（図版538）。

池G2180（図版56・218）　北東部で検出した。西側を近代以降の配管により撹乱され、南側は江戸時代の遺構により壊される。平面形は不定形の溝状で、検出分の長さが南北20m以上で、東西の最大幅が1.8m以上である。最も深い部分は検出面より0.7mである。北端部が東側で

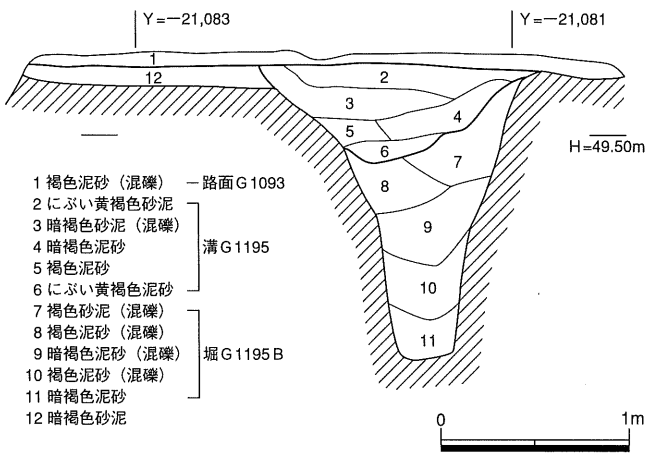


図18　G区堀G1195B・溝G1195・路面断面図

堀G1195Bと接続している。北側には長軸1.4m、短軸1.0mの黄灰色チャート質の景石がある。この景石は根固めに小石を使い、長軸を東西方向にして、南側に傾けて据えられている。北部から中央にかけての部分は底部が浅く、緩やかに蛇行するとみられる。中央から南側はやや幅広くなり、底部も更に深くなる。この部分の土層はレンズ状の堆積をしていたことが確認できた。東側は江戸時代前期の溝G1195が西側に拡幅したことにより壊された。南端は江戸期の遺構により壊されて不明であるが、堀G1195Bと再度接続するとみられる。水を堀G1195Bから引込む構造とみられる。埋土は暗褐色泥土が主体である。16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した（図版446）。

池G2385（図版218）　北東部で検出した。西側を近代以降の配管により撹乱され、南側は江戸期の遺構により壊される。平面形は不定形の溝状で、検出分の長さが南北21m以上で、東西の最大幅が1.7m以上である。最も深い部分は検出面より0.5mである。北端部が東側で堀G1195Bと直角に接続している。北部から中央にかけての部分は底部が浅く、緩やかに蛇行するとみられる。中央から南側には底部の深くなる部分が2箇所あり、溝状の部分で連結している。池G2180と同様に水が流れていたと考えられる。埋土は暗褐色砂泥が主体である。池G2180とほぼ同様の構造である。16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した（図版445）。

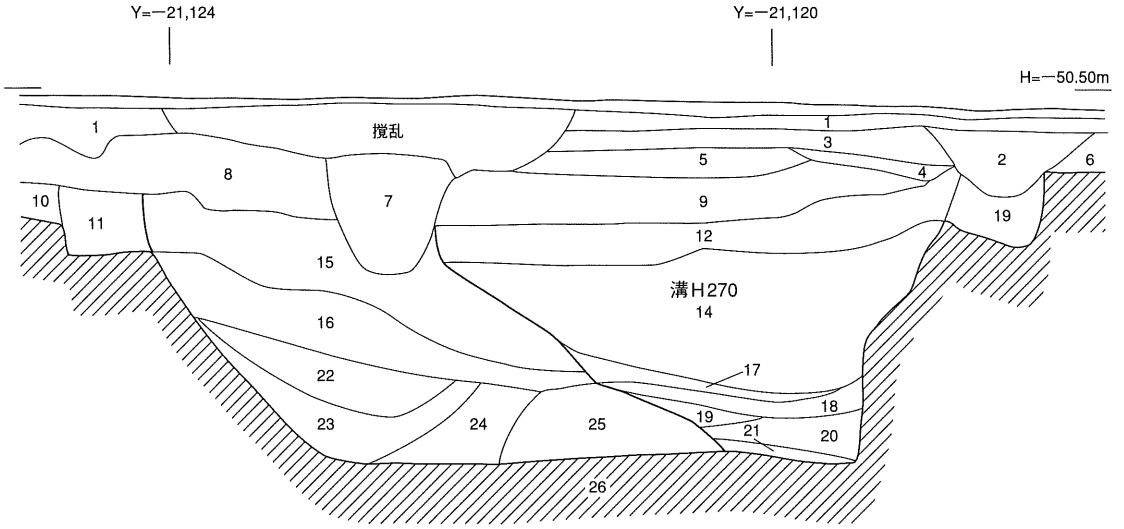
井戸G2690　中央部で検出した素掘りの井戸である。掘形は南北約1.7m、東西約1.8mの隅丸方形である。検出面からの深さは約1mである。埋土は暗褐色砂泥である。16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した（図版445）。

土壙G2418　東部で検出した。東側は調査区外に延びるが、平面形は南北約6.7m、東西1.1m以上の方形に復元できる。深さは約0.6mである。埋土は暗褐色砂泥が主体で、16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した（図版446）。

土壙G2148　北東部で検出した。東側は調査区外に延びるが、平面形は南北約6.7m、東西1.1m以上の隅丸方形に復元できる。深さは約1mである。埋土は灰黄褐色砂泥が主体で、16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した（図版447）。

井戸G2495　中央部で検出した素掘りの井戸である。掘形は南北約2.2m、東西約2.8mの楕円形である。検出面からの深さは約1.6mである。埋土は暗褐色砂泥である。XI期古段階の土師器皿が出土した。

堀G1940（図版56）　西側で検出した南北方向の堀である。長さは約56m分検出した。掘形は上端幅5.3m以上、深さは検出面から約1.6mである。断面形状逆台形を呈している（図19）。



1 黒褐色砂泥1
2 にぶい黄褐色砂泥1
3 暗褐色砂泥1
4 にぶい黄褐色砂泥2
5 黒褐色泥砂2
6 黒褐色砂泥3
7 にぶい黄褐色砂泥3
8 黒褐色砂泥4
9 褐色砂泥1
10 暗褐色砂泥2
11 にぶい黄褐色砂泥4
12 暗褐色砂泥3
13 灰黄褐色砂泥1
14 灰黄褐色砂泥2
15 灰黄褐色砂泥3
16 灰黄褐色砂泥4
17 褐色砂泥2
18 黒褐色砂泥5
19 にぶい黄褐色砂泥5
20 にぶい黄褐色砂泥6
21 灰黄褐色砂泥5
22 暗褐色砂泥3
23 にぶい黄褐色砂泥7
24 黒褐色砂泥6
25 褐灰色砂泥
26 にぶい黄褐色砂泥8（地山）

図19　G区堀G1940北壁断面図

埋土は褐灰色砂泥で、XI期古段階の土師器皿が出土した（図版445）。

（3）江戸時代前期

溝H270　中央部の西寄りで検出した南北方向の溝である。西側と上部が撹乱される。長さは約41m、幅は1.5m以上で、底部の幅は0.6～0.8m、深さは検出面から約1.6mである。溝はX=108,524m付近から東へ振れて南行する。埋土は暗褐色泥土である。埋土からXI期中段階の土師器皿が出土した。

溝G1983（図版55・219）　中央部の西寄りで検出した南北方向の石組溝である。北側と南側は撹乱される。残存長は南北約4m、掘形幅は約3.5m、内法は約0.9m、深さは検出面から1.3mである。0.2～0.6m大の河原石や花崗岩の切石で積まれ、10cm前後の河原石で裏込めされていた。石組は1段から3段しか残存していなかったが、丁寧に作られていた。埋土は暗褐色泥土で、水が溜まっていた様な堆積である。溝内からXI期中段階の土師器皿が出土した。

溝G1195（図版48）　東部で検出した南北方向の溝である。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約91m、最大幅は約1.5m、深さは約0.5mである。断面形は浅いU字形である。断面形がV字形を呈する堀G1195Bを埋めて作り替えられている。埋土は暗褐色砂泥が主体で、炭・焼土を少量含む。西側には柱列を並んで検出した。東側では部分的に礫を敷いた道路G1850が残存している。大量の礫で埋められている。17世紀前半の遺物が出土した（図版538・539）。

溝R150（図版48）　東部で検出した南北方向の石組溝である。調査区の北端と南端に遺存

しており、ほとんどの部分は近代以降の配管で壊されていた。花崗岩の切石で構築された石組の残りは良くないが、内法は約0.5m、検出面からの深さは約0.2mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭少量と焼土を多量に含む。東側には道路G1093の小礫敷が部分的に残る（図18の第1層）。西側溝である。17世紀後半の遺物が出土した。

塀G3738（図版220）　東部で検出した南北方向の柱穴列である。北側が調査区外に延びる。検出した柱穴は14基で、検出分の長さは約20mである。柱穴は直径0.2～0.3m、検出面からの深さ0.1～0.2mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東西方向に少しずれる柱穴もある。XII期古段階の土師器皿が出土した。

塀G3739（図版221）　北東部で検出した東西方向の柱穴列である。西側が調査区外に延びる。検出した柱穴は15基で、検出分の長さは約20mである。西側でやや北に振る。柱穴は直径0.4～0.6m、検出面からの深さ0.3～0.7mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、北南方向に少しずれる柱穴もある。XII期古段階の土師器皿が出土した。

塀G3740（図版221・222）　東部で検出した南北方向の柱穴列である。検出した柱穴は21基で、検出分の長さは約22mである。柱穴は直径0.2～0.4m、検出面からの深さ0.15～0.3mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東西方向に少しずれる柱穴もある。XII期古段階の土師器皿が出土した。

塀G3741（図版222）　中部で検出した東西方向の柱穴列である。西側が撹乱される。検出した柱穴は22基で、検出分の長さは約31mである。西側でやや北に振る。柱穴は直径0.4～0.6m、検出面からの深さ0.2～0.6mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、北南方向に少しずれる柱穴もある。XII期古段階の土師器皿が出土した

塀G3742（図版223）　東部で検出した南北方向の柱穴列である。検出した柱穴は10基で、検出分の長さは約12mである。柱穴は直径0.2～0.5m、検出面からの深さ0.1～0.3mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東西方向に少しずれる柱穴もある。XII期古段階の土師器皿が出土した。

塀G3743（図版223・224）　南部で検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴は27基で、検出分の長さは約34mである。西側でやや北に振る。柱穴は直径0.3～0.6m、検出面からの深さ0.3～0.6mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、北南方向に少しずれる柱穴もある。XII期古段階の土師器皿が出土した。

塀G3744（図版224）　東部で検出した南北方向の柱穴列である。南側が調査区外に延びる。検出した柱穴は4基で、検出分の長さは約6mである。柱穴は直径0.3～0.5m、検出面からの深さ約0.3mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東西方向に少しずれる柱穴もある。XII期古段階の土師器皿が出土した。

塀G3745（図版224・225）　北西部の堀G1940の東肩部で検出した南北方向の柱穴列である。検出した柱穴は15基で、長さは約20mである。柱穴は直径0.4～0.6m、深さ0.3～0.7m、柱間は1.2～1.5mである。規模、柱間も不揃いである。深い柱穴からXI期新段階からXII期古段階の土

師器皿が出土している。作り替えが行なわれたと考えられる。

石列G3689（図版219）　西北部の堀G1940の上面で検出した東西方向の石列である。長さは4.2mで、0.2～0.4m大の河原石で積まれていた。2段ほどが残存し、南面する。宅地境に関連する施設である。

塀F1740（図版54・225）　中央部の西で検出した東西方向の布掘柱列である。細長い溝の底部に平坦な石が7基ある。長さは約9mで、幅0.4～0.7m、深さ約0.3mである。礎石を欠く部分もあるが、柱間は約1mの等間隔である可能性がある。礎石は0.2～0.4m大の河原石である。埋土は焼土と焼けた瓦を含む黄褐色泥砂である。XII期古段階の土師器皿が出土した。

塀F1740B（図版54・226）　塀F1740の北と南の肩口で2列検出した東西方向の柱穴列である。北側で検出した柱穴は9基で、長さは12.3m以上、柱穴は直径0.3～0.6m、深さは検出面から0.2～0.4mである。南側で検出した柱穴は9基で、長さは10.5m以上、柱穴は直径0.4～0.6m、深さは検出面から0.2～0.6mである。両柱穴列とも柱間は不揃いである。位置はややずれるが5基は対の位置にある。柱穴からはXI期新段階からXII期古段階の土師器皿が出土した。

井戸G2071A（図版49・227）　北東部で検出した石組の井戸である。上部の石材はほとんど抜取られていた。掘形は南北約2.4m、東西約2.2mの円形に復元できる。検出面からの深さは約2.4mである。石組は大きさ10～40cmの河原石や花崗岩切石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約1.2mである。埋土は暗褐色砂泥で焼土少量と炭を含む。XI期中段階の土師器皿が出土した。

集石G2071B（図版49・227）　東側を井戸G2071Aにより壊される。井戸G2071Aより浅く小規模である。掘形は南北約1.1m、東西0.8m以上の円形に復元できる。検出面からの深さは約2.2mである。大きさ10～30cmの河原石や花崗岩切石が詰まる。埋土は暗褐色砂泥である。XI期中段階の土師器皿が出土した。

集石G1150（図版227）　北部で検出した。平面形は南北約0.9m、東西約0.9mの隅丸方形で、深さは約0.2mである。内部には大きさ10～30cmの瓦片や石を敷く。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。17世紀後半の遺物が出土した。

集石G817（図版227）　北部で検出した。平面形は直径約0.8mの円形で、深さは約0.4mである。内部には大きさ10～30cmの瓦片や石を詰める。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を含む。17世紀後半の遺物が出土した。

集石G1319（図版227）　北部で検出した。平面形は南北約1.3m、東西約0.7mの楕円形で、検出面からの深さは約0.2mである。内部には大きさ5～20cmの瓦片や石を詰める。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。17世紀後半の遺物が出土した。

集石G1175（図版227）北部で検出した。平面形は南北に長い楕円形に復元できる。南北2.6m以上で、東西約1.2m、深さは約0.4mである。内部には大きさ5～15cmの石を詰める。埋土は暗オリーブ褐色泥砂で、炭・焼土を少量含む。17世紀後半の遺物が出土した。

集石G1059（図版227）　北部で検出した。西半側が撹乱されるが、平面形は東西に長い楕

円形に復元できる。南北は約1.5mで、東西が約1.4m残る。検出面からの深さは約0.1mである。内部には大きさ５～10cmの石を敷く。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。17世紀後半の遺物が出土した。

穴蔵Ｇ749（図版50・228）　中央部で検出した穴蔵である。掘形は南北約3.6m、東西約1.6～2.3mの平面形はＬ字形である。深さは約1.4mである。北西部に石組が残る。壁には張付けられた粘土がわずかに残り、赤く焼けていた。埋土はほとんどが焼土で炭も混じる。遺物は主に中層から多く出土した。土師器皿はⅫ期古段階新相で、16世紀後半から17世紀後半までの時期幅の広い遺物が出土した（図版454～462）。

集石Ｇ1222（図版228）　南部で検出した。平面形は南北約0.7m、東西約1.1mの楕円形で、深さは約0.4mである。内部には大きさ５～20cmの石を詰める。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。17世紀後半の遺物が出土した。

石組土壙Ｇ1606（図版50・228）　東部で検出した。東西は撹乱されるが、掘形は南北約1.2m、東西約1.1mの南北方向に長い楕円形に復元できる。検出面からの深さは約0.3mである。大きさ10～20cmの石を楕円形に積上げる。内法は南北約0.6m、東西約0.5mである。２段の石組が遺存する。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。Ⅻ期古段階の土師器皿が出土した。

穴蔵Ｇ630（図版228）　東部で検出した。北側は撹乱されるが、掘形は南北約1.5m、東西約1.1mの隅丸方形に復元できる。検出面からの深さは約0.5mである。大きさ10～30cmの石を隅丸方形に積上げる。内法は南北約1.1m、東西約0.6mである。３段の石組が遺存する。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。17世紀後半の遺物が出土した。

穴蔵Ｇ1805（図版50・228）　中央部で検出した。北西側は撹乱されるが、掘形は南北約1.6m、東西約1.8mの隅丸方形に復元できる。検出面からの深さは約0.6mである。大きさ20～60cmの石を長方形に積上げる。内法は南北約0.8m、東西約1.1mである。３段の石組が遺存する。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を含む。17世紀中頃の遺物が出土した。

蔵Ｇ1097（図版49・229）　中央部で検出した土蔵の基礎部分である。北側と西側が撹乱されているが、ロ字形に幅約１mの溝がめぐる平面形に復元できる。規模は南北約7.1m、東西6.4m以上になる。溝の深さは検出面から約0.7mである。溝の中にオリーブ褐色系の砂質土と礫を交互に詰め込んでいる。炭・焼土を少量含む。礫は河原石で大きさは10～30cmである。17世紀後半の遺物が出土した。

埋甕Ｇ1262（図版50・230）南部で検出した。掘形は直径約1.9mの円形である。検出面からの深さは約0.8mで、据付けられた瓦器甕の下半部が残る。大和産の甕である。便槽と考えられる。上層埋土は、炭・焼土を少量含む。17世紀代のものである。

池Ｇ625（図版230）　南部で検出した。漆喰張りの浅い池で、西側と北側が壊される。残存する平面形から瓢箪形と思われる。南北約2.8m、東西約1.3mが残る。深さは約0.3mである。漆喰の下には細かい砂を敷く。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。17世紀後半の遺物が出土した。

井戸G3073　北部で検出した井戸である。石材はほとんど抜取られていた。掘形は南北約2.4m、東西約2.3mの円形に復元できる。検出面からの深さは約1.9mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を含む。17世紀前半の遺物が出土した（図版446）。

土壙G1273　南東部で検出した。平面形は南北約4.0m、東西約2.7mの不定形である。深さは約1.4mである。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を含む。宝永大火の廃棄土壙と考えられる。17世紀後半の遺物が出土した（図版490・491）。

土壙G1133　北端部で検出した。平面形は南北約9.3m、東西約5.5mの不定形である。深さは約1.1mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭と多量の焼土を含む。宝永大火の廃棄土壙と考える。17世紀後半の遺物が出土した（図版492～496）。

土壙G1717　中央部で検出した。平面形は南北約４m、東西約５mの不定形である。深さは約１mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を含む。貝類が一定量出土した。ごみ穴と考えられる。17世紀後半の遺物が出土した（図版480～482）。

土壙G928　北部で検出した。平面形は南北約５m、東西約１m以上の不定形である。深さは約0.6mである。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を含む。貝類が一定量出土した。ごみ穴と考えられる。17世紀後半の遺物が出土した。

井戸G592　中央部で検出した井戸である。石材はほとんど抜取られていた。掘形は直径約２mの円形である。埋土は灰黄褐色砂泥で瓦片を多量に含む。また少量の炭と多量の焼土を含む。深さ約1.6mで掘下げを中断した。17世紀後半の遺物が出土した。

池G1234C・G2485（図版54・231）　西側中央部で検出した池で東側を池G1234C、西側を池G2485とした。池G1234Cは東側が撹乱され全容は不明であるが、残存する形状はS字形である。東西7.1m以上、中央部の狭い部分は南北約4.7mで、深さは検出面から約2.7mと非常に深い。池の北辺は底部から北へ３mほどは緩やかな傾斜を持たせた陸部が作られて、この北側に井戸G2455が位置する。西側には池G2485がある。南北約８m、東西3.5m以上で形状は長方形である。深さは検出面から約2.7mである。北辺と西辺の南部には30～60cmの河原石と花崗岩が据えられていた。底部には１～３cmの小礫が敷かれ、池G1234Cの池底と同一面でつながっている。池の水深は0.4～0.6m程度と推測される。埋土は暗褐色砂礫で洪水の堆積層と考えられる。遺物はほとんど出土していない。検出層位から17世紀中頃の遺構と考える。

井戸G2455（図版54・234）　池G1234Cの北で検出した西側に階段が付属する石組井戸である。井戸部の内法は南北1.9m、東西1.5mの方形でコ字形に石壁で囲まれる。石材はいずれも30～50cmの花崗岩切石で小口面を内側に向けて垂直に組む。北壁では５段が遺存する。床面は石敷きで、中央部に直径0.8m、深さ1.1mの素掘りの水溜がある。検出面から井戸底までは約3.3mである。西側の階段部を約1.9m分検出している。南北の階段幅約1.7m、踏み幅0.3～0.4m、段差は0.15mである。下から５段分が残存していた。石材は20～80cmの河原石と花崗岩で、最下段の２石は円柱状の石材を半截し転用したものである。池G1234Cの付属遺構と考えられる。井戸の埋土は暗褐色泥土で、XI期中段階からXI期新段階の土師器皿が出土した（図版452）。

池Ｇ1234Ｂ（図版52・232）　池Ｇ2485と井戸Ｇ2455が埋められた後に池Ｇ1234Ｃの西側の約1/3が縮小されたものである。東西13m以上、南北約12m、深さ約2.7mである。南西で景石とみられる60cmの河原石が一石残存していた。後述する溝Ｇ1961、石組Ｇ1936、階段Ｇ2000などが付属する。17世紀中頃の遺物が出土した。

溝Ｇ1961（図版53・230）　池Ｇ1234Ｂの北西側で検出した瓦組溝である。溝の北側は撹乱され、残存長は約６mである。掘形幅は0.6m、深さ0.25mで溝底に丸瓦凹面を上向きに据え、平瓦で蓋をした暗渠である。北西から南東方向へ約3.5m延びて、池肩口で東へ向きを変える。傾斜して石組Ｇ1936へつながるとみられる。落差は約0.9mである。XI期新段階の土師器皿が出土した。

石組Ｇ1936（図版53・230）　池Ｇ1234Ｂ汀の北西側で検出した円形の石組である。掘形の直径は約0.6mで、深さは約0.7mである。上部は約40cmの河原石を円形に据えている。溝Ｇ1961の落ち口と石組の北辺に河原石が散乱している。北辺部には景石が据えられていた可能性がある。17世紀中頃の遺物が出土した。

階段Ｇ2000（図版53）　溝Ｇ1961の南西約1.3mで検出した。南西方向に２石で、約0.1mの段差を付けて据えられている。約40cmの河原石と約50cmの花崗岩切石である。池の検出面から約0.7m下で検出した事から池へ降りる階段の一部と考えられる。周辺遺構の位置関係や検出層位から17世紀中頃の遺構と考える。

土壙Ｇ1164　池Ｇ1234Ｂの西辺で検出した。土壙として検出したが池Ｇ1234Ｂの埋土の一部で暗褐色砂礫が主体である。XI期新段階新相の土師器皿と陶磁器類がまとまって出土した（図版449～452）。

土壙Ｇ1156・Ｇ1157　池Ｇ1234Ｂの南辺から南西辺で検出した落込み状の堆積層である。２基の土壙として検出したが規模、形状は不明瞭である。池Ｇ1234Ｂを埋めた埋土である。黒褐色泥砂で炭が多量に含まれていた。XI期新段階新相の土師器皿と陶磁器類がまとまって出土した（図版447・448・453）。

池Ｇ1234Ａ（図版51～53・230）　池Ｇ1234Ｂが埋まった後に作り替えられた池である。池Ｇ1234Ｂの西側が埋まり、東側部分のみとなる。池は南北約８m、東西約４mの楕円形の形状に変わる。この時に池の南辺から西南辺には、景石が13石据えられる。そのうち１石は長軸を立てる。石は40～70cmの河原石である。池は焼土層で埋められ廃絶される。池の堆積は暗褐色泥土で、XI期新段階新相の土師器皿と陶磁器類が出土した（図版453）。

整地Ｇ3751　池Ｇ1234Ａを埋めた層の上部である。東と南側は撹乱されているが、埋土は焼土と焼瓦を多量に含む暗褐色砂泥である。火災の廃棄物を整地したものである。17世紀後半の遺物がまとまって出土した（図版463～467）。

池Ｇ1972（図版55・235）　南側の西寄りで検出した。範囲は南北約18.6m、東西約3.6m、深さ約0.7mで10cm以下の礫を敷詰め緩やかな傾斜をもち、底部は一段凹んで溝状にＳ字に蛇行する。南寄り中央部に水を分岐させるための小高い高まりが作られている。西側は大きく撹乱

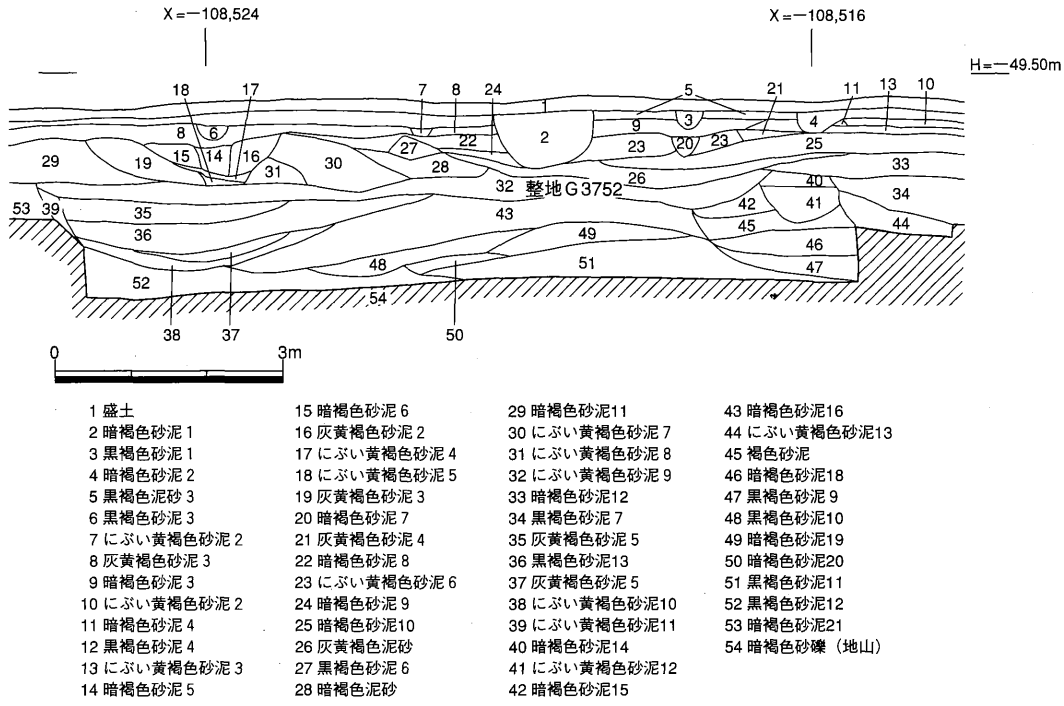


図20　G区土壙G1447実測図

され汀は検出されなかったが、景石などを配していたものと推測される。17世紀中頃の遺物が出土した（図版452）。

瓦組土壙G1366（図版234）　中央部の西壁際で検出した瓦積の穴蔵である。北側と南側の一部が撹乱されるが、一辺約2.5mの正方形である。深さは検出面から約0.6mで、平瓦と粘土を交互に積上げる。埋土は黒褐色砂泥で、17世紀後半の遺物が出土した。

土壙G1447（図版55）　南西部で検出した。南北約10m、東西約12mの方形の土壙で、深さは約1.3mである。埋土は焼土・炭混じりの黒褐色砂泥で、土師器皿が多量に堆積していた（図20）。ごみ穴を火災後の廃棄土壙としたものである。17世紀後半の遺物が多量に出土した。

井戸G1239　南の西寄りで検出した井戸である。石組はない。掘形は南北約3.5m、東西約3.3mの楕円形で、深さは検出面から約2.2mである。埋土は暗褐色泥土で、17世紀後半の遺物が出土した。

土壙G1647　土壙G1447の南側で検出した。南北約6.3m、東西約５mの方形の土壙である。ごみ穴である。埋土は暗褐色砂泥で、17世紀後半の遺物が出土した。

土壙G1370　池G1972の西側で検出した。南北約3.2m、東西約2.3mの方形の土壙である。深さは検出面から約1.2mである。ごみ穴である。埋土は黒褐色泥砂で、18世紀初頭の遺物がまとまって出土した（図版488・489）。

土壙G1716　土壙G1447の北側で検出した。一辺約2.1mの正方形の土壙である。深さは検出面から約1.3mである。ごみ穴である。埋土は暗褐色泥砂で、17世紀末の遺物が出土した。

土壙G639　中央部の西側で検出した。北と南側が撹乱される。南北２m以上、東西７m以

上で形状は不明である。深さは約1mである。埋土は暗黒褐色泥砂である。Ⅻ期中段階新相の土師器皿が多量に出土した（図版497）。

整地G3752　池G1234Aの南側で検出した。範囲は東西約15m、南北約8m、厚さ約0.2mである。にぶい黄褐色泥砂に焼土が混じる火災後の整地土である。17世紀末から18世紀初頭の遺物が出土した（図版498・499）。

（4）江戸時代中期

道路C1417B　北端部で検出した東西方向の路面である。北は調査区外に広がり、東は撹乱される。小さい礫を敷詰めて堅くしまる。

道路C12B　中央部で検出した南北方向の路面である。路面部はほとんどが壊されるが、西側溝に近い部分に小礫敷きが部分的に残る。周辺遺構の位置関係から18世紀代の遺構と考える。

溝G862（図版236）　中央部西寄りで検出した南北方向の石組道路側溝である。撹乱が著しく、ほとんど石組は抜取られていたが、長さ2.1m以上、掘形の幅は約1.5mで、深さは検出面から約0.2mである。

溝G535B（図版236）　北端部で検出した。東西方向の瓦組溝で、東端は撹乱される。検出分の長さは約7m、最大幅は約0.8m、深さは検出面から約0.3mである。浅い皿形の掘形で、瓦を掘形に合わせて敷く。東側は北の部分が残り、西側は南の部分が遺存する。道路C1417Bの南側溝と考える。埋土は主に黒褐色砂泥で、炭・焼土を含む。18世紀中頃の遺物が出土した。

塀G3746（図版236）　北部で検出した東西方向の柱穴列である。東側が撹乱されているが、調査区外に延びるとみられる。検出した柱穴は3基で、検出分の長さは約4.8mである。西側でやや北に振る。柱穴は直径0.3～0.5m、検出面からの深さ0.1～0.3mである。柱間は不揃である。18世紀後半の遺物が出土した。

塀G3747（図版236）　南部で検出した東西方向の柱穴列である。東側が撹乱されているが、調査区外に延びるとみられる。検出した柱穴は2基で、西側でやや北に振る。柱穴は直径0.3～0.5m、検出面からの深さ0.2～0.3mである。柱間は2.1mである。18世紀後半の遺物が出土した。

塀G3748（図版237）　道路西側溝の溝G862の西肩部で検出した南北方向の柱穴列である。検出した柱穴は3基で、直径0.3～0.5m、深さは0.2～0.6mである。柱間は撹乱のため不明である。周辺遺構との位置関係から、18世紀代の遺構と考える。

塀G3749（図版237）　南西部で検出した南北方向の柱穴列である。塀G3748の南の延長線上にある。検出した柱穴は9基で、長さは約15.5mである。柱穴は直径0.2～0.8m、深さ0.2～0.4mで、柱間は不揃いである。柱穴からⅫ期段階の土師器皿が出土した。

集石G429（図版238）　北部で検出した。平面形は一辺約1.1mの隅丸方形で、深さは約0.6mである。内部には大きさ10～30cmの石を詰める。底部には大きめの石を使う。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を含む。Ⅻ期新段階の土師器皿が出土した。

集石G1116（図版238）　北部で検出した。平面形は直径約0.7mの円形で、深さは約0.4mである。内部には大きさ5～30cmの石を詰める。底部に大きめの石を縦方向に並べる。埋土はに

ぶい黄褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。18世紀前半の遺物が出土した。

集石G819（図版238）　東部で検出した。西側を撹乱されるがほぼ円形に復元できる。直径約0.7m、深さは約0.4mである。内部には大きさ10～20cmの石を詰める。埋土は暗褐色砂泥で、18世紀前半の遺物が出土した。

井戸G2815（図版238）　北部で検出した石組井戸である。掘形の平面形は南北約2.5m、東西約2.7mの楕円形で、深さは約2.5mである。掘形のやや西側に井筒が作られている。石組は大きさ10～30cmの河原石と花崗岩切石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約0.9mである。埋土は暗褐色砂泥で、焼土を少量含む。18世紀前半の遺物が出土した。

石組土壙G1015（図版46・238）　北部で検出した。掘形は直径約1.4mの円形で、深さは約1.3mである。石組は大きさ10～20cmの河原石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約0.7mである。埋土は黒褐色砂泥で、多量の焼土と炭を含む。排水関連遺構と考える。18世紀前半の遺物が出土した（図版502)。

集石G737（図版238）　南部で検出した。平面形は一辺約0.6mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。内部には10cm程度の礫とともに陶器甕の破片が多量に詰まる。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。18世紀前半の遺物が出土した。

埋納土壙G637（図版238）　中央部で検出した。平面形は直径0.35mの円形で、深さ約0.2mである。中央に土師質の胞衣壷が据えられていた（図版517の９・10)。西側にはⅫ期新段階の土師器皿２個体が埋納されていた。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。宅地22内の西側に位置する。

集石G725（図版238）　南部で検出した。平面形は南北約0.7m、東西約0.8mの隅丸方形で、検出面からの深さは約0.2mである。内部には大きさ５～10cmの石と瓦片を詰める。埋土は暗黄灰色砂泥で、炭・焼土を少量含む。18世紀後半の遺物が出土した。

集石G505（図版238）　北部で検出した。平面形は南北約1.1m、東西約1.9mの楕円形で、深さは約0.3mである。内部には大きさ５～10cmの石や瓦片を詰める。西は石組土壙G430に壊される。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。18世紀後半の遺物が出土した。

石組土壙G430（図版46・238）　北部で検出した。平面形は南北約1.1m、東西約１mのほぼ円形で、深さは約0.9mである。石組は大きさ20～40cmの石を乱雑に円形に積上げる。内径は約0.4mである。石材の中には壊れた石臼が利用されている。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を多量に含む。排水関連遺構と考える。Ⅻ期中段階の土師器皿が出土した。

埋納土壙G1221（図版43・238）　南東部で検出した。掘形の平面形は直径約0.3mの円形で、深さ0.25mである。西寄りに土師質の胞衣壷が据えられていた（図版517の11・12)。北と南にはⅫ期新段階の土師器皿２個体ずつが入っていた（図版517の３～６)。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。宅地23内の北側に位置する。

井戸G741（図版239）　東部で検出した石組井戸である。掘形は直径約２mの円形で、深さは1.1m以上である。石組は大きさ10～40cmの花崗岩切石と河原石を小口面を内側にして円形に

積上げる。内径は約1mである。下部がやや狭くなる。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。底部までの掘下げは中断した。18世紀前半の遺物が出土した。

埋納土壙G573（図版43・239）　東部で検出した。平面形は南北約0.4m、東西約0.3mの楕円形で、深さ約0.2mである。中央に土師質の胞衣壷が据えられていた（図版516の11・12）。西南側には10cmの礫が入っていた。埋土は暗褐色砂泥である。宅地23内の北側に位置する。

埋納土壙G660（図版43・239）　南部で検出した。平面形は直径約0.4mの円形で、深さ約0.3mである。中央に土師質の胞衣壷が据えられていた（図版517の13・14）。西南側と東南側にⅫ期中段階の土師器皿が1個体ずつ入っていた。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。

石組土壙G415（図版239）　南東部で検出した。掘形は直径約1.1mの円形で、深さは約0.8mである。石組は大きさ20～40cmの河原石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約0.6mである。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を含む。排水関連遺構と考える。18世紀中頃の遺物が出土した。

石組土壙G952（図版239）　南東部で検出した。掘形の平面形は南北約1.5m、東西約1.3mの楕円形で、深さは約0.7mである。石組は大きさ10～30cmの花崗岩切石と河原石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約0.8mである。下部がやや狭くなる。埋土は黒褐色砂泥で、多量の炭と焼土を少量含む。排水関連遺構と考える。18世紀後半の遺物が出土した。

埋納土壙G1090（図版47・239）　北部で検出した。掘形の平面形は直径約0.4mの円形で、深さ約0.35mである。中央に土師質の蓋付小壷を埋納していた（図版516の13）。この壷は火消壷を転用したものの可能性がある。埋土は暗褐色砂泥で、焼土を少量含む。蓋付小壷は18世紀代と思われる。宅地22西の道路上に位置する。

埋納土壙G1257（図版47・239）　北部で検出した。掘形の平面形は南北約0.3m、東西0.45mの楕円形で、深さ約0.3mである。中央に土師質の火消壷が据えられていた（図版517の15）。胞衣壷に利用されたものであろう。西側にⅫ期新段階の土師器皿3個体が入っていた。埋土は暗褐色砂泥である。宅地22西の道路上に位置する。

埋納土壙G2700（図版239）　中央部で検出した。平面形は直径約0.4mの円形で、深さ約0.2mである。北寄りに土師質の胞衣壷が据えられていた（図版517の7・8）。南側にはⅫ期中段階の土師器皿4個体が入っていた。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。宅地22西の道路上に位置する。

土壙G593　中央部で検出した。平面形は南北約3m、東西約3mの不定形で、南と東側が撹乱される。深さは約0.7mである。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を含む。路面上に作られた廃棄土壙である。「乾山」銘の角皿が18世紀前半の遺物と共伴して出土した（図版501・502）。

井戸G824　北部で検出した石組井戸である。掘形は直径約2mの円形で、深さは約1.2mである。ほとんどの石材が抜取られているが、内径は約1mに復元できる。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。拳大の礫と瓦片を多量に含む。18世紀後半の遺物が出土した（図版506）。

土壙G302　中央南部で検出した。平面形は南北約1.5m、東西約２mの隅丸長方形である。深さは約0.7mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭少量と焼土を中量含む。瓦片を多量に含む。路面上に作られた廃棄土壙である。貝類が一定量出土した。18世紀前半の遺物が出土した（図版503・504）。

土壙G471　北部で検出した。平面形は南北約1.4m、東西約0.8mの楕円形である。深さは約0.2mである。埋土は暗褐色砂泥で炭・焼土を多量に含む。天明大火の廃棄土壙と考える。18世紀後半の遺物が出土した（図版507・508）。

埋納土壙G2249　北部で検出した。平面形は直径0.3mの円形で、深さ約0.2mである。中央にXII期新段階の土師器皿が３個体重なって入っていた。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。宅地21西の道路上に位置する。

埋納土壙G636　中央部で検出した。掘形の平面形は直径約0.3mの円形で、深さ約0.1mである。中央にXIII期中段階の土師器皿が１個体入っていた。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。宅地22内の西側に位置する。

埋納土壙G1233　南東部で検出した。掘形の平面形は直径約0.3mの円形で、深さ約0.1mである。中央に土師質の胞衣壷が入っていた。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。胞衣壷は18世紀代と思われる。宅地23内の北側に位置する。

井戸G3691（図版45・239）　北西部で検出した石組井戸である。掘形の直径約２mの円形で、深さは検出面から約2.2mである。20～50cmの花崗岩切石を丁寧に垂直に積上げる。内径は約0.9mである。井筒内から18世紀後半の遺物が出土した。

池G1070（図版240）　北西部の北側で検出した方形の池である。上部は撹乱されるが、南北約2.3m、東西約1.8m、深さ約0.1mで池の底には粘土が張られていた。埋土は黄褐色砂泥である。周囲の遺構との位置関係から、18世紀代の遺構である。

蔵G694（図版51・240）　中央部の西寄りで検出した土蔵の基礎である。ロの字形に幅1.1～1.2mの溝をめぐらす。南北約7.5m、東西約5.7mで、深さは0.5～0.8mである。５～15cm大の河原石と砂質土を交互に入れている。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、XII期古段階からXII期新段階の土師器皿が出土した。

溝G887（図版241）　道路西側溝の溝G862の南側に取付く東西方向の石組溝である。西側が撹乱され、長さは2.2m分を検出している。10～20cmの河原石で組まれる。掘形幅は約0.6m、内法は約0.1m、深さは約0.2mで、２段が残存していた。宅地７内からの排水溝と考えられる。周辺遺構との位置関係から、18世紀代の遺構と考えられる。

土壙G327（図版241）　南西部で検出した。南側と上部は撹乱されるが、掘形は南北約2.0m以上、東西約1.7m、深さ約0.2mである。底は黄褐色粘土を張り、壁沿いに約20cmの石を並べて、同種の粘土で塗込める。貯水施設と考えられる。埋土は暗褐色砂泥で、18世紀後半の遺物が出土した。

石組土壙G235・溝G281（図版47・241）　南西部で検出した石組土壙G235は、掘形の直

径約２mの円形である。深さは検出面から約2.1mである。石組は10～30cmの河原石を円形に積上げる。内径は約0.9mで、下部で狭くなる。宅地内の排水施設と考えられる。溝Ｇ281は、石組土壙Ｇ235の北に取付く溝である。北側は撹乱され、残存長は約2.2mである。幅は0.2～0.3mで、南でやや広くなる。側面と底には瓦が敷かれている。深さは残存部分で約0.1mで、石組土壙Ｇ235に向かって下がる。

建物Ｇ3750（図版47・241）　南西部で検出した礎石建物である。検出した礎石は10基ある。東西６m以上、南北約３m規模の東西方向の建物が想定できる。礎石が残る部分での柱間は1.0～1.3mである。周辺の遺構との位置関係から18世紀代の遺構である。

井戸Ｇ626（図版240）　南西部の建物Ｇ3750の北側で検出した瓦組の井戸である。掘形は直径約1.7mで円形である。掘下げは検出面から深さ2.5mで留めた。35×25cmの瓦を10枚で円形に組み、掘形には河原石を充填していた。土圧で崩れているが、内径は約0.7mと推定される。埋土は暗褐色砂泥である。18世紀前半の遺物が出土した。

土壙Ｇ747　西部中央寄りで検出した。北側と南側の一部は撹乱されるが、一辺４m以上の方形と考えられる。深さは約0.9mである。埋土は暗褐色砂泥である。ごみ穴である。18世紀前半の遺物がまとまって出土した（図版499・500）。

土壙Ｇ555　北東部で検出した。南北約２m、東西約1.2mの長方形で、深さは約0.6mである。埋土は黒褐色泥砂である。Ⅻ期古段階の土師器皿が出土した（図版504）。

（５）江戸時代後期

道路Ｃ12（図版41）　中央部で検出した南北方向の道路である。東西に石組側溝がある。東が溝Ｃ10、西が溝Ｃ156である。路面幅は約16.5mである。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約81mである。東側３分の１が小礫を堅く敷詰めた堅固な路面となる。中央から西側には土壙が多く作られている。路面から19世紀中頃の遺物が出土した。

溝Ｃ10（図版41・242）　道路東側の石組側溝である。掘形の幅は約1.5m、深さ約0.6mである。大きさ10～50cmの河原石を組んで溝を護岸する。１段から２段が遺存する。道路側の石組が比較的良く遺存する。内法は約0.6mである。北部では底部に切石を敷く部分がある（図21）。数箇所に排水口や取水口が設けられる。断面観察から水が流れていたことがわかった。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を含む。19世紀中頃の遺物が出土した（図版512）。

溝Ｃ156（図版41・243）　道路西側の石組側溝である。掘形の幅は約1.1mで、深さは約0.5mである。内法は約0.5mである。20～80cmの花崗岩の切石で積まれ、１段から２段の石が残存する。埋土は暗褐色泥砂で、19世紀前半の遺物が出土した。

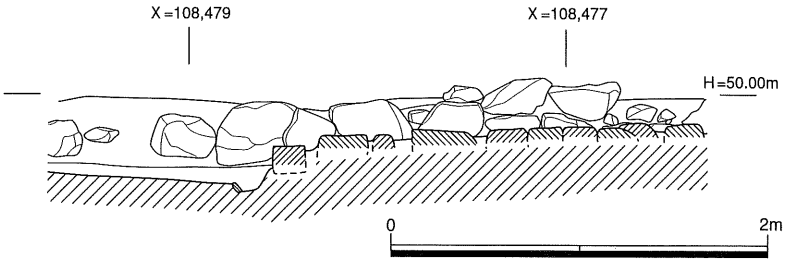


図21　Ｇ区溝Ｃ10実測図

集石G370（図版42・244）　北部で検出した。平面形は東西方向の溝状で、東側が撹乱される。検出分の長さは約9.8m、最大幅は約１mである。深さは約0.1mである。内部には大きさ５～20cmの石を詰める。中央には大きさ30～40cmの河原石を並べる。埋土はにぶい黄灰色砂泥で、宅地境の塀基礎部分と考える。19世紀前半の遺物が出土した。

石列G485（図版244）　中央部で検出した東西方向の石列である。花崗岩の切石などを並べている。検出分の長さは約10mである。宅地境施設の基礎部分と考える。石の周囲から19世紀前半の遺物が出土した。

溝G276・石列G650（図版244）　中央部西寄りで検出した東西方向の溝と石列で、西側を撹乱される。溝の幅は約0.6m、深さは0.2mで６mを検出した。東側で西側溝C156に接する。溝の北側には石列G650がある。東端には60cmの花崗岩が据えられるが、西側では検出できなかった。溝の埋土はにぶい黄褐色砂泥で、炭・焼土を含む。溝内から19世紀前半の遺物が出土した。

石組土壙G392（図版42・245）　中央東部で検出した円形石組である。掘形は南北約1.9m、東西約1.8mの円形で、深さは約1.7mである。石組は大きさ10～30cmの花崗岩の切石を内面が円形に積上げる。石と石の隙間を漆喰で埋める。内径は0.9～1.1mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。19世紀前半の遺物が出土した。

石組土壙G500（図版42・245）北東部で検出した。西半が撹乱されるが掘形は直径約1.6mの円形に復元できる。深さは約0.7mである。石組は大きさ10～40cmの河原石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約0.9mである。下部がやや狭くなる。井戸ではなく、排水関連遺構と考える。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を含む。19世紀前半の遺物が出土した。

溝G77（図版42・245）　中央部で検出した東西方向の石組溝である。西で北に振れる。掘形は幅約0.7m、深さ約0.3mである。全長約6.3mである。河原石を組んで護岸する。内法は約0.4mである。傾斜はやや西側が高い。東には円形石組G393があり、西は側溝C10につながる。宅地内に水を引込む構造である。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を含む。19世紀前半の遺物が出土した。

石組土壙G393（図版42・245）　溝G77の東端で検出した。掘形は南北約0.9m、東西約1.1mの楕円形で、深さは約0.3mである。石組は大きさ10～30cmの河原石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約0.5mである。石組は３段遺存する。下部がやや狭くなる。西には溝G77が接続し、側溝C10から宅地内に引込んだ水を一時溜める構造である。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。19世紀前半の遺物が出土した。

集石G482（図版245）　中央部で検出した。平面形は南北約1.4m、東西約1.5mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。内部には大きさ５～20cmの石を詰める。埋土は暗褐色砂泥で、多量の焼土と炭を含む。19世紀中頃の遺物が出土した。

集石G528（図版245）　東部で検出した。平面形は南北約0.8m、東西約0.7mの楕円形で、深さは約0.3mである。内部には大きさ10～40cmの石を多量に詰める。埋土はにぶい黄灰色砂泥で、

炭・焼土を含む。19世紀前半の遺物が出土した。

井戸Ｇ420（図版43・246）　東南部で検出した石組井戸である。掘形は南北約1.9m、東西約1.7mの楕円形で、深さは1.5m以上である。石組は大きさ10～40cmの花崗岩の切石を円形に積上げる。内径は0.7～0.9mである。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。底部は確認していない。19世紀前半の遺物が出土した。

溝Ｇ４（図版43・246）　中央部で検出した東西方向の漆喰溝である。西側で南に振れる。掘形は幅約0.5m、深さ約0.2mである。全長約3.7mである。掘形の底に河原石を据え、その上に漆喰で溝を作る。内法は0.15mである。傾斜は東側が高い。東には円形石組Ｇ277があり、西は側溝Ｃ10につながる。宅地内から水を排出する構造である。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。19世紀前半の遺物が出土した。

石組土壙Ｇ277（図版43・246）　溝Ｇ４の東端で検出した。掘形は南北約1.3m、東西約1.1mの楕円形で、深さは約0.5mである。石組は大きさ10～30cmの花崗岩切石と河原石を円形に積上げる。内径は0.45～0.5mである。石組は３段遺存する。下部がやや狭くなる。井戸ではなく、排水関連遺構と考える。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を含む。西には溝Ｇ４が接続する。宅地内での水を一時溜め、側溝Ｃ10に排水する構造である。19世紀前半の遺物が出土した。

池Ｇ460（図版246）　東部で検出した漆喰張りの池で、西側と南側が撹乱される。南北約1.8m、東西約1.9mが残る。検出面からの深さは約0.3mで、非常に浅い。漆喰の下には細かい砂を敷く。埋土は暗褐色砂泥が主体で、漆喰片や炭・焼土を多量に含む。19世紀前半の遺物が出土した。

集石Ｇ307（図版246）　中央部で検出した。平面形は南北約1.0m、東西約0.8mの楕円形で、深さは約0.7mである。内部には大きさ５～20cmの瓦片が多く詰まる。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。19世紀前半の遺物が出土した。

埋甕Ｇ439（図版246）　東南部で検出した。掘形の平面形は直径0.6mの円形で、深さは検出面から約0.4mである。据付けられた信楽甕の下半部が残る。埋土には、炭・焼土を少量含む。水溜施設の可能性がある。19世紀前半の遺物が出土した。

埋甕Ｇ387（図版246）　東南部で検出した。掘形の平面形は直径0.5mの円形で、深さは検出面から約0.4mである。据付けられた信楽甕の下半部が残る。便槽として使用されたと考える。埋土には、炭・焼土を多量に含む。19世紀前半の遺物が出土した。

溝Ｇ590（図版246）　南部で検出した東西方向の石組溝である。西で南に振れ、さらに曲がる。掘形は幅約0.6m、深さ約0.2mである。検出分の長さは約3.0mである。花崗岩切石を組んで護岸するが、石組の残りは悪い。内法は0.25mである。西側で側溝Ｃ10につながる。傾斜は東側が高い。宅地内から排水する構造である。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。19世紀前半の遺物が出土した。

土壙Ｇ348（図版43・252）　中央北部で検出したごみ穴である。平面形は南北約6.7m、東西約1.7mの長方形である。深さは約0.8mである。土師器の皿が大量に廃棄されている。断面での

観察によると、東側から投棄されたとみられる。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。道路上に穿たれている。19世紀前半の遺物が出土した（図版345～347）。

土壙G45　中央南部で検出した。平面形は南北約５m、東西約３mの不定形である。深さは約0.4mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含み、瓦片を多量に含む。道路上に穿たれる。19世紀中頃の遺物が出土した（図版513～516）。

井戸G308　東部で検出した。平面形は約１mの円形である。石組が抜取られている。水溜は円形の瓦組である。深さは約1.3mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。19世紀前半の遺物が出土した。

埋納土壙G339（図版247）　北西部で検出した。上部は撹乱されるが、掘形は直径約0.3mの円形で、深さは0.2mである。中央部に胞衣壷が据えられていた。

池G253・G253B（図版45・247）　北西部で検出した漆喰張りの池である。調査区外であったが、重機で埋め戻す際に一部を掘削して確認した。南側は撹乱されるが、掘形は最大長で5.6mである。深さは約0.3mである。東西に長い瓢箪形をしている。池の西北側には直径約0.5mの穴の中に口径30cm、器高28cmの甕が据えられていた。池G253Bはこの池の西端を埋め、石と漆喰で護岸して作り替えている。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土を含む。19世紀前半の遺物が出土した。

石組土壙G3690（図版45・247）　池G253B内の東側を壊して作られた円形石組土壙である。掘形は直径約1.3m、深さ約0.2mである。30～40cmの河原石を２段から３段組む。埋土は黒褐色砂泥である。19世紀前半の遺物が出土した。

池G250（図版44・248）　北東部で検出した南西から北東方向に長い漆喰張りの池である。池の西辺の中央部は撹乱されるが、掘形は長さ約6.1m、幅は1.2～2.2mで、深さは検出面から0.2～0.4mである。池底部の北側と中央部南寄りの位置にそれぞれ１基ずつの甕が据えられている。北側は掘形直径約0.8mの円形で、深さ約0.4mある。中に丹波産の甕が据えられる。南側は掘形0.5m以上で、深さ約0.2mである。中に丹波産の甕が据えられる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、19世紀前半の遺物が出土した。

池G364（図版45・249）　北西部の池G250の南西部で検出した「く」字形の漆喰張りの池である。長さは約４m、幅は0.5～1.7m、深さは検出面から約0.8mである。池の南側には20～40cmの河原石の景石が５石据えられていた。埋土は黒褐色砂泥で、19世紀前半の遺物が出土した。

蔵G110（図版44・250）　北西部で検出された。ロの字形に幅約１mの溝をめぐらす。東西約5.2m、南北約7.0mで深さは検出面から約0.4mである。20cm前後の河原石を密に充填する。土蔵の基礎と考えられる。出土遺物が少量で時期の確定は難しいが、18世紀末以降に成立したと考える。

土壙G151・G152・G153・G905　蔵G110の四隅付近で検出した。直径0.3～0.5m、深さ0.3mの円形で、うち２基には５～10cmの石を充填している。蔵G110の雨落施設と考えられる。

建物Ｇ572（図版251）　西側溝の溝Ｃ156の西で検出した。検出したのは建物の南辺部分でＬ字形に７基の礎石が並ぶ。長さは南北１ｍ、東西７ｍである。30～40cmの花崗岩と河原石を用い、礎石の柱間は1.0～2.0mで不揃いである。北側の礎石が検出されなかったので、建物の規模や構造は不明である。周辺の遺構との位置関係から、江戸時代後期の建物と考える。

石組土壙Ｇ103（図版251）　南西部で検出した。掘形の直径約0.9m、深さは検出面から約0.7mで円形の石組である。20cmの河原石を円形に積上げる。内径約0.4mである。埋土は暗褐色砂泥で、ⅩⅣ期古段階の土師器皿が出土した。遺構の性格は不明である。

埋甕Ｇ240（図版251）　中央部の西寄りで検出した。掘形の直径約0.65m、深さ約0.4mの円形の土壙で、信楽の甕が据えられていた。便槽と考えられる。信楽甕は、江戸時代後期のものである。

埋甕Ｇ258（図版251）　埋甕Ｇ240の南東約３ｍの位置で検出した。掘形の直径約0.7m、深さ約0.25mの円形の土壙で、信楽産の甕が据えられていた。便槽と考えられる。信楽甕は、江戸時代後期のものである。

埋納土壙Ｇ182（図版251）　南西部で検出した。直径約0.4m、深さ約0.2mの円形の土壙である。土壙内には、土師器皿の口縁部を合せた２枚１組８組以上が据えられていた状況が認められた。埋納遺構である。土師器皿はⅫ期新段階の新相に属する。

第８節　Ｈ区（図版57～62・253～264）

（１）概要

Ａ・Ｃ・Ｅ・Ｇ区の調査区に囲まれ、残された調査区である。調査区中央部は、大径木移植の際の撹乱が地山面まで達している。Ｈ区は、宅地５の一部に該当しているが、江戸時代の遺構面が浅く、明治時代の公園化の際の整地や饗宴殿付帯施設の撹乱で残りが悪かった。

（２）桃山時代

堀Ｇ1940（図版62・262）　調査区を南北に縦断する堀で、幅は最大で約6.0m、深さ1.5～2.0mである。検出時に相当量の埋土が予想されたため、事前に３箇所の土層観察用のサブトレンチを掘り、堆積状況を確認した後、小型の重機を用いて上下２層に分けて掘削した。断面の形状は逆台形を呈しており、両壁は垂直に近く急峻である。埋土は下層が黄褐色砂礫層が中心で、上層は黒褐色砂泥層が主体になる。埋土の堆積状況からは、日常的に滞水していたとは考えられず、通常は空堀であったものと思われる。堀Ｇ1940はＣ・Ｄ・Ｇ・Ｐ区の調査区でも確認されており長大なものである。出土遺物は下層が16世紀代が中心の幅広い年代のもので、上層は16世紀末から17世紀初頭の様相である（図版518・519）。公家町建設の際全面的に埋戻されているが、江戸前期の屋敷配置図では、背割部分に相当しており、同じ位置に溝Ｈ270が構築されている（図22）。

（３）江戸時代前期

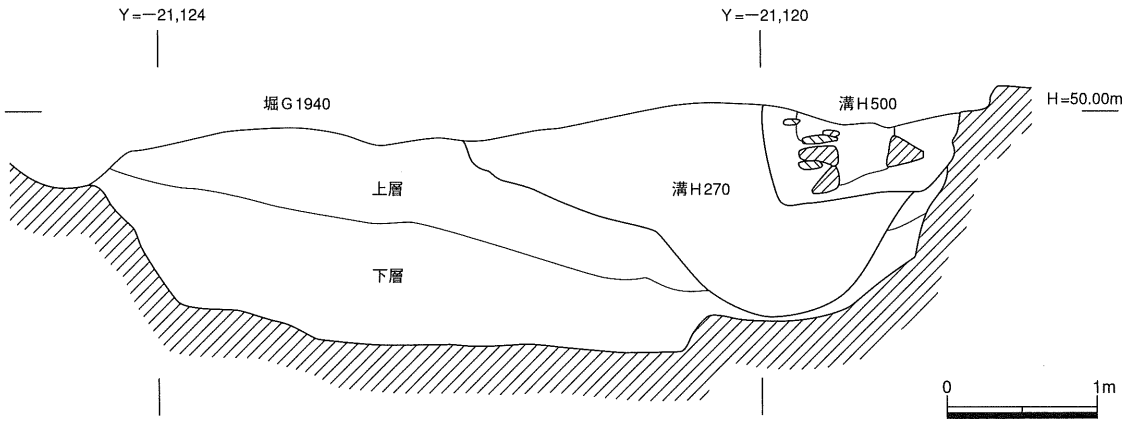


図22　H区堀G1940・溝H270・溝H500断面図

塀H912・H913・H914（図版60・261）　堀G1940の東肩部で検出した一連の柱穴列である。それぞれの塀は、柱穴の規模や柱間に違いがあるが、基本的には公家町成立期の宅地割区画をなすものである。塀H914は、検出した柱穴は13基である。柱穴は隅丸方形で一辺は約0.5mである。柱間は1.0～1.8mで不揃いである。塀H914とほぼ同じ地点から下層の柱列を２列検出している。塀H912・H913でもその柱間や切合いから重複が認められ、何回かの補修や作り替えが行なわれたものと思われる。各塀の柱穴からは、17世紀前半の遺物が出土している。

塀A1093（図版261）　調査区北寄りで検出した東西方向の柱穴列である。中央を撹乱されるが、22基の柱穴を検出した。掘形の深さにより２時期以上があり、重なりから掘形の深い一群が最初に作られたものである。柱穴は直径約0.5m、掘形の深さは検出面から約0.5mで、礎石があるものが多い。柱間は不揃いである。江戸時代前期を通して、宅地４と宅地５との宅地境施設であったと考えられる。柱穴掘形内から17世紀代の遺物が出土している。

塀H917（図版262）　調査区の南壁際で検出した東西方向の柱穴列である。H区調査終了後、南西部を拡張し柱穴掘形を検出した。宅地５と宅地６との宅地境施設である。柱穴掘形が南半のみの検出であったため、柱痕跡などはわからないが、２時期の柱列がある。E区調査の際には該当ラインに柱列が検出できず、宅地境が不明であったがH区の調査により確認できた。

溝H270（図版62）　調査区東寄りを南北に貫く溝である。中央部が大径木の移植により撹乱される。幅は３～４m、深さは約1.5mである。宅地の背割溝である。溝埋土からは17世紀前半の遺物が出土した（図版520～523）。

溝H500（図版61・262）　溝H270に重なる位置の北寄り、宅地４部分の西側背割溝である。溝H270が一定程度埋没した後、石組溝に作り替えられたものである。石組溝南部には排水口が取付く。溝の内法は約0.4m、深さ約0.6mある。西側が比較的良く残り、石組は３段ある。北側は調査区外に延びるが、約９mの長さで検出した。溝埋土には17世紀末の遺物が含まれている。

土壙H33　土壙の西側は撹乱され、残存規模は長軸約4.5m、短軸約2.5m、深さ約0.3mの不定形である。埋土は若干の炭を含む褐色砂泥の単一層である。18世紀初頭の宅地３・４のごみ穴と推定した。17世紀後半を中心にした遺物が出土している（図版524～526）。

（４）江戸時代中期

溝Ａ７（図版62・263）　Ａ区調査で検出した溝Ａ７の範囲を確認するため設けた北西拡張区で検出した。Ｈ区内約2.7mで止まっており、東へは延びない。宅地の中程まで設けられた宅地境に関連する遺構である。溝埋土から18世紀代の遺物が出土した。

土壙Ｈ267（図版62）　調査区中央で検出した。東側は撹乱され、平面形は不明であるが、南北約1.3m、東西約1.2mの方形に復元できる。深さは約0.2mで、小規模なごみ穴とみられる。埋土は暗黒褐色砂泥で、出土遺物は土師器皿や「鷺坂」銘の蓋を伴なう焼塩壷など、18世紀前半代のものである（図版523）。

土壙Ｈ166（図版59・263）　調査区西南部で検出したごみ穴である。南端と北側半分を撹乱されていたが、東西約1.7m、南北約2.0m、深さ約0.9mに復元できる。底部から約20cmは均一な黒褐色砂泥で、遺物が集中する。それより上層部は比較的遺物の少ない一括の埋土である。遺物が底部近くに集中し、上層部に少ないことから、ごみ穴使用期間が短かったことが推定できる。18世紀中頃の遺物が出土している（図版328・329）。

土壙Ｈ271　調査区中央南寄りで検出したごみ穴である。土壙の北東部は穴蔵Ｈ97によって壊される。残存部分から土壙規模は、南北約2.0m、東西約2.7mに復元できる。深さ約1.4mである。暗褐色砂泥の単一層が堆積している。出土遺物は1730年代から40年代のものが主体である（図版330～332）。

土壙Ｈ485（図版59・264）　調査区南西で検出した。南北約2.1m、東西約1.9mの方形で、深さは約0.8mである。底部近くに河原石や花崗岩の切石が、約20cmほど堆積している。地山の暗黄褐色砂泥層を深く切り込んでおり、排水施設である可能性が高い。集石上部の埋土から、18世紀代の遺物が出土している。

土壙Ｈ222　調査区中央の西壁寄りで検出した。周辺には撹乱が多く、平面形は不明である。南北約５m、東西約３mの範囲で確認しており、深さは西壁際で約0.4mである。Ｅ区調査で検出した土壙Ｅ45の東端部にあたる可能性がある。18世紀後半の遺物が出土した（図版530）。

穴蔵Ｈ97（図版58・263）　調査区南西寄りで検出した。南北約2.5m、東西約2.3mの方形石組の穴蔵で、深さは約1.9mである。北側の石組は比較的残りが良かったが、その他は基底部の石列と裏込の石が残り、上段の石は抜取られていた。石材は花崗岩の切石が主で、河原石も使われていた。底部の四隅と各辺の中央に、杭痕が残っており板囲の施設があったと考えられる。石組内の埋土から18世紀後半代の遺物が出土している。

（５）江戸時代後期

蔵Ｈ50（図版263）　調査区南東部で検出した土蔵基礎で、ロの字形に幅約0.6m、深さ約0.3mの溝がめぐる。南北約4.5m、東西約6.3mである。上部が削平され、通常みられる礫は残っていない。18世紀後半以降の遺物が出土している。

蔵Ｈ991　調査区南壁寄りで検出した。検出したのは南半部分で、一辺約5.4mに復元できる。上部は削平されていたが、拳大の礫が残っていた。検出層位と周辺遺構との位置関係から、江

戸時代後期の遺構と思われる。

塀H916（図版60・264）　調査区南西部で検出した南北方向の礎石列である。礎石は30～50cmの花崗岩切石で、ほぼ1m等間で11石を検出している。塀H916の東側には井戸や排水溝、便所などの遺構が集中しており、それらを区画する塀と推定される。検出層位と周辺遺構との位置関係から、江戸時代後期の遺構と思われる。

石組土壙H65（図版264）　調査区中央南寄りで検出した。掘形は約1.8mの円形で、内径約1mの石組である。深さ約2mである。西側に導水のための石組溝があり、排水の機能を持っていたものと思われる。石組内の出土遺物が少なく、時期を決めがたいが、19世紀以降の遺構と考える。

石組土壙H25（図版264）　石組土壙H65の南で検出した。掘形は約2.4mの円形で、内径約1.5mの石組である。深さは約1.5mである。石組上面には、西から蛇行する石組溝H45が取付く。石組H65の掘形を一部切っており、より新しく作られたものと思われる。石組溝H45には、北から溝H78が合流しており、石組土壙H25には周辺の排水が集中していたものと思われる。石組内の埋土は明治初期の公園整地層と同じで、廃絶年代もその頃と思われる。

井戸H27（図版264）　調査区中央西寄りで検出した。掘形は約1.6mの円形で、約1m掘下げたところで、石組を検出した。石組の内径は約1mと狭く、深さ約2mで掘下げを断念した。掘下げた範囲では埋土の変化はなく、黒褐色砂泥層である。北から溝H220が取付いており、井戸として使われなくなった後に、排水施設に転用されたものと思われる。井戸枠内上層から、19世紀中頃の遺物が出土した（図版528）。

土壙H15　調査区中央部で検出した不定形の廃棄土壙で、上面は公家町廃絶の際の廃棄瓦で覆われている。南北約6m、東西約5.5mで、深さ約1.0mである。本遺構は平面形が明確ではなく、日常生活に伴なうごみ穴ではなく廃棄土壙である。19世紀中頃の比較的一括性のある遺物が出土した（図版359～363）。

土壙H211　調査区中央西端で検出した土壙である。南北約1.5m、東西約1mの長方形である。ほぼ垂直な壁面の深さ約0.5mの小規模なごみ穴である。埋土はほとんどが炭や灰である。底部に「文政三年」の墨書がある鉄釉の甕が出土している。19世紀前半の遺物構成である（図版527）。

溝H220　調査区西側で検出した南北溝である。検出した長さは約14mで、幅約1.0m、深さ約0.4mである。南は井戸H27に接続しており、井戸を排水施設として再利用したものと思われる。19世紀中頃の遺物が出土している（図版528）。

溝E50　調査区中央部で検出した東西方向の溝である。溝幅は西端で約1.0m、深さ約0.4mである。E区から続くもので、東側で細く、浅くなる。水が流れていた痕跡はない。性格は不明である。19世紀中頃の遺物が中心に出土した（図版528）。

井戸H120　調査区北西角で検出した井戸で、E区の調査の際にも西半部を確認している。掘形は直径約1.1mの円形で、約2m掘下げた範囲では、石組は検出できなかった。出土遺物に

溝Ａ７出土のヨーロッパ製水差と接合する破片が出土しており、その他の遺物も19世紀中頃のものであった。

第9節　Ⅰ区（図版63・202・206・210・214・265）

（1）概要

D区の東側に位置し、平面形はほぼ正方形の調査区である。南東部には既に樹木の移植に伴なう大きな撹乱があった。ここでは、南北方向の堀Ｇ1195Ｂ、溝Ｇ1195を検出することを主眼においた。桃山時代には、西部に南北方向の堀Ｇ1195Ｂがある。堀の東には土壙が２基あるのみで、遺構の密度は低い。この堀は南側のＧ区・Ｊ区・Ｋ区の堀Ｇ1195Ｂの延長であり、Ⅰ区では最北端部の検出となった。江戸時代前期には、西側に溝Ｇ1195がある。東側の路面はほとんどが削平されている。この側溝Ｇ1195はＧ区他でも検出している。江戸時代中期には、道路東側の宅地19内にあたるとみられる。中央には穴蔵Ⅰ６がある。他には土壙や柱穴などがある。江戸時代後期には、同じく宅地19内にあたるとみられる。遺構には溝や土壙などがある。

（2）桃山時代

堀Ｇ1195Ｂ　西部で検出した南北方向の堀である。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約5.6m、幅は約0.9m、深さは約0.8mを復元する。埋土はにぶい黄褐色泥砂が主体で、Ⅺ期古段階の土師器皿が出土した（図23）。

（3）江戸時代前期

溝Ｇ1195　西部で検出した南北方向の溝である。北側・南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約5.7m、幅は約1.3m、深さは約0.5mである。堀Ｇ1195Ｂの上層にあたり、断面形は浅いＵ字形の溝である。埋土は暗褐色泥砂が主体で、炭が混じる。17世紀前半の遺物が出土した。

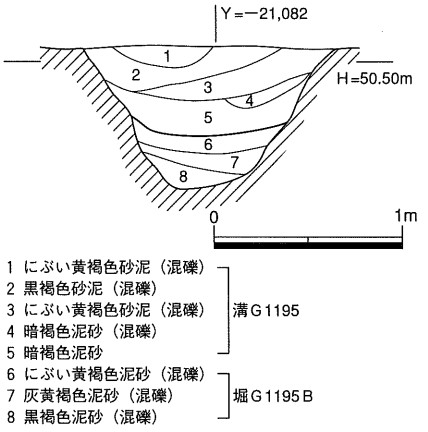


図23　Ⅰ区堀Ｇ1195Ｂ・溝Ｇ1195実測図

道路Ｇ1085　中央で部分的に検出した。小礫が混じる堅くしまった層である。溝Ｇ1195の東側に広がる路面である。

道路Ｇ1093　西側で検出した。小礫が混じる堅くしまった層である。溝Ｇ1195を埋めてその上層にある。確認調査では、調査区外西側にこの路面に対応する石組の西側溝Ｒ150があった。

（4）江戸時代中期

穴蔵Ⅰ６（図版265）　中央部で検出した。北東部が壊されているが、掘形は南北約1.7m、東西約1.1mの長方形に復元できる。検出面からの深さは約0.3mである。大きさ10～30cmの石を長方形に積上げる。内法は南北約1.4m、東西約0.7mである。石組は底部１段のみが遺存した。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土が混じる。かなり浅い構造とみられる。18世紀前半の遺物が出

土した。

（5）江戸時代後期

溝Ｉ1　西部で検出した南北方向の瓦組溝である。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約5.8mである。掘形の幅は0.35m、深さは約0.1mである。掘形いっぱいに平瓦類を組んだ浅い溝で、建物の雨落溝とみられる。埋土はにぶい黄褐色泥砂で、炭片が混じる。19世紀中頃の遺物が出土した。

第10節　Ｊ区（図版64・65・202・206・210・214・265）

（1）概要

Ｃ区の東、Ｇ区の北に位置する。平面形は南北方向にやや長い長方形である。北東部には樹木の抜取穴がある。Ｃ区の東西方向の溝Ｃ135やＧ区の南北堀Ｇ1195Ｂや道路西側溝Ｒ150の延長を検出することを主眼とした。また、江戸時代中期から後期の宅地内の遺構配置にも留意した。桃山時代の主要な遺構には、堀Ｇ1195Ｂがある。堀の両脇には柱列がある。江戸時代前期には、西側に道路西側溝Ｒ150がある。東側には堅く踏みしめられた路面が残存する。この他に、宅地内からの排水溝などもみられる。江戸時代中期には、道路東側の宅地20内の遺構を検出している。西側には円形や楕円形の石組土壙がある。江戸時代後期でも、宅地20内の遺構を検出している。中央西寄りに円形石組土壙や大型の土壙がある。多量の遺物が出土した。南端には東西方向の溝Ｃ135があり、道路の北側溝である。

（2）桃山時代

堀Ｇ1195Ｂ　中央部で検出した南北方向の堀である。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約16m、幅は約0.8mである。深さは約1.3mに復元できる。断面形がＶ字形を呈し、底部は深く非常に狭い（図24）。埋土は灰黄褐色泥砂などで、炭が混じる。16世紀末から17世紀初頭の遺物が出土した。

塀Ｊ193　西部で検出した南北方向の柱穴列である。南側は調査区外に延び、中央部と北側

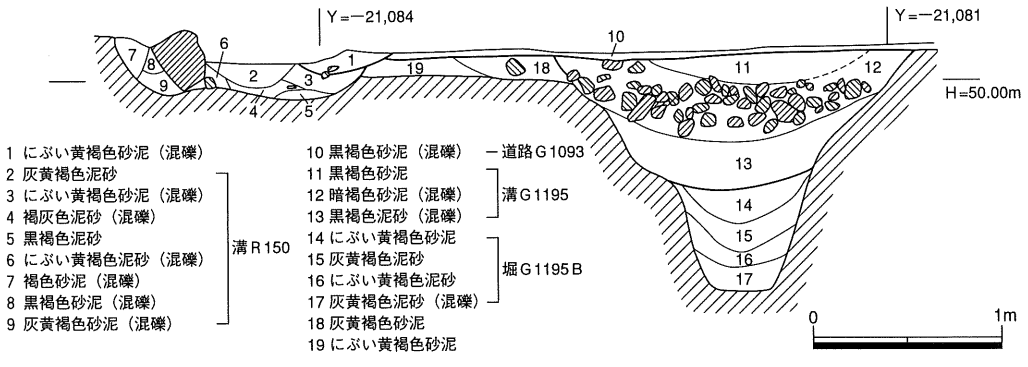


図24　Ｊ区堀Ｇ1195Ｂ・溝Ｇ1195・溝Ｇ1080・路面断面図

は撹乱される。検出した柱穴は６基で、検出分の長さは約9.5mである。柱穴は直径0.4～0.6m、検出面からの深さは約0.3mである。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東西方向に少しずれる柱穴もある。周辺遺構との位置関係から、17世紀前半の遺構と考える。

（３）江戸時代前期

溝Ｇ1195　中央部で検出した南北方向の溝である。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約15.5m、幅は約1.9m、深さは約0.7mである。断面は浅いＵ字形を呈する。堀Ｇ1195Ｂの上層にあたる（図24）。埋土は黒褐色泥砂が主体で、炭が混じる。５～20cmの石で埋められている。17世紀前半の遺物が出土した。

溝Ｒ150（図版265）　西部で検出した南北方向の石組溝である。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約15m、掘形の幅は約１m、深さは約0.4mである（図24）。花崗岩の切石で作られる。宅地側の石列が残存している。埋土は黄灰褐色泥砂で、炭・焼土が混じる。17世紀後半の遺物が出土した。

溝Ｊ75　西部で検出した東西方向の石組溝である。西側は調査区外に延び、東側で溝Ｒ150に取付く。検出分の長さは約2.2m、内法は約0.3m、深さは約0.2mである。花崗岩の切石で作られる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、炭が混じる。宅地９内からの排水溝である。17世紀前半の遺物が出土した。

（４）江戸時代中期

石組土壙Ｊ54（図版65・265）　北部で検出した。西側を石組土壙Ｊ１に壊されるが掘形は直径約1.3mの円形に復元できる。深さは約0.8mである。大きさ10～20cmの花崗岩切石や河原石を小口面を内側に向けて円形に積上げる。内径は約0.7mである。下部がやや広くなっている。埋土は暗褐色粗砂である。18世紀前半の遺物が出土した。遺構の性格は、不明である。

石組土壙Ｊ115（図版265）　東部で検出した。掘形は東西約0.8m、南北約0.9mの楕円形で、深さは約0.6mである。石組は大きさ10～20cmの河原石を円形に積上げる。内径は約0.35mである。埋土は灰黄褐色泥砂である。遺構の性格は、不明である。18世紀前半の遺物が出土した。

石組土壙Ｊ１（図版65・265）　北部で検出した石組土壙である。掘形は直径約2.0mの円形で、深さは約3.2mである。石組は大きさ10～40cmの切石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約1.1mである。最下段は石材の長軸を立てて組む。上半分の石材は抜取られている。埋土は暗褐色泥砂で、炭が混じる。石の組方と他の井戸よりも浅いことから、井戸ではないと考える。18世紀後半の遺物が出土した。

石組土壙Ｊ57（図版65・265）　西部で検出した石組の土壙である。掘形は東西約1.3m、南北約1.7mの楕円形で、深さは約1.0mである。石組は大きさ10～30cmの花崗岩切石と河原石を小口面を内側にして楕円形に積上げる。内径は東西約0.7m、南北約１mである。埋土は有機質の暗褐色泥土である。埋土の状況から便槽と考える。18世紀前半の遺物が出土した。

（５）江戸時代後期

石組土壙Ｊ５（図版65・265）　西部で検出した。掘形は東西約1.5m、南北約1.35mの隅丸方

形で、深さは約0.7mである。石組は大きさ10～20cmの河原石を小口面を内側にして円形に積上げる。内径は約0.8mである。下部がやや狭くなっている。埋土は暗褐色泥砂で、炭が混じる。19世紀前半の遺物が出土した。遺構の性格は不明である。

溝C135　南部で検出した。東西方向の素掘りの溝である。東側は撹乱され、西側は調査区外に延びる。検出分の長さは約9m、幅は約0.3m、深さは約0.5mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭が混じる。19世紀前半の遺物が出土した。東西道路の北側溝とみられる。

第11節　K区（図版66・202・206・210・214）

（1）概要

G区の南東に位置し、南北にやや長い調査区である。北寄りに東西方向、東側には南北方向の埋設管が通るため、その部分以外を掘下げ調査した。

桃山時代には、南北方向の堀G1195Bがある。堀の肩口には整地層があり、礎石をもつ柱穴が堀と平行して並ぶ。江戸時代前期には、ほぼ全面に路面が広がる。堅く踏みしめられた面が幾層も確認できる。その下層で溝G1195を検出した。その東側には路面がある。江戸時代中期及び後期は、道路東側の宅地23内にあたる。土壙が数基認められる。

（2）桃山時代

堀G1195B　中央部で検出した南北方向の堀である。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約11m、幅は約0.7mである。深さは約0.9mを復元できる。底部は深く幅が狭い。埋土は暗褐色泥砂が主体で、炭と焼土を少量含む（図25）。埋土下層には16世紀末から17世紀初頭の遺物が含まれる。

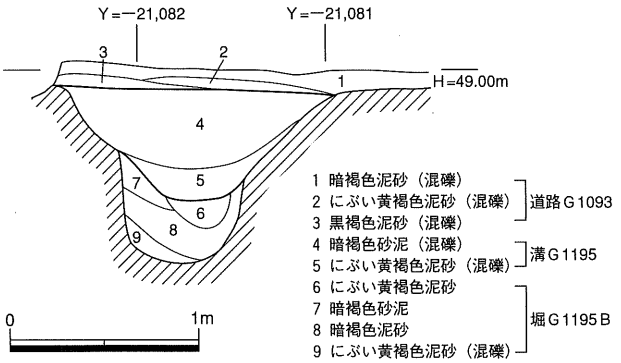


図25　K区堀G1195B・溝G1195・路面断面図

（3）江戸時代前期

溝G1195　中央部で検出した南北方向の溝である。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約11m、幅は約1.6m、深さは約0.6mである。断面は浅いU字形を呈する。堀G1195Bの上層にあたる（図25）。埋土は暗褐色砂泥が主体で、礫を多く含む。炭・焼土を少量含む。17世紀中頃の遺物が出土した。

道路G1850　東部で検出した小礫敷である。暗オリーブ褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。小礫を敷き堅くしまる。検出層位から17世紀前半と考える。

道路G1093　ほぼ全域で検出した小礫敷である。溝G1195を埋めて道路面を作り替えた。暗褐色泥砂が主体で、小礫を敷き堅くしまる。炭・焼土を含む（図25）。

（4）江戸時代中期

土壙K14　南部で検出した土壙である。平面形は不定形で南北約1.3m、東西1.1m以上、深さは約0.6mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を含む。瓦が多く出土した。18世紀前半の遺物が出土した。

（5）江戸時代後期

土壙K27　南部で検出した土壙である。平面形は不定形で南北約3m、東西0.6m以上、深さは約0.4mである。埋土は暗褐色砂泥で、炭・焼土を少量含む。焼瓦が多量に含まれている。18世紀末から19世紀初頭の遺物が出土した。

第12節　O区（図版68・267）

（1）概要

B区北西の御苑苑路上に設けた埋設管設置部分の調査区である。工事車両の通路確保のため、北半と南半の二つの調査区に分けて調査した。江戸時代前期から後期にかけて継続した中筋通上にあたる。北半部南半部とも、層厚0.15mの現代盛土下に江戸時代前期から近代の固くしまった路面の小礫敷を検出し、それが現地表下0.4～0.5mまで続く。それ以下に桃山時代から江戸時代前期の堆積層がある。路面上には火災などに伴なう廃棄土壙が穿たれる。北半部の土壙O1は宝永大火に伴なう廃棄土壙である。土壙O1の西側に南北方向の小柱穴列がある。柱穴は、いずれも埋土に焼土と焼灰を含む。南半部には宝永、天明両大火もしくは公家屋敷解体に伴なう廃棄土壙が複雑に重なる。それぞれを明確に掘分けることができなかったため、遺物が混じりあい、各土壙の明確な時期は不明である。なお、埋設管設置場所の決定に際して行なった中筋通側溝確認調査区で、新旧2時期の石組溝を検出している。いずれも花崗岩の切石を用いた石組溝で、中筋通東側溝と思われる。東側に検出した古い時期の溝2は底面に石敷を持たず花崗岩の色調や質、大きさが様々である。西側に検出した新しい時期の溝1は、底面に石敷を有し、花崗岩の色調や質、大きさが概ね一様である。また、溝1の石組掘形から石組に用いられているものと同様の花崗岩の破片が多く出土しており、現地で石材の調整加工がなされた状況が推測できる。

（2）江戸時代前期

土壙O1　東半は調査区外に広がるが、南北5.7m以上、東西0.9m以上ある方形もしくは長方形の土壙と思われる。深さは約1mである。埋土は下部から上部まで一様で、人為的に一度に埋められた状況である。埋土中に焼土粒と瓦を多く含む（図版91・555）。埋土の状況と出土遺物の年代から、宝永大火に伴なう廃棄土壙と考える。

第13節　P区（図版69・70・268～272）

（1）概要

調査区は、F区とG区に南接する。検出した遺構は、桃山時代から江戸時代前期は堀、溝、井戸、土壙などである。江戸時代中期は路面、土壙である。江戸時代後期は溝、土壙などである。

（2）桃山時代

土壙P177（図版70・271）　中央部の堀G1940の底で検出した。掘形は東西約2.0m、南北約1.7m、深さ約0.4mの楕円形である。土壙内に石仏がふせられた状態で検出された。埋土は暗オリーブ色砂泥である。検出層位から桃山時代の遺構である。

堀G1940　中央部で検出した南北方向の堀である。検出面の幅は5.8m以上、底部の幅は約4mである。深さは検出面から約1.8mである。埋土は最下層に黄褐色砂礫の堆積が認められた。17世紀初頭の遺物が出土した。

（3）江戸時代前期

溝H270（図版70）　中央部の堀G1940の上部で検出した。幅は約1.5m、深さは0.7～1.1mである。

塀P266（図版70・270）　西南部の南壁沿いで検出した東西方向の布掘柱列である。長さは東西21.1m以上、幅は0.3m以上で南肩は南壁に延びるため確認できなかった。深さは0.2～0.4mで溝の大部分は撹乱されているが、溝内には直径0.2～0.6m、深さ0.2～0.3mの柱穴を12基検出した。そのうち1基は約30cmの平坦な石が据えられていた。柱間は不揃いである。また、深さが異なる柱穴が4基あることから作り替えがあったと考えられる。宅地7と宅地8の境の施設と考えられる。

塀G3745（図版270）　溝H270の東肩で検出した南北方向の柱穴列である。南側は調査区外に延びる。塀は重複して2列あり、西側の柱穴列は5基で、柱穴の直径約0.6～1.2m、深さ約0.8～1.1mである。柱間は約1.3mである。東側の柱穴列は2基で直径約0.8～1.0m、深さ0.7～0.8mである。柱間は2.8mである。西側の柱穴からⅫ期新段階の土師器皿が出土している。

井戸P69（図版70・271）　溝H270の東寄りで検出した。掘形は直径2.0m、深さ約3.4mで円形の石組の井戸である。石組の内径は1.1mで、10～40cmの河原石で積上げられていた。埋土は黒褐色砂泥で、17世紀末から18世紀初頭の遺物がまとまって出土した（図版534～536）。

石組土壙P82（図版70・271）　溝H270の西で検出した。掘形は東西約3.1m、南北約2.7m、深さは約1.7mで、隅丸方形の石組土壙である。一辺約1.7mで、10～20cmの比較的小さな河原石で隅丸方形に積上げられている。下部でやや狭くなる。北辺部には0.2～0.3m幅の階段が付けられており、2段残存していた。10cm前後の縁石がある。埋土は焼土と炭混じりの黒褐色泥土で、17世紀末から18世紀初頭の遺物がまとまって出土した（図版533・534）。

集石土壙P49（図版272）　東端部で検出した。掘形は南北約1.0m、東西約0.9m、深さは約

0.2mの楕円形である。10～20cmの河原石が充填されている。建物の雨落施設の可能性がある。周辺遺構との位置関係から江戸時代前期の遺構である。

集石土壙Ｐ126（図版272）　西端部で検出した。掘形は約1.0m、深さは約0.4mで南と東側は撹乱され、形状は不明である。10～30cmの河原石が充填されている。建物の雨落施設の可能性がある。周辺遺構との位置関係から江戸時代前期の遺構である。

土壙Ｐ99　石組土壙Ｐ82の西で検出した。掘形は南北約3.2m、東西約1.6m、深さ約1.6mで長方形である。埋土は暗褐色砂泥の炭混じりで、Ⅻ期中段階の土師器皿が多量に出土した。

（４）江戸時代中期から後期

道路Ｃ２　東部で検出した。溝Ｃ10を東側溝、溝Ｃ156を西側溝とする道路である。検出範囲は南北７～９m、東西15.5mで、小礫敷の痕跡が良好なのは溝Ｃ10の西側２～３mの範囲である。複数の路面の重なりがあり、間に焼土層を挟む。江戸時代中期から後期にかけて継続した道路である。

溝Ｃ10　東部で検出した南北方向の石組の道路東側溝である。掘形幅約１m、内法約0.5m、深さ約0.4mである。20～50cmの主に花崗岩の切石を用い、１段が残存していた。埋土は灰黄褐色砂と暗褐色砂泥で、19世紀代の遺物が出土した。

溝Ｃ156　中央部で検出した南北方向の石組の道路西側溝である。掘形幅約1.2m、内法約0.5m、深さ約0.5mである。30～50cmの主に花崗岩の切石を用い、東側溝より丁寧に組まれていた。埋土は暗褐色泥砂で、19世紀代の遺物が出土した。

溝Ｐ８（図版272）　道路Ｃ２の上を北西から南東方向に横断する石組溝である。長さは約16.6m、掘形幅約0.8m、内法約0.3m、深さ約0.3mである。20～30cmの花崗岩切石と河原石で積まれ、１段が残存していた。この溝は西側溝Ｃ156から路面を横断して東側溝Ｃ10へ分水するための暗渠施設であったと考えられる。検出層位から、19世紀代の遺構である。

溝Ｐ７　溝Ｃ156の西側で検出した緩やかに湾曲する東西方向の石組溝である。残存長は約4.7m、掘形幅約0.7m、内法約0.3m、深さ約0.3mである。10～30cmの河原石で雑に積まれ、１段が残存していた。この溝は溝Ｃ156から宅地７内へ水を取り込むための溝であると考える。

第14節　Q区（図版71・269・273）

（１）概要

Ｇ区の東側に位置する。検出した遺構は江戸時代前期の礎石建物２基と江戸時代中期の石組土壙である。

（２）江戸時代前期

建物Ｑ96（図版273）　北半部で検出したＬ字形に礎石が残る建物の一部である。礎石は30～40cmの河原石である。南北の礎石列は４基で柱間は北から約１m、１m、0.8mである。東西の礎石列は５基で柱間は東から約１m、１m、1.4m、1.6mである。他の礎石は検出できず、規

模、構造は不明である。検出層位から17世紀前半の遺構である。宅地15内に位置する。

建物Q95（図版273）　北半部で検出した礎石建物である。残存する礎石は6基で、40～60cmの花崗岩である。東西方向の礎石列は、1m等間の4基と、東に離れた1基が残る。調査区が狭いため建物の復元には至らなかった。この礎石建物は焼土層直下で検出した。焼土層からⅫ期古段階の土師器皿が出土した。

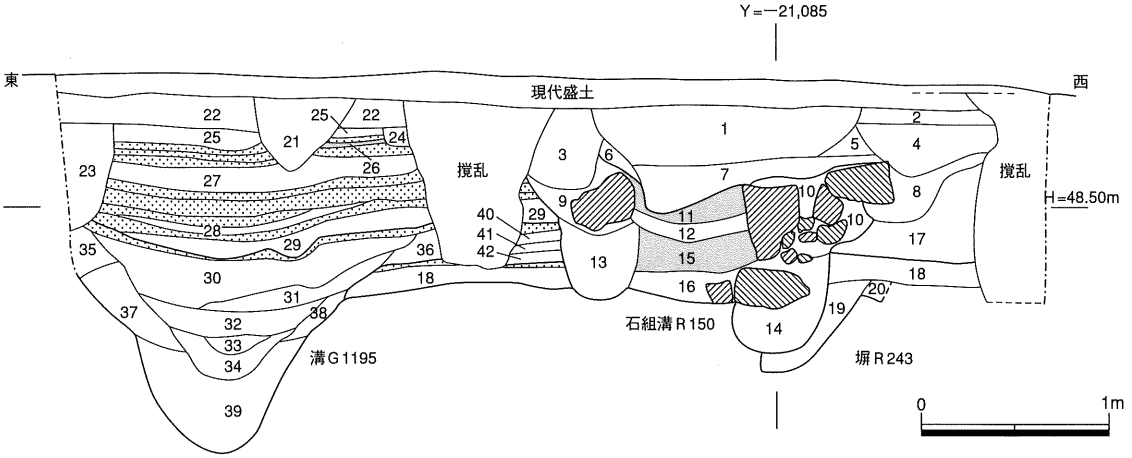
（3）江戸時代中期

石組土壙Q10（図版273）　北中央部で検出した。掘形は直径0.8mの円形で、内径が約0.5m、深さ約0.3mの石組土壙である。遺構の性格は不明である。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅻ期新段階の遺物が出土した。

第15節　R区（図版72～76・274～283）

（1）概要

K区南側苑路上に設けた埋設管設置部分の調査区で、東西幅5～5.5m、南北長約110mの細長い調査区である。掘削深の制限のため、完掘できなかった遺構がある。層厚約0.2mの現代盛土層直下が江戸時代後期の遺構面で、それ以下に江戸時代中期の整地層が0.2～0.3m堆積する。現地表下約0.4mより下に、江戸時代前期の固くしまった小礫敷の路面の重なりがみられ、厚さは0.6～0.7mに及ぶ。路面の重なりに挟まれて、現地表下0.5mの高さに層厚5cmの寛文頃の公家町火災に伴なう焼土層がある。路面の最下部の整地層以下が室町時代後期から桃山時代の堆積層となる（図26）。調査は、現地表下0.3～0.4mの面で江戸時代中期から後期の遺構面を調査し、



1 暗褐色砂泥
2 暗褐色砂泥
3 灰黄褐色砂泥
4 黒褐色砂泥
5 暗褐色砂泥
6 にぶい黄褐色砂泥
7 暗褐色泥砂
8 にぶい黄褐色砂泥
9 黒褐色砂泥
10 オリーブ褐色粘質砂泥
11 褐色泥砂
12 黒褐色砂泥
13 暗オリーブ褐色砂泥
14 暗灰黄色砂泥
15 暗オリーブ褐色泥砂
16 黒褐色粘質砂泥
17 オリーブ褐色砂泥
18 暗灰黄色粘質砂泥
19 黒褐色砂泥
20 黒褐色泥砂
21 黒褐色泥砂
22 暗褐色泥砂（混小礫）
23 褐色泥砂
24 暗褐色砂泥
25 黒褐色泥砂
26 オリーブ褐色砂
27 オリーブ褐色泥砂
28 オリーブ褐色砂
29 オリーブ褐色砂
30 オリーブ褐色シルト～粘土
31 黒褐色砂泥（混礫φ10cm前後）
32 灰色粘質砂泥
33 オリーブ黒色砂泥
34 オリーブ黒色砂泥
35 オリーブ褐色砂泥（混礫φ5cm前後）
36 オリーブ褐色砂泥
37 暗灰黄色粘質砂泥
38 灰色砂泥
39 オリーブ黒色シルト（砂まじり）
40 暗褐色泥砂
41 黒褐色砂泥
42 暗灰黄色泥砂
※ 粗いアミは路面層、細かいアミは水成砂～砂礫層

図26　R区中央部東西断面図

次いで江戸時代前期の３面（江戸時代前期１～３）を調査した。北半と南半に分けて調査したが、北半の江戸時代前期１の調査は、激しい降雨による壁面の倒壊によって、十分に行なえなかった。

最下部の江戸時代前期１は、17世紀前半から中頃の公家町成立期の遺構面である。調査区北端部の中央から調査区南西部にかけて、塀Ｒ1130と平行する溝Ｒ241が延びる。溝241より東側には道路Ｇ1850の小礫敷が確認できる。溝Ｒ241は道路Ｇ1850の西側溝、塀Ｒ1130は屋敷と道路の境界をなす塀と考える。塀Ｒ243は塀Ｒ1130に先行する塀の布掘掘形と考える。調査区南端の東壁際には溝Ｒ1080がある。路面部分の中央に、南北方向の溝Ｇ1195がある。また、溝Ｇ1195の西側に小柱穴からなる柱穴列Ｒ1131がある。江戸時代前期２は17世紀中頃から後半の遺構面である。17世紀前半の溝Ｒ241と同じ位置に石組側溝の溝Ｒ150が出現する。これより東側は小礫敷の路面が広がる。溝Ｒ150より西側の宅地内側部分には数基の土壙がある。調査区南部の東壁際には、道路Ｇ1093の東側溝と考える石組の溝Ｒ1129がある。調査区南端には、道路Ｇ1093とＴ字の交差点をなす東西街路（以下、清和院通）上の溝と考える溝Ｒ1050がある。江戸時代前期３は18世紀初頭の遺構面である。道路Ｇ1093の西側溝の溝Ｒ150はそのまま維持され、路面も17世紀後半と同様の状況である。溝Ｒ150の西側宅地内部分には排水施設と考える集石土壙Ｒ164や溝Ｒ118などがある。また、南北両側に溝を有する石列Ｒ298は、宅地境の塀の基礎跡と考える。石列Ｒ298の北側は宅地13ｂ、南側は宅地14ａと考える。溝Ｒ1050のこの時期の状況は、上部に撹乱が及ぶため、不明である。同じ位置に維持されていたものと推測する。江戸時代中期から後期は18世紀前半以降の遺構面である。調査区全域に公家屋敷の遺構群を検出している。調査区北端部には、宅地境に関連すると思われる東西方向の石列Ｒ297と溝Ｒ88がある。これが、北の宅地23と南の宅地24の境界となる遺構である。本区北半は、天明大火に伴なうと考える廃棄土壙が多く検出される。一方、南半は廃棄土壙が顕著ではなく、井戸Ｒ1034、石組土壙Ｒ1032、埋甕Ｒ1041・Ｒ1042、池Ｒ1002などが点在する。

（２）江戸時代前期

溝Ｒ241　南北方向に延びる溝である。幅0.5～0.7m、深さは最も深い部分で約0.5mある。Ｘ＝－108,567m付近から現れ、Ｘ＝－108,594m付近で消える。調査区南部西壁際で検出した溝Ｒ1091とは一連の溝の可能性がある。肩口がほぼ垂直に立ち上がる部分があり、杭と板による護岸が施されていた可能性がある。埋土は、下部が水成の粗粒砂、上部が泥土である。出土遺物の年代により、17世紀前半の遺構である（図版537）。

塀Ｒ243　南北方向に延びる布掘柱列である。幅0.5～0.8m、深さは最も深い部分で0.5mある。調査区の北端部では明瞭に検出されず、Ｘ＝－108,565m付近から調査区中央に現れ、Ｘ＝－108,642m付近で西壁内に消える。掘立柱塀の布掘掘形と考えるが、上部に塀Ｒ1130の柱穴が重なるため、明瞭な柱痕跡を検出できていない。公家町最初期の遺構と考える。出土遺物から17世紀前半の遺構である（図版537）。

塀Ｒ1130（図版278）　南北方向に延びる柱穴列である。直径0.4～0.7mの柱穴が連続する。

柱穴の深さは、残りの良いもので0.6～0.7mある。柱穴底に礎石を有するものが多い。柱痕跡が明瞭に残る。柱痕は直径0.15～0.2mのものが多い。また、一辺14cmほどの角柱の形状を明瞭に残すものがある。柱穴が重なる部分があるため、部分的な補修もしくは建替えがあったと推測できる。複数時期の柱穴が重なるため、柱間の距離は明確ではないが、1.0～2.0mであったと推測する。塀Ｒ243に後続するものである。出土遺物がいずれも小片であるため、遺構の時期は明確ではない。しかし、先行する塀Ｒ243より新しく、17世紀中頃から後半の溝Ｒ150が上に乗るため、17世紀前半から中頃の遺構である。

溝Ｇ1195　南北方向の溝である。幅1.0～1.3m、深さは約0.8mある。下層は堀Ｇ1195Ｂである。北側のＧ区から延び、本区ではＸ＝－108,575m付近で調査区東壁に西肩が現れ、南に向かって延びる。道路Ｇ1850上を南北に貫く状態で、路面から掘込まれている。溝の東側のみに路面が検出されるＧ区・Ｊ区・Ｋ区などの状況とは異なる。埋土は人為的に埋戻されたもので、その上を覆う路面は、溝幅のみ沈下する（図26)。出土遺物から17世紀前半から中頃の遺構である（図版538･539)。

溝Ｒ190　北半部の南寄りで検出したＬ字形の溝である。南北長約３mで、北端部が東に折れ、溝Ｇ1195に取付く。深さは、南端部で0.13m、溝Ｇ1195への取付き部分で0.25mある。取付き部分には簡単な石組がある。性格は不明である。出土遺物と溝Ｇ1195との関係から、17世紀前半から中頃の遺構である。

柱列Ｒ1131（図版279）　南北方向の小柱穴列である。溝Ｇ1195の西側に平行して延びる。直径0.2～0.3m、深さ0.2～0.4mの小柱穴で構成され、いずれの柱穴埋土にも焼土と焼灰を多く含む。柱痕はいずれも直径約0.2mの円形である。溝Ｇ1195に伴なうものと考えたいが積極的な根拠を欠く。出土遺物はいずれも小片で、時期を明確に特定できない。溝Ｇ1195と同一面で検出されていることなどから、17世紀前半から中頃の遺構であると考える。

溝Ｒ150（図版74・76・280～282）　南北方向の石組溝で、道路Ｇ1093の西側溝である。東側には路面の小礫敷が広がる。Ｇ区より本区に至り、調査区南西隅に向かって延びる。内法0.5～0.6m、深さは0.6～0.7mである。埋土は大きく上層と下層に分かれる。江戸時代前期２に対応するのが下層、江戸時代前期３に対応するのが上層である。上層と下層は、それぞれさらに上下２層に分けることができる。いずれも下部は水成の砂礫層、上部は人為的な埋土である。上層上部の人為埋土は、焼土･炭を多量に含むもので、これによって溝Ｒ150は埋められる（図26)。水成堆積層が砂礫からなることから、この溝の水流が一定の流速を保ち澱んでいなかったこと、維持管理が良くなされていたことなどが推測できる。石組は花崗岩切石を主体としたもので、比較的良く残る。道路側の石組は路面の積み重ねに応じて、その都度付け足されたものと見え、長軸20～50cmの自然石や花崗岩切石を乱雑に組む。南半の宅地側の石組は全体的に長軸50～100cmの直方体状の花崗岩切石を隙間なく組むが、Ｘ＝－108,604m付近より北は小振の自然石や花崗岩切石を組む。また、Ｘ＝－108,634m付近の溝Ｒ1132部分でも切石積の状況に変化が見える。これは、宅地側の石組が一度に構築されたものではなく、各宅地の表構えに応じた宅地

単位での施工になることを示すものであろう。これに従えば、X=－108,604m付近は宅地14ａと宅地14ｂとの境界部分と評価できる。溝Ｒ1132部分も宅地14ｂと宅地14ｃの境界と評価できよう。下層からは17世紀後半の遺物が、上層からは18世紀前半の遺物が出土している（図版540～542)。宝永大火に伴なって埋められたものである。

溝Ｒ1050　Ｒ区南端を横断する東西方向の石組溝である。南側石組は、既存埋設管維持のため未調査である。内法0.4m以上、深さ約0.4mある。溝の上部は近代以降の撹乱によって壊されている。埋土は、水成の泥土で、溝Ｒ150と異なり澱んだ水流を推定する。溝Ｒ150の路面側の乱雑な石組と異なり、より大きい石でしっかりと組む。出土遺物から17世紀後半の遺構である。

溝Ｒ1129　南北方向の石組溝である。内法約0.5m、深さ約0.8mある。西側石組が調査区南端の東壁際に約４m分検出されている。東壁を一部拡張し、溝の幅と深さ及び埋土の状況などを確認した。埋土は砂礫質の泥砂である。道路Ｇ1093の東側溝と考える。明確な出土遺物はないが、溝Ｒ150と同じく17世紀後半から18世紀初頭にかけての遺構であろう。

石列Ｒ298　東西方向の石列２条の間に土砂を入れ盛り上げた遺構である。調査区北部のX=－108,578m付近で検出した。長軸20～30cmの割石を乱雑に並べたもので、東端は溝Ｒ150の石組に取付く。北側に接して東西方向の溝Ｒ299と石製のＵ字溝状の部材を用いた溝Ｒ119がある。南側には東西方向の溝Ｒ148がある。排水路を備えた宅地境を形成する塀の基礎跡と考える。宅地13ｂと宅地14ａの境界となる遺構と評価できる。溝Ｒ150と一連の遺構であることと溝Ｒ148の埋土から出土した遺物により、17世紀後半から18世紀初頭の遺構である。

（３）江戸時代中期から後期

石列Ｒ297（図版283）　長軸30～70cmの自然石を東西方向に並べた遺構である。一部が撹乱で壊されているものの５石が残存する。石列北側は東西方向の溝Ｒ88となっている。石列は北側に面を揃えており、北側から眺めた場合の視覚的効果が意識された造作になっている。溝Ｒ88と一連の遺構であり、宅地境に関連する遺構と考える。宅地23と宅地24の境界にほぼ一致する。溝Ｒ88から出土した遺物から18世紀中頃を中心とした時期の遺構である。

土壙Ｒ21　X=－108,600m付近で検出した。南北約4.4m、東西2.0m以上、深さ0.9mある。西半は調査区外である。埋土は土器陶磁器類と瓦類を多く含む砂泥で、人為的に一気に埋められている。出土遺物の年代から18世紀後半の遺構である（図版93・543～545・557)。宅地24内の天明大火に伴なう廃棄土壙と考える。

土壙Ｒ87　Ｒ区北部で検出した。長方形の平面形で、南北約2.0m、東西約3.8m、深さ約1.1mある。土壙内には火を受け橙色に変色した瓦が詰まり、土砂をほとんど含まない。出土遺物の年代から18世紀後半の遺構である（図版94・558)。宅地24内の天明大火に伴なう廃棄土壙と考える。

埋甕Ｒ1041・Ｒ1042（図版283）　調査区中央で検出した信楽製の甕２基を東西に並べて据えた遺構である。２基の甕はいずれも上半を欠くが、後世の撹乱によるものである。甕体部の最大径は約50cmである。便槽と考える。甕内部の埋土は焼土・炭で焼瓦を多く含む。甕と内

部の出土遺物により18世紀後半から19世紀前半の遺構と考える。宅地25の北辺部分にあたる遺構である。

土壙Ｒ1043　Ｒ区中央部で検出した廃棄土壙である。南北約5.2m、東西3.3m以上、深さ約0.6mある。陶磁器類と鉄釘が多く出土している。陶磁器類は２次的に火を受けているものがある。出土遺物の年代から、18世紀後半から19世紀前半の遺構である（図版546）。宅地25内の遺構である。

井戸Ｒ1034　Ｒ区中央部で検出した石組の井戸である。内径0.8mの円形で、深さ1.6mまで掘削したが、底面は未検出である。長軸20～50cmの花崗岩切石を主体とする石を、平坦面を内側に向けて組む。出土遺物より18世紀末から19世紀初頭の遺構である（図版547）。宅地25内の遺構である。

石組土壙Ｒ1032（図版283）　井戸Ｒ1034の西方で検出した石組の土壙である。一辺約1.0mの方形で、深さは約1.4mである。長軸20～50cmの花崗岩切石を主体とする石を、平坦面を内側に向けて組む。小規模な収納施設と考える。埋土の出土遺物から、18世紀後半から19世紀中頃の遺構である。宅地25内の遺構である。

池Ｒ1002（図版283）　Ｒ区南部で検出した底部に漆喰を張った小規模な池である。西半部は撹乱によって壊されている。南北約1.9m、東西1.7m以上ある。深さは約0.3mで、西部に深さ約0.5mの円形の深い部分がある。円形の深い部分の中央には平瓦一枚を漆喰に埋め込んで設置している。埋土は上下２層に分かれ、下層が水成の泥土、上層が直径20cm以下の礫を多く含む人為埋土である。主として上層から植木鉢や箱庭道具などが出土している。出土遺物の年代から19世紀前半から中頃の遺構である。公家町廃絶に伴なって埋められたものと考える。宅地25の敷地南部に設けられた庭園の一部を構成する池であろう。

第16節　Ｓ区（図版77～79・284～291）

（１）概要

Ｓ～Ｗ区は、江戸時代の焼土層、洪水層、整地層の整合的な堆積がよく残り、各地区間で地層の対比が可能である。従って、以上の地区の基本層序の記載は、第１分冊第３章で用いた層名を適宜用いることとする。仙洞御所北側苑路上埋設管設置部分の調査区で、南北約5.0m、東西長約66mの細長い調査区である。調査区東端は、現清和院御門の北西際にまで達する。掘削深の制約のため、完掘できなかった遺構がある。また、既存埋設管によって遺構の多くが壊されていた。既存埋設管の保護のため、十分な調査が行なえなかった箇所も多い。現地表下0.2mまで現代盛土で、それ以下現地表下0.5mまで小礫敷による路面の重なりがある。上部の路面は近代以降の御苑苑路の路面であるが、それ以下は江戸時代中期から後期の路面の重なりである。最下部の路面直下に層厚0.15m以下の宝永大火の焼土層Ⅱがあり、これに覆われた状態で良好に江戸時代前期３の公家屋敷の遺構が残る。これ以下に、複数の整地層と焼土層及び水成砂～

砂礫層を介在させながら、さらに江戸時代前期の公家屋敷の遺構面２面がある。江戸時代前期２の遺構面は現地表下0.7～0.9mで検出され、上部を層厚0.1m以下の寛文頃の火災に伴なう焼土層Ⅲが覆う。この遺構面直下に洪水層Ⅲがある。この洪水層Ⅲの層厚は、S区東部で0.2m、S区西部で0.05mある。江戸時代前期１の遺構面は現地表下1.1～1.3mで検出され、層厚0.3～0.6mの厚い洪水層Ⅳが直接覆う。これ以下は、桃山時代から江戸時代前期の堆積層となる（図27）。下部の洪水層Ⅳの下面が公家町成立期の遺構面と思われるが、調査掘削深の制約がありS区東部の一部のみ調査を行なったが、目立った遺構を検出できなかった。調査は江戸時代中期から後期の路面層をすべて重機で掘削し、路面層直下の宝永大火の焼土層Ⅱより人力で掘下げた。そのため路面の状態を示した江戸時代中期から後期の遺構平面図は、調査後に加工調整したものである（図版287・290）。

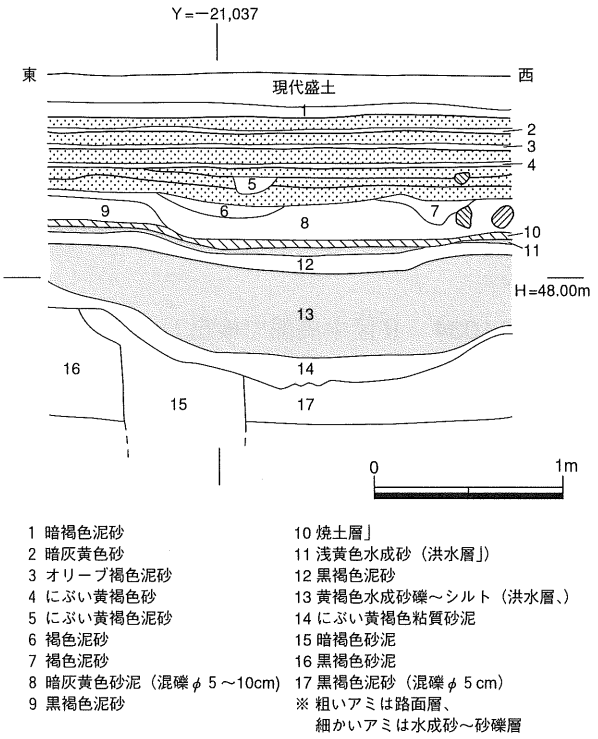


図27　S区東部南壁断面図

江戸時代前期１から３は、調査区北東部隅から西に延びる石組の溝Ｓ１の南側に公家屋敷の遺構がある。溝Ｓ１より北側は固くしまった小礫敷の路面がある。南半の公家屋敷は宅地17、北半の路面は旧清和院通、溝Ｓ１は旧清和院通南側溝と考える。溝Ｓ１と宅地遺構の間は、複数の大きく深い既存埋設管があるため平面的・層位的な関係はよくわからない。宅地側の状況を中心に概要を述べる。江戸時代前期１は、17世紀前半から中頃の遺構面である。この時期には小規模な土壙が点在する。なお、この時期に溝Ｓ１が存在したかどうか不明である。江戸時代前期２は、17世紀後半の遺構面である。塀Ｓ73や土壙Ｓ43などの他に小規模な土壙と溝がある。江戸時代前期３は17世紀後半から18世紀初頭の遺構面である。江戸時代前期２の塀Ｓ73と同じ位置に石列Ｓ17があり、建物の礎石や溝、埋桶などが良好に残る。江戸時代中期から後期は、調査区は全域が清和院通の路面上になるが、溝Ｓ１はそのままの場所に維持される。調査区西部で検出した溝Ｓ23は、溝Ｓ１の南側石組を抜取った痕跡と考える。S区西部の路面状に大型の礎石Ｓ1012を検出している。

（２）江戸時代前期

溝Ｓ１（図版77・291）　東西方向の石組溝である。S区東端から中央部にかけて残るが、それより西側は撹乱により残存しない。江戸時代前期から江戸時代後期まで存続する。北側の石組は、江戸時代前期に構築されたものが江戸時代後期まで維持され、長軸30～90cmの花崗岩切

石を主体とする石を３～５段組む。これに対して、南側の石組は、江戸時代前期の石組の上に江戸時代中期から後期の石組が構築し直されている。その際、旧溝底を上げ、南の石組を少し南に移動させて溝幅を広くし、底部に石敷を施している。江戸時代前期の南側石組は長軸30～40cmの花崗岩切石を主体とする石が２段残る。内法約0.2m、深さは北肩で約0.9m、南肩で約0.3mある。江戸時代中期から後期では、南側石組は花崗岩切石を２段組み、内法約0.6m、深さは約0.4mである。埋土は江戸時代前期と、後期でそれぞれ上下２層に分かれ、いずれも下部は水成砂、上部は人為的な埋土である（図28）。泥土の堆積がみられないことから、流速の早い水流が保たれていたものと思われる。埋土下部からは、17世紀代の遺物が出土している。埋土上部からは、19世紀中頃の遺物が出土している。江戸時代前期では溝Ｓ１より北側に路面があり、南側に宅地遺構がある。江戸時代中期以降は溝Ｓ１の両側に路面がある。このことから、溝Ｓ１は、江戸時代前期は旧清和院通南側溝であり、宝永大火以後も拡幅された清和院通上に残され排水路として機能していたと考える。なお、溝Ｓ１は、Ｕ区北側の立会151と立会153で、東への延長部分を確認している。

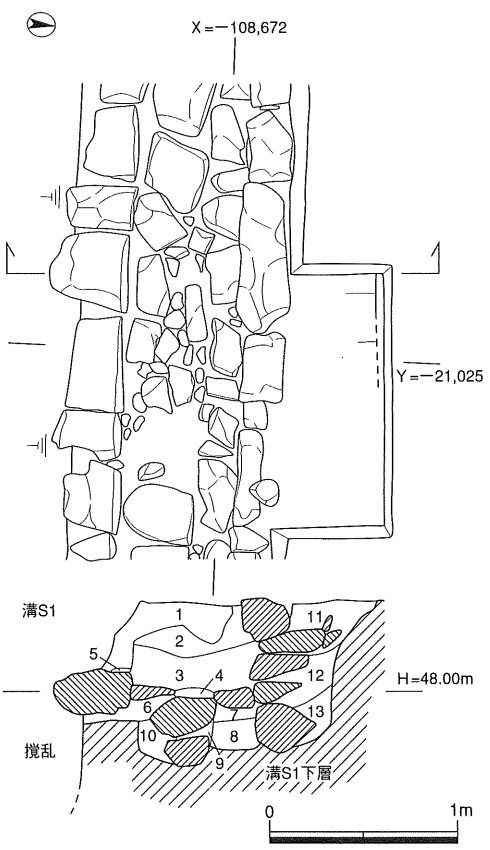


図28　Ｓ区溝Ｓ１実測図

建物Ｓ74　江戸時代前期２の遺構である。調査区中央部で、溝Ｓ１の南側約２mに平行して東西方向の礎石列を検出し、これを建物の北辺と理解した。この礎石列は、撹乱によって南側を壊される。東半では、浅い溝状の掘形内に礎石を配し、西半では溝状の掘形はなく礎石のみが残る。礎石は長軸20～40cmのもので、礎石間の距離は0.5～1.0mと不揃いである。この礎石列より南側には、固い整地面が広がり、束柱状の礎石が２石残る。建物の西端は後述する瓦溜Ｓ43の西側付近と考える。宅地17の北側道路沿いに設けられた長屋建物の一部と考える。東西19m以上で、南北規模は不明である。検出層位から、17世紀中頃から後半の遺構である。

土壙Ｓ43　平面形が不定形な土壙である。Ｙ=−21,065mから−21,071m付近にある。東西約5.5m、南北1.3m以上あるが、深さは0.3mと比較的浅い。埋土は、焼けて変色した瓦を多く含む焼土である。検出層位と出土遺物の年代から17世紀後半の遺構である（図版90・548・554）。寛文頃の火災に伴なう廃棄土壙と考える。

溝S17　江戸時代前期3の遺構である。江戸時代前期2の建物S74の北辺と同じ位置に、石列とその掘形を検出した。南半は撹乱により壊されるが、東西方向の石組溝の北側石組と考える。東部の一部のみに石が残る。長軸20～40cmの花崗岩の切石1段を並べる。西半は石が残存しないが、溝状の抜取痕跡が残る。礎石建物の北辺や塀の基礎の可能性もある。検出層位から、17世紀後半から18世紀初頭の遺構と考える。

建物S73　江戸時代前期3の遺構で礎石建物である。後述する溝S15の北端部西から土壙S6の東肩付近まで東西に延びる礎石列を建物北辺と考える。長軸20～50cmの花崗岩切石を用い、礎石を欠く部分もあるが、約1.0m間隔で配する。これより南側の建物内側部分には束柱と考える礎石が分布し、ここに南北方向の溝S16、埋桶S8－1～4などの付属施設がある。束柱と考える礎石は長軸20～40cmと少し小振である。この礎石は埋桶S8－1～4の周囲にはなく、その両側に分布する。埋桶S8－1～4の東側では、東西方向に並ぶ部分を認めるが、西側では不規則に分布する。宅地17の北辺を画する長屋建物と考える。東西約29mで、南北規模は不明である。検出層位から17世紀後半から18世紀初頭の遺構と考える。

溝S15　Y＝－21,042m付近にある南北方向の石組溝である。長軸20～40cmの花崗岩切石1段を整った面を内側に向けて組む。内法約0.3m、深さ0.25mある。埋土は上下層に分かれ、下層は水成の中粒砂、上層は宝永大火時の焼土層で埋まる。明確な出土遺物はないが、埋没状況から17世紀後半から18世紀初頭の遺構である。

溝S16　溝S15より西へ7mの地点にある南北方向の溝である。撹乱で北と南に分断されている。北側では、小振の石を用いた石組である。南側では、石組はないが、木製の護岸がなされていた可能性がある。南側の掘形の断面形は、上半は45°程度の傾斜をもち、下半は垂直に落ちる。北側では、内法約0.2m、深さ約0.1mである。南側では、幅は上部で約1.1m、下部で約0.6m、深さは約0.5mある。埋土は上下層に分かれ、下層は拳大の礫を含む泥土、上層は宝永大火の焼土層である。堆積状況から暗渠水路の可能性がある。また、埋土下層の拳大の礫は泥水の流出もしくは流入を避けるための造作の可能性がある。明確な遺物はないが、埋没状況から、17世紀後半から18世紀初頭の遺構である。

埋桶S8－1～4（図版78）　溝S16の西側で検出した。桶4基を埋設した遺構で、それぞれ側面と底面に木質が残る。また、埋桶S8－3は桶の北半周囲に長軸15～30cmの河原石を配する。桶の直径はいずれも65～75cm、深さは50cmある。周囲には炭化した木材が広がる。埋土は埋桶8－4が砂泥で、他は炭と焼土で埋まる。炭と焼土は宝永大火に伴なうものである。長屋建物内にある4連の便槽と考える。明確な出土遺物がないが、埋没状況から17世紀後半から18世紀初頭にかけてのものである。

土壙S6　Y＝－21,072mから－21,080m付近で検出した。平面形が隅丸の長方形か正方形の土壙である。東西約7.4m、南北2.3m以上、深さは約0.5mある。埋土は、焼けて変色した瓦を多く含む焼土である。埋土直上を江戸時代中期以降の清和院通路面が覆う。検出層位と出土遺物の年代から18世紀初頭の遺構である（図版92・549・556）。宝永大火に伴なう廃棄土壙である。

（3）江戸時代中期

礎石S1012（図版283）　S区東部の清和院通路面上で検出した花崗岩製の礎石である。礎石本体は東西約1.0m、南北約0.9mある。柱が接する礎石上端の平面部は0.5m四方の隅丸方形を呈する。平面部の中央には柱のズレを防止するための、直径0.1m、深さ0.04mの円形の凹みが削り込まれている。掘形の平面的な規模は、既存埋設管保護のため全掘できなかったので不明である。掘形の深さは、約0.4mある。掘形内に長軸10cm以内の礫を詰め根固めとする。礎石の上部0.1～0.2mが路面上に露出していたものと考える。検出層位と出土遺物の年代により18世紀前半の遺構である（図版549）。江戸時代中期の内裏九門のうちの一つである清和院御門（巽御門）の礎石と考える。対となる礎石が検出できていないため、建物の規模や構造は不明である。

第17節　T区（図版288～290）

（1）概要

仙洞御所北側苑路上埋設管設置部分にあたり、南北約2m、東西約5mの細長い調査区である。現清和院御門の南西部の地点である。現地表下0.5mより上に宝永大火以降の清和院通の路面の重なりがあり、それより下に複数の公家屋敷の遺構面が重なる。基本的にS区と同様の層序である。しかし、異なる部分もある。まず、焼土層Ⅲの層準に二つの火災層が確認できる。上層焼土層を焼土層Ⅲa、下層焼土層を焼土層Ⅲbとして区別した。焼土層Ⅲaと焼土層Ⅲbは寛文・延宝期の数度の火災に対応する可能性がある。宝永大火の焼土層Ⅱと焼土層Ⅲaに挟まれて洪水層Ⅱがある。さらに、洪水層Ⅳの下に整地層を介して、焼土粒を多量に含む焼土層Ⅳがある。洪水層Ⅳの下面で公家町成立期と思われる遺構面を調査したが、目立った遺構を検出できなかった。江戸時代前期1は焼土層Ⅲbの下面、江戸時代前期2は宝永大火の焼土層Ⅱの下面である。江戸時代前期の公家屋敷遺構は宅地17の遺構である。

江戸時代前期1は、17世紀中頃から後半の遺構面である。調査区東端に南北に並ぶ礎石2個と礎石の抜穴と思われる土壙T20を検出した。2個残る礎石は、いずれも長軸30～40cmある花崗岩切石である。礎石列の東側に南北方向の溝T14があり、それより東には直径約0.7mの柱穴が数基検出されるが、建物跡を復元するに至らない。江戸時代前期2は17世紀後半の遺構面である。直径約0.4mの柱穴が3基分布するが、建物跡として復元できない。また、調査区東半に緩やかな落ちがある。

江戸時代中期から後期は、調査区全体に路面を検出した。

第18節　U区（図版288～290）

（1）概要

埋設管設置部分の調査区で、現清和院御門の北東部にあたる地点である。南北約２m、東西約９mの細長い調査区である。掘削深の制限のため、完掘できなかった遺構がある。また、東西方向に複数埋設されていた既存管によって遺構の多くが壊されていた。既存埋設管の保護のため、十分な調査が行なえなかった箇所もある。現地表下0.5mより上に宝永大火以降の路面の重なりを確認できる。それより下が宝永大火以前の公家屋敷の遺構面となる。基本的にS区、T区と同様の基本層序が確認できるが、明確な宝永大火の焼土層Ⅱがなく、洪水層Ⅲも欠く。焼土層Ⅳはないが、洪水層Ⅳの下面にこれに対応する焼けた遺構面がある。江戸時代前期１は、この洪水層Ⅳ下面の遺構面である。江戸時代前期２は寛文もしくは延宝火災の焼土層Ⅲ下面の遺構面である。また、江戸時代中期から後期の路面層はすべて重機で掘削した。そのため路面の状態を示した江戸時代中期から後期の遺構平面図は、調査後に加工調整したものである（図版290）。

江戸時代前期１は17世紀前半、江戸時代前期２は17世紀後半の遺構面である。両遺構面とも性格を明らかにできない柱穴群と土壙群を検出したのみである。ただし、江戸時代前期２の南壁には公家屋敷の建物を構成すると思われる礎石２基が観察できた。宅地17内の遺構である。江戸時代中期から江戸時代後期は、調査区全面に宝永大火以降の清和院通の路面が広がる。

第19節　V区（図版80・292・293）

（1）概要

埋設管設置部分の調査で、現清和院御門の東である。調査区東端は現寺町通に近接する。西部と東部に二分して調査した。西側の調査区は東西約21.5m、南北幅は西側では約1.2m、中央から東側では約2.5mある。東部の調査区は東西約5.5m、南北約２mである。掘削深の制限のため、完掘できなかった遺構がある。また、東西方向に複数埋設されていた既存埋設管によって遺構の多くが壊されていた。既存埋設管の保護のため、十分な調査が行なえなかった箇所もある。現地表下0.6～0.7mより上に宝永大火以降の清和院通の路面の重なりがあり、それより下は宝永大火以前の宅地内の遺構面が重なる。明確な焼土層がなく、洪水層も調査区西端で洪水層Ⅳが確認できるのみである。江戸時代前期は、宝永大火以降の路面層直下の遺構面である。また、江戸時代中期から後期の路面層はすべて重機で掘削した。そのため路面の状態を示した江戸時代中期から後期の遺構平面図は、調査後に加工調整したものである（図版293）。古絵図に基づく宅地割復元によれば、調査区西壁より約６mは、江戸時代前期には宅地17に含まれる。それより東は宅地18である。江戸時代中期から後期は、清和院通の路面上にあたる。

江戸時代前期は、調査区全体に宅地内の遺構を検出している。調査区西部で検出した南北溝

Ｖ１は、宅地17の東の宅地境に関連する遺構である。溝Ｖ１より東側には宅地18の遺構群がある。土壙Ｖ９や土壙Ｖ12は宅地の裏庭空間を利用した大きなごみ穴、塀Ｖ36は宅地の南側を画する掘立柱の塀跡である。井戸Ｖ110は、塀Ｖ36の東の延長線に接するように設けられている。石組井戸と考えるが、石はすべて抜取られていた。宅地18の遺構群は17世紀中頃から後半にかけてのものである。江戸時代中期から後期にかけては、調査区全域に清和院通の路面が広がる状況である。

（２）江戸時代前期

溝Ｖ１　南北方向の石組溝である。長軸30～50cmの花崗岩切石を東肩は２段以上、西肩は１段以上を組む。溝の内法約0.3m、深さ約0.4mある。溝の東側には、拳大の礫が泥土堆積の中に詰込まれている（図29）。この礫集中部分上に東側宅地との境界をなす塀があったものと考える。礫群のさらに東側には花崗岩切石の石組の一部が残るため、当初は礫集中部分が溝であった可能性がある。なお、溝Ｖ１の北への延長部分を立会157で確認している。

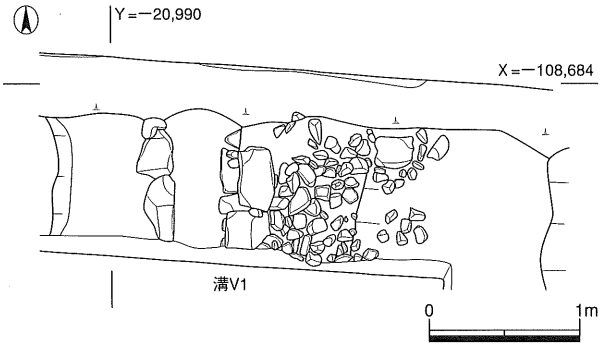


図29　Ｖ区溝Ｖ１平面図

第20節　Ｗ区（図版81・292・293）

（１）概要

埋設管設置部分の調査で、現清和院御門の東である。調査区東端は現寺町通に近接する。東西約５m、南北約2.5mある。掘削深の制限のため、完掘できなかった遺構がある。また、東西方向に埋設されていた既存管によって調査区北半の遺構が失われていた。現地表下0.4mまで現代から近代の地層で、それ以下1.2mまで江戸時代前期から近代に至るまでの路面の重なりが続く。それ以下は洪水層Ⅳである。現地表下0.45mで路面の重なりに挟まれて層厚0.07m以下の洪水層Ⅰがある。また、現地表下1.1mで路面の重なりに挟まれて層厚0.1m程度の洪水層Ⅱと思われる水成中粒砂層がある。路面層の中に、焼土粒が多量に含まれる４層準を認める。出土遺物が少ないため、各路面層に明確な年代を与えることができない（図30）。それ以外の遺構は、最下部の路面上で土壙状の落込み２基を検出したのみである。江戸時代前期の公家町成立期から近代に至るまで清和院通の路面に該当している地点である。

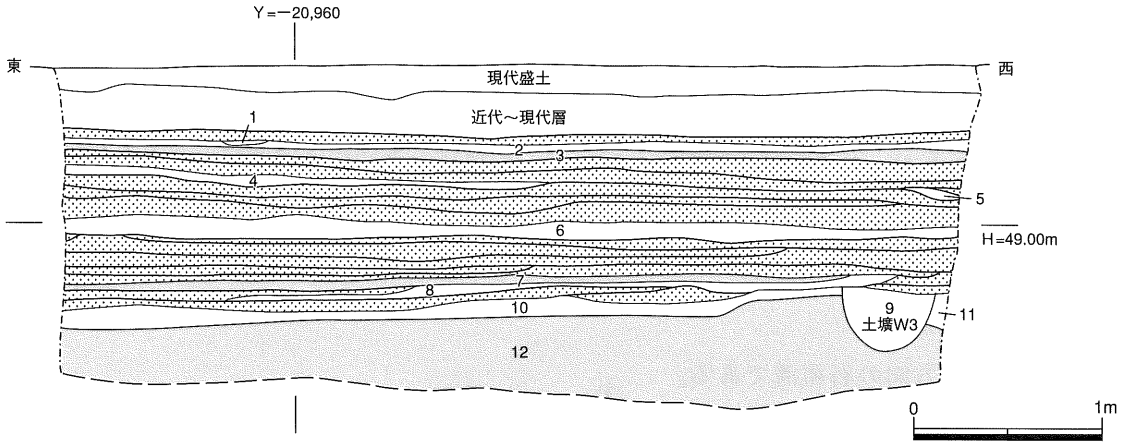


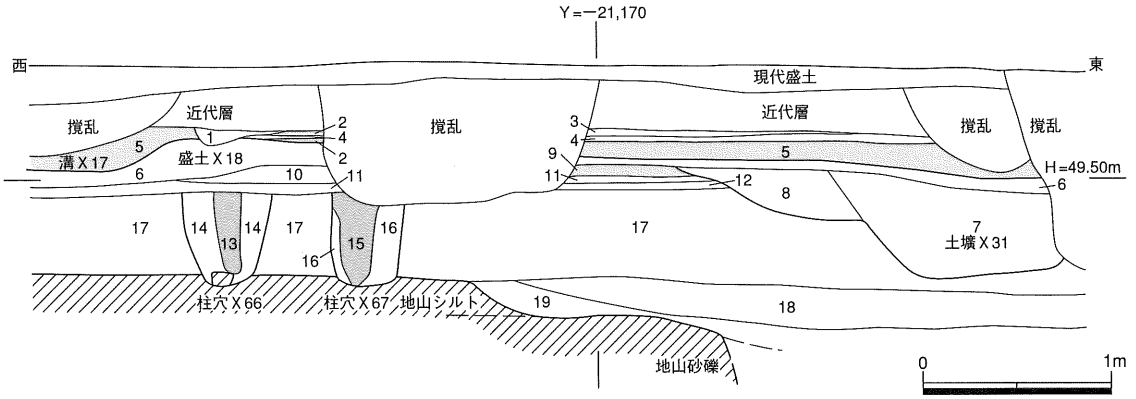
図30　W区南壁断面図

第21節　X区（図版81・82・294・295）

（1）概要

F区南部の調査区である。南北約8m、東西約10mある。調査区の南東隅がわずかに試掘6区にかかる。現地表下0.35mまで近現代の盛土である。それ以下に薄い江戸時代後期の整地層の重なりがある。現地表下0.4mには層厚0.1〜0.15mの水成砂礫層がある。この層は洪水層Ⅰに対比できるものと思われる。それ以下の江戸時代中期の薄い整地層を挟んで、現地表下0.5mに層厚0.07m以下の水成砂礫層がある。この層は洪水層Ⅱに対比できるものと思われる。これ以下江戸時代前期の薄い整地層2層を挟んで、現地表下0.65〜0.7mより下に層厚0.4〜0.6mの桃山時代から江戸時代前期頃の厚い整地層がある。この整地層の下が平安時代から室町時代の遺構が検出される地山面である（図31）。古絵図による宅地割復元によれば、本調査区は江戸時代全体を通じて宅地7と宅地8の境界付近にあたる。なお、調査区の南西部は樹木移植に伴なう大きな撹乱で遺構が壊されている。

江戸時代前期1は、桃山時代から江戸時代前期の厚い整地層の上面で検出した公家町成立期の遺構群である。調査区北半に東西方向の掘立柱の塀X84があり、これが宅地7と宅地8の境界となる遺構と考える。塀X84の両側には柱穴数基を検出した。江戸時代前期2は、洪水層Ⅱの下面で検出した17世紀中頃から後半の遺構群である。塀X84と同じ位置に、塀X83とした礎石列があり、宅地7と宅地8の境界が礎石立ちに変わった可能性がある。塀X83の北側に集石土壙X32と集石土壙X33、南側に集石土壙X38と集石土壙X42などがある。いずれも排水施設と考える。また、塀X83の南側に路面状の小礫敷の広がりがみられる。宅地8の北端部に東西方向の通路が存在した可能性がある。江戸時代中期は、洪水層Ⅰの下面で検出した18世紀代の遺構群である。塀X84・塀X83の位置より0.6〜0.7m南側に、東西に並ぶ礎石X14と礎石X15が



1 にぶい黄褐色砂泥
2 にぶい黄褐色 水成粗流砂～砂礫
3 暗褐色泥砂
4 暗褐色砂泥（上面に細粒砂あり）
5 水成砂礫（混礫φ5cm前後、洪水層Ⅰ）
6 暗褐色泥砂（最下層に焼土を含む）
7 にぶい黄褐色泥砂
8 にぶい黄褐色泥砂
9 黒褐色水成砂礫～礫（洪水層Ⅱ）
10 にぶい黄褐色砂泥
11 にぶい黄褐色砂泥
12 にぶい黄褐色砂泥
13 暗褐色砂泥（混中～大礫）
14 暗褐色砂泥
15 にぶい黄褐色砂泥
16 黒褐色砂泥
17 暗褐色砂泥
18 暗褐色泥砂
19 黒褐色砂泥

図31　X区北壁断面図

ある。これ以外に溝や土壙などの遺構がある。江戸時代後期は洪水層Ⅰの上位に重なる整地層上面で検出した18世紀後半から19世紀中頃にかけての遺構群である。この遺構面には、宅地の境界とみられる遺構はない。しかし、前代の宅地境界付近より南側は大型のごみ穴複数が集中するのに対し、北側には目立った遺構がなく、明らかに南北で土地利用の違いが見て取れる。江戸時代後期でも、宅地7と宅地8の境界は前代と同様の場所に維持されているものと考える。

（2）江戸時代前期

塀X84（図版295）　X=−108,541m付近で検出した東西方向の柱穴列である。直径0.3～0.6mの円形掘形の中央に直径12～16cmの柱痕跡が観察できる。柱穴の深さは0.3～0.6mある。柱穴X50では、一辺10～12cmの角柱痕跡が明瞭である。柱穴が重なる部分があり、2時期の柱穴列からなることが明らかである。柱間は不明である。検出層位と出土遺物から、17世紀前半の遺構と考える。公家町成立期の宅地7と宅地8の境界となる塀跡と考える。

塀X83（図版295）　塀X84と同様の位置にある東西方向の礎石列である。長軸20～30cmの花崗岩切石の礎石3石が並ぶ。柱間は約0.9mである。検出層位から17世紀中頃から18世紀初頭の遺構である。塀X84に後続する宅地7と宅地8の境界となる塀跡の可能性がある。

集石土壙X32（図版295）　塀X83の北側に近接してある。東西約0.9m、南北約0.7m、深さ約0.4mある。埋土には長軸30cm以下の礫が詰まる。検出層位と出土遺物から17世紀中頃から18世紀初頭の遺構である。宅地7の南端にある排水施設と考える。

集石土壙X33（図版295）　集石土壙X32の東側に近接してある。東西約0.75m、南北約0.7m、深さ約0.3mある。埋土には長軸20cm以下の礫が詰まる。検出層位と出土遺物から17世紀中頃から18世紀初頭の遺構である。宅地7の南端にある排水施設と考える。

集石土壙X42（図版295）　塀X83の南側にある。東西約0.5m、南北約0.6m、深さ約0.3mある。埋土には長軸25cm以下の礫が詰まる。検出層位から17世紀中頃から18世紀初頭の遺構であ

る。宅地８の北端部にある性格不明の遺構である。

第22節　Y区・Z区（図版82・296）

（１）概要

樹木の移植に伴なう調査である。両区ともG区の南側に位置し、平面形は南北に長い長方形の調査区である。調査区の位置と期間などが制約されていたため江戸時代後期の遺構に限定して調査を行なった。G区の調査結果から道路側溝の検出を目的とした。Y区は西側溝付近、Z区は東側溝が想定される位置である。

Y区では、近代の樹木移植による撹乱がある。調査区を可能な限り西側に設定したが、西側溝の検出はできなかった。そのため地山面まで掘下げ断面観察による調査を行なった。基本層序は現代盛土以下、１～４層は近代の樹木の抜取穴である。５層は黒褐色砂泥層、６層は灰黄褐色砂泥層、７層は褐色砂泥層で、５層から７層のいずれも炭・焼土を含んでいる。天明大火以降の層とみられる。８・９層は灰褐色砂泥で炭・焼土を多く含んでおり、火災後の廃棄土壙とみられる。13層は地山とみられる褐色砂泥層である。調査区内では西側溝は検出できなかった。西側１m以内に位置するとみられる。また、道路面とみられる堆積層は確認できなかった(図32)。

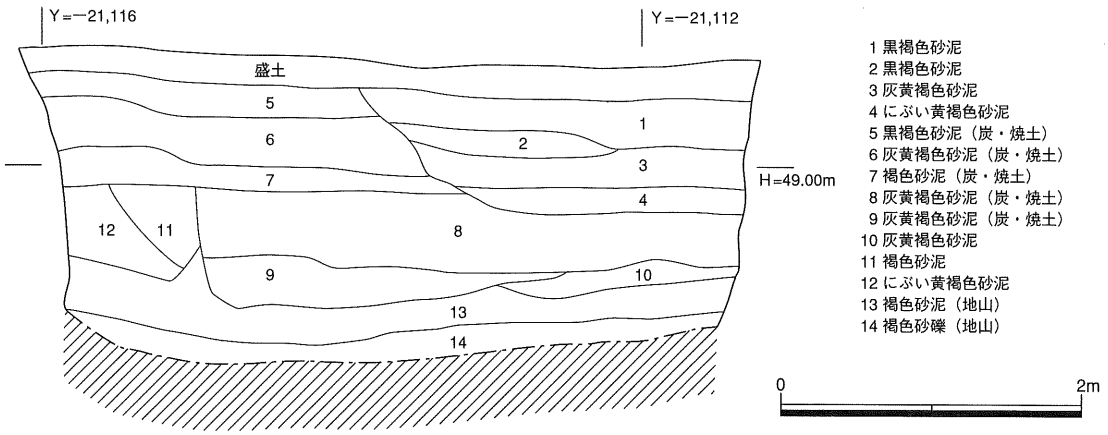


図32　Y区北壁断面図

Z区では、江戸時代後期の遺構面で南北道路の東側溝にあたる石組溝C10を検出した。この溝は北のD区においても検出しており、この位置が最も南となり総延長は約200mを検出したことになる。

（２）江戸時代後期

溝C10　東側で検出した南北方向の石組溝である。北側、南側とも調査区外に延びる。検出分の長さは約10mで、掘形の最大幅は約1.5m、深さ約0.6mである。宅地側となる東側の石組が

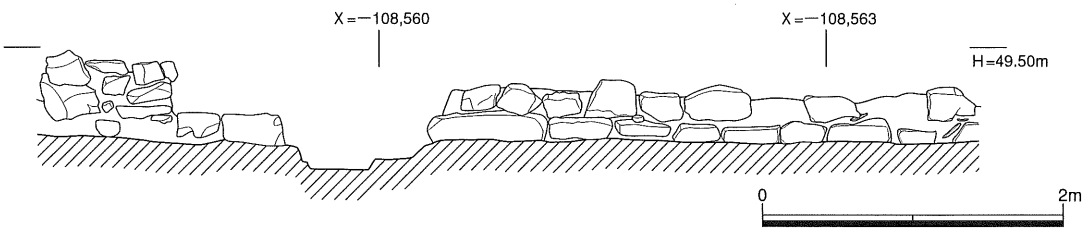


図33　Z区溝C10東石組実測図

良く遺存する。石組は花崗岩の切石で構成され、東側は北端が3段、他は2段残存していた。最下段の石はいずれも上面が平坦で扁平な石材が据えられていた（図33）。内法は約0.45mである。西側は断続的に最下段の石材が残存していたが、東側に比べ石材は小さい。埋土は灰黄褐色泥砂で、炭・焼土を多く含む。19世紀中頃の遺物が出土した。

道路C12　残存状態が不良で、南壁で小礫が敷かれた層を確認した。

第９章　遺　物

第１節　土器・陶磁器類

１　土器・陶磁器類の記載について

本遺跡で出土した遺物は、遺物整理箱で総数約9,000箱に達する。そのうち桃山・江戸時代の遺物がほぼ80％を占めており、本報告書に図化し掲載できた資料はごくわずかである。まず、年代基準資料とした遺構一括遺物を記載する。次に、主要遺構出土資料を中心にして、各調査区出土資料を記載する。その際、その他の出土遺物も必要と思われるものは記載した。土器・陶磁器類は材質・器形・生産地などが多岐にわたることから、種類と器形の分類基準と記載方法などを示しておく。

（１）種類

種類は土師器・土師質土器・土製品・瓦質土器・軟質施釉陶器・磁器・陶器に分類した。土師器、土師質土器、土製品は材質は同じであるが、土師器皿など中世以前の製作技法を踏襲するものを土師器とし、桃山時代もしくは江戸時代に出現する器形を土師質土器、人形・ミニチュアなどを土製品とした。瓦質土器は瓦質のもので、火入や瓦灯類が含まれる。軟質施釉陶器は、いわゆる初期の京焼類、楽焼類の他、低火度焼成で土器質の鉛釉製品を総称している。これには、透明釉の灯明皿、源内焼などが含まれる。ただし、施釉されたミニチュア類・箱庭道具などは土製品とした。磁器には漳州窯系製品、朝鮮王朝製品など陶器に近い質感を持つものも含めている。ただ、肥前系や瀬戸・美濃系の陶胎染付などは陶器とした。陶器類は施釉陶器、焼締陶器、炻器などである。

（２）器形

器形の大区分は基本的には東大分類[1)]に依拠し、一部を改変した。ただし、東大分類では「器種」と呼称するが、当研究所の慣用に従い「器形」とした。以下に改変した項目を列挙しておく。なお、各器形の小区分は慣用的な呼称を用いている。

①　土師器の皿類は前述のように、中世以前の製作技法を踏襲するものを「土師器皿」とし、ロクロ成形されたものなどは「土師質土器皿」とした。また灯明皿として使用されたことが明瞭な場合でも、灯明皿とはせず土師器皿とした。なお土師器の編年と細分化された器形は、京都編年に依っている[2)]。

②　碗類は口縁部の形状が単純なものを「碗」とし、玉縁や内折・外折などの形状が複雑なものを「鉢」とした。大きさでの碗と鉢の区別はしない。また蓋を有するものでも、形状が碗であれば碗とする。口縁端部に釉剥ぎを認めるもののみを「蓋物」とする。

③「猪口」は蕎麦猪口のような大型のものを碗、小型のものを「杯」とした。また、杯のなかに紅皿を含めず、新たに「紅皿」という器形を加えた。

④「蓋」という分類はなくし、「～の蓋」とした。身の不明な蓋は「不明蓋」と表記した。

⑤　香炉と火入を区別する。口縁部にかえり（内側折込・肥厚）があるものを「香炉」とした。かえりがないものは「火入」とした。また、火入と火鉢は区別せず、すべて「火入」とした。奈良火鉢系の瓦質のものも火入とする。「風炉」・「涼炉」は火入と区別した。

⑥「釜」の器形を設ける。大和型の土師質土器や、京焼の陶器釜が含まれる。

⑦「皿」の分類から土師器皿と灯明皿を除き、それぞれ「土師器皿」と「灯明皿」を設けた。灯明皿には、京・信楽系の内面に線刻や菊花状の貼花のあるものや、備前系のものが含まれる。

⑧　塩壷は筒形のものを「焼塩壷」とし、鉢形のものを「花塩壷」とした。

（3）生産地

基本的には東大分類[3]を踏襲し、その他に現時点での研究成果に基づき分類した。特に、京焼と認識されるものについては、京・信楽系と区別した。また、生産地の特定が困難なもので、推定できるものについては「肥前か」などと記載した。

（4）実測図

遺物実測図は1/4を基本としており、大きいものは1/5・1/8などを採用し、その都度表記した。刻印などの拓影は1/1もしくは1/2で示したが、いわゆる肥前系京焼風陶器の刻印のうち周知されているものは、拓影を掲載せず観察表や本文中に記載した。青花、染付、上絵、二彩以上の陶器類及び一部の単彩陶磁器類は写真貼込みの図版とした。その際、見込や底部文様の写真は、立面にあわせてレイアウトしている。

（5）観察表

年代基準資料については観察表で記載した。

①　表の遺物No.は図版の番号に対応している。

②　種類記載の際、土師質土器を「土師質」、瓦質土器を「瓦質」、軟質施釉陶器を「軟質施釉」と略記した。

③　法量は基本的に口径・底径・器高を示し、0.1cmまで計測した。また遺物の残存率が50%以下ものについては、復元した値を（推定）として記載した。なお計測部位については図34を参照されたい。

④　胎土の色調は『新版標準土色帖[4]』を用いた。

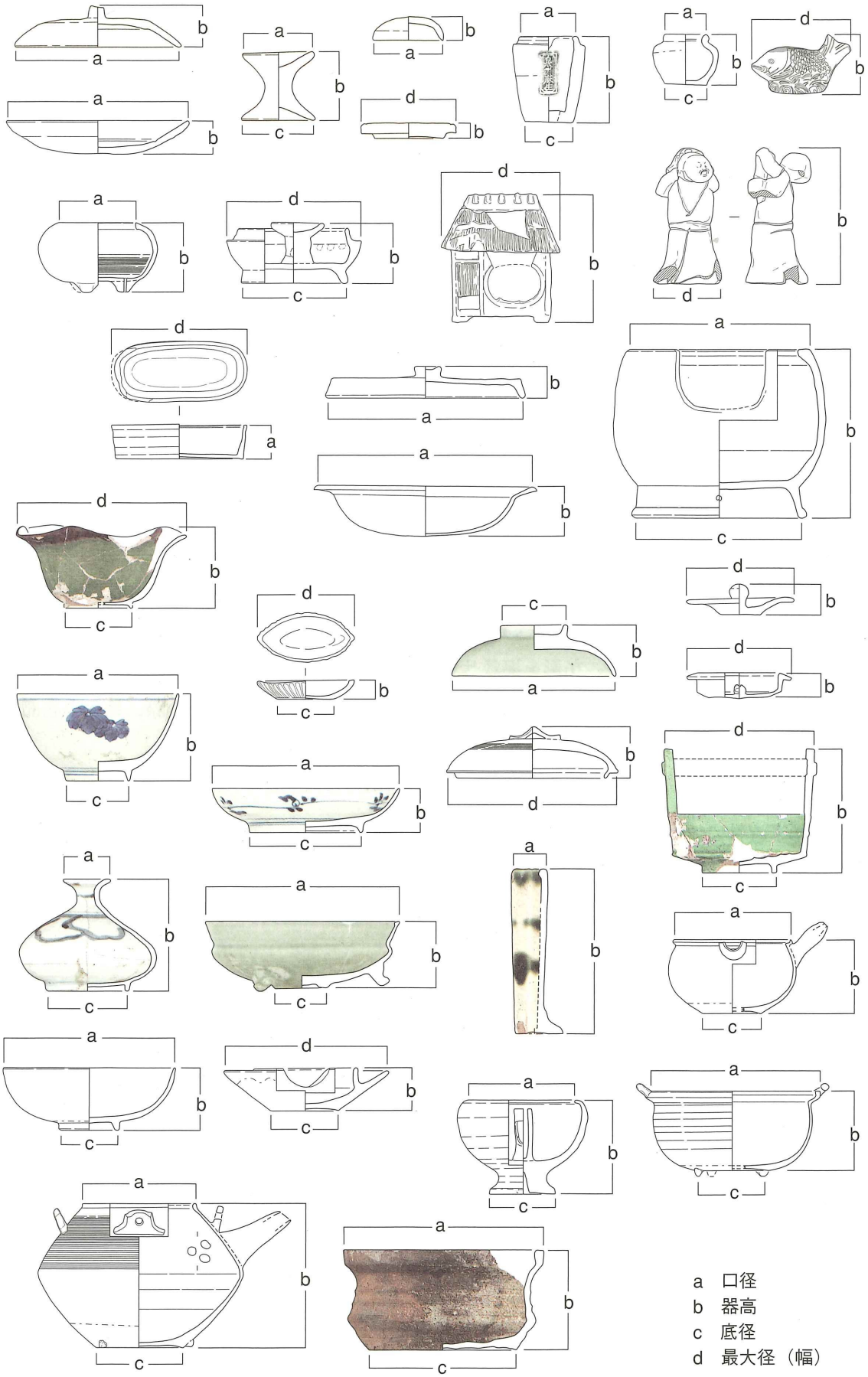


図34　遺物計測部位

（6）産地組成表とグラフ

年代基準資料については、種類・産地別に破片数を集計し、その結果を組成表とグラフで示した。産地組成表に記載した破片数は、すべて接合前の総破片数である。組成表とグラフには土師器の破片数は含んでいない。土師器は多くの基準資料で圧倒的多数を占めており、土師器を含めると産地組成グラフとしての用をなさないと思われたからである。例えば、基準資料の穴蔵Ｆ1387の土層観察用アゼ内遺物の産地組成は土師器が99.41％を占めている（図35）。

種類・産地	破片数
土師器	67346
土師質土器	152
瓦質土器	2
土製品	4
肥前系磁器	79
肥前系陶器	55
瀬戸・美濃	4
信楽	29
丹波	4
京都	42
不明・その他	28
計	67745

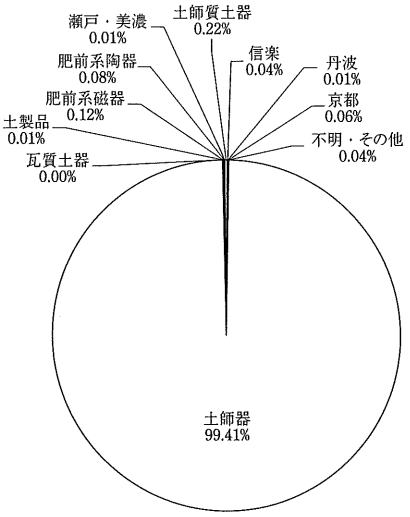


図35　穴蔵Ｆ1387土層観察用アゼ出土遺物産地組成

（7）主要遺構時期別対照表

遺物図版に掲載した主要な遺構の時期別の一覧を表２に示す。

表２　主要遺構時期別対照表

西暦	時代区分	土師器		基準資料	主要遺構	備考
1600	桃山	XI期	古	土壙Ｆ1605	土壙Ｂ1000・埋納土壙Ｆ2390・埋納土壙Ｆ2383	
	江戸前期				堀Ｇ1940・池Ｇ2180・土壙Ｇ2418・池Ｇ2385	
			中	穴蔵Ｃ548Ｂ	溝Ｃ918・井戸Ｇ3073 井戸Ｄ335	
			新	土壙Ｆ1432	溝Ｈ270 土壙Ｇ1156・土壙Ｇ1157・土壙Ｇ1164	
		XII期	古	土壙Ｂ725 土壙Ｆ1455	土壙Ｅ310・土壙Ｅ235・穴蔵Ｇ749・整地Ｇ3751 土壙Ｇ1447	寛文11年火災
1700			中	土壙Ｆ1244 穴蔵Ｆ1387	穴蔵Ｆ1475 土壙Ｈ33・土壙Ｇ1717・土壙Ｇ1716・土壙Ｇ1370 土壙Ｇ1273	宝永大火
			新		土壙Ｂ674・土壙Ｇ1133・土壙Ｇ639・土壙Ｇ302・整地Ｇ3725 土壙Ｅ211・井戸Ｆ950・土壙Ｇ593・井戸Ｐ69	
	江戸中期	XIII期	古	土壙Ｆ776 土壙Ｈ166 土壙Ｈ271	土壙Ｇ555・土壙M12 土壙Ｅ188	
			中	土壙Ｅ45	井戸Ｇ741・土壙Ｇ471 土壙Ｃ628・土壙Ｅ76・土壙Ｆ1265・土壙Ｒ21 土壙Ｅ12	天明大火
1800			新	土壙Ｂ716	土壙Ｂ721・埋納土壙Ｇ182・埋納土壙Ｇ2700・埋納土壙Ｇ1221	
	江戸後期	XIV期	古	土壙Ｇ348 土壙Ｂ687	土壙Ｈ211 土壙Ｆ1400・土壙Ｇ348・池Ｇ250・池Ｇ364 溝Ｅ50	
			中	土壙Ｈ15	整地Ａ３・土壙Ｅ48・池Ｆ1200 溝Ａ７・井戸Ａ354・土壙Ｇ45・溝Ｃ10・溝Ｃ156・池Ｇ253 瓦組土壙Ｂ636	

（８）主要参考文献

遺物の生産地、年代観、技法などの分類には以下の文献を参考にした。

『呉州赤絵・呉州染付・餅花手』愛知県陶磁資料館、1996年。
『遺跡にみる戦国・桃山の茶道具』愛知県陶磁資料館、1997年。
『煎茶とやきもの　江戸・明治の中国趣味』愛知県陶磁資料館、2000年。
『瀬戸大窯とその時代』愛知県陶磁資料館、2001年。
『粟田焼』粟田焼保存研究会、1999年。
『有岡城跡・伊丹郷町Ⅵ－宮ノ前地区市街地再開発に伴う発掘調査報告書－』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所、1999年。
江戸遺跡研究会編『甦る江戸』新人物往来社、1991年。
江戸遺跡研究会編『江戸の食文化』吉川弘文館、1992年。
江戸遺跡研究会編『江戸文化の考古学』吉川弘文館、2000年。
江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究辞典』柏書房、2001年。
『江戸の物流－陶磁器・漆器・瓦から－』江戸遺跡研究会、1999年。
『江戸と国元』江戸遺跡研究会、2000年。
『食器にみる江戸の食生活』江戸遺跡研究会、2001年。
『遺跡からみた江戸のゴミ』江戸遺跡研究会、2003年。
『江戸在地土器の研究』Ⅰ　江戸在地土器研究会、1991年。
『江戸在地土器の研究』Ⅱ　江戸在地土器研究会、1994年。
『江戸在地土器の研究』Ⅲ　江戸在地土器研究会、1998年。
『江戸在地土器の研究』Ⅳ　江戸在地土器研究会、2000年。
『難波宮址の研究』第九（財）大阪市文化財協会、1992年。
『堂島蔵屋敷跡－1998年度大阪第５地方合同庁舎建設に伴う福島１丁目所在遺跡発掘調査報告書－』（財）大阪市文化財協会、1999年。
『麻田藩陣屋跡－蛍池駅西地区第１種市街地再開発工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』（財）大阪府文化財センター、2002年。
大橋康二『古伊万里の文様－初期肥前磁器を中心に－』理工学社、1994年。
尾野善裕「三千院の天盃と土師器皿に関する二・三の問題」『学叢』第22号　京都国立博物館、2000年。
『関西近世考古学研究』Ⅲ　関西近世考古学研究会、1992年。
『関西近世考古学研究』Ⅶ　関西近世考古学研究会、1999年。
『関西近世考古学研究』Ⅸ　関西近世考古学研究会、2001年。
『関西近世考古学研究』Ⅹ　関西近世考古学研究会、2002年。
『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁史研究会、2001年。

『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会、2000年。
『国内出土の肥前陶磁　東日本の流通をさぐる』九州近世陶磁学会、2001年。
『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる』九州近世陶磁学会、2002年。
『鍋島の生産と流通－出土資料による－』九州近世陶磁学会、2003年。
『日本人が好んだ中国磁器』京都国立博物館、1991年。
「伏見奉行所発掘調査報告Ⅱ－桃陵団地立て替え工事に伴う埋蔵文化財文化財調査－」京都市住宅局・伏見城研究会、1997年。
『平安京左京二条四坊十町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告　第19冊（財）京都市埋蔵文化財研究所、2001年。
『京都大学構内遺跡調査研究年報1996年度』京都大学埋蔵文化財研究センター、2000年。
『'99徳島城下町研究会発表要旨　京焼－消費地出土の様相－』考古フォーラムくらもと他、1999年。
『第２回徳島城下町研究会発表要旨　四国・淡路の陶磁器－生産と流通－』考古フォーラムくらもと他、2000年。
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号（財）京都市埋蔵文化財研究所、1996年。
『内野山北窯跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(20)佐賀県教育委員会、1996年。
『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館、1984年。
『柴田コレクション展』Ⅰ　佐賀県立九州陶磁文化館、1990年。
『柴田コレクション展』Ⅱ　佐賀県立九州陶磁文化館、1991年。
『柴田コレクション展』Ⅲ　佐賀県立九州陶磁文化館、1993年。
『柴田コレクション展』Ⅳ　佐賀県立九州陶磁文化館、1995年。
『柴田コレクション展』Ⅴ　佐賀県立九州陶磁文化館、1997年。
『柴田コレクション展』Ⅵ　佐賀県立九州陶磁文化館、1998年。
『柴田コレクション展』Ⅶ　佐賀県立九州陶磁文化館、2001年。
『柴田コレクション展』Ⅷ　佐賀県立九州陶磁文化館、2001年。
『柿右衛門－その様式の全容－』佐賀県立九州陶磁文化館、1999年。
『東南アジアの茶道具』茶道資料館、2002年。
『竹ノ鼻遺跡－蒲生郡蒲生町石塔－』滋賀県教育委員会、1998年。
『漆原Ｃ遺跡発掘調査報告－近世信楽焼窯跡の調査報告－』信楽町教育委員会、1993年。
鈴木裕子「出土資料からみた仁清」『研究紀要』第10号　野村美術館、2001年。
『瀬戸市史　陶磁史編６』瀬戸市史料編纂委員会、1998年。
『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品－資料集』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、2001年。

『千駄ヶ谷五丁目遺跡』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会、1997年。
堀内秀樹「江戸遺跡出土陶磁器の段階設定とその画期」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』竹石健二先生・澤田大多郎先生の還暦を祝う会、2000年。
田中一廣「京都深草の「焼塩壺」伝世品」『研究紀要』２（財）大阪府埋蔵文化財協会、1994年。
『第３回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会、2000年。
陶器全集刊行会編『日本古陶銘款集』平安堂書店、1973年。
『東京大学構内遺跡調査研究年報』２　東京大学埋蔵文化財調査室、1999年。
『東京都千代田区丸の内三丁目遺跡－東京国際フォーラム建設予定地の江戸遺跡の調査－』東京都埋蔵文化財センター、1994年。
『汐留遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター、1997年。
『汐留遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター、2000年。
『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター、1996年。
『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター、1997年。
『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ』東京都埋蔵文化財センター、1998年。
『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅳ』東京都埋蔵文化財センター、1999年。
『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ』東京都埋蔵文化財センター、2000年。
『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅵ』東京都埋蔵文化財センター、2001年。
『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅶ』東京都埋蔵文化財センター、2001年。
『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅷ』東京都埋蔵文化財センター、2001年。
『京の公家屋敷と武家屋敷－同志社女子中・高校静和館地点・校友会新島会館別館地点の発掘調査－』同志社埋蔵文化財委員会調査報告Ⅰ、学校法人　同志社、1994年。
『上京・西大路町遺跡桜の御所跡隣接地点の発掘－同志社大学育真館地点の発掘調査－』同志社大学校地学術調査委員会、1997年。
『東洋陶磁史－その研究の現在－』東洋陶磁学会、2002年。
『美濃桃山陶の系譜』土岐市美濃陶磁歴史館、1995年。
『洛中桃山のやきもの』土岐市美濃陶磁歴史館、1997年。
『織部 御深井 古染付』土岐市美濃陶磁歴史館、1999年。
『豊臣期のやきもの』土岐市美濃陶磁歴史館、2000年。
『新蔵町１丁目遺跡企業局総合管理事務所地点Ⅱ』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第30集 徳島県教育委員会（財）徳島県埋蔵文化財センター、2000年。
『南前川町１丁目遺跡－鳴門教育大学（附小）校舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第36集　徳島県埋蔵文化財研究会、2002年。
『論集　徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会、2002年。
『鍋島藩窯－出土陶磁に見る技と美の変遷－』鍋島藩窯研究会、2002年。

西秋良宏編『加賀殿再訪　東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学総合研究博物館、2000年。
『貿易陶磁研究』No.19日本貿易陶磁研究会、1999年。
『南蛮・島物－南海請来の茶陶－』根津美術館、1993年。
『華南のやきもの－黄瀬戸・織部・青手古九谷の源流を求めて－』根津美術館、1998年。
『初期伊万里と鍋島－山本コレクション受贈記念－』根津美術館、1998年。
『知られざる唐津　二彩・単色釉・三島手』根津美術館、2002年。
藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10号（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、2002年。
矢部良明他編『日本陶磁大辞典』角川書店、2002年。
『冷泉家－近世公家の生活と伝統文化－』冷泉家時雨亭文庫・朝日新聞社、1999年。

2　年代基準とした土器・陶磁器類

本報告書で年代基準の資料としたものは15遺構からの出土遺物である。資料の抽出にあたっては、各遺構の出土層位や検出状況をもとに、比較的使用期間の短い日常のごみ穴を中心にしている。また遺物の種類や産地の多いものを対象とした。

土壙Ｆ1605（図版１・297～299、表３～５、図36）　図版297の１～36は土師器の皿で、蓋と推定できるものは出土していない。大型皿では内面の圏線状の窪みが明瞭であり、ナデの最終部を口縁端部に引抜いた痕跡が残る。中型皿に底部を窪ますものが含まれる。38・39は京都産の焼塩壷である。法量が大きく、器壁の薄い初現期のものである。40～43は堺系の焼塩壷で、外面に面取の残るもの、口縁部にかけて窄まるものなどがある。44～46は土師質土器の釜・炮烙で、口縁端部が直立し屈曲した口縁部の直下にタタキ痕が残る、いわゆる大和型といわれるものである。炮烙には45のように浅いものと、46のように深いものとがある。いずれも外面に煤が付着している。48～51は瓦質土器で火入、鉢、瓦灯など器種が豊富である。土師質土器とあわせた出土遺物組成は40％近くある。52・53は軟質施釉陶器の碗で、52はロクロ成形で内面が黒釉、外面が緑がかった透明釉で、全体に釉薬は薄く胎土の赤色が透ける。体部外面には斜めに鎬が入る。53は手捏ねで内面黒釉、外面は白釉で銀化（いわゆる虹彩化・白霜化）が激しい。54は信楽の鉢である。図版298の１～10は輸入磁器で、青花が多く、４のような漳州窯系の粗製の皿もみられる。10は朝鮮王朝の白磁碗である。施釉陶器類は11～26の瀬戸・美濃系の陶器が主流を占めるが、32・33の砂目の肥前系皿も含まれる。図版298の27～30と図版299の１～４は焼締陶器である。28は内面に波状で渦巻の摺目をいれた備前系の擂鉢[5]で、外面底部と体部下半をケズリ、外面の口縁屈曲部直下に重焼きの痕跡が残る。30は丹波と思われる筒形の鉢である。図版299の擂鉢は信楽のものがほとんどであるが、４の備前のものも含まれる。信楽擂鉢は口縁部が外反し、内面底部は斜格子の摺目で、生産地資料では勅旨７号窯資料[6]に近いものと思われる。

穴蔵Ｃ548Ｂ（図版１・300～302、表６～８、図37）　土師器皿類（図版300の１～17）には小型皿（１～６）、丸底の中型皿（７～10）、見込に圏線が付く大型皿（11～17）がある。これらの皿類はいずれも褐色から黄橙色の色調を呈し、胎土には少量の雲母や砂粒を含む。Ⅺ期新段階の古相に属する。土師質土器には小型壷（19）、丸底の鉢形容器（18）、炮烙（20）がある。炮烙は口縁端部が上につまみ上げられている。瓦質土器には香炉（21）、火消壷（22）がある。磁器は中国産が主体で、国産がわずかにある。中国産には景徳鎮窯系の青花（図版300の25～36、図版301の１・３～８・11・12）と白磁（図版301の10）、漳州窯系の青花（図版300の37～40、図版301の２・13・14）といわゆる呉須赤絵（図版301の15）がある。景徳鎮窯系の青花碗には３・４などのように器壁が非常に薄い製品がある。見込や高台内には圏線と「大明宣徳年製」「大明成化年製」「大明成化年造」「成化年製」「雅」などの文字を入れるものが多い。国産磁器は初期の肥前系染付がある。図版300の23・24は筒形碗で、口縁部付近に圏線をめぐらせ、草花文を丁寧に絵付する。図版302は国産の陶器で肥前系（３～16）と瀬戸・美濃系（17～20・23）があるが、肥前系の占める割合がかなり多い。この遺構からは碗の出土が多い。３～９は灰釉系の丸碗で、発色は薄い黄色、茶色、灰色、青味が強いものなど様々である。６・７は高台内にも施釉する。天目碗もみられる。16は絵唐津の皿で、見込に砂目積みの跡が残る。瀬戸・美濃系にも碗がある。鉄釉の丸碗（18）と天目碗（17）、灰釉と鉄釉の掛分けの沓茶碗（19）がみられる。また、織部の四方手鉢（23）がある。１・２は碗で、２は鉄釉掛けで見込に小さな目痕が付く。高台は貼付で、底部全体に丁寧なナデ跡がみられることなどから京都産と考えられる。備前産の小壷（21）は底部に糸切痕が残る。丹波産の小壷（22）の底部は板起こし成形である。24の擂鉢は体部外面に指頭痕を多く残し、口縁部の外反はわずかである。底部には糸切痕を残すことから東海系の可能性がある。使用により摺目が磨滅している。

土壙Ｆ1432（図版２・303～305、表９～11、図38）　図版303の１～39は土師器の皿で、大型皿の見込屈曲部にみられる圏線状の窪みが明確になるものが混在するようになる。47～59は焼塩壷で、いわゆる輪積みタイプのもので占められている。刻印をもたないものは細長く口径が狭い。刻印をもつものは大型で「ミなと/藤左衛門」に限られる。68・72は丹波焼で、68は体部に屈曲部をもつ鉢で口縁部を中心に灰釉が掛けられている。72は大型の盤で、内面底部から立上がりの部分に４～５cmの陶片を重焼きのために挟む[7)]。69は京焼の平碗底部と思われ、透明釉で高台内に「音次」の刻印がある。京焼平碗としては、初現期のものである。70は瀬戸・美濃系の白釉の碗で、内面に呉須で暦文のような文様を描く。図版304は磁器類で、肥前系磁器の１・13など高台無釉のものや、８の高台鉄釉のもの、７の高い高台をもつものが混在する。皿は碗類に比べ出土量が少なく、図示できる資料も少ない。11・20のように、古い様相のものが多い。輸入磁器は前代からのものが中心で、27のように16世紀代からの伝世品も含まれる。中国の輸入磁器出土量が肥前系磁器を上回る。ただ土壙Ｆ1432より古い様相を示す溝Ｈ270出土遺物では、輸入磁器と肥前系磁器との組成比がほぼ拮抗している。輸入磁器が多いのは、土壙Ｆ1432の個性である可能性が高く、一般的な様相ではない。1660年代では圧倒的に肥前系磁器

優位になっていることから、1650年代に画期があると推定される。擂鉢類は丹波のものが主流で、信楽擂鉢では図版305の1の口縁端部に縁帯部をもつものがあるが、土壙B725にみられる鉄泥を塗るものは含まれない。

土壙B725（図版2・306～314、表12～20、図39）　図版306の1～68は土師器の皿と蓋である。中型の皿に底部中央を外面から押上げたものがある（28～30）。63～68は土師器の蓋で、63の蓋は外面に「度章□」の墨書がある。胎土や色調は変わらないが、他の蓋とは製作手法が異なるもので類例もない。他の蓋は、つまみの形状がほぼ円柱形で、つまみ位置が中心にある。87は高杯状の土師器で、灯明皿の受台かとも思われるが用途は不明である。88～91は灰白色の胎土で、内湾する体部をもつ丸底の手捏ね碗である。図版307は土師質土器類で、1～11は京都産の焼塩壷で輪積み成形で、口縁部から肩部にかけてやや撫肩になるもの（3・4）がある。12の花塩壷の蓋は「なんばん七度/本やき志不」の刻印が押されている。13～33は堺系の焼塩壷で、二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」の刻印があるものと、同じ手法で作られた、やや小振の刻印のないものとに分けられる。34～37は土師質土器である。炮烙は丸底で、体部上方で屈曲して、外へ開くいわゆる京都型のもので[8]、ほぼ同法量である。図版308・309と図版310の1～43は肥前系磁器である。図版308は染付碗で、比較的大振なものがほとんどで、高台内は一重圏線の中に「太明」「大明成化年製」などの銘款を書くものが大部分を占める。24は同一文様の碗が20個以上出土しており、また他の文様の碗にも複数の個体があることから、組物であろう。図版309の1～12は染付の皿で、ハリ支えのものが主体である。5・6などのように高台径が小さい古い様相のものも含まれる。小杯は口縁が端反のものが多く、染付よりも白磁のものが多い。23～26は瑠璃釉で、23は菊花文を陽刻した合子、26は瑠璃地に赤で笹文が描かれているが、剥落部が多い。29は青磁染付の大碗で青磁釉下に染付するものである。図版310の1～27は白磁で、肥前系磁器の25％を占めている。碗は白磁釉に、透明なものと白濁した印象のものとの二種類があり、後者には細かい貫入が目立つ。28～35は上絵付の碗で、いわゆる仁清手や、濃い青と黄色を使う古九谷様式のものが多いが、剥落部が多く、上絵付の全容がわかるものはない。36～42は青磁で36・37は高台無釉の碗である。38～40は見込蛇ノ目釉剥ぎの皿で、38・39には釉剥ぎ部に二重の鉄釉圏線がある。図版310の43～46、図版311の1～4は輸入磁器で、破片総数の3.58％を占める。図版311の9はベトナムの陶器で、焼締長胴瓶の口縁部である。10は瀬戸・美濃系の捏鉢と思われ、内面は使用により平滑になっている。瀬戸・美濃系の陶器は出土量が減少する。図版312の1～8は京焼の碗類である。1・2は白化粧の上に簡単な錆絵草花文を描き透明釉を掛ける平碗で、高台周辺は露胎である。畳付は幅が広く、がっしりとして、高台径は比較的小さい。3は錆絵染付の草花文に金・赤・浅黄・青彩で菊花の上絵を描く平碗で、高台内に八角枠の「清」印を押す。4～6は残存率が悪く上絵は不明であるが、それぞれ「清閑寺」印、「仁清」印、不明印がある。7・8は丸碗で、8には「藤」印がある。9は透明釉の上に青と浅黄彩で胴部に大きい雷文を描き、内面は薄く鉄釉を流し掛けした壷である。ハの字に開く高台内に「御菩薩」印がある。12～14は信楽の鉄釉の鉢・壷類である。信楽系の陶器に

は日常品のいわゆる小物類はみられない。19は肥前系の刷毛目の皿で砂目が残る。図版313・314は擂鉢で、丹波系のものは少なく、信楽系のものが主体である。図版314の２の信楽系擂鉢は縁帯部の内外に鉄釉を掛けたもので、全面に鉄泥を塗る18世紀代の擂鉢に替わる過渡的なものと思われる。

土壙Ｆ1455（図版３・315～319、表21～25、図40）　図版315の１～20は土師器の皿で、大型皿の内面の圏線状の窪みは、明瞭である。特に圏線内側が１mm程度直立するものがある。30～46は焼塩壷で、京都産の32は口縁部から肩にかけて、やや撫肩である。堺系の焼塩壷は刻印のない細身で小型のものと、二重枠と一重枠で「天下一堺ミなと/藤左衛門」の刻印があるものが共伴する。49は瓦質火入のフード状の蓋である。54～58は京焼で出土量は少ないが、57・58など新しい器形がある。59は瀬戸・美濃系の鉄釉小碗である。60・61は肥前系の陶器で60は緑釉の蓋である。61は刷毛目の二彩の鉢で、見込にリング状の砂目が残る。図版316・317と図版318の１～16は肥前系磁器で、碗類には「宣徳年製」「宣明年製」「大明成化年製」など多くの銘款がみられる。また「青」など一字の銘款もある。内面はワンポイントの草花文が多く、五弁花はみられない。口縁直下や高台内に二重圏線のあるものも多い。高台はいずれもシャープで器壁も薄い。皿には高台内に一点のハリ支えをもつものが多く、圏線や「福」「製」など一字銘款があるものも多い。図版318の11～13は色絵磁器で、12・13は黄・紫・赤彩が濁った、いわゆる古九谷様式に近いものである。11の水滴は青・薄緑・赤彩などが明るい色調をもち柿右衛門様式に近いものである。17は中国製磁器の小杯で、浅く雑な削り出しの高台を持つ。図版319は信楽の擂鉢で、大型のものは３のように直立する縁帯部で外面に凹線をつけたものが主流である。小型のものは１のような口縁端部が三角形を呈するものもみられる。いずれも体部外面にロクロ目が強く残る。

土壙Ｆ1244（図版３・320～322、表26～28、図41）　図版320の１～40は土師器の皿と蓋である。皿内面底部にみられる圏線は、より明確になる。45～67は焼塩壷と花塩壷である。45～49は京都産の焼塩壷である。50～52の京都産花塩壷の蓋はそれぞれ刻印銘が異なる。また、いわゆる輪積み成形に「御壺塩師/堺湊伊織」の銘がある57～59は、上限が天和２年（1682）とされており、出土量の限られる過渡的なタイプである[9]。28を除く、図版321と図版322の１・２は肥前系磁器である。図版321の18・27などの型紙摺のものがある。図版322の７～24は陶器である。７～12は京焼である。９は灯明皿で、口縁部に半環の把手状部分をもち、内面の３箇所に目痕が残る。外面底部際まで施釉され、底部は露胎である。11は円錐形の三足付の鍋である。黒に近い鉄釉を内面と外面の三足付近まで施釉している。底部中央に直径約2.5cm、高さ約２mmの痕跡的な高台を削り出す。内面には直径約５mmの比較的大きい目痕が３箇所みられる。９の灯明皿と11の鍋は、京焼の器形としては、初現期に近い資料と思われる。21は透明釉下に黒で梅花を描いた軟質施釉陶器の灯明皿で、底部に糸切痕が残る。土師器皿の製作技法とは異なり、ロクロ成形であり丁寧な作りである。軟質施釉陶器の灯明皿としては初現期のものである。

穴蔵Ｆ1387（図版４・323～326、表29～32、図42）　図版323の１～51は土師器の皿と蓋で

ある。皿は前代の土壙F1244出土のものと変化はない。蓋のつまみが中心を外れるものがある。焼塩壷の「御壺塩師/堺湊伊織」銘のものは、いわゆる輪積みと板作りのものが混在する。「泉州麻生」銘のものは、内側二段角枠の製品である[10]。蓋は60・61が色調・胎土及び内面の圏線から「泉州麻生」銘のものに対応している。炮烙は77のように屈曲して外へ開く口縁部が、端部にかけて肥厚しないものがある。図版324と図版325の1～4は肥前系磁器である。図版324の5などの型紙摺の製品は手描き文様と併用されるものが多く、見込の五弁花も手描きである。高台銘款や内面文様は省略化が目立ち、高台内圏線は一重になり銘款は「大明年製」など限られたものになる。内面文様はほとんどみられない。波佐見系の粗製の碗類は出土せず、いわゆるコンニャク印判文はみられない。図版324の9の碗と42の皿は共に高台畳付周辺の作りが極めて丁寧で、器壁が薄く、菊文散の共通する意匠や、鶴文や亀甲文、及び皿42の外面に描かれた梅花繋文などの文様構成から禁裏の注文品と推定できるものである。ただ皿の見込の五弁花や高台内にみられる2重圏線は18世紀後半のものにはみられず、古相であると思われる。図版325の5～24と図版326は陶器である。図版325の5～10の京焼平碗は体部上半が外に開くもので、底部が残るものには高台内に刻印があるものが多い。見込には3箇所目痕がみられ、文様は錆絵染付の草花文である。鉢は肥前系の刷毛目や、いわゆる三島手のもので占められる。擂鉢は内外面に鉄泥を塗る信楽系のものである。

土壙B776（図版4・327・328、表33・34、図43）　図版327の1～20は土師器で、皿はⅫ期のもので大・中の皿と蓋はほぼ白色系のもので占められる。20の高杯形のものは、浅い杯部に円筒状の脚部が付く。杯部は丁寧なナデ調整がみられるが、脚部は未調整である。焼塩壷は堺系の3種類が出土している。27・28の「泉州堺麿生」、29の「泉湊伊織」、30の「泉州麿生」である。「泉州堺麿生」の刻印は関西に出土報告例はなく、江戸遺跡で明治大学記念館前遺跡の3例がある[11]。31～34は土師質土器で、34の炮烙は内湾形のものとしては、出土時期の早い例である。35は軟質施釉陶器の灰器風の鉢で、赤褐色の粗い胎土の上にやや白濁した透明釉が掛かる。37～53は肥前系磁器で、48のうがい碗と52・53の皿が注目される。いずれも禁裏からの注文品と推定されるが、18世紀初頭までの注文品と比べると、碗の見込の菊花や皿の外面梅花繋などが様式化しており、18世紀後半のものに近い。図版328の1～16は陶器で、6の京焼系の平碗は体部外面に錆絵染付文を描き、高台内も施釉される。6のような小型の平碗は、1～3の大型の平碗と比べて、文様位置や施釉範囲に違いがある。また、4・8・12など産地を京都に限定できず、いわゆる京・信楽系と呼ばざるを得ない釉調をもった新しい種類のものが現れる。9～11は肥前系の陶器で、11の京焼風陶器には刻印がみられない。16は信楽のいわゆる腰白茶壷である。この他に享保一分判金（1716～1735）が出土している（図版105・569）。

土壙H166（図版5・328・329、表34・35、図44）　図版328の17～30は土師器の皿である。大型皿外面のナデは、端部直下に1cm程度残る。22・23のように内面の圏線施文時の圧力で、外面に屈曲部として現れるものが多くなる。焼塩壷は「サカイ/泉州磨生/御塩所」銘のものだけである。人形類は型作り中空のものが主であるが、37・38の小型の手捏ねものや、44の板作

りと手捏ねを併用するものもある。図版329の１～17は肥前系磁器でコンニャク文や薄手半球碗が主体になる。７は高台部の作りが丁寧で、14と共に上手のものである。なお、14は図版330の66と同意匠のものである。18～29・31・33は京・信楽系の陶器である。18の蓋物や24・25の小型の丸碗がある。32の軟質施釉陶器は四方襷文の地模様に菊花の浮文をつけた型押しの蓋で、黄・緑・紫・黒彩の上に薄い透明釉を掛けている。透明釉はほとんど剥落して、わずかに凹部に残るものも銀化している。四方襷や菊花の花弁は精緻に彫られており、胎土も精製されたものを使用している。この蓋に伴なう身が出土しておらず、具体的な用途を特定できない。多彩な色使いなどは異色で、産地を特定できない。34の鉄釉の鍋は把手の作りや、雑な釉調、外面の横線など京・信楽系のものとは異なる特徴がある。35は匣鉢と思われるが、胎土が信楽産のものとは異なる。30は瀬戸・美濃系の陶器で、灰釉と鉄釉の掛分けの灰吹である。36は呉須の下絵に透明感のある灰釉が掛かる碗である。やや開き気味の体部に、断面角形の高台部は無釉である。

土壙Ｈ271（図版５・330～332、表36～38、図45）　土師器の皿類は出土量が少なく、京焼、京・信楽系陶器や肥前系磁器などが多い。日常生活に伴なう典型的なごみ穴出土遺物である。図版330の36の炮烙は、Ｄ類に類似する型式とされるもので、深草産と考えられている[12)]。土製品の人形類は型押しで、底部が開口するものや中空のものが主流になる。図版330の43～70、図版331の１～８は肥前系磁器で、48や49などの薄手半球碗、57や59の梅樹文のいわゆるくらわんか碗などがあり、小型の半球碗には銘款がない。図版330の60～64、図版331の１～４は皿で、見込中央の五弁花は手描きのものとコンニャク文が混じる。高台銘は角「福」や崩れた「大明年製」が主体である。66は土壙Ｈ166出土のものと同意匠で、その他にも焼塩壷など構成する遺物に共通するものが多い。図版331の９～18と図版332は陶器である。京・信楽系陶器は碗を中心に種類が多い。図版331の９～18、図版332の１～３の平碗は、16の伝統的ないわゆる古清水風のものから、新しい意匠である17の錆絵ワンポイントのものなどが共存し、過渡的様相を呈する。器形は体部が外へ開くものはなくなり、直立する体部を持ち、器高のやや低いものになる。また、見込に目痕のないものが増え、目痕があるものも14のように上絵で隠すものがあることから、目痕がキズと認識され始めたものと解釈できる。図版332の４～16の丸碗は16のような腰の張った大振のものも残るが、全体にやや小振のものが主流になる。また５・７・10のように、体部下半を直線的にしたものがある。外面の錆絵は16と比べて極端に簡略化されており、平碗と同様に新しい様相がみられる。26～28の土瓶類は、注口がＳ字状で、鉄釉のものがある。32は信楽擂鉢で鉄泥掛けの軟質のものが主流で、小型のものには高台も持つものもある。

土壙Ｅ45（図版６・333～338、表39～44、図46）　図版333の１～27は土師器の皿である。27の皿は口径は14.2cmと大きく、内外面ともに丁寧な調整である。35～39、41～43、45～60は土製品のミニチュア・人形類である。55・56は白色精良な胎土をもつ手捏ね成形の童子人形で、頭は別作りで胴部へ差込む。顔の作りや着物の表現は丁寧である。墨で頭髪や着物を描込むものはあるが、胡粉の痕跡を含めて、彩色された形跡はない。40は陶器のミニチュアで、雛道具

の類であろう。図版334の1～8は灯火器類で、1・2・4・5は軟質施釉陶器である。3は蝋燭の台などに使用するものと思われるが、やや安定を欠く。9～18は焼塩壷類で、12は「(なんばん七) 度/本やき志不」銘のある花塩壷の蓋である。15～17は「泉湊伊織」銘である。19～25は陶器のミニチュア類である。34は高台内に長方形角内に「緑」の刻印をもつ軟質の緑釉碗であるが、釉も斑で薄く粗製である。35は足付の鉢で植木鉢にも使用できるよう、焼成前に底部中央付近にヘラで丸く彫込む。鉄釉で黒釉流しの36は底部に焼成後穿孔され、植木鉢として使用されたと思われる。内側中央部に指で押さえた窪みの痕跡が観察でき、穿穴しやすいような作りになっている。図版335・336と図版337の1～20は肥前系磁器である。比較的上手のものが主体である。図版335の20・22は口縁端部に平坦面があり、器壁が体部上半にかけてやや肥厚する特徴的な碗で、あまり類例がない。9・30の碗と図版336の13～16は、菊花文などの同じ規格性を持つ染付磁器で禁裏からの注文品である。図版337の17・18は底部外面と口縁部に染付の圏線を入れ、黒の輪郭線に赤・黄・緑彩で上絵を描く碗である。17は見込の蛇ノ目釉剥ぎ部分に、黒で唐草文様を描込む。19・20は内面青緑釉で外面透明釉、見込蛇ノ目釉剥ぎの皿である。高台は無釉である。図版337の21～38と図版338の1～24は京・信楽系陶器である。18世紀後半代の京・信楽系陶器は、図版338の1・2の蓋物や7の輪高台の皿など、新しい器種が豊富である。図版337の21～30は丸碗類で、赤・緑・青彩の上絵碗が主で金彩で輪郭線を描くものもある。31～38の小杉碗・半筒碗類は基本的に錆絵もしくは錆絵染付で、半筒碗は部分的に白化粧する。図版338の16～21は平碗で、内面全体に上絵を施すものが主体であるが、16のような錆絵ワンポイントのものもある。同時に見込にみられた目痕もなくなる。25～29は瀬戸・美濃系の陶器で、27はいわゆる太白手の皿である。29は灰釉の捏鉢である。31は備前の灯明受皿である。33は中国宜興窯の急須で、底部に刻銘がある。

土壙B716（図版6・339～344、表45～50、図47）　図版339は土師器の皿と蓋である。小型皿の出土が少なく、蓋の量が多い。図示した大型皿の口径は9.7～12.2cmの間に収まる。48～50はいわゆる天盃型の土師器皿[13]で、内外面ナデ調整である。蓋は断面台形状のつまみをつける。つまみは小型化しており、蓋の中央をはずれたものも多い。図版340の1～16は土師質土器である。1～6は京都産の焼塩壷である。7・8は堺系の焼塩壷で、刻印はみられない。10～12は深草産の炮烙で、3点ともほぼ同規格の製品である。13は比較的浅い器高をもつ火入である。14・15は風炉で脚部に4個の孔がある。15には体部上面に、通風のための穿孔6個が2箇所にある。いずれも外面は丁寧なミガキで調整されている。図示していないが同じ遺構から「山傳」銘の刻印がある風炉の脚部小片がある。16は焜炉のサナで8個の穿孔がある。17は輪花端反鉢で、ロクロ成形ののち五弁花に作る。外面は緑釉、内面は黄釉、口縁部内外は茶褐釉である。一部剥離、銀化しているが、透明感のある釉調の軟質施釉陶器である。底部から高台部にかけての残存部が少なく、刻印などは不明である。産地を特定することはできないが、讃岐の源内焼に近いものである[14]。図版341・342は肥前系の磁器である。4～27は染付碗である。23・24は広東碗で、23は焼継されている。図版342の皿は器高の低いものや、蛇ノ目凹形高台のものが主

である。9の鳳凰文と13の亀甲に松文の皿はいずれも菊花文散らしであり禁裏からの注文品である。15の大皿は、外面の梅花繋文が9の皿と同じ特徴であり、菊花文はみられないが、同様の注文品と考えられる。15・16の皿はハリ支えが残る。図版343と図版344の1～10は京・信楽系陶器である。図版343の1～11はいずれも見込ワンポイントの錆絵の平碗で、目痕はみられない。文様は6のように根付松を描くものもあるが、ほとんどは何を表現しているのかわからないものになる。また2・9のように体部から口縁部にかけて、内湾するものが現れる。12・13は体部外面に錆絵染付で草花文のワンポイントを描く皿である。高台周辺は無釉である。14・15、図版344の4は2本の錆絵の帯を廻らす碗で、がっしりとした高台を持つ。滋賀県石塔窯出土品などに類例がある[15]。図版343の19と図版344の8は、白化粧の上に呉須で草花文を描いた鬢水入と筒形容器である。どちらも比較的丁寧な作りで平底である。筒形容器を髪飾や櫛を容れる容器と推定すれば、化粧用具セットの一部とも考えられる。図版344の10は底部に「錦光山」銘をもつ土瓶で、体部に錆絵と染付で交互に根付松を描く。根付松文は、いわゆる小杉碗にみられるものと違い、松の表現が初現期（17世紀末）のものに近い。図版344の12・13は鉄釉に灰釉を掛けた算盤玉形の土瓶で、15・16の蓋とセットになるものである。18は植木鉢で、底部中央に焼成前に外側から穿孔されている。29はハの字に開く体部をもつ灰釉の鉢で、見込に重焼きのための荒い砂が窯着している。底部と体部下方は露胎である。27は外部に鎬を入れた黒釉に近い褐釉の香炉で、底部に「丸い」の小判印銘がある。

土壙G348（図版7・345～347、表51～53、図48）　土師皿類には小型皿（図版345の1・2）、、丸底の中型皿（3～13）、見込に圏線が付く大型皿（14～37）に加えて、特大型皿（38～41）がある。小型皿の割合は非常に少ない。圏線が付くタイプには口径9cm以下の比較的小さなものが含まれる。特大型皿は口径14cmを越え、大型皿に比べるとやや器壁が厚い。白く精良な土を使い、内外面に丁寧なナデ調整をする。8は底部3箇所に小さい穴が開けられるが、用途は不明である。XIV期古段階の古相に属する。土師質土器には焼塩壷（42～44）、壷の蓋（45）がある。44は狭口のもので、43はそれに組合う蓋である。42は花塩壷の蓋である。磁器は肥前系のものが大部分を占めるが、瀬戸・美濃系、中国産なども含まれる。図版345の46～72は肥前系である。57は丸碗で、菊花文と竹垣文を組合わせる意匠である。58は鉢で内面に菊花文と唐草文を組合わせる。外面には梅花繋文を配する。61は同系統の皿で、圏線内の見込中央は無文である。58と同様に外面の梅花繋文は簡略化されている。これらの製品は器壁が薄く高台の作りも丁寧で、高台内には圏線や銘を入れない。58には焼継がなされる。57・58・61は禁裏からの注文品とみられる。53は全体の造りや、絵付の様子が57・58・61と似ているが菊花文が入らない。66～72は波佐見の製品である。皿には蛇ノ目凹型高台のものがある。46は白磁杯である。図版346の1～11は瀬戸・美濃系である。白磁杯、端反り型の染付碗、蓋、植木鉢などがある。図版346の12は三田産の青磁角皿である。図版345の73は京都産の碗である。図版346の14・15は金彩の薄手酒杯である。図版346の16は中国産の五彩杯である。図版346の17～43、図版347は陶器で京・信楽系、瀬戸・美濃系、肥前系などがある。碗、皿、鉢、徳利、水注、土瓶、鍋、燈明皿、

植木鉢など豊富な種類がある。呉須染付の小碗（図版346の17）の高台内には「岩倉山」の刻印がある。22・23は丸碗で、緑・赤彩で上絵付を施す。24・25は平碗で、小型で、絵付がなく見込中央が窪んでいるものもある。34・35・37は灰釉の蓋付の小鉢で、図版347の１・２の形の蓋が付く。図版347の３～５も灰釉の蓋類である。図版347の17～19は灰釉掛の水注で、蓋も出土している。図版347の22～25は灰釉掛の行平鍋と蓋である。26～29は植木鉢である。26は鉄釉である。図版346の39・40は信楽の杯と茶入である。41は肥前系の高台の大きな碗である。42・43は瀬戸・美濃系の杯で、43は内面と外面上半に錆釉を掛ける。図版347の30は丹波産の徳利である。図版347の10は壷の蓋で、亀形のつまみを付ける。古曽部焼に類例[16]がある。16・20は炻器質の急須である。31は堺・明石系の小型の擂鉢で、見込には放射状の摺目が付く。図版346の44は軟質施釉陶器である。精緻な胎土で白化粧し、上絵を付ける鉢である。

土壙Ｂ687（図版７・348～358、表54～64、図49）　図版348の１～65は土師器の皿と蓋である。22の底部外面には「御くすり」の墨書がある。蓋は一定量出土しているが、下層の土壙Ｂ716のものと形状的な変化はみられない。67～71はロクロ成形の鉢である。72・73は灰白色で精緻な胎土をもつ土師質の高杯形土器である。脚部のみ出土し、他に類例もない。図版349の１～14は焼塩壷で、１～11は京都産と考えられる。３・５・７・９は従来知られていない形状である。円柱状の粘土塊に、棒状の道具を差込んで形を作り、口縁部内外面を強くナデる。内面には塩焼けによる変色が顕著である。この形状の焼塩壷の蓋は特定することができない。15は高杯で、脚部の上下に皿を接合したような形状である。脚部は作りが雑である。江戸期を通して少量ながら出土しており注目される。19～24は土製品の人形類でいずれも型合わせで作られる。24は魚形の浮き人形で、底部に「嘉」の墨書がある。26～29は軟質施釉陶器である。26・27は胡麻煎で、上下を型で作りフード部は陽刻の型押文で透明釉と緑釉を掛ける。表面に型作りの際の雲母片がみられ、伏見人形の製作技法と共通する。26のフード上部に「胡麻煎」の文字を型押しする。28は灰白色の精良な胎土と鮮やかな緑彩の手桶形の鉢である。緑釉が厚く掛かるもので、あまり類例をみない。29は楽系の白濁釉の皿である。30は円盤形の台状品である。丁寧な調整で作られている。用途はわからないが、灯火台の可能性もある。「霞晴山」銘の刻印が上面にみられる。33は灰白色と橙色の絞胎の火入である。34は上部に鍋などをかける３箇所の突起をもつ焜炉であるが、下部が失われており全体の形は不明である。35は火入である。深草産と思われる。図版350～353は磁器である。肥前系のものが大部分を占めるが、中国、瀬戸・美濃系のものも含まれる。図版350～352、図版353の１～21、図版353の24～27、図版353の33～37は肥前系磁器である。図版350の12・14・22は禁裏の注文品である。図版351の20は鍋島の皿である。図版352の１～13・16～19は蓋付碗・蓋付鉢などで、多く出土している。図版353の28～32は中国製で、28はいわゆる交趾香合で、緑釉の蓋である。29は景徳鎮窯の瑠璃釉金彩碗、30は徳化窯の碗である。図版354～358は陶器である。図版354は京・信楽系陶器である。端反碗・小杉碗・鉄釉碗と輪高台の皿などが目立つ。図版355は鉄釉鍋、灰釉の行平、鉄釉・灰釉の土瓶類である。19・21の土瓶は算盤玉形が主で、滋賀県の石塔窯出土品に類品がある[17]。24は白

化粧で緑釉流しの土瓶で「錦光山」銘がある。図版356の21～23は京焼で、菊花文錆絵染付の意匠をもち、胎土や釉調も共通する。高台周辺の作りや絵付も丁寧で、京焼の禁裏からの注文品である可能性が高い。図版357の１～４・11～13・16は瀬戸・美濃系陶器で、16の徳利形の壷は、灰釉で胴部に３箇所の窪みを付ける。図版358は擂鉢で、堺・明石系のものが主である。１～５は堺・明石系である。６は信楽である。底部内面の摺目は堺・明石系が三角形と放射状、信楽が斜格子である。

土壙Ｈ15（図版８・359～363、表65～69、図50）　図版359の１～17は土師器の皿であるが、出土量は少ない。中でも小型や、中型の出土量は少ない。18のように直径が14cmほどの特大のものが含まれている。19は内面に透明釉を掛けた軟質施釉陶器の蓋で、外面には透漆を塗った地に朱漆と金泥で菊花などを細密に描いている。漆の塗膜下に釉は掛けられていない。漆器を意識して作られたものと思われる。24・25の炮烙はＧ類[18]で、大阪府枚方市の津田産とされる。型作りで口縁直下に突帯状の張出しをもつ。比較的器高が低く、底部に近づくほど器壁は薄くなる。28・29は深草産花塩壷で、白色精良な胎土で底部に抉りがある。いずれもロクロ成形である。伏見区深草の寺本家伝世品によく似る[19]。30は楽系の軟質施釉陶器で、桐の葉を模したと思われる変形皿である。やや白濁した薄い透明釉が全面に掛けられている。31は円筒形で、火入類と組合わせて用いる五徳の一種である。上方に土瓶などを支える３箇所の突起があり、胴部の３箇所に円形の穴を穿ち、下方に風口を開ける。32～34は植木鉢もしくは植木鉢転用の鉢で、32は桶形の鉢底を焼成後に穿孔したもので、堺系と思われる。33・34はいずれも丹波の植木鉢で、外面に型押しの草花文を貼付ける。33は焼締陶器で、34は内面に鉄釉を掛ける。図版360・361は磁器で、図版360と図版361の１～３・５・22は肥前系磁器である。図版360の10の小型の壷や、図版361の３・５の薄手酒杯[20]、22の鉢などがある。大型の皿などには焼継の資料もみられ、図版361の１の皿は、高台内に焼継材で「柳原　正」の文字を記す。フリット（白玉粉末）を薄めたもので筆書きし焼付けたもので、かすかに判読できるものである。焼継の際の破片の個体識別、もしくは注文主の識別のためと思われる[21]。図版361の６～21は肥前系以外の磁器である。６・８・10・11は胎土や釉調から、関西系磁器と呼称されるものである[22]。その他は瀬戸・美濃系の磁器で、９はガラス質の白磁に錦書の上絵をしたものである。図版362・363は陶器類で、図版362の36・37の飛びカンナの行平、17～22の銅緑釉小壷、端反碗など19世紀代の日常品がほぼ揃う。25・31の煎茶用急須は、器壁が１mm程度のロクロ成形で作られており、25には「喜久」、31には「与三」の銘がある。いずれも京焼の陶工名である。34・42・43は灰釉の鍋で、胎土や釉調が丹波産のものに近いが、鉄釉の鍋類と同様に具体的な産地を特定できない。図版363の甕類は胎土が灰白色の粗い土で、信楽焼特有のものである。内面底部に砂を敷く５・６の鉢も同様である。

表3　土壙F1605出土遺物1（図版297）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5.3	1.0		鈍い黄橙		在地	
2	土師器	皿	5.5	1.5		鈍い黄橙		在地	
3	土師器	皿	5.5	1.1		鈍い黄橙		在地	
4	土師器	皿	5.5	1.1		鈍い黄橙		在地	
5	土師器	皿	5.5	1.2		鈍い黄橙		在地	
6	土師器	皿	5.7	1.2		灰黄		在地	
7	土師器	皿	5.9	1.1		鈍い黄橙		在地	
8	土師器	皿	6.1	1.5		鈍い黄橙		在地	
9	土師器	皿	6.3	1.3		鈍い黄橙		在地	
10	土師器	皿	6.6	1.4		鈍い黄橙		在地	
11	土師器	皿	6.7	1.2		鈍い黄橙		在地	
12	土師器	皿	6.6	1.4		浅黄橙		在地	
13	土師器	皿	9.0	2.1		浅黄橙		在地	
14	土師器	皿	9.2	2.2		浅黄橙		在地	
15	土師器	皿	9.2	2.0		浅黄橙		在地	
16	土師器	皿	9.3	1.9		浅黄橙		在地	
17	土師器	皿	9.3	2.2		浅黄橙		在地	
18	土師器	皿	9.6	2.1		浅黄橙		在地	
19	土師器	皿	9.7	2.3		浅黄橙		在地	
20	土師器	皿	9.8	2.0		灰黄		在地	
21	土師器	皿	9.9	2.0		灰黄		在地	
22	土師器	皿	9.9	2.1		橙		在地	
23	土師器	皿	10.3	2.2		橙		在地	口縁端部煤付着
24	土師器	皿	10.4	2.2		鈍い黄橙		在地	
25	土師器	皿	10.5	2.3		鈍い黄橙		在地	
26	土師器	皿	10.6	2.1		浅黄橙		在地	
27	土師器	皿	10.8	2.1		浅黄橙		在地	
28	土師器	皿	10.8	2.1		橙		在地	
29	土師器	皿	10.9	2.2		鈍い黄橙		在地	口縁端部煤付着
30	土師器	皿	11.9	2.2		橙		在地	
31	土師器	皿	12.2	2.3		浅黄橙		在地	
32	土師器	皿	12.2	2.1		鈍い橙		在地	
33	土師器	皿	12.1	2.1		橙		在地	
34	土師器	皿	12.6	2.3		鈍い橙		在地	
35	土師器	皿	12.7	2.2		浅黄橙		在地	
36	土師器	皿	13.2	2.0		鈍い橙		在地	
37	土師質		4.3			浅黄橙		在地	高杯か
38	土師質	焼塩壷蓋	5.3	1.9		橙		京都	
39	土師質	焼塩壷	3.7	7.2	4.7	橙		京都	
40	土師質	焼塩壷蓋	6.2	2.0	3.8	橙		堺系	
41	土師質	焼塩壷蓋	5.3	1.6	3.1	鈍い橙		堺系	
42	土師質	焼塩壷	5.7	8.6	3.7	橙		堺系	
43	土師質	焼塩壷	4.6	9.1（残）		鈍い橙		堺系	
44	土師質	釜	21.9（推定）			鈍い黄橙			釜か　大和型
45	土師質	炮烙	30.2	10.2		鈍い黄橙			大和型　内外面煤付着
46	土師質	炮烙	29.6（推定）	11.5（残）		鈍い黄橙			大和型　内外面煤付着
47	土師質	火入	39.0（推定）	13.9	32.0（推定）	鈍い黄橙			深草か
48	瓦質	火入	15.5（推定）	6.2	14.0（推定）	灰			大和か
49	瓦質	灯火具	14.9	13.4	14.2	灰			大和か
50	瓦質	鉢	31.0	12.9	11.8	灰			大和か　内面ミガキ
51	瓦質	火入	23.6（推定）	16.4（残）		灰白			大和か
52	軟質施釉	碗	10.6（推定）	7.9	5.6	鈍い褐	黒+透明	京都	ロクロ成形
53	軟質施釉	碗	10.1（推定）	8.1	6.0（推定）	鈍い赤褐	黒+透明	京都	手捏ね
54	陶器	鉢	31.0	6.2	15.1	鈍い赤褐		信楽	

表4　土壙F1605出土遺物2（図版298）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	皿	10.1（推定）	2.3	5.6（推定）	白	青花	中国	
2	磁器	皿	10.4（推定）	2.4	6.2（推定）	白	青花	中国	
3	磁器	皿	10.2（推定）	2.3	6.2（推定）	白	青花	中国	
4	磁器	皿	19.3（推定）	3.9	9.2（推定）	白	青花	中国	
5	磁器	皿	13.6（推定）	2.7	7.6	白	青花	中国	
6	磁器	皿	27.5（推定）	6.8	13.8（推定）	白	青花	中国	
7	磁器	皿	10.9（推定）	5.7	4.4（推定）	白	青花	中国	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
8	磁器	皿	11.3(推定)	2.4(残)		白	白磁	中国	
9	磁器	皿	12.3	3.2	5.4	白	白磁	中国	輪花　見込蛇ノ目釉剥ぎ
10	磁器	碗	16.4	6.6	5.2	灰白	白磁	朝鮮	高台・見込5箇所目痕
11	陶器	皿	10.1	2.6	5.8	灰白	灰	瀬戸･美濃系	高台内輪トチン痕
12	陶器	皿	10.5	1.8	6.0	灰	灰	瀬戸･美濃系	高台内輪トチン痕　全釉
13	陶器	皿	10.9	2.4	6.1	灰白	灰	瀬戸･美濃系	見込・高台無釉
14	陶器	皿	11.2	2.3	6.1	浅黄橙	灰	瀬戸･美濃系	見込・高台無釉
15	陶器	皿	10.7	2.1	6.3	灰白	灰	瀬戸･美濃系	高台内輪トチン痕
16	陶器	皿	10.5	1.5	6.6	灰白	鉄	瀬戸･美濃系	高台内輪トチン痕　見込3箇所目痕
17	陶器	皿	11.8	2.6	6.8	灰白	志野	瀬戸･美濃系	
18	陶器	碗	9.6	6.1	3.8	灰白	志野	瀬戸･美濃系	
19	陶器	碗	9.6	5.7	4.2	灰白	志野	瀬戸･美濃系	
20	陶器	碗	11.2	5.2	4.6	橙	鉄	瀬戸･美濃系	天目碗
21	陶器	碗	11.2(推定)	6.1	4.4(推定)	灰白	鉄	瀬戸･美濃系	天目碗
22	陶器	器形	11.8	5.4(残)		灰白	鉄	瀬戸･美濃系	天目碗
23	陶器	碗	11.4	5.5	4.6	灰白	鉄	瀬戸･美濃系	天目碗
24	陶器	碗	11.6	6.1	4.8	灰白	鉄	瀬戸･美濃系	天目碗
25	陶器	茶入	2.4(推定)	4.5	3.4(推定)	黄灰	鉄	瀬戸･美濃系	底部糸切
26	陶器	香炉	6.9(推定)	5.7	6.2(推定)	灰白	灰	瀬戸･美濃系	高台内輪トチン痕
27	陶器	茶入	3.7	5.8(残)		灰		備前	
28	陶器	擂鉢	17.2	6.3	7.0	灰		備前	
29	陶器	盤	28.1(推定)	5.8	25.6(推定)	灰		備前	
30	陶器	鉢	10.5	11.6	9.7	灰		丹波	
31	陶器	碗	11.0	5.5	4.4	灰	灰	肥前系	
32	陶器	皿	10.1	2.9	3.7	鈍い黄橙	灰	肥前系	砂目
33	陶器	皿	11.0	2.9	4.5	灰白	灰	肥前系	胎土目
34	陶器	壷				灰褐	鉄		肥前系か

表5　土壙F1605出土遺物3（図版299）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	擂鉢	28.6	13.0	13.8	赤褐		信楽	
2	陶器	擂鉢	29.8	13.8	13.6	橙		信楽	
3	陶器	擂鉢	34.2	17.3	15.8	赤褐		信楽	
4	陶器	擂鉢	29.4	14.6	12.4	灰黄褐		備前	口縁直下に重焼痕

表6　穴蔵C548B出土遺物1（図版300）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5.4	1.1		灰白		在地	
2	土師器	皿	5.5	1.4		浅黄橙		在地	
3	土師器	皿	5.5	1.2		浅黄橙		在地	
4	土師器	皿	5.8	1.3		鈍い橙		在地	
5	土師器	皿	5.9	1.1		鈍い黄橙		在地	
6	土師器	皿	5.9	1.3		鈍い橙		在地	
7	土師器	皿	8.7	1.8		浅黄橙		在地	
8	土師器	皿	9	2.3		鈍い橙		在地	
9	土師器	皿	9.6	2.2		浅黄橙		在地	
10	土師器	皿	9.8	2.3		淡橙		在地	
11	土師器	皿	10.4	1.8		灰白		在地	
12	土師器	皿	10.8	2.2		灰白		在地	
13	土師器	皿	11	2.3		鈍い黄橙		在地	
14	土師器	皿	11.6	1.9		明褐灰		在地	
15	土師器	皿	11.8	1.7		鈍い橙		在地	
16	土師器	皿	12.2	1.7		鈍い橙		在地	
17	土師器	皿	12.4	2.1		鈍い橙		在地	
18	土師質	鉢	2.3	2.6		灰白		在地	
19	土師質	小壷	9.8	5.6		灰白		在地	
20	土師質	炮烙	30.4	7.2	11	灰黄褐			大和か
21	瓦質	香炉	13.2	7		鈍い橙			大和か
22	瓦質	火消壷	15.3	17.4	19	浅黄橙			大和か
23	磁器	碗	8.8	7.5	5	灰白	染付	肥前系	筒形
24	磁器	碗	6.4	3.7	2.2	灰白	染付	肥前系	筒形
25	磁器	杯	6.4	3.7	2.2	灰白	青花	中国	
26	磁器	杯	6.4	3.6	2.3	灰白	青花	中国	
27	磁器	杯	6.6	3.7	2.5	灰白	青花	中国	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
28	磁器	杯	5.1	3.2	2.2	灰白	青花	中国	
29	磁器	杯	6.7	4.2	2.7	灰白	青花	中国	
30	磁器	碗	11.4	6	4.8	灰白	青花	中国	高台内圏線
31	磁器	小碗	9.3	5	4.4	白	青花	中国	高台内「成化年製」
32	磁器	碗	9	5	3.7	白	青花	中国	高台内「大明成化年製」
33	磁器	碗	11.3	6	4.6	灰白	青花	中国	高台内圏線　見込「大明宣徳年製」
34	磁器	碗	12.2	6.3	5.4	灰白	青花	中国	高台内圏線　見込「大明成化年製」
35	磁器	碗	12.7	7.1	5	白	青花	中国	高台内圏線
36	磁器	碗	11.8	6.1	4.4	白	青花	中国	高台内圏線「大明成化年製」
37	磁器	碗	11.3	6.5	4.3	灰白	青花	中国	漳州窯系
38	磁器	碗	13.1	5.8	5.3	白	青花	中国	漳州窯系
39	磁器	碗	12.5	5.4	4.6	灰白	青花	中国	漳州窯系
40	磁器	碗	11.6	5.9	4.8	白	青花	中国	漳州窯系

表7　穴蔵C548B出土遺物2（図版301）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	小碗	9	4.9	4.1	灰白	青花	中国	高台内圏線
2	磁器	小碗	8.3	4.8	3.1	灰白	青花	中国	漳州窯系
3	磁器	碗	12.3	6.5	5.5	灰白	青花	中国	高台内圏線
4	磁器	碗	10.1	5.5	4.8	灰白	青花	中国	高台内「大明宣徳年製」
5	磁器	碗	11.6	5.9	4.8	白	青花	中国	高台内「大明成化年製」
6	磁器	碗	12	6.3	4.5	灰白	青花	中国	高台内「大明成化年造」
7	磁器	碗	11.7	6	4.5	灰白	青花	中国	高台内「大明成化年造」
8	磁器	碗	8.9	5.1	4.3	灰白	白磁	中国	高台内「大明成化年製」
9	磁器	碗	9.2	5	3	灰白	白磁	中国	高台内「雅」
10	磁器	碗	11	6	4.4	白	白磁	中国	
11	磁器	鉢	16.8	7.4	7.1	灰白	青花	中国	高台内圏線
12	磁器	皿	31.1	5.9	16.5	灰白	青花	中国	芙蓉手
13	磁器	鉢	19.1	7.5	7.2	灰白	青花	中国	漳州窯系
14	磁器	鉢	21	8.5	7.5	灰白	青花	中国	漳州窯系
15	磁器	皿	23.3	4.1	12.2	灰白	呉須赤絵	中国	漳州窯系

表8　穴蔵C548B出土遺物3（図版302）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	碗	10.8	6.8	6.3	灰白	鉄	京都	
2	陶器	碗	10.7	6	5.6	灰白	鉄	京都	見込目痕3箇所　貼付け高台
3	陶器	碗	8.4	6.9	4.1	灰白	灰	肥前系	
4	陶器	碗	9	6.4	3.7	灰白	灰	肥前系	三日月高台
5	陶器	碗	8.7	6.8	4	灰白	灰	肥前系	削り出し高台
6	陶器	碗	10.5	7.2	4.1	鈍い褐色	灰	肥前系	
7	陶器	碗	9.5	7.1	4.4	灰白	灰	肥前系	
8	陶器	碗	9.6	6.5	4.3	灰白	灰	肥前系	削り出し高台
9	陶器	碗	10.4	7.1	4	灰白	灰	肥前系	削り出し高台
10	陶器	碗	10.4	6.6	4.9	灰白	灰	肥前系	三日月高台
11	陶器	碗	11.1	6.8	4.9	灰白	灰	肥前系	
12	陶器	碗	10.8	8	4.6	灰白	灰	肥前系	ひずみ激しい
13	陶器	碗	11.6	7.6	4.3	明褐灰	灰	肥前系	
14	陶器	碗	12.7	8.8	4.9	浅黄橙	鉄	肥前系	
15	陶器	碗	11.9	8.3	4.8(推定)	灰白	鉄		京都か　天目碗
16	陶器	皿	15	2.4	7.4	灰白	鉄	肥前系	鉄絵　すすき文
17	陶器	碗	10.6	6.8	4.8(推定)	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	鉄釉　天目碗
18	陶器	碗	10.2	6.9	4.9	浅黄橙	鉄	瀬戸・美濃系	
19	陶器	碗	12.8(推定)	6.8	5.7(推定)	灰白	長石+鉄	瀬戸・美濃系	
20	陶器	壷	8.2	10.7	6.4	灰白	灰	瀬戸・美濃系	
21	陶器	小瓶	5.6(最大)	6.8(残存)	4.3	褐灰		備前	底部糸切　小型
22	陶器	徳利	6.4(最大)	8.6(残存)	5.7	灰白		丹波	底部砂付着
23	陶器	鉢	14.2(残存)	6.3		灰白	緑	瀬戸・美濃系	織部　手鉢
24	陶器	擂鉢	22.3	11.1	10.8	赤褐		東海系	底部糸切

表9　土壙F1432出土遺物1（図版303）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5.2	1.2		鈍い黄橙		在地	
2	土師器	皿	5.2	1.1		鈍い黄橙		在地	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
3	土師器	皿	5.8	1.3		浅黄橙		在地	
4	土師器	皿	5.7	1.4		鈍い黄橙		在地	
5	土師器	皿	6.0	1.5		橙		在地	
6	土師器	皿	6.2	1.5		鈍い橙		在地	
7	土師器	皿	6.5	1.8		橙		在地	
8	土師器	皿	7.3	1.6		橙		在地	内面煤付着
9	土師器	皿	8.5	2.0		灰白		在地	
10	土師器	皿	8.4	1.9		鈍い橙		在地	
11	土師器	皿	8.6	2.0		浅黄橙		在地	
12	土師器	皿	9.1	1.9		浅黄橙		在地	
13	土師器	皿	9.2	2.0		鈍い橙		在地	
14	土師器	皿	9.4	2.3		橙		在地	
15	土師器	皿	9.4	1.9		鈍い橙		在地	
16	土師器	皿	10.3	2.0		浅黄橙		在地	
17	土師器	皿	10.4	2.4		浅黄橙		在地	
18	土師器	皿	10.4	2.1		浅黄橙		在地	
19	土師器	皿	10.6	2.1		浅黄橙		在地	
20	土師器	皿	10.6	2.0		浅黄橙		在地	
21	土師器	皿	10.6（推定）	2.0		灰白		在地	
22	土師器	皿	10.6	2.2		橙		在地	
23	土師器	皿	10.7	2.1		浅黄橙		在地	
24	土師器	皿	10.7	2.2		浅黄橙		在地	
25	土師器	皿	10.7	2.2		灰白		在地	
26	土師器	皿	10.9	2.0		灰白		在地	
27	土師器	皿	11.1	2.2		灰白		在地	
28	土師器	皿	11.1	2.2		浅黄橙		在地	
29	土師器	皿	11.2（推定）	2.0		鈍い橙		在地	
30	土師器	皿	10.9	2.0		浅黄橙		在地	
31	土師器	皿	11.1	2.2		浅黄橙		在地	
32	土師器	皿	11.5	2.3		鈍い橙		在地	
33	土師器	皿	11.9	2.3		橙		在地	
34	土師器	皿	12.0	2.0		浅黄橙		在地	
35	土師器	皿	12.1	2.0		灰白		在地	
36	土師器	皿	12.2	2.0（残）		灰白		在地	
37	土師器	皿	12.2（推定）	2.1（残）		灰白		在地	口縁端部煤付着
38	土師器	皿	12.2（推定）	2.1（残）		灰白		在地	
39	土師器	皿	12.6（推定）	2.1（残）		鈍い黄橙		在地	
40	土師質	小壷	2.1	2.3		灰白		在地	
41	土師質	小壷	2.1	2.5		灰白		在地	
42	土師質	小壷	2.1	2.3		灰白		在地	
43	土師質	小壷	2.2	2.4		灰白		在地	
44	土師質	小壷	2.4	2.3		灰白		在地	
45	土師質	小壷	2.3	2.3		灰白		在地	
46	土師質	鉢	7.2（推定）	4.3（残）	2.4（推定）	灰白		在地	
47	土師質	焼塩壷蓋	6.8	1.7	4.7	橙		堺系	
48	土師質	焼塩壷蓋	6.9	1.5	5.5	橙		堺系	
49	土師質	焼塩壷蓋	7.0	1.7	4.9	橙		堺系	
50	土師質	焼塩壷蓋	7.2	1.8	4.2	橙		堺系	
51	土師質	焼塩壷蓋	7.2	1.5	4.8	橙		堺系	
52	土師質	焼塩壷	6.1	8.9	3.2	橙		堺系	
53	土師質	焼塩壷	6.1	9.4	2.6	橙		堺系	
54	土師質	焼塩壷	6.2	9.3	4.0	橙		堺系	
55	土師質	焼塩壷	6.0	10.3	3.1	橙		堺系	
56	土師質	焼塩壷	6.5			橙		堺系	「ミなと/藤左衛門」銘
57	土師質	焼塩壷	6.6	11.6	3.2	橙		堺系	「ミなと/藤左衛門」銘
58	土師質	焼塩壷	6.6			橙		堺系	「ミなと/藤左衛門」銘
59	土師質	焼塩壷	6.4			橙		堺系	「ミなと/藤左衛門」銘
60	瓦質	火入	14.0	6.8	13.2	灰			三足
61	土師質	炮烙	30.3（推定）			鈍い黄橙			深草か
62	陶器	蓋	4.8（最大）	1.9		浅黄	鉄	瀬戸・美濃系	
63	陶器	碗	7.4（推定）	3.6	4.2（推定）	淡黄	灰	瀬戸・美濃系	
64	陶器	灯火具蓋	8.7（最大）	2.4		灰白	灰	瀬戸・美濃系	焼成不良
65	陶器	皿	14.3	4.3	4.9	灰白	灰	肥前系	砂目
66	陶器	碗	11.2（推定）	7.0	4.4（推定）	淡黄	鉄	瀬戸・美濃系	
67	陶器	鉢	16.8（推定）	7.0	12.0（推定）	灰白	鉄	瀬戸・美濃系	内面刷毛塗り
68	陶器	鉢	12.5（推定）	6.2	11.6（推定）	鈍い赤褐	灰	丹波	口縁内外面灰釉

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
69	陶器	平碗		1.5(残)	4.0	浅黄	灰	京都	高台内「音次」銘　錆絵染付か
70	陶器	碗	13.1(推定)	7.1	5.8(推定)	灰	白+染付	瀬戸・美濃系	長石釉下に呉須
71	陶器	皿		1.5(残)	12.8	灰白	灰	肥前系	見込目痕　内野山窯系
72	陶器	盤	41.0(推定)	8.6	27.0(推定)	鈍い赤褐		丹波	見込4cm四方の重痕

表10　土壙F1432出土遺物2（図版304）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	碗			4.2	灰白	染付	肥前系	高台無釉
2	磁器	碗			2.4	灰白	染付	肥前系	高台無釉
3	磁器	碗			4.2	灰白	染付	肥前系	
4	磁器	碗			4.3	灰白	染付	肥前系	
5	磁器	碗	10.0	6.3	3.6	灰白	染付	肥前系	
6	磁器	碗	10.7	6.5	4.2	灰白	染付	肥前系	高台内「太明」
7	磁器	碗	12.2	7.2	4.8	灰白	染付	肥前系	
8	磁器	碗	10.8(推定)	7.0	4.2(推定)	灰白	染付	肥前系	高台部鉄釉
9	磁器	碗	11.6	6.7	4.3	灰白	染付	肥前系	
10	磁器	碗	11.5	6.4	4.4	灰白	染付	肥前系	高台内　手書き圏線
11	磁器	皿	13.2	2.4	6.2	灰白	染付	肥前系	
12	磁器	皿			8.0	灰白	青磁	肥前系	外面白磁
13	磁器	碗	8.4	5.4	3.2	灰白	鉄	肥前系	高台無釉　天目形
14	磁器	人形	3.0(最大)	4.0(残)		灰白	白磁	肥前系	底部開口　背面穿孔
15	磁器	小杯	5.9	3.9	2.6	灰白	白磁	肥前系	高台無釉
16	磁器	小杯	7.2	4.6	3.1	灰白	白磁	肥前系	高台無釉
17	磁器	碗	11.6	5.9	4.2	灰白	白磁	肥前系	
18	磁器	碗	11.0	6.6	4.8	灰白	白磁	肥前系	
19	磁器	碗	10.5	7.0	4.4	浅黄	青磁	肥前系	
20	磁器	皿	22.8	5.3	7.8	白	染付	肥前系	
21	磁器	碗				白	上絵	中国	赤絵+黒+黄彩
22	磁器	小杯			1.2	白	青花	中国	
23	磁器	碗	9.0	5.7	3.7	白	青花	中国	高台内「大明嘉靖年製」
24	磁器	碗	12.0	5.2	4.5	白	青花	中国	
25	磁器	碗			4.6	白	青花	中国	見込「大明成花年製」
26	磁器	碗	10.4	5.6	4.1	白	青花	中国	
27	磁器	皿	11.6	3.3	6.3	白	青花	中国	
28	磁器	鉢	13.3	5.0	6.0	白	青花	中国	
29	磁器	鉢	11.7	3.7	4.9	白	青花	中国	
30	磁器	皿	15.0(推定)	2.7	6.8(推定)	白	青花	中国	
31	磁器	皿	15.0(推定)	3.2	8.0(推定)	白	青花	中国	

表11　土壙F1432出土遺物3（図版305）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	擂鉢	37.8(推定)	14.7	16.0(推定)	赤褐		信楽	
2	陶器	擂鉢	33.8(推定)	14.3	13.0(推定)	鈍い赤褐		丹波	
3	陶器	擂鉢	42.8(推定)	18.6	13.2(推定)	鈍い赤褐		丹波	

表12　土壙B725出土遺物1（図版306）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5.2	1.5		浅黄橙		在地	
2	土師器	皿	5.3	1.2		鈍い橙		在地	
3	土師器	皿	5.3	1.5		橙		在地	
4	土師器	皿	5.3	1.2		浅黄橙		在地	
5	土師器	皿	5.3	1.3		鈍い橙		在地	
6	土師器	皿	5.6	1.7		鈍い橙		在地	
7	土師器	皿	5.6	0.9		浅黄橙		在地	
8	土師器	皿	5.6	1.4		浅黄橙		在地	
9	土師器	皿	5.7	1.4		浅黄橙		在地	
10	土師器	皿	5.8	1.6		浅黄橙		在地	
11	土師器	皿	5.8	1.4		浅黄橙		在地	
12	土師器	皿	5.8	1.4		鈍い橙		在地	
13	土師器	皿	5.9	2.0		浅黄橙		在地	
14	土師器	皿	5.9	1.7		鈍い橙		在地	
15	土師器	皿	6.0	1.6		浅黄橙		在地	
16	土師器	皿	6.2	1.6		浅黄橙		在地	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
17	土師器	皿	6.0	1.6		浅黄橙		在地	
18	土師器	皿	6.2	2.1		鈍い橙		在地	
19	土師器	皿	6.4	1.4		鈍い橙		在地	
20	土師器	皿	6.4	1.8		鈍い橙		在地	
21	土師器	皿	5.6	1.2		浅黄橙		在地	
22	土師器	皿	5.8	1.4		浅黄橙		在地	
23	土師器	皿	5.9	1.6		浅黄橙		在地	
24	土師器	皿	5.9	1.5		鈍い橙		在地	
25	土師器	皿	6.4	1.8		浅黄橙		在地	
26	土師器	皿	6.5	1.7		浅黄橙		在地	
27	土師器	皿	6.5	1.6		浅黄橙		在地	
28	土師器	皿	6.9	1.5		浅黄橙		在地	へそ皿形
29	土師器	皿	7.0	1.6		鈍い橙		在地	へそ皿形
30	土師器	皿	7.0	1.5		浅黄橙		在地	へそ皿形
31	土師器	皿	7.2	1.6		浅黄橙		在地	
32	土師器	皿	7.4	1.6		浅黄橙		在地	
33	土師器	皿	8.7	2.0		浅黄橙		在地	
34	土師器	皿	8.8	2.2		浅黄橙		在地	
35	土師器	皿	9.0	2.2		鈍い橙		在地	
36	土師器	皿	9.1	2.1		浅黄橙		在地	
37	土師器	皿	9.1	2.0		浅黄橙		在地	
38	土師器	皿	9.2	1.9		浅黄橙		在地	
39	土師器	皿	9.2	2.0		橙		在地	
40	土師器	皿	9.4	2.2		浅黄橙		在地	
41	土師器	皿	10.2	1.9		浅黄橙		在地	
42	土師器	皿	10.4	2.0		浅黄橙		在地	
43	土師器	皿	10.4	2.1		浅黄橙		在地	
44	土師器	皿	10.6	2.2		浅黄橙		在地	
45	土師器	皿	10.7	2.1		浅黄橙		在地	
46	土師器	皿	10.7	2.1		浅黄橙		在地	口縁端部煤付着
47	土師器	皿	10.8	2.1		浅黄橙		在地	
48	土師器	皿	10.9	2.2		鈍い橙		在地	
49	土師器	皿	11.0	2.0		浅黄橙		在地	
50	土師器	皿	11.0	2.0		灰白		在地	
51	土師器	皿	11.2	1.9		鈍い橙		在地	
52	土師器	皿	11.3	1.9		鈍い橙		在地	
53	土師器	皿	11.4	2.3		浅黄橙		在地	
54	土師器	皿	11.5	1.9		浅黄橙		在地	
55	土師器	皿	11.7	2.0		浅黄橙		在地	
56	土師器	皿	11.7	1.9		鈍い橙		在地	
57	土師器	皿	11.9	1.9		鈍い橙		在地	
58	土師器	皿	11.9	2.1		浅黄橙		在地	
59	土師器	皿	12.1	2.1		浅黄橙		在地	口縁端部煤付着
60	土師器	皿	12.1	2.1		浅黄橙		在地	
61	土師器	皿	12.6	2.0		浅黄橙		在地	
62	土師器	皿	12.6	2.2		浅黄橙		在地	
63	土師器	蓋	8.4	2.7		鈍い黄橙		在地	外面「度章□」墨書
64	土師器	蓋	11.1	3.0		鉄		在地	
65	土師器	蓋	11.4	2.9		浅黄橙		在地	
66	土師器	蓋	11.4	2.8		浅黄橙		在地	
67	土師器	蓋	11.6	2.9		浅黄橙		在地	
68	土師器	蓋	11.8	2.1(残)		浅黄橙		在地	
69	土師質	小壷	2.6	2.3		浅黄橙		在地	
70	土師質	小壷	2.3	2.6		灰白		在地	
71	土師質	小壷	2.1	2.2		灰白		在地	
72	土師質	小壷	2.6	2.9		明黄褐		在地	
73	土師質	小壷	2.9	2.2		明黄褐		在地	
74	土師質	小壷	2.4	2.5		灰白		在地	
75	土師質	小壷	2.4	2.4		灰白		在地	
76	土師質	小壷	2.2	2.3		灰白		在地	
77	土師質	小壷	2.2	2.2		鈍い黄橙		在地	
78	土師質	小壷	2.0	2.3		灰白		在地	
79	土師質	小壷	2.0	2.4		浅黄橙		在地	
80	土師質	小壷	2.0	2.6		淡黄		在地	
81	土師質	小壷	1.6	2.0		浅黄橙		在地	焼塩壷のミニチュアか
82	土師質	小壷	1.7	2.2		鈍い黄橙		在地	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
83	土師質	小壷	1.9	2.5		浅黄橙		在地	
84	土師質	小壷	2.5	2.6		灰白		在地	
85	土製品	ミニチュア	2.0	0.7		浅黄橙		在地	
86	土製品	土鈴				灰白		在地	
87	土師質	高杯	4.8	4.8	5.1	橙		在地	
88	土師質	鉢	6.5	4.5	5.0	灰黄褐		在地	
89	土師質	鉢	10.7	5.4	5.0	灰白		在地	
90	土師質	鉢	8.2	4.0	5.5	灰白		在地	
91	土師質	鉢	10.8	5.4	5.2	灰白		在地	

表13　土壙B725出土遺物2（図版307）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師質	焼塩壷	3.9	6.7	4.4	浅黄橙		京都	
2	土師質	焼塩壷	3.2	6.9		鈍い黄橙		京都	
3	土師質	焼塩壷	3.7	6.8	4.5	淡赤褐		京都	
4	土師質	焼塩壷	3.7	7.2	4.2	鈍い黄橙		京都	
5	土師質	焼塩壷	3.7	6.6	4.5	灰白		京都	
6	土師質	焼塩壷	3.7	6.9	4.7	浅黄橙		京都	
7	土師質	焼塩壷	3.6	6.7	4.7	鈍い黄橙		京都	
8	土師質	焼塩壷蓋	4.8	1.6		橙		京都	
9	土師質	焼塩壷蓋	5.2	2.7		橙		京都	
10	土師質	焼塩壷蓋	4.6	1.7		明褐灰		京都	
11	土師質	焼塩壷蓋	6.2	2.0		浅黄橙		京都	
12	土師質	花塩壷蓋	6.6(最大)	1.1		浅黄橙		深草	「なんばん七度/本やき志不」銘
13	土師質	焼塩壷	5.8	9.0	5.0	明赤褐		堺系	
14	土師質	焼塩壷	5.5	8.5	4.2	橙		堺系	
15	土師質	焼塩壷	5.6	8.8	4.3	橙		堺系	
16	土師質	焼塩壷	5.6	8.7	4.2	橙		堺系	
17	土師質	焼塩壷	5.4	8.4	5.6	橙		堺系	
18	土師質	焼塩壷	6.0	8.7	4.9	橙		堺系	
19	土師質	焼塩壷	7.2	11.1	5.6	橙		堺系	二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
20	土師質	焼塩壷	7.0	11.2	5.4	橙		堺系	二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
21	土師質	焼塩壷	6.3	10.4	5.1	橙		堺系	二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
22	土師質	焼塩壷	7.0	11.5	4.8	橙		堺系	二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
23	土師質	焼塩壷	6.2	10.4	5.2	橙		堺系	二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
24	土師質	焼塩壷蓋	6.2	1.7		黄橙		堺系	
25	土師質	焼塩壷蓋	6.4	1.6		橙		堺系	
26	土師質	焼塩壷蓋	6.0	1.6		橙		堺系	
27	土師質	焼塩壷蓋	6.6	1.6		橙		堺系	
28	土師質	焼塩壷蓋	7.0	1.8		橙		堺系	
29	土師質	焼塩壷蓋	6.2	1.6		橙		堺系	
30	土師質	焼塩壷蓋	6.4	1.7		橙		堺系	
31	土師質	焼塩壷蓋	6.6	1.7		橙		堺系	
32	土師質	焼塩壷蓋	6.6	1.5		橙		堺系	
33	土師質	焼塩壷蓋	8.0	2.1		浅黄橙		堺系	
34	土師質	炮烙	27.0	7.3(推定)		浅黄橙			外型作り　深草か
35	土師質	炮烙	30.0	6.6(推定)		浅黄橙			外型作り　深草か
36	土師質	炮烙	29.3	7.0		浅黄橙			外型作り　深草か
37	土師質	火入蓋	15.0(推定)	1.8(推定)	14.1(推定)	鈍い黄橙			深草か
38	瓦質	火入	23.0(推定)	16.7	17.6(推定)	灰白			

表14　土壙B725出土遺物3（図版308）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	碗	1.1	5.7	4.5	白	染付	肥前系	高台内「大明成化年製」
2	磁器	碗	10.8	6.1	4.6	白	染付	肥前系	高台内　崩し字「吉」か
3	磁器	碗	11.2	6.1	4.2	白	染付	肥前系	高台内「大明成化年製」
4	磁器	碗	11.5	5.7	4.4	白	染付	肥前系	高台内　崩し字
5	磁器	碗	11.4	6.2	4.3	白	染付	肥前系	高台内　崩し字
6	磁器	碗	11.5	5.6	4.4	白	染付	肥前系	高台内「大明成化年製」
7	磁器	碗	11.0	6.0	4.5	白	染付	肥前系	高台内「青徳年製」か
8	磁器	碗	11.0	5.4	4.3	白	染付	肥前系	高台内「大明嘉青年製」
9	磁器	碗	11.2	5.8	4.9	白	染付	肥前系	高台内「青明年製」
10	磁器	碗	11.8	5.7	4.3	白	染付	肥前系	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
11	磁器	碗	11.4	5.6	4.4	白	染付	肥前系	高台内　丸に崩し字
12	磁器	碗	11.8	6.0	4.5	白	染付	肥前系	高台内「太明」
13	磁器	碗	11.4	6.6	4.4	白	染付	肥前系	高台内　圏線のみ
14	磁器	碗	11.8	5.6	3.9	白	染付	肥前系	高台内　丸に崩し字
15	磁器	碗	11.4	5.9	4.2	白	染付	肥前系	高台内　丸に崩し字
16	磁器	碗	11.2	6.3	4.2	白	染付	肥前系	高台内　角に崩し字
17	磁器	碗	11.2	5.4	4.0	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」か
18	磁器	碗	11.5	5.8	4.5	白	染付	肥前系	高台内　角「福」
19	磁器	碗	11.0	5.7	4.4	白	染付	肥前系	高台内　丸に崩し字
20	磁器	碗	11.5	5.8	5.0	白	染付	肥前系	高台内「大明成化年製」
21	磁器	碗	10.4	5.6	3.6	白	染付	肥前系	高台内　崩し字
22	磁器	碗	10.9	5.8	4.6	白	染付	肥前系	高台内「青徳年製」か
23	磁器	碗	11.0	5.8	4.0	白	染付	肥前系	高台内「大明成化年製」
24	磁器	碗	11.1	6.1	3.9	白	染付	肥前系	高台内　丸に崩し字

表15　土壙Ｂ725出土遺物４（図版309）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	皿	13.0	2.8	5.8	白	染付	肥前系	口紅
2	磁器	皿	12.5	3.2	4.2	白	染付	肥前系	
3	磁器	皿	13.2	3.5	5.0	白	染付	肥前系	輪花
4	磁器	皿	12.9	3.5	4.2	白	染付	肥前系	
5	磁器	皿	12.8	2.7	5.6(推定)	白	染付	肥前系	口紅
6	磁器	皿	13.0	3.0	4.7	白	染付	肥前系	
7	磁器	皿	13.4	3.0	7.8	白	染付	肥前系	１点　ハリ支え
8	磁器	皿	11.4	2.4	6.9	白	染付	肥前系	高台内１点　ハリ支え　丸に「福」
9	磁器	皿	12.3	2.5	6.3(推定)	白	染付	肥前系	
10	磁器	皿	13.2	3.1	6.6	白	染付	肥前系	１点　ハリ支え
11	磁器	皿	11.4	2.6	7.4	白	染付	肥前系	高台内１点　ハリ支え「製」
12	磁器	皿	14.2	2.9	9.0	白	染付	肥前系	高台内１点　ハリ支え「宣徳年製」
13	磁器	碗	11.4	4.0	4.4	白	染付	肥前系	
14	磁器	小杯	5.3	3.3	2.4	白	染付	肥前系	
15	磁器	小杯	5.8	3.9	2.5	白	染付	肥前系	
16	磁器	小杯	6.0	3.7	2.4	白	染付	肥前系	
17	磁器	小杯	8.4	4.8	3.8	白	染付	肥前系	
18	磁器	小杯	6.3	3.7	2.4	白	染付	肥前系	
19	磁器	杯	6.6	4.4	2.6	白	染付	肥前系	
20	磁器	杯	7.2	4.7	2.9	白	染付	肥前系	高台内 角に崩し字
21	磁器	香油壷	2.6	4.1(残)		白	染付	肥前系	
22	磁器	香油壷	3.6	7.7	5.5	白	染付	肥前系	
23	磁器	合子蓋	7.3	1.3	4.8	白	瑠璃+鉄	肥前系	型押し
24	磁器	小杯	7.2	4.3	2.6	白	瑠璃	肥前系	
25	磁器	碗		1.3(残)	4.6	白	瑠璃	肥前系	高台内「青」か
26	磁器	碗	11.4	5.7	4.2	白	瑠璃+上絵	肥前系	赤・金彩か
27	磁器	碗	11.9	7.1	4.5	白	青磁	肥前系	高台無釉
28	磁器	碗	10.6	6.7	4.0	白	青磁	肥前系	高台無釉
29	磁器	碗	23.3	9.5	8.0	灰白	青磁染付	肥前系	釉下染付

表16　土壙Ｂ725出土遺物５（図版310）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	ミニチュア	2.9	1.9	1.4	白	白磁	肥前系	碗
2	磁器	ミニチュア	3.2	2.2	2.6	白	白磁	肥前系	碗
3	磁器	小杯	5.0	3.2	1.3	白	白磁	肥前系	
4	磁器	小杯	5.7	2.7	2.4	白	白磁	肥前系	
5	磁器	小杯	5.4	4.1	2.2	白	白磁	肥前系	
6	磁器	小杯	6.2	4.1	2.5	白	白磁	肥前系	
7	磁器	小杯	5.7	3.9	2.5	白	白磁	肥前系	
8	磁器	小杯	5.9	3.4	2.4	白	白磁	肥前系	
9	磁器	小杯	5.6	3.8	2.2	白	白磁	肥前系	
10	磁器	小杯	6.2	3.7	3.1	白	白磁	肥前系	
11	磁器	小杯	7.9	4.9	2.9	白	白磁	肥前系	
12	磁器	小杯	6.9	4.1	3.1	白	白磁	肥前系	
13	磁器	小杯	8.0	5.0	2.7	白	白磁	肥前系	
14	磁器	小杯	10.0	5.3	3.6(推定)	白	白磁	肥前系	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
15	磁器	碗	10.9	6.0	4.2	白	白磁	肥前系	
16	磁器	碗	10.9	5.7	4.2	白	白磁	肥前系	
17	磁器	碗	10.7	5.9	4.0	白	白磁	肥前系	
18	磁器	碗	10.7	6.0	4.4	灰白	白磁	肥前系	
19	磁器	碗	11.7	6.9	4.8	白	白磁	肥前系	
20	磁器	碗	11.1	6.3	3.9	白	白磁	肥前系	
21	磁器	碗	11.3	6.5	4.0	白	白磁	肥前系	
22	磁器	碗	10.9	6.2	7.8	白	白磁	肥前系	
23	磁器	碗	11.6	5.6	4.4	白	白磁	肥前系	
24	磁器	碗	10.7	5.9	5.0	白	白磁	肥前系	
25	磁器	碗	10.2	3.8	5.0	白	白磁	肥前系	
26	磁器	碗	11.5	4.8	4.4	白	白磁	肥前系	
27	磁器	皿	13.5	3.0	7.0	白	白磁	肥前系	輪花
28	磁器	碗	10.8	5.9(残)		白	上絵	肥前系	内面 花弁と丸文型押し金･銀･赤･青彩
29	磁器	碗	10.7	5.4	4.4	白	上絵	肥前系	内面 花弁と丸文型押し金･銀･赤･薄青彩
30	磁器	碗	10.5	5.6	4.2	白	上絵	肥前系	内面 銀杏と丸文型押し金･銀･赤･青彩
31	磁器	碗	11.4	6.3	4.0	白	上絵	肥前系	赤彩
32	磁器	碗	11.4	6.0	4.0	白	上絵	肥前系	金･赤･緑彩
33	磁器	碗	13.4	4.5	4.9	白	上絵	肥前系	内面 赤･黄･青彩
34	磁器	碗	12.4	4.2(残)		白	染付+上絵	肥前系	赤･緑･紫彩
35	磁器	碗	11.6(推定)	5.4	4.5	白	染付+上絵	肥前系	赤･緑･黒･紫彩
36	磁器	碗	10.6	6.7	4.0	灰白	青磁	肥前系	高台無釉
37	磁器	碗	11.0	7.3	4.6	灰白	青磁	肥前系	高台無釉
38	磁器	皿	14.1	3.9	4.5	白	青磁+鉄	肥前系	高台無釉 見込 蛇ノ目釉剥ぎ鉄釉圏線
39	磁器	皿	16.2	3.9	4.3	白	青磁+鉄	肥前系	高台無釉 見込 蛇ノ目釉剥ぎ鉄釉圏線
40	磁器	皿	13.5	3.2	4.2	白	青磁	肥前系	高台無釉 見込 蛇ノ目釉剥ぎ
41	磁器	皿	11.1	2.7	6.4	灰白	青磁	肥前系	
42	磁器	皿	20.8	5.2	6.5	白	青磁	肥前系	
43	磁器	皿	8.8	2.8	3.6	白	青花	中国	蛇ノ目高台
44	磁器	皿	11.6(推定)	3.7	5.0(推定)	白	青花	中国	
45	磁器	碗	13.4	4.3	5.9	白	青花	中国	蛇ノ目高台
46	磁器	碗	11.5(推定)	6.0	4.6	白	青花	中国	

表17　土壙Ｂ725出土遺物６（図版311）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	皿	14.5(推定)	2.8	8.1	白	青花	中国	
2	磁器	皿	10.2(推定)	2.5	6.0(推定)	白	青花	中国	
3	磁器	皿	11.6	2.9	5.1	白	青花	中国	高台内「大明成花年製」
4	磁器	皿	21.7	4.1	11.3	白	呉須赤絵	中国	印判手
5	陶器	碗	11.8	7.2	5.2	淡黄	灰	肥前系	呉器手
6	陶器	碗	12.6	6.4	5.0	灰白	灰	肥前系	呉器手
7	陶器	香炉	10.6	7.2	5.0	鈍い黄橙	鉄	肥前系	
8	陶器	壷	8.7(推定)	7.7(残)		灰	鉄	丹波	鉄釉流し
9	陶器	壷	11.0	5.4(残)		灰黄褐		ベトナム	長胴瓶
10	陶器	鉢	23.0	13.6	12.0(推定)	浅黄橙	鉄	瀬戸･美濃系	捏鉢
11	陶器	鉢	31.2(推定)	6.5(残)		鈍い赤褐	刷毛+二彩	肥前系	
12	陶器	鉢	31.5(推定)	8.4	12.8	赤褐	刷毛+二彩	肥前系	砂目
13	陶器	鉢	31.2(推定)	12.8	7.8	鈍い褐	刷毛+二彩	肥前系	砂目

表18　土壙Ｂ725出土遺物７（図版312）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	平碗	12.2(推定)	4.95	4.3	灰黄	錆絵	京都	白化粧
2	陶器	平碗	12.2	4.8	4.2	灰白	錆絵	京都	白化粧
3	陶器	平碗	13.5(推定)	4.8	5.2(推定)	淡黄	上絵	京都	錆絵染付 八角「清」印　赤･金･青･緑彩
4	陶器		4.1	1.1		灰白	灰	京都	平碗か　小判「清閑寺」印
5	陶器			3.3(残)	5.0	灰白	灰	京都	平碗か　「仁清」印
6	陶器	平碗	13.6(推定)	4.8	5.2	灰	錆絵染付か	京都	小判 異体字　印
7	陶器	碗	10.6	5.7	4.3	浅黄橙	錆絵	京都	
8	陶器	碗	10.4	5.9	4.0	灰白	錆絵染付	京都	「藤」小判印
9	陶器	壷	11.6(最大)	8.2(残)	8.0	灰白	上絵+鉄	京都	青･浅黄彩　内面鉄釉「御菩薩」印
10	陶器	壷	15.6(最大)	6.9(残)	13.6	赤褐		備前	緋襷
11	陶器	鉢	13.8	6.9	10.1	暗灰	灰	丹波	自然釉か
12	陶器	鉢	13.9	7.8	7.5	灰白	鉄	信楽	
13	陶器	鉢	15.6(最大)	10.3(残)	9.8(推定)	灰白	鉄	信楽	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
14	陶器	壷	11.3(推定)	20	14.8(推定)	灰白	鉄	信楽	
15	陶器	碗	10.8	6.6	5.0	灰白	灰	肥前系	
16	陶器	碗	13.2	7.8	4.2	灰白	灰	肥前系	
17	陶器	碗		3.6(残)	4.6	灰	鉄	肥前系	
18	陶器	碗	12.1	7.4	5.5	橙	灰	肥前系	
19	陶器	皿	13.5	3.6	4.6	暗赤褐	刷毛目	肥前系	砂目
20	陶器	皿	13.0	3.5	2.4	灰白	灰	肥前系	砂目
21	陶器	甕	35.0(最大)	24.5(残)		赤褐	刷毛+二彩	肥前系	

表19　土壙B725出土遺物8（図版313）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	擂鉢	41.2(推定)	17.7	15.6(推定)	鈍い黄橙		丹波	
2	陶器	擂鉢	43.8(推定)	15.8	20.2(推定)	褐灰		丹波	
3	陶器	擂鉢	43.6(推定)	17.8	16.0(推定)	橙		丹波	

表20　土壙B725出土遺物9（図版314）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	擂鉢	23.4	8.6	11.5	鈍い黄橙		信楽	
2	陶器	擂鉢	24.0	9.7	12.4	鈍い黄橙	鉄	信楽	口縁内外面鉄泥
3	陶器	擂鉢	41.8	17.9	15.2	褐灰		信楽	
4	陶器	擂鉢	41.4	21.6	19.3	橙		信楽	

表21　土壙F1455出土遺物1（図版315）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5.4	2.0		鈍い黄橙		在地	
2	土師器	皿	5.6	1.5		鈍い橙		在地	
3	土師器	皿	7.5	1.6		浅黄橙		在地	口縁端部煤付着
4	土師器	皿	8.8	1.9		浅黄橙		在地	
5	土師器	皿	10.6	2.0		浅黄橙		在地	
6	土師器	皿	10.7	1.9		浅黄橙		在地	
7	土師器	皿	10.7	1.9		浅黄橙		在地	
8	土師器	皿	10.8	2.1		浅黄橙		在地	
9	土師器	皿	10.8	2.0		浅黄橙		在地	
10	土師器	皿	11.0	1.9		灰白		在地	
11	土師器	皿	11.2	1.9		灰白		在地	
12	土師器	皿	11.2	2.0		灰白		在地	
13	土師器	皿	11.5(推定)	1.9		浅黄橙		在地	口縁端部煤付着
14	土師器	皿	11.4	1.9		浅黄橙		在地	
15	土師器	皿	11.6	2.0		浅黄橙		在地	
16	土師器	皿	11.6	2.1		鈍い黄橙		在地	口縁端部煤付着
17	土師器	皿	11.6	1.9		浅黄橙		在地	
18	土師器	皿	11.8	1.8		浅黄橙		在地	
19	土師器	皿	12.4	2.0		浅黄橙		在地	
20	土師器	皿	12.8	2.2		浅黄橙		在地	
21	土師質	小壷	1.4	2.1		鈍い橙		在地	
22	土師質	小壷	2.0	2.5		鈍い橙		在地	
23	土師質	小壷	2.2	2.6		灰白		在地	
24	土師質	小壷	2.2	2.4		灰白		在地	
25	土師質	小壷	1.8	2.8		灰白		在地	
26	土師質	小壷	2.2	2.5		灰白		在地	
27	土師質	鉢	5.6	3.4	3.3	鈍い橙		在地	ロクロ成形
28	土師質	鉢	8.2	5.2	3.4	灰白		在地	
29	土師質	鉢	14.4	7.0	3.6	浅黄橙		在地	
30	土師質	焼塩壷蓋	4.8	1.7		鈍い橙		京都	
31	土師質	焼塩壷蓋	5.6	1.9		鈍い橙		京都	
32	土師質	焼塩壷	2.3	6.8	3.8	鈍い黄橙		京都	
33	土師質	焼塩壷蓋	7.0	1.8	5.1	橙		堺系	
34	土師質	焼塩壷蓋	7.2	1.7	4.3	橙		堺系	
35	土師質	焼塩壷蓋	6.8	1.6	4.8	橙		堺系	
36	土師質	焼塩壷蓋	7.3	1.7	5.0	橙		堺系	
37	土師質	焼塩壷蓋	7.1	2.0	5.2	橙		堺系	
38	土師質	焼塩壷蓋	7.4	1.6	4.7	橙		堺系	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
39	土師質	焼塩壷	5.4	8.5	4.0	橙		堺系	
40	土師質	焼塩壷	5.8	9.0	3.5	橙		堺系	
41	土師質	焼塩壷	5.8	9.5	5.0	橙		堺系	二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
42	土師質	焼塩壷	5.9	9.8	5.0	橙		堺系	二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
43	土師質	焼塩壷	5.9	10.0	5.2	橙		堺系	二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
44	土師質	焼塩壷	6.2	10.6	5.1	橙		堺系	一重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
45	土師質	焼塩壷	6.4	10.8	4.7	橙		堺系	一重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
46	土師質	焼塩壷	6.2(推定)	10.6	4.8(推定)	橙		堺系	一重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘
47	土師質	火消壷蓋	13.6(推定)	1.6	12.4(推定)	浅黄橙			深草か
48	土師質	火消壷	12.4(推定)	8.0	10.9(推定)	浅黄橙			深草か
49	瓦質	火入蓋	24.0	12.6(残)		黄灰			
50	土師質	炮烙	31.8	6.4(残)		浅黄橙			深草か
51	土製品	ミニチュア	2.4	0.8		鈍い黄橙		在地	皿
52	土製品	ミニチュア	2.5	0.8		鈍い黄橙		在地	皿
53	土製品	土鈴	3.2(最大)	3.9		灰白		在地	墨書
54	陶器	碗	10.5	5.3	3.4	灰白	上絵	京都	赤・青・薄緑・金彩
55	陶器	碗	10.2	5.4		灰白	錆絵	京都	
56	陶器	碗			5.0	淡黄	白濁	京都	「岩倉」小判印
57	陶器	筆立		8.8(残)	7.4(最大)	淡黄	染付	京都	底部糸切 張り合せ
58	陶器	蓋	11.1(最大)	1.1		淡黄	錆絵染付	京都	
59	陶器	碗	8.4	4.2	3.9	淡黄	鉄	瀬戸・美濃系	
60	陶器	蓋	9.4(最大)	4.3		鈍い黄橙	緑	肥前系	
61	陶器	鉢	25.5	9.2	10.7	褐灰	刷毛目+二彩	肥前系	

表22　土壙Ｆ1455出土遺物２（図版316）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	小杯	5.6	3.3	2.2	白	染付	肥前系	
2	磁器	小杯	5.6	2.3	2.7	白	染付	肥前系	高台内「大明」
3	磁器	小杯	6.0	3.6	2.4	白	染付	肥前系	高台内異体字
4	磁器	小杯	6.4	4.7	3.2	白	染付	肥前系	高台内 角に異体字
5	磁器	碗	8.6	4.8	4.0	白	染付	肥前系	
6	磁器	碗	11.6	6.0	5.0	白	瑠璃	肥前系	
7	磁器	碗	11.2	6.4	5.2	白	染付	肥前系	
8	磁器	碗	10.0	5.6	4.1	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
9	磁器	碗	11.2	5.8	4.0	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
10	磁器	碗	11.8	6.2	5.1	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
11	磁器	碗	11.0	5.7	4.1	白	染付	肥前系	高台内「宣明年製」
12	磁器	碗	6.2	6.2	4.4	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
13	磁器	碗	11.1	5.6	4.6	白	染付	肥前系	高台内「宣明年製」
14	磁器	碗	11.5	5.8	5.0	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
15	磁器	碗	11.6	5.9	5.0	白	染付	肥前系	高台内異体字 見込「宣徳年製」
16	磁器	碗	10.4	5.2	4.0	白	染付	肥前系	高台内「宣徳」
17	磁器	碗	9.4	4.8	4.0	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
18	磁器	碗	11.4	6.1	4.6	白	染付	肥前系	高台内「大明成化年製」
19	磁器	碗	11.6	5.8	5.0	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
20	磁器	碗	11.7	6.3	5.0	白	染付	肥前系	高台内「宣明年製」
21	磁器	碗	9.6	5.3	4.3	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
22	磁器	碗	11.8	6.1	4.9	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
23	磁器	碗	11.5	6.3	5.2	白	染付	肥前系	高台内「宣明年製」
24	磁器	碗	10.3	6.0	4.3	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
25	磁器	碗	11.6	5.9	5.0	白	染付	肥前系	高台内「宣明年製」
26	磁器	碗	12.0	6.2	5.2	白	染付	肥前系	高台内「宣明年製」
27	磁器	碗	11.4	5.6	4.4	白	染付	肥前系	高台内「青」
28	磁器	碗	11.8	6.0	5.7	白	染付	肥前系	高台内「宣明年製」
29	磁器	碗	12.2	5.7	4.8	白	染付	肥前系	高台内「宣徳年製」
30	磁器	碗	7.3	7.5	5.6	白	染付	肥前系	
31	磁器	仏餉具	7.7	6.7	4.0	白	染付	肥前系	
32	磁器	壷	7.3	10.9	5.5	白	染付	肥前系	口縁端部釉剥ぎ

表23　土壙Ｆ1455出土遺物３（図版317）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	皿	13.5	3.3	7.4	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え
2	磁器	皿	12.4	2.6	7.8	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え「製」
3	磁器	皿	13.8	2.5	9.0	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
4	磁器	皿	13.7	2.6	4.3	白	染付	肥前系	高台内1点ハリ支え
5	磁器	皿	14.3	2.3	9.2	白	染付	肥前系	高台内1点ハリ支え
6	磁器	皿	13.4	2.9	8.4	白	染付	肥前系	高台内1点ハリ支え「福」か
7	磁器	皿	7.4	3.4	8.6	白	染付	肥前系	高台内1点ハリ支え
8	磁器	皿	14.5	3.7	8.7	白	染付	肥前系	高台内1点ハリ支え 角「福」
9	磁器	皿	10.1	2.7	5.0	白	染付	肥前系	
10	磁器	皿	14.4	3.8	5.5	白	染付	肥前系	
11	磁器	皿	14.9	3.2	9.4	白	染付	肥前系	高台内1点ハリ支え 角「福」
12	磁器	皿	14.3	3.4	8.4	白	染付	肥前系	
13	磁器	蓋	8.8	2.7	3.3	白	染付	肥前系	
14	磁器	蓋	9.15(最大)	2.7	3.4	白	染付	肥前系	
15	磁器	蓋	10.3(最大)	3.2		白	染付	肥前系	

表24　土壙F1455出土遺物4（図版318）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	ミニチュア	3.1	1.9	1.4	白	白磁	肥前系	碗
2	磁器	小杯	6.0	3.6	2.6	白	白磁	肥前系	
3	磁器	小杯	5.3	3.0	2.5	白	白磁	肥前系	
4	磁器	小杯	6.6	4.3	3.0	白	白磁	肥前系	
5	磁器	碗	11.2	6.0	4.2	白	白磁	肥前系	
6	磁器	碗	11.6	6.5	4.6	白	白磁	肥前系	
7	磁器	碗	11.2	6.4	4.4	白	白磁	肥前系	
8	磁器	蓋	10.8	3.4	3.8	白	白磁	肥前系	
9	磁器	壷	3.4	24.9	4.8	白	白磁	肥前系	
10	磁器	足付盤	19.9	7.2	5.3	白	青磁	肥前系	内面ヘラ彫　三足
11	磁器	水滴	2.8	9.4	3.8	白	上絵	肥前系	青・赤・黒・薄緑彩　柿右衛門様式
12	磁器	皿	10.6(推定)	2.4	2.0(推定)	白	上絵	肥前系	青・黄・紫彩
13	磁器	蓋	12.7(最大)	2.7(残)		白	上絵	肥前系	赤・黄・紫彩
14	磁器	鉢	12.2	4.1	6.4	白	染付	肥前系	高台内角に異体字
15	磁器	碗	21.0	10.1	7.5	白	染付	肥前系	高台内角「福」
16	磁器	皿	22.6	4.9	9.8	白	染付	肥前系	
17	磁器	碗	6.4	3.7	2.6	白	青花	中国	

表25　土壙F1455出土遺物5（図版319）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	擂鉢	28.3(推定)	12.1	11.0(推定)	鈍い橙		信楽	
2	陶器	擂鉢	36.7(推定)	14.7	13.0(推定)	灰白		信楽	
3	陶器	擂鉢	45.8	20.2	20.2	鈍い黄橙		信楽	

表26　土壙F1244出土遺物1（図版320）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5.2	1.2		鈍い橙		在地	
2	土師器	皿	5.4	1.3		橙		在地	
3	土師器	皿	5.5	1.5		鈍い橙		在地	
4	土師器	皿	5.6	1.2		橙		在地	
5	土師器	皿	5.6	1.4		鈍い橙		在地	
6	土師器	皿	5.7	1.4		鈍い橙		在地	
7	土師器	皿	5.8	1.5		鈍い橙		在地	
8	土師器	皿	5.8	1.1		鈍い橙		在地	
9	土師器	皿	5.8	1.0		鈍い橙		在地	
10	土師器	皿	5.9	1.3		鈍い橙		在地	
11	土師器	皿	5.9	1.3		鈍い橙		在地	
12	土師器	皿	5.9	1.3		鈍い橙		在地	
13	土師器	皿	6.2	1.4		鈍い橙		在地	
14	土師器	皿	6.1	1.1		鈍い橙		在地	
15	土師器	皿	6.2	1.4		鈍い橙		在地	
16	土師器	皿	6.5	1.3		鈍い橙		在地	
17	土師器	皿	6.4	1.3		鈍い橙		在地	へそ皿形
18	土師器	皿	6.6	1.3		鈍い橙		在地	へそ皿形
19	土師器	皿	6.8	1.4		鈍い橙		在地	へそ皿形
20	土師器	皿	7.0	1.4		鈍い橙		在地	へそ皿形
21	土師器	皿	10.6	2.1		鈍い橙		在地	
22	土師器	皿	10.6	1.9		浅黄橙		在地	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
23	土師器	皿	10.7	1.9		鈍い橙		在地	
24	土師器	皿	10.6	2.0		鈍い橙		在地	
25	土師器	皿	10.7	1.9		鈍い橙		在地	
26	土師器	皿	11.0	2.1		鈍い橙		在地	
27	土師器	皿	11.0	1.7		鈍い橙		在地	
28	土師器	皿	11.1	2.1		鈍い橙		在地	口縁端部煤付着
29	土師器	皿	11.2	1.9		鈍い橙		在地	
30	土師器	皿	11.4	2.0		鈍い橙		在地	
31	土師器	皿	11.4	2.0		鈍い橙		在地	
32	土師器	皿	11.4	1.9		鈍い橙		在地	
33	土師器	皿	11.4	2.0		鈍い橙		在地	
34	土師器	皿	11.8	2.1		橙		在地	
35	土師器	皿	12.2	1.7		鈍い橙		在地	
36	土師器	皿	12.0	2.3		鈍い橙		在地	口縁端部煤付着
37	土師器	蓋	8.8	2.2		橙		在地	
38	土師器	蓋	9.1	2.6		橙		在地	
39	土師器	蓋	12.0	2.7		橙		在地	
40	土師器	蓋	12.0	2.7		浅黄橙		在地	
41	土師質	小壷	2.2	2.5	2.0	灰白		在地	
42	土師質	小壷	2.2	2.8	1.3	灰白		在地	
43	土師質	小壷	2.5	2.5	2.3	灰白		在地	
44	土師質	小壷	2.5	2.6	2.3	灰白		在地	
45	土師質	焼塩壷蓋	4.4	1.7		浅黄橙		京都	
46	土師質	焼塩壷蓋	4.8	1.5		浅黄橙		京都	
47	土師質	焼塩壷蓋	4.8	1.7		鈍い黄橙		京都	
48	土師質	焼塩壷	3.2	6.0	4.0	橙		京都	
49	土師質	焼塩壷	3.2	6.5	4.4	橙		京都	
50	土師質	花塩壷蓋	6.0	1.4	7.2(最大)	浅黄橙		深草	「深草/砂川/権兵衛」銘
51	土師質	花塩壷蓋	5.2	1.1	6.8(最大)	鈍い黄橙		深草	「なんばん里う/七度やき志不」銘
52	土師質	花塩壷蓋	5.0	1.1	6.6(最大)	浅黄橙		深草	「なんばん七度/･･･志不」銘
53	土師質	花塩壷	6.5	3.5	6.9	鈍い黄橙		深草	
54	土師質	焼塩壷蓋	6.9	1.8	5.2	橙		堺系	
55	土師質	焼塩壷蓋	7.6	1.7	5.6	橙		堺系	
56	土師質	焼塩壷蓋	7.0	1.9	3.5	橙		堺系	
57	土師質	焼塩壷	6.6	10.4	4.2	橙		堺系	「御壺塩師/堺湊伊織」銘
58	土師質	焼塩壷	6.0	10.1	4.6	橙		堺系	「御壺塩師/堺湊伊織」銘
59	土師質	焼塩壷	6.1	10.7	4.7	橙		堺系	「御壺塩師/堺湊伊織」銘
60	土師質	焼塩壷蓋	7.6	2.3	7.6	浅黄橙		堺系	
61	土師質	焼塩壷蓋	7.7	2.5	7.6	浅黄橙		堺系	
62	土師質	焼塩壷蓋	7.8	2.6	7.2	浅黄橙		堺系	
63	土師質	焼塩壷蓋	7.6	2.5	6.6	橙		堺系	
64	土師質	焼塩壷	5.7	9.2	5.2	鈍い橙		堺系	「泉州麻生」銘
65	土師質	焼塩壷	6.3	9.7	5.0	鈍い橙		堺系	「泉州麻生」銘
66	土師質	焼塩壷	5.8	9.3	5.2	浅黄橙		堺系	「泉州麻生」銘
67	土師質	焼塩壷	6.2	9.8	5.4	鈍い橙		堺系	「泉州麻生」銘
68	土師質	鉢	9.2	3.8	4.7	浅黄橙		在地	ロクロ成形
69	土師質	鉢	8.6	4.0	2.6	浅黄橙		在地	
70	土師質	鉢	8.4	4.8	3.6	浅黄橙		在地	
71	土師質	鉢	11.2	5.3	5.1	淡黄		在地	
72	土師質	鉢	12.5	5.9	5.0	浅黄橙		在地	
73	土師質	鉢	13.6	7.0	3.2	浅黄橙		在地	
74	瓦質	火入蓋	23.0(推定)	9.7(残)		灰			
75	土師質	瓦灯蓋	16.8(推定)	13.9(残)		鈍い橙			深草か
76	瓦質	瓦灯	16.0	6.5	12.7	黒			
77	土師質	炮烙	28.5(推定)	6.0(推定)		鈍い橙			深草か
78	土師質	炮烙	31.0(推定)	5.8(推定)		鈍い橙			深草か

表27　土壙Ｆ1244出土遺物２（図版321）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	小杯	5.0	3.2	2.2	白	染付	肥前系	
2	磁器	碗	6.3	3.2	3.0	白	染付	肥前系	
3	磁器	碗	5.3	2.9	2.4	白	染付	肥前系	高台内「春」か
4	磁器	碗	8.8	4.9	3.8	白	染付	肥前系	
5	磁器	碗	10.5	5.9	4.4	白	染付	肥前系	
6	磁器	碗	10.7	5.9	4.3	白	染付	肥前系	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
7	磁器	碗	11.0	5.8	4.4	白	染付	肥前系	
8	磁器	碗	10.8	5.9	4.6	白	染付	肥前系	
9	磁器	碗	11.5	6.5	4.4	白	染付	肥前系	
10	磁器	碗	10.0	5.5	4.0	白	染付	肥前系	
11	磁器	碗	11.1	5.8	4.4	白	染付	肥前系	
12	磁器	碗	10.3	5.4	4.0	白	染付	肥前系	
13	磁器	碗	10.8	5.9	4.4	白	染付	肥前系	高台内「太明年製」
14	磁器	碗	11.0	6.1	4.7	白	染付	肥前系	
15	磁器	碗	11.1	6.0	4.4	白	染付	肥前系	高台内「太明年製」
16	磁器	碗	11.6	5.9	4.5	白	染付	肥前系	
17	磁器	碗	11.0	5.8	4.2	白	染付	肥前系	高台内「宣明年製」
18	磁器	碗	10.3	2.0	6.2	白	染付	肥前系	型紙摺
19	磁器	皿	9.6	2.9	4.4	白	染付	肥前系	輪花
20	磁器	皿	9.5	2.8	3.7	灰白	染付	肥前系	
21	磁器	皿	13.9	3.2	7.0	白	染付	肥前系	芙蓉手
22	磁器	皿	13.9	2.5	9.2	白	染付	肥前系	高台内1点ハリ支え
23	磁器	皿	20.9	2.9	13.4	白	染付	肥前系	高台内4点ハリ支え
24	磁器	皿	21.0	3.3	14.4	白	染付	肥前系	高台内3点ハリ支え
25	磁器	鉢	11.9	6.2	7.0	白	染付	肥前系	蛇ノ目高台三足 口縁内側釉剥ぎ
26	磁器	蓋	10.5	3.0	3.9	白	染付	肥前系	
27	磁器	皿	6.6	1.5	3.4	白	染付	肥前系	型紙摺
28	磁器	皿	6.7(推定)	2.1	3.9(推定)	白	白磁	中国	高台内無釉
29	磁器	壷		5.5(残)	4.3	白	上絵	肥前系	唾壷か　赤・青・緑・黒彩

表28　土壙F1244出土遺物3（図版322）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	皿	12.9	3.0	7.7	白	染付	肥前系	
2	磁器	皿	14.0	2.8	8.6	白	染付	肥前系	高台内1点ハリ支え
3	磁器	碗	10.6	6.0	4.2	白	白磁	肥前系	
4	磁器	碗	10.6	5.9	4.1	白	白磁	肥前系	
5	磁器	碗	10.8	5.8	4.4	白	白磁	肥前系	
6	磁器	碗	10.6	5.9	4.0	白	白磁	肥前系	
7	陶器	碗	8.7	4.9	3.4	浅黄	錆絵染付	京都	「清閑寺」小判印
8	陶器	碗	11.6	5.5	3.6	灰白	錆絵染付	京都	
9	陶器	灯明皿	11.7	3.4(残)	5.0	灰黄	灰	京都	見込3箇所目痕
10	陶器	平碗	13.5	5.1	4.2	灰白	錆絵染付	京都	見込3箇所目痕
11	陶器	鍋	16.8(推定)	10.3(推)	6.4	灰白	鉄	京都	見込3箇所目痕
12	陶器	鍋	19.0	7.3	6.5	灰白	鉄	京都	見込4箇所目痕
13	陶器	鉢	11.4	6.5	9.1	灰白	灰	信楽	
14	陶器	碗	10.2(推定)	6.2	4.0(推定)	灰白	青緑+透明	肥前系	高台無釉
15	陶器	碗	10.7(推定)	6.6	4.6(推定)	灰白	青緑+透明	肥前系	高台無釉
16	陶器	碗	9.6	6.7	4.2	淡黄	灰	肥前系	呉器手碗
17	陶器	碗	9.8	6.7	3.8	淡黄	灰	肥前系	呉器手碗
18	陶器	鉢	21.3	11.5	9.5	暗赤褐	鉄	肥前系	
19	陶器	鉢	25.0	6.9	10.0	暗赤褐	刷毛目	肥前系	見込砂目
20	陶器	蓋	12.3(最大)	2.2		橙		備前	
21	軟質施釉	灯明皿	12.5(推定)	1.7	6.4(推定)	浅黄橙	透明+黒		底部糸切口縁煤付着
22	土製品	ミニチュア	5.5	1.7	3.0	灰白	透明+緑	在地	
23	陶器	窯道具	6.0(最大)	1.5			褐灰		トチン(三脚円盤形)
24	陶器	擂鉢	39.8(推定)	12.9(残)		灰白	鉄	信楽	

表29　穴蔵F1387出土遺物1（図版323）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5.3	1.2		鈍い橙		在地	口縁端部煤付着
2	土師器	皿	5.5	1.5		鈍い橙		在地	
3	土師器	皿	5.5	1.2		鈍い橙		在地	口縁端部煤付着
4	土師器	皿	5.4	1.3		浅黄橙		在地	
5	土師器	皿	5.5	1.2		浅黄橙		在地	
6	土師器	皿	5.6	1.3		橙		在地	
7	土師器	皿	5.6	1.4		橙		在地	口縁端部煤付着
8	土師器	皿	5.6	1.4		浅黄橙		在地	口縁端部煤付着
9	土師器	皿	5.9	1.4		浅黄橙		在地	口縁端部煤付着
10	土師器	皿	5.9	1.5		浅黄橙		在地	
11	土師器	皿	6.0	1.2		浅黄橙		在地	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
12	土師器	皿	6.0	1.3		浅黄橙		在地	
13	土師器	皿	6.2	1.2		鈍い橙		在地	
14	土師器	皿	6.2	1.3		浅黄橙		在地	
15	土師器	皿	6.2	1.5		灰白		在地	底部3箇所穿孔
16	土師器	皿	6.4	1.5		鈍い橙		在地	
17	土師器	皿	6.4	1.5		浅黄橙		在地	
18	土師器	皿	6.6	1.7		灰白		在地	
19	土師器	皿	6.6	1.7		灰白		在地	
20	土師器	皿	7.1	1.9		鈍い橙		在地	
21	土師器	皿	7.5	1.7		鈍い橙		在地	
22	土師器	皿	7.9	1.8		浅黄橙		在地	
23	土師器	皿	8.5(推定)	2.0(残)		浅黄橙		在地	
24	土師器	皿	8.6	1.8		灰白		在地	口縁端部煤付着
25	土師器	皿	9.1	1.8		灰白		在地	
26	土師器	皿	9.2	1.8		浅黄橙		在地	
27	土師器	皿	7.0	1.4		浅黄橙		在地	へそ皿形
28	土師器	皿	7.0	1.3		浅黄橙		在地	へそ皿形
29	土師器	皿	7.1	1.7		浅黄橙		在地	へそ皿形
30	土師器	皿	7.1	1.7		浅黄橙		在地	へそ皿形
31	土師器	皿	8.1	1.9		浅黄橙		在地	へそ皿形
32	土師器	皿	8.5	1.8		浅黄橙		在地	へそ皿形
33	土師器	皿	10.0	1.9		浅黄橙		在地	
34	土師器	皿	11.6	1.9		浅黄橙		在地	
35	土師器	皿	11.1	2.0		灰白		在地	
36	土師器	皿	11.2	2.1		灰白		在地	
37	土師器	皿	11.2	1.5(残)		浅黄橙		在地	
38	土師器	皿	11.2	2.0(残)		浅黄橙		在地	
39	土師器	皿	11.6(推定)	2.4		灰白		在地	
40	土師器	皿	11.6(推定)	2.1		灰白		在地	
41	土師器	皿	11.5(推定)	1.8(残)		灰白		在地	
42	土師器	皿	11.8(推定)	2.3		灰白		在地	
43	土師器	皿	12.0(推定)	2.1		灰白		在地	
44	土師器	皿	12.2	2.0		灰白		在地	
45	土師器	皿	12.3	2.0		灰白		在地	
46	土師器	皿	12.2(推定)	2.0		灰白		在地	
47	土師器	皿	12.4(推定)	2.0(残)		灰白		在地	
48	土師器	皿	12.8(推定)	2.3		灰白		在地	
49	土師器	蓋	11.0(推定)	2.5		浅黄橙		在地	
50	土師器	蓋	12.8(推定)	2.5		浅黄橙		在地	
51	土師器	蓋	13.8(推定)	2.6		橙		在地	
52	土師質	小壷	2.5	2.6		灰白		在地	
53	土師質	小壷	2.6	2.9		灰白		在地	
54	土師質	小壷	2.0	2.4		灰白		在地	
55	土師質	小壷	2.5	3.0		灰白		在地	
56	土師質	鉢	9.8(推定)	3.6	5.2	浅黄橙		在地	
57	土師質	鉢	10.0(推定)	4.1	6.0(推定)	浅黄橙		在地	
58	土師質	鉢	7.2(推定)	5.5	5.8(推定)	浅黄橙		在地	ロクロ成形
59	土師質	鉢	19.3	7.5(残)		灰白		在地	体部下半外型成形
60	土師質	焼塩壷蓋	7.7	2.5	7.1	浅黄橙		堺系	内側圏線
61	土師質	焼塩壷蓋	7.8	2.3	7.3	浅黄橙		堺系	内側圏線
62	土師質	焼塩壷蓋	7.8	2.4	7.1	黄橙		堺系	
63	土師質	焼塩壷蓋	7.9	2.3	7.6	橙		堺系	
64	土師質	焼塩壷	6.3	9.8	5.0	橙		堺系	「御壺塩師/堺湊伊織」銘
65	土師質	焼塩壷	6.8	10.3	5.2	橙		堺系	「御壺塩師/堺湊伊織」銘
66	土師質	焼塩壷	6.1	9.4	6.2	橙		堺系	「御壺塩師/堺湊伊織」銘
67	土師質	焼塩壷	6.2	9.5	6.1	橙		堺系	「御壺塩師/堺湊伊織」銘
68	土師質	焼塩壷	6.1	9.5	5.1	橙		堺系	「泉州麻生」銘
69	土師質	焼塩壷	6.3	9.7	5.1	橙		堺系	「泉州麻生」銘
70	土師質	焼塩壷	6.2	9.9	5.3	橙		堺系	「泉州麻生」銘
71	土師質	焼塩壷	6.0	9.5	5.0	橙		堺系	「泉州麻生」銘
72	土師質	焼塩壷蓋	4.9	2.3		浅黄橙		京都	
73	土師質	焼塩壷	3.3	6.6	3.5	浅黄橙		京都	
74	土製品	ミニチュア	2.6	3.9	2.4	浅黄橙	透明+緑		小瓶
75	土師質	火消壷蓋	19.7(推)	2.8	18.0	鈍い橙			深草か
76	土師質	炮烙	28.1	5.6(残)		浅黄橙			深草か
77	土師質	炮烙	29.8(推)	6.4(残)		鈍い橙			深草か

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
78	軟質施釉	鬢水入	11.2(推定)	3.0		鈍い黄橙	透明+緑		
79	軟質施釉	鬢水入	14.0(推定)	3.5		鈍い黄橙	透明		

表30　穴蔵Ｆ1387出土遺物２（図版324）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	小杯	4.4	2.4	2.1	白	染付	肥前系	
2	磁器	小杯	5.6	3.0	2.6	白	染付	肥前系	
3	磁器	小杯	6.2	2.9	3.1	白	染付	肥前系	
4	磁器	小杯	6.6	3.4	3.1	白	染付	肥前系	
5	磁器	碗	8.4	4.9	3.5	白	染付	肥前系	型紙摺
6	磁器	碗	10.8	5.9	4.2	白	染付	肥前系	
7	磁器	碗	11.1	6.1	4.6	白	染付	肥前系	
8	磁器	碗	10.0	5.5	4.0	白	染付	肥前系	
9	磁器	碗	10.6	5.8	4.6	白	染付	肥前系	菊花文
10	磁器	碗	10.9	6.1	4.4	白	染付	肥前系	
11	磁器	碗	10.2	5.6	4.0	白	染付	肥前系	
12	磁器	碗	11.0	6.0	4.6	白	染付	肥前系	紅葉　型紙摺
13	磁器	碗	10.6	5.8	4.2	白	染付	肥前系	
14	磁器	碗	10.8	6.0	4.0	白	染付	肥前系	
15	磁器	碗	9.1	4.6	4.1	白	染付	肥前系	高台内「宣明年製」
16	磁器	碗	10.6	5.9	4.4	白	染付	肥前系	
17	磁器	碗	10.7	5.9	4.5	白	染付	肥前系	
18	磁器	碗	10.4	5.2	4.4	白	染付	肥前系	
19	磁器	碗	11.1	6.3	4.7	白	染付	肥前系	高台内「太明年製」
20	磁器	碗	10.9	6.0	4.2	白	染付	肥前系	
21	磁器	碗	11.0	6.3	4.4	白	染付	肥前系	雪輪　型紙摺
22	磁器	碗	10.2	5.6	4.2	白	染付	肥前系	
23	磁器	碗	10.8	6.4	4.8	白	染付	肥前系	
24	磁器	碗	10.7	6.1	4.6	白	染付	肥前系	
25	磁器	碗	10.7	5.9	4.5	白	染付	肥前系	
26	磁器	碗	10.9	6.0	4.7	白	染付	肥前系	桐　型紙摺
27	磁器	碗	11.1	5.7	4.9	白	染付	肥前系	
28	磁器	碗	11.4	5.9	4.2	白	染付	肥前系	
29	磁器	碗	10.0	5.8	4.4	白	染付	肥前系	
30	磁器	碗	10.9	6.0	4.2	白	染付	肥前系	
31	磁器	碗	10.9	6.2	4.4	白	染付	肥前系	
32	磁器	小杯	6.1	3.6	3.0	白	染付	肥前系	
33	磁器	碗	9.6(推定)	5.6	4.3(推定)	白	染付+上絵	肥前系	口紅　赤・緑・黒彩
34	磁器	蓋	10.6	3.3	3.8	白	白磁	肥前系	
35	磁器	碗	9.3	5.3	3.8	白	白磁	肥前系	
36	磁器	碗	9.7	5.6	4.2	白	白磁	肥前系	
37	磁器	碗	11.1	5.8	4.5	白	白磁	肥前系	
38	磁器	小杯	7.4	5.0	3.6	白	白磁	肥前系	
39	磁器	碗	10.8	5.9	4.4	白	白磁	肥前系	
40	磁器	碗	10.9	6.2	4.4	白	白磁	肥前系	
41	磁器	皿	9.4	1.9	5.9	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え
42	磁器	皿	11.8	2.6	7.2	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え　菊花文
43	磁器	皿	13.4	2.6	8.5	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え

表31　穴蔵Ｆ1387出土遺物３（図版325）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	皿	13.2	2.8	8.3	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え
2	磁器	皿	13.3	2.9	8.6	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え
3	磁器	皿	13.0	2.9	8.0	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え
4	磁器	皿	14.0	2.7	8.9	白	染付	肥前系	高台内1点ハリ支え　高台内「太明成化年製」
5	陶器	平碗	13.1(推定)	4.8	4.2	灰白	錆絵染付	京都	見込２箇所目痕
6	陶器	平碗	12.4	4.7	3.8	灰白	錆絵染付	京都	見込３箇所目痕
7	陶器	平碗	14.1	4.4	4.0	灰白	錆絵染付	京都	「音羽」印　見込２箇所目痕
8	陶器	平碗	13.5(推定)	4.6	4.4	灰白	錆絵染付	京都	「音羽」印　見込２箇所目痕
9	陶器	平碗		1.8(残)	4.3	灰白	透明	京都	「音羽」印
10	陶器	平碗	14.1(推定)	5.0	4.3	灰白	錆絵染付	京都	「音羽」印　見込２箇所目痕
11	陶器	平碗	11.0	5.0	3.5	灰白	錆絵染付	京都	
12	陶器	平碗	11.1	5.2	3.6	灰白	錆絵染付	京都	
13	陶器	碗	10.0	5.7	3.4	灰白	白濁	京都	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
14	陶器	碗	10.7(推定)	6.2	3.6(推定)	灰白	錆絵染付	京都	「音羽」印
15	陶器	蓋	12.0	2.1		灰白	灰	京都	
16	陶器	蓋	12.6	3.2		鈍い黄橙	灰	京都	
17	陶器	鉢	15.9(最大)	7.8	9.0	灰白	灰	京都	
18	陶器	壷	8.0(推定)	11.7	6.0	灰白	灰	瀬戸・美濃系	
19	陶器	平碗	13.0	5.1	5.4	灰白	錆絵	肥前系	
20	陶器	平碗	13.0	4.5	5.4	灰白	錆絵	肥前系	
21	陶器	碗	11.7	7.2	5.3	灰白	錆絵	肥前系	
22	陶器	碗	10.9	6.9	4.4	灰白	青緑	肥前系	内野山窯系
23	陶器	窯道具	5.9(最大)	1.0		鈍い黄橙			トチン
24	陶器	鉢	17.2	7.6	17.6	灰白		信楽	匣鉢か

表32　穴蔵Ｆ1387出土遺物４（図版326）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	鉢	23.6(推定)	5.0	9.2(推定)	鈍い黄橙	刷毛目	肥前系	内面砂目
2	陶器	鉢	29.3	9.0	11.6	鈍い黄橙	彫三島	肥前系	内面砂目
3	陶器	鉢	41.4	14.0	13.6	鈍い黄橙	彫三島	肥前系	内面砂目
4	陶器	擂鉢	33.8	13.6	12.3(推定)	浅黄橙		信楽	

表33　土壙Ｂ776出土遺物１（図版327）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5.3	1.4		鈍い橙		在地	
2	土師器	皿	5.3	1.6		浅黄橙		在地	
3	土師器	皿	5.3	1.4		浅黄橙		在地	
4	土師器	皿	5.5	1.2		鈍い橙		在地	
5	土師器	皿	5.6	1.3		浅黄橙		在地	
6	土師器	皿	5.6	1.4		鈍い橙		在地	
7	土師器	皿	10.1	2.3		灰白		在地	口縁端部煤付着
8	土師器	皿	10.3	2.0		灰白		在地	
9	土師器	皿	10.3	2.0		灰白		在地	
10	土師器	皿	10.7	1.9		灰白		在地	
11	土師器	皿	11.1	2.2		灰白		在地	
12	土師器	皿	11.3	2.0		灰白		在地	
13	土師器	皿	11.9	2.1		灰白		在地	
14	土師器	皿	12.1	2.0		浅黄橙		在地	口縁端部煤付着
15	土師器	皿	12.4	2.1		灰白		在地	
16	土師器	蓋	9.1	2.3		灰白		在地	
17	土師器	蓋	10.2	2.4		浅黄橙		在地	
18	土師器	蓋	11.0	2.4		灰白		在地	
19	土師器	蓋	12.4	2.6		灰白		在地	
20	土師器	高杯	9.8	8.3(残)		鈍い橙		在地	脚部未調整
21	土師質	焼塩壷蓋	4.5	1.5		浅黄橙		京都	
22	土師質	焼塩壷蓋	5.2	1.7		灰白		京都	
23	土師質	焼塩壷蓋	5.3	2.0		浅黄橙		京都	
24	土師質	焼塩壷蓋	7.6	1.9	8.1(最大)	橙		堺系	内面布目
25	土師質	焼塩壷蓋	7.2	1.9	7.9(最大)	橙		堺系	
26	土師質	焼塩壷蓋	7.3	1.9	8.0(最大)	橙		堺系	
27	土師質	焼塩壷	5.7	9.3	5.5	橙		堺系	「泉州堺麿生」銘
28	土師質	焼塩壷	5.7	9.1	6.1	橙		堺系	「泉州堺麿生」銘
29	土師質	焼塩壷	6.0	9.5	5.4	橙		堺系	「泉湊伊織」銘
30	土師質	焼塩壷	5.9	9.1	5.8	橙		堺系	「泉州磨生」銘
31	土師質	鉢	8.7	4.5	4.5	淡黄		在地	ロクロ作り　底部ヘラ切り
32	土師質	鉢	12.8	4.3	6.4	灰白		在地	ロクロ作り　内外面煤付着
33	土師質	火消壷蓋	10.2(推定)	2.5(残)		鈍い黄橙			深草か
34	土師質	炮烙	26.2	5.9		橙			外型 底部煤付着　深草か
35	軟質施釉	鉢	12.7(推定)	3.7(残)		赤褐	透明		釉銀化　楽系
36	瓦質	火入	10.7(推定)	9.6(最大)		暗灰			
37	磁器	碗	10.1	5.4	4.4	白	染付	肥前系	高台内角「福」No.39・41と同文様
38	磁器	碗	10.0	5.3	4.5	白	染付	肥前系	高台内角「福」
39	磁器	碗	9.9	5.3	4.4	白	染付	肥前系	高台内角「福」
40	磁器	碗	5.6	5.7	4.5	白	染付	肥前系	高台内異体字
41	磁器	碗	9.9	5.1	4.4	白	染付	肥前系	高台内角「福」
42	磁器	碗	10.1	6.3	4.0	白	染付	肥前系	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
43	磁器	碗	10.0	5.6	4.4	白	染付	肥前系	高台内角「福」
44	磁器	蓋物身	7.0	4.2	3.2	白	染付	肥前系	口縁内部釉剥ぎ
45	磁器	皿	6.6(最大)	1.4	3.9	白	白磁	肥前系	型作り
46	磁器	碗	6.8	5.6	4.3	白	染付	肥前系	高台内「大明年製」
47	磁器	碗	7.3	5.4	4.2	白	染付	肥前系	高台内角「福」
48	磁器	碗	14.3	6.3	5.1	白	染付	肥前系	亀甲繋ぎ　菊花文　見込菊花
49	磁器	碗	14.3	7.4	5.6	白	染付	肥前系	高台内崩れ「大明年製」
50	磁器	皿	10.2	2.4	6.3	白	染付	肥前系	高台内「大明成化年製」手描五弁花
51	磁器	皿	9.8	2.4	4.9	白	染付	肥前系	コンニャク文　輪花
52	磁器	皿	10.1	2.7	6.0	白	染付	肥前系	菊花文　亀甲紋繋ぎ
53	磁器	皿	18.5(推定)	3.1	12.1(推定)	白	染付	肥前系	高台内２点ハリ支え残る

表34　土壙Ｂ776出土遺物２・土壙Ｈ166出土遺物１（図版328）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	平碗	12.3	4.4	3.7	灰	錆絵	京都	高台内圏線　墨書　見込３箇所目痕
2	陶器	平碗	12.2	4.8	4.1	白	錆絵	京都	見込３箇所目痕
3	陶器	平碗	12.0	4.6	3.8	白	錆絵染付	京都	目痕なし
4	陶器	碗	9.6	5.2	3.6	白	錆絵	京･信楽系	高台内圏線
5	陶器	碗	9.5	5.7	3.1	白	錆絵	京都	高台内圏線
6	陶器	平碗	10.8	4.1	3.8	白	錆絵染付	京都	高台内施釉
7	陶器	筒型容器	5.6	10.3	5.2	灰	錆絵(染付)	京都	花入　高台内墨書
8	陶器	蓋物身	6.7	5.2	4.6	浅黄橙	灰	京･信楽系	高台周辺無釉　口縁内部釉剥ぎ
9	陶器	碗	10.3	4.9	4.0	鈍い橙	刷毛目	肥前系	
10	陶器	碗	8.6	6.6	4.4	鈍い橙	刷毛目	肥前系	
11	陶器	平碗	12.3	4.5	5.0	白	錆絵	肥前系	高台内銘なし
12	陶器	鉢	13.4	5.8	6.6	灰黄	灰	京･信楽系	高台内施釉
13	陶器	蓋	5.0	1.6(残)	6.5(最大)	淡黄	透明	京･信楽系	
14	陶器	蓋	8.0	3.2	10.5(最大)	淡黄	透明	京･信楽系	
15	陶器	鍋	18.0(推定)	8.3	7.6(推定)	浅黄橙	鉄	京･信楽系	内面目痕
16	陶器	壷	9.2	18.7	9.3	白	鉄+透明	信楽	腰白茶壷　底部糸切り施釉　体部上面ロクロ目
17	土師器	皿	5.4	1.1		灰白		在地	
18	土師器	皿	5.5	1.3		鈍い黄橙		在地	
19	土師器	皿	7.9	1.6		橙		在地	
20	土師器	皿	8.0	1.6		橙		在地	
21	土師器	皿	10.3	2.0		浅黄橙		在地	
22	土師器	皿	10.3	2.0		橙		在地	
23	土師器	皿	10.4	1.8		浅黄橙		在地	
24	土師器	皿	10.6	2.0		橙		在地	
25	土師器	皿	10.7	1.8		鈍い橙		在地	
26	土師器	皿	10.8	2.0		鈍い橙		在地	
27	土師器	皿	12.0	2.1		浅黄橙		在地	
28	土師器	皿	12.4	2.3		灰白		在地	口縁端部煤付着
29	土師器	皿	12.9	2.4		灰白		在地	
30	土師器	皿	12.9	2.4		鈍い黄橙		在地	
31	土師質	焼塩壷蓋	7.6	1.9	7.7	橙		堺系	
32	土師質	焼塩壷蓋	7.6	2.1	8.2	橙		堺系	
33	土師質	焼塩壷	6.0	8.3	5.4	橙		堺系	「サカイ/泉州磨生/御塩所」銘
34	土師質	焼塩壷	6.3	8.6	5.8	橙		堺系	「サカイ/泉州磨生/御塩所」銘
35	土製品	ミニチュア	1.7	6.1	3.2(最大)	灰白	緑	在地	左右型作り
36	土製品	ミニチュア	2.8	3.5	2.8	浅黄橙	鉄	在地	ロクロ作り
37	土製品	人形		4.3	3.1(最大)	灰白		在地	手捏ね
38	土製品	人形		4.0	4.0(最大)	灰白		在地	手捏ね
39	土製品	人形		4.8	3.6(最大)	灰白		在地	左右型作り
40	土製品	人形		2.2	5.1(最大)	灰白	緑	在地	左右型作り
41	土製品	人形		7.5	6.2(最大)	灰白		在地	左右型作り　底部開口
42	土製品	人形		2.5	5.5(最大)	淡黄	緑	在地	上下型作り　上部穿孔　浮人形
43	土製品	人形		6.8	5.4(最大)	浅黄橙		在地	左右型作り　底部開口
44	土製品	人形		9.4(残)	4.5(最大)	浅黄橙		在地	手捏ね　底部開口
45	土師質	火消壷蓋	27.6	4.4	25.7	浅黄橙			深草か
46	土師質	炮烙	29.2	6.5		浅黄橙			深草か

表35　土壙H166出土遺物2（図版329）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	紅皿	5.6	1.9	2.7	白	染付+上絵	肥前系	金・赤・緑・黒彩
2	磁器	紅皿	6.0	2.4	2.8	白	染付+上絵	肥前系	金・赤・緑・黒彩
3	磁器	紅皿	6.1	2.3	2.4	白	上絵	肥前系	金・赤彩
4	磁器	碗	8.3	3.8	2.8	白	染付	肥前系	
5	磁器	碗	9.8	4.4	4.7	白	染付	肥前系	
6	磁器	碗	10.1	5.5	4.2	白	染付	肥前系	コンニャク紋
7	磁器	碗	11.2	5.1	5.2	白	染付	肥前系	
8	磁器	碗	9.8	5.5	3.8	白	染付	肥前系	コンニャク紋　高台内角「大明年製」
9	磁器	碗	10.0	5.3	3.9	白	染付	肥前系	コンニャク紋　高台内角「大明年製」
10	磁器	碗	9.8	5.4	4.3	白	染付	肥前系	高台内角「大明年製」
11	磁器	碗	11.9	6.4	4.6	白	染付	肥前系	高台内渦福
12	磁器	碗	9.8	5.9	3.6	白	染付	肥前系	高台内角「大明年製」
13	磁器	碗	10.9	5.7	4.2	白	染付	肥前系	高台内角「福」
14	磁器	碗	7.0	7.6	4.6	白	染付	肥前系	高台内角「福」　輪花
15	磁器	皿	10.6	2.6	6.6	白	染付	肥前系	蛇ノ目凹形高台　高台内角「富貴長春」
16	磁器	蓋	10.2	2.8	4.3	白	染付	肥前系	
17	磁器	水滴		3.6	9.2(最大)	灰白	染付+鉄	肥前系	側面無釉(右)
18	陶器	蓋物身	7.8	3.7	4.5	灰白	灰	京･信楽系	口縁端部釉剥ぎ
19	陶器	碗	9.3	6.8	5.0	灰白	透明	京･信楽系	高台内渦状　釉下白化粧
20	陶器	平碗	12.2	4.6	4.6	淡黄	上絵	京･信楽系	金・薄緑・青・赤彩
21	陶器	平碗	12.0	4.5	3.7	灰白	上絵	京･信楽系	金･赤彩(他 銀化)　見込3箇所目痕
22	陶器	平碗	11.9	4.4	4.2	灰白	錆絵	京･信楽系	高台内渦状
23	陶器	平碗	11.2	4.4	4.1	灰白	上絵	京･信楽系	金・薄青・薄緑彩　高台内渦状「寶山」銘
24	陶器	碗	6.2	3.5	2.2	灰白	上絵	京･信楽系	赤・薄緑彩
25	陶器	碗	6.5	3.7	2.5	浅黄橙	上絵	京･信楽系	赤・青・緑彩
26	陶器	碗	9.1	5.7	3.0	淡黄	上絵	京･信楽系	金･赤･薄青彩(他銀化)
27	陶器	碗	10.8	6.0	4.4	灰白	錆絵染付	京･信楽系	見込３箇所目痕
28	陶器	碗	10.8	6.0	4.2	灰白	錆絵染付	京･信楽系	見込３箇所目痕
29	陶器	筒型容器		9.8(残)	5.1	淡黄	上絵	京･信楽系	花入　赤・青・薄緑彩　内面ロクロ目
30	陶器	筒型容器	4.2	6.6	4.7	灰白	灰+鉄	瀬戸･美濃系	灰吹　横沈線、縦鎬　底部糸切　鉄釉掛分け
31	陶器			9.2	7.5(最大)	淡黄	錆絵	京･信楽系	水滴か　前後型合せ
32	軟質施釉	蓋	17.2	3.9		灰白	緑+赤彩+他	在地	型押し　菊花文　四方襷(地文) 内面透明釉
33	陶器	蓋	12.2(最大)	4.0		淡黄	灰	京･信楽系	
34	陶器	鍋	12.0(推定)	6.0	6.0	灰白	鉄		異形把手
35	陶器	鉢	12.2	7.4	13.0	灰褐			匣鉢か
36	陶器	碗	12.2	7.0	5.2	灰白	染付+灰		

表36　土壙H271出土遺物1（図版330）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	Ⅲ	5.4	1.4		浅黄橙		在地	
2	土師器	Ⅲ	7.7	2.3		浅黄橙		在地	
3	土師器	Ⅲ	7.8	1.5		浅黄橙		在地	
4	土師器	Ⅲ	7.8	1.6		鈍い橙		在地	口縁端部煤付着
5	土師器	Ⅲ	8.0	1.6		橙		在地	
6	土師器	Ⅲ	8.1	1.8		橙		在地	
7	土師器	Ⅲ	8.1	1.8		灰白		在地	口縁端部煤付着
8	土師器	Ⅲ	8.5	1.9		浅黄橙		在地	
9	土師器	Ⅲ	8.5	1.7		鈍い橙		在地	
10	土師器	Ⅲ	10.2	1.9		鈍い橙		在地	
11	土師器	Ⅲ	10.2	1.9		灰白		在地	
12	土師器	Ⅲ	10.3	1.9		灰白		在地	
13	土師器	Ⅲ	10.4	1.9		灰白		在地	
14	土師器	Ⅲ	10.4	1.9		灰白		在地	
15	土師器	Ⅲ	10.5	2.0		浅黄橙		在地	
16	土師器	Ⅲ	10.6	2.1		橙		在地	
17	土師器	Ⅲ	10.6	2.1		鈍い橙		在地	
18	土師器	Ⅲ	10.8	2.1		橙		在地	
19	土師器	Ⅲ	10.9	2.0		灰白		在地	
20	土師器	Ⅲ	11.0	1.8		浅黄橙		在地	
21	土師器	Ⅲ	11.7	2.1		鈍い橙		在地	
22	土師器	Ⅲ	11.8	2.1		浅黄橙		在地	
23	土師器	Ⅲ	11.8	2.0		浅黄橙		在地	
24	土師器	Ⅲ	12.0	2.0		浅黄橙		在地	
25	土師器	Ⅲ	12.0	2.1		浅黄橙		在地	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
26	土師器	皿	12.4	2.3		浅黄橙		在地	
27	土師器	蓋	11.8	2.6		浅黄橙		在地	
28	土師質	小壷	2.5	2.7		灰白		在地	
29	土師質	鉢	5.0(推定)	3.8(残)		灰白		在地	手捏ね
30	土師質	鉢	8.0	3.4	4.5	灰白		在地	ロクロ成形　底部ヘラ切り
31	土師質	鉢	11.4	3.9	7.6	灰白		在地	ロクロ成形　底部ヘラ切り
32	土師質	焼塩壷蓋	7.3	2.0	8.1	橙		堺系	
33	土師質	焼塩壷蓋	7.2	1.9	7.8	橙		堺系	
34	土師質	焼塩壷	5.7	8.5	5.3	橙		堺系	「サカイ/泉州磨生/御塩所」銘
35	土師質	焼塩壷	6.2	8.5	5.4	橙		堺系	「サカイ/泉州磨生/御塩所」銘
36	土製質	炮烙	29.5(推定)	7.1		浅黄橙			深草か
37	土製品	人形		4.5(残)	4.1(最大)	浅黄橙		在地	前後型作り　中空
38	土製品	人形		4.7	6.9(最大)	鈍い橙		在地	左右型作り　腹部開口
39	土製品	人形		6.0(残)	4.5(最大)	灰白		在地	前後型作り　底部開口
40	土製品	人形		4.3(残)	4.8(最大)	鈍い赤褐		在地	猿　瓦質
41	土製品	人形		7.3(残)	4.0(最大)	浅黄橙		在地	左右型作り　底部開口
42	土製品	ミニチュア	3.1	1.7	1.7	灰白		在地	擂鉢　手捏ね
43	磁器	小杯				白	瑠璃	肥前系	薄瑠璃釉
44	磁器	紅皿	5.8	2.4	2.5	白	染付	肥前系	
45	磁器	紅皿	5.9	2.3	2.4	白	上絵	肥前系	赤絵
46	磁器	小杯	6.2	3.5	2.8	灰白	染付	肥前系	
47	磁器	小杯	7.2	4.6	3.1	灰白	染付	肥前系	
48	磁器	碗	7.3	4.0	2.6	白	染付	肥前系	
49	磁器	碗	7.5	4.1	2.6	白	染付	肥前系	
50	磁器	碗	8.0	4.0	3.3	白	染付	肥前系	
51	磁器	碗	8.6	4.0	3.4	白	上絵	肥前系	赤・黒・青彩
52	磁器	碗	8.8	4.4	3.4	白	染付	肥前系	
53	磁器	碗	10.9	4.9	4.3	白	染付	肥前系	
54	磁器	碗	9.8	5.3	3.8	白	染付	肥前系	高台内「大明年製」か
55	磁器	碗	9.8	4.2	4.0	白	染付	肥前系	高台内角「福」
56	磁器	碗	10.1	4.8	4.3	白	染付	肥前系	高台内角「福」　No.55と同意匠
57	磁器	碗	10.8	5.5	4.3	白	染付	肥前系	高台内「大明年製」か
58	磁器	碗	10.8	6.2	4.4	白	染付	肥前系	高台内「大明年製」か
59	磁器	碗	10.6	5.6	4.4	白	染付	肥前系	高台内「大明年製」か
60	磁器	皿	10.0	2.4	5.6	白	染付	肥前系	見込手描五弁花
61	磁器	皿	9.4	2.7	5.6	白	染付	肥前系	コンニャク五弁花　高台内「大明年製」か
62	磁器	皿	10.2	2.2	5.8	白	染付	肥前系	高台内角「福」
63	磁器	皿	10.3	3.2	5.0	白	染付	肥前系	コンニャク文+手描　高台内「大明年製」
64	磁器	皿	10.3	3.2	4.9	白	染付	肥前系	No.63と同意匠
65	磁器	碗	7.6	6.0	3.8	白	染付	肥前系	型紙+手描　高台内「大明年製」口紅
66	磁器	鉢	7.2	7.5	4.6	白	染付	肥前系	輪花　高台内角「福」
67	磁器	蓋物身	9.6	5.2	6	白	染付	肥前系	口縁内側釉剥ぎ
68	磁器	蓋	5.1(最大)	1.5		白	白磁	肥前系	
69	磁器	紅皿	4.1	1.3	1.5	白	白磁	肥前系	
70	磁器	仏餉具	7.2	5.4	3.8	白	白磁	肥前系	

表37　土壙H271出土遺物２（図版331）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	皿	13.3	3.0	7.7	白	染付	肥前系	墨弾き　高台内１点ハリ支え「元」
2	磁器	皿	13.2	3.3	7.4	白	染付	肥前系	コンニャク五弁花　高台内「大明年製」か
3	磁器	皿	16.6	3.2	9.9	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え　口紅
4	磁器	皿	14.2	4.1	7.5	白	染付	肥前系	高台内１点ハリ支え　高台内角「福」
5	磁器	蓋	10.0	3.0	3.7	白	染付	肥前系	高台内角「福」
6	磁器	蓋	9.9	2.8	4.2	白	染付	肥前系	No.７の蓋　四方襷・手描五弁花
7	磁器	鉢	10.9	5.7	4.8	白	染付	肥前系	蓋付碗　四方襷・手描五弁花
8	磁器	壷	8.7	16.8	6.4	白	青磁	肥前系	花入
9	陶器	平碗	12.1	4.3	3.8	灰白	上絵	京・信楽系	見込3箇所目痕　赤・青彩 他(銀化)
10	陶器	平碗	12.2	4.7	4.0	灰白	上絵	京・信楽系	赤・緑彩 他(銀化)
11	陶器	平碗	12.8	4.5	4.2	灰白	錆絵+上絵	京・信楽系	赤・青(銀化)・緑(銀化)
12	陶器	平碗	11.9	4.2	3.8	灰白	錆絵染付	京・信楽系	赤・緑 他(銀化) 上絵付
13	陶器	平碗	12.5	4.7	4.1	淡黄	上絵	京・信楽系	透明釉白濁　上絵銀化
14	陶器	平碗	12.6	4.6	4.8	浅黄橙	上絵	京・信楽系	見込3箇所目痕　赤・金彩 他(銀化)
15	陶器	平碗	11.9	4.3	4.3	灰白	上絵	京・信楽系	金・赤・緑・青彩
16	陶器	平碗	12.3	4.7	4.8	灰白	上絵	京・信楽系	見込３箇所目痕　赤・青・緑・金彩
17	陶器	平碗	12.4	4.4	3.9	灰白	錆絵	京・信楽系	見込３箇所目痕　高台内円圏
18	陶器	平碗	11.8	4.3	4.0	灰白	鉄+灰	京・信楽系	見込３箇所目痕　釉掛分け

表38　土壙H271出土遺物3（図版332）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	平碗	12.2	4.1	3.8	淡黄	上絵	京・信楽系	見込3箇所目痕　赤・金彩他　高台内渦状
2	陶器	平碗	11.1	3.8	3.5	灰白	錆絵染付	京・信楽系	青・緑彩+金か　上絵付
3	陶器	平碗	12.0	4.3	3.9	灰白	上絵	京・信楽系	見込3箇所目痕　赤・緑・青彩他　高台内渦状
4	陶器	碗	7.5	3.9	2.5	灰白	灰	京・信楽系	残存部上絵なし
5	陶器	碗	9.5	5.6	3.2	灰白	錆絵	京・信楽系	体部下半すぼまる
6	陶器	碗	9.2	5.7	3.2	灰白	錆絵+上絵	京・信楽系	赤・緑彩
7	陶器	碗	9.6	5.6	3.1	灰白	錆絵	京・信楽系	体部下半すぼまる
8	陶器	碗	9.4	5.3	3.2	灰白	上絵	京・信楽系	赤・緑彩(銀化)
9	陶器	碗	9.3	6.2	3.4	灰白	上絵	京・信楽系	金・緑・青彩
10	陶器	碗	9.4	5.5	3.2	灰白	錆絵	京・信楽系	体部下半すぼまる
11	陶器	碗	9.4	5.4	3.2	灰白	上絵	京・信楽系	赤彩他(銀化)
12	陶器	碗	10	5.9	3.2	灰白	上絵	京・信楽系	赤・緑彩　見込3箇所目痕(上絵で隠す)
13	陶器	碗	9	5.5	3.2	灰白	錆絵	京・信楽系	
14	陶器	碗	9	5.2(残)		灰白	黒	京・信楽系	
15	陶器	碗	9	5.7	3.1	灰白	上絵	京・信楽系	赤・緑・金彩
16	陶器	碗	10	6.4	4.2	灰白	錆絵染付	京・信楽系	高台内施釉
17	陶器	碗	11	5.9	4.4	灰白	白+錆絵	京・信楽系	半筒碗
18	陶器	碗	10.9(推定)	5.5(残)		灰白	白+錆絵	京・信楽系	半筒碗　見込2箇所目痕（残存部）
19	陶器	柄杓	9.2	5.5	4.2	灰白	鉄	京・信楽系	継手欠損
20	陶器	筒型容器	4.7	7.8	5.2	灰白	鉄+灰	京・信楽系	灰吹か　釉掛分け
21	陶器	合子蓋	8.2	1.5		灰白	錆絵染付	京・信楽系	
22	陶器	蓋	11.0(最大)	2.4		淡黄	白+錆絵	京・信楽系	
23	陶器	蓋	11.5(最大)	4.2		灰白	灰	京・信楽系	
24	陶器	蓋	10.0(最大)	3.4		浅黄	鉄	京・信楽系	No.27の蓋か
25	陶器	蓋	11.8(最大)	3.4		浅黄	鉄	京・信楽系	No.28の蓋か
26	陶器	鍋	12.3	5.6	5.0	鈍い褐	鉄	京・信楽系	底部煤付着　見込2箇所目痕(残存部)
27	陶器	土瓶	8.7	10.7	8.2	灰白	鉄	京・信楽系	底部煤付着
28	陶器	土瓶	11.4	10.2	10.4	浅黄橙	鉄	京・信楽系	底部煤付着
29	陶器	土瓶	11.0	12.9	8.0	灰白	錆絵	京・信楽系	底部煤付着
30	陶器	水滴		8.1	6.0(最大)	灰白	錆絵	京・信楽系	酒呑童子か　前後型合せ
31	陶器	甕	21.9	22.7	11.4	灰白	鉄+黒		体部中央上下継　黒釉流し　信楽か
32	陶器	擂鉢	21.3	8.9	9.4	淡黄	鉄	信楽	やや軟質

表39　土壙E45出土遺物1（図版333）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	4.8	1.2		鈍い橙		在地	
2	土師器	皿	4.9	1.2		橙		在地	
3	土師器	皿	4.9	1.1		橙		在地	
4	土師器	皿	5.0	1.1		浅黄橙		在地	
5	土師器	皿	5.0	1.5		鈍い橙		在地	
6	土師器	皿	5.1	1.1		鈍い黄橙		在地	
7	土師器	皿	5.0	1.5		鈍い黄橙		在地	
8	土師器	皿	5.3	1.3		浅黄橙		在地	
9	土師器	皿	5.4	1.3		鈍い黄橙		在地	
10	土師器	皿	5.4	1.2		鈍い橙		在地	
11	土師器	皿	5.4	1.2		鈍い黄橙		在地	
12	土師器	皿	5.6	1.3		浅黄橙		在地	
13	土師器	皿	7.4	1.6		橙		在地	
14	土師器	皿	7.8	1.5		浅黄橙		在地	
15	土師器	皿	7.8	1.5		浅黄橙		在地	
16	土師器	皿	7.8	1.5		浅黄橙		在地	
17	土師器	皿	7.8	1.8		橙		在地	
18	土師器	皿	9.8	2.1		灰白		在地	口縁端部煤付着
19	土師器	皿	10.0	2.0		橙		在地	
20	土師器	皿	10.0	1.9		浅黄橙		在地	
21	土師器	皿	10.1	1.9		灰白		在地	
22	土師器	皿	10.2	2.0		灰白		在地	
23	土師器	皿	11.6	2.2		鈍い橙		在地	
24	土師器	皿	11.5	2.5		橙		在地	
25	土師器	皿	11.6	2.3		橙		在地	
26	土師器	皿	11.8	2.2		灰白		在地	口縁端部煤付着
27	土師器	皿	14.2	2.4		浅黄橙		在地	
28	土師質	小壷	3.2	2.0	1.5	灰白		在地	
29	土師質	小壷	2.4	2.3	2.5	灰白		在地	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
30	土師質	鉢	4.9	1.8	3.7	白		在地	ロクロ成形
31	土師質	鉢	5.2	2.1	3.5	灰白		在地	ロクロ成形
32	土師質	鉢	5.1	3.4	4.2	灰白		在地	ロクロ成形　底部糸切
33	土師質	鉢	11.0	3.6	7.0	灰白		在地	ロクロ成形
34	土師質	鉢	15.6(推定)	4.5(推定)	14.2(推定)	浅黄橙		在地	ロクロ成形
35	土製品	土鈴	2.8(最大)	3.3		白		在地	
36	土製品	ミニチュア	4.7	4.0	2.5	灰白	透明+緑	在地	花生
37	土製品	ミニチュア	3.6	3.3	3.2	鈍い橙		在地	壷
38	土製品	ミニチュア	6.6	1.3	3.8	灰白	透明+緑	在地	型作り
39	土製品	ミニチュア	3.7	3.4	2.8	灰白	透明+緑	在地	上下型合せ
40	陶器	ミニチュア	4.6	1.2	2.4	灰白	上絵	京都	型作り
41	土製品	人形	2.6(最大)	2.4		灰白		在地	手捏ね　底部穿孔
42	土製品	人形	2.4(最大)	4.3		灰白		在地	型作り　中実　底部穿孔　頭部墨描
43	土製品	人形	3.2(最大)	2.8		鈍い橙		在地	型作り　中実
44	陶器	根付	5.9(最大)	3.9		鈍い橙		京都	肩口２箇所　穿孔
45	土製品	人形	4.5(最大)	4.0		浅黄橙		在地	手捏ね
46	土製品	人形	4.4(最大)	4.1		浅黄橙		在地	左右型合せ　底部穿孔
47	土製品	人形	9.5(最大)	4.2		浅黄橙		在地	左右型合せ　底部穿孔
48	土製品	人形	8.5(最大)	5.7		浅黄橙		在地	手捏ね　背部穿孔
49	土製品	人形	6.9(最大)	5.2		浅黄橙		在地	手捏ね　底部穿孔
50	土製品	人形	3.2(最大)	5.2		淡黄		在地	左右型合せ　底部穿孔
51	土製品	人形	3.5(最大)	4.1		淡黄	透明+緑	在地	左右型合せ　底部穿孔
52	土製品	人形	9.9(最大)	3.7		浅黄橙		在地	型作り　中実　底部穿孔　頭部墨描
53	土製品	人形	4.8(最大)	3.9		鈍い橙		在地	型作り　中実
54	土製品	人形	4.7(最大)	4.4		浅黄橙		在地	左右型合せ　底部空洞
55	土製品	人形	1.6(最大)	6.9		灰白		在地	手捏ね　精良
56	土製品	人形	8.3(最大)	9.4		灰白		在地	手捏ね　精良
57	土製品	箱庭道具		4.6		鈍い黄橙		在地	対角線型合せ　底部空洞
58	土製品	箱庭道具	8.3(最大)	8.9		鈍い黄橙	透明+緑他	在地	板作り
59	土製品	面型	5.0(最大)	1.5		橙		在地	
60	土製品	人形	9.0(最大)	11.6		鈍い黄橙		在地	左右型合せ　底部穿孔
61	土師質	火消壷蓋	21.2	4.2					深草か
62	土師質	火消壷	14.4	15.7	15.2	橙			深草か
63	土師質	炮烙	26.6	5.5		鈍い黄橙			深草か

表40　土壙Ｅ45出土遺物２（図版334）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師質	灯火具	4.6	1.9	3.2	灰白	透明	在地	
2	土師質	灯火具	4.8	2.3	3.4	灰白	透明	在地	
3	土師質	灯火具	5.6	3.0(最大)	5.0	浅黄橙		在地	燭台か　底部ヘラ切り
4	軟質施釉	灯明皿	9.0	1.8	4.9	橙	白濁	在地	楽系
5	軟質施釉	油受皿	9.0	1.9	4.0	鈍い赤褐	透明	在地	
6	陶器	油受皿	11.4(最大)	1.7	6.2(推定)	浅黄橙	灰	京･信楽系	
7	陶器	油受皿	11.7(最大)	2.4	4.8	灰	灰	京･信楽系	
8	陶器	秉燭	7.7(推定)	6.5	4.5	褐灰	鉄	京･信楽系	底部糸切り　穿孔
9	土師質	焼塩壷蓋	4.6	1.7		鈍い橙		京都	
10	土師質	焼塩壷	3.0	6.4	3.5	浅黄橙		京都	
11	土師質	花塩壷蓋	4.2(最大)	1.4		灰白		深草	刻印なし　キラ付着
12	土師質	花塩壷蓋	6.9(最大)	1.2		浅黄橙		深草	「‥度/本やき志不」銘印
13	土師質	焼塩壷蓋	7.2	2.0	8.0	橙		堺系	内面布目
14	土師質	焼塩壷蓋	7.3	2.2	8.0	橙		堺系	内面布目
15	土師質	焼塩壷	6.1	7.6	5.6	橙		堺系	「泉湊伊織」銘
16	土師質	焼塩壷	6.1	8.0	5.6	橙		堺系	「泉湊伊織」銘
17	土師質	焼塩壷	6.2	7.6	5.2	橙		堺系	「泉湊伊織」銘
18	土師質	焼塩壷	5.6	8.6	5.8	橙		堺系	
19	陶器	ミニチュア	6.4	2.5	3.2	灰白	鉄		鍋
20	陶器	ミニチュア	0.8	5.6	2.0	灰白	灰	京･信楽系	
21	陶器	壷	1.4	5.7	3.0	鈍い橙		備前	底部糸切り　香油壷か
22	陶器	壷	5.2	6.5	3.0	灰白		京･信楽系	ミニチュアか
23	陶器	ミニチュア	2.5	4.0	2.6	灰白	灰+鉄	京･信楽系	急須
24	陶器	壷	4.8	9.1(残)	3.8		灰	京･信楽系	花入
25	陶器	人形	4.3(最大)	6.5			灰	京･信楽系	根付か
26	陶器	水滴	6.2(最大)	1.9		淡黄	鉄	京･信楽系	
27	陶器	鍋	10.2	4.6	4.8	灰白	鉄	京･信楽系	
28	陶器	鍋	14.2	6.3	7.0(推定)	浅黄橙	鉄	京･信楽系	片口付鍋

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
29	陶器	鍋	16.8	8.3	7.6	灰白	鉄	京・信楽系	
30	陶器	蓋	6.5(最大)	2.4			鉄	京・信楽系	
31	陶器	蓋	11.6(最大)	4.0		淡黄	灰	京・信楽系	
32	陶器	蓋	13.0(最大)	4.1		淡黄	灰	京・信楽系	
33	陶器	急須蓋	7.6(最大)	2.0		橙	鉄	京・信楽系	
34	軟質施釉	碗	10.5(推定)	6.7	4.6(推定)	橙	緑		長方形角「緑」印か
35	陶器	鉢	18.6	13.0	15.6	灰白	灰		底部中央ヘラ円刻
36	陶器	鉢	18.6	16.4	14.6	灰白	鉄+黒		
37	陶器	壷	25.8	25.0	15.0	白	鉄		
38	陶器	甕	18.5	24.2(残)	25.4(最大)	灰白	鉄	信楽	

表41　土壙E45出土遺物3（図版335）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	蓋物身	5.2	2.6	2.8	白	染付	肥前系	口縁内側釉剥ぎ
2	磁器	小杯	5.5	3.3	2.0	白	染付	肥前系	
3	磁器	小杯	5.7	3.1	1.5	白	染付	肥前系	
4	磁器	碗	8.6	4.6	3.5	白	染付	肥前系	
5	磁器	碗	10.0	4.9	4.4	白	染付	肥前系	
6	磁器	碗	9.8	4.3	3.9	白	染付	肥前系	
7	磁器	碗	10.0	5.2	4.7	白	染付	肥前系	
8	磁器	碗	10.0	5.2	4.5	白	染付	肥前系	
9	磁器	碗	9.0	5.1	4.0	白	染付	肥前系	菊花文
10	磁器	碗	10.0	5.0	4.4	白	染付	肥前系	
11	磁器	碗	10.9	5.7	4.7	白	染付	肥前系	
12	磁器	碗	10.0	5.5	4.5	白	染付	肥前系	
13	磁器	碗	10.2	5.2	3.8	白	染付	肥前系	
14	磁器	碗	7.5	4.2	3.0	白	染付	肥前系	見込円形羊歯文
15	磁器	碗	8.8	4.1	3.2	白	上絵	肥前系	赤・緑・黒彩
16	磁器	碗	8.4	5.3	3.4	白	染付	肥前系	見込円形羊歯文
17	磁器	蓋物身	7.2	3.9	4.0	白	染付	肥前系	口縁内側釉剥　高台内角「福」
18	磁器	碗	9.9	5.7	4.0	白	染付	肥前系	高台内「成明年製」
19	磁器	碗	9.8	5.1	4.2	白	染付	肥前系	見込手描五弁花
20	磁器	碗	8.7	5.3	4.0	白	染付	肥前系	
21	磁器	碗	11.1	5.9	5.2	白	染付	肥前系	見込寿字文
22	磁器	碗	9.8	6.2	4.8	白	染付	肥前系	見込寿字文
23	磁器	碗	11.2	5.7	4.7	白	染付	肥前系	見込手描五弁花
24	磁器	碗	11.5	5.9	5.2	白	染付	肥前系	見込松竹梅文
25	磁器	碗	12.0	6.0	5.3	白	染付	肥前系	高台内「富貴長春」見込松竹梅文
26	磁器	碗	10.3	5.2	4.0	白	染付	肥前系	
27	磁器	碗	11.2	6.3	4.5	白	染付	肥前系	高台内「富貴長春」見込円形羊歯文
28	磁器	碗	10.1	5.4	4.5	白	染付	肥前系	高台内角「福」
29	磁器	碗	11.1	6.4	4.6	白	染付	肥前系	
30	磁器	碗	7.6	5.0	3.6	白	染付	肥前系	菊花文
31	磁器	碗	7.8	6.0	3.5	灰白	染付	肥前系	高台内「大明年製」
32	磁器	碗	7.6	5.7	5.0	灰白	染付	肥前系	
33	磁器	碗	8.0	5.4	3.8	白	染付	肥前系	見込手描五弁花
34	磁器	碗	8.8	7.1	6.7	灰白	染付	肥前系	蛇ノ目凹形高台　見込コンニャク五弁花
35	磁器	紅皿	5.8	2.0	2.3	白	上絵	肥前系	赤絵
36	磁器	紅皿	5.6	1.9	2.2	白	上絵	肥前系	赤絵
37	磁器	紅皿	5.4	1.7	2.0	白	染付	肥前系	
38	磁器	紅皿	6.2	2.3	2.2	白	染付	肥前系	
39	磁器	蓋物身	6.8	4.3	3.7	灰白	白磁	肥前系	口縁内側釉剥ぎ
40	磁器	碗	9.7	5.5	3.9	灰白	白磁	肥前系	
41	磁器	皿	10.6	3.7	4.9	灰白	白磁	肥前系	
42	磁器	香油壷	2.9	8.6	6.2	白	染付+上絵	肥前系	
43	磁器	壷	7.2	8.9	4.8	白	染付	肥前系	仏花瓶か
44	磁器	蓋物身	6.3	7.9	5.2	灰白	染付	肥前系	口縁内側釉剥ぎ
45	磁器	水滴		2.6	8.9(最大)	白	染付	肥前系	

表42　土壙Ｅ45出土遺物４（図版336）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	蓋	8.9	2.7	3.5	白	染付	肥前系	見込手描五弁花
2	磁器	蓋	10.2	3.3	4.2	白	染付	肥前系	見込手描五弁花
3	磁器	蓋	10.1	2.7	3.8	白	染付	肥前系	見込円形羊歯文
4	磁器	蓋	10.2	2.9	4.4	白	染付	肥前系	
5	磁器	蓋	10.2	2.6	4.4	白	染付	肥前系	
6	磁器	蓋	10.2	3.0	4.2	白	染付	肥前系	見込手描五弁花
7	磁器	蓋	10.1	2.3	4.4	白	染付	肥前系	見込円形羊歯文
8	磁器	蓋	10.0	2.8	4.0	白	染付	肥前系	見込手描五弁花
9	磁器	蓋	9.8	2.7	3.9	白	染付	肥前系	
10	磁器	蓋	10.2(最大)	3.4		白	染付	肥前系	
11	磁器	蓋	10.5(最大)	2.9		白	染付	肥前系	
12	磁器	蓋	11.8(最大)	4.0		白	染付	肥前系	
13	磁器	蓋	10.9	3.7	3.9	白	染付	肥前系	菊花文
14	磁器	皿	13.3	4.6	7.0	白	染付	肥前系	菊花文
15	磁器	皿	10.2	2.4	6.0	白	染付	肥前系	菊花文
16	磁器	皿	12.0	2.9	7.2		染付	肥前系	菊花文
17	磁器	皿	9.7	1.7	5.2	白	染付	肥前系	
18	磁器	皿	10.3	3.2	5.0	白	染付	肥前系	見込コンニャク紅葉　高台内「大明年製」
19	磁器	皿	14.5	4.0	9.5	白	染付	肥前系	輪花　高台内渦福蛇ノ目凹形高台
20	磁器	皿	13.5	4.1	8.2	白	染付	肥前系	見込コンニャク五弁花　高台内渦福か

表43　土壙Ｅ45出土遺物５（図版337）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	仏餉具	7.6	4.7	3.6	白	染付	肥前系	底部無釉
2	磁器	仏餉具	7.6	5.5	4.2	白	染付	肥前系	底部無釉
3	磁器	仏餉具	6.0	5.4	3.6	白	白磁	肥前系	
4	磁器	仏餉具	7.2	5.3	3.6	白	白磁	肥前系	
5	磁器	碗	8.9	5.0	3.4	白	染付	肥前系	コンニャク沢潟文　口紅　高台内「大明年製」
6	磁器	碗	10.1	5.5	4.0	白	染付	肥前系	コンニャク紅葉+草花文　高台内「大明年製」
7	磁器	碗	9.6	5.6	3.7	白	染付	肥前系	コンニャク菊+草花文　高台内「大明年製」
8	磁器	碗	10.8	5.4	4.6	白	染付	肥前系	雪輪+草花文　高台内渦福
9	磁器	碗	11.2	5.7	4.8	白	染付	肥前系	見込コンニャク五弁花　高台内「大明年製」
10	磁器	蓋物蓋	9.8(最大)	2.8		灰白	染付	肥前系	No.11の蓋
11	磁器	蓋物身	9.4	4.4	4.9	灰白	染付	肥前系	口縁内側釉剥ぎ
12	磁器	碗	8.6	6.7	4.0	白	染付	肥前系	見込コンニャク五弁花
13	磁器	蓋物身	10.8	5.9	6.6	灰白	染付	肥前系	段重か　口縁内側釉剥ぎ
14	磁器	蓋	11.1	3.5	4.3	灰白	青磁染付	肥前系	高台内渦福
15	磁器	碗	11.5	6.6	4.7	灰白	青磁染付	肥前系	見込コンニャク五弁花　高台内渦福
16	磁器	碗	7.7	6.5	4.3	灰白	青磁染付	肥前系	見込手描五弁花
17	磁器	碗	11.2	5.3	4.2	白	染付+上絵	肥前系	見込蛇ノ目釉剥ぎ赤彩
18	磁器	碗	12.4	6.1	4.4	白	染付+上絵	肥前系	赤・黄・緑・黒彩
19	陶器	皿	11.5	3.4	4.2	灰	青緑	肥前系	見込蛇ノ目釉剥ぎ
20	陶器	皿	11.8	3.4	4.2	明褐灰	青緑	肥前系	見込蛇ノ目釉剥ぎ
21	陶器	碗	9.0	5.0	3.0	灰白	上絵	京･信楽系	金・赤・青彩か
22	陶器	碗	9.0	5.7	2.9	淡黄	上絵	京･信楽系	金・赤・青・緑彩
23	陶器	碗	8.9	5.4	2.7	灰白	上絵	京･信楽系	金・赤・緑彩か
24	陶器	碗	9.4	5.4	2.8	灰白	上絵	京･信楽系	金・赤・緑彩
25	陶器	碗	9.0	5.2	2.8	灰白	上絵	京･信楽系	金・赤・青彩
26	陶器	碗	8.6	5.8	3.0	灰白	上絵	京･信楽系	赤・青・緑彩
27	陶器	碗	9.0	5.2	3.1	灰白	上絵	京･信楽系	金・赤・緑彩か
28	陶器	碗	9.2	5.4	3.2	灰白	上絵	京･信楽系	青彩
29	陶器	碗	8.9	5.1	3.0	灰白	上絵	京･信楽系	金・赤・緑彩
30	陶器	碗	9.3	5.4	2.7	淡黄	上絵	京･信楽系	赤・青・緑彩
31	陶器	碗	10.4	7.0	4.9	灰白	錆絵	京･信楽系	
32	陶器	碗	11.2	7.0	4.9	灰白	錆絵染付	京･信楽系	
33	陶器	碗	7.8	6.6	5.8	淡黄	錆絵	京･信楽系	
34	陶器	碗	8.0	7.0	5.6	淡黄	錆絵	京･信楽系	
35	陶器	碗	8.0	6.3	5.4	灰白	錆絵染付	京･信楽系	
36	陶器	碗	8.3(推定)	6.9	6.0	灰白	錆絵	京･信楽系	底部墨書「拾」か
37	陶器	碗	10.8	6.5	4.6	灰白	錆絵染付	京･信楽系	
38	陶器	碗	11.6	5.7	5.2	灰白	錆絵+白	京･信楽系	見込目痕　煎じ碗

表44　土壙E45出土遺物6（図版338）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	蓋物蓋	9.2(最大)	2.8		暗灰黄	錆絵染付+白	京・信楽系	内面白化粧透明釉　No.2の蓋
2	陶器	蓋物身	9.0	7.6	5.4	暗灰黄	錆絵染付+白	京・信楽系	内面白化粧透明釉
3	陶器	筒型容器	5.2	10.5	5.2	灰白	灰	京・信楽系	花入
4	陶器	筒型容器	5.0	10.7	4.8	灰白	錆絵染付	京・信楽系	花入
5	陶器	碗	11.0	6.4	4.4	灰	錆絵染付+白	京・信楽系	内面白化粧透明釉
6	陶器	蓋	7.4(最大)	1.6		淡黄	錆絵	京・信楽系	
7	陶器	皿	9.6	2.3	4.0	灰白	錆絵+白	京・信楽系	
8	陶器	蓋	5.7	1.2		灰白	錆絵染付	京・信楽系	
9	陶器	蓋	6.2(最大)	0.9		灰白	灰	京・信楽系	
10	陶器	蓋物身	6.4	3.5	3.8	灰白	灰	京・信楽系	
11	陶器	碗	10.9	7.2	3.1	灰白	灰+透明		京都か
12	陶器	蓋物身	6.8	4.0	4.0	灰白	灰	京・信楽系	
13	陶器	蓋物身	8.4	4.5	4.0	浅黄橙	灰	京・信楽系	底部墨書「ヨマ」か
14	陶器	碗	9.2	6.4	4.9	灰白	灰	京・信楽系	
15	陶器	柄杓	8.4	5.9	4.8	灰白	鉄	京・信楽系	
16	陶器	平碗	10.0	4.6	3.6	灰白	錆絵	京・信楽系	
17	陶器	平碗	12.5	4.8	3.8	灰白	上絵	京・信楽系	赤・緑彩
18	陶器	平碗	11.8	4.6	4.0	淡黄	上絵	京・信楽系	赤・青・緑彩
19	陶器	平碗	12.4	4.5	2.2	灰白	上絵	京・信楽系	赤・緑彩
20	陶器	平碗	12.6	4.3	3.4	白	上絵	京・信楽系	金・赤・青・緑彩
21	陶器	平碗	12.3	4.5	4.0	灰白	上絵	京・信楽系	赤・青・緑彩
22	陶器	鉢	14.2	6.5	9.2	灰白	錆絵染付+白	京都	見込3箇所目痕「岩倉山」銘
23	陶器	鉢	18.1	11.2	8.3	浅黄	錆絵染付	京・信楽系	見込3箇所目痕　内面透明釉
24	陶器	碗	8.2	6.3	3.3	灰	鉄+透明	京・信楽系	鎧碗
25	陶器	碗	10.7	11.7	4.2	白	灰+鉄	瀬戸・美濃系	
26	陶器	碗	11.1	7.9	5.6	灰白	灰+鉄	瀬戸・美濃系	
27	陶器	皿	8.2	1.8	4.2	灰白	灰+染付	瀬戸・美濃系	太白手
28	陶器	鬢水入		3.5	14.0(最大)	灰白	錆絵	瀬戸・美濃系	型紙摺
29	陶器	鉢	16.5(推定)	9.9	8.0(推定)	浅黄	灰	瀬戸・美濃系	見込3箇所目痕
30	陶器	土瓶	8.4	9.9	8.6	橙	鉄+灰	京・信楽系	
31	陶器	油受皿	12.2(最大)	2.2	5.0	鈍赤褐		備前	
32	陶器	擂鉢	20.0(推定)	7.9	8.2	明黄橙	鉄	信楽	高台部欠損
33	陶器	急須		4.2(残)		赤褐		中国	朱泥急須　底部彫字あり　宜興窯か

表45　土壙B716出土遺物1（図版339）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5.4	1.0		橙		在地	
2	土師器	皿	5.4	1.2		橙		在地	
3	土師器	皿	5.4	1.2		橙		在地	
4	土師器	皿	5.4	1.2		鈍い橙		在地	へそ皿形
5	土師器	皿	9.7	1.8		鈍い黄橙		在地	
6	土師器	皿	9.7	1.7		浅黄橙		在地	
7	土師器	皿	9.7	1.8		浅黄橙		在地	
8	土師器	皿	9.8	1.8		浅黄橙		在地	
9	土師器	皿	9.8	1.5		浅黄橙		在地	
10	土師器	皿	9.8	1.8		鈍い橙		在地	
11	土師器	皿	9.9	1.7		浅黄橙		在地	
12	土師器	皿	9.9	1.8		鈍い橙		在地	
13	土師器	皿	9.9	1.7		灰白		在地	
14	土師器	皿	10.0	1.9		浅黄橙		在地	
15	土師器	皿	10.0	1.8		浅黄橙		在地	
16	土師器	皿	10.0	1.7		灰白		在地	
17	土師器	皿	10.1	1.8		浅黄橙		在地	
18	土師器	皿	10.1	1.9		浅黄橙		在地	
19	土師器	皿	10.1	1.8		灰白		在地	
20	土師器	皿	10.2	1.8		浅黄橙		在地	
21	土師器	皿	10.2	1.8		浅黄橙		在地	
22	土師器	皿	10.2	1.7		浅黄橙		在地	
23	土師器	皿	10.2	1.9		浅黄橙		在地	
24	土師器	皿	10.4	1.8		灰白		在地	
25	土師器	皿	10.5	1.5		浅黄橙		在地	
26	土師器	皿	10.7	1.7		浅黄橙		在地	
27	土師器	皿	11.5	2.1		浅黄橙		在地	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
28	土師器	皿	11.6	2.1		浅黄橙		在地	
29	土師器	皿	11.6	2.1		浅黄橙		在地	
30	土師器	皿	11.7	2.2		灰白		在地	
31	土師器	皿	11.8	1.9		橙		在地	
32	土師器	皿	11.8	2.0		浅黄橙		在地	
33	土師器	皿	11.9	1.9		浅黄橙		在地	
34	土師器	皿	11.9	1.9		浅黄橙		在地	
35	土師器	皿	11.9	2.0		灰白+橙		在地	
36	土師器	皿	11.9	2.1		浅黄橙		在地	
37	土師器	皿	11.9	2.3		鈍い橙		在地	
38	土師器	皿	11.9	2.0		浅黄橙		在地	
39	土師器	皿	11.9	2.1		灰白+橙		在地	
40	土師器	皿	12.0	2.0		灰白+橙		在地	
41	土師器	皿	12.0	2.1		鈍い橙		在地	
42	土師器	皿	12.0	2.1		灰白+褐		在地	
43	土師器	皿	12.0	2.0		灰白+橙		在地	
44	土師器	皿	12.0	2.2		灰白+橙		在地	
45	土師器	皿	12.0	2.0		灰白+橙		在地	
46	土師器	皿	12.1	2.0		灰白+橙		在地	
47	土師器	皿	12.2	2.0		浅黄橙		在地	
48	土師器	皿	14.2	2.1		浅黄橙		在地	
49	土師器	皿	14.5	1.8		浅黄橙		在地	
50	土師器	皿	14.5	1.9		浅黄橙		在地	
51	土師器	蓋	8.2	1.4(残)		浅黄橙		在地	
52	土師器	蓋	8.4	1.3(残)		浅黄橙		在地	
53	土師器	蓋	10.2	2.1		浅黄橙		在地	
54	土師器	蓋	10.3	1.7(残)		浅黄橙		在地	
55	土師器	蓋	10.4	1.8		浅黄橙		在地	
56	土師器	蓋	10.6	1.9(残)		浅黄橙		在地	
57	土師器	蓋	10.7	2.0		浅黄橙		在地	
58	土師器	蓋	10.8	2.1		浅黄橙		在地	
59	土師器	蓋	11.0	2.2		浅黄橙		在地	
60	土師器	蓋	11.0	1.8(残)		浅黄橙		在地	
61	土師器	蓋	11.6	2.0(残)		浅黄橙		在地	
62	土師器	蓋	12.0	1.7(残)		浅黄橙		在地	
63	土師器	蓋	12.0	1.8(残)		浅黄橙		在地	
64	土師器	蓋	12.2	2.2		浅黄橙		在地	
65	土師器	蓋	12.2	2.0		浅黄橙		在地	
66	土師器	蓋	12.4	2.3		浅黄橙		在地	
67	土師器	蓋	12.5	1.55(残)		浅黄橙		在地	
68	土師器	蓋	12.6	1.6(残)		浅黄橙		在地	
69	土師器	蓋	12.6	2.2		浅黄橙		在地	
70	土師器	蓋	12.7	1.8(残)		浅黄橙		在地	
71	土師器	蓋	12.9	2(残)		浅黄橙		在地	
72	土師器	蓋	13.0	1.95(残)		浅黄橙		在地	
73	土師器	蓋	13.2	1.9(残)		灰白		在地	
74	土師器	蓋	14.2	1.9(残)		灰白		在地	
75	土師器	蓋	14.2	1.9(残)		灰白		在地	
76	土師器	蓋	14.4	2.3(残)		浅黄橙		在地	
77	土師器	蓋	14.4	1.9(残)		灰白		在地	

表46　土壙Ｂ716出土遺物２（図版340）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師質	焼塩壷蓋	4.9	1.5		鈍い橙		京都	
2	土師質	焼塩壷蓋	5.2	1.5		鈍い橙		京都	
3	土師質	焼塩壷	3.5	6	4.5	浅黄橙		京都	
4	土師質	焼塩壷	4.0	6.8	4.3	浅黄橙		京都	
5	土師質	焼塩壷	4.0	6.8	4.4	浅黄橙		京都	
6	土師質	焼塩壷	4.1	6.7	4.1	浅黄橙		京都	
7	土師質	焼塩壷	6.5	1.5		橙		堺系	内面布目
8	土師質	焼塩壷	6.7	7.75	48.0	橙		堺系	内面布目
9	土師質	鉢	12.6	3.5	8.1	灰白		在地	ロクロ成形
10	土師質	炮烙	32.6(推定)			鈍い橙			深草か
11	土師質	炮烙	30.4(推定)			橙			深草か
12	土師質	炮烙	31.6(推定)			鈍い黄褐			深草か

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
13	土師質	火入	29.5	11		明黄褐			深草か
14	土師質	風炉	21.2	20.5	20.6	鈍い赤褐			深草か
15	土師質	風炉	24.8	23.3	23.0	明赤褐			深草か
16	土師質	サナ	10.6	1.3		鈍い黄橙		在地	
17	軟質施釉	鉢	18.6	8.6	6.9	浅黄橙	黄+緑+茶		ロクロ成形　源内焼か
18	陶器	甕	12.2			灰白	鉄+黒掛		

表47　土壙B716出土遺物3（図版341）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	小杯	5.2	2.4	1.2	白	染付	肥前系	焼継
2	磁器	小杯	5.1	2.5	1.9	白	染付	肥前系	
3	磁器	碗	7.6	3.3	2.6	白	染付	肥前系	注連縄・羽子板
4	磁器	碗	9.6	5.0	3.9	白	染付	肥前系	松竹梅丸輪文
5	磁器	碗	9.6	4.9	4.2	白	染付	肥前系	氷裂文に窓絵
6	磁器	碗	10.3	5.2	4.6	白	染付	肥前系	
7	磁器	碗	8.0	3.9	3.2	白	染付	肥前系	
8	磁器	碗	9.4	4.8	3.9	白	染付	肥前系	焼継　高台内に「W」型焼継師記号
9	磁器	碗	10.2	5.4	3.8	白	染付	肥前系	
10	磁器	碗	10.0	4.3	3.5	白	染付	肥前系	焼継　高台内に「W」型焼継師記号
11	磁器	碗	10.2	5.7	4.4	灰白	染付	肥前系	
12	磁器	碗	8.8	4.6	3.2	白	染付	肥前系	
13	磁器	碗	10.5	4.9	3.6	白	染付	肥前系	赤壁賦文
14	磁器	碗	9.6	4.9	3.4	白	染付	肥前系	
15	磁器	碗	9.8	5.0	3.9	白	染付	肥前系	No.16と同文様、やや小振
16	磁器	碗	10.2	4.6	3.5	白	染付	肥前系	
17	磁器	碗	10.4	4.9	3.5	白	染付	肥前系	
18	磁器	碗	10.4	4.8	3.5	白	染付	肥前系	
19	磁器	碗	9.8	5.0	3.7	白	染付	肥前系	
20	磁器	碗	10.3	4.5	3.4	白	染付	肥前系	
21	磁器	碗	10.7	5.3	4.2	白	染付	肥前系	
22	磁器	碗	12.0	5.9	3.8	灰白	染付	肥前系	
23	磁器	碗	11.4	6.2	6.5	白	染付	肥前系	焼継
24	磁器	碗	10.0	5.3	5.4	白	染付	肥前系	
25	磁器	碗	10.6	5.0	3.8	白	染付	肥前系	焼継　高台内に焼継師記号
26	磁器	碗	14.5	7.3	5.4	白	染付	肥前系	見込円形羊歯文
27	磁器	碗	14.2	6.7	4.9	白	染付	肥前系	見込松竹梅文
28	磁器	合子蓋	5.0	1.0		白	染付	肥前系	内面無釉　笹に短冊文で合子形の紅入か
29	磁器	蓋物身	7.3	4.1	3.8	白	染付	肥前系	口縁内側釉剥ぎ
30	磁器	蓋物身	7.4	4.1	3.9	白	染付	肥前系	口縁内側釉剥ぎ焼継　高台内に焼継師記号
31	磁器	蓋物身	9.9	5.4	4.8	白	染付	肥前系	口縁内側釉剥ぎ
32	磁器	蓋物身	9.3	5.4	3.8	白	染付	肥前系	口縁内側釉剥ぎ
33	磁器	香油壷		6.5(残)	5.0	白	染付	肥前系	
34	磁器	碗	6.5	7.7	5.2	白	染付	肥前系	口縁内面釉剥ぎ　湯呑碗型
35	磁器	碗	7.0	8.9	5.4	灰白	染付	肥前系	口縁内面釉剥ぎ　湯呑碗型
36	磁器	仏餉具	6.4	5.7	3.6	白	染付	肥前系	
37	磁器	仏餉具	6.2	6.5	4.0	白	染付	肥前系	
38	磁器	碗	7.3	3.7	3.1	白	上絵	肥前系	黄・赤・金彩　注連縄文
39	磁器	碗	8.1	4.1	2.8	白	上絵	肥前系	黄・赤・金彩
40	磁器	蓋	9.0	2.5	3.2	白	染付	肥前系	高台内「太明年製」見込松竹梅文
41	磁器	蓋	12.0	3.3		白	染付	肥前系	重ね部分釉剥ぎ
42	磁器	蓋	11.6	3.6		白	染付	肥前系	重ね部分釉剥ぎ
43	磁器	小杯	5.1	3.0	3.5	白	白磁	肥前系	
44	磁器	小杯	5.1	3.5	3.6	白	白磁	肥前系	
45	磁器	碗	8.0	3.7	2.4	白	白磁	肥前系	
46	磁器	鉢	9.2	6.0	4.6	白	白磁	肥前系	
47	磁器	碗	11.3	6.5	4.1	灰白	青磁染付	肥前系	高台内角「福」
48	磁器	蓋	9.2	3.4	3.6	灰白	青磁染付	肥前系	

表48　土壙Ｂ716出土遺物４（図版342）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	蓋	5.3(最大)	2.2		白	染付	肥前系	重ね部分釉剥ぎ
2	磁器	蓋	7.6(最大)	2.5		白	染付	肥前系	重ね部分釉剥ぎ
3	磁器	蓋	8.9	2.1	3.3	白	染付	肥前系	
4	磁器	蓋	8.4	2.3	3.3	白	染付	肥前系	
5	磁器	皿	10.3	2.2	5.8	白	染付	肥前系	高台内「太明年成」
6	磁器	皿	10.6	2.7	6.15	白	染付	肥前系	輪花
7	磁器	皿	8.4	2.0	6.4	白	染付	肥前系	
8	磁器	皿	11.2	2.3	6.3	白	染付	肥前系	
9	磁器	皿	12.3	2.5	7.1	白	染付	肥前系	菊花文
10	磁器	皿	14.7	4.4	8.5	白	染付	肥前系	蛇ノ目凹形高台
11	磁器	皿	12.8	1.8	8.4	白	染付	肥前系	蛇ノ目凹形高台
12	磁器	皿	14.7	4.4	8.4	白	染付	肥前系	蛇ノ目凹形高台
13	磁器	皿	14.4	2.5	7.9	白	染付	肥前系	菊花文
14	磁器	皿	14.3	2.7	9	白	染付	肥前系	蛇ノ目凹形高台
15	磁器	皿	21.1	3.8	12.8	白	染付	肥前系	高台内３点ハリ支え
16	磁器	皿	23.0	3.3	14.2	白	染付	肥前系	高台内４点ハリ支え

表49　土壙Ｂ716出土遺物５（図版343）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	平碗	12.1	4.4	4.1	灰白	錆絵	京・信楽系	
2	陶器	平碗	11.9	3.7	4	灰白	錆絵	京・信楽系	
3	陶器	平碗	12.4	4.8	4.05	白	錆絵	京・信楽系	高台内墨書
4	陶器	平碗	11.8	4.4	4.05	灰白	錆絵	京・信楽系	高台内墨書
5	陶器	平碗	10.2	3.4	3	灰白	錆絵	京・信楽系	
6	陶器	平碗	12.1	4.1	4	灰白	錆絵	京・信楽系	
7	陶器	平碗	12.0	4.4	3.8	灰白	錆絵	京・信楽系	
8	陶器	平碗	10.4	3.6	3.05	白	錆絵	京・信楽系	
9	陶器	平碗	12.0	4.3	3.6	灰白	錆絵	京・信楽系	透明釉失透
10	陶器	平碗	12.2	4.4	4	灰白	錆絵	京・信楽系	
11	陶器	平碗	11.9	4.3	3.7	灰白	錆絵	京・信楽系	
12	陶器	皿	10.2	2.7	3.6	黄橙	錆絵染付	京・信楽系	蓋か
13	陶器	皿	10.2	2.6	3.7	露胎部赤	錆絵染付	京・信楽系	蓋か
14	陶器	碗	7.4	5.3	4	灰白	錆絵	京・信楽系	
15	陶器	碗	10.8	6.0	3.8	灰白	錆絵	京・信楽系	
16	陶器	碗	9.2	5.5	3.4	灰白	透明	京・信楽系	端反碗　貫入目立つ
17	陶器	碗	9.5	5.6	3.4	灰白	錆絵染付	京・信楽系	端反碗　貫入目立つ
18	陶器	鬢水入		3.5	14.1(最大)	橙(酸化)	錆絵	京・信楽系	
19	陶器	鬢水入		3.2		淡黄	白化粧+青	京・信楽系	底部墨書「□ナシ」か
20	陶器	筆立	11.4	1.9		鈍い橙	白化粧+緑	京・信楽系	底部墨書
21	陶器	油受皿	11.5(最大)	2.9	4.6	灰白	透明	京・信楽系	
22	陶器	油受皿	11.4(最大)	2.7	4.2	灰	透明	京・信楽系	
23	陶器	蓋物身	9.2	5.6	6.8	灰白	透明	京・信楽系	底部墨書「八五五」か
24	陶器	鉢	13.0	7.5	5.7	灰	鉄	京・信楽系	見込３箇所目痕
25	陶器	蓋物身	11.6	10.6	7.2	灰白	錆絵染付	京・信楽系	

表50　土壙Ｂ716出土遺物６（図版344）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	柄杓	9.2	5.3	5.4	灰白	鉄	京・信楽系	
2	陶器	柄杓	9.4	5.4	4.8	灰白	錆絵染付	京都	菊花文
3	陶器	水注	6.6	8.4	5.9	灰白	鉄	京・信楽系	口縁端部釉剥ぎ
4	陶器	碗	11.7	7.0	4.7	白	錆絵	京・信楽系	
5	陶器	碗	11.0	6.9	4.6	灰	透明+鉄	京・信楽系	
6	陶器	碗	11.2	6.8	4.6	灰	透明+鉄	京・信楽系	
7	陶器	灯明皿	11.4	2.3	4.5	灰白	透明	京・信楽系	見込３箇所目痕
8	陶器	筒形容器	5.9	11.6	5.9	白	白化粧+青	京・信楽系	花入　図版343－19と同文様
9	陶器	火入	16.2	7.7		灰白	白化粧+鉄	京・信楽系	高台＋三足
10	陶器	土瓶	8.6	9.4		灰白	錆絵染付	京都	底部「錦光山」銘
11	陶器	土瓶	8.7	12.5		灰白	灰	京・信楽系	
12	陶器	土瓶	8.7	12.6	9.3	灰白	鉄+灰	京・信楽系	
13	陶器	土瓶	10.8	16.8	10.6	灰白	鉄+灰	京・信楽系	
14	陶器	土瓶蓋	7.0(最大)	1.7		灰白	鉄	京・信楽系	
15	陶器	土瓶蓋	7.2(最大)	2.0		灰白	鉄	京・信楽系	
16	陶器	土瓶蓋	8.1(最大)	1.9		灰白	灰	京・信楽系	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
17	陶器	行平蓋	18.6	4.0	5.1	灰白	灰	京・信楽系	
18	陶器	植木鉢	10.2	5.5		灰	鉄	京・信楽系	
19	陶器	鍋	11.5	6.6	5.6	灰	鉄	京・信楽系	
20	陶器	鍋	15.0	9.3	7.0	灰	鉄	京・信楽系	
21	陶器	鍋	20.0	12.8	9.0	灰	鉄	京・信楽系	
22	陶器	行平蓋	17.1	4.2	6.7	灰	灰	京・信楽系	No.23の蓋
23	陶器	行平	18.1	9.1	8.0	灰	灰	京・信楽系	
24	陶器	行平	12.6	6.1	6.2	灰	灰	京・信楽系	
25	陶器	行平蓋	13.8	2.9	4.5	灰	灰	京・信楽系	
26	陶器	行平	14.4	7.6	7.0	灰	灰	京・信楽系	
27	陶器	香炉	9.8	8.1	9.8	灰	鉄		底部「丸い」の小判印あり　瀬戸・美濃系か
28	陶器	壷	5.6	7.8	5.5	灰白	灰	瀬戸・美濃系	双耳
29	陶器	鉢	33.6	9.6	16.6	灰白	灰	信楽	見込4箇所砂目　底部墨書（不明）

表51　土壙G348出土遺物1（図版345）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5	1.1			浅黄橙	在地	底部に穿孔
2	土師器	皿	5	0.9			灰白	在地	
3	土師器	皿	7	1.1			浅黄橙	在地	
4	土師器	皿	7.1	1.1			灰白	在地	
5	土師器	皿	7.3	1.5			浅黄橙	在地	
6	土師器	皿	7.4	1.3			浅黄橙	在地	
7	土師器	皿	7.4	1.3			浅黄橙	在地	
8	土師器	皿	7.5	1.5			灰白	在地	底部に穿孔
9	土師器	皿	7.5	1.3			灰白	在地	
10	土師器	皿	7.7	1.2			浅黄橙	在地	
11	土師器	皿	9.9	1.9			浅黄橙	在地	
12	土師器	皿	8	1.5			灰白	在地	
13	土師器	皿	8	1.6			浅黄橙	在地	
14	土師器	皿	8.2	1.5			灰白	在地	
15	土師器	皿	8.5	1.2			浅黄橙	在地	
16	土師器	皿	8.5	1.5			浅黄橙	在地	
17	土師器	皿	8.6	1.5			灰白	在地	
18	土師器	皿	8.7	1.7			浅黄橙	在地	
19	土師器	皿	8.8	1.7			浅黄橙	在地	
20	土師器	皿	8.9	1.5			灰白	在地	
21	土師器	皿	9	1.5			浅黄橙	在地	
22	土師器	皿	9.1	1.6			浅黄橙	在地	
23	土師器	皿	9.2	1.4			灰白	在地	
24	土師器	皿	9.6	1.7			浅黄橙	在地	
25	土師器	皿	9.9	1.9			浅黄橙	在地	
26	土師器	皿	10.2	1.7			灰白	在地	
27	土師器	皿	10.4	2.0			鈍い橙	在地	
28	土師器	皿	10.9	2.0			浅黄橙	在地	
29	土師器	皿	11.1	2.2			灰白	在地	
30	土師器	皿	10.9	1.5			灰白	在地	
31	土師器	皿	11.4	2.1			浅黄橙	在地	
32	土師器	皿	11.4	1.8			灰白	在地	
33	土師器	皿	11.5	2.0			灰白	在地	
34	土師器	皿	11.6	2.0			浅黄橙	在地	
35	土師器	皿	11.7	2.1			浅黄橙	在地	
36	土師器	皿	11.8	1.8			灰白	在地	
37	土師器	皿	11.9	1.9			浅黄橙	在地	
38	土師器	皿	13.7	2.3			浅黄橙	在地	
39	土師器	皿	13.8	1.9			浅黄橙	在地	
40	土師器	皿	13.9	1.9			灰白	在地	
41	土師器	皿	14.2	2.1			浅黄橙	在地	
42	土師質	花塩蓋	8.2	0.8			灰白	深草	
43	土師質	焼塩壷蓋	4.3	1.2		鈍い橙		京都	
44	土師質	焼塩壷	3.5	6.9	4.4	浅黄橙		京都	
45	土師質	蓋	3.0	2.0	3.8	浅黄橙		在地	
46	磁器	小碗	6.1	2.7	3.6	灰白	白磁	肥前系	盃
47	磁器	小杯	5.4	2.8	1.7	灰白	染付	肥前系	
48	磁器	小杯	5.7	2.8（推定）	2.4（推定）	灰白	染付	肥前系	
49	磁器	小杯	5.4	3.3	1.8	灰白	染付	肥前系	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
50	磁器	小碗	6.7	3.4	2.3	灰白	染付	肥前系	菊花
51	磁器	碗	9.5	4.9	3.5	灰白	染付	肥前系	
52	磁器	碗	10.6	5.2	4.4	灰白	染付	肥前系	
53	磁器	碗	10.0	4.9	4.0	灰白	染付	肥前系	草花　鳥
54	磁器	碗	9.8	4.7	4.0	灰白	染付	肥前系	
55	磁器	皿	9.8	3.8	3.2	灰白	染付	肥前系	
56	磁器	碗	10.6	5.8	4.4	灰白	染付	肥前系	
57	磁器	碗	9.7	4.7	3.9	白	染付	肥前系	菊花文
58	磁器	平碗	13	5.5	5.3	白	染付	肥前系	菊花文　焼継
59	磁器	蓋	8.6	3.0	3.5	白	染付	肥前系	No.60とセット
60	磁器	碗	9.7	5.8	3.8	灰白	染付	肥前系	No.59とセット
61	磁器	皿	11.9	2.4	7.6	白	染付	肥前系	菊花文
62	磁器	皿	10.4	2.4	5.5	灰白	染付	肥前系	口紅　輪花
63	磁器	皿	9.8	2.6	5.6	灰白	染付	肥前系	口紅　輪花
64	磁器	蓋	10.3(最大)	2.5		灰白	染付	肥前系	菊花散らし　板状つまみ
65	磁器	小碗	6.6	5.6	3.6	灰白	染付	肥前系	
66	磁器	碗	9.9	5.5	3.9	灰白	染付	肥前系	
67	磁器	碗	10.9	5.8	3.8	灰白	染付	肥前系	見込蛇ノ目釉剥ぎ　波佐見
68	磁器	碗	10.7	6.0	4.0	灰白	染付	肥前系	
69	磁器	碗	10.6	6.3	4.2	灰白	染付	肥前系	
70	磁器	皿	12.5	3.1	7.9	灰白	染付	肥前系	見込蛇ノ目釉剥ぎ
71	磁器	皿	9.5	2.6	3.8	灰白	染付	肥前系	見込蛇ノ目釉剥ぎ
72	磁器	皿	13.3	3.8	7.7	灰白	染付	肥前系	見込コンニャク五弁花　高台内銘
73	磁器	小碗	6.6	5.1	3.5	灰白	染付	京都	

表52　土壙Ｇ348出土遺物２（図版346）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	小杯	5.9	2.8	2.9	灰白	白磁	瀬戸･美濃系	
2	磁器	小碗	7.9	4.3	3.5	灰白	染付	瀬戸･美濃系	
3	磁器	碗	8.1	4.1	3.0	灰白	染付	瀬戸･美濃系	口紅
4	磁器	碗	9.3	5.3	3.2	灰白	染付	瀬戸･美濃系	
5	磁器	碗	10.2	5.9	3.8	灰白	染付	瀬戸･美濃系	
6	磁器	碗	10.8	5.4	3.9	灰白	染付	瀬戸･美濃系	
7	磁器	碗	10.6	5.8	4.3	灰白	染付	瀬戸･美濃系	篦目　花
8	磁器	蓋	6.7	2.0	3.0	灰白	染付	瀬戸･美濃系	
9	磁器	蓋	8.3	2.6	2.7	灰白	染付	瀬戸･美濃系	焼継
10	磁器	蓋	8.8	2.8	3.1	灰白	染付	瀬戸･美濃系	
11	磁器	植木鉢	19.4	15.3	12	灰白	染付	瀬戸･美濃系	
12	磁器	小皿	7.8	2.5	3.6	灰白	青磁	三田	型押し
13	磁器	小碗	7.9	4.5	2.9	灰白	染付		
14	磁器	小杯	6.1	2.4	2.0	灰白	上絵		薄手酒杯　金彩口紅
15	磁器	小杯	5.8	2.6	2.5	灰白	上絵		薄手酒杯　金彩口紅
16	磁器	碗	6.3	3.6(残)		灰白	色絵	中国	
17	陶器	碗		2.4(残)	2.7	灰白	透明	京都	「岩倉山」印　小片
18	陶器	小碗	6.8	5.2	3.6	浅黄橙	灰	瀬戸･美濃系	イッチン描き
19	陶器	小碗	8.2	4.1	2.5	灰白	灰	京･信楽系	
20	陶器	小碗	8.7	4.5	2.8	橙	灰	京･信楽系	
21	陶器	小碗	6.6	3.9	2.5	淡黄	錆絵	瀬戸･美濃系	
22	陶器	碗	9.5	6	2.7	灰白	上絵	京･信楽系	赤・緑彩
23	陶器	碗	9.2	6.1	2.9	灰白	淡黄	京･信楽系	赤・緑彩
24	陶器	平椀	10.0	3.9	2.6	灰白	灰	京･信楽系	
25	陶器	平椀	11.0	4.1	3.6	灰白	灰	京･信楽系	
26	陶器	皿	13.6	1.9	6.4	灰黄	錆絵	京･信楽系	
27	陶器	小皿	8.7	2.2	3.1	淡黄	褐	京･信楽系	見込型押　見込に刻印
28	陶器	灯明皿	6.6	1.1	2.6	灰白	灰	京･信楽系	
29	陶器	油受皿	6.4	1.1	3.3	灰白	灰	京･信楽系	
30	陶器	灯明皿	8.4	1.7	3.0	灰白	灰	京･信楽系	
31	陶器	油受皿	9.8	1.8	3.9	灰白	灰	京･信楽系	
32	陶器	灯明皿	11.3	2.5	3.7	灰白	灰	京･信楽系	
33	陶器	油受皿	11.2	2.0	4.9	灰白	灰	京･信楽系	
34	陶器	蓋物	8.2	4.4	6.4	灰白	灰	京･信楽系	見込目痕
35	陶器	蓋物	9.8	5.8	6.9	灰白	灰	京･信楽系	見込目痕
36	陶器	蓋物	9.7	7.8	5.6	灰白	錆絵	京･信楽系	高台内墨書
37	陶器	蓋物	6.6	2.9	4.8	灰白	灰	京･信楽系	
38	陶器	柄杓	8.4	5.5	3.8	灰白	灰	京･信楽系	見込目痕

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
39	陶器	小碗	6.1	4.3	2.4	橙	灰	信楽	割高台
40	陶器	茶入	2.0	3.8	1.9	灰白	鉄	信楽	
41	陶器	鉢	11.1	5.2	5.4	灰	鉄	肥前系	
42	陶器	小杯	6.0	5.1	3.3	灰白	長石	瀬戸・美濃系	志野釉
43	陶器	小碗	6.7	3.6	3.5	鈍い黄橙	鉄	瀬戸・美濃系	糸切り
44	軟質施釉	鉢	12.1	5.9	5.4	鈍い橙			

表53　土壙G348出土遺物３（図版347）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	蓋	7.5(最大)	1.3		灰黄	灰	京・信楽系	
2	陶器	蓋	9.2(最大)	1.1		灰白	灰	京・信楽系	
3	陶器	蓋	9.0	1.5	3.5	灰黄	灰	京・信楽系	
4	陶器	蓋	9.0(最大)	2.2		灰黄	灰	京・信楽系	落とし蓋
5	陶器	蓋	11.0(最大)	2.6		灰	灰	京・信楽系	落とし蓋
6	陶器	蓋	6.4(最大)	1.6		鈍い黄橙	白化粧+上絵	京・信楽系	緑彩
7	陶器	合子蓋	5.2(最大)	2.1(推定)		灰白	呉須絵	京・信楽系	板状つまみ
8	陶器	蓋	6.2(最大)	3.9		鈍い黄橙	いっちん	京・信楽系	
9	陶器	蓋	8.0(最大)	3.9		鈍い黄橙	白化粧+上絵	京・信楽系	緑彩
10	陶器	蓋	9.6(最大)	2.2		鈍い橙	いっちん	京・信楽系	亀のつまみ
11	陶器	蓋	9.8(最大)	2.2		鈍い橙	いっちん	京・信楽系	
12	陶器	蓋	13.0(最大)	5.0		鈍い黄橙	透明	京・信楽系	イッチン描き
13	陶器	蓋	15.1	4.1	3.9	鈍い黄橙	鉄	京・信楽系	鉄泥　イッチン描き
14	陶器	土瓶	7.5	11.2	8.5	灰黄	白化粧	京・信楽系	緑彩
15	陶器	土瓶	8.0	13.0	8.5	浅黄橙	いっちん	京・信楽系	
16	陶器	土瓶	9.0	9.4(残)		明赤褐		京・信楽系	素焼
17	陶器	油差	6.6	9.5	7.5	灰白	灰	京・信楽系	
18	陶器	蓋	7.3(最大)	1.6		灰白	灰	京・信楽系	No.19とセット
19	陶器	水注	6.3	8.6	7.2	灰白	灰	京・信楽系	No.18とセット
20	陶器	急須	8.8	7.3	9.9	灰黄		京・信楽系	素焼
21	陶器	急須	6.0	7.7	6.3	灰褐	錆絵	京・信楽系	白泥掛け
22	陶器	蓋	13.3	3.2	3.7	浅黄	灰	京・信楽系	
23	陶器	行平	13.8	6.9	5.5	浅黄	灰	京・信楽系	把手上面に亀の型押し
24	陶器	蓋	17.6	4.2	5.4	灰白	灰	京・信楽系	
25	陶器	行平	18.2	11.4	8.5	浅黄	灰	京・信楽系	把手上面に型押し
26	陶器	植木鉢	11.7	7.0	3.6	灰白	鉄	京・信楽系	
27	陶器	植木鉢	13.6	8.6	5.5	灰	黒	京・信楽系	
28	陶器	植木鉢	13.9	8.5	7.8	鈍い黄橙	灰白	京・信楽系	
29	陶器	植木鉢	21.3	15.3	12.4	浅黄橙	いっちん	京・信楽系	
30	陶器	徳利	3.2	21.5	8.4	褐灰	鉄	丹波	イッチン描き
31	陶器	擂鉢	18.0	6.4	9.4	灰赤		堺・明石系	

表54　土壙B687出土遺物１（図版348）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	5.0	1.2		橙		在地	
2	土師器	皿	5.1	1.4		鈍い橙		在地	
3	土師器	皿	5.1	1.4		橙		在地	
4	土師器	皿	5.2	1.3		浅黄橙		在地	
5	土師器	皿	5.4	1.3		橙		在地	
6	土師器	皿	5.4	1.2		浅黄橙		在地	
7	土師器	皿	5.7	1.5		浅黄橙		在地	
8	土師器	皿	6.5	1.2		鈍い黄橙		在地	
9	土師器	皿	7.6	1.5		浅黄橙		在地	
10	土師器	皿	7.6	1.6		橙		在地	
11	土師器	皿	9.4	1.9		浅黄橙		在地	
12	土師器	皿	9.5	2.1		浅黄橙		在地	
13	土師器	皿	9.6	1.9		浅黄橙		在地	
14	土師器	皿	9.6	1.7		浅黄橙		在地	
15	土師器	皿	9.6	1.6		浅黄橙		在地	口縁端部煤付着
16	土師器	皿	9.8	1.6		浅黄橙		在地	
17	土師器	皿	9.9	1.6		浅黄橙		在地	
18	土師器	皿	10.0	1.8		黄橙		在地	
19	土師器	皿	10.0	2.0		浅黄橙		在地	
20	土師器	皿	10.1	1.9		黄橙		在地	
21	土師器	皿	10.2	2.0		浅黄橙		在地	口縁端部煤付着

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
22	土師器	皿	10.1(推定)	1.9		浅黄橙		在地	底部墨書「御くすり」
23	土師器	皿	10.0	1.9		浅黄橙		在地	
24	土師器	皿	10.0	1.9		浅黄橙		在地	
25	土師器	皿	10.7	1.9		橙		在地	
26	土師器	皿	11.5	2.2		浅黄橙		在地	
27	土師器	皿	11.6	2.2		浅黄橙		在地	
28	土師器	皿	11.6	2.1		浅黄橙		在地	
29	土師器	皿	11.6	2.0		浅黄橙		在地	
30	土師器	皿	11.7	2.1		浅黄橙		在地	
31	土師器	皿	11.7	2.1		灰白		在地	
32	土師器	皿	11.7	2.1		灰白		在地	口縁端部煤付着
33	土師器	皿	11.7	2.1		浅黄橙		在地	
34	土師器	皿	11.8	2.1		浅黄橙		在地	
35	土師器	皿	11.9	2.0		灰白		在地	
36	土師器	皿	11.9	2.0		浅黄橙		在地	
37	土師器	皿	12.0	1.9		浅黄橙		在地	
38	土師器	皿	12.1	2.1		灰白		在地	
39	土師器	皿	12.2	2.1		浅黄橙		在地	口縁端部煤付着
40	土師器	皿	12.3	1.7		浅黄橙		在地	
41	土師器	皿	12.6	1.8		灰白		在地	
42	土師器	皿	12.5	2.0		浅黄橙		在地	
43	土師器	蓋	8.3	1.7		淡黄		在地	
44	土師器	蓋	8.3	1.9		浅黄橙		在地	
45	土師器	蓋	8.6	1.7		浅黄橙		在地	
46	土師器	蓋	9.1	2.1		浅黄橙		在地	
47	土師器	蓋	10.3	2.0		淡黄		在地	
48	土師器	蓋	10.4	2.2		淡黄		在地	
49	土師器	蓋	10.7	2.0		淡黄		在地	
50	土師器	蓋	10.8	2.4		淡黄		在地	
51	土師器	蓋	10.8	2.0		浅黄橙		在地	
52	土師器	蓋	10.9	2.0		浅黄橙		在地	
53	土師器	蓋	10.9	2.1		淡黄		在地	
54	土師器	蓋	11.0	2.1		淡黄		在地	
55	土師器	蓋	12.3	2.0(残)		灰白		在地	
56	土師器	蓋	12.2	2.3		灰白		在地	
57	土師器	蓋	12.5	2.3(残)		浅黄橙		在地	
58	土師器	蓋	12.6	2.3		浅黄橙		在地	
59	土師器	蓋	12.8	2.3		淡黄		在地	
60	土師器	蓋	12.5	2.0(残)		浅黄		在地	
61	土師器	蓋	14.2	2.1(残)		浅黄		在地	
62	土師器	蓋	14.6	2.0(残)		鈍い黄橙		在地	
63	土師器	蓋	14.6	2.3		淡黄		在地	
64	土師器	蓋	14.7	2.1(残)		淡黄		在地	
65	土師器	蓋	14.8	2.2(残)		淡黄		在地	
66	土師質	蓋	9.4	3.0		浅黄橙		在地	ロクロ成形
67	土師質	鉢	7.8	2.8	3.4	浅黄橙		在地	ロクロ成形
68	土師質	鉢	11.0	3.8	7.2	浅黄橙		在地	ロクロ成形
69	土師質	鉢	12.2	3.6	8.8	浅黄橙		在地	ロクロ成形
70	土師質	鉢	12.4	3.6	4.3	浅黄橙		在地	ロクロ成形
71	土師質	鉢	8.4	3.4(最大)	7.5	灰白		在地	ロクロ成形
72	土師質	高杯		5.7	10.4	灰白		在地	ロクロ成形　高杯か
73	土師質	高杯		5.5	10.0	灰白		在地	ロクロ成形　高杯か

表55　土壙Ｂ687出土遺物２（図版349）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師質	焼塩壷蓋	4.8	1.8		鈍い黄橙		京都	
2	土師質	焼塩壷蓋	5.2	1.7		鈍い黄橙		京都	
3	土師質	焼塩壷	3.1	5.3	2.7	橙		京都	
4	土師質	焼塩壷	2.8	5.6	3.5	橙		京都	
5	土師質	焼塩壷	3.2	5.2	3.0	橙		京都	
6	土師質	焼塩壷	3.2	5.5	3.6	橙		京都	
7	土師質	焼塩壷	3.0	6.3	3.0	橙		京都	
8	土師質	焼塩壷	3.5	5.9	4.9	浅黄橙		京都	
9	土師質	焼塩壷	3.1	5.5	2.7	浅黄橙		京都	
10	土師質	焼塩壷	2.9	7.3	3.3	鈍い橙		京都	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
11	土師質	焼塩壷	3.7	4.8	4.8	浅黄橙		京都	
12	土師質	焼塩壷	7.0	7.0	4.5	鈍い黄橙			板作り　ロクロ
13	土師質	焼塩壷蓋	6.4	1.8	7.7	橙			No.14の蓋
14	土師質	焼塩壷	5.6	7.4	4.8	鈍い橙			板作り
15	土師質	高杯		4.9	4.2	浅黄橙		在地	
16	土師質	灯火具	3.9	1.7	2.6				
17	土師質	皿	5.0	0.9(最大)	3.0	浅黄橙		在地	
18	軟質施釉	皿	18.4(推定)	3.4(残)		鈍い黄橙	白濁		
19	土製品	人形	3.1(最大)	4.0	3.0(残)	浅黄橙		在地	緑彩　中実
20	土製品	人形	4.3(最大)	5.7		鈍い橙		在地	型合せ
21	土製品	人形	11.2(最大)	8.9		鈍い橙		在地	型合せ
22	土製品	人形	6.0(最大)	6.7		灰白		在地	型合せ
23	土製品	人形	5.2(最大)	6.3		灰白		在地	型合せ　中実
24	土製品	人形	7.3(最大)	3.5		灰白		在地	型合せ　浮人形　底部墨書「嘉」
25	土師質	蓋	10.4(最大)	2.5		浅黄橙			灯火具蓋か　深草か
26	軟質施釉	胡麻煎	11.7(最大)	3.4(残)	10.5(幅)	淡黄	透明+緑	在地	型作り　内面キラコ
27	軟質施釉	胡麻煎	24.2(最大)		11.0(幅)	淡黄	透明+緑	在地	型作り　内面キラコ
28	軟質施釉	鉢	16.0(幅)	12.8	7.6	灰白	緑		
29	軟質施釉	皿	26.0	6.5	7.2	赤褐	白濁		楽系
30	土師質		22.6(推定)	1.3		浅黄橙			灯火台か「霞晴山」印
31	土師質	炮烙	26.3(推定)	5.2		灰黄			深草か
32	土師質	炮烙	29.4(推定)	4.8(残)		橙			深草か
33	土師質	火入	14.4	7.6	13.6	橙+灰白			絞胎　深草か
34	土師質	焜炉	16.1(推定)	10.2(残)		橙			深草か
35	土師質	火入	18.7	9.2	16.2	鈍い橙			深草か

表56　土壙B687出土遺物3（図版350）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	紅皿	4.4	1.2	1.3	白	白磁	肥前系	
2	磁器	紅皿	4.5	1.5	1.3	白	白磁	肥前系	
3	磁器	紅皿	5.0	2.3	1.7	白	白磁	肥前系	
4	磁器	紅皿	5.3	1.6	2.6	白	染付	肥前系	
5	磁器	紅皿	4.8	2.5	1.5	白	染付	肥前系	
6	磁器	紅皿	4.9	2.4	1.4	白	染付	肥前系	
7	磁器	紅皿	5.7	2.8	1.7	白	上絵	肥前系	「紅葉のにしき」他和歌の赤絵
8	磁器	碗	7.0	3.2	2.2	灰白	染付	肥前系	
9	磁器	碗	7.5	3.4	2.3	白	染付	肥前系	
10	磁器	碗	6.9	3.4	2.0	白	染付	肥前系	
11	磁器	碗	6.3	3.7	3.1	白	染付		肥前系か　輪高台
12	磁器	碗	10.0	5.1	4.3	白	染付	肥前系	菊花文　焼継
13	磁器	碗	9.8	5.1	3.7	白	染付	肥前系	
14	磁器	碗	10.6	5.2	4.5	白	染付	肥前系	菊花文
15	磁器	碗	9.7	4.7	4.0	白	染付	肥前系	
16	磁器	碗	11.0	5.5	4.5	白	染付	肥前系	
17	磁器	碗	8.1	4.1	3.0	白	染付	肥前系	
18	磁器	碗	9.8	4.9	3.9	白	染付	肥前系	
19	磁器	碗	9.9	5.0	4.0	白	染付	肥前系	
20	磁器	碗	10.4	5.2	4.1	白	染付	肥前系	
21	磁器	碗	9.7	4.7	3.8	白	染付	肥前系	焼継　逆「W」の焼継師記号
22	磁器	碗	10.5	5.2	4.5	白	染付	肥前系	菊花文
23	磁器	碗	11.6	5.8	4.6	白	染付	肥前系	
24	磁器	碗	9.3	4.6	3.8	白	染付	肥前系	焼継
25	磁器	碗	9.9	5.3	4.3	灰白	染付	肥前系	
26	磁器	碗	10.2	5.9	3.6	白	染付	肥前系	
27	磁器	碗	9.8	5.2	3.5	白	染付	肥前系	
28	磁器	碗	9.8	5.3	3.4	白	染付	肥前系	
29	磁器	碗	9.9(推定)	5.2	4.0(推定)	白	染付	肥前系	
30	磁器	碗	8.7	5.5	3.3	白	染付	肥前系	
31	磁器	碗	10.2	5.5	4.0	白	染付	肥前系	
32	磁器	碗	11.1	6.0	4.6	白	染付	肥前系	
33	磁器	碗	11.3	5.5	4.8	白	染付	肥前系	
34	磁器	碗	11.3	5.8	4.2	白	染付	肥前系	焼継　逆「W」の焼継師記号
35	磁器	碗	9.8	4.6	3.6	白	染付	肥前系	
36	磁器	碗	11.2	6.1	4.5	白	染付	肥前系	
37	磁器	碗	9.8	5.2	3.8	白	染付	肥前系	焼継

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
38	磁器	碗	10.4(推定)	5.5	5.1	白	染付	肥前系	焼継
39	磁器	碗	15.8	8.9	5.9	灰白	染付	肥前系	
40	磁器	碗	7.0	5.8	3.6	白	染付	肥前系	
41	磁器	碗	10.1	5.2	3.4	白	染付	肥前系	焼継　逆「W」の焼継師記号
42	磁器	碗	11.6	6.1	6.2	白	染付	肥前系	焼継
43	磁器	碗	12.9	7.0	7.4	白	染付	肥前系	

表57　土壙B687出土遺物4（図版351）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	皿	8.0	1.9	4.3	灰白	染付+上絵	肥前系	
2	磁器	皿	10.1	1.8	6.5	白	染付	肥前系	
3	磁器	皿	9.5	2.5	5.9	灰白	染付	肥前系	
4	磁器	皿	10.0	2.2	6.2	白	染付	肥前系	
5	磁器	皿	12.4(推定)	2.3	7.3	白	染付	肥前系	
6	磁器	皿	10.2	2.0	5.6	白	染付	肥前系	
7	磁器	皿	11.0	2.3	6.2	白	染付	肥前系	
8	磁器	皿	10.3	2.1	5.5	白	染付	肥前系	
9	磁器	皿	9.9	2.6	5.1	灰白	染付	肥前系	
10	磁器	皿	9.4	2.3	5.0	灰	染付	肥前系	
11	磁器	皿	10.1	2.3	5.2	白	染付	肥前系	
12	磁器	皿	13.4	3.5	8.6	白	染付	肥前系	
13	磁器	皿	12.8	3.0	8.4	白	染付	肥前系	
14	磁器	皿	13.8	3.4	8.0	灰	染付	肥前系	
15	磁器	皿	12.8	3.9	7.6	灰	染付	肥前系	
16	磁器	碗	7.9(推定)	5.8	2.6	白	染付	肥前系	
17	磁器	鉢	12.1	6.6	6.7	白	染付	肥前系	
18	磁器	鉢	14.8	7.4	7.2	白	染付	肥前系	
19	磁器	皿	12.3	3.3	4.2	灰白	染付	肥前系	内面蛇ノ目釉剥ぎ
20	磁器	皿	14.9(推定)	4.4(残)	7.8(推定)	白	染付	肥前系	鍋島

表58　土壙B687出土遺物5（図版352）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	蓋物蓋	8.6	2.4	3.5	白	染付	肥前系	No.2の蓋
2	磁器	蓋物身	9.4	4.9	3.8	白	染付	肥前系	
3	磁器	蓋物蓋	9.1	2.7	3.7	白	染付	肥前系	No.4の蓋
4	磁器	蓋物身	10.1	5.5	4.2	白	染付	肥前系	
5	磁器	蓋	9.1	2.8	3.7	白	染付	肥前系	
6	磁器	蓋	9.0	2.4	3.2	白	染付	肥前系	
7	磁器	蓋	9.0	2.5	3.2	白	染付	肥前系	焼継
8	磁器	蓋	9.1	2.0	3.7	白	染付	肥前系	
9	磁器	蓋	6.8(最大)	2.3		白	染付	肥前系	
10	磁器	蓋	9.5(最大)	2.6		白	染付	肥前系	
11	磁器	蓋	13.2(最大)	3.5		白	染付	肥前系	
12	磁器	蓋	12.8(最大)	3.0(残)		白	染付	肥前系	
13	磁器	蓋	13.2(最大)	6.4		白	染付	肥前系	
14	磁器	鉢	15.2	7.9	6.7	白	染付	肥前系	
15	磁器	鉢	21.2	7.3	11.8	白	青磁染付	肥前系	蛇ノ目凹形高台
16	磁器	蓋物蓋	12.6(最大)	4.2		白	染付	肥前系	No.17の蓋
17	磁器	蓋物身	12.4	6.7	6.0	白	染付	肥前系	
18	磁器	蓋物蓋	12.7(最大)	3.5		白	染付	肥前系	No.19の蓋
19	磁器	蓋物身	12.5	3.4	8.6	白	染付	肥前系	

表59　土壙B687出土遺物6（図版353）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	仏餉具	6.3	5.9	3.7	白	染付	肥前系	
2	磁器	仏餉具	6.8	6.4	4.2	白	染付	肥前系	
3	磁器	仏餉具	7.4	5.7	4.3	白	染付+上絵	肥前系	
4	磁器	仏餉具	6.1	5.6	3.6	白	染付	肥前系	
5	磁器	合子蓋	4.6	1.2		白	染付	肥前系	
6	磁器	蓋物身	5.2	3.0	3.8	白	染付	肥前系	
7	磁器	鉢	7.3	3.5	3.3	白	染付	肥前系	
8	磁器	香炉	6.4	4.5	3.2	白	染付	肥前系	
9	磁器	鉢	9.1	5.1	4.5	白	染付	肥前系	
10	磁器	鉢	11.8	6.4	6.2	白	染付	肥前系	
11	磁器	碗	7.3	5.7	3.4	灰白	褐	肥前系	
12	磁器		9.7	4.4	6.2	白	染付	肥前系	段重ねか
13	磁器	碗	10.0	4.9	3.4	白	上絵	肥前系	
14	磁器	碗	9.9	4.8	3.2	白	上絵	肥前系	
15	磁器	碗	8.4(推定)	5.7	2.9	白	上絵	肥前系	焼継
16	磁器	筒型容器	4.5	6.4	5.0	白	染付	肥前系	灰吹か
17	磁器	仏餉具	1.5	9.9	3.1	灰白	染付	肥前系	
18	磁器	仏餉具	1.7	11.9	3.6(推定)	白	染付	肥前系	
19	磁器	仏餉具	2.1	10.5	4.3	白	染付	肥前系	
20	磁器	壷	1.6	18.8(残)		白	染付	肥前系	
21	磁器	壷	3.7	20.3	5.2	灰白	白磁	肥前系	
22	磁器	小杯		1.5(残)	3.0	白	上絵	肥前系	薄手酒杯
23	磁器	小杯		1.0(残)	2.4	白	染付	肥前系	薄手酒杯
24	磁器	碗	8.1	4.6	3.3	白	染付	瀬戸・美濃系	
25	磁器	碗	10.5	6.2	4.6	白	染付	瀬戸・美濃系	
26	磁器	鉢	17.9(推定)	7.3	8.0(推定)	白	染付	肥前系	
27	磁器	水滴		4.6	8.5(最大)	灰白	染付	肥前系	
28	磁器	香合蓋	8.0(推定)	1.9(残)			緑	中国	華南系
29	磁器	碗	7.0	4.2	2.5	白	瑠璃+金	中国	景徳鎮窯系
30	磁器	碗	8.6(推定)	3.3(残)		白	上絵	中国	徳化窯系
31	磁器	碗	9.4	6.1	3.4	白	青花	中国	景徳鎮窯系
32	磁器	碗	8.7	4.6	4.1(推定)	灰白	青花	中国	
33	磁器	蓋	9.2	3.7	3.6	白	青磁染付	肥前系	
34	磁器	碗	10.7	5.6	3.9	灰白	青磁染付	肥前系	
35	磁器	碗	11.2	6.1	4.2	白	青磁染付	肥前系	
36	磁器	碗	7.3	6.2	3.8	灰白	青磁染付	肥前系	
37	磁器	鉢	18.7	6.1	10.0	白	青磁染付	肥前系	蛇ノ目凹形高台

表60　土壙B687出土遺物7（図版354）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	碗	8.8	5.1	3.2	灰白	灰	京・信楽系	
2	陶器	碗	9.6	5.3	3.4	灰白	灰	京・信楽系	
3	陶器	碗	9.2	5.7	3.9	灰白	灰	京・信楽系	
4	陶器	碗	9.6	5.7	3.9	灰白	灰	京・信楽系	
5	陶器	碗	8.9	5.6	3.6	灰白	錆絵	京・信楽系	
6	陶器	碗	9.3	5.6	3.7	灰白	錆絵	京・信楽系	
7	陶器	碗	11.0	6.0	3.9	灰白	錆絵	京・信楽系	
8	陶器	碗	8.8	6.1	3.0	灰白	透明	京・信楽系	
9	陶器	碗	8.7	5.4	2.7	灰白	錆絵	京・信楽系	
10	陶器	碗	9.5	6.2	3.8	灰白	鉄+白+緑	京・信楽系	
11	陶器	碗	9.6	6.9	4.6	灰白	鉄+白	京都	「朝日」印
12	陶器	碗	5.2	2.9	1.6	灰白	透明	京・信楽系	
13	陶器	碗	6.6	3.8	2.5	灰白	透明	京・信楽系	
14	陶器	蓋物身	7.7	3.6	4.6	灰白	灰	京・信楽系	
15	陶器	壷	3.5	4.3	3.4	淡黄	灰	京・信楽系	
16	陶器	碗	7.1	5.5	3.0	灰白	錆絵	京・信楽系	「□平」墨書
17	陶器	鉢	10.6	5.0	4.5	灰白	錆絵	京・信楽系	
18	陶器	碗	11.2	6.6	4.2	灰白	錆絵	京・信楽系	
19	陶器	碗	11.2	6.8	4.4	灰白	錆絵	京・信楽系	
20	陶器	平碗	10.2	3.4	2.7	灰白	錆絵	京・信楽系	
21	陶器	平碗	11.0	4.5	3.4	灰白	錆絵染付	京・信楽系	
22	陶器	平碗	11.5	4.6	4.0	灰白	錆絵	京・信楽系	
23	陶器	平碗	11.7	4.4	3.8	灰白	上絵	京・信楽系	赤・緑彩
24	陶器	平碗	11.6	4.7	3.5	灰白	上絵	京・信楽系	赤・緑彩

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
25	陶器	平碗	11.7	4.4	3.6	灰白	上絵	京・信楽系	赤・緑彩
26	陶器	平碗	11.7	4.4	3.4	灰白	上絵	京・信楽系	赤・緑彩
27	陶器	蓋	9.4(最大)	1.2		灰白	灰	京・信楽系	
28	陶器	蓋物身	10.5	7.2	7.4	淡黄	灰	京・信楽系	
29	陶器	皿	9.2	2.3	4.4	灰白	錆絵	京・信楽系	
30	陶器	皿	9.2	2.4	3.5	灰白	白+錆絵	京・信楽系	
31	陶器	皿	8.9	1.5	4.5	灰白	錆絵	京・信楽系	
32	陶器	筒型容器		5.4(残)	5.8	浅黄橙	白化粧+染付	京都	灰吹
33	陶器	筒型容器		6.6(残)	5.5	浅黄	錆絵	京・信楽系	灰吹
34	陶器	碗	10.0	7.0	4.4	淡黄	錆絵		瀬戸・美濃系か
35	陶器	碗	9.4	8.3	5.2	灰白	白+錆絵	京・信楽系	
36	陶器	蓋	8.4(最大)	2.8			錆絵染付	京都	
37	陶器	鬢水入		3.6	14.7(最大)		錆絵染付	京都	

表61　土壙B687出土遺物8（図版355）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	鍋	15.0	6.8	6.0	灰	鉄	京・信楽系	
2	陶器	鍋	17.3	7.6	7.7	灰	鉄	京・信楽系	
3	陶器	鍋	18.8	9.4	8.4(推定)	灰	灰	京・信楽系	
4	陶器	鍋蓋	10.4	2.2	3.3	灰白	灰	京・信楽系	
5	陶器	鍋蓋	14.0	3.2	4.3	灰	灰	京・信楽系	
6	陶器	鍋蓋	11.6	2.7	3.9	灰	灰	京・信楽系	
7	陶器	鍋	12.0	7.6	6.1	灰	灰	京・信楽系	
8	陶器	鍋蓋	15.3	2.9	4.4	灰	灰	京・信楽系	
9	陶器	鍋	16.0	8.5	7.2	灰	灰	京・信楽系	
10	陶器	鍋蓋	12.0(最大)	3.5		鈍い黄橙	白+錆絵	京・信楽系	
11	陶器	急須蓋	5.8(最大)	1.5		灰	鉄	京・信楽系	
12	陶器	急須蓋	7.2(最大)	1.8		鈍い黄橙	鉄	京・信楽系	
13	陶器	急須蓋	8.3(最大)	1.9		浅黄橙	鉄	京・信楽系	
14	陶器	急須蓋	9.9(最大)	1.8		灰白	鉄	京・信楽系	
15	陶器	急須蓋	7.5(最大)	2.1		灰	錆絵	京・信楽系	
16	陶器	急須蓋	8.0(最大)	1.6		浅黄橙	鉄	京・信楽系	
17	陶器	急須蓋	8.9(最大)	3.6		灰	灰	京・信楽系	
18	陶器	急須蓋	11.9(最大)	2.8		灰白	錆絵	京・信楽系	
19	陶器	急須	7.7	10.2	7.9	灰	鉄+灰	京・信楽系	灰釉流し
20	陶器	急須	6.3	9.2	8.0	灰	灰	京・信楽系	
21	陶器	急須	7.8	10.7	7.8	浅黄橙	鉄	京・信楽系	
22	陶器	急須	11.6	14.9	9.0	灰	灰	京・信楽系	
23	陶器	急須	12.3	13.0	10.0	灰	灰	京・信楽系	
24	陶器	急須	7.0	10.7	8.4	浅黄橙	白化粧+緑	京都	「錦光山」印

表62　土壙B687出土遺物9（図版356）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	灯明皿	9.0	2.5	3.9	灰白	灰	京・信楽系	
2	陶器	灯明皿	9.4	2.7	4.4	灰白	灰	京・信楽系	
3	陶器	油受皿	6.8(最大)	1.6	3.0	灰黄	灰	京・信楽系	
4	陶器	油受皿	11.0(最大)	1.9	4.3	灰白	灰	京・信楽系	
5	陶器	油受皿	11.4(最大)	2.3	4.5	灰白	灰	京・信楽系	
6	陶器	油受皿	12.0(最大)	2.8	4.5	灰白	灰	京・信楽系	
7	陶器	灯火具	5.0	4.4	3.8	灰白	鉄	京・信楽系	
8	陶器	灯火具	5.3	4.2(残)		灰白	鉄	京・信楽系	
9	陶器	水注	7.8	9.9	5.2	灰白	鉄	京・信楽系	
10	陶器	仏餉具	1.6	7.7	2.6	灰白	銅緑	京・信楽系	
11	陶器	仏餉具	1.5	8.0	3.2	灰白	銅緑	京・信楽系	
12	陶器	壷	1.2	6.8	2.8	鈍い黄橙	白+錆絵	京・信楽系	
13	陶器	壷	3.1	11.5(残)		浅黄橙	染付+上絵	京都	白化粧上に染付・上絵　緑・赤・黄・金彩
14	陶器	蓋	4.9(最大)	1.7(残)		灰白	灰	京・信楽系	
15	陶器	蓋	5.9(最大)	1.2		灰白	錆絵	京・信楽系	
16	陶器	碗	8.6	5.9	3.3	灰白	灰	京・信楽系	
17	陶器	碗	7.6	4.3	4.0	灰黄褐	白+透明		京・信楽系か
18	陶器	平碗	8.6	5.9	4.0	灰白	灰	京・信楽系	
19	陶器	平碗	9.4	4.0	3.7	灰白	灰	京・信楽系	
20	陶器	柄杓	8.6	5.3	3.0	灰白	灰	京・信楽系	
21	陶器	碗	8.4	4.8	4.5	灰白	錆絵染付	京都	菊花文

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
22	陶器	鉢	11.6	8.2	5.6	灰白	錆絵染付	京都	菊花文
23	陶器	蓋物身	10.2	7.8	7.4	淡黄	錆絵染付	京都	菊花文
24	陶器	鉢	13.4	11.9	14.5	灰白	灰	京·信楽系	
25	陶器	植木鉢	10.7	7.7	8.6	灰白	灰	丹波	
26	陶器	植木鉢	11.4	10.4	7.8	灰	黒	丹波	
27	陶器	壷	10.6(最大)	18.3	9.8(推定)	白	鉄+黒	信楽	底部二次穿孔
28	陶器	植木鉢	18.8	16.3	12.0	灰白	灰	信楽	
29	陶器	鉢	18.6	12.5	13.6	赤褐			堺焼か
30	陶器	鉢	26.8	8.2	15.0	灰白	灰	信楽	
31	陶器	甕	21.5(推定)	22.8		白	鉄+黒		黒釉流し　信楽か

表63　土壙B687出土遺物10（図版357）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	碗	8.5	5.8	4.4	灰白	灰+鉄		瀬戸・美濃系か
2	陶器	碗	10.6	8.1	4.8	灰白	灰+鉄	瀬戸·美濃系	
3	陶器	碗	11.1	7.8	4.9	灰白	鉄+白	瀬戸·美濃系	
4	陶器	碗	12.7	6.2	5.5	浅黄橙	刷毛目	瀬戸·美濃系	
5	陶器	碗	14.9	7.0	5.4	鈍い黄橙	刷毛目	肥前系	
6	陶器	鉢	18.9	7.4	6.8	淡黄	灰	京·信楽系	
7	陶器	鉢	19.3(推定)	8.9	11.0(推定)	鈍い黄橙	灰+白濁	京·信楽系	底部墨書
8	陶器	鉢	10.9(最大)	6.9(残)	4.9	灰赤		備前	
9	陶器	壷	9.4	13.9	7.8	鈍い黄橙	鉄		
10	陶器	鉢	28.2(推定)	8.9	16.6(推定)	灰白	灰	信楽	
11	陶器	壷	5.1(最大)	10.6(残)	5.8	灰白	鉄	瀬戸·美濃系	
12	陶器	植木鉢	14.0	14.3	8.7	灰白	灰+染付	瀬戸·美濃系	
13	陶器	足付盤	27.0	11.7(最大)	18.8(推定)	灰白	灰+錆絵	瀬戸·美濃系	
14	陶器	足付盤	32.8	12.6	15.8	灰白	灰		瀬戸・美濃系か
15	陶器	壷	2.3	18.4	6.1	暗赤褐		備前	
16	陶器	壷	8.8(最大)	13.6(残)	6.0	灰	灰	瀬戸·美濃系	
17	陶器	鉢	33.9	12.1	11.9	灰黄褐	刷毛目	肥前系	三島手
18	陶器	瓶	14.6(最大)	21.0(残)	9.8	暗灰白	鉄	丹波	通徳利

表64　土壙B687出土遺物11（図版358）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	擂鉢	17.2	6.1	10.5	鈍い赤褐		堺·明石系	
2	陶器	擂鉢	19.7	6.7	8.6	鈍い赤褐		堺·明石系	
3	陶器	擂鉢	24.7	8.8	12.0	赤褐		堺·明石系	
4	陶器	擂鉢	27.2	11.1	13.3	赤褐		堺·明石系	
5	陶器	擂鉢	33.4	13.0	15.6	赤褐		堺·明石系	
6	陶器	擂鉢	39.2(推定)	15.3	18.1(推定)	浅黄橙		信楽	

表65　土壙H15出土遺物1（図版359）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	土師器	皿	7.4	1.3		浅黄橙		在地	
2	土師器	皿	7.9	1.2		浅黄橙		在地	
3	土師器	皿	8.1	1.7		浅黄橙		在地	
4	土師器	皿	8.2	1.5		浅黄橙		在地	
5	土師器	皿	7.9	1.8		浅黄橙		在地	
6	土師器	皿	11.1	2.3		浅黄橙		在地	
7	土師器	皿	11.2	2.1		灰白		在地	
8	土師器	皿	11.4	2.3		灰白		在地	
9	土師器	皿	11.6	2.1		灰白		在地	
10	土師器	皿	11.7	2.0		浅黄橙		在地	
11	土師器	皿	11.6	1.9		灰白		在地	
12	土師器	皿	11.8	2.2		灰白		在地	
13	土師器	皿	11.8	2.0		浅黄橙		在地	
14	土師器	皿	12.0	2.0		灰白		在地	
15	土師器	皿	12.2	2.4		灰白		在地	
16	土師器	皿	12.2	1.9		浅黄橙		在地	
17	土師器	皿	12.7	2.5		浅黄橙		在地	
18	土師器	皿	14.0	2.1		浅黄橙		在地	
19	軟質施釉	蓋	8.8(推定)	2.7		浅黄橙	透明		透漆+朱漆·金(表面) 透明釉(銀化 裏面)
20	土師質	焼塩壷	3.5	6.4	4.0	橙		京都	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
21	土師質	火入	18.2	8.0	16.6	鈍い橙			深草か
22	土師質	火入	18.8(推定)	7.9	17.6(推定)	淡黄			深草か
23	土師質	火入蓋		2.5	20.4(最大)	鈍い橙			火消壷蓋　裏面煤付着　深草か
24	土師質	炮烙	27.0(推定)	3.5(残)		浅黄橙			外型成形　津田産か
25	土師質	炮烙	33.0(推定)	3.4(残)		鈍い橙			外型成形　津田産か
26	軟質施釉	蓋	5.6(最大)	1.5			透明か		銀化激しい　楽系
27	土製品	ミニチュア	3.2	2.0	1.4	黄橙	透明+緑	在地	
28	土師質	花塩壷蓋	9.0(最大)	0.4		白		深草	ロクロ作り
29	土師質	花塩壷	8.0	3.0	11.0	白		深草	ロクロ作り
30	軟質施釉	皿		2.9(残)		浅黄橙	白濁		底部ヘラ描銘あり　楽系
31	土師質	五徳	13.5	8.5	18.2	浅黄橙		在地	手捏ね
32	陶器	鉢	17.6(推定)	12.0	10.8(推定)	鈍い赤褐			植木鉢転用(底部穿孔)　堺焼か
33	陶器	植木鉢	16.4(推定)	12.7	11.2(推定)	鈍い赤褐			貼付文　丹波か
34	陶器	植木鉢	29.3(推定)	21.6	17.4(推定)	褐灰	内面 鉄		貼付文　丹波か

表66　土壙H15出土遺物2（図版360）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	紅皿	4.4	2.2	1.3	白	上絵	肥前系	赤・朱彩
2	磁器	碗	6.4	5.0	3.2	灰白	染付		湯呑形　肥前系か
3	磁器	碗	9.2	3.6	2.7	灰白	染付	肥前系	
4	磁器	碗	11.2	5.0	3.9	灰白	染付	肥前系	見込釉剥ぎ　重ね圧痕
5	磁器	碗	9.2	4.7	2.9	灰白	染付	肥前系	
6	磁器	碗	9.7	5.0	3.4	灰白	染付	肥前系	
7	磁器	皿	13.0	3.9	7.4	灰白	染付	肥前系	高台内崩れ渦「福」か
8	磁器	皿	10.7	2.2	6.2	白	染付	肥前系	
9	磁器	皿	12.8	4.3	7.0	灰白	染付	肥前系	高台内崩れ渦「福」か
10	磁器	仏餉具		6.7(残)	2.9	白	染付	肥前系	
11	磁器	筒型容器	5.1	7.4	4.6	白	染付	肥前系	灰吹か　底部無釉
12	磁器	段重	10.0	2.4	10.0	白	染付	肥前系	化粧道具か
13	磁器	蓋	10.1(推定)	2.8	3.8	白	上絵	肥前系	金・赤・緑・青・黄・紫・黒彩　No.14の蓋
14	磁器	碗	11.1(推定)	5.9	4.4	白	上絵	肥前系	金・赤・緑・青・黄・紫・黒彩
15	磁器	碗	12.4	5.8	4.8	白	染付+上絵	肥前系	赤・緑・黒彩　見込釉剥ぎ
16	磁器	碗	10.9	6.5	4.6	白	染付+上絵	肥前系	金・赤彩
17	磁器	碗	11.4(推定)	5.8	4.8(推定)	白	上絵	肥前系	金・赤・緑・青・黄・紫・黒彩
18	磁器	蓋	14.4(最大)	3.5(残)		白	染付	肥前系	
19	磁器	鉢	13.4	6.0	7.3	白	染付	肥前系	蛇ノ目凹形高台
20	磁器	皿	14.0(推定)	4.6	7.4	灰白	染付	肥前系	高台内「太明成化年製」口紅
21	磁器	皿	19.7	3.7	11.6	白	染付+上絵	肥前系	金・赤・黒・緑彩　高台3点　ハリ支え　焼継
22	磁器	碗	9.8	6.5	4.0	白	染付+上絵	肥前系	金・赤・黒・緑彩　高台内「富貴長春」
23	磁器		5.8	3.0	5.9	白	染付	肥前系	蓋物身か　底部無釉「子」墨書有
24	磁器	水滴		2.8	8.8(最大)	白	染付	肥前系	長側面無釉
25	磁器	紅皿	4.0	1.3	1.5	白	白磁	肥前系	
26	磁器	紅皿	4.2	1.4	1.6	白	白磁	肥前系	
27	磁器	仏餉具	7.8	5.4	4.6	白	白磁	肥前系	底部無釉
28	磁器	皿	13.3	3.9	8.0	白	白磁	肥前系	蛇ノ目凹形高台　口紅
29	磁器	壷	4.5	31.4	8.3	白	白磁	肥前系	

表67　土壙H15出土遺物3（図版361）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	磁器	皿	30.6	5.5	18.6	白	染付	肥前系	高台内5点ハリ支え　角「福」焼継
2	磁器	皿	26.0(推定)	4.7	14.4	白	染付	肥前系	高台内3点ハリ支え残る　角「全」
3	磁器	小杯	6.1	3.0	2.9	白	染付	肥前系	薄手酒杯
4	磁器	小杯	6.8	4.8	3.0	白	染付		肥前系か　二段高台
5	磁器	小杯	7.2	4.0	3.0	白	染付	肥前系	薄手酒杯
6	磁器	小杯	6.3	4.5	3.0	白	染付		京都か　高台内　角「福」
7	磁器	碗	6.7	4.1	3.0	白	染付		瀬戸・美濃系か　高台内異体字
8	磁器	小杯	6.6	4.4	2.4	白	染付		京都か　高台内「道八」銘
9	磁器	碗	11.1	5.0	3.8	灰白	錦書		瀬戸・美濃系か
10	磁器	蓋	6.8(最大)	2.0		白	染付	京都	裏面「平安陶工/恭二製」No.11の蓋
11	磁器	急須	7.0	6.1	6.8	白	染付	京都	底部無釉
12	磁器	碗	7.0	3.6	2.5	白	染付	瀬戸・美濃系	
13	磁器	碗	10.3	5.1	3.2	白	染付	瀬戸・美濃系	
14	磁器	碗	10.6	5.3	3.4	白	染付	瀬戸・美濃系	
15	磁器	碗	10.5	5.6	3.3	灰白	染付	瀬戸・美濃系	

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
16	磁器	碗	9.3	5.2	3.8	灰白	染付	瀬戸・美濃系	
17	磁器	碗	8.5	4.3	3.1	白	染付	瀬戸・美濃系	口紅
18	磁器	蓋	8.6	2.6	4.7	白	染付	瀬戸・美濃系	
19	磁器	蓋	9.2	3.0	3.8	白	染付	瀬戸・美濃系	
20	磁器	皿	8.3	1.9	5.4	白	白磁	瀬戸・美濃系	木型打込皿
21	磁器	皿	8.4	1.8	5.4	白	白磁	瀬戸・美濃系	木型打込皿
22	磁器	盃洗	15.2（推定）	12.0	9.2（推定）	白	染付	肥前系	口紅

表68　土壙H15出土遺物4（図版362）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	碗	8.3	4.1	2.0	灰白	灰	京・信楽系	
2	陶器	碗	8.3	4.4	3.0	灰白	灰	京・信楽系	
3	陶器	蓋物蓋	7.1（最大）	1.1		灰白	灰	京・信楽系	
4	陶器	蓋物身	5.8	3.3	4.4	灰白	灰	京・信楽系	
5	陶器	蓋物蓋	8.5（最大）	1.3		灰白	灰	京・信楽系	
6	陶器	蓋物身	7.8	3.7	5.0	灰白	灰	京・信楽系	
7	陶器	灯明皿	6.2	1.2	2.5	灰白	灰	京・信楽系	
8	陶器	灯明皿	6.6	1.6	2.4	鈍い黄橙	灰	京・信楽系	
9	陶器	灯明皿	10.1	2.1	4.2	灰白	灰	京・信楽系	
10	陶器	灯明皿	12.0	2.6	4.3	淡黄	灰	京・信楽系	
11	陶器	油受皿	6.4（最大）	1.1	3.0	灰白	灰	京・信楽系	
12	陶器	油受皿	6.7（最大）	1.2	3.2	灰白	灰	京・信楽系	
13	陶器	油受皿	8.7（最大）	1.4	3.3	灰白	灰	京・信楽系	
14	陶器	足付油受皿	6.2（最大）	4.1	4.0	灰白	灰	京・信楽系	
15	陶器	仏餉具	4.3	4.6	3.2	灰白	黒	京・信楽系	
16	陶器	仏餉具	5.9	4.5	3.8	灰白	銅緑	京・信楽系	底部糸切
17	陶器	仏餉具	1.3	8.1	2.0	灰白	銅緑	京・信楽系	
18	陶器	仏餉具	1.6	8.3	2.4	灰白	銅緑	京・信楽系	
19	陶器	仏餉具	1.7	9.3	3.1	浅黄橙	銅緑	京・信楽系	
20	陶器	仏餉具	1.8	9.2	3.0	浅黄橙	銅緑	京・信楽系	
21	陶器	仏餉具	1.7	9.5	3.1	淡黄	銅緑	京・信楽系	
22	陶器	仏餉具	1.8	10.0	3.2	浅黄橙	青	京・信楽系	
23	陶器	蓋	5.8（最大）	2.6		鈍い橙	灰	京・信楽系	
24	陶器	蓋	6.8（最大）	2.1		灰黄	灰+白	京・信楽系	イッチン描き
25	陶器	急須	6.0	6.2	5.0	鈍い灰	灰	京都	長方形「喜久」銘刻印
26	陶器	蓋	8.8（最大）	3.8		鈍い黄橙	錆絵+緑	京・信楽系	
27	陶器	鉢	7.6	7.0	5.1	灰白		備前	体部上半糸目
28	陶器	水注	6.6	5.8	4.8	灰白	灰+錆絵	京・信楽系	桶形
29	陶器	水注	6.6	9.0	7.6	灰白	鉄	京・信楽系	
30	陶器	急須蓋	3.4	2.6		灰褐	鉄	京都	No.31の蓋
31	陶器	急須	3.5	9.2	5.6	灰褐	鉄	京都	ロクロ目「与三」ヘラ銘　底部朱墨「ミい□」
32	陶器	土瓶蓋	5.0	2.6		鈍い赤褐	鉄+緑+灰	京・信楽系	No.33の蓋
33	陶器	土瓶	5.6（推定）	9.8	5.9	鈍い赤褐	鉄+緑+灰	京・信楽系	底部煤付着
34	陶器	行平	14.5	4.7	5.9	暗灰	灰		内面灰釉 外面無釉 煤付着 左把手
35	陶器	片口	14.6	9.3	7.9	灰白	錆絵	京・信楽系	輪高台
36	陶器	行平蓋	13.2（最大）	4.3		鈍い黄橙	鉄+白	京・信楽系	飛びカンナ
37	陶器	行平	14.1	9.0	6.9	鈍い黄橙	鉄	京・信楽系	飛びカンナ　底部煤付着
38	陶器	行平蓋	15.8（推定）	5.0	4.2（推定）	浅黄橙	鉄+白	京・信楽系	飛びカンナ
39	陶器	行平	16.5	9.2	6.9	浅黄橙	鉄	京・信楽系	飛びカンナ　底部煤付着
40	陶器	鍋蓋	13.4	3.5	3.2	浅黄橙	灰	京・信楽系	No.41の蓋
41	陶器	鍋	14.2	8.5	5.3	浅黄橙	灰	京・信楽系	底部煤付着
42	陶器	鍋蓋	17.5（最大）	5.7		鈍い黄橙	灰		No.43の蓋
43	陶器	鍋	18.2	8.5	7.6	鈍い黄橙	灰		碁笥底風

表69　土壙H15出土遺物5（図版363）

No.	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備　考
			口径	器高	底径				
1	陶器	甕	57.3	60.8	21.7	灰白	鉄	信楽	
2	陶器	甕	41.4	49.0	18.1	灰白	鉄	信楽	
3	陶器	甕	51.9			灰白	鉄	信楽	
4	陶器	火入	18.5	16.9	13.8	灰白	灰+白濁	京・信楽系	
5	陶器	鉢	30.2	19.1	15.8	灰白	銅緑+灰	信楽	外面被熱　内面底部砂目
6	陶器	鉢	34.2	19.9	19.0	灰白	白化粧+染付	信楽	内面底部砂目
7	陶器	甕	25.7（推定）	26.2	13.1（推定）	灰白	鉄	信楽	
8	陶器	尿瓶	6.9（推定）	14.0	16.2	灰白	鉄		丹波か

種類・産地	破片数
中国陶磁器	298
朝鮮陶磁器	23
肥前系陶器	85
瀬戸・美濃系陶器	193
信楽	155
丹波	11
備前	70
軟質施釉陶器	33
土師質土器	306
瓦質土器	451
不明・その他	309
計	1934

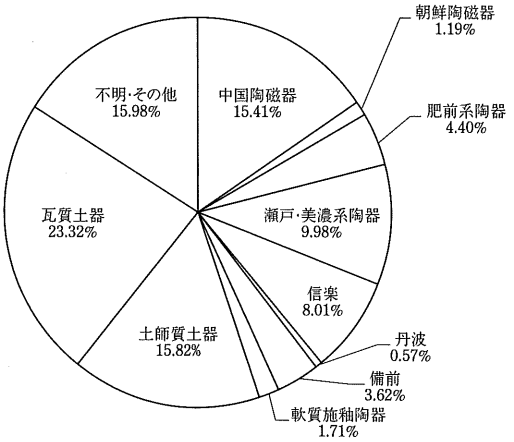


図36　土壙Ｆ1605出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	913
肥前系磁器	39
肥前系陶器	352
瀬戸・美濃系陶器	82
信楽	7
丹波	29
備前	37
土師質土器	199
瓦質土器	61
不明・その他	213
計	1932

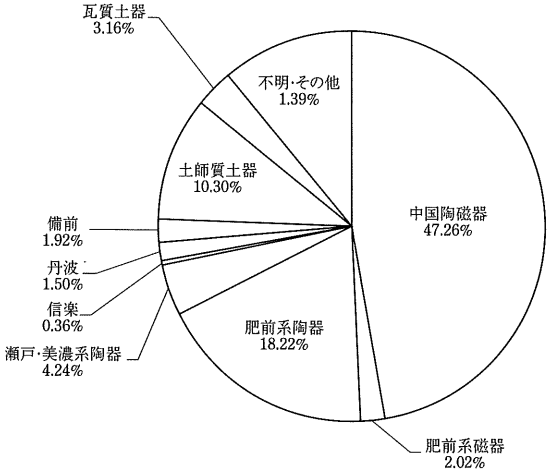


図37　穴蔵Ｃ548Ｂ出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	720
肥前系磁器	493
肥前系陶器	38
瀬戸・美濃系陶器	59
京都	1
信楽	29
丹波	150
備前	18
軟質施釉陶器	1
土師質土器	308
瓦質土器	46
土製品	4
不明・その他	51
計	1918

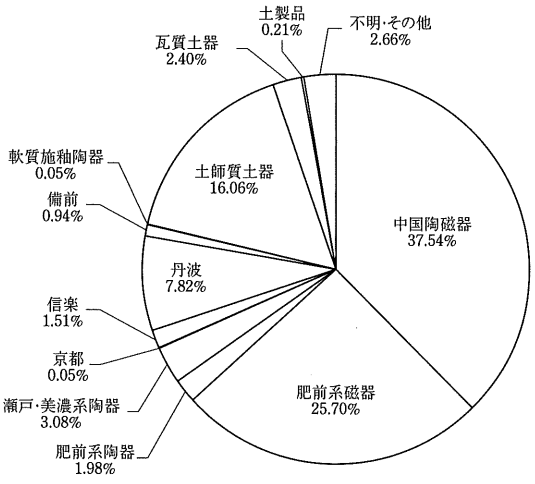


図38　土壙Ｆ1432出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	208
朝鮮陶磁器	1
ベトナム陶磁器	1
肥前系磁器	3936
肥前系陶器	213
瀬戸・美濃系陶器	74
京都	108
信楽	636
丹波	26
備前	22
土師質土器	437
瓦質土器	94
不明・その他	77
計	5834

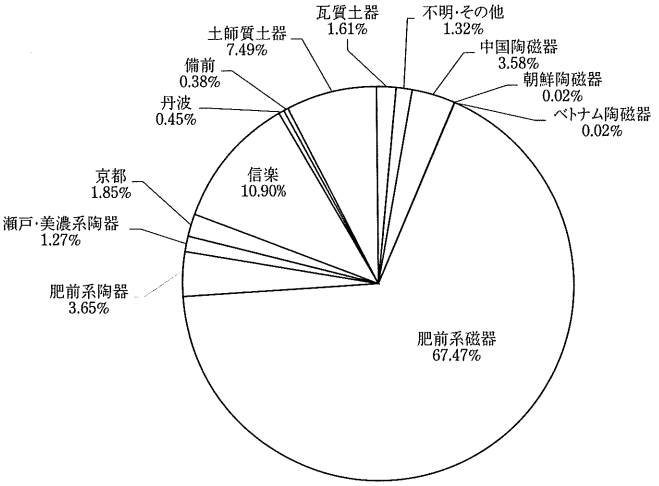


図39　土壙Ｂ725出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	20
肥前系磁器	1831
肥前系陶器	48
瀬戸・美濃系陶器	29
京都	95
信楽	212
丹波	23
備前	5
軟質施釉陶器	2
土師質土器	87
瓦質土器	20
土製品	10
不明・その他	198
計	2580

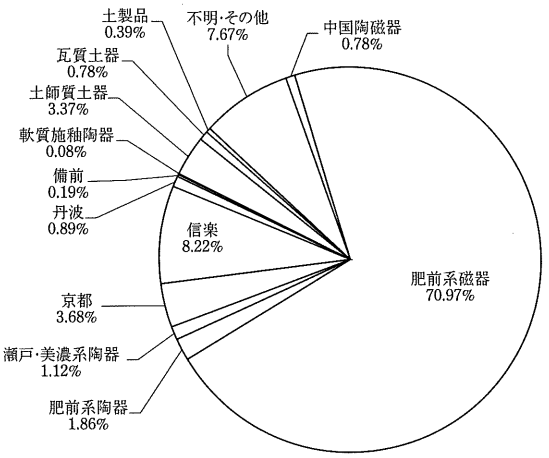


図40　土壙Ｆ1455出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	17
肥前系磁器	588
肥前系陶器	60
瀬戸・美濃系陶器	7
京都	112
信楽	80
丹波	11
備前	9
軟質施釉陶器	1
土師質土器	402
瓦質土器	71
土製品	7
不明・その他	58
計	1423

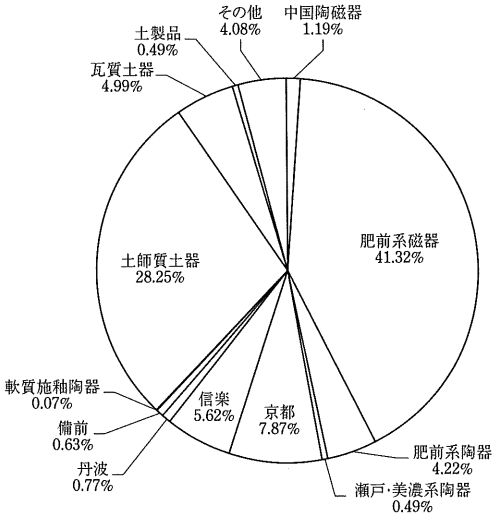


図41　土壙Ｆ1244出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	12
肥前系磁器	884
肥前系陶器	178
瀬戸・美濃系陶器	22
京都	287
信楽	108
丹波	6
備前	10
土師質土器	357
瓦質土器	4
軟質施釉陶器	24
土製品	12
不明・その他	81
計	1985

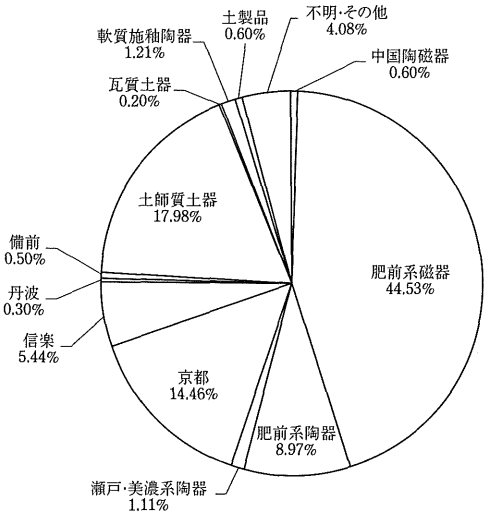


図42　穴蔵Ｆ1387出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	59
肥前系磁器	425
肥前系陶器	36
瀬戸・美濃系陶器	18
京都	79
京・信楽系陶器	141
信楽	39
丹波	9
備前	2
土師質土器	90
瓦質土器	10
軟質施釉陶器	1
不明・その他	105
計	1014

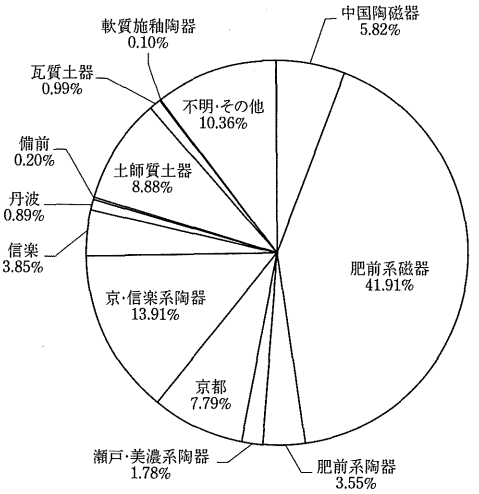


図43　土壙Ｂ776出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	1
肥前系磁器	336
肥前系陶器	21
瀬戸・美濃系陶器	9
京・信楽系陶器	166
信楽	9
丹波	3
備前	4
土師質土器	67
軟質施釉陶器	2
不明・その他	8
計	626

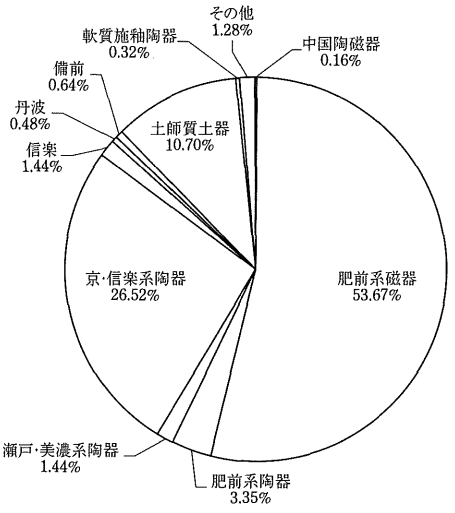


図44　土壙Ｈ166出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
肥前系磁器	336
肥前系陶器	5
瀬戸・美濃系陶器	2
京・信楽系陶器	427
信楽	17
備前	3
堺・明石	3
軟質施釉陶器	1
土師質土器	74
瓦質土器	3
不明・その他	32
計	903

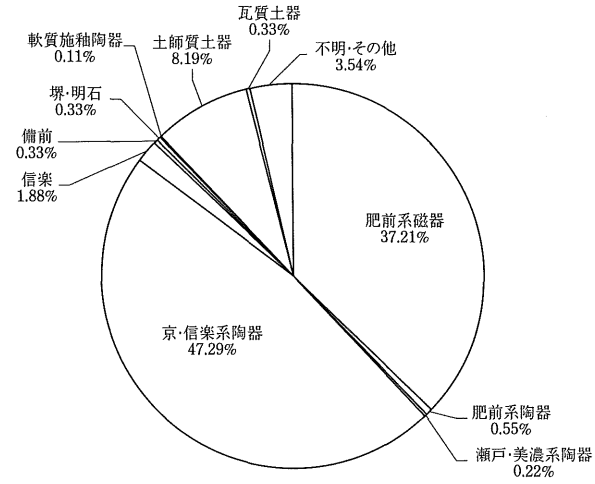


図45　土壙H271出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	7
肥前系磁器	1520
肥前系陶器	65
瀬戸・美濃系陶器	90
京都	35
京・信楽系陶器	1578
信楽	177
丹波	21
備前	6
堺・明石	11
軟質施釉陶器	34
土師質土器	396
瓦質土器	21
土製品	253
不明・その他	97
計	4311

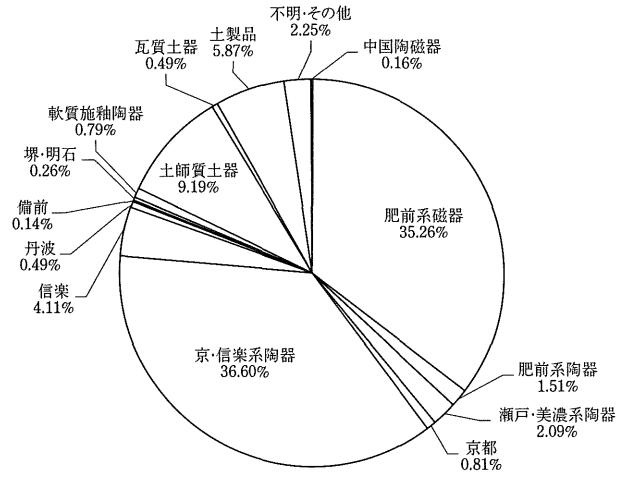


図46　土壙E45出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	10
肥前系磁器	788
肥前系陶器	6
瀬戸・美濃系陶器	153
京都	35
京・信楽系陶器	1472
信楽	26
丹波	23
備前	3
堺・明石	2
土師質土器	335
瓦質土器	2
不明・その他	31
計	2886

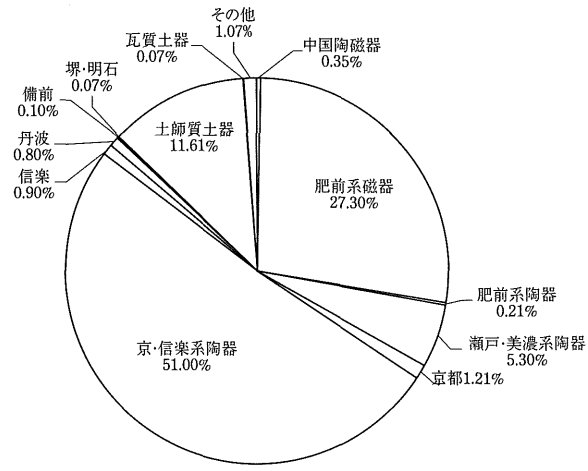


図47　土壙B716出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	1
肥前系磁器	530
肥前系陶器	6
瀬戸・美濃系磁器	32
瀬戸・美濃系陶器	75
京都	120
京・信楽系陶器	1631
信楽	36
丹波	23
備前	4
堺・明石	12
三田	12
軟質施釉陶器	9
土師質土器	419
瓦質土器	20
不明・その他	213
計	3143

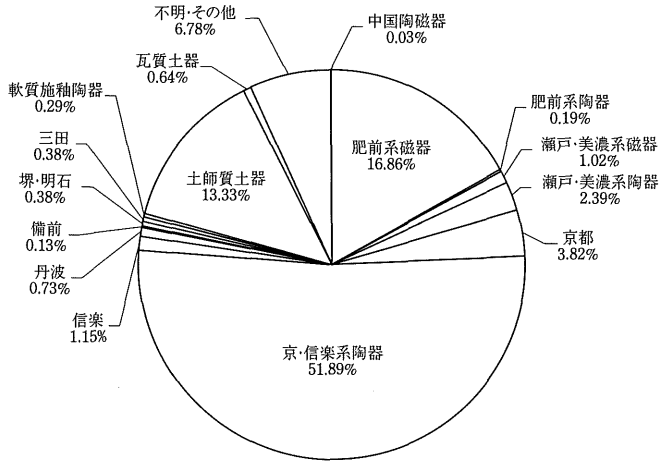


図48　土壙Ｇ348出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	167
肥前系陶磁器	6564
瀬戸・美濃系磁器	56
瀬戸・美濃系陶器	244
京都産磁器	2
京都陶器	113
京・信楽系陶器	6853
信楽	853
丹波	466
備前	42
三田	6
みん平	10
堺・明石	132
萩	5
軟質施釉陶器	163
土師・瓦質土器	625
不明・その他	229
計	16530

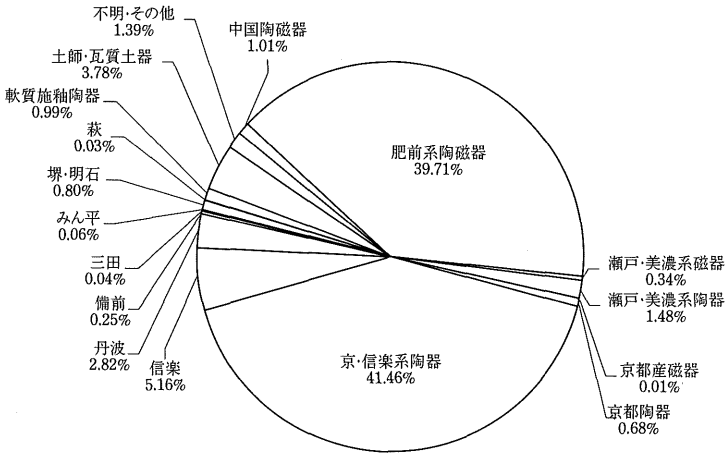


図49　土壙Ｂ687出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	22
肥前系陶磁器	1124
瀬戸・美濃系陶磁器	213
京都産磁器	61
京都陶器	70
京・信楽系陶器	1984
信楽	601
丹波	149
備前	16
三田	8
堺・明石	18
軟質施釉陶器	27
土師・瓦質土器	291
不明・その他	262
計	4846

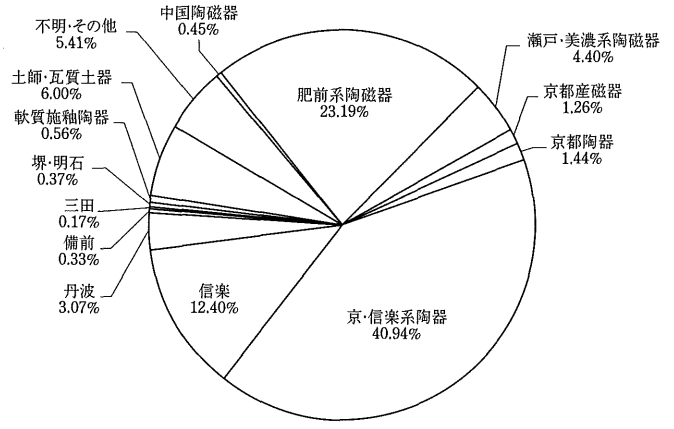


図50　土壙Ｈ15出土遺物産地組成

3　各調査区出土土器・陶磁器類

（1）A区

土壙A282（図版364）　1～6は土師器皿で、XI期古段階のものを図示した。7は瓦質灯火具の受皿である。8は青花の碗である。17世紀初頭のものである。

井戸A233（図版364）　9～12は青花の碗・皿である。9と11は景徳鎮窯系の碗で、9はやや饅頭心になる小碗である。10・12は漳州窯系のもので、12は口縁部内面に青海波文と花文が廻る、いわゆる呉須手の皿である。19は黄瀬戸の鉢である。20は胴部に段があり半環足の付く志野の鉢で、大窯終末期の元屋敷窯に類例がある[22]。21は炮烙で、22は瓦質の鉢である。

溝A72（図版364）　土師器の皿は概ねXI期新段階のものである。28は肥前系陶器の甕で、白土の刷毛目で波文を描き、銅緑釉を内外面に掛けた後、鉄釉を流し掛ける。口縁部はT字形で、上端面は波状に作る。体部外面に獣面が貼付けられる。

側溝A213（図版364）　29～38は土師器皿で、38の大型皿は口径16.8cm、器高2.7cmで外面底部もナデ調整されている。XI期中段階頃のものである。39と40は肥前系陶器で砂目の溝縁皿と口縁部がやや外反する碗で、いずれも灰釉である。基準資料の穴蔵C548Bと同時期である。

溝A7（図版365）　江戸時代後期の埋土から出土したものである。1～13は土師器皿であるが、出土量は少ない。17は軟質施釉陶器の型成形の皿で、外面は布目圧痕、内面は綾杉文である。内外面に薄い透明釉が掛けられている。18～21は肥前系磁器で、21の八角鉢は、高台高の高い蛇ノ目凹形高台である。22～27は瀬戸・美濃系磁器で、27は内面菊花文の型打皿で、口縁端部に口紅を施す。28はイギリス、ピンダー・ボーン窯製の白磁水差で、底部に「STONE CHINA/PINDER BOURNE &CO/BURSLEM」の銘と、ライオンとユニコオーンのプリントマークがある。表面の透明釉が比較的厚く掛かり、細かい貫入が全体に入っている。一度大きく壊れたものが丁寧に焼継されている。ピンダー・ボーン窯の操業期間は1862～82年である[23]。29～35は京・信楽系陶器で、31・32・35はいずれも白化粧の上に、青釉、錆釉で文様を描く。35のいわゆる蕎麦手碗は赤褐色の粗い胎土で、底部には「晴雲山」の小判印が押されている。34は青釉の仏花瓶である。36は飛びカンナの鍋で、産地を特定できない。37は内面底部が斜格子の信楽擂鉢である。

井戸A354（図版366）　1～5は瀬戸・美濃系磁器で、1は薄手酒杯、3・4は寿字の木型打込皿である。いずれも白磁である。10・11は九谷系の色絵磁器である。11の扁平な壷は、型作りで胴部で接合されており、内面に布目圧痕が残る。6～9は肥前系磁器である。碗類はいずれも端反形である。12の皿はヨーロッパ産の白磁で、裏面に、「IMPERIAL/IRONSTONE CHINA/COCKSON CHETWINDO&CO/GOBRIDGE」のプリントマークと「GOTHIC」という皿のスタイル名を表す刻印が押されている。胎土は白色粉質でいわゆるファイアンス陶である。コックスン・シェトウインド窯の操業期間は1867～75年である。なおこの井戸A354からは、ヨーロッパ製と推定されるガラス製鉢も出土している（図版123・587）。13～19・23・24は京・信楽系の陶器である。16は亀のつまみの付く刷毛目の蓋、17～19は銅緑釉のいわゆる御神酒徳

利、その他はいずれも灰釉の蓋、鉢、鍋類である。20の白釉徳利は「加賀□」「三□山」のイッチン描きの銘があり、丹波製のものと思われる。25は陶器の築地のミニチュアである。

池Ａ57（図版366）　26～28は肥前系磁器である。26は高台の高い鉢、27は蛇ノ目凹形高台の端反皿、28は花唐草文の四角の小型合子である。29～31は京・信楽系の灰釉陶器である。鉄釉黒釉流の甕32は池Ａ57の池底に据えられていたものである。

整地Ａ３（図版367・368）　図版367の１～20は土師器の皿・蓋である。６は前代の混入品である。26～39は土製品類で、泥面子・ミニチュア・型作りの人形などである。38の釣人、39の布袋は、一部緑彩される。40～53は肥前系磁器で、18世紀～19世紀代のものが混在する。53の皿は銀彩の花が２箇所に残る。底部にハリ支えがある。54は失透した灰釉の鉢で信楽産である。55は灰釉・紫釉流の鉢である。56は大振の輪高台の鉢で、白化粧に錆絵染付、内面に３箇所の目痕が残る。55と56は18世紀代の京焼である。図版368の１・２は楽系の軟質施釉陶器で、いずれも赤褐色の粗い胎土に透明釉もしくは白濁釉が掛かるものである。３・４は白化粧に透明釉の京焼である。５・７・８・10は京・信楽系の灰釉や錆絵染付の陶器である。９・14は瀬戸・美濃系の灰釉陶器である。11・12は萩焼の碗で、底部から高台部にかけて、シャープなケズリ痕が残り、高台内は渦巻状のケズリである。13の植木鉢は、錆釉の上にイッチンで花弁を描く。16の黒釉の鍋は、器高が高く18世紀代のものである。17の焼締植木鉢は、表面に火襷が残るもので、丹波産の胎土に近いものであるが、産地を特定できない。

Ａ区のその他　（図版368・369、表70・71）　図版368の20～24は中国製陶磁器である。20は黒の縁取線に紫・青・緑・黄・赤彩で魚と水草類を描く端反りの小杯で、出土例がない。21は底部に「邵景南製」の印銘がある急須で、宜興窯系のいわゆる茶銚と呼ばれているものである。暗赤褐色の均一な胎土で、板作りの体部と底部との継目付近に細かい縦皺がみられる。22・23は粉彩の小碗で、底部には不明の銘がある。25はヨーロッパ製の白磁の皿の小破片であるが、底部のプリントなどは不明である。図版369の２は焼締陶器の徳利形の瓶で、底部付近に桜形の輪郭の中に「久」の刻印がある。この刻印は岡田久太の銘款とされている[24]。３は灰釉の京・信楽系陶器で、把手の上部に銅製吊り金具を取付けた秉燭で、使用形態がわかる。４・５は丹波産の陶器である。４は口径48.2cmの大型の盤で、底部にはほぼ６cm間隔の目痕が残る。体部には幅５mm位の凹線が２条廻る。６は透明釉の上に鉄釉を体部の横から流し掛ける碗で、ロクロ作りの軟質施釉陶器である。10・11は灰白色で粗い胎土の焜炉で、10は皿型のサナで、11の部品である。12は肥前系磁器のうがい碗で、竹に菊花文、16弁の菊花を見込に一杯に描く。禁裏注文品である。13は軟質施釉陶器で、にぶい橙色の胎土に、やや緑色を呈する透明釉が掛けられている。釉は銀化が激しく、失透している。裏面に２重圏線の「楽」の刻印がみられる。用途を想定しにくいが、中央に1.6cm程度の正方形の孔があり、灯火具の台である可能性が高い。

表70　A区のその他土器・陶磁器類（図版368）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
18	HK·HL撹乱		軟質施釉	灰器	9.8(推定)	6.7(残)		赤褐	透明		透明釉銀化
19	土壙A420	17c前半	陶器	盤	24.0	9.2		暗灰	灰	肥前系	三足
20	土壙A163	19c代	磁器	小杯	6.1	4.7	2.9	白	上絵	中国	黄·青·紫·赤·緑·黒彩 高台内緑彩
21	土壙A164	時代幅アリ	陶器	急須			6.0(推定)	暗赤褐		中国	宜興窯　底部刻印「邵景南製」
22	掘下げ		磁器	小杯	6.6	3.9	2.3	白	染付+上絵	中国	赤 粉彩 口紅 景徳鎮窯
23	掘下げ		磁器	碗	9.6	4.8	3.2	白	染付+上絵	中国	青·赤·黄·黒彩 粉彩 口紅 景徳鎮窯系
24	掘下げ		磁器	碗	9.3	5.7	3.2	白	青花	中国	
25	土壙A237	19c後半	陶器	皿	22.6(推定)	2.9	14.6(推定)	灰白	白磁	ヨーロッパ	
26	土壙A237	19c後半	陶器	甕	27.0(推定)	36.3	15.2(推定)	灰白	鉄	信楽	

表71　A区のその他土器・陶磁器類（図版369）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
1	土壙A183	19c代	陶器	蓋		1.1	3.8(最大)	褐灰	鉄		
2	土壙A183	19c代	陶器	瓶		9.8(残)	3.8	暗赤灰		京都	桜に「久」印
3	土壙A183	19c代	陶器	灯火具	4.3	3.9	4.6	暗褐灰	灰	京·信楽	銅製柄付き乗燭
4	土壙A183	19c代	陶器	盤	46.8(推定)	12.6	46.8(推定)	褐灰		丹波	裏面目痕
5	土壙A183	19c代	陶器	鉢	34.0	19.8	17.2	暗灰	鉄+灰流し	丹波	底部砂付着
6	土壙A370	17c前半	軟質施釉	碗	8.6	6.0	3.1	淡橙	鉄+透明		鉄釉横位流し
7	土壙A184	18c末	磁器	紅皿	6.5	3.1	2.3	白	上絵	肥前系	赤絵書「京都本家小町紅」
8	埋納土壙A45	18c代	土師質	胞衣壷蓋	13.2	1.7	13.3	鈍い橙			No.9の蓋 ロクロ成形
9	埋納土壙A45	18c代	土師質	胞衣壷	10.0	6.7	11.6	鈍い橙			ロクロ成形
10	土壙A236	19c後半	土師質	サナ	15.6	2.8	8.4	灰白			No.11の部品
11	土壙A236	19c後半	土師質	焜炉	18.0	15.8	18.0	灰白			深草か
12	掘下げ		磁器	碗	14.8	6.8	5.0	白	染付	肥前系	竹に菊花散らし
13	EL検出中		軟質施釉			6.5	21.0(最大)	鈍い橙	透明		燭台か 裏面「楽」印　透明釉銀化

（2）B区

土壙B1000（図版370）　1～12は土師器の皿で、概ねXI期古段階のものである。13～16は土師質土器で、13・14は手捏ねの小壷である。15は器壁の厚い丸底の鉢である。内面が平滑で、煤が付着したような使用痕がある。16世紀後半から17世紀初頭にほぼ出土が限られるものである。墨作りのための油煙採取用土器である可能性が指摘されている[25]。16は外面に斜格子のタタキが残る炮烙形の鉢である。17～19は青花の碗である。20～22は肥前系の陶器で、20は灰釉の碗、21は薄い器壁の鉄釉壷、22は砂目の灰釉皿である。

土壙B674（図版86・370～377）　出土遺物は整理箱で200箱を超える。遺物の主体は18世紀前半のものであるが、一部18世紀末の遺物の混入がある。図版370の23～89は土師器の皿と蓋である。28は中央に1個、32は3個の穿孔が焼成後に開けられている。中型の皿には中央を凸型にするヘソ皿形も多い。大型の皿には灯明皿として使用されたものも多い。63は底部外面に人面のような墨書が描かれている。71～89の蓋はつまみが断面逆台形を呈するが、ほぼ中央に付けられている。71の蓋は外面に「きよひ」、内面に「きよ火」の墨書がある。清火と思われる。図版371の1～28・34～37は、土師質土器である。1～21は焼塩壷と花塩壷である。1～5は京都産の焼塩壷である。6～8は同じく京都産の花塩壷の蓋で、6は「（なんば）ん里う/（七度焼）き志不/（深草）四良左衛門」、7は「なんばん七度/本やき志不」、8は「深草/砂川/権兵衛」の刻印が蓋の上部にある。9～16・19～21は堺系焼塩壷である。13～16は「難波浄因」、19・20は「泉州麻生」、21は「泉州磨生」の刻印がある板作りの焼塩壷である。17・18は板作り

で、胎土は暗褐色である。器形、胎土とも類例がなく産地も特定できない。22～28は灰白色の胎土で、ロクロ成形の鉢と碗である。26は外面のミガキが丁寧で、抉出しの浅い碁笥底に作る碗である。29・30はローソク形の秉燭で、薄く透明釉が掛かる。中央部の灯心を支える部分は失われている。33は童子形の人形で、白色系の胎土は精緻で、手捏ねである。彩色された痕跡はない。38は鉄釉の灯心押えである。40～43は灯明皿と油受皿で、40・41は京・信楽系、42は備前である。43はいわゆる柿釉の掛かる灯明皿で、軟質施釉陶器である。45は型成形で外面底部を丁寧なケズリ調整をした軟質施釉陶器である。白化粧の上に山水風の錆絵、黄・赤彩の唐草状の周縁を持ち、全体に透明釉を掛ける。図版372～374は磁器類である。図版374の21の仙芝祝寿文の端反碗と22の徳化窯の型作り白磁碗は、中国製である。その他は肥前系の磁器である。碗が肥前系磁器の74.5％を占め、中でもいわゆるくらわんか手と呼ばれている波佐見系のものが主なものである（図51・図版86）。高台集計[26]による碗・皿類の個体数は338（表72）で、一遺構からの出土量としては突出している。薄手の碗には「大明成化年製」、「大明年製」、角「福」などの銘款を持つものが多く、見込の五弁花は手描である。皿類は図版373の19のU字状高台、21の深手輪花皿などが主で、型紙摺のものもある。図版372の17・18・20・21の碗、図版373の30の皿はそれぞれ文様に菊花を散らすもので、禁裏からの注文品と推定できる。図版375～377は陶器類で、図版375は、1・2・19などの京焼と特定できないものを除き、他はほぼ京焼としてよい遺物である。9～23の平碗は内面錆絵染付の草花文ワンポイントのものが主体で、19～23のように透明釉が失透して錆絵が見えないものもある。高台内に刻印を有するものは少ない。28～30は錆絵もしくは錆絵染付の土瓶で、注口部はS字状である。図版376はその他の陶器類である。1は瀬戸・美濃系の黒釉流しの碗である。

器形	破片数
碗	2858
小杯	78
皿	574
大皿	13
鉢	102
壷	70
香炉	8
蓋物	87
不明・その他	48
計	3838

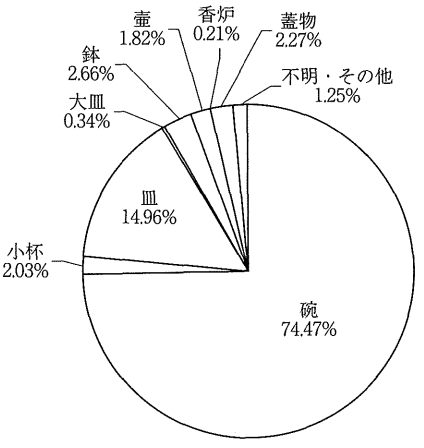


図51　土壙B674出土肥前系磁器器形分類

表72　土壙B674出土肥前系粗製磁器碗・皿分類表

碗	
文様	高台数
梅樹文	51
梅樹文＋建物	4
梅樹文＋扇面	25
梅樹文＋八つ橋	59
コンニャク文＋菊花	2
コンニャク文＋菊花＋丸	2
コンニャク文＋菊花＋笹	1
コンニャク文＋菊花＋松葉	5
コンニャク文＋菊花＋連続文	9
コンニャク文＋紅葉	12
コンニャク文＋桐	1
コンニャク文＋松+草花	4
コンニャク文＋松+鶴（A）	25
コンニャク文＋松+鶴（B）	2
コンニャク文＋松+鶴+草花	1
コンニャク文＋鶴＋草花	2
コンニャク文＋その他	2
その他	65
計	272

皿	
文様	高台数
コンニャク文＋扇面	16
コンニャク文＋扇面＋口紅	12
コンニャク文＋波（墨弾き）	19
コンニャク文＋菊	3
その他	16
計	66

2～13は肥前系の陶器で、2・3・8は刷毛目、5は灰釉、6・7は内面蛇ノ目釉剥ぎの青緑釉碗である。4・9～13の京焼風陶器は、9・13は無印、10～12は「清水」、4は「木下弥」の刻印がある。13の碗は釉下に錆絵と青彩の草花文がある。14は鉄釉の壷、21は灰釉の鉢で、いずれも丹波産のものである。15は鉄釉が厚い底部糸切りの壷で、産地は特定できない。22・23は白濁釉の鉢、16は鉄釉の壷でともに信楽産である。17～20は灰釉の京・信楽系陶器である。24の備前壷は緋襷が顕著で、底部にL字状の印を押す。図版377の1・3の信楽擂鉢は、内面の重ね焼き痕が明瞭で、底部の張出し部が特徴的である。2と4の堺系の擂鉢も少量出土する。5の丹波擂鉢は17世紀代のものである。6の黒釉流しの甕は、灰白色の粗い胎土で信楽産水甕の類である。

なお明らかに18世紀後半代の混入遺物と推定されるものは、図版371の40・41、図版375の1・2、図版376の18、図版374の5・7である。

土壙B721（図版378～382）　図版378の1～59は土師器の皿と蓋である。大型の皿は概ね良く焼しまっており、色調は白色に近いものから橙色まで幅広く、ムラのあるものも多い。灯明皿として利用された皿の数は、少ない。42・43の皿にはそれぞれ「左京□□/はんほと/□□遣候」「左京□/はんほと/々々」の墨書がある[27]。蓋44～59は白色系で、ナデ調整は丁寧である。60は土師質でロクロ成形の皿である。胎土は白色精良でよく焼しまっており、碁笥底に削り出す。64～70はミニチュア・人形類で、66～68は部分的に緑彩されている。70の人形はその特徴的な帽子から朝鮮通信師を模したものと思われる。前ボタンの衣服は墨で着色している[28]。図版379と図版380の1～9は肥前系磁器で、薄手半球碗、小丸碗、「ハ」の字状高台碗、筒形碗、広東碗など18世紀後半から19世紀初頭のものがほぼ揃っている。30～32は禁裏からの注文品と推定される菊花文の碗・皿類である。また、図版379の5・27は焼継されている。図版380の10は中国景徳鎮窯の粉彩色絵の小碗で、高台内に染付銘款がある。11～17は焼塩壷類で、11の花塩壷蓋は型作りのキラコが付着している。「深草/砂川/権兵衛」銘であるが、湾曲した面に均一な印字がなされており、銘款が彫り込まれた一体型が使われている可能性が高い。18は備前系の餌擂鉢である。19は軟質施釉陶器で全面に透明釉が薄く掛かり、釉が残るところは銀化が激しい。棗形の茶入を模したものであろうか。20はいわゆる柿釉を掛けた燗鍋形のもので、底部には使用による被熱痕がある。軟質施釉陶器の鍋類は類例が少ない。21は堺・明石系の擂鉢である。図版381は京・信楽系陶器で、1～8は平碗である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がるものがほとんどで、見込に目痕を持つものは少ない。錆絵のモチーフはわからない。また5のように小型のもので、見込中央部が凹むものも出土している。6・7・8は高台部に「廣」、「詰」などの墨書がある。10・11の小杉碗は、錆絵が主体でわずかに染付が残る。文様は枝葉が直線的になり、根の表現はない。信楽窯跡採集資料では、勅旨1号窯などのものに近い[29]。25・28・29などの白化粧の上に銅緑釉などを流し掛けるものは「錦光山」銘を持つものが多く、京焼と推定される。13・23・32など、白化粧の上に茶・青彩のものも京焼と推定される。26はやや燈色の胎土をもつ筒形容器の底部で、無釉の底部には「比良」銘の刻印がある。27は雲形貼付文を

もち、褐色に近い灰釉の火入類で「錦光山」銘がある。33は頭部は失われているが、前後型合せの上絵の童子形の水滴である。図版382の1～17は鉄釉及び灰釉の鍋・土瓶類で、6は「龍光山」、14は「音羽」、15は「明山」の刻印資料である。18・19は信楽の白濁釉で内面に離れ砂が多量に付着する手水鉢である。20・22は瀬戸・美濃系の陶器で、20は灰釉の碗、22は型押文で緑釉流しの三足盤である。23・24は灰釉の足付盤と塗土の壷で、丹波焼である。

土壙B718（図版383）　遺構は、18世紀末から19世紀初頭のものであるが、ここでは特徴的な遺物のみ報告する。1～3は菊花文散らしの碗で、禁裏注文品と思われる肥前系磁器である。1・2は焼継がある。2の高台内には「W」字状の焼継の際の記号がある。3は小型平碗形のもので、内外面に染付文がみられる。4・5は刻印のある京焼資料である。4は小判形の枠内に「仁清」銘が押されるものである。従来の御室窯の製品にはみられないものであり、釉調も橙色が強い灰釉で、異質である。5は小判枠内「京」銘印の平碗片である。いずれも17世紀後半代のものである。特徴的な遺物のみ図示したが、他の出土遺物は18世紀から19世紀初頭のものである。

土壙B720（図版383）　6は花塩壷の蓋で、型作りで、全面に剥がし材のキラコが付着する。上面に「ほんなんばんやき」の刻印が押されている。従来知られてない刻印であるが、「なんばん」の文字が含まれていることから、深草の奥田四郎左衛門系の花塩壷蓋である可能性が高い[30]。7は高台内に「道八」染付銘がある小杯で、三田産の染付磁器の可能性も否定できないが、ここでは京都産磁器としておく。8・9は京・信楽系の灰釉陶器で、いずれも底部に墨書がある。8は「詰」、9は2文字を認めるが、判読できない。

瓦組土壙B636（図版383）　10～12は土師器・土師質土器である。いずれも小片である。13～16は肥前系磁器、17は産地を特定できない磁器、18～25は瀬戸・美濃系の磁器である。27～30は白化粧の上に、山水文・草花文を描く土瓶類である。31・32は鉄釉で、飛びカンナの行平で、把手に「禄」の陽刻印がある。19世紀中頃の遺物である。

B区のその他　（図版383・384、表73・74）　図版383の33～37は土製品の人形・箱庭道具・ミニチュア類である。図版384の1はイッチン描きの急須である。2は土師器の皿を打ち欠いて作られたおはじき状のもので、両面に「白」の墨書文字がみられる。碁石代わりにしたものであろう。3は楽系の軟質施釉陶器で、蓋置と思われる。暗赤褐色の胎土で、上半に白釉が掛かる。5は肥前系磁器の上絵の紅皿である。十二単を着た女性を黒で縁取り、赤・紫・緑・黄彩で絵付し、余白に赤で「花の色は移りにけりな徒らに我身世にふる□□め□□□に」の小野小町の歌を書く。6～8は京都産の磁器で、6は高台内に「丹山」銘のある染付の小杯である。7・8は「東光山旭亭造」銘のある急須である。10は焼締陶器の急須把手で、「木米」の小判印がある。9は染付の小杯、11は粉彩の小杯で、ともに中国製磁器である。12は黒灰色の緻密な胎土で、鉄釉が厚く掛かる陶器碗である。高台内に「松風」印があるが、産地を特定できない。13は赤褐色の胎土で、鉄釉に灰釉を流す陶器皿である。渦状に削り出した高台内に、「桜井里」の小判印がある[31]。15と16は「仁清」印のある陶器である。16は大振の鉢で、ロクロ成形のあと

口縁を四辺形に成形する。灰白色の均一な胎土で、白濁した釉が厚く掛かり、高台周辺に流れている。19・20は土師質の鉢で、いずれもロクロ成形で、底部をヘラ状のもので切り離している。19は見込底部に丸に「桜」の印がみられる。21は赤褐色の胎土で土師質の蓋である。上面に「楽」印がある。22は瀬戸・美濃系陶器のいわゆる半胴甕である。江戸遺跡での出土例は多いが、京都市域では出土する例は少ない。23はベトナム産長胴瓶の底部である。27は青花の枕である。前後に山水に杣人と釣人を描き、左右には順治通寶・康熙通寶・雍正通寶の3種類の銭貨を描く。底部と内面は無釉である。上部にはクッションを取付ける穴が2箇所あり、「大清□□」の銘がある。側面の片側の下方に窓を開ける。窓上部と中央付近の内面に補強のための

表73　B区のその他土器・陶磁器類（図版383）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法　量　(cm)			胎土	釉薬	生産地	備　考
					口径	器高	底径				
33	土壙B790	18c中	土製品	人形		1.7	2.3(最大)	黄灰白	緑彩		ふくら雀
34	土壙B733	19c代	土製品	面型		1.5	3.7(最大)	赤褐			
35	土壙B729	18c後半	土製品	箱庭道具		3.6	3.2(最大)	赤褐	緑彩		蔵
36	土壙B677	19c代	土製品	人形		7.2	8.1(最大)	赤褐			前後型合せ
37	土壙B677	19c代	土製品	ミニチュア	6.6	7.0	5.5	灰白			涼炉型　墨書文様

表74　B区のその他土器・陶磁器類（図版384）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法　量　(cm)			胎土	釉薬	生産地	備　考
					口径	器高	底径				
1	土壙B691	19c代	軟質施釉	急須	3.8	4.4	4.3	赤褐色	イッチン		
2	あげ土		土製品	碁石		0.6	2.9	黄灰白			両面「白」墨書
3	土壙B827	18c代	軟質施釉			6.0	5.7	暗赤褐	白		蓋置か 楽系
4	土壙B731	時代幅アリ	磁器	合子蓋	7.0	0.9	5.4	灰	緑	中国	華南系「禄」型押し
5	UI南北断割		磁器	紅皿	7.6	3.3	2.6	白	上絵	肥前系	赤·緑·紫·黄彩「花の色‥」和歌アリ
6	RJ·RK掘下げ		磁器	小杯	6.5	2.6	2.0	白	染付	京都	高台内「丹山」銘
7	QJ掘下げ		磁器	急須蓋		2.5	5.3(最大)	灰白	染付	京都	No.8の蓋
8	QJ掘下げ		磁器	急須	5.7(推定)	8.0(残)		灰白	染付	京都	「東光山旭亭造」銘 石榴文
9	土壙B670	19c代	磁器	小杯	5.6	3.9	2.6	白	染付	中国	高台内「見浦清月」銘
10	土壙B670	19c代	陶器	急須把手				灰		京都	「木米」小判印
11	RG掘下げ		磁器	小杯	7.0	3.7	4.6	白	染付+上絵	中国	青·赤·黄·緑彩　口紅
12	QG掘下げ		陶器	碗	13.0	6.3	6.7	黒灰	鉄		高台内「松風」印
13	QH·QI掘下げ		陶器	皿	10.0	2.0	4.6	赤褐色	鉄+灰釉流し	京·信楽系	高台内小判印「桜井里」印
14	QI·RI掘下げ		陶器	壷	5.0(推定)	14.8	7.0	灰白	鉄	信楽	あられ壷
15	土壙B703	19c中	陶器	碗			4.2	淡黄灰	灰	京都	底部「仁清」銘
16	土壙B703	19c中	陶器	鉢	21.6(推定)	9.5	11.6(推定)	灰白	白濁	京都	底部「仁清」銘
17	井戸B620	17c前半	磁器	皿	13.5	2.9	4.5	暗灰	染付	肥前系	初期伊万里
18	土壙B771	18c後半	磁器	皿	21.2(推定)	2.9	8.7	白	染付	肥前系	
19	土壙B876	18c後半	土師質	鉢	5.0	3.3	4.7	橙灰			内面底部丸に「桜」刻印 ロクロ成形
20	土壙B876	18c後半	土師質	花塩壷	8.3	3.4	6.6	灰橙		在地	ロクロ成形
21	土壙B876	18c後半	土師質	蓋		1.6	3.6(最大)	赤褐			「楽」印　無釉
22	土壙B876	18c後半	陶器	甕	14.5	15.2	10.3	橙灰	鉄	瀬戸·美濃系	半胴甕
23	土壙B878	17c前半	陶器	瓶		12.3(残)	9.2(推定)	黒+茶		ベトナム	交胎　長胴瓶
24	土壙B870	18c後半	軟質施釉	合子蓋	4.0	1.9		橙灰	白釉か		楽系
25	土壙B870	18c後半	陶器	土瓶	7.6	9.5	9.0	橙灰	白+銅緑	京都	底部「明山」印
26	瓦溜B683	18c代	陶器	鉢	20.2	11.1	12.5	暗灰	灰釉流し	丹波	底部二次穿孔　ロクロ目目立つ
27	土壙B689	18c後半	磁器	陶枕		11.5	22.6(最大)	白	青花	中国	底部無釉

裏打の角柱が入っている。ここに引出しが存在した可能性がある。

墨書土師器（図版550・551）　B区から、江戸時代中・後期の遺構を中心に墨書土師器が出土した。肉眼で判読できるものは各遺構の出土遺物として報告したが、それ以外にも赤外線撮

影を用いて判読できた資料もある[32]。ここではそれらの中で重要なものを、一括して報告しておく。

図版550の１は土壙Ｂ725出土の土師器皿である。外面（ｂ）は戯画風のものであるが、内面（ａ）は「持/四位少将殿」である。出土遺構の年代は、17世紀後半で、宅地２の富小路家敷地内である。富小路家で、該当年代頃に正四位にあったのは、富小路頼直（1651年叙位）・富小路永貞（1668年叙位）の２人であり、頼直は明暦２年（1656）従三位に進む事から[33]、永貞を指す可能性が高い。２・３は土壙Ｂ674出土のもので、遺構年代は18世紀前半である。図版550の４～６・図版551の１～５は土壙Ｂ721からの出土である。遺構年代は18世紀末から19世紀初頭である。４は文意からａからｂと続く願文とみられる。図版543の２は仮名交り文であり、和歌であった可能性がある。６は土壙Ｂ680出土で、19世紀前半の遺構である。「宮内」の習字であろう。７は土壙Ｂ687出土で、19世紀前半の遺構である。内外面に鉢植の盆栽の絵が描かれている。

（３）Ｃ区

溝Ｈ270（図版385・386）　土師器皿類（図版385の22～28）には丸底の中型皿（22・23）、圏線のある大型皿（24～27）に加えて特大型皿（28）がある。XI期古段階に属する。特大型皿は直径17cmあり、やや白い土を使う。土師質土器には小型壷（29・30）がある。瓦質土器には大型のドーム状の火入の蓋（31）がある。磁器には中国漳州窯系の青花の碗（33）と皿（32）がある。33の碗はやや小振で見込中央が盛り上がる。いずれも高台には砂が多く付着する。図版386は国産の陶器で肥前系（１～３・10～14）と瀬戸・美濃系（４～９・16）がある。肥前系の占める割合がやや多いが、碗に限れば瀬戸・美濃系が多い。瀬戸・美濃系には天目碗（４～７）、丸碗（８）がある。８の碗は鉄泥の上に灰釉を厚く掛け流す。肥前系は端反の刷毛目碗（１）、鉄釉の丸碗（２）、天目碗（３）である。９は全体に長石釉を厚く掛けた小皿である。底部は糸切りである。11は灰釉の皿で見込に砂目が残る。高台部は割高台となる。12は刷毛目の二彩唐津大皿である。16の耳付花入はいわゆる美濃伊賀で、口縁部下の膨らんだところに釘穴がある。焼締陶器には信楽産の擂鉢（15）がある。17世紀前半である。

溝Ｃ918石組（図版385）　土師質土器には小型壷（１）、土鈴（２）がある。２の土鈴は上部が花弁状に細工されている。磁器には中国漳州窯系の青花碗（３・４）がある。３の高台には砂の付着が多い。４の高台は無釉である。国産の陶器には肥前系（６～８）と瀬戸・美濃系（５・９）がある。７・８はいわゆる絵唐津の向付と皿、６は灰釉の丸碗である。５は長石釉の筒形碗で、碁笥底の中にも釉が掛かる。９はいわゆる美濃伊賀の灰釉系の壷である。体部下半をヘラケズリする。17世紀前半である。

溝Ｃ918埋土（図版385）　土師器皿類（10～18）には丸底の中型皿（10・11）、圏線の付く大型皿（12～18）がある。XI期古段階に属する。磁器には中国景徳鎮窯系の青花碗（20）、皿（19）がある。国産の陶器には瀬戸・美濃系の長石釉の碗（21）がある。17世紀前半である。

土壙Ｃ628（図版387～389）　土師器皿類には小型皿（図版387の１～９）、丸底の中型皿

(10～13)、圏線のある大型皿（14～29）に加えて特大型皿（30）がある。Ⅷ期中段階に属する。特大型皿は直径14cmを越え、大型皿に比べるとやや器壁が厚い。図版387の31～47・図版388の1～12は肥前系磁器である。図版387の34・35は波佐見系である。37・38は青磁染付である。40は輪花皿で蛇ノ目凹形の高台がつく。43は見込に蛇ノ目釉剥ぎ、高台無釉の皿である。図版388の1は中型の皿で、高台内にハリ支えがある。3は丁寧な作りの皿で、内面に菊花文と亀甲繋ぎ文を組合わせる。外面には梅花繋ぎ文を配する。高台内に圏線・銘を入れない。禁裏からの注文品の可能性がある。5～8は金彩赤絵碗類、10～12は白磁で、皿類と瓶である。本遺構出土の肥前系磁器には、見込の五弁花は手描きのものとコンニャク文のものがある。また、高台内には「大明製」、「大明成化年製」や、角内に「福」の文字を書くものがほとんどを占める。施釉陶器は京・信楽系がほとんどを占め丹波産、瀬戸・美濃系が少量含まれる。図版388の13～19は京・信楽系の丸碗である。錆釉や呉須で絵付をし、釉を掛けるものが多い。赤・青・緑彩で上絵付するものもある。全体的に高台は小さい。15・19は京・信楽系の灰釉掛の碗で、19は高台内にも施釉する。20・25の高台内には、それぞれ「洛東山」、「錦光山」の刻印がある。26は京・信楽系のいわゆる煎じ碗で、器高がやや低い。碗の見込には目痕の残るものが多い。図版389の1～3は京・信楽系の平碗で見込に大きく絵を描く。錆絵や赤と緑の上絵に金彩を施すものがある。1は見込に目痕が残る。3は上絵付は消失している。11は信楽産のいわゆる腰白茶壷である。13は京・信楽系の鉄釉の土瓶で、体部上半に窪みをつける。京・信楽系の土鍋や燗鍋などの日用雑器は鉄釉掛のものが多い。16は丹波産の鉄釉掛の鉢で、内面には鉄泥を掛ける。図版388の27・32は軟質施釉陶器である。27は二彩の筒形碗で器壁が薄い。黄釉の上に緑釉を三方から掛け流す。32は緑釉の香炉である。図版389の9は瀬戸・美濃系の耳付水指で底部に穿孔があり、植木鉢に転用したとみられる。17は堺・明石系の擂鉢である。5の土瓶蓋の裏には「明和元年申酉ノ十二月小林氏」の墨書があり、18世紀中頃の紀年銘資料となる。

C区のその他（図版390・391、表75・76）　図版390の8～10は肥前鍋島の磁器である。8は薄瑠璃釉の地に梅唐草文を描く小鉢である。9は八角形で兜文の小鉢である。10は木盃形の皿で、見込に流水菊花文、裏模様は木蓮折枝文を配する。高台の櫛文様は縁取りをし、丁寧に描く。12～18は京焼とみられる。12は上絵付の碗である。内面にも白化粧をし、高台内にも施釉する。13は上絵付の碗である。口縁端部は内湾する。12・13ともに高台畳付に「錦光山」の刻印がある。14は筒形の向付で、内外面に白化粧し錆絵で菖蒲文を描く。碁笥底の中に錆絵で銘を書く。「乾山」であろう。15は建水とみられる。側面に錆絵と染付で菊花文を配する。平底の底部には「寶山」の刻印がある。17は皿で、見込には白化粧に錆釉と白釉で葦船を描く。碁笥底の中には「染殿」の刻印がある。16は灰釉の灯明受皿で、体部下半には六角内に「清」の刻印がある。精良な土を使う。18は三島手写しの碗とみられる。内外面に規則的で丁寧な象眼彫りを施し、見込には菊花文がある。径が小さめの高台が付く。図版391の2～17は軟質施釉陶器である。2の碗は、白化粧の上に草花文を絵付する。色は消失している。器壁が薄く、高台も小さい。高台内には「珉山」の上絵による銘がある[34]。3は二彩の碗で器壁が薄い。黄釉の上に

緑釉を四方から掛け流す。4は赤い胎土に透明釉を掛ける楽系の碗で、釉は銀化する。底部が厚く、口縁部は内湾する。5は筒形の碗で、黒釉の上に白を塗り、緑などで絵を描く。6は碗で、白っぽい胎土で、赤色顔料を塗り更にその上に透明釉を掛ける。透明釉は銀化する。高台内は渦状に削り込む。7は緑釉の碗で、高台内に「緑」の刻印がある。8は高台の高い碗である。赤い土を使い、鉛釉を掛ける。高台内も施釉する。口縁部の数箇所にいわゆる山の変化を持たせる。釉が銀化している。9は香炉である。ロクロ目を残した体部に黄釉を掛け、緑釉を流し掛ける。10は向付で、四隅をつまみ上げる。白釉の上から緑釉で模様を描く。緑釉は銀化している。高台畳付にも釉が掛かる。11は土師皿を写したもので、ロクロ引きで成形し全体に柿釉を掛ける。XII期中段階頃の土師器皿をモデルとする。12は火入もしくは香炉の底部で、赤い胎土で全体に白化粧を施す。側面には緑釉が流し掛けられている。13は全体に緑釉を掛ける蓋である。14は鉛釉系の盤とみられる。碁笥底内には「樂」の刻印がある。釉調は二次的被熱により不明である。15は合子身である。白い胎土であるが全体に透明釉を掛ける。16は灯火具でいわゆる秉燭である。褐色の胎土に赤色顔料を塗り、上に透明釉を掛ける。口部の下方に「樂」の刻印を押す。碁笥底風に作る。17は透明釉に緑釉を流し掛けた小壷である。18は絞胎に透明釉を掛けた碗の底部とみられる。高台内にも釉が掛かり、四角内に「賤」の刻印がある[35]。19は褐釉陶器の壷で、いわゆる粽壷である[36]。胎土は暗紫色系でねっとりした印象である。図版390の11と図版391の1は漳州窯系の青花大皿である。直径約47cmあり、口径が最も大きいタイプである。見込の絵付も類似している。高台周辺には砂が多く付着する。

この他に図示していないが、注目すべき遺物に華南三彩の壷と盤がある。壷は底部付近に蓮弁が貼付けられるものである。盤は三彩盤の体部と思われる。

表75　C区のその他土器・陶磁器類（図版390）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
1	埋納土壙C342	18c後半	土師器	皿	9.8	1.8		浅黄橙		在地	XII期中段階
2	埋納土壙C342	18c後半	土師器	皿	9.9	1.6		浅黄橙		在地	XII期中段階
3	埋納土壙C342	18c後半	土師器	皿	9.9	1.8		浅黄橙		在地	XII期中段階
4	埋納土壙C342	18c後半	土師質	胞衣壷蓋	13.5	2.0		橙		在地	
5	埋納土壙C342	18c後半	土師質	胞衣壷	10.7	8.3	12.6	橙		在地	
6	埋納土壙C494	18c後半	土師質	胞衣壷蓋	14.1	1.9		鈍い橙		在地	
7	埋納土壙C494	18c後半	土師質	胞衣壷	11.6	7.8	12.6	鈍い橙		在地	
8	土壙C950	18c前半	磁器	鉢	8.2(推)	6.0	3.5	白	瑠璃釉染付	肥前系	梅唐草文　鍋島
9	土壙C641	18c前半	磁器	鉢	7.7	5.9	2.9	白	染付	肥前系	兜文　八角　鍋島
10	土壙C641	18c前半	磁器	皿	19.6	5.4	10.7	白	染付	肥前系	櫛高台　流水菊花文　鍋島
11	土壙C972	17c初	磁器	大皿	46.8	10.3	23.0	灰白	青花	中国	漳州窯系
12	土壙C608	18c前半	陶器	碗	10.0	6.5	3.7	浅黄橙	錆絵染付	京都	高台内釉　畳付「錦光山」印
13	溝C614	18c前半	陶器	碗	10.1	7.9	4.7	灰白	錆絵染付	京都	畳付「錦光山」印
14	土壙C648	18c前半	陶器	向付	7.8	6.1	5.9	鈍い橙	錆絵染付	京都	菖蒲文　高台内「□山」乾山か
15	土壙C1B	18c前半	陶器	建水	13.3	8.3	9.9	灰白	錆絵染付	京都	菊花文　底部「寶山」印
16	C区掘下げ		陶器	灯明受皿	10.9	2.1	4.9	灰	灰	京都	体部下半　六角「清」印
17	土壙C601	18c前半	陶器	皿	14.1	3.0	7.0	灰白	上絵	京都	碁笥底内「染殿」印
18	C区路面掘下げ		陶器	平碗	12.2	4.7	4.4	灰	透明	京都	象嵌　三島手写し

表76　C区のその他土器・陶磁器類（図版391）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法　量　(cm)			胎土	釉薬	生産地	備　考
					口径	器高	底径				
1	土壙C972	17c初	磁器	大皿	47.2	9.8	22.7	灰白	青花	中国	漳州窯系
2	土壙C548	18c前半	軟質施釉	碗	7.4	5.3	3.8	鈍い橙	上絵	香川	白化粧　高台内「珉山」書き銘
3	土壙C626	18c前半	軟質施釉	碗	8.1	5.7	3.5	浅黄橙	黄＋緑流し	京都	
4	C区路面掘下げ		軟質施釉	碗	9.4	6.5	4.4	橙	透明	京都	
5	土壙C357	18c前半	軟質施釉	碗	9.3			灰白	黒	京都	白・緑彩
6	土壙C489	17c後半	軟質施釉	碗			4.7	浅黄橙	透明	京都	赤色顔料　高台付近無釉
7	C区掘下げ		軟質施釉	碗	11.6	7.2	5.3	浅黄橙	緑	京都	高台内「緑」印
8	土壙C1308	17c前半	軟質施釉	碗	12.2(推)	8.0(推)	5.3	橙	黒	京都	黒釉掛分け　口縁部数箇所山あり
9	C区掘下げ		軟質施釉	香炉	10.2(最大)	6.5	7.6	灰白	黄＋緑流し	京都	体部にロクロ目
10	土壙C972	17c初	陶器	皿	15.0(最大)	2.8	4.3	鈍い橙	白＋緑	京都	四隅つまみ上げ　緑彩
11	C区掘下げ		軟質施釉	灯明皿	11.0	2.1		浅黄橙	柿	京都	土師器皿を写す　XII期中段階
12	溝C614	18c前半	軟質施釉	火入	9.9			赤	透明	京都	白化粧　側面に緑彩縞模様
13	溝C10下層	18c前半	軟質施釉	蓋	4.8	1.6		橙	透明	京都	
14	溝C495	19c前半	軟質施釉	盤	16.0	1.3	8.5	灰白	透明	京都	碁笥底内「樂」印
15	C区路面掘下げ		軟質施釉	合子	5.9	1.9	3.6	灰白	透明	京都	
16	C区掘下げ		軟質施釉	灯火具	9.8(最大)	5.0(最大)	5.1	鈍い橙	透明	京都	赤色顔料　口部「樂」印
17	C区路面掘下げ		軟質施釉	小壷	6.4(最大)		3.9	浅黄橙	透明	京都	緑流し掛け
18	C区掘下げ		陶器	碗			4.8	浅黄橙	透明		高台内「賤」印　絞胎
19	C区掘下げ		陶器	壷	12.9(最大)	12.3(最大)	3.9	褐灰	褐	中国	粽壷

（4）D区

井戸D335（図版392・393）　図版392の1～27は土師器で、1～4は小型皿、5～8は丸底の中型皿、9～27は圏線のある大型皿である。XI期新段階古相に属する。28～33は土師質土器で、28・29は小型壷で、29は口縁部の下に孔が3箇所開けられている。30・31は口の狭い焼塩壷で撫肩と肩が張るものがある。32は焼塩壷で刻印がない。35は鍋でやや浅い。磁器はほとんどが中国産で占められ、肥前系がわずかである。中国産には景徳鎮窯の青花（図版392の34～38・40～42・図版393の1）、漳州窯系の青花（図版392の39・43）がある。施釉陶器は肥前系と瀬戸・美濃系がほぼ同量である。図版393の2・3・6は肥前系である。2・3とも灰釉を施した皿、6は鉄釉を施した壷である。瀬戸・美濃系は、4の鉄釉を施した天目碗、5の白釉を施した蓋である。焼締陶器は擂鉢が主で、大型の壷、甕は出土していない。7・8は擂鉢でいずれも外面底部には糸切り痕、胎土は7は暗灰色、8は茶褐色で粗い。産地は不明だが、東海産の可能性がある。17世紀中頃である。

溝H270（図版393）　9は中国産の漳州窯系青花碗である。10～12は肥前系の陶器で、10は灰釉を施した碗、12は鉄絵の灯火具、11は鉄釉と灰釉の掛分けの皿である。13は瀬戸・美濃系の志野平鉢である。17世紀前半である。

穴蔵D200（図版394）　1～11は土師器で、1～3は小型皿、4・5は丸底の中型皿、6～11は圏線のある大型皿である。XIII期新段階に属する。12～16は土師質土器で12・13は小型壷である。14～16は焼塩壷の蓋である。磁器は肥前系（17・19～30・32・33）が大半を占める。27～29は白磁で27は内面型打ちの端反杯である。28は端反杯で、同様のものが20個体以上出土した。30は青磁碗で高台無釉である。33は辰砂の小壷である。17世紀中頃から後半である。

土壙D252（図版394）　36は土師器の丸底の中型皿、34・35・37・38は圏線のある大型皿で

ある。XI期新段階に属する。39・40は施釉陶器の京焼碗である。39は体部はやや内湾し、口縁部はほぼ直立する。胎土は黄白色で精良である。体部外面に錆絵で山水楼閣を描く。高台内に刻印があるが解読不明である。40は高台内に角印で「國」の刻印がある。17世紀中頃である。

土壙Ｄ451（図版395～397）　図版395の１～12は土師器皿で、１～４は丸底の中型皿、５～12は圏線のある大型皿である。XI期新段階である。13～21は土師質土器で、13・14は小型壷、19は土鈴、20は蓋、15～18は焼塩壷である。21～24は瓦質土器で、21は瓦燈である。22は半球形の形態で、口縁部はやや開き気味に垂下する。端部は水平面を持つ。外面はナデ後ミガキが施され、内面はナデである。23は天井部を扁平気味に推定復元した。口縁部は直線的に垂下する。外面はナデ後密なミガキで、内面はナデである。24は体部は内傾して立ち上がり、受部はやや傾斜し、立ち上がり部は内傾する。体部中位上に透かし孔がある。22～24は火入の蓋と身と考えられる。磁器は大半が肥前系（図版395の25～28・31～41、図版366の1～３・５～８、図版397の1・２）が占める。器形では青磁鉢が多い。図版395の25はミニチュアの杯、26は赤絵で網目文の小杯、28は白磁杯、37・38は白磁碗、39・40は青磁碗、図版396の７・８と図版397の１は青磁鉢である。図版397の２は青磁仏飯器で内面は白磁である。図版395の29・30と図版396の４は景徳鎮窯系の小杯と皿である。施釉陶器は、瀬戸・美濃系と肥前系がほぼ同量である。瀬戸・美濃系（図版397の７～10・15）で、７～10は鉄釉を施した天目碗、15は型紙摺の段重ねである。肥前系（図版397の３～６・12）で、３は鉄釉を施した碗、４～６は灰釉を施した呉器手碗、12は内面口縁部に鉄釉を施した後掻き落しで綾杉文を施した皿である。11は灰褐色の鉄釉を施した天目碗で、胎土は暗灰色で白色土が混じるが、精良である。貼付の輪高台と思われる。高台はやや高く、腰は立ち気味に開き、口縁部の立上がりは短く、端面は丸みを持って反る。肥前系や瀬戸・美濃系に類例のない胎土や口縁部の形態から京焼と考えた。焼締陶器の擂鉢は丹波産（13・14）が多くを占める。17世紀中頃から後半である。

Ｄ区のその他（図版398、表77）　１は圏線付き土師器皿に上絵付したもので、口縁部内面の縁帯には三角文が、見込には藤文が描かれる。XII期新段階の新相である。２は土師質土器の壷でいわゆる胞衣壷である。体部は屈曲し、口縁部は内傾する。口縁部は玉縁である。３は肥前系の染付碗で高台内に「文久三亥年改」（1863年）銘がある。４は高台内に「京」の刻印がある陶器碗で上半部が欠損しているため全体像は不明であるが、錆絵染付の窓絵をもち、内面は白化粧を施す。５・６は同遺構から出土した施釉陶器で、５は碗の口縁部で、外面に白化粧を施し、そこに錆絵染付で梅樹文を描く。６は口縁部と底部の破片で、高台脇に「乾山」の錆絵の銘がある。７は施釉陶器の碗で、白化粧し、透明釉を施す。貫入が見られる。高台内に「寶山」の刻印がある。８は施釉陶器の碗で、白化粧を施し、錆絵で草花文を描く。高台内に「岩倉」の刻印がある。９は施釉陶器の六角隅入の皿で、堅くしまった灰白色の胎土で、長石釉を施す。内面にはきのこやつくしなどの上絵と異体字銘を施す。10は手捏ね成形で焼締の急須で、体部外面に釘彫りで和歌が書かれる。蓮月焼と考えられる[37]。11は軟質施釉陶器の杯で赤色顔料を塗り、透明釉を施釉する。12は軟質施釉陶器の筒碗で緑釉を流し掛けする。13はロクロ成形の灯

明皿で透明釉を全面に施釉する。14は型打ちした皿で内面中央に「寿」字を押し、左側には墨描きで若松文が施される。底部は碁笥底風で外面は飛びカンナ風の放射文が型押しされる。口縁部に煤が付着しており、灯明皿に転用されている。15は軟質施釉陶器の型打ちの菊皿である。透明釉が剥落している。16は軟質施釉陶器の変形皿で、口縁部の数箇所を指で押さえ輪花状とする。白化粧を施して透明釉に緑釉を流し掛ける。17は軟質施釉陶器の蓋で、上面に牡丹文が型打ちされ、緑・黄彩が施される。板つまみが付く。18は軟質施釉陶器の蓋で内外面とも白化粧を施した上に、錆絵がある。透明釉は剥落する。19は軟質施釉陶器の皿で白化粧を施し、上から施釉されるが釉調は不明である。20は軟質施釉陶器の蓋で赤味の強い胎土に薄く透明釉を掛ける。上部中央に「楽」の可能性がある刻印がある。21は軟質施釉陶器の鍋で底部脇に小さな粘土塊状の足が三方に付く。体部側面に煤痕が残る。22は軟質施釉陶器の隅丸四方皿で四足の足付きで、全面に白化粧を施し、錆絵痕跡が認められるが文様は不明である。23は軟質施釉陶器の鉢で体部中位上に突線を一条巡らす。内外面には緑釉が施釉され、外面の釉下に草花文が認められる。24は軟質施釉陶器の皿で、高台は碁笥底で体部は短い。赤色の化粧を施して、薄い透明釉を施釉したものである。高台内には「楽」の刻印がある。25は軟質施釉陶器の盤で、不定形の粘土板の底部に帯状の体部を貼付けて、透明釉を掛ける。透明釉は銀化する。26・27はオランダ製の染付陶器で胎土は白色で、粗く非常に軽い。26はシノワズリー様式の碗、27は羊と婦人を描いたペトランプ様式である[38)]。

表77　D区のその他土器・陶磁器類（図版398）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法　量　(cm)			胎土	釉薬	生産地	備　考
					口径	器高	底径				
1	D区堀下げ		土師器	土師皿	9.6	1.3		灰白	上絵	京都	内面に色絵付　Ⅷ期新段階新相
2	埋納土壙D171	19c前半	土師器	胞衣壺	11.6	6.3	13.3	浅黄橙		在地	
3	D区堀下げ		磁器	碗	10.9	5.3	4.3	灰白	染付	肥前	高台内「文久三亥年改」
4	土壙D183	19c前半	陶器	碗	8.5(推)	6.0(推)	4.1	浅黄橙	錆絵染付	京都	内面白化粧　高台内「京」印
5	土壙D446	18c前半	陶器	碗	11.5(推)	5.9(推)	5.4(推)	灰白	錆絵染付	京都	口縁部のみ　乾山か
6	土壙D446	18c前半	陶器	碗	10.5	6.1	5.0	灰白	錆絵	京都	高台付近「乾山」底部のみ
7	土壙D25B	18c前半	陶器	丸碗	10.8	6.2	3.7	灰白	透明	京都	白化粧 高台内「寶山」印 貫入多い
8	土壙D503	17c後半	陶器	丸碗	10.5	5.9	4.0	灰白	錆絵	京都	側面草花文　高台内「岩倉」印
9	土壙D253	18c前半	陶器	皿	18.9	2.5	13.2	灰白	長石＋上絵	京都	六角皿 書き印 高台釉 3箇所目痕
10	土壙D170	19c前半	焼締	急須	9.9	6.8(残)		灰黄		京都	釘書き和歌　蓮月
11	土壙D158下層	19c前半	軟質施釉	杯	5.8	3.1	3.6	灰白	透明	京都	赤色顔料塗り
12	土壙D130	18c前半	陶器	碗	9.8	8.0	5.4	橙	上絵	京都	
13	土壙D490	18c前半	軟質施釉	燈明皿	11.5	2.3		灰白	透明	京都	ロクロ成形
14	土壙D130	18c前半	土師質	九度皿	11.7	1.7		白		京都	見込型打ち「寿」　墨描若松
15	土壙D95	18c前半	軟質施釉	皿	9.9(推)	2.0(推)		鈍い橙	透明	京都	釉剥落　菊皿
16	土壙D170	19c前半	軟質施釉	輪花皿	22.8(最大)	5.8(推)	10.7	鈍い橙	透明＋緑流し	京都	白化粧
17	溝D 9	19c前半	軟質施釉	蓋	15.2(最大)	5.2(最大)		灰白	上絵	京都	黄・緑彩　板つまみ
18	溝D 9	19c前半	軟質施釉	蓋	18.2	5.0		鈍い橙	錆絵	京都	白化粧
19	D区堀下げ		軟質施釉	蓋	17.3	3.5		浅黄橙	透明	京都	白化粧
20	土壙D130	18c前半	軟質施釉	合子蓋	6.8(最大)	10.8	4.7	明赤褐	透明	京都	白化粧　碁笥底内上面「樂」？印
21	D区堀下げ		軟質施釉	鍋	15.3	5.8	6.7(推)	橙	透明	京都	白化粧 底部三方に足付き 外面に煤付着
22	溝D158	19c前半	軟質施釉	皿	18.0	2.7	9.4(推)	灰白	錆絵	京都	白化粧
23	D区路面堀下げ		軟質施釉	鉢	18.8	5.8	10.9	浅黄橙	透明	京都	緑釉下絵あり
24	土壙D179	19c前半	軟質施釉	皿	16.2	1.8	9.9	鈍い橙	透明	京都	赤彩　碁笥底内「樂」印
25	土壙D143B	19c前半	軟質施釉	水盤				鈍い橙	透明	京都	
26	溝D11	19c中	陶器	碗				白	転写染付	オランダ	シノワズリー
27	溝D11	19c中	陶器	碗				白	転写染付	オランダ	ペトランプ

（５）Ｅ区

土壙Ｅ310（図版399・400）　図版399の１～12は土師器の皿である。XI期からXII期にかけてのものである。14・15の焼塩壷はいわゆる輪積み成形で、二重枠の「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘である。16は土師質土器の三足火入で、深草産と思われる。17～29は肥前系の磁器である。17～21は染付碗で、高台断面三角形状のもので占められる。「大明」、「大明成化年製」などの高台銘款が伴なう。23は型押し成形の合子の蓋で、外面は鉄釉と染付の掛分けで、内面は透明釉が掛かる。24の皿は内面に「大明成化年製」の染付文字のある小皿である。25は糸切成形で、桐葉形に作り、蝶の染付文のある皿である。26は口径31.6cmで山水岩花文の大皿である。裏面は３点のハリ支えがあり、二重角内に変形字が描かれる。29は赤・薄青・薄緑の上絵を金彩で縁取る、いわゆる仁清手の碗である。30は蛇ノ目釉剥ぎした見込を青彩で隠し、暗く沈んだ色調の黄・紫・薄青彩で松竹梅文を上絵し、黒で縁取る皿である。乳白色の白磁生地には高台畳付を除いて全面施釉され、細かい貫入が入る。図版400は陶器と瓦質土器である。１～３は京焼の碗である。１は白濁釉の碗で、高台内に繭型の「仁清」の刻印がある。底部のみの出土で全体形はわからず、上絵の有無もわからない。２はガッシリとした高台を持つ大振の碗で、薄い青と緑で草花文を描き、金彩で縁取りをする。また、金彩で松葉を描く。釉薬の掛からない高台周辺は、淡橙色を呈している。高台内には、小円圏を削り出し「清」印を押す。３は蟹の錆絵を描き口縁がわずかに外反する平碗で、やや白濁した透明釉が薄く掛けられている。体部はロクロ目が目立ち、やや粗い作りである。小さい目痕が３箇所残り、高台内には「寶」の小判印が押される。４～６は肥前系の陶器で、４は鉄釉の碗、５は京焼風陶器の碗である。５は「清水」の印が高台中央に押されているが、錆絵部分は残存していない。６は灰釉碗で高台周辺は無釉である。７・８は瀬戸・美濃系の陶器である。７は御深井釉に近い灰釉の皿である。８は鉄釉の天目碗である。９は備前の筒形鉢で、伏せ焼されたものらしく、底部外面に灰が被る。底中央に三角枠に「大」の刻印がある。10・11は砂粒の多い粗い胎土を持つ信楽産の擂鉢である。12は体部中程まで灰釉を流し掛けた丹波産の大型の壷である。13は口径が約70cmの瓦質土器の甕で、便所甕に使用されたものである。大和産のものである。

土壙Ｅ235（図版401～405）　図版401の１～33は土師器の皿である。XII期古段階である。19・22など、大型皿の内面にみられる圏線がより明確なものがある。34～55は焼塩壷で、大型の堺系の焼塩壷にみられる刻印は二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」である。56～62は土師質土器である。58・59は蓋付壷で、胞衣壷に似るが、大型であり火消壷のような他の用途が想定される。62は板状で台形型の細い三足が付く火入である。63・64は瓦質の小型の火入類である。単独で使用されず、行火類の火入と思われる。図版402・403は磁器である。図版403の10・34は中国製のもので、34は内面型押しで、貼付高台の白磁皿である。その他の磁器は肥前系である。図版402は、染付碗である。10・11の高台無釉の碗がある。高台銘款は「宣徳年製」、「青明年製」、「大明」などが多いが、19の「芭蕉」は類例をみない。内面文様のない碗も多いが、文様があるものは二重圏線に草花文が主流である。図版403の１～８は皿で、１～３は高台径の小さい皿で

ある。高台径の広い皿は、ハリ支えのないものと、あるものが同量くらいである。14・15の色絵碗は黄・紫・青・黒彩で、垣根に菊花を描く。16～27は白磁である。19・20は口紅のあるもので、17世紀末以降の様相で混入品の可能性がある。28～33は青磁で、28は高台無釉の碗である。29・30は内面を蛇ノ目釉剥ぎにした皿で、高台部は無釉である。31・32は口縁端部に平坦面を持つ皿で、高台周辺は同じく無釉である。図版404は陶器類で、肥前系のものが多い。1～3は灰釉や鉄釉の碗類、5～7は灰釉の砂目の皿である。10・11は青緑釉の蓋付壷で、内面と外面下部は鉄釉である。8は外面を鉄釉で波状に塗る火入類である。11は灰釉と鉄釉の掛分けの鉢で、福岡産と思われる。12～15は盤類で、12・14は内面に白色土の5箇所の目痕が残る。13は刷毛目で口縁内外面に緑釉を掛けるもので、内面は砂目痕が残る。15は口径35cmを超える大型のもので、白濁釉を厚く掛け、目痕はなく高台周辺は無釉である。16は灰釉の香炉である。4・17は瀬戸・美濃系の鉄釉の碗、17は天目の碗である。20は備前の緋襷の壷、21は外面にロクロ目が残る信楽の鉄釉広口壷である。18・19は京焼の平碗で、ハの字に開く体部と、畳付の幅が広いガッシリとした高台部を持つ。18は釉下に染付で、金・浅黄の上絵をする碗である。高台内に異体字の小判印がある。19は錆絵染付であるが、高台銘款などは不明である。図版405は信楽の擂鉢で、内面底部の摺目がW字状・斜格子・放射状と様々である。底部の立上がり部が直立的で、底部からそのままハの字に開くものに比べて、新しい様相である。17世紀後半である。

土壙E302（図版406・407）　図版406の1～7は土師器の皿で、XII期古段階のものである。8は二重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘の堺系焼塩壷である。9～25は肥前系磁器である。染付碗は高台断面三角形で「大明年製」、「宣徳年製」など高台銘款を伴なうものが多い。16はハリ支えがなく、底部中央が垂れ下がる皿である。高台内に一行書きの「太明成化年製」銘がある。18は口径38.4cm、器高9cmの大皿である。23は上絵の碗である。上絵はほとんど剥落して残らないが、柴垣に草花文である。24・25は青磁で、24は見込に蛇ノ目釉剥ぎがある皿である。25は底部内面無釉の三足鉢である。26は中国漳州窯系のいわゆる餅花手の盤である。白泥イッチンと錆絵で双龍文と草花文を描き、藍釉が掛かる[39]。図版407の1～5は京焼の碗で、いずれも底部に刻印がある。1は錆絵がわずかに残る碗で「仁清」印である。2は大振の碗で「藤」の小判印がある。残存部に錆絵、上絵などの痕跡はみられない。3は赤・青・緑・紫彩で金彩の輪郭線の上絵があるガッシリとした高台で大振の碗である。放射状のケズリ痕を残した高台内に「清水」印がある。4は金彩の草花文碗で、渦状のケズリ痕の高台内に「清」印がある。5は錆絵に、赤・薄青・金彩の上絵平碗で、「清閑寺」の小判印がある。6は肥前系の京焼風陶器で、錆絵の山水楼閣文の碗である。「清水」の小判印が底部にあるが、従来知られている印とは異なり類例がない。7は白刷毛目、緑釉の肥前系の鉢である。8は底部の斜格子の摺目とロクロ目に特徴のある信楽擂鉢である。17世紀後半の遺物である。

竈E140（図版407）　9～16は土師器の皿で、XII期からXIII期にかけてのものである。17は青緑釉の皿で、肥前系のものである。18は二次被熱で、釉調は不明であるが、京焼系の鉢であ

る。底部に「十八□」の印がある。19は肥前系の鉄釉の壷である。18世紀前半である。

竈Ｅ185（図版407）　20～25は土師器の皿で、Ⅻ期のものである。26は土師質土器で、中央部に穴が開く。香炉の蓋である。

穴蔵Ｅ355（図版407）　27～29は土師器の皿で、ⅪからⅫ期にかけてのものである。30・31は肥前系の磁器である。32は華南系の瑠璃釉小皿で、底部外面は無釉である。33は胎土中に石英粒が目立つ信楽の鉄釉四耳壷で、二次被熱している。34は瀬戸・美濃系の鬢水入で、御深井釉の型紙摺であるが、二次被熱のため絵はわからない。35は備前の香炉で、外面は鉄釉で灰が被る。底部に扇型の印があるが、判読できない。

土壙Ｅ211（図版408～412）　図版408の１～52は土師器である。中型皿に底部を窪ますものが多く含まれる。Ⅻ期新段階のものである。53～67・69は土師質土器で、54・55はロクロ成形で灰白色の胎土をもつ鉢である。63は堺系の花塩壷の蓋で、表面に「イツミ/花焼塩/ツタ」の印がある。69は円筒形の三足が付く風炉で、体部外面は平滑に磨かれている。68は瓦質土器の火入である。72はロクロ成形で、黄色に近い緑釉が掛かる軟質施釉陶器の碗である。高台畳付に３箇所、目痕風に茶色の釉を付ける。図版409と図版410の１～26は肥前系磁器である。梅樹文やコンニャク文の碗やＵ字状高台の皿などが主で、「大明年製」の銘があるものが多い。また、半球碗には角「福」銘などがみられる。図版410の21は青磁の三足香炉である。24は錆釉と瑠璃釉の掛分けの香炉である。26は錆釉染付の足付鉢である。25は赤・紫・緑・金彩上絵のうがい碗である。27～31は肥前系の陶器類で、28の京焼風陶器は高台内に「武」の刻印がある。30・31は青緑釉の皿である。32・33は瀬戸・美濃系の陶器で、33は灰釉の灯火具で、口縁端部に半環の耳が付く。図版411の１～27は京焼で、10は注連縄文の上絵碗で「清水」印がある。12は「朝日」印がある碗の底部である。13～15は半筒碗で、15の白化粧に錆絵の碗は、大振で器高が高く、初現期のものと思われる。23は灰釉の鉢で、体部を４箇所内側に押さえて、輪花状にする。見込には３箇所の目痕がある。27は底部に「乾□」の錆絵の銘がある鉢で、体部には白化粧と錆絵が残る。28・29は備前の皿で、灯明皿として使用されたものである。30は暗褐色の粗い胎土を持つ壷で、体部にはロクロ目が残り内面に鉄分が付着している。お歯黒壷と思われるが、産地を特定できない。31は丹波の赤土部を施した瓶である。32・33は信楽の鉄釉壷で、砂粒の多い灰白色の粗い胎土である。34・35は城のミニチュアで、錆絵染付である。図版412は肥前の鉢で、１・３はいわゆる彫三島で、内面に砂目痕が顕著である。２は打刷毛目のもので、内面は蛇ノ目釉剥ぎにする。18世紀前半である。

土壙Ｅ265（図版413）　天明大火による廃棄土壙の遺物である。二次被熱した瓦が主で、陶磁器類は被熱したものや、細片化したものが主体となるため図示できる遺物が少ない。また、出土遺物も17世紀後半から18世紀後半までの幅広い時代のものが含まれる。３・４は肥前系磁器である。３は荒磯文の碗で17世紀後半のものである。４の大皿は復元口径21.9cmである。蛸唐草に松竹梅繋文、口縁部はわずかに輪花になる。高台には「成化年製」銘があり、３箇所のハリ支えがある。18世紀後半のものである。５～13は京・信楽系陶器で、５は金・薄青彩がわ

ずかに残る上絵碗である。高台内も含めて全面に白濁釉が掛けられており、釉下に「仁清」印がかすかに認められる。8は錆絵染付の平碗で、「清閑寺」印がある。11は錆絵の笹文と赤・薄青・薄緑・金彩草花文の上絵がある平碗で、「清」印がある。いずれも17世紀後半代の京焼である。6は「暁山」銘のある灰釉の碗、7は鉄釉で二条の帯を描く碗である。9と10は平碗である。12は灰釉の灯明受皿である。13は灰釉の行平の蓋である。以上は、いずれも18世紀後半代のものである。14は平底の鉢で、堺焼と思われる焼締陶器である。15は堺・明石系の擂鉢である。16は灰白色で長石粒を多く含む粗い胎土で、薄い鉄釉が肩口から掛かる信楽の壷である。

土壙E188（図版414～417）　図版414の1～40は土師器の皿で、Ⅷ期の様相である。39・40の特大サイズのものが混じる。41～63は土師質土器である。47～53は堺系の焼塩壷で、47は「鷺坂」銘のある蓋である。50・51は「泉湊伊織」、52・53は「サカイ/泉州磨生/御塩所」の刻印のものである。58は口縁部に返りのある花塩壷の身で、赤褐色の胎土でロクロ成形である。京都産である。60・61は灯火具類で、60は小型の秉燭である。61はローソク立てである。64～68は土製品で、65・66は透明釉に緑彩の人形である。図版415は肥前系磁器である。薄手半球碗やU字状高台の皿などで構成される。図版416は陶器類である。1～29は京・信楽系陶器である。3は「錦光山」、4は「寶山」銘の京焼の碗である。5は錆絵の碗である。7～10は無地の平碗で、器高が浅く、8のように内面中央部が窪むものがある。6の碗は錆絵染付の松竹梅文の碗である。半磁胎の胎土、渦状の高台や底部付近を無釉にした作りはあまり例をみないが、京焼であろう。30～32は瀬戸・美濃系陶器である。30は御深井釉型紙摺の鬢水入である。31は鉄釉、32は灰釉の鉢である。33は肥前系の陶胎染付碗である。図版417の1・2・5・6は鉄釉の鍋と土瓶である。3は灰釉の片口、4は白濁釉の鉢でいずれも信楽産と思われる。7・8は備前系の蓋付壷で、外面に薄く鉄泥状を塗る。9は信楽の高台付小型擂鉢である。18世紀中頃の遺物である。

土壙E297（図版417）　10～14は土師器の皿である。14は耳皿である。15は軟質施釉陶器の灯明受皿で、透明釉が内外面に塗られている。ロクロ成形で、三つの円錐状の突起が灯明皿を支える。灯明皿としても使用されたらしく、2箇所に煤が残る。16は象嵌、17は打刷毛目の碗である。いずれも、暗褐色の胎土が非常に堅緻で、現川焼に近い。18は体部を鉄釉と透明釉に掛分けるいわゆる腰白四耳壷で、信楽産である。20・21は宜興窯の急須で、「茶銚」と呼ばれているものである。暗赤褐色の均一な胎土である。底部に「只□□生/香□□如」の焼成前の彫銘がみられる。22は信楽の擂鉢である。18世紀中頃を中心とした遺物である。

土壙E76（図版418～422）　天明大火による廃棄土壙の遺物である。被熱したものや、細片化したものが主体になるため、遺構規模が大きい割には図示しうる遺物が少ない。図版418の1～21は土師器の皿でⅧ期のものである。22～33は土師質土器である。22～24はロクロ成形の鉢である。30は用途は不明であるが、大型の焜炉もしくは火入類の部材の可能性がある。「深草/砂川/権兵衛」の刻印がみられる[40]。31は円盤状で、中央に穴の開く釜敷である。32・33は瓦燈である。34は軟質施釉陶器の鬢水入である。二次被熱により釉は暗灰色に変色している。図版418

の35～64、図版419の１～17は肥前系磁器で、35～58の白磁が碗をはじめ、蓋付壷・瓶類までまとまって出土している。図版419の18～29、図版420・421と図版422の１は陶器類である。図版419の20・21の京焼火入類と29の水注は錆絵染付の雷文で同文様である。28は鉄釉の茶釜である。30は白濁釉の信楽産の鉢である。図版420は肥前系陶器類である。１・２は刷毛目碗である。３・４・９・10は青緑釉の碗と皿である。５・６は陶胎染付の山水楼閣文の碗である。７・８の京焼風陶器にはそれぞれ「柴」、「小松吉」の刻印がある。12は白象嵌、13は白刷毛目で、いずれも緑釉と鉄釉流しの大型の鉢で、内面に砂目が残る。14は刻花唐草文に白刷毛目で緑釉の五耳壷である。二次被熱している。図版421の１～４は備前系陶器で、３・４には底部にヘラ描きの窯印がある。５は瀬戸・美濃系の灰釉耳付花入である。６は信楽のいわゆる腰白茶壷である。９はベトナム産の長胴瓶である。10はタイ産の四耳壷口縁部である。11は内外面に鉄釉で外面に灰釉を流す丹波鉢で、体部上半に糸目状の条線が入る。12・13は信楽産の壷で、12は内外面に鉄釉が厚く掛かる。13は器高が40cmを越し、頸部から下に薄く鉄釉が掛かり、胎土は灰白色で砂粒が多い。図版422の１は信楽擂鉢で、見込斜格子摺目で、体部内面に重ね焼痕が明瞭である。本遺構の出土遺物には日用品の碗・皿類が少なく、肥前陶磁器や京・信楽系陶器などに18世紀前半の様相のものが多い。また被熱した肥前系の白磁製品が多く、日常の什器ではなく特別な用途のものが一括廃棄されたものと考えられる。一方、信楽の腰白茶壷や、ベトナム長胴瓶[41]、図版583の２・６の石製品の茶臼、京焼の茶釜など茶道具類が多いのも特徴といえる。

溝Ｅ30（図版422）　２・３は土師器の皿で、XIV期のものである。４・５は肥前系の磁器で、いずれも小杯である。６は鉄釉の秉燭である。７は鉄釉の植木鉢で丹波産である。８は内外面灰釉の把手付きの甕で、灰白色の粗い胎土から信楽産と思われる。

池Ｅ25（図版422）　９は土師器の皿で、XIV期のものである。10は瀬戸・美濃系磁器の寿文木型打込の皿である。11は肥前系の白磁にガラス質の青彩による錦書を施した薄手酒杯である。12は肥前系磁器の蛇ノ目凹形高台の筒形碗で、いわゆる蕎麦猪口である。13は銅緑釉の仏飼具の小瓶で、京・信楽系陶器である。14は下絵がにじむ、いわゆるフロウン・ブルーチャイナの鉢、またはボウルである。小破片のため文様構成や、底部のプリントマークなどは不明であるが、オランダもしくはその周辺の製品であろう。軟かい胎土の磁器である。15は信楽産の鉄釉大甕である。19世紀中頃の遺物である。

能舞台Ｅ2664埋甕（図版87・423・424）　能舞台音響用と考えられる埋甕は７個体である。いずれも信楽産で、底部外面を除き鉄泥を塗り、底部内面の周縁部には５、６箇所に砂を敷く。胎土は粗い灰白色で胴部は４段に分割成形されており、接合部に段差が確認できる。口縁形態や凹線に若干の相異があるが、個体差の範囲と思われる。口縁から底部まで残る個体の法量は埋甕Ｅ23が口径63.2cm・底径19.6cm・器高63.8cm、埋甕Ｅ74が口径61.2cm・底径21.2cm・器高67.0cm、埋甕Ｅ38が口径67.6cm・底径20.8cm・器高65.0cmである。18世紀中頃以降のものである。

石組土壙Ｅ12（図版425）　１～23は土師器の皿・蓋類である。大型皿は口径約10～12cmのものがあるが、14cmを超える特大型皿もみられる。蓋類も一定量あるが、つまみ位置が中心を

外れるものが多い。24は土師質土器の蓋で、つまみの痕跡がみられず、胞衣壷の蓋であろう。25～27は軟質施釉陶器で、25は型作りのミニチュアの皿で底部外面に「上」の陽刻印がある。黄味のある透明釉が掛かる。26はロクロ成形の鉢に把手と足を付けた行平形の鍋である。底部に煤が付着し、釉が焼けて剥げ落ちている。27は楽系の碗で、赤褐色で少し砂粒の混じる胎土に白濁釉が厚く掛かる。高台内は「の」字形の渦に削り出している。28～40は肥前系の磁器で、29の筒形碗、39の小広東碗、40の「ハ」の字状高台碗に伴なう蓋などが揃う。また注目すべきものとして、30・31の碗、34～36の皿があげられる。菊花や皿の梅花繋ぎの裏文様などに共通する意匠をもつ禁裏からの注文品である。なお31の碗と35の皿は同文様で、本来組物であった可能性が強い。33の碗は上絵染付の碗で、上絵は地文様の薄青彩だけが残る。41～54は京焼もしくは京・信楽系の陶器類で、上絵のみられる41・42・46の碗類は、赤と薄青彩の二色だけの簡略なものになる。43は外面に渦状の鎬がある灰釉碗である。47・48は錆絵の筒形碗と柄杓である。49は型成形のホタテ貝形の皿で、底部に布目圧痕が残る。50は輪花に口紅の鉢で若松文である。49と50は、特殊な器形に錆絵染付を施すもので注文品であろう。51は、小型の丸碗に注口と半月形のフードが付く水滴である。52は赤褐色の胎土で、銅緑釉が上面に掛かる土瓶類の蓋である。44は京焼で、外面に錆絵染付の菊花がめぐり、高台部にも透明釉が掛かる小型の平碗である。禁裏からの注文品である。

溝Ｅ50（図版426）　土師器類は図示できるものが少ないが、XIV期のものである。５・６は土製品のミニチュアで、６は上半に緑彩されている。７は白化粧緑釉流しの陶器小香炉であるが、実用品かミニチュアかわからない。８～20は磁器類で、18は内面型押しの三田青磁、19・20は瀬戸・美濃系磁器の端反碗で、それ以外は肥前系磁器である。21～29は京・信楽系の陶器類である。23は銅緑釉、28は鉄釉、他は灰釉である。30は内面鉄釉で、外面イッチン描きの陶器の盤である。胎土は均一で緻密な暗灰褐色を呈する。具体的な産地を特定できないが、丹波産かと思われる。31は「霞晴山」銘の鉄釉行平の把手、32～35は鉄釉・飛びカンナで、イッチン描きの片口である。31～35の鉄釉陶器は、いずれも産地不明である。36は堺・明石系の擂鉢である。19世紀中頃を中心とした遺物である。

土壙Ｅ48（図版427）　１の土師器皿は体部が外反し、器高が低いXIV期中段階の典型的なものである。５の花塩壷は、算盤玉形で碁笥底状になるもので、内部に布の縫い目の圧痕が残る。通常「イツミ/花焼塩/ツタ」の刻印のある蓋が付く。前代の混入遺物であろうが、京都市域での出土例は少ない。13・14は飛びカンナで鉄泥塗の行平鍋の蓋と身で、蓋にはイッチン描きがある。身の底部に「安政三年□十一月調之」の墨書がある。15は鉄釉鍋の把手で、「霞晴山」の銘がある。13～15は産地を特定できない。16・17・20は丹波産の徳利形の壷と鉢である。18・19は信楽の鉄釉・灰釉の鉢である。19世紀中頃の遺物である。

E区のその他（図版428・429、表78・79）

表78　E区のその他土器・陶磁器類（図版428）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
1	土壙E270	時代幅アリ	土師質	組紐重		3.9	4.0(最大)	赤褐		在地	
2	埋納土壙E191	18c後半	土師質	胞衣壷蓋	14.0	1.7	13.2	橙			深草か　No.3の蓋
3	埋納土壙E191	18c後半	土師質	胞衣壷	11.5	6.6	13.2	橙			深草か
4	土壙E280	18c代	磁器	碗	14.2	7.7	5.8	白	染付	肥前系	荒磯文
5	土壙E290	18c代	磁器	瓶	1.2	25.1	5.8	白	染付	肥前系	蛸唐草文
6	土壙E99	18c後半	磁器	蓋	6.2(最大)	2.7	2.7	灰白	透明+緑	中国	華南三彩　内面透明釉
7	土壙E82	17c代	磁器	合子身	7.0	4.5	4.3	白	上絵	中国	赤・黄彩
8	石組土壙E22	幕末	磁器	小坏	7.1(推定)	3.9	2.5(推定)	白	上絵	中国	赤・金彩 窓絵　焼継
9	土壙E175	18c後半	磁器	椀	13.9	4.5	6.0	白	青花+上絵	中国	赤・緑・黄・黒彩
10	井戸E55	18c代	磁器	皿		2.6(残)	11.6	暗灰	青磁	中国	漳州窯系　餅花手　高台内施釉
11	土壙E11	19c代	磁器	蓮華		2.5	7.5(最大)	白	上絵	中国	赤・黒彩
12	土壙E181	18c末	陶器				4.2	黄灰	灰	京都	碗か「東山」銘
13	土壙E311	17c末	陶器				5.3	淡黄灰	灰	京都	碗か「洛北」銘
14	土壙E315	時代幅アリ	陶器	平碗	12.8(推定)	5.4	4.7	淡黄	錆絵+上絵	京都	青・緑彩「清水」銘 目痕3箇所
15	土壙E192	19c前半	陶器	壷		18.1(残)	8.2	灰	鉄	丹波	鉄釉掛分け　体部無釉部墨書
16	埋甕E158	17c末	陶器	甕	33.2	37.0	19.8	暗灰白	鉄	丹波	底部ヘラ書
17	土壙E187	時代幅アリ	陶器	蓋				白	白磁	ヨーロッパ	
18	土壙E187	時代幅アリ	陶器	皿	15.2(推定)	2.8	9.0	白	白磁	ヨーロッパ	

表79　E区のその他土器・陶磁器類（図版429）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
1	Yトレンチ西壁		土製品	人形		4.6	2.7(最大)	灰白			童子形
2	土壙E309	17後～18前	磁器	鉢	18.1(推定)	8.4	8.0	白	上絵	肥前系	赤・青・緑・黒彩 口紅 柿右衛門様式
3	OJ・OK清掃中		磁器	皿				灰白	上絵	肥前系	青・黄・黒彩 二次被熱 古九谷様式
4	土壙E291	17後～18前	陶器	皿			10.7(推定)	浅黄橙	上絵	中国	華南系 緑・黄・紫彩か　二次被熱
5	土壙E291	17後～18前	陶器	碗	13.2	5.0	5.2	暗赤	透明	肥前系	白象嵌
6	土壙E291	17後～18前	陶器	皿	21.8	4.3	9.4	灰白		肥前系	山水楼閣文　異体字印 京焼風陶器
7	Yライン断割り		陶器	碗			4.6	白	灰	京都	「仁清」銘
8	井戸E737	17c前半	陶器	壷	2.5	4.6	2.8	浅黄橙	鉄	瀬戸・美濃	茶入
9	土壙E268	18c後半	陶器	蓋		3.4	12.7(最大)	灰白	錆絵染付	京都	菊花文
10	土壙E268	18c後半	土師質	火入		14.5(残)	21.4	鈍い橙		深草	体部「辻井播磨」銘
11	RK・RN清掃中		陶器	甕		7.3(残)	15.8(推定)	灰白	鉄+黒流し	信楽	底部墨書「安政□/八月/土橋」
12	土壙E301	17c～18初	陶器	壷	11.4	16.7	22.0(推定)	黄灰	灰(内面)	京都	茶釜形 使用痕 外面体部上半糸目
13	土壙E340	18c前半	陶器	壷				暗灰褐	緑	中国	華南三彩 貼花文 二次被熱
14	石組E353	時代幅アリ	陶器	壷				暗灰褐		タイ	四耳壷

図版428の4は荒磯文の碗、5は輪郭線のなかにダミを塗る蛸唐草文の鶴首瓶で、どちらも肥前系磁器である。6～11は中国磁器類で、6は華南系の緑釉の合子の蓋である。7は赤・黄彩上絵の合子の身である。8は赤地金彩の窓絵の小杯である。焼継されている9は青花に上絵の碗で、高台内のカンナケズリ痕が顕著である。10は青磁釉のいわゆる餅花手の皿で、高台畳付を除いて全面施釉されている。10は高台付近に多量の砂が付着しており、漳州窯系の磁器である。11は上絵の蓮華であるが、赤絵と黒の縁取線以外は銀化しており確認できない。12～14は京焼の刻印資料で、12は「東山」、13は「洛北」銘の灰釉の碗である。14は平碗で、錆絵に薄い青・緑彩である。目痕が3箇所残り、渦状に削った高台内に「清水」銘がある。15・16は丹波焼で、15はいわゆる通徳利であろうが、鉄釉を掛分けて無釉部を残しており、無釉部に屋号などを墨書できるようにしている。出土資料にも墨書が認められるが、薄くて判読できない。イッチン描きの通徳利の原型とも考えられる。17・18はヨーロッパ産の白磁で、胎土は軟質であ

る。小破片でありプリントマークも見あたらないことから、具体的な産地を特定できない。図版429の2は柿右衛門様式の角鉢である。ロクロ型打成形で、口銹乳白色手の余白が多い色絵である。部分的に黒で輪郭線を描き、赤・薄緑・薄青彩で草花文を描く。高台畳付付近は無釉で、高台内に銘款はない。3はいわゆる青手古九谷様式の皿で、二次被熱のため、黒・青・黄彩のみわずかに残る。4は華南三彩の皿で、蓮花の線刻文である。二次被熱のため釉調が判然としない。9は京焼の錆絵染付の蓋である。蓋のみの出土で、身の方の器形は予想がつかない。作りは丁寧で、禁裏からの注文品と推定される。10は土師質の円筒形の三足が付く火入で、体部下方に「辻井播磨」の角印がある[42]。11は信楽産の甕で安政年間の紀年銘資料であるが、遺構に伴なうものではない。12は茶釜形の京焼陶器で、内面のみ灰釉が掛かる。体部外面下半は丁寧なケズリ調整で、上半は糸目風のクシ目が入る。13は華南系の貼花文壷の底部片で、二次被熱のため釉調は不明である。14はタイ産四耳壷の口縁部の破片である。硬質の土師質である。

（6）F区

土壙F2200（図版430）　1～28は土師器皿で、XI期古段階のものである。土師器の皿類が完形に復元できるものが多い。煤が口縁端部に残るものが多い。29は瀬戸・美濃系の白濁した灰釉皿で、底部は碁笥底である。30は瓦質土器の火入で、大きめの三足が付けられており、体部に菊花状のスタンプ3箇所が確認できる。図示していないが、肥前系陶器の灰釉丸皿や中国青花の小片が埋土中に含まれている。16世紀末から17世紀初頭の遺物である。

埋納土壙F2390（図版430）　出土遺物は、土師器の皿のみである。総数は45個体であるが、39個体を図示した。皿は内面凹線がない中型の皿で占められる。胎土は一様ににぶい橙色で、白色系のものは混じらない。法量は口径9.3～9.8cm、器高2.0～2.4cmの範囲で収まる。XI期古段階のものである。

埋納土壙F2383（図版430）　出土遺物は、土師器の皿24個体のみである。内側に圏線がある大型の皿で占められる。法量は70の皿が口径13.1cmであるが、その他は13.8～14.1cmの範囲で、器高は2.3～2.6cmの範囲に収まる。内面のナデの最終部を口縁端部に引き抜いた痕跡が明瞭に残る。XI期古段階のものである。

土壙F1980（図版430）　94～118は土師器の皿である。94は京都産焼塩壷蓋の可能性もあるが、皿とした。XI期中～新段階のものである。119は土師質土器の小壷である。120・121は肥前系磁器で、120は平底の辰砂小壷で、底部は無釉である。121は高台無釉のいわゆる初期伊万里染付碗で、どちらも1630年代から1640年代のものである。

土壙F1779（図版431）　1～3は土師器皿である。XI期古段階のものである。4は軟質施釉陶器の天目形の碗で、内面緑釉、外面は透明釉に鉄釉を横方向に流し掛ける。外面の透明釉が薄く、赤褐色の胎土が透けて赤色を呈している。5は青花碗である。6は瀬戸・美濃系の灰釉丸碗である。7は屈曲した口縁部をもつ備前系の鉢で、水指もしくは建水用のものである。8は赤褐色の胎土の信楽擂鉢である。9は丹波系の擂鉢であるが、体部内面の摺目が備前擂鉢にみられる様な粗い斜格子になっており、あまり類例がない。17世紀初頭の遺物である。

竈Ｆ1555（図版431）　出土遺物は少量で、細片で図示できるものは少ない。10～12は土師器の皿である。13は肥前系の灰釉丸碗で、目痕はない。14は信楽擂鉢の底部である。17世紀前半の遺物である。

土壙Ｆ2208（図版431）　15～22は土師器の皿で、Ⅺ期古～中段階のものである。23は中国製の白磁碗である。24は瀬戸・美濃系の灰釉の皿である。25は口径約37cmの備前系大型盤である。17世紀前半の遺物である。

穴蔵Ｆ1475（図版432～435）　図版432の１～39は土師器の皿で、38・39の大型のものもみられる。40～61は土師質土器である。46の台状のものは灯明皿の台の可能性もあるが用途は不明である。49～57は焼塩壷類で堺系の刻印が一重枠「天下一堺ミなと/藤左衛門」と、「天下一御壺塩師/堺見なと伊織」が混じって出土している。62～76は土製品で、62～73は人形類、74～76はミニチュアの容器である。人形は前後または左右の型合せで、内部が空洞でない中実のものである。施釉された人形はない。キラコの付着するものが多く、75などのミニチュア容器も同様である。58～61の土師質土器と図版435の３～９の瓦質土器は、火入が主流を占める。図版433と図版434の１～７は肥前系磁器である。染付碗類の主体は高台断面三角形で、口縁部外面と高台内に二重圏線がみられ、見込文様なしのものである。高台銘は「宣明年製」「太明年製」「宣徳年製」などがみられる。図版434の８～17は肥前系陶器で、京焼風陶器と青緑釉の碗皿が主である。18は信楽の擂鉢である。図版435の10～20は京焼で、見込に錆絵染付のワンポイント文様の平碗が主である。体部から口縁にかけて外へ開き、外面にロクロ目が残るものが多い。11は錆絵に金彩を含む上絵付で「岩倉」印の碗である。10は口縁が天目碗形のものである。底部に刻印がある資料も多く、14の「音羽」、15の「岩倉」などがある。17・18はともに底部に「仁清」の刻印が押されているものである。17は外面を丸ノミ状の器具で、底部から口縁下までらせん状にロクロ目に似た彫痕をつけ、底部周縁を鋭く面取りした鼓形の花入である。胎土は灰色で信楽の土に似るが、均質で砂粒の混入もない。白濁釉が底部方向から丸く流し掛けられ、内面は比較的厚く全面に掛かる。18は丸碗に作った外面を、体部下位で「く」の字状に削り出した碗で、体部上位に刷毛塗りした錆釉に鋸歯状に鎬をいれ、やや黄味を帯びた透明釉を畳付を残して全面に掛ける。高台内は兜巾がある。釉が厚いため判然としないが、繭形の中に「仁清」が判読できる。19は、透明感のあるやや青味を帯びた灰釉が内外面に掛かる茶釜形である。底部には二次的な被熱痕がみられる。20は灰釉の鍋である。扁平な作りで円錐状の三足付近まで、厚く釉が掛かる。把手や三足、口縁端部の作りが丁寧で、陶器製の鍋の初現期のものと考えられる。21・22はともに備前系の焼締陶器で21は外面、22は内面に緋襷が顕著である。23は肥前系の甕で、刷毛目に鉄・緑釉の流し掛けで、底部周辺は無釉である。

井戸Ｆ950（図版436・437）　図版436の１～７は土師器の皿と蓋で、Ⅻ期のものである。８～12は土師質土器で、堺系の焼塩壷の刻印は「御壺塩師/堺湊伊織」「泉州麻生」である。13～24は肥前系の磁器である。深手輪花の皿、コンニャク判の皿などがある。図版437の１～15は陶器類である。９～11は肥前系陶器で、13は信楽産と思われる白濁した灰釉の鉢、15は丹波の

塗土の壷である。それ以外は京焼陶器で、1～6は平碗である。1と2は作りが丁寧で、菊花散らし文の高台無釉で、8の燗鍋とともに禁裏の注文品と思われる。14は灰釉の釜で、内面は無釉である。宝永大火以降の18世紀前半の遺物である。

土壙F1265（図版437～439）　図版437の16～25は土師器の皿である。土師器類の出土量は少ない。XIII期のものである。29～31は軟質施釉陶器である。29はロクロ成形の碗で、銀化しているが、全面に薄く緑釉が掛かる。30は上下型合せの胡麻煎で、「御胡□」の文字が陽刻される。直接火の当たらない上面には透明釉が掛かる。31は緑釉の筆架である。図版438の1～29は肥前系磁器である。3の小広東碗に近いものや、9の小丸碗、10の「ハ」の字状高台の碗などが揃う。5・22～24は菊花や梅花繋文で文様構成されるもので、禁裏の注文品と考えられる。14の高杯は、碁笥底風に成形された杯部と脚部が釉薬で接着される。呉須の発色や草花文から、平戸の三川内系のものかと思われる。図版438の30～36と図版439の1～19は京・信楽系の陶器類である。図版439の20は刷毛目で、輪花の肥前系鉢で、内面は蛇ノ目釉剥ぎされる。21・22は丹波の鉢類で、21は外面に灰釉を横位に流す鉢である。22は内面のみに灰釉を掛ける鉢で、口縁上端部の10数箇所に重ね痕とみられる変色部分がある。京・信楽系の鍋類には、7・9・14の灰釉のものと15～19の鉄釉のものがある。

土壙F1400（図版440・441）　図版440の1～11は土師器の皿と蓋で、XIV期のものである。12～17は土製品である。16・17はミニチュアの釜で、いわゆる柿釉が掛かる。18は渡辺誠氏の形態分類のKタイプの花塩壷で、手捏ねで八弁に作る[43]。19は土師器の皿に白化粧に呉須で朝顔を描き、内外面に青味を帯びた半透明の釉が掛かる。20～38は磁器類である。27の白磁と33～35の染付は瀬戸・美濃系磁器である。36～38は中国製磁器で、37は高台内「道光年製」銘、38は高台無釉の碗である。その他は肥前系磁器である。20・21・25は焼継のあるもので、21は菊花文があり禁裏の注文品であろう。39～41は涼炉である。それぞれ形態に違いがあるが、いずれも二重構造である。40・41には正面にそれぞれ、「歌□」「玉□泉」の印刻がある。39は黄灰色の胎土、40・41は白色に近い胎土である。図版441の1～23は陶器類である。1～18は京・信楽系陶器類で、5は白化粧に緑釉流しの火入で、底部に「明山」の印刻がある。17は急須の蓋で、小判印で「久太」の刻印がある。18は焼締の急須で、把手部分に小判印の「忠平」の刻印がある。19は型成形の軟質施釉陶器で、内面は龍文と連弁の型打ちで八角鉢に作る。裏面中央には印銘がみられるが、薄くて判読できない。全体に鉄釉が掛けられ、外面には緑釉が流されている。産地を特定できないが、特徴的な器形と釉調から源内焼に近い[44]。20は備前系の餌擂鉢である。21は堺・明石系の擂鉢である。22は堺焼の焼締の鉢で、底部中央を予め植木鉢にも転用できるように窪ませてある。23は丹波の通徳利で、「中長者町/△形屋」のイッチン描きがみられる。

井戸F1280（図版441）　24は体部が屈曲する土師器の皿で、XIII～XIV期にかけてのものである。25は粗い灰白色の胎土で、ロクロ成形される盤状の土師質土器である。26は肥前系の白磁で、「京都四□□平小町紅」の赤上絵描きの紅皿である。27と28は灰釉の京・信楽系の陶器の碗

で、いずれも文様はみられない。

溝F1392（図版441）　溝内遺物が極端に少なく、図示できた資料は土師器皿が2点、磁器が2点のみである。31はガラス質の磁器で、赤と黒彩の上絵が残る。口縁端部を含む約3cm四方の破片で、詳細は不明であるが、九谷製と思われる。19世紀中頃以降のものである。

池E25（図版442）　1～4は土師器の皿である。2・3の体部が口縁部にかけて肥厚し、外反するものが主体になる。Ⅻ期のものである。7は赤褐色の土師質土器で、ロクロ成形の高杯の脚部である。9は内面に透明釉が掛かる軟質施釉陶器の灯火具である。口縁部の内側に掛かる灯明芯を支えるブリッヂが欠損している。8・10は土師質土器で、白色胎土の鉢と涼炉の底部である。11～13の人形類は、透明釉はなく、装飾的に緑釉を施す。14～23は肥前系磁器である。18の鉢には焼継がみられる。22・23はコンニャク印の五弁花で高台内は一重圏線、銘は崩れた渦福のもので、19世紀前半頃まで生産された粗製深皿類である。24は瀬戸・美濃系磁器の底部で、小片のため染付文様は不明である。25・26は京・信楽系の灰釉陶器である。28は瀬戸・美濃系の灰釉水注である。27・29・30は鉄釉や飛びカンナの蓋類である。31～34は丹波系の植木鉢で、31・32は高台にU字形の抉りを3箇所付け、口縁部はL字形に作る。灰釉に錆絵と白で鷺を描く。33は獣足で、白土を流した上に錆絵を描き灰釉を掛けたものである。34は同じく獣足で、黒釉を掛けるものである。

F区のその他（図版443・444、表80・81）　図版443の1・2・6は「仁清」銘の刻印資料である。1は灰釉の碗である。2は内外面に鉄釉を掛ける入隅の筒形容器で、平底の底部は無釉である。6は錆絵染付の小杯で、内面におかめの顔が描かれている。体部の高台近くに「仁清」の刻印が押されている。幕末期のものである。3・4は錦書の薄手酒杯である。7・9は刻印資料で、7は「□平」の刻印がある焼締の急須把手である。9は「ふかくさ」の刻印がある五徳である。10は白化粧に青彩の土瓶蓋で、内側に「道八」の描銘がある。11は黄釉の角皿で、珉平焼である。12・13はいずれも仙芝祝寿文の皿と碗で、中国製である。12の皿は焼継されており、底部に焼継の記号がある。14は高台内「朝日」の刻印がある碗である。15は備前焼の鉢である。16は白化粧の上に錆絵染付で草花文を描く変形皿である。露胎の底部に「与三造」の描銘がある。17は体部外面緑釉で内面と高台内が黄釉の軟質施釉陶器である。体部上半は火を受けて黒く変色しており、火鉢として利用されたものであろう。高台内に「緑」の刻印がある。図版444の1・2は黄彩の人形で、前後型合せの中実である。3・4は赤褐色の胎土を持つ土師質の将棋の駒で、3が銀将で4が香車である。文字を線刻し、胡粉状のもので、埋める。5は箱庭道具の足付の鉢で、背景に山・橋・家などが造形されている[45]。鉢部外面は施釉されていないが、その他は緑・黄・茶などの鉛釉で施釉されている。6・7はロクロ成形の軟質施釉陶器の灯火具である。6は手捏ねの蛙を口縁端部に座らせ、柳の枝と思われるものを線刻する。全面緑釉で、口縁端部は煤が付着する。7は緑釉の灯明受皿で、口縁端部直下に灯明皿を受ける円錐状の突起が3箇所付けられている。8～12は肥前系磁器で、8は染付碗に「京都四条べに平小町紅」の赤絵文字がある。9・10は染付に上絵のある碗で、10は内面に鶴を型打ちし、

表80　F区のその他土器・陶磁器類（図版443）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法　量　(cm)			胎土	釉薬	生産地	備　考
					口径	器高	底径				
1	土壙F933	幕末	陶器	碗			3.9	灰白	灰	京都	「仁清」銘
2	井戸F961	幕末	陶器	筒形容器	4.8	6.4	4.5	灰白	鉄	京都	「仁清」銘　入隅筒形向付
3	土壙F1170	幕末	磁器	小杯	6.0(推定)	3.2	2.6	白	錦書		薄手酒杯　鶴に菊花
4	土壙F1170	幕末	磁器	小杯	6.3	3.0	2.6	白	錦書		薄手酒杯　「柳茶屋」
5	土壙F1170	幕末	磁器	仏餉具	7.8	6.0	4.2	灰白	上絵	肥前系	赤・黒
6	土壙F1170	幕末	陶器	小杯	6.8	2.9	1.3	灰白	銹絵染付	京・信楽系	「仁清」銘
7	土壙F1170	幕末	陶器	急須把手				灰白			「□平」小判印
8	土壙F1170	幕末	陶器	小杯	8.4	4.5	2.7	灰白	灰	京・信楽系	底部墨書アリ
9	土壙F1170	幕末	土師質	五徳足		6.9(残)		白		深草	「ふかくさ」「卜□」小判印
10	溝F1010	19c代	陶器	土瓶蓋		2.6(残)	8.6(最大)	黄灰	白化粧+染付	京・信楽系	「道八」銘
11	井戸F946	幕末	磁器	皿	20.3	3.4	11.4	白	黄	瑕平	
12	漆喰溝F970	19c代	磁器	皿	15.3	2.4	8.0	白	青花	中国	仙芝祝寿文　底部焼継記号
13	漆喰溝F970	19c代	磁器	鉢	16.5	7.6	6.6	白	青花	中国	仙芝祝寿文
14	土壙F932	19c代	陶器	碗	11.2	6.7	4.4	灰白	鉄	京都	「朝日」銘
15	土壙F932	19c代	陶器	鉢		9.1(残)	14.6(推定)	暗赤灰		備前	
16	土壙F932	19c代	陶器	皿		2.0	12.4(最大)	暗灰	白+銹絵染付	京都	底部「与三造」描銘
17	土壙F1236	18c後半	軟質施釉	壷	22.6	15.2	13.8	浅黄橙	緑+黄		「緑」銘
18	土壙F1202	19c代	陶器	壷	13.9	47.3(残)		灰白	鉄	信楽	

表81　F区のその他土器・陶磁器類（図版444）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法　量　(cm)			胎土	釉薬	生産地	備　考
					口径	器高	底径				
1	土壙F1814	17c後半	土製品	人形		6.6	2.5(最大)	淡黄白	黄		型作り　中実
2	土壙F1814	17c後半	土製品	人形		5.5	2.8(最大)	淡黄白	黄		型作り　中実
3	土壙F1642	19c代	土製品	駒		2.9	2.8(最大)	明赤褐			文字白象眼
4	土壙F1642	19c代	土製品	駒		2.9	2.4(最大)	明赤褐			文字白象眼
5	石組土壙F1386	時代幅アリ	土製品	箱庭道具		10.2	13.6(最大)	浅黄橙	緑+黄+茶		
6	集石F1293	18c末	軟質施釉	灯明皿	11.2	2.1	5.5	浅黄橙	緑		ロクロ　口縁端部煤付着「柳に蛙」
7	土壙F1319	18c前半	軟質施釉	油受皿	11.6	2.1	5.5	浅黄橙	緑		ロクロ　底部無釉　煤付着
8	井戸F1223	19c代	磁器	碗	9.1	4.4	2.9	白	染付+上絵	肥前系	「京都四条べに平小町紅」
9	井戸F1814	17c末～	磁器	碗	9.4(推定)	5.7	3.8	白	染付+上絵	肥前系	コンニャク文+赤・緑・黄・黒彩
10	集石F1295	時代幅アリ	磁器	碗	15.8	6.6	5.1	白	染付+上絵	肥前系	赤・茶・緑・黄彩　内面鶴文型押し
11	土壙F2450	17c前半	磁器	足付盤	21.3	4.9	6.1(高台径)	灰白	青磁	肥前系	内面片切り彫り
12	拡張区掘下げ		磁器	皿			4.0(推定)	灰白	上絵	肥前系	古九谷様式
13	井戸F1235	18c後半	陶器	蓋		1.6(推定)	7.0	黄灰		京都(蓮月)	蓋裏「蓮月」彫銘　No.14の蓋
14	井戸F1235	18c後半	陶器	急須	7.8(推定)	7.4	5.8	黄灰		京都(蓮月)	「和歌」釘彫り
15	土壙F1389	19c代	陶器	碗			4.2(推定)	淡黄	灰	京都	「朝日」銘　割高台
16	土壙F1486	17c末	陶器	碗	12.3	5.0	3.9	灰白	鉄	京都	天目型
17	土壙F1402	19c代	陶器	香炉	5.0(推定)	5.6	5.2(推定)	淡黄	透明	京都	「帯山」印
18	MK・NK清掃中		陶器	壷		9.0(残)		暗赤褐		沖縄	壷屋焼
19	土壙F1370	17c後半	磁器	合子身	10.3	3.6	7.1	白	白磁	中国	徳化窯
20	YH清掃中		陶器	急須			6.6(推定)	暗赤褐		中国	宜興窯「味占先春/香添詩興」銘印
21	北壁清掃中		陶器	皿	16.8(推定)	3.0	9.8(推定)	白	白磁	ヨーロッパ	
22	土壙F1284	19c代	土師質	焜炉	16.0	17.2	17.0	灰白			深草か　内面煤付着
23	土壙F1247	18c代	陶器	碗			4.4	灰白	灰	京都	「仁清」銘
24	土壙F1247	18c代	陶器	壷	17.4			黒灰		タイ	四耳壷

流水・亀などを染付し、紅葉を上絵で表している。12は古九谷様式の皿で、二次被熱している。小片のため黄色の上絵のみ確認できる。13・14は幕末期の歌人太田垣蓮月尼が作ったいわゆる蓮月焼きで、焼締の急須である。蓮の葉に作られた蓋裏に「蓮月」の釘書銘があり、胴部に自作の和歌「梅が香に　枕もとらで（更る夜の　そらに鳴ゆく）春のか（り）がね」が彫られている[46]。15・17・23は刻印資料で、15は「朝日」銘の灰釉の碗である。17は「帯山」銘灰釉の香炉、23は「仁清」銘の灰釉碗である。16は器壁の薄い鉄釉の天目形の碗である。18は焼締の壷

で、肩部の沈線や胎土の特徴から沖縄の壷屋焼である。19は徳化窯の白磁の合子の身である。20は宜興窯のいわゆる茶銚の底部である。暗赤褐色の胎土で紫泥と呼ばれるものである。「味占先春/香添詩興」の刻印がある。22は灰白色の粗い胎土を持つ三足焜炉で、内面中程にサナを乗せるための突起がめぐる。24はタイの四耳壷の口縁部の破片である。

（7）G区

堀G1940（図版445）　1～11は土師器皿である。1～4は小型皿、5は丸底の中型皿、6～11は圏線のある大型皿である。XI期古段階から中段階に属する。12は小型壷である。13は土師器皿を丸く打ち欠いて、中央部に穿孔したものである。おはじきに転用したものとみられる。14は釜で体部は半球形で、器壁が薄く、体部下位に鍔が付く。15～17は焼塩壷の蓋である。18は焼塩壷の身である。19は瓦質土器で火消壷の蓋である。20は中国産の青花碗である。施釉陶器には瀬戸・美濃系（21～33）と肥前系（34）がある。21は長石釉の志野杯である。22は灰釉の筒形の向付である。23は鉄釉碗である。24～26は鉄釉の天目碗である。27は長石釉の皿、28～30は灰釉の皿、34は鉄釉の皿である。35は備前産の四耳壷で肩部にヘラ記号がある。

井戸G2690（図版445）　土師器皿類には丸底の中型皿（36・37）、圏線のある大型皿（38～44）がある。XI期古段階に属する。45は焼塩壷の蓋である。国産の陶器には瀬戸・美濃系の長石釉の小碗（47）と皿（46）がある。47の小碗には体部にヘラで凹線をめぐらせる。図示していないが、他には輸入の白磁と青磁がある。陶器には肥前系の皿、備前産の鉢、信楽産の擂鉢がある。17世紀初頭の遺物である。

池G2385（図445）　土師器皿類には丸底の中型皿（48～52）、圏線の付く大型皿（53～57）がある。XI期古段階に属する。瓦質土器には羽釜（58）がある。62は輸入の白磁端反皿で、見込に蛇ノ目釉剥ぎがある。国産の陶器には瀬戸・美濃系の灰釉皿類（59～61・63・64）がある。60は見込が釉剥ぎされる内禿折縁皿である。61は見込に陰刻花文、59は内面に鎬がある。高台内にいずれも輪トチ痕があり、64には目痕がある。他には輸入磁器の白磁や青磁の碗・皿・鉢がある。陶器には丹波産や信楽産の擂鉢がある。備前産の鉢や壷などもある。17世紀初頭の遺物である。

土壙G2418（図版446）　土師器皿類には小型皿（1）、丸底の中型皿（2～6）、圏線のある大型皿（7～13）に加えて、特大型皿（14）がある。XI期古段階に属する。特大型皿は口径16cmを越え、圏線のある大型皿に比べるとやや器壁が厚い。磁器には青花の端反杯（15）がある。高台内は無釉である。国産の陶器には瀬戸・美濃系の碗類がある。灰釉の丸碗（17）、天目碗（18）がある。練込志野の筒形碗（16）は底部と高台を欠く。二耳壷とみられる鉄釉掛の壷（20）は器高約40cmで、肩部に「大吉」の刻印がある。焼締の盤（19）は備前産である。図示していないが、輸入の青磁や白磁の碗がある。陶器には肥前系の碗や皿、丹波産の擂鉢、信楽産の甕などがある。17世紀初頭の遺物である。

池G2180（図版446）　土師器皿類には丸底の中型皿（21～24）、圏線の付く大型皿（25～31）がある。XI期古段階の古相に属する。土師器皿片を丸く打ち欠き、中央付近に小穴を穿つもの

(32～34) がある。磁器には景徳鎮窯系の青花小碗 (35) がある。内底中央が盛り上がった形の饅頭心型と呼ばれるタイプである。国産の陶器には瀬戸・美濃系 (37～39・41) と肥前系 (36・40) がある。37の丸碗・39の皿・41の灯明皿蓋には長石釉が掛かる。38は灰釉の小皿である。36は鉄釉の天目碗、40は鉄絵の皿である。焼締陶器には信楽産の擂鉢 (42) がある。図示していないが輸入の白磁や青磁の碗がある。陶器には丹波産の鉢や擂鉢がある。また、備前産の鉢や壷などもある。17世紀初頭の遺物である。

井戸G3073 (図版446)　土師器皿類には丸底の中型皿 (43～45)、圏線の付く大型皿 (46～49) がある。XI期中段階に属する。50は磁器で景徳鎮窯の青花皿である。国産の陶器には瀬戸・美濃系の灰釉折縁皿 (51) がある。内面には鎬があり、見込の釉を剥ぐ。他には図化できなかったが輸入の白磁や青磁の碗類がある。初期の肥前系の磁器碗も少量含まれる。陶器には肥前系の皿や碗、丹波産の鉢、備前産の壷や擂鉢、信楽産の甕や擂鉢がある。17世紀前半の遺物である。

土壙G2148 (図版447)　磁器には漳州窯系の青花中皿 (1) がある。見込は鳳凰文である。国産の陶器には瀬戸・美濃系の碗と向付がある。2は絵志野の向付で、四方が隅入りになり碁笥底である。長石釉が掛かり4面とも絵付が異なる。3は内外面黒釉で底部周辺が無釉の碗である。図示していないが、輸入の青磁椀が含まれる。陶器には肥前系の碗や瀬戸・美濃系の皿類がある。擂鉢には備前産、丹波産、信楽産がある。17世紀初頭の遺物である。

土壙G1156 (図版447・448)　図版447の4～19は、土師器皿である。4～7は小型皿、8～10は丸底の中型皿、11～18は圏線のある大型皿である。19は特大型の皿である。XI期新段階の新相に属する。22～27は狭口焼塩壷の蓋と身である。磁器はすべて肥前系である。33・34、図版448の4・5は青磁で、33の高台内は無釉である。図版448の3は白磁の皿である。図版448の8～15は、陶器類である。8・10は鉄釉で碗と天目碗、11は鉄釉に内外面に灰釉を流し掛けた碗で、いずれも高台付近はナデ調整がある。9は鉄釉で口縁部が玉縁形の碗である。12は京焼の平碗で、内面底部に錆絵で木の葉文を描き、透明釉を施釉する。高台内には四角と丸の圏線内に「清」の刻印がある。この刻印の類例は大分県の府内城三の丸遺跡で出土している[47]。13は平碗で体部は直線的に開き、中位で内にやや屈折し、立ち上がる。胎土は灰褐色で粗い。鉄釉を総掛し、灰釉を高台脇まで施釉する。高台は貼付高台である。14は鉄釉の壷で、福岡産の可能性が高い。15は褐釉を施した置物で産地は確定できない。7は軟質施釉陶器の皿で、透明釉に赤彩である。

土壙G1164 (図版449～452)　図版449の1～19・35は土師器である。1～5は小型皿、6～10は丸底の中型皿、11～18は圏線のある大型皿、19は特大型の皿である。XI期新段階に属する。35は小型の高杯で用途は不明である。22～24は土師質土器の鉢で底部は平坦面をもち、口縁部は内湾する。内面はナデ調整で、外面には指頭痕がある。25～30は狭口の焼塩壷の蓋・身である。身の口縁部は直立し撫肩である。31には「天下一堺ミなと／藤左衛門」の刻印がある。32～34は土師質土器の蓋である。32・33のつまみは貼付である。36はロクロ成形の土師質土器

の壷類の蓋である。図版449の37～44・46～57・59～61、図版450、図版451の１～４は肥前系の磁器である。図版449の37～40はミニチュアの染付碗である。48・52、図版450の１は高台内が無釉の染付碗である。図版450の14～19、図版451の２・３は白磁である。図版450の20～24、図版451－４は青磁である。図版450の21の碗は高台内が無釉である。23は型打ち皿である。図版451の１は色絵の水滴である。２～４は水滴である。図版449の45・58、図版451の５～12は青花の杯、碗、皿である。図版451の13～28は陶器類である。20～25は瀬戸・美濃系である。20・21は鉄釉を施し、灰釉を内外面に流し掛ける碗である。22～24は鉄釉を施した天目碗である。25は長石釉を施した折縁皿である。17～19・26～28は肥前系陶器である。17は鉄釉を施した碗である。18・26は透明釉を施したいわゆる呉器手碗である。19は鉢で赤身をおび、やや粗い胎土である。畳付以外は透明釉を施す。畳付には砂目痕がある。27は腰部に凹状圏線をめぐらせ、鉄釉を施した碗である。28は上半部が欠損しているため全形の復元はできないが、胎土は白色で細かく密である。灰釉を施した水指と思われる。13・16は京焼である。16は鉢で胎土は不均一な灰色の斑で小石が混じる。体部下半に鉄釉を施し、口縁部から体部に白釉を掛ける。銹絵で文様を描く。高台は貼付で、見込には目痕が３箇所ある。13は呉器手風の碗で赤味をおびた灰色の胎土で、器厚が薄い。白濁した透明釉を施している。図版452の１は信楽産の擂鉢である。２は瓦質土器の火入である。14・15は軟質施釉陶器で14は淡い緑色釉を施した皿、15は外面に緑釉を施した灯明具の蓋である。また、中国産の華南三彩の水鳥形の水滴（図版451の29）が含まれる。17世紀中頃の遺物である。

井戸Ｇ2455（図版452）　出土した遺物は少なく、土師器皿のみ図示した。３～５は丸底の中型皿、６～15は圏線のある大型皿である。Ⅺ期新段階に属する。

池Ｇ1972（図版452）　16～20は土師器の圏線のある大型皿である。Ⅺ期新段階に属する。21は肥前系陶器の灰釉を施した皿である。22は瀬戸・美濃系の鉄釉を施した天目碗である。17世紀中頃の遺物である。

土壙Ｇ1157（図版12・453）　１～７は土師器皿である。１～３は小型皿、４は丸底の中型皿、５～７は圏線のある大型皿である。Ⅺ期新段階の新相に属する。９～13は肥前系磁器である。９は白磁小杯である。14・15は陶器碗である。14はいわゆる呉器手碗で、胎土は黄白色である。内外面に灰釉が掛けられる。京都産である。15は瀬戸・美濃系の平碗で灰釉を施す。16は漆器の折敷で木部は腐食して残存せず、漆膜のみ残存している。縦約７cm、横約10cmが残存する。金箔で24弁の菊花文と桐文が施されている。

池Ｇ1234Ａ（図版453）　17～35は、土師器皿である。17～20は小型皿、21～23は丸底の中型皿、24～35は圏線のある大型皿である。Ⅺ期新段階の新相に属する。38～40は焼塩壷の蓋・身である。41～45は肥前系磁器である。44は青磁碗で高台は無釉である。46は瀬戸・美濃系の陶器碗である。茶褐色の鉄釉を施し、内外面に灰釉を施釉する。

穴蔵Ｇ749（図版９～11・454～462）　土師器皿類（図版454の１～24）には小型皿（１～６）丸底の中型皿（７～９）、圏線の付く大型皿（10～24）がある。Ⅻ期古段階の新相に属する。

土師質土器には炮烙（27）、羽釜（28）、焼塩壷蓋・身（25・26）がある。図版454の29～53、図版455～458、図版459の１～４は磁器で、国産のものと輸入品がある。国産は肥前の染付・白磁・赤絵・五彩・金銀彩など多様である。染付には杯・碗・皿・鉢・合子・香炉・瓶・壷など豊富な種類がある。図版454の29～33は染付の端反形の杯である。33は出土量が多く19個体以上出土している。染付の碗類にも34、38、39、42など同文様で数が揃うものが多い。37は面取りをする碗で、例が少ない。36は口縁端部が釉剥ぎされ、蓋が付く器形である。図版456の５・６は合子の蓋と身である。同法量であるが、それぞれ絵付が異なり対にはならない。７は香炉で、祥瑞写しとみられる。14・15は鉢で、口縁部を外側に折り返す。12・13は小型で体部の丸い壷である。図版457の１～４は瓶類である。３は同様のものが２個体出土している。４は頸の細長いタイプである。図版455の１～８は染付皿である。１～３は錆釉染付で丸窓内に絵を描く。高台が高い器形で、他に例が少ない。５～８は中型の皿で、見込に兎、鷺、宝文などが描かれ、６の蝶の文様は例が少ない。４は染付の隅入り皿で、高台内には「大明年製」の銘がある。同様の皿が10枚出土した。白磁には杯・碗・皿類・香炉・ミニチュア碗がある。図版454の50・51は端反の杯で器壁が薄い。52・53は碗で、釉調には透明感のあるものや濁っているものも含まれる。この碗は16個体以上確認している。図版455の10と図版456の１～３は皿で、菱形や輪花状の形に作る。型打成形で内面には細かい布目痕を残す。図版456の３は口紅が付く。図版455の10と図版456の１・２は同様のものが10個体、図版456の３は同様のものが４個体ある。図版456の４は香炉である。小振で三足が付く。図版454の49は、ミニチュアの碗である。赤絵には碗と皿がある。図版454の43は古九谷様式の碗で、見込にも絵を描く。図版455の９は小型の皿で高台が高い。見込には草花を描き金彩する。図版454の44～48は金・銀彩を施す碗・皿である。外面と見込に呉須で花文を入れ、赤色と金・銀彩で縁取る。法量の異なる５種類の組物で、ほぼ３組ある。すべて端反の特殊な器形をしている。この構成はほとんど例をみない。注文品の可能性がある。図版456の８～11は五彩の鉢と壷で、それぞれ蓋が付く。鉢は中国風のデザインである。壷はロクロ成形後に面取りをする。ともに輸出用と思われるものである。中国産には景徳鎮窯系の青花と漳州窯系の青花・五彩などがある。景徳鎮窯系の青花には、杯・碗・鉢・皿・印籠などがある（図版457の８～18、図版458の１～４、図版459の１）。図版457の８は外面に「福寿康寧」の文字を書く碗である。鉢は10のような口縁部が稜花状の小振のものと、いわゆる兜鉢（13～17）がある。見込の絵には水鳥やバッタがある。12は小型で浅いタイプである。18は吉祥文尽くしの鉢である。８と12は同器形で同文のものが10個体ずつ出土している。図版459の１は器壁が非常に薄く、脚が付く馬上杯と呼ばれる。図版458の３と４の皿と馬上杯も、それぞれ複数出土している。図版458の１は印籠とみられる。両脇に紐通しの穴がある。蓋と１段が出土しているが、下部の構造から２段以上あるとみられる。図版457の５～７、図版458の５・６は漳州窯系の青花である。図版457の５・６の鉢は、外面や口縁部が同様の絵付で、見込の文字には「魁」などがある。７は体部が外側に開く浅い碗である。図版458の６は大皿である。７は五彩のいわゆる印判手大皿である。白化粧をし、見込には山水楼閣文を描く。底部に

は砂が多く付着する。８は徳化窯系の白磁碗である。見込に目痕があり、高台内には型作りの際の皺が残る。図版458の９と図版459の２は竜泉窯の青磁の皿と香炉である。14～15世紀のものである。図版459の５・６は宜興窯の紫泥茶罐と蓋である。身は板造りで底部と体部の接合部には細かい皺が残り、把手のはずれた跡が残る。蓋にはつまみ中央に湯気抜きの穴があく。他の輸入磁器には、朝鮮産の白磁鉢（図版459の３）、ベトナム産の白磁碗（図版458の４）がある。３の鉢の見込には砂目痕が残る。４の碗は型押し成形で、高台が低いのが特徴である。図版459の７～23、図版459～462は陶器である。国産には瀬戸・美濃系、京都、信楽、伊賀、丹波、備前、高取系、肥前系など各地のものがある。器形は碗、皿、鉢、香炉、茶入、水指、壷、瓶など豊富である。図版459の７～10は京焼で、７は鉄釉掛の筒形碗、８・９は平碗である。９の高台内には不明の刻印がある。10は底部のみの破片で、高台内に「音羽」の刻印がある。21は瀬戸・美濃系の天目碗である。11・12は高取系で、11は灰釉掛の筒形碗で碁笥底である。12は貝目痕が付く筒形碗である。13～15は肥前系で、14・15は鉄絵の沓形碗である。13は青緑釉掛の丸碗である。19・22は合子と香炉である。共に胎土がやや黒っぽく、白化粧をすることから肥前系と考える。23は鉄釉掛の香炉である。18は鉄絵の鉢で胎土目が残る。16は溝縁皿で、見込に三日月形の砂目痕を残す。10枚揃である。17は高取系の口縁部を内側に歪めた鉢で、高台が高い。図版460の１～12は茶入である。３～５・10は瀬戸・美濃系、８は中国製とみられる。その他は産地を特定できない。形の種類が多く、一括出土としては多量である。15は御深井釉が掛かる瀬戸・美濃系の壷である。13は肥前系の広口壷である。14は器壁が薄く、内面にタタキ目が残る水指である。肩部には耳が付けられ、胴部にはヘラ描文がある。製作手法から高取系とみられる。19は焼締で桶形をしている鉢である。胎土から丹波産とみられる。16は焼締長胴瓶で、器壁が厚く、内面には強いロクロ目が残る。胎土は赤褐色である。ベトナム産の長胴瓶に類品がある。17・18は備前の壷類である。17は頸部の細い瓶で、18は底径が大きい船徳利である。図版460の20と図版461、図版462の１・２は各種の壷である。図版460の20は肩衝き形をした伊賀産である。図版461の１は肩にクシ描きの波状文のある備前産である。２・３は高取系の四耳壷である。図版462の２は玉縁状の口縁をもつ大型の壷である。長石の粒を多く含む胎土から信楽産と考える。器高は約90cmである。図版461の５は中国産とみられる。図版461の４と図版462の１は産地を特定できない。図版462の３・４は丹波産の擂鉢である。他にはタイ産の四耳壷がある（図52）。

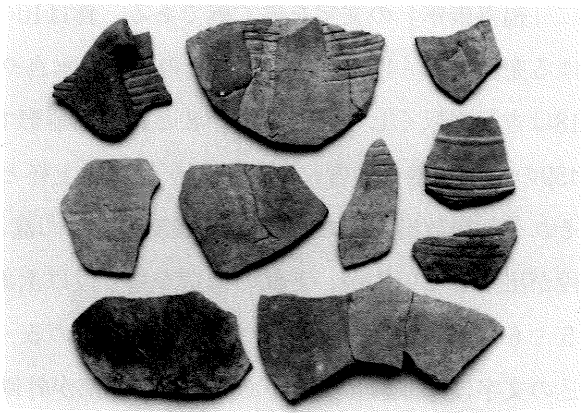


図52　穴蔵Ｇ749出土のタイ産四耳壷

整地Ｇ3751（図版463～467）　図版463の１～20は、土師器皿である。１～７は小型皿、８～20は圏線のある大型皿である。Ⅻ期古段階に属する。21～25は土師質土器である。21・22は小壷である。25は焼塩壷で無刻印である。磁器は肥前系と中国

産がある。肥前系は図版463の27・31～33・35～49、図版464の１～６・８・９、図版465の１～５、図版466の５・８、図版467の２である。図版463の37は六角形の祥瑞写しの香炉である。39・40・43～46は白磁で、碗皿以外のものとしては、41・42の香合の蓋・身がある。44・45は型打皿である。47～49、図版464の９、図版465の５、図版466の５、図版467の２は青磁である。図版463の47は高台内無釉の碗である。図版466の８は色絵鉢が火災によって溶着した状態のものである。中国産は図版463の26・28～30・34、図版464の７、図版465の６・８～12、図版466の１～４・６・７、図版467の１・２である。図版466の４は青花鉢、６は竜泉窯の青磁盤、７は青花の壷で口縁部と底部のみで全体像は不明である。図版465の６は瑠璃釉の大皿である。漳州窯系は、図版464の７、図版466の２・３、図版467の１で、図版466の２は五彩麒麟文盤、３は五彩牡丹鳳凰文盤、図版467の１は五彩羅漢文盤である。図版465の７は、吉弔を像った水滴である[48]。産地は特定できない。施釉陶器には肥前系、瀬戸・美濃系、京都産がある。肥前系は図版467の４・５・15で、４は全面に灰釉の折縁皿、５は灰釉の段皿である。15は鉄釉茶入である。瀬戸・美濃系は、図版467の８・11・13・14である。８は美濃伊賀で、長石釉を流し掛けした水指である。11は肩部から胴部にかけて灰釉を流し掛けした四耳壷である。底部に異体字の刻印がある[49]。13・14は鉄釉茶入である。京都産は図版467の３・６・７・16である。16は体部外面に金で上絵付を施した碗である。３は軟質施釉陶器で、三彩蓮池水禽文皿である[50]。６は鉄釉を施釉した蓋で、胎土は灰白色を呈し、細かく密である。７は黄味かかった白色の細かい胎土である。七角形で隅切で花弁を模し、内外面に鉄釉を施釉する。内面に円形の接続痕があることから釣灯籠形の天井部と考える。９・10は伊賀産で、９は水指で胎土は灰白色で堅く焼しまり、胴部中央をしめた分胴形で口縁は矢筈口である。口縁部から灰釉を流し掛ける。10は水指で、底部から胴部下半は袋状で、胴部は直立する。外面にはクシ描の沈線がめぐり、胴部中央の屈曲部には二方に耳を貼付ける。体部には灰釉を施す。12は、緑釉の蟹形の香合の蓋で、産地を特定できない。17世紀後半の遺物である。

土壙Ｇ1447（図版468～479）　図版468の１～34・43は土師器である。１～６は小型皿、７～10は底部中央を凹ませた中型皿、11～15は丸底の中型皿、16～31は圏線のある大型皿、32・33は特大型皿である。Ⅻ期古段階である。34は蓋で外面は丁寧にナデ調整される。43は小型の高杯である。35～42・44～65は、土師質土器である。35～38は小型壷である。39～41はミニチュアの蓋である。42は灯明皿のミニチュアである。44～48は鉢である。49～54は焼塩壷蓋、55～60は焼塩壷で狭口のものである。61・62は無刻印の焼塩壷、63～65は「ミなと藤左ヱ門」の刻印のある焼塩壷である。磁器は肥前系と中国産で大半は肥前系が占める。肥前系は、図版468の66～82、図版469～472、図版473の１～９、図版476の11～13である。肥前系の碗・皿は1640年代の高台無釉の碗などが中心で、1670年代のものも少量含む。図版473の９・11～20、図版474・475、図版476の１～10は中国製の磁器である。漳州窯系は図版474の３・５、図版475の15、徳化窯は図版476の４、竜泉窯系は図版473の22である。それ以外は景徳鎮窯系である。肥前系、中国産とも図示したものと同一の器形・文様を有するものが複数出土しており、組物を

構成していたものと思われる。施釉陶器は瀬戸・美濃系と肥前系が大半を占め、わずかではあるが京都産が含まれ、図示していないが１点中国産の華南三彩盤の破片も出土している。瀬戸・美濃系は図版476の14・17・20、図版477の11～17・21～25・30である。図版476の14・17・20、図版477の14・24・31は鉄釉を施し、上から灰釉を流し掛ける。図版477の11～13・17・21・23・25は鉄釉である。図版477の15は長石釉、16は灰釉である。肥前系は、図版477の１～６・８～10・18・20・26～29、図版478の１～４、図版479の９である。図版477の４・５は京焼風陶器の平碗で、４は高台内に「清水」の刻印がある。５は上絵で赤・黄緑・青彩で花文が描かれている。刻印はない。２・６・10は灰釉の碗である。８は鉄釉の鉢である。29は口縁部は無釉で、肩部から底部際まで鉄釉である。図版478の３は下半部は欠損するが、藁灰釉を施した双耳花生である。図版479の９は鳥形の鉄釉水滴である。京都産は図版476の15～19、図版477の７である。図版476の15はいわゆる呉器手碗で、胎土は赤褐色で、やや粗くて軽い。体部内面に菊文を施し、透明釉を施釉する。図版476の16、図版478の５は軟質施釉陶器で、16は内面に赤で花文を描き、透明釉を掛ける輪花皿である。７は全面に緑釉を施釉した隅切の折敷で、縁に突線をめぐらす。図版476の18・19は鉄釉天目碗である。18は暗褐色を呈し、細かい胎土である。高台は大きな内反り高台で、高台内と腰部はナデ調整が施される。19は灰白色を呈し、やや粗い胎土で18とは異なるが形態・調整は同じである。瀬戸・美濃系としては異質で、京都産の可能性も考えられる。図版477の７はいわゆる呉器手碗で、高台は欠損しているが高い高台が付くものと推定される。胎土は細かく、赤味を帯びた黄白色で全体に灰釉を施す。その他の陶器には丹波産・備前産・信楽産がある。丹波産は図版477の19・30と図版479の１～６である。図版479の７は備前である。８は坩堝で底部に穿孔が有り、植木鉢に転用されたと考えられる。

土壙Ｇ1717（図版480～482）　土師器皿類には小型皿（図版480の１～８）、圏線のある大型皿（９～16）がある。Ⅻ期中段階に属する。土師質土器には焼塩壷（22～28）、小型壷（17・18）、鉢（19～21）がある。26～28は堺系の焼塩壷蓋身である。28は焼塩壷で二重枠「泉州麻生」の刻印がある。26・27は蓋である。22～25は狭口のものである。21の鉢は白い精良な土を使う。図版480の29～62、図版482の１～10は磁器で、ほとんどが肥前系でわずかに中国産がある。肥前系の染付の杯・碗には型紙摺（41・42）、コンニャク文（43・48・53）などがみられる。高台内に「太明年製」「大明成化年製」などの銘を書くものが多い。皿は見込にコンニャク文五弁花をつける。図版481の５は見込蛇ノ目釉剥ぎで、径の小さい高台が付く。図版481の１は薄瑠璃釉の染付鉢である。図版480の58～62は白磁の杯・碗・蓋物である。図版481の６は白磁の皿で、見込は蛇ノ目釉剥ぎをする。図版481の２の香炉は青磁で蓋が付くタイプである。図版480の36は赤絵金彩の杯であるが、上絵付が消失している。47は染付の上に赤・青・緑彩で上絵付する碗である。碗や鉢には蓋付きのものもある（図版480の55・56）。図版480の37は景徳鎮窯系の青花端反杯である。図版481の11～30は施釉陶器で、肥前系、京・信楽系、瀬戸・美濃系、備前産がある。肥前系には碗・皿などがある。13・14は京焼風陶器の平碗である。大きな高台内には「森」や異体字の刻印がある。18・19は青緑釉で、19は蛇ノ目釉剥ぎの皿である。21は灰釉系で

蛇ノ目釉剥ぎの皿である。15・16は陶胎染付で、釉が白濁している。京・信楽系には、碗・蓋・筒形容器がある。11は上絵付の碗で、白・青彩である。見込の目痕を絵付で隠している。12は平碗である。見込に目痕があり、錆絵染付の小さな草花を描く。23～25は筒形容器である。25は内面にも灰釉が施釉される。23・24は香道具立とみられる。27は灰釉の土瓶蓋である。30は信楽産の鉢で長石釉が掛かる。26は備前産の小型壷である。20・28は瀬戸・美濃系で、20の皿は長石釉が厚く掛かる。28は鉄泥掛の壷の落し蓋である。31は焼締で、匣鉢とみられるが産地を特定できない。22・29は軟質施釉陶器である。22の鉢は蓮華を浮彫し、透明釉を掛ける。29は内外面に透明釉を掛けた鬢水入である。図版482の2は信楽産の擂鉢である。1は窯道具三足トチンである。他には底部に「御菩薩」刻印のある鍋、備前の擂鉢、丹波産の壷や擂鉢などがある。17世紀後半の遺物である。

土壙G1716（図版482～487）　図版482の3～32は、土師器の皿と蓋である。3～10・32は小型皿、11～14は底部中央を凹めた中型皿、15～18は丸底の中型皿、19～28は圏線のある大型皿、29～31は蓋である。33は3箇所に穿孔がある。Ⅻ期中段階に属する。33～38は、土師質土器である。33・34は小型壷である。35は型作りの蓋で天井部に刻印がある。図版482の39～61、図版483～485は肥前系の磁器である。49は胎土は白色で細かく、器壁は薄い。体部外面には菊花文をめぐらせ、草花文がある。禁裏注文の製品である。図版482の57～61、図版483の24～27、図版484の13は白磁である。図版482の59・60は外型成形で、草花文が浮彫される。図版483の27は口紅のある平碗である。28は見込に色絵で和歌が書かれている。図版484の15は型打の蓮葉形の皿で、器壁が薄く、高台が高い。薄瑠離釉で葉を表わし、鷺を白く抜く。図版485の10・15は赤・青・黄彩で草花を上絵付した柿右衛門様式の壷である。図版486と図版487の1～11・14は施釉陶器である。図版486の1～15・17・18と図版487の6～9・14は、京都産である。図版486の7は金・緑・青彩の上絵で注連縄文が描かれる。8は底部から直線的に開く碗で、体部下半に凹状の圏線をめぐらす。胎土は灰白色で細かく密である。畳付以外に鉄釉を施す。9は体部外面の高台際から上部をヘラで粗く回転ケズリし、縦方向にヘラケズリを施す。精良な白色の胎土で高台畳付を除いて全面に透明釉を施す。10は体部外面に菊花文、11・12は体部の内外面に菊花文を錆絵染付で施す。この3点はいずれも目痕はない。11の高台内には、「御菩薩」の刻印がある。13・14には見込に目痕が3箇所ある。14・15は高台内に「清閑寺」の刻印がある。17・18は絞胎で見込に目痕が3箇所ある。図版487の6～8は透明釉を施した蓋である。9は錆絵染付の蓋である。14は六角形の鉢である。胎土は灰色でやや粗い。器壁は薄い。外面に刷毛目、見込には花文を型押しし、白泥で象嵌する。図版486の16～24、図版487の2～5・10は、肥前系陶器である。図版486の19・20は灰釉を施す碗である。21は体部外面に山水文を施した陶胎染付である。16は高台内に「福次」の刻印がある。22は高台内に「木下弥」の刻印がある。いずれも京焼風陶器の平碗である。図版487の3は灰釉の折縁皿である。4は青緑釉の皿で見込は蛇ノ目釉剥ぎされる。5は鍔縁で灰釉の皿である。10は青緑釉を施した蓋である。図版487の1は呉須と錆絵で同心円の文様を施す。京焼の可能性が高い皿である。図版487の12は軟質施釉

陶器の鬢水入である。胎土は精良で、透明釉を施す。焼締陶器は擂鉢が主で、信楽産が多い。図版487の11は丹波産の蓋である。13は匣鉢である。15は三足トチンである。16は信楽産の擂鉢である。17世紀後半の遺物である。

土壙Ｇ1370（図版488・489）　図版488の１～17は、土師器皿である。１～６は小型皿、７・８は丸底の中型皿、９～17は圏線のある大型皿である。Ⅻ期中段階の新相に属する。18～27・29は、土師質土器である。18・19は焼塩壷蓋・身である。20～23は狭口の焼塩壷蓋・身である。身は、口縁部の立上がりが短く、撫肩である。24はミニチュアの皿である。25・26はロクロ成形の鉢である。27は瓦灯の身である。29は体部外面をミガキ調整した火入である。体部中央に雲形の窓をあけ、背面に円形の穴をあける。28は瓦器で、器形の類例を見出すことができなかったが、外面は丁寧なヘラ磨きが施されていることから蓋とした。図版488の30～49は、肥前系磁器である。38・39は菊花文を主に花文や菱形格子文が描かれた碗である。器壁は薄くて軽く、高台畳付部の釉はケズリ取って滑らかな平坦面に調整される。40は体部外面に赤・金彩で上絵され、見込に手描きの五弁花文が施された碗である。41は体部内外面に上絵で草花文を施した色絵碗である。49は染付の香炉である。図版489の１～16・18・19は、施釉陶器である。図版489の１～７・11・12は京焼で、丸碗・平碗・小皿などの器形がある。１は体部外面に青・赤彩の上絵で花文が施された杯である。２・３は鉄釉を施した碗である。４～６は体部外面に錆絵染付の平碗で、器壁は薄く、刻印はない。７は体部内面に錆絵染付の草花文がある平碗である。高台内は渦巻状に作られる。図版489の９・10・15・16は、肥前系陶器である。９は刷毛目碗である。10は京焼風陶器の平碗で高台内に「木下弥」の刻印がある。15は耳付花生で胎土や釉調から高取産の可能性があるものである。13は緑釉を施した碗である。14は外面に呉須で文様を描く白釉の碗である。16は口縁部を輪花に凹ませ、鉄釉を施釉した三足盤である。高台内に墨書があるが解読ができない。胎土は暗灰色で、白色の石が混じり、硬質である。17は信楽産の擂鉢である。18は丹波産の蓋である。19は備前の蓋である。18世紀初頭の遺物である。

土壙Ｇ1273（図版490・491）　図版490の１～20は土師器皿である。１～４は小型皿、５～９は丸底の中型皿、10～19は圏線のある大型皿、20は特大型皿である。Ⅻ期中段階に属する。土師質土器には小型壷（21）がある。図版490の22～47、図版491の１～９は肥前系の磁器で、染付と白磁がある。染付には碗・皿・蓋物・仏花瓶などがある。図版490の25～27は碗で、器壁が薄く、高台の作りも丁寧である。菊花文と枝垂れ桜・竹垣・草の文様を組合わせ、高台内には圏線や銘がなく、禁裏からの注文品とみられる。33・34は薄手半球碗である。31は波佐見系の製品で底部が厚い。32は松や山の絵柄を型紙摺にする。菊・桐・紅葉などコンニャク文の碗もある。碗類に施される五弁花はほとんど手描きである。皿は波佐見系の製品が多い。44の口径が20cmを越える中皿にはハリ支えが５箇所ある。43のような高台径が小さく、やや高い皿もみられる。皿類に施される五弁花はコンニャク文が多い。高台内には「太明年製」「大明成化年製」などの他に角枠の中に「福」を書くものが多い。38・39・45は白磁で紅皿、碗、型押しの輪花鉢である。図版491の１～８は鉢や碗類の蓋である。鉢類の蓋のつまみには数種類があり、

板つまみのものが多い。図版491の10～25は陶器で京・信楽系、瀬戸・美濃系、肥前系の製品がある。10は京焼の丸碗で外面に松竹文を青・緑で描き、金彩を施す。内面には小さな梅文を描く。径の小さい高台が付く。16はいわゆる煎じ碗である。白化粧で錆絵の椿を大きく描く。器高が高く初現期のタイプとみられる。15は灰釉と鉄釉を掛分ける碗である。口縁端部がやや開き気味である。21は鉄釉掛した蓋で、菊花を象る。裏にはヘラ描きで「大」と書く。22の蓋はやや赤っぽい胎土で、上面に透明釉を掛ける。京焼と思われる。11～14は京・信楽系の平碗で、内面に草花などを錆絵染付で小さく描く。12には見込に目痕がみられる。17は瀬戸・美濃系の天目碗である。図版491の18～20・23は、信楽産の陶器である。23は鉄釉の壷である。18～20は白濁釉の鉢で口縁部が楕円形に歪められている。鉄釉の土鍋（24）には内底に目痕が残る。25は肥前系の京焼風陶器の鉢である。精良な土で、高台を大きく削り出す。図示していないが、他には輸入白磁の壷や碗がある。陶器には丹波産の壷や擂鉢、信楽産の甕や擂鉢などがある。17世紀末から18世紀初頭の遺物である。

土壙Ｇ1133（図版492～496）　図版492の１～21は、土師器皿である。１～10は小型皿、11～21は圏線の付く大型皿である。丸底の中型皿には図示できるものがなかった。Ⅻ期中段階に属する。土師質土器には22の高い輪高台の付く火入、23の火消壷蓋、24の炮烙がある。25は軟質施釉陶器の皿で、ロクロで成形する。Ⅻ期新段階の土師器皿を写したとみられる。鉛釉を薄く掛けている。図版492の26～40、図版493～495、図版496の１～13は肥前系の磁器である。染付には碗・皿・鉢・壷などがある。図版492の32は碗で、器壁が薄く高台の作りも丁寧である。菊花文と藤文を組合わせる。高台内には圏線と銘を入れない。禁裏からの注文品とみられる。33は波佐見系の製品で底部が厚い。34は薄手半球碗で、高台が小さい。26はコンニャク文と手描きを併用する碗である。碗類に施される五弁花はほとんどが手描きである。高台内に「太明年製」「大明成化年製」などの他に角枠の中に「福」を書くものもみられる。皿は口径13～14cmのものが多い。ほとんどの皿が３～６枚以上揃っている。この大きさの皿には高台内にハリ支えが残る。図版494の１は碗の蓋で、絵柄は菊花文と竹文を組合わせる構成である。禁裏からの注文品とみられる。図版494の８～15、図版495の３～６など、染付の鉢には蓋も同時に出土したものが多い。つまみの形状は数種類ある。図版495の１は見込に仏手柑を描く輪花皿で、口径39cmと大型である。２は色絵の魚形の変形皿である。緑・青・赤彩を使う。図版496の１は柿右衛門様式の色絵輪花鉢である。青・黄・赤彩を使う。２・３は蓋付の小壷である。５～10は白磁で、碗には大小の２種類がある。小型の壷には蓋付のものがある。11～13は青磁で鉢、蛇ノ目釉剥ぎの皿、九角柱状の香炉がある。12の内面には陰刻模様があるが不明瞭で図化できない。図版496の14～26は施釉陶器で京・信楽系、肥前系、瀬戸・美濃系がある。16は京焼の鉄釉丸碗である。精良な胎土で、器壁が薄く高台が小さい。17の平碗は錆釉と呉須で菊花文を描く。23は錆絵の合子蓋。18は平型の鉢で白化粧に錆絵染付とイッチンで花を描く。高台内には判読不明の墨書がある。25は筒形容器で青・緑彩で笹の絵を描き金彩をする。24は灰釉の土瓶蓋である。14・15・19・26は肥前系陶器である。14の刷毛目碗の見込には蛇ノ目釉剥ぎがある。

19は京焼風陶器の火入で、高台内には異体字の刻印がある。26は体部上半に灰釉を掛ける壷である。20・21は瀬戸・美濃系で天目碗や灰釉の小皿がある。焼締陶器には、信楽産の擂鉢（27）がある。図示していないが、他には丹波産の瓶、京・信楽系の壷、瀬戸・美濃系の甕などがある。17世紀末から18世紀初頭の遺物である。

土壙G639（図版497）　1～32は、土師器の皿と蓋である。1・2は小型皿、3～8は丸底の中型皿、9～26は圏線のある大型皿、27～32は蓋でつまみが断面逆台形になる。Ⅻ期中段階新相に属する。33～55は肥前系磁器である。35・36・49は菊花文を施し、器壁は薄く、作りは丁寧である。37・44・45はいわゆるくらわんか手の碗で、45は蛇ノ目釉剥ぎである。48は体部内面に型打成形で陽刻文を施した白磁碗である。18世紀初頭の遺物である。

整地G3752（図版498・499）　図版498の1～13・16は土師器類である。1～3は小型皿、4は丸底の中型皿、5～13は圏線のある大型皿である。Ⅻ期中段階から新段階に属する。16は小型の高杯である。14・15は土師質土器の小型壷である。17は土師質土器の瓦灯蓋である。図版498の18～29・31～36、図版499の3～5は、京焼である。図版498の18～20・22の丸碗には外面に錆絵染付を施す。21は上絵の痕跡は認められるが、文様は不明である。23は金・青・赤彩の上絵で、注連縄文が施される。高台内に「清水」の刻印がみられる。24は鉄釉を施した碗である。25は体部が開き、口縁端部がやや外反する碗である。淡黄白色で、やや粗い胎土である。全体に薄く灰釉が施されている。畳付には砂目風の痕跡が3箇所ある。高台内に「仁清」の刻印がある。26は平碗で体部外面に錆絵染付で菊花文が施される。27には高台内に「御菩薩」の刻印がある。29・35には見込に3箇所の目痕がある。32には高台内に青紫色の上絵で「上」が書かれる。底部にひび割れがみられることから傷隠しとも考えられる。37は胴部の3箇所を押えた凹みのある半筒の碗である。胎土は灰色に黄白色の斑を呈し、密である。胴部の器壁は薄作りで、高台は太く作られ、丁寧にナデ調整される。京焼の可能性がある。図版499の5は軟質施釉陶器の皿で胎土は黄白色で、やや粗い。黄白色の釉を施して、内面に鉄絵で施文する。高台は碁笥底である。図版498の30・38～40、図版499の1・2は、肥前系陶器である。30は見込に山水楼閣文が施される碗である。胎土はやや粗く、黄白色を呈する。高台は中央に渦巻が彫られ、刻印はみられない。京焼風陶器では類例をみない。38は丸碗で淡黄緑色の胎土で畳付を除く全面に灰釉が施される。39は刷毛目を施した筒状の碗である。40の見込には上絵の痕跡がある。図版499の2は体部外面に錆絵で施文された香炉である。高台内に「木下弥」の刻印がある。図版499の6は備前擂鉢で外面体部に火襷がみられる。18世紀初頭の遺物である。

土壙G747（図版12・499・500）　図版499の7～32は土師器皿である。7～11は小型皿、12・13は丸底の中型皿、14～31は圏線のある大型皿、32は特大型皿である。Ⅻ期新段階からⅩⅢ期古段階に属する。33～36は狭口の焼塩壷の蓋と身である。図版499の37～44、図版500の1～9は肥前系磁器である。図版499の44は赤絵の小碗である。40は見込に手描きの五弁花文が入る碗である。42・43は白磁碗である。図版500の1は見込に蛇ノ目釉剥ぎのある碗である。9は青磁染付の蓋である。図版500の10～16は京都産である。11は青・緑・赤彩の上絵碗である。

12は金彩の碗である。胎土は灰褐色で、細かく密である。高台部を除いて天目釉が施され、体部外面には金箔で菊花文と竜胆文が貼付けられる。13・14は平椀である。上絵は不明であるが、13には金彩が認められた。16は上半部は欠けているが、外面に錆絵染付のある筒形容器である。15は鉄釉の鍋である。図版500の17～19は肥前系陶器である。17は京焼風陶器の碗である。高台内に「木下弥」の刻印がある。18は見込に蛇ノ目釉剥ぎのある皿である。20は瀬戸・美濃系の天目碗である。18世紀前半の遺物である。

土壙G593（図版501・502）　図版501の１～22は、土師器類である。１・２は小型皿、３～６は丸底の中型皿、７～20は圏線がある大型皿、21は特大型皿である。Ⅻ期新段階に属する。22は小型の高杯の杯部である。土師質土器には焼塩壷の蓋と身がある。23は堺系の焼塩壷蓋である。24は狭口の焼塩壷である。図版501の25～43は肥前系の磁器である。31～33は波佐見系の製品で、31には蛇ノ目釉剥ぎがある。27は薄手半球碗で、高台が小さい。高台内には角枠の中に「福」などを書くものが多い。29の碗は丸形で器壁が薄く、高台の作りも丁寧である。菊花文と格子文を組合わせ、高台内には圏線や銘を入れない。禁裏からの注文品とみられる。39はU字状高台の皿である。34、37などの口縁内部を釉剥ぎした鉢もある。35・40～42は白磁で、35は型押しの筒形碗である。43は赤絵の合子身である。施釉陶器はほとんどが京・信楽系である。丸碗がほとんどを占める。44は上絵付の小碗で青色の絵付は消失している。45は錆絵染付で小さな草花を描く。46は外面に赤・黄・青彩で絵付をし、見込の目痕は花を描いて隠す。47は上絵が消失しているがわずかに唐草文がみえる。50は根付き松を丁寧に描き、高台内にも施釉する。51は煎じ碗である。52は平碗で、見込に赤・緑彩で大きく菖蒲を描く。54は上絵付の合子蓋である。55は透明釉の土瓶蓋で、56は鉄釉の土鍋蓋である。53の皿や57の錆絵の筒形容器もある。図版502の１は軟質施釉陶器の角皿である。全体に白化粧を施し、見込には錆釉と朱で松を描き、側面の縁帯文様は手描きの唐草文を付ける。裏面には「乾山」銘を大きく書く。２は土瓶とみられ、白化粧の後に錆絵染付の松文を描く。３は鉄釉の土鍋である。４は信楽産の鉄泥掛の擂鉢である。図示していないが、他には肥前系や瀬戸・美濃系の陶器碗や皿、堺・明石系の擂鉢などがある。18世紀前半の遺物である。

石組土壙G1015（図版502）　図版502の５～22は土師器の皿と蓋である。５・６は小型皿、７は丸底の中型皿、８～19は圏線のある大型皿、20は特大型皿である。Ⅻ期新段階に属する。つまみは欠損しているが大型皿の蓋21・22がある。蓋の上面の調整は丁寧である。土師質土器には23の絞胎の小型風炉がある。24～28は磁器で肥前系の染付である。24は薄手半球碗である。25は丸碗で器壁が薄く、高台の作りも丁寧である。菊花文と井桁文を組合わせ、高台内には圏線や銘を入れない。禁裏からの注文品である。26は波佐見系の碗である。27は筒形容器で、口縁内が釉剥ぎされる。他には板つまみの付く鉢蓋がある。施釉陶器は京・信楽系のもである。29は京焼の丸碗で白化粧をし、外面には金彩で菊花文を描くがほとんど消失している。高台内には「寶山」の刻印がある。30は平碗で見込いっぱいに赤・緑彩で草花を描き金彩を施す。高台内の傷を青彩の上絵で隠す。31は合子身で、緑彩の上絵は銀化している。見込と高台内には

傷を隠すため釉をのせる。32は錆絵の土瓶蓋である。18世紀前半の遺物である。

土壙Ｇ302（図版503・504）　図版503の１～26は土師器皿である。１～５は小型皿である。６～12は丸底の中型皿、13～26は圏線のある大型皿である。Ⅻ期古段階に属する。32は土鈴である。29は花塩壷の身である。31は人形の頭部である。30は焼塩壷で「泉湊伊織」の刻印がある。図版503の33～54は肥前系磁器である。碗では簡略化された梅樹文やくらわんか手のものが多くみられる。また口縁部内面に四方襷文がある碗もある。33は白磁の紅皿である。図版504の１～９・11～14・17～26は京焼、京・信楽陶器である。１～６は丸碗である。７～９は煎じ碗である。11～14は平碗である。17・18は蓋で透明釉である。21は灰釉の蓋物の身である。23は灰釉の火入である。24は筒形容器である。26は白化粧で透明釉の筆立である。15・16は肥前系陶器である。15の碗は山水楼閣文の陶胎染付である。10は瀬戸・美濃系の灰釉で鉄釉流しの半筒碗である。18世紀中頃の遺物である。

土壙Ｇ555（図版504）　27～41は土師器の皿と蓋である。27～31は丸底の中型皿、32は底部中央を凹ませた中型皿、33は底部中央を凹ませた大型皿、34～40は圏線のある大型皿である。Ⅻ期古段階に属する。41は蓋である。42はロクロ成形の灯火具の一部で、中央部の円孔周辺に煤が付着する。43・44はロクロ成形の鉢である。45は焙烙である。18世紀中頃の遺物である。

井戸Ｇ741（図版505・506）　図版505の１～15は土師器皿で、１～３は丸底の中型皿、４～15は圏線の付く大型皿である。Ⅻ期中段階に属する。16～20は土師質土器である。16・17は鉢形容器である。18の焼塩壷蓋は堺系のもので、19は狭口の焼塩壷の身である。20の手焙り蓋は２色の土を合わせた交胎で縞模様がみえる。土製人形は型押しで、貼合わせる。中空や底部が開口するものがある。鯛には赤彩がある。図版505の24～45は肥前系の磁器で、染付がほとんどを占める。24～26・34は薄手半球碗である。30の丸碗は器壁が薄く高台も小さい。31は見込が蛇ノ目釉剥ぎされる波佐見系の碗である。38・39の輪花皿は、蛇ノ目凹型高台である。碗蓋や皿の見込には松竹梅繋文がみられる。碗には見込に五弁花、口縁内側に四方襷の付くものがある。高台内には「富貴長春」の文字を書くものがある。28は染付に赤と緑彩で上絵付される小碗で高台径が小さい。白磁には45の碗蓋がある。図版506の１～25は陶器で京・信楽系がほとんどを占め、他には瀬戸・美濃系がある。１・２は灰釉の丸碗で、ともに高台径が小さい。３は錆絵のいわゆる熊川碗である。４は大きい高台で、見込には３箇所の目痕が残る。５はいわゆる小杉碗で、根付松を描く。９は白化粧に呉須絵付の小型筒碗である。14・15は白化粧をし、透明釉を掛ける蓋である。６は直立した口縁部を５箇所で窪めた小型の輪花皿である。16・23・24は鉄釉である。24の土瓶は体部に装飾的なケズリがあり、底部に「音羽」の刻印がある。18・19は、白化粧に錆絵染付の蓋である。21は白化粧に染付の上絵の小型瓶である。22は、白化粧で緑釉流しの筆立である。筆立の底には墨書がされているが判読不明である。10～13は瀬戸・美濃系である。10はいわゆる鎧手碗である。11は体部が外方に開く打刷毛目の碗である。12は蓋、13は双耳壷でともに灰釉である。25は堺・明石系の擂鉢である。小型で浅い。図示していないが、他に丹波産の甕や瓶、備前産の瓶、京・信楽系の土瓶や鍋類などの日用品、信楽

産の擂鉢もある。18世紀後半の遺物である。

井戸G824（図版506）　26～29は肥前系の染付磁器である。26は小杯で器壁が非常に薄く、細密な絵付をする。27は口縁内側に四方襷のある小杯である。29は蓋付き鉢で、口縁部が釉剥ぎされる。28は見込が蛇ノ目釉剥ぎの深皿である。施釉陶器には京・信楽系の灰釉油受皿（31）がある。30はおろし目皿で見込にはおろし金の絵を描く。目痕が残る。図示していないが、他には肥前系の白磁、色絵碗などがある。陶器には肥前系の碗、瀬戸・美濃系の碗や皿、京・信楽系の土瓶や鍋類などの日用品、丹波産の瓶や鉢、堺・明石系の擂鉢もある。18世紀後半に属する。

土壙G471（図版507・508）　図版507の１は、土師器の圏線の付く大型皿である。図版507の２～22、図版508の１～10は肥前系磁器である。碗・皿には菊花文と波頭・篦目・松川菱・菊葉・竹垣・重井桁・松林文などを組合わせる模様構成の一群がある。碗には端反り形や丸碗、大型のうがい碗の種類がある。丸碗には３種類の法量があり、８・９は模様構成が同じで法量の違うものである。皿にも口径が6.5・11・15・19・21cmの各種の法量がある。中には21のように器高がやや高いものも含まれる。裏模様の梅花繋文の梅花は輪郭をもっている。口径19cm以上の皿にはハリ支えが残る。全体の作りが丁寧で、高台内は無文である。禁裏からの注文品と考えられる。22は輪花皿で、高台内には「大明成化年製」の文字が書かれ、５個以上のハリ支えが残る。図版508の５は鉢で、口縁内が釉剥ぎされる。蓋には宝珠形や板状のつまみの種類がある。施釉陶器には京・信楽系、瀬戸・美濃系がある。14～17は京焼で14は丁寧な造りの急須の蓋である。15は白化粧に錆絵染付で菊花文を描いた急須で、内部底には目痕が残る。17は口縁部が内湾する鉢で、白化粧に呉須で笹雀文を描く。12・13は京・信楽系で、12は大振の碗で見込に目痕がある。13は平碗で見込に大きく緑・赤彩で草花文を描く。18は軟質施釉陶器の皿である。赤い胎土で白化粧をし、緑釉で外面は透明釉を掛ける。端部は大きく外反し、蛇ノ目風高台である。19は水注である。精良な土を使い白化粧に緑釉を流し掛ける。図示していないが、他には肥前系の白磁、青磁、色絵がある。陶器には京・信楽系の土瓶や鍋類などの日用品、信楽や堺・明石系の擂鉢がある。18世紀後半の遺物である。

池G250（図版509・510）　図版509の１～11は肥前系の磁器である。碗・碗蓋には松竹梅文や五弁花文のものが主である。１・３・10の蓋類は器高が低い。施釉陶器は丹波産と京・信楽系のものである。12は鉄釉を施して、上から黒釉を流し掛けした丹波産の甕である。図版510の７も鉄釉を施して、黒釉を流し掛けした丹波産の火鉢である。５は京・信楽系の鉄釉土鍋である。図版510の１～４は、土師質土器である。１は高台付きの皿である。２は小鉢である。３は灯火具である。４は淡橙色の胎土で、上半は失われるが、鼓形の涼炉である。皿状のサナは貼付けられており、一体化している。高台は輪高台の３箇所を切込んでいる。６は底部内面に火襷がある焼締陶器の鉢で堺焼と考えられる。19世紀前半の遺物である。

池G364（図版510）　８・９は土師器で、圏線のある大型皿である。Ⅻ期古段階に属する。10は肥前系の鉢の蓋である。12は灰釉を施した京・信楽系の油受皿である。11は灰釉を施した

京・信楽系の小碗である。13は灰釉を施した瀬戸・美濃系の小皿である。14は鉄釉の植木鉢である。19世紀前半の遺物である。

石組土壙G392（図版510）　15は瀬戸・美濃系の染付磁器で、型摺の丸文の碗である。口紅を施し貫入が多い。16の鉢も型摺である。高台内にも型摺の「福」銘がある。17は匣鉢で底部に砂が多く付着する。板起こしである。産地は特定できない。図化していないが、肥前系の染付、白磁、青磁も出土している。陶器には京・信楽系、瀬戸・美濃系の碗や鉢類、丹波の瓶、堺・明石系の擂鉢がある。19世紀後半に属する。

埋納土壙G182（図版510）　出土した遺物はすべて土師器の圏線のある大型皿である。Ⅷ期新段階の新相に属する。

池G253（図版511）　1～7は土師器の皿である。1は小型皿、2～7は圏線のある大型皿である。Ⅻ期中段階に属する。8は土製品の馬形の人形である。9は赤絵の薄手酒杯である。10・11は肥前系磁器で、10は碗蓋、11は鉢の蓋である。12～14・16・17は京・信楽系の施釉陶器で、12は灰釉を施した灯明皿である。13は灰釉を施した合子の蓋である。14は鉄釉を施した土瓶の蓋で、つまみ部は透かしが施される。16は鉄釉を施したミニチュアの鍋である。17は型作りのミニチュアの瓶で、黄釉を施す。15は甕で、鉄釉を施し、上から黒釉を流し掛ける。丹波産である。19世紀中頃の遺物である。

石組土壙G3691（図版511）　18は土師器の小型皿、19は土師器の圏線のある大型皿である。Ⅷ期新段階に属する。20は体部に「とりのなく花の山」と書かれた染付の小杯である。21は体部に錆絵のある小碗で、京・信楽系である。22は絞胎で内外面に灰釉を施した碗で、釉は失透して白濁している。19世紀前半の遺物である。

溝C156（図版511）　23は小壷である。24は狭口の焼塩壷である。25～30は肥前系の磁器である。30は白磁の合子身である。31は瀬戸・美濃系の端反碗である。33～37は京・信楽系の施釉陶器で、33・34は灰釉を施した油受皿、35は灰釉の灯明皿である。36は灰釉を施した急須の蓋である。37は急須の蓋で上面には緋襷がみられ、灰釉を散らす。38は五足のトチンで白色系の粘土で作られた円錐ピンを粘土板に貼付ける。19世紀中頃の遺物である。

溝C10（図版512）　1～11は、土師器皿である。1・2は小型皿、3・4は丸底の中型皿、5～11は圏線が付く大型皿である。Ⅻ期中段階に属する。土師質土器には花塩壷の蓋の12・13と小型壷の14などがある。12は糸切痕が残り、13は板作りである。15～31は磁器である。肥前系のものが多いが瀬戸・美濃系、京都、九谷のものも含まれる。15～18は京都産の端反小杯で、17の高台内には「与三造」銘が書かれる。29は染付の植木鉢で3箇所に脚が付く。19は九谷産の赤絵小杯で、細密な模様を描く。20は瀬戸・美濃系の端反碗である。23は染付の小型鉢で小鳥用の餌入とみられる。24は肥前系の染付皿で、見込には茶道具の絵を描く。27は赤・朱・緑・黄彩の上絵の碗蓋である。焼継され、焼継師の記号がみられる。30は青磁の小型植木鉢で六角形である。31は水滴である。施釉陶器は京・信楽系のものが大部分を占める。41は透明釉の急須蓋で、裏の中心部には「帯山」の刻印がある。32・33は小型の碗で、共に内面は白化粧

である。高台内にも施釉する。36～38・45は灰釉掛の燈明具で、45は脚付きである。38の見込には目痕がある。46は黒釉の仏飯器である。39・40は灰釉系の蓋で、39は粗い貫入が目立つ。34は陶胎染付の鉢である。粗い土で外面にはロクロ目を強く残し、白化粧する。底部には判読不明の墨書がある。42は備前の小壷の蓋である。47は軟質施釉陶器で、盃台の蓋と考えられる。全体に白化粧を施し錆釉で花文を描く。上面は花形に透かしを入れる。

土壙G45（図版513～516）　図版513の1～15・24は土師器類である。1～3は丸底の中型皿、4～13は圏線がある大型皿、14は特大型皿である。Ⅻ期中段階に属する。24は高杯の杯部である。16～23・25～28は、土師質土器である。20・21は狭口の焼塩壷である。22・23は花びら形に作る花塩壷で、25は白い精緻な胎土で作られた涼炉で、底部には「乾」の刻印がある[51]。26は、環状の五徳で、上端部には3箇所に瓶掛があり、体部には通風のための円孔がある。27は2重構造の涼炉である。28は円筒形の1重構造の焜炉である。図版513の29～56、図版514、図版515の1～7は磁器である。肥前系のものが大部分を占めるが瀬戸・美濃系、京都、中国のものも含まれる。碗には端反りのものが多くを占める。肥前系には染付の他白磁・青磁・赤絵・金彩など種類が豊富である。図版514の17は青磁の扇形の小皿である。複数枚出土している。18は赤絵染付の仙芝祝寿文皿である。図版515の6は白磁唾壷の口縁部分で、釉による接着部分で剥離している。図版513の38は白磁碗で焼継がある。他に焼継の資料は多くあるが図版513の40・51などの高台内には焼継師による記号がある。図版513の46～55、図版514の16、図版515の1・2・7は瀬戸・美濃系磁器である。図版515の7は染付の散蓮華である。図版513の37は高台内に「道八」銘を入れた端反り小碗である。また35・36の薄手酒杯もある。32は中国産の赤絵染付の小杯である。施釉陶器は、京・信楽系のものが大部分を占める。瀬戸・美濃系、備前のものも含まれる。図版515の9は京焼の筒形碗の底部とみられる。高台内に「宝山」の刻印がある。10～17は各種の小型の蓋である。錆絵やイッチン描きのものが多い。18・19、図版516の2は土鍋と蓋である。図版516の1は白化粧の上に絵付をした土瓶である。3は把手が付く急須である。4・5はイッチン描きした徳利である。6は鉄釉掛の甕である。図版515の20～23は、京・信楽系の錆絵の皿・碗である。図版516の7は白化粧に錆絵で山水楼閣文を描く火鉢である。底部に数箇所の穴が開けられている。土瓶や急須などの日用雑器には京・信楽系のものが多い。図版515の24は瀬戸・美濃系である。図版515の25・26は信楽のいわゆる腰白茶壷である。27は備前の双耳壷である。19世紀中頃の遺物である。

G区のその他（図版516・517、表82・83）　図版517の16～22は施釉陶器の碗類底部付近で、高台内には「仁清」の刻印がある。16は灰釉掛で、三日月の削り出し高台で、高台内にも釉が掛かる。小判型の印である。17は外面に錆絵がある。繭印である。18は灰釉で小さい高台が付く。幕印である。19は褐釉を掛ける。鉄分が多い土を使うため、露胎部は暗赤褐色を呈する。繭印である。20は内面に厚く灰釉が掛かる。大型の小判型印である。21は碁笥底で、体部は丸みをもって立ち上がる。外面には青彩で唐草文を上絵付する。内面は無釉である。幕印である。22は鉢とみられる。見込に圏線を彫り、白土で象嵌する。灰釉を掛ける。鉄分が多い土を使う

ため、露胎部はにぶい赤褐色を呈する。繭印である。23～25は中国の宜興窯の朱泥水注とみられる。23は蓋で、つまみの中央に湯気抜きの穴がある。返りの部分が長い。24は水注の上部である。体部は非常に薄く造る。23と組になるとみられる。25は底部から口縁部までが復元できる。内面には細かいロクロ目が付く。26・27は軟質施釉陶器で、26は鍋類の蓋とみられる。27は鉛釉を掛けた煙管である。30はオランダ製のクレイパイプとみられる。火皿とかかとそして煙管部である。煙管部は途中で切断された跡が残る。吸口部は不明である。28は備前産の大甕である。器高約80cm、口径約55cmである。29は素焼きの急須で体部に釘彫りで和歌を刻む[54]。図示していないが、この他に土壙G1447と土壙G2050から華南三彩壷が出土した。体部には花唐草文が貼付けられ、底部の破片では蓮弁と花唐草文が貼付けられる。ともに緑釉を掛ける。

表82　G区のその他土器・陶磁器類（図版516）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
8	土壙G354	19c前半	土製品	陽物				淡黄		在地	朱彩
9	埋納土壙G339	19c前半	土師質	胞衣壷蓋	12.9	2.2		鈍い橙		在地	
10	埋納土壙G339	19c前半	土師質	胞衣壷	11.0	7.1	13.3	鈍い橙		在地	
11	埋納土壙G573	18c後中	土師質	胞衣壷蓋	15.6	1.9		浅黄橙		在地	
12	埋納土壙G573	18c後中	土師質	胞衣壷	12.4	6.9	13.9	浅黄橙		在地	
13	埋納土壙G1090	18c前半	土師質	火消壷	13.0	10.0	16.6	鈍い橙		在地	
14	埋納土壙G1090	18c前半	土師質	火消壷蓋	15.8	3.9		浅黄橙		在地	図版には未掲載

表83　G区のその他土器・陶磁器類（図版517）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量（cm）			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
1	埋納土壙G2700	18c前半	土師器	皿	7.8	1.4		鈍い橙		在地	
2	埋納土壙G2700	18c前半	土師器	皿	8.0	1.3		鈍い橙		在地	
3	埋納土壙G1221	18c前半	土師器	皿	8.8	1.6		浅黄橙		在地	
4	埋納土壙G1221	18c前半	土師器	皿	8.6	1.7		鈍い黄橙		在地	
5	埋納土壙G1221	18c前半	土師器	皿	8.6	1.7		灰白		在地	
6	埋納土壙G1221	18c前半	土師器	皿	8.8	1.7		灰白		在地	
7	埋納土壙G2700	18c前半	土師質	胞衣壷蓋	13.2	1.7		鈍い橙		在地	
8	埋納土壙G2700	18c前半	土師質	胞衣壷	11.2	6.9	11.8	鈍い橙		在地	
9	埋納土壙G637	18c前半	土師質	胞衣壷蓋	15.5	1.7		鈍い橙		在地	
10	埋納土壙G637	18c前半	土師質	胞衣壷	12.9	6.9	13.7	鈍い橙		在地	
11	埋納土壙G1221	18c前半	土師質	胞衣壷蓋	14.2(推)	1.4		鈍い橙		在地	
12	埋納土壙G1221	18c前半	土師質	胞衣壷	12.0	6.8	12.6	浅黄橙		在地	
13	埋納土壙G660	18c後半	土師質	胞衣壷蓋	15.0	1.6		鈍い橙		在地	
14	埋納土壙G660	18c後半	土師質	胞衣壷	12.5	6.9	13.7	鈍い橙		在地	
15	埋納土壙G1257	18c前半	土師質	火消壷	23.9(最大)	20.3	18.5	浅黄橙		在地	
16	土壙G1405	18c初	陶器	碗		2.4(残)	5.0	灰黄	灰	京都	三日月削り出し高台「仁清」印
17	G区3面掘下げ	18c初	陶器	碗		1.9(残)	4.6	灰白	錆絵	京都	外面錆絵「仁清」繭印
18	土壙G1128	17c末	陶器	碗		2.5(残)	3.3	灰白	灰	京都	「仁清」幕印
19	土壙G1278	17c末	陶器	碗		3.1(残)	4.6	褐灰	鉄	京都	「仁清」繭印
20	井戸G592	18c初	陶器	鉢				灰黄	灰	京都	「仁清」大型印
21	土壙G1278	17c末	陶器	香合か		1.2(残)	3.0	淡黄橙	上絵	京都	唐草文上絵　碁笥底「仁清」幕印
22	G区3面掘下げ	18c初	陶器	鉢		4.9(残)	8.5	紫灰	灰	京都	「仁清」印
23	土壙G1128	17c後半	炻器	水注蓋				明赤褐			朱泥　宜興窯か
24	土壙G1128	17c後半	炻器	水注				暗赤褐			朱泥　宜興窯か
25	土壙G1128	17c後半	炻器	水注				明赤褐			朱泥　宜興窯か「思」刻む
26	土壙G73	19c前半	軟質施釉	蓋				鈍い橙	白化粧	京都	
27	検出中		陶器	煙管				白	鉛	京都	
28	土壙G1239	17c後半	陶器	甕				橙		信楽	大型　備前写し
29	土壙G354	19c前半	焼締	急須	6.4	6.8	5.4	灰黄		京都	釘書き和歌　蓮月作
30	土壙G1100	18c前半	炻器	クレイパイプ				灰白			オランダ産か

（8）H・M・N区

堀G1940（図版518・519）　図版518の1～19は土師器の皿である。XI期古段階のものである。29・30は瓦質土器の火入類である。31～37は中国磁器の青花類で、31～33・37は景徳鎮窯系、34～36は漳州窯系である。38～51は瀬戸・美濃系陶器で、38～40は灰釉の丸皿、41は灰釉折縁のソギ皿、42・43は長石釉の菊皿である。44は灰釉の小杯、45～47は鉄釉の天目碗である。48は鉄釉の三足の火入、もしくは香炉である。49は総織部の皿、50は青織部の鉢である。51は絵志野の碗で、やや沓形になる。52は炻器質ロクロ成形の碗で、内外ともロクロ目が顕著である。底部に「イ」字状のヘラ記号がある。産地を特定できない。図版519の1～13は肥前系の陶器である。3・6・8は胎土目、7は砂目の皿である。14・15・18は備前で、15は底部にヘラ記号がある。16・17は信楽の暗赤褐色の胎土を持つ擂鉢である。19・20は丹波陶器である。陶磁器産地組成では、瀬戸・美濃系陶器が肥前陶器を上回っており、その量比からみれば、江戸時代初頭の基準資料の土壙F1605に近く、織部製品がみられることなどから、やや新しい様相を示している（図53）。17世紀初頭から前半頃の遺物である。

溝H270（図版520～523）　図版520の1～42は土師器類である。土師器の皿はXI期新段階のものが主体である。39～42は高杯形のもので、用途は不明である。43～52は土製品と土師質土器類である。53～58は京都産の焼塩壷、59～62は堺系の焼塩壷で62の刻印は「ミなと藤左衛門」である。66～68は瓦質土器である。69は備前の鉢で底部に「Z」字状のヘラ描きがある。70・71は丹波陶器である。図版521の1～18は肥前系磁器で、19～35は中国磁器である。肥前系磁器と中国磁器は、ほぼ同量が出土している（図54）。肥前系磁器は碗が主で、高台は分厚いものや無釉のもので占められる。中国磁器は22の掻き落としの碗や32・33の薄手の皿などの景徳鎮窯系のものに、29・30・35など漳州窯系のものが混じる。36は算盤玉形の丹波鉢で、把手が外れた痕

種類・産地	破片数
中国陶磁器	230
肥前系陶器	243
瀬戸・美濃	341
信楽	139
丹波	48
備前	92
土師質土器	359
瓦質土器	145
軟質施釉	11
不明・その他	16
前代遺物	520

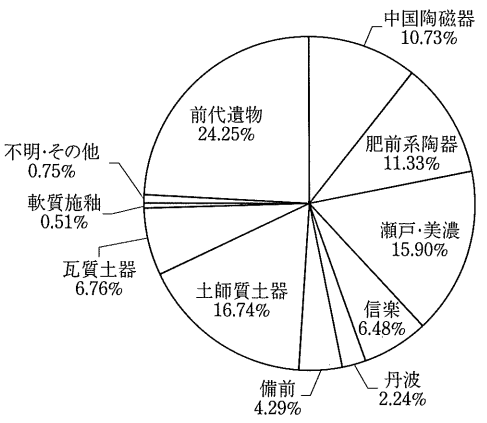


図53　H区堀G1940出土遺物産地組成

種類・産地	破片数
中国陶磁器	544
肥前系磁器	537
肥前系陶器	270
瀬戸・美濃	253
信楽	42
丹波	194
備前	33
土師質土器	582
瓦質土器	153
土製品	14
不明・その他	17
前代遺物	279

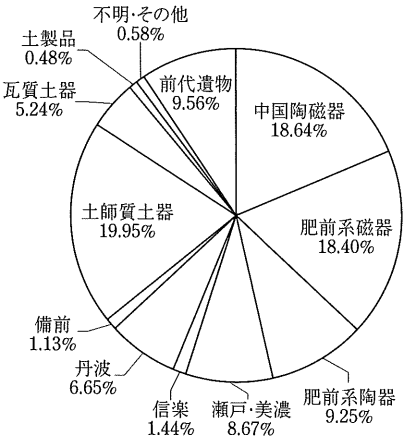


図54　溝H270出土遺物産地組成

跡が残る。口縁部内外面には灰釉が掛かり、底部は無釉である。37は肥前系陶器の灰釉片口で、内面に胎土目がある。38は匣鉢で、産地を特定できない。39は肥前系の甕で、内面には図示していないが、青海波のタタキ目が薄く残る。図版522の1～20は瀬戸・美濃系の陶器である。1・3・8・9は灰釉、2・4～7は鉄釉の碗である。13は御深井釉の菊皿、15・16は蘭竹文の志野織部皿、18・19は志野の鉢類、20はいわゆる美濃唐津の鉢である。21～40は肥前系陶器である。30・32・35など胎土目の皿が主であるが、33・34など砂目のものも含まれる。39は錆絵の蓋で、底部は糸切りである。40は福岡産の可能性がある鉄釉の耳付壷である。瀬戸・美濃系陶器と肥前系陶器は、ほぼ同量が出土している。図版523の1・2は擂鉢で、1は丹波、2は信楽産である。土師器皿や焼塩壷、肥前系磁器などから、1640年代までの出土資料であり、遅くとも焼塩壷刻印の下限年代である承応3年（1654）までのものである。[53)]

土壙H267（図版523）　3～8は土師器の皿で、Ⅻ期新段階のものである。9～12は焼塩壷で、蓋上面に「鷺坂」銘のあるものであり、11と12はそれに組合うものである。他の焼塩壷が出土しておらず、胎土や法量が一致し、従来特定できなかった「鷺坂」銘をもつ焼塩壷のセットとみなすことができた。蓋の内側には布目圧痕が残る。体部は板作りで、底部を内側から充填した後、底部外側からリング状の粘土を補填する、いわゆる3ピースの成形である。

土壙H33（図版524～526）　図版524の1～30は土師器類で、27・28は特大の皿である。29・30の高杯形のものは調整がやや粗い。高杯形のものは出土量が少ないが、基準資料の土壙B725などのものよりやや大型であり、上下の皿をつなぐ脚部は円柱状である。40の炮烙は全面外型で成形され、内面はナデ調整される。器高は浅く、桃山期のものに比べて、煮沸機能は失われる。内外面に煤が付着する。41・42の灯明皿は、ロクロ成形で透明釉を掛けた軟質施釉陶器である。口縁端部の釉の焼焦げ痕が顕著で、42の灯明皿ではほぼ全周している。土師器の皿に比べて耐久性が高かったものと思われる。軟質施釉陶器の灯明皿は、17世紀の第4四半期には出現するが、17世紀末から18世紀初頭のこの遺構では定型化している。また、44・45の鬢水入などの日常容器も出土しており、この時期には、軟質施釉陶器の整った供給体制があったものと考えられる。43は黄・緑彩の軟質施釉陶器で、陰刻花文の蓋である。内面は透明釉であるが、銀化が激しく釉が剥落しているところも多い。46・47の信楽擂鉢は、縁帯部がやや外傾して体部から直線的になるものが主流になる。図版525は肥前系磁器で、11の手描きにコンニャク文や、6の型紙摺の碗、20の墨弾きの皿などが主体である。30の上絵染付の大型皿、16の薄い瑠璃釉を流し掛けたもの、輸出用とされる18の荒磯文碗など、比較的稀少なものも含まれる。17は外面に菊花を散らしたうがい碗で、高台周辺の釉際の作りなどが極めて丁寧である。禁裏からの注文品である可能性が高い。同種のものは、18世紀後半には定型化し、見込に菊花を描くが、本例にはそれがなく、シンプルな模様構成である。28～31の色絵磁器は17世紀後半のものである。図版526の1～12は京焼である。6を除く碗類に高台内銘款はなく、高台内に意識的な小圏線を残すものや渦状に削るものが多くなる。3はやや小振の注連縄文の碗で、錆絵染付である。6の碗は腰の張った大振のもので、金で縁取った上絵はほとんど剥落しているが、

鍵・小槌などを散らした宝尽し文である。高台内は放射状にケズリ痕を残し、「清水」印を押す。高台外縁の面取は細くシャープである。胎土は際立って精良な淡黄白色である。9・10は、淡黄白色の胎土にやや白濁した透明釉が掛かる扇形の合子で、推定長約17cmである。10の内面は外面に比べて白い失透した釉が掛けられ、全面に細かい貫入が入る。底部は薄い釉が残り、左際に「仁清」印が押されている。御室窯の伝世品に大型合子は珍しくないが、上絵のないものは少ない。12は京焼の灰釉釜形陶器で、鍔の下からは無釉で底部には被熱によるとみられる細かいヒビが入る。内面は全面に施釉されており、目痕が残る。13は呉器手風の碗で、やや橙色を帯びた胎土に刷毛状の白化粧の上に透明釉が掛かる。京焼の可能性が高いものである。17は外面に糸目を施した鉢で、建水として使用されたものと思われ、16の壷とともに備前焼である。18は砂粒の多い灰色胎土に薄い鉄釉の掛かる大型の信楽産の壷である。

土壙H211（図版527）　土師器類の出土は少なく、図示できたものは底部内面に圏線のある大型皿3点のみである。4は土師質土器の涼炉で、5は4のサナである。橙色の粗い胎土で、口縁端部内側に三角形の瓶掛があり、底部は四角形の足を3方に貼付ける。内側中央部に帯状の突起がめぐり、サナを乗せる構造になっている。窓は大きく楕円形である。6は円筒形二重構造の涼炉である。内枠は中央上よりで屈曲し、その直上に円形の穿孔が数箇所ある。口縁部で外枠と接合される。外枠は楕円形の、内枠は四角形の窓があり、上端部の内側には3箇所の瓶掛が貼付けられる。胎土は、精製されたいわゆる白色の土で、外面は丁寧に調整されている。「春花/秋月/両相宜」の刻印が正面左側にある。7・8は肥前系磁器で、7は器壁が1mm程度の端反り薄手酒杯で、染付で龍と宝珠を描く。12～14は鉄釉陶器である。12は産地不明の鍋で、13・14は信楽の鉄釉・黒釉流しの甕である。14は底部に「高田寶壷/文政三九八新調」の墨書がある。15は灰釉で、粗い灰白色の胎土の信楽産の水盤である。19世紀前半の遺物である。

井戸H27（図版528）　1は丹波焼の小型徳利で、鉄釉に「ふしみ・かさぎや」のイッチン描きがある。2は同じく丹波産の湯たんぽで、外面には厚く鉄釉が掛かる。19世紀中頃の遺物である。

溝E50（図版528）　遺構規模の割には出土遺物が少なく、時代的特徴を示す資料を図示した。3～6は土師器の皿で、XIV期のものである。7は白色胎土で、ロクロ作りの花塩壷で深草産である。8・11・12は瀬戸・美濃系の磁器で、端反碗とその蓋である。9・10は肥前系の磁器で、10は口縁端部のほぼ全周に打撃痕があり、灰吹として使用されたものである。13～15は灰釉の灯明皿類である。16は内面白釉、外面イッチン描きの端反碗で、京・信楽系の陶器である。17は体部を窪ませた灰釉の壷で、瀬戸・美濃系のものである。19世紀中頃の遺物である。

溝H220（図版528）　18は型押しの三田青磁皿で、円錐状の足が4箇所に付く。19は高台を渦状に削り出し、内外面に厚く灰釉が掛かる萩焼の碗である。20は灰釉の蓋で、染付で霊山の文字を書く京・信楽系の陶器である。19世紀中頃の遺物である。

土壙M12（図版529）　上層遺構である土壙M9遺物が相当量混入している。1～14は土師器の皿と蓋である。XII期新段階のものである。16の焼塩壷は刻印がなく、蓋受部が退化してい

ることなどから、18世紀後半のものと思われ、土壙Ｍ９の混入の可能性が強い。19～33は肥前系磁器である。Ｕ字状高台の碗、深手輪花皿などが主体である。20は松竹梅に菊花文を散らす碗で、高台周辺の釉際などが丁寧で、禁裏からの注文品の可能性が高い。29は手描きにコンニャク文の蓋である。やや小振なことから時代が下がる可能性がある。31は、いわゆる古九谷様式の青手の鉢である。胎土は均一で精緻な暗灰色である。高台は逆台形状に鋭く削り出す。上半部分が失われており全体形はわからないが、腰の立上がりの形状から、いわゆる兜鉢形になると推定できる。内面は黄・紫・青彩に黒で波文様と縁取りを描き、裏面は緑の地に黒で唐草文と二重角「福」を描く。緑彩部分はやや銀化している。34は青花の合子で入隅形の身である。いわゆる古染付と呼ばれるもので、17世紀前半からの伝世品であろう。35～38は肥前系陶器で、35・36の刷毛目碗は見込を蛇ノ目釉剥ぎにする。38は打刷毛目で青彩の笹文に透明釉を全面に掛けた鉢である。薄手で端正な成形と暗褐色の胎土で、現川焼であろう。39は備前の船形水滴である。40～43は京焼である。40は外面に錆絵染付のある小型の平碗である。高台内も施釉され判然としないが「寶山」の刻印が確認できる。41は錆絵染付、42は青・黄緑彩の上絵平碗である。43は内外面に失透した灰釉が掛かる鍋で、内面釉下に錆絵もしくは染付で草花文の絵付が見える。碁笥底の高台や絵付のあるものは類例がなく、初期的な陶器鍋の形態であろう。

土壙Ｈ222（図版530）　１は沢潟のコンニャク文碗で、口縁端部に口紅を塗る。２は赤・金・黒彩の上絵碗で、いずれも肥前系磁器である。３～８は京・信楽系の陶器である。３は灰釉の灯明皿で、内面に菊花状の貼花とクシ目を付ける。３箇所の目痕があり、体部がやや内湾する。４～６は上絵の碗類で、４は赤・緑・黄彩である。５は緑・青彩で、赤で異体字の書銘がある。胎土はいずれも灰白色で精緻である。６は黄白色の比較的緻密な胎土の筒形碗で、見込には３箇所の目痕がある。内面は白釉、外面は錆地に白釉と紺青・黄・緑彩で盛り上げるように彩色し、底部外周にも紺青の円列がめぐる。類品が伊丹郷町や高松城下などで出土している[54]。京都の粟田口焼であろう。７・８は灰釉の平碗で、７は錆絵染付、８は無文である。胎土は灰白色である。９は土師質土器の長方形の火入で、長火鉢用のものであろう。10～13は４個の破片で出土しているが、本来は一本のクレイパイプの煙管部と推定できる。10の胴部に「□KUN□□」「GOUDA」の文字がプリントされており、オランダのゴーダ地方の製品である。

宅地５・６出土肥前磁器（鍋島様式）（図版８・530）　宅地５・６（柳原邸）のほぼ全域から出土している。口縁がほぼ全周残る16の皿は口径14.9cm・底径7.9cm・器高4.3cmである。見込中央を大きく二重円圏で白抜きし、周縁に麦の穂を配し、口縁端部近くを薄い濃みで波状に縁取る。裏面は花唐草文を３方に配し、高台は櫛高台である。図示した資料は全体形のわかる３枚のみであるが、底部集計による個体数は11枚以上ある。本来は五寸皿の組物として、伝世していたと思われる。なかには焼継資料もみられ、18世紀末以降までは使用されていたと考えられる。出土遺構は明治初頭の公家町廃絶時もしくは明治10年以降の公園整備の整地層が中心である（表84）。屋敷地のほぼ全域から出土している状況は、広範囲の整地作業が想定できる。いわゆる鍋島様式の組物皿が10枚以上消費地で出土した例はなく、注目される[55]。

表84　宅地５・６出土の鍋島様式皿一覧表

	調査区	遺構・層名	遺構年代	破片数	備　考
1	E区	重機掘削		8	
2	E区	重機掘削		2	
3	E区	清掃中		1	
4	E区	清掃中		2	2次焼、5と接合
5	E区	清掃中		2	2次焼、4と接合
6	E区	清掃中		1	
7	E区	溝E50	幕末･明治初	1	
8	E区	土壙E67	幕末･明治初	6	
9	E区	土壙E84	幕末･明治初	1	2次焼、28と接合
10	E区	清掃中		1	
11	E区	土壙E179	幕末	1	
12	E区	土壙E192	19c中	1	
13	E区	清掃中		2	焼継片あり
14	E区	近世層－10cm		1	
15	E区	清掃中		1	
16	F区	井戸F1223	19c中	2	
17	F区	土壙F1398	19c中以降	5	
18	F区	池F1200	幕末･明治初	1	
19	F区	検出中		2	
20	F区	検出中		1	
21	H区	清掃中		2	31と接合
22	H区	検出中		1	29と接合
23	H区	清掃中		1	
24	H区	清掃中		1	
25	H区	土壙H15	幕末･明治初	7	2次焼、1片あり
26	H区	土管撹乱		1	
27	H区	土壙H26	19c中以降	1	31と接合
28	H区	溝H31	幕末	4	9と接合、2次焼あり
29	H区	土壙H22	幕末	2	22と接合
30	H区	清掃中		1	焼継あり
31	H区	清掃中		1	27と接合、2次焼あり
32	H区	土壙H10	幕末･明治初	5	
33	H区	石組土壙H65	19c前半	11	
34	H区	清掃中		1	
35	H区	土壙H125	19c前半	1	
36	H区	石組H20	幕末	4	
37	H区	土壙H205	19c中	1	
38	H区	埋甕H52	19c中	1	
39	H区	土壙H485	18c代	1	
計				89	底部個体数11以上

宅地３・４出土肥前青磁（図版530）　17・18は青磁陽刻文の変形皿で、復元最大幅14.4cm・器高3.3cmである。均一な青磁釉、高台周辺の釉際の処理などは鍋島藩窯の製品に近いと思われる。土壙A21・土壙M12と、宅地３・４（園邸）周辺の整地層から細片の状態で出土した。土壙M12出土遺物が18世紀前半代であることから、廃棄年代を推定することができる。

H・M・N区のその他　（図版531・532、表85・86）　１～４は土師質土器で、１はロクロ成形の花塩壷である。４は白色と橙色の土を使った絞胎の火入で、高台内に「稲荷青山」の刻印がある。５～８・10～14は土製品の人形・ミニチュア類である。６は緑彩の浮人形である。７は黄彩の前後型押しの人形で中実のものである。８は透明釉、緑・黄・茶彩のミニチュアの燗鍋である。10～14は無釉の手捏ね人形である。14の狐の底部には、丸と長方形の二つの印があるが判読できない。９は錆絵の京焼で太子形の人形である。17～20は肥前系磁器である。19・20は染付の蓋物で、草花文様の特徴や呉須の発色などから三川内系の可能性が高い。21は京焼の刻印資料である。灰釉の大振の碗で、「仁清」銘の印が高台内にある。22は玉縁状口縁の黄釉鉢で、珉平焼である。23は染付の小杯で、高台内に「与三造」の銘がある。京都産の磁器で煎茶碗である。25・26は刻印資料である。25は焼締の蓋で、裏面に「帯山」の小判印、26は体部に扇型のなかに「一」の印がある匣鉢である。29～32は土壙H63の出土遺物で、29・30・32は17世紀前半の肥前系磁器である。31は漳州窯系の呉須赤絵の碗である。赤壁賦のモチーフで、見込に「玉堂佳器」と書かれている。なお図版532の21のベトナム長胴瓶も土壙H63の出土遺物である。図版532の６は軟質施釉陶器の壷類の頸部で、左右の耳を獣面にする。釉は二次被熱で不明であるが、緑釉の可能性が高い。８はロクロ成形の軟質施釉陶器碗で、本来厚く釉が掛かっていたのが、全面剥離しており不明である。９は絞胎の火入で、表面は白と橙の縞模様がハッキリするように丁寧に磨かれている。底部に「深草山」銘の刻印と墨書がある。13・26・27・33は陶器類の刻印資料である。13は「仁清」の刻印

の灰釉碗底部である。26は「都青山」の陽刻印がある鉄釉行平の把手である。27は「犬山」の刻印の灰釉壷である。33は「洛東山」の刻印の香炉である。14は肥前系磁器の古九谷様式の皿で、黄・紫・青彩と黒の縁取りが残っている。16は青花で、粉彩の磁器小杯である。17・19・20は華南系の緑釉で、17は合子の身である。19・20は貼花文壷の把手部と底部である。二次被熱を受けている。10・18は朝鮮産の磁器で、10は高い高台の白磁碗で、見込の目痕が顕著である。18は梅瓶体部の破片と思われる。片切彫の蓮花文がわずかに残り、釉調も高麗青磁特有の透明感があるが、小片であり不明な点が多い。21～24はベトナムの長胴瓶の口縁端部片である。遺構出土のものはいずれも17世紀代である。29は土師器の皿に上絵のあるもので、通常みられる軟質施釉陶器のようにロクロ成形ではない。二次的に上絵が施されたものである。32・36は墨書資料である。36は白化粧に錆絵染付の汁注で京焼である。37は銅版転写のヨーロッパ陶器の小片である。

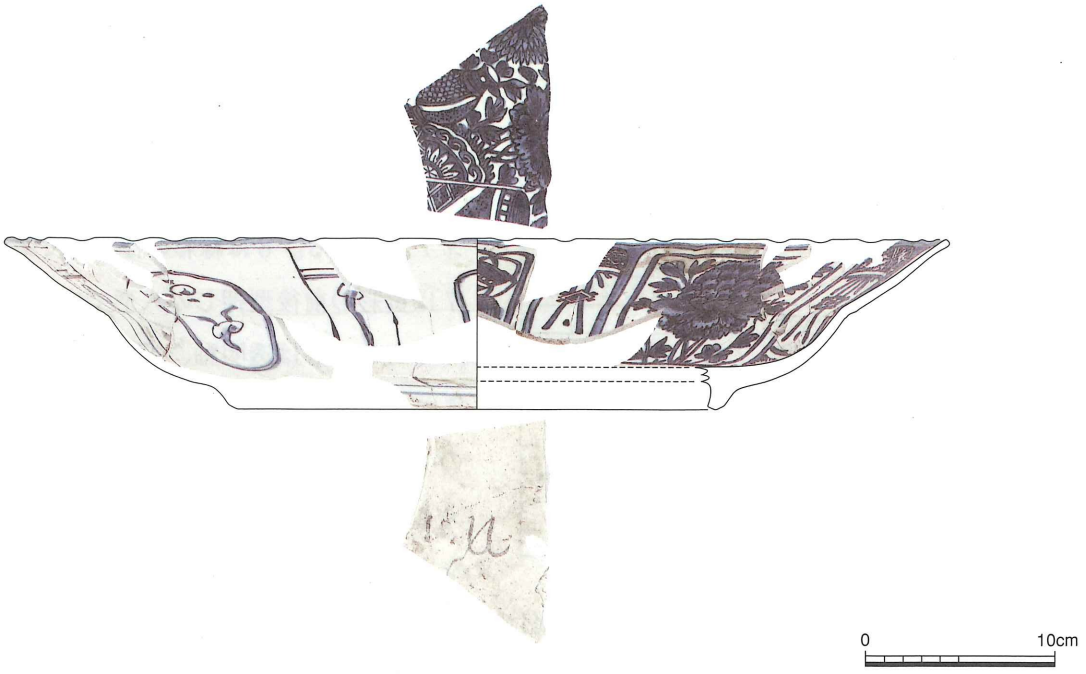


図55　井戸Ｈ120出土青花皿

図55は井戸Ｈ120出土の青花の輪花大皿である。いわゆる芙蓉手のもので、口径は49.8cmに復元できる。皿は17世紀前半のもので、高台内にアルファベットで「Iu」と読める文字が墨書されている。井戸Ｈ120は他の出土遺物が19世紀中頃のものであり、明治の公園化に伴なう整地により、埋められていると考えられることから、墨書文字がいつ頃書かれたものか俄に判定できない。井戸の所属する宅地５・６は、明治８年から11年にかけて同志社大学教師のＪ・Ｄ・デイヴィスの居宅であり、関連する出土遺物の可能性も否定できない。

表85　H・M・N区のその他土器・陶磁器類（図版531）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法　量　(cm)			胎土	釉薬	生産地	備　考
					口径	器高	底径				
1	土壙H 1	幕末	土師質	花塩壷	8.7	2.4	9.0	灰白			深草か　ロクロ成形
2	穴蔵H42	18末～19初	土師質			1.3	3.3	鈍い橙			蝋燭立か　釘は青銅を使用
3	土壙H99	17末～18初	土師質	皿	10.8	2.5	5.2	鈍い赤褐			軟質施釉陶器生地か
4	土壙H111	18c後半	土師質	火入			11.5	橙+白		深草	絞胎　高台内「稲荷青山」銘
5	土壙H188	18c後半	土製品			0.8	2.4(最大)	淡黄			面子形
6	土壙H188	18c後半	土製品	人形		1.6	4.2(最大)	淡黄	緑彩		浮人形
7	溝H865	幕末	土製品	人形		3.8	2.5(最大)	鈍い黄橙	黄彩		前後型合せ 中実　恵比寿神
8	土壙H57	18c後半	土製品	ミニチュア	5.9	5.1	4.0	浅黄橙	緑+黄+茶彩		
9	穴蔵H42	18末～19初	陶器	人形		5.9(残)	3.1(最大)	灰白	錆絵	京都	
10	穴蔵H42	18末～19初	土製品	人形		6.9(残)	4.4(最大)	淡黄			手捏ね
11	土壙H137	19c前半	土製品	人形		3.5(残)	4.5(最大)	白			童子型　手捏ね
12	土壙H137	19c前半	土製品	人形		5.2(残)	6.6(最大)	白			童子型　手捏ね
13	土壙H137	19c前半	土製品	人形		10.6(残)	6.7(最大)	浅黄橙			前後型合せ
14	土壙H137	19c前半	土製品	人形		10.9(残)	7.0(最大)	浅黄			狐 底部刻印
15	石組土壙H25	19c前半	磁器	碗			4.6(推定)	灰白	染付	中国	
16	石組土壙H25	19c前半	軟質施釉	灰器	18.8	6.5		橙	緑+黄		銀化
17	土壙H21	19c代	磁器	蓋物蓋		4.6	9.6(最大)	白	染付	肥前系	No.18の蓋
18	土壙H21	19c代	磁器	蓋物身	5.1	6.2	4.8	白	染付	肥前系	
19	土壙H36	19c代	磁器	蓋物蓋		1.2	7.1(最大)	白	染付	肥前系	三川内か　No.20の蓋
20	土壙H36	19c代	磁器	蓋物身	6.7	3.6	3.7	白	染付	肥前系	三川内か
21	土壙H36	19c代	陶器	碗		5.0(残)	4.8	灰	灰	京都	高台内「仁清」銘
22	土壙H36	19c代	磁器	鉢	18.6(推定)	5.4	11.0(推定)	白	黄	瑕平	
23	土壙H121	19c代	磁器	小坏	7.2	4.3	2.8	白	染付	京都	高台内「与三造」銘
24	土壙H121	19c代	陶器	壷		9.2(残)				沖縄	壷屋焼
25	井戸H64	19c代	陶器	蓋		4.8(残)	12.8(最大)	鈍い黄橙		京都	裏面「帯山」銘小判印
26	土壙H132	18c末	陶器	匣鉢	12.9	6.9	12.6				体部刻印　扇型に「一」
27	井戸H161	18c後半	陶器	壷	6.2	11.9	6.3	灰白	鉄+灰掛分け	信楽	腰白茶壷　底部墨書
28	石組H 5	幕末	陶器	瓶	4.5	26.0	7.8	黄灰	錆絵	京·信楽系	惣徳利　底部墨書
29	土壙H63	17c前半	磁器	碗	10.8	7.2	4.2	灰白	鉄+染付	肥前系	高台無釉
30	土壙H63	17c前半	磁器	皿	12.2	3.2	4.8	暗灰白	染付	肥前系	初期伊万里
31	土壙H63	17c前半	磁器	鉢	16.7	7.2	6.6	暗灰白	呉須赤絵	中国	漳州窯系 見込「玉堂佳器」赤壁賦
32	土壙H63	17c前半	磁器	皿	22.0(推定)	5.1	8.4	灰白	青磁	肥前系	片切彫り　波佐見

表86　H・M・N区のその他土器・陶磁器類（図版532）

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法　量　(cm)			胎土	釉薬	生産地	備　考
					口径	器高	底径				
1	土壙H317	18c中	土製品	ミニチュア	7.0	1.5	3.5	淡黄	緑彩		
2	土壙H317	18c中	軟質施釉	碗	6.4	4.0	3.0	浅黄橙	透明		
3	土壙H317	18c中	土製品	ミニチュア	3.6	7.2	3.0	暗灰白	透明		
4	土壙H317	18c中	土製品	人形		4.2	6.9(最大)	灰白	緑彩		左右型合せ 中空
5	土壙H317	18c中	土製品	人形		9.8	5.4(最大)	鈍い橙			手捏ね＋板作り
6	土壙H317	18c中	軟質施釉	壷	8.4	12.5(残)		淡黄			緑彩か
7	土壙H221	18～19初	土製品	箱庭道具		5.5	16.4(最大)	浅黄橙	緑+黄+茶彩		三足欠損
8	土壙H329	17c代	軟質施釉	碗			5.4	灰白	黄彩		ロクロ成形
9	井戸H280	19c代	土師質	火入	10.4	9.3	10.0	橙+白		深草	絞胎　底部「深草山」銘印　墨書
10	N区検出中		磁器	碗			7.6(最大)	灰白	白磁	朝鮮	
11	M区撹乱		磁器	小坏	6.2	4.0	2.8	白	染付	京都	「道八」銘
12	土壙M20	時代幅アリ	土師質	組紐錘		4.3	4.0(最大)	赤褐			
13	M区掘下げ		陶器				3.2	暗灰白	灰	京都	平椀か　高台内施釉「仁清」銘
14	M区掘下げ		磁器	皿				白	上絵	肥前系	紫・黄・青・黒彩　古九谷様式
15	H区撹乱		陶器	灯心押		3.8	3.9(最大)	灰	鉄	京·信楽系	底部無釉
16	H区撹乱		磁器	小坏	7.0(推定)	3.5(残)		白	染付+上絵	中国	赤・黄・黒彩　景徳鎮窯
17	井戸H475	17～18初	磁器	合子身	2.5(推定)	2.0(残)		灰白	緑+透明	中国	華南三彩
18	土壙H300	時代幅アリ	磁器	梅瓶				灰	青磁	朝鮮	高麗か
19	土壙H215	時代幅アリ	陶器	壷				暗灰褐	緑	中国	華南三彩　貼花文　二次被熱
20	土壙H215	時代幅アリ	陶器	壷				暗灰褐	緑	中国	華南三彩　貼花文　二次被熱
21	土壙H63	17c代	陶器	瓶	8.1			灰褐		ベトナム	長胴瓶
22	土壙H739	17c前半	陶器	瓶	11.0			暗赤褐		ベトナム	長胴瓶

No.	遺構名	遺構年代	種類	器形	法量 (cm)			胎土	釉薬	生産地	備考
					口径	器高	底径				
23	土壙H450	17c前半	陶器	瓶	10.6			暗灰黒		ベトナム	長胴瓶
24	H区掘下げ		陶器	瓶	13.6(推定)			暗赤褐		ベトナム	長胴瓶
25	土壙H40	19c代	陶器	皿		2.7	7.4(最大)	黄白	銹絵染付	京都	型押皿　底部布目圧痕
26	H区清掃中		陶器	行平把手			4.5(最大)	橙	鉄		「都青山」陽刻
27	H区清掃中		陶器	壷		6.3(残)	9.0(推定)	浅黄橙	灰	美濃・瀬戸	底部「犬山」銘
28	土壙H358	18c中	陶器	蓋物身	8.4	9.6	6.4	灰黄	上絵	京都	赤・緑彩残る
29	H区掘下げ		土師器	皿	9.9(推定)	1.6(推定)		鈍い橙	上絵		白化粧+錆絵
30	H区掘下げ		磁器	戸車		1.3	7.3(最大)	白	白磁	肥前系	
31	H区掘下げ		土師質	花塩壷	6.7	2.7	5.9	橙			
32	H区掘下げ		陶器	碗	10.4	6.8	4.0	灰白	銹絵	京・信楽系	小杉碗　底部墨書「山科」
33	H区掘下げ		陶器	香炉		4.8(残)	7.4(推定)	浅黄橙	白化粧+透明	京都	底部「洛東山」銘
34	H区掘下げ		陶器	合子蓋	3.0	0.8		灰白	銹絵染付	京都	No.35の蓋
35	H区掘下げ		陶器	合子身	3.0(最大)	1.2	2.5	灰白	銹絵染付	京都	
36	H区掘下げ		陶器	汁注	10.2	12.9	7.6	黄白	銹絵染付	京都	底部墨書
37	H区掘下げ		陶器					白	染付	ヨーロッパ	皿か　銅版転写
38	土壙H370	17c後半	磁器	碗	22.0	9.1	9.4	白	染付	肥前系	

（9）J区

大振で断面逆三角形の平茶碗である[56]（図56）。底部は輪高台で、底から口に向かって直線的に大きく開く。口縁部は釉が流れてほとんど露胎となる。胎土は褐灰色で白い粒子を含み、露胎部ではにぶい褐色を呈する。釉は黒褐色で外面上部は柿釉のようになる。禾目状に流れ、暗青灰色に窯変した部分がある。底部に釉が厚く溜る。器高5.0cm、口径13.9cm、高台径3.9cmである。12世紀前半の中国福建省建窯の製品である。19世紀中頃の土壙J2から出土した。

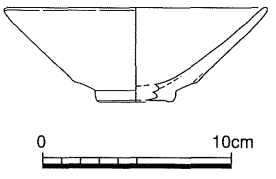


図56　土壙J2出土輸入陶器実測図

（10）P区

石組土壙P82（図版533・534）　図版533の1～25は土師器皿である。1～9は小型皿、10～25は圏線のある大型皿である。XII期中段階の新相に属する。26～37は、土師質土器である。26・27は小壷である。28は鉢で、白色系土師器にみられる白い精良な胎土である。29～34は焼塩壷である。28・29は蓋である。31は無刻印、32は「□壺塩師□□伊織」の刻印がある。33・34は狭口焼塩壷である。36・37は型成形の炮烙で器高が浅い。38は瓦灯の蓋の上部である。35はロクロ成形の碗で高台は貼付である。39～45は肥前系磁器である。44は白磁碗、45は青磁鉢である。48・51・52、図版534の5は肥前系陶器である。51は京焼風陶器で高台内に異体字の刻印がある。図版534の5は青緑釉を施した蛇ノ目釉剥ぎの皿である。図版533の46・49・50、図版534の1・2・4・6・9は京焼である。46・50は平碗で見込に銹絵染付で、透明釉を施す。46には3箇所目痕がある。49は透明釉を施した平碗で透明釉は失透しており、絵付はわからない。図版534の1は体部外面に染付のある碗で、2は体部外面に銹絵染付のある碗である。4は体部外面に銹絵染付で菊花文を施した平碗で、薄作りで丁寧である。畳付以外の全面に釉を施す。6は淡白色の胎土に透明釉を施した蓋である。8は軟質施釉陶器で白色の胎土で薄い緑釉を施した鬢水入である。9は淡黄白色の胎土に銹絵染付を施した水滴である。図版533の47と図

版534の3は瀬戸・美濃系陶器である。3は内外面に鉄釉と長石釉を掛分けた碗である。図版534の10は茶褐色の鉄釉に灰釉を流し掛けした甕で、丹波産である。7は備前産の焼締陶器の油受皿である。17世紀末の遺物である。

井戸P69（図版534～536）　図版534の11～25は、土師器皿である。11・12は小型皿、13は丸底の中型皿、14～24は圏線のある大型皿、25は特大型皿である。Ⅻ期中段階の新相に属する。26～30は、土師質土器である。26は焼塩壷の蓋である。27は焼塩壷の身である。28・29は狭口の焼塩壷である。30の焼塩壷は無刻印である。図版534の31～38、図版535、図版536の1～5は肥前系の磁器である。図版535の1のコンニャク文、11のコンニャク文と手描きを組合わせたものなどがみられる。図版534の32は外面青磁で見込は白磁の小碗である。31は型打で木の葉文が陽刻された白磁杯である。図版535の17・18・22・23は白磁で、22は型打皿である。図版536の4・5は蛇ノ目釉剥ぎ皿である。図版536の6～14・18は京焼である。6は黄白色の胎土に透明釉を施した碗である。7・9・10は藁灰釉を、7は全面、9・10は高台際までと高台内の一部に施した碗で胎土は灰褐色で堅くしまる。技法や器形などから京焼の可能性がある。8は鉄釉を施した碗である。11は灰釉を施した碗で、見込に錆絵があり、高台内を渦巻状に削る。14は黄白色の胎土に透明釉を施した蓋である。図版536の15～17は肥前系陶器である。16は黄白色の胎土に透明釉を施したいわゆる呉器手碗である。19は瀬戸・美濃系の鉢で内外面に長石釉を施して緑釉を流し掛ける。17世紀末の遺物である。

（11）R・S・V・X区

溝R241（図版537）　1～19は土師器の皿で、Ⅺ期古段階のものである。20は漳州窯系青花の皿底部破片である。21・22は灰釉の肥前系陶器の皿と碗で、目痕はみられない。23は15世紀代の中国青磁の碗で、混入品と思われる。24・25は備前の小瓶の底部破片である。26は「ハ」の字に立ちあがり口縁端部を丸くおさめる信楽擂鉢である。

塀R243（図版537）　27～47は土師器の皿である。Ⅺ期古段階のものである。48は中国青花の小杯で、49は灰釉の肥前系陶器の碗である。いずれも17世紀初頭のものである。

溝R1050（図版537）　50～53は土師器の皿である。54・55は高台無釉の肥前系染付碗で、56は灰釉砂目折縁皿、57は暗褐色の胎土で鉄釉の碗である。いずれも肥前系陶器である。17世紀前半のものである。

堀G1195B・溝G1195（図版538）　1～28は土師器の皿で、ほぼⅺ期中段階のものである。29～33は焼塩壷で、32・33の堺系のものは外面にタタキ成形の面が残る古相のものもある。34～39は中国磁器で、37・39は漳州窯系のもので、その他は景徳鎮窯系のものである。39の白磁は厚い白化粧の上に透明釉を掛け、高台周辺には多量の砂が付着する。いわゆる白呉須手と呼ばれるもので、遺跡出土品は珍しい。40・41・59～72は瀬戸・美濃系の陶器類である。40は灰釉、41は鉄釉の小碗である。59は削り出しの浅い高台を持つ輪花鉄釉の皿である。61は鉄釉の丸碗である。60・63は鉄釉天目碗で、62は段付の白天目碗である。64は鉄釉と白釉の掛分け碗で、窓抜きしたところには呉須で暦文のような絵が描かれている。65・67は灰釉の蓋と皿であ

る。68・71は絵志野の鉢である。69は志野織部の皿である。66・70は志野釉の小皿と香炉である。72は青織部の鉢である。42～58は肥前系の陶器である。42・43は底部糸切の灰釉の小碗である。44・45は灰白色で精良な胎土で、透明に近い釉調をもつ碗である。46は暗灰色の胎土で、灰釉の碗である。47は暗赤褐色の胎土で鉄釉の碗である。48～57は皿類で、51・53・54・56は胎土目で、その他は砂目である。58は底部に糸切痕のある灰釉の托である。73・75は信楽の鉢である。75は砂粒の多い粗い胎土で、匣鉢の可能性が高い。74は瓦質火入の半球形の蓋で、外面は丁寧に磨かれている。17世紀前半の遺物である。

溝G1195（図版539）　1～35・51は土師器類で、皿はXI期中段階から新段階のものである。35は耳皿で、51は高杯形のものである。36～50・52・53は土師質土器で、36は手捏ねの鉢で、内面に擂鉢にみられる様な条痕が付けられている。43～50は焼塩壷で、「ミなと/藤左衛門」銘のものが出土している。52・53の炮烙は、53の口縁端部に返りがあり、52よりやや古い様相である。いずれも外面に煤が付着する。54～57は中国磁器である。58は筒形の肥前系磁器である。59～61・63・64・70・71・73は瀬戸・美濃系の陶器類である。59は長石釉と鉄釉の掛分け、60・61は鉄釉に黒釉流しの丸碗である。63は鉄釉の天目碗である。64は鉄釉でやや扁平な小型碗である。70は灰釉の折縁ソギ皿である。71は志野釉の合子の蓋である。73は志野織部の板状の隅切り皿である。62・65～69・72は肥前系陶器である。62は灰白色の胎土の灰釉丸碗である。65～68は灰釉の皿で、いずれも内面に砂目が残る。69・72は鉄絵皿と壷で、72は釉薬が熔けきらず失透している。74・75は外面に粗いケズリが残る備前の瓶類で、75の底部には「大」字のヘラ書きがある。76は丹波産とみられる盤である。板作りで、口縁端部を「く」字に強く折り曲げている。77・78は擂鉢で、77は信楽産、78は丹波産のものである。17世紀前半から中頃の遺物である。

溝R150下層（図版540）　1～72は土師器の皿で、大型のものは灯明皿として使用されたものも多い。XI期新段階のものである。73～85は磁器類である。73・76・84は肥前系染付で、その他は中国青花と白磁である。86は瀬戸・美濃系の鉄釉天目碗である。87～89は肥前系の灰釉碗である。90～92は信楽擂鉢で、91のように口縁部にほぼ直立する縁帯部をもつものが含まれる。93は土師質土器の火入底部の小片である。17世紀中頃の遺物である。

溝R150上層下部砂層（図版541）　1～23は土師器の皿である。ほぼXII期古段階の範囲である。24～28・32～45は土師質土器である。24～28は小壷である。32～35は焼塩壷である。36はロクロ成形、37～39は手捏ねの鉢である。40・41はやや異形であるが、赤褐色の胎土で鉢状の火入類と鍋類である。42～44は大型の火入類である。42・44は暗橙色のやや砂粒を含む胎土で粗製であるが、43は赤褐色の胎土で、外面のミガキが丁寧である。45は、炮烙である。29～31は土製品の土鈴である。46～59は肥前系磁器類で、中国製品はみられない。「U」字状高台のものやコンニャク文に手描きの碗などが主流である。60・74は肥前系陶器で、60は刷毛目碗、74は内面青緑釉の皿である。61・62は錆絵の京焼平碗で、いずれも小片である。63～66は瀬戸・美濃系陶器で、63は鉄釉の天目、64は長石釉と鉄釉の掛分け、65・66は灰釉の碗である。

67は透明釉の軟質施釉陶器の鬢水入である。68は白濁釉の信楽鉢である。69～71は京・信楽系の鉄釉の鍋類で、72・73は京焼の灰釉の蓋類である。75～77は備前のいわゆる餌擂鉢である。17世紀後半から末の遺物である。

溝Ｒ150上層上部埋土（図版542）　1～19は土師器皿である。20～34は土師質土器である。24～29は鉢類で、25・26は手捏ねである。31・32は焼塩壷で、31は京都産である。32は堺系の板作りのものである。33・34は暗橙色のやや粗い胎土で、火入である。同一個体の底部と口縁部の可能性がある。35～47は肥前系磁器である。38・39・41などのやや古い様相のものや、コンニャク文の皿などがある。35～37は白磁の碗である。48～50・52～56・60・61・64は京焼で、48・50は上絵碗で、48には青彩が残り、50は上絵痕跡のみが残る。52は高台内に「仁清」の繭型印がある灰釉の碗底部である。53は錆絵の蓋である。54は灰釉の油受皿である。55は錆絵の碗である。56は鉄釉の小壷である。57～59は鍋類で、57・59は灰釉、58は鉄釉である。60・61は灰釉と鉄釉の壷類で、いずれも緻密な灰白色の胎土で作りも丁寧である。62・63は内外面鉄釉の信楽産の壷である。64は錆絵染付の蓋物である。65・66は灰釉の火入もしくは香炉類で、65が信楽、66が瀬戸・美濃系のものである。51・67は肥前系の陶器である。51は高台内に異体字の印が押される京焼風陶器である。67は肥前系の刷毛目二彩の鉢である。68は内外面に鉄泥を塗る信楽擂鉢で、灰白色で粗い胎土が特徴である。17世紀末に近い遺物である。

土壙Ｒ21（図版543～545）　図版543の1～18は土師器の皿で、Ⅻ期のものである。20・21はミニチュア皿で、21の角皿には緑彩が残る。23の炮烙は、外型成形で底部が平坦に近くなり、胎土に金雲母が混入する。24の土師質の火入とともに、深草産のものと思われる。25～52、図版544、図版545の1～8は肥前系磁器で、多くが二次被熱を受けている。図版543の42のような筒形碗や51・52の青磁染付の碗、図版544の4～7の粗製で厚手の皿類が中心である。図版545の2～8は白磁である。図版543の32の碗には焼継がみられる。図版545の9～25は京・信楽系陶器である。9は灰釉の小杉碗形の碗で、高台内に「朝日」の刻印がある。10は錆絵の平碗である。11は白化粧に錆絵がある蓋物で、口縁端部の平坦面は無釉である。12～14は灰釉の灯火具類である。15・17は鉄釉の蓋で、17は土瓶の蓋である。16は灰釉の蓋である。22は四角の筒形花入で、緑釉と鉄釉を掛分ける。底部には足があったと思われるが、欠損している。23は灰釉で大型の鬢水入である。底部は無釉である。25は小型の鉢を3個連結したもので、把手を取付けた痕跡がある。二次被熱しているが、笹文の上絵が残る。26は丹波の鉄釉瓶である。27は備前の焼締瓶である。28～31は信楽の陶器で、28は鉄釉の蓋、29は鉄釉に灰釉流しの壷である。30・31は灰白色の粗い胎土の灰釉鉢類である。32は京・信楽系の鉄釉の鍋である。33は堺・明石系の擂鉢である。天明大火による廃棄土壙の遺物と考えられる。

土壙Ｒ1043（図版546）　1～34は土師器の皿で、ⅩⅣ期のものである。器高にバラツキが目立ち、器壁の厚みも一定でない。36～40は土師質土器で、36は丁寧なミガキで調整された異形の蓋で、用途を特定できない。39は砂粒の目立つ粗い灰白色の胎土を持つ焜炉で、楕円形の窓と、内部にサナを置くための張出し部がある。張出し部より下には薄く煤が付着している。40

は火消壷の小片で、波状のクシ描文がめぐる。41～51は磁器で、41の京都産の急須の蓋を除いて、肥前系の磁器である。52は錆釉掻落としの磁胎の鉢で、形状から植木鉢になるものと思われる。53～78は陶器である。53・54・56～59は京・信楽系の灰釉陶器である。55は鉄釉・イッチン描きの蓋である。60は備前の灯明皿である。61は「□下弥」の刻印のある京焼風陶器の碗である。62～65は京・信楽系の灰釉碗である。66は、白化粧緑釉流しの香炉、67は錆絵染付の鉢である。68～72は銅緑釉の瓶類で、いずれも仏飼具類である。73は鉄釉の筒形の容器である。74は鉄釉の植木鉢で、高台部に3箇所の抉りのある丹波産のものである。75は灰釉の瀬戸・美濃系の瓶である。76は灰釉の土瓶の小片である。77は外面に白化粧を施し、錆絵染付の丁寧な絵付で鶴と亀甲文を散らした火鉢である。胎土は極めて緻密な灰白色である。文様の意匠と作りの丁寧な点から公家の注文品とみられる。78は同じく白化粧の上に錆絵の山水文を描く火鉢で、底部に3箇所約5mm程度の穿孔がある。内面及び底部は雑に鉄泥が塗られている。胎土は灰白色で粗い。いずれも京焼である。19世紀前半の遺物である。

井戸R1034（図版547）　1～21は土師器の皿で、Ⅷ期のものである。21のように口径が14cmを超えるものがある。23は焜炉のサナである。24は土師質の手焙型火入で、外面は丁寧なミガキで調整されている。25は軟質施釉陶器の型押し変形皿で、菊花を黄・緑釉で掛分け、底部は薄い緑釉の単彩にする。26～35・37～42は肥前系磁器である。32の菊花散らしの意匠は、禁裏の注文品と思われる。37はいわゆる太白手の瀬戸・美濃系の広東碗である。43～53は京・信楽系の陶器類で、43～49の平碗は錆絵のワンポイント文で、目痕はない。50は上絵碗で、赤・緑・金彩が残る。51～53は灰釉の碗である。54は灰釉の蓋である。18世紀後半から末の遺物である。

土壙S43（図版548）　1～12は土師器の皿である。14～44・52～54は肥前系の磁器である。33・34は青磁、35～44は白磁である。32・52～54は上絵碗である。45～51は中国青花である。55は京焼の灰釉碗である。56～60は肥前系の陶器である。56は青緑釉の碗である。57・60は灰釉の皿である。58・59は暗灰色の胎土で灰釉が厚く掛かる碗である。多くの破片が二次被熱を受けている。概ね17世紀後半のものである。

土壙S6（図版549）　1は堺系の焼塩壷蓋で、内側に布目圧痕が残る。2は土師質土器の瓦灯で、その形状から、蓋上部の皿の部分である。3～7は肥前系磁器の染付の碗と皿である。8は見込蛇ノ目釉剥ぎの白磁皿である。9・10は肥前の京焼風陶器の碗で、10の高台内には「冨永」銘の刻印と「番」の墨書がみられる。12の擂鉢は鉄泥を塗る信楽産のもので、粗い灰白色の胎土である。宝永大火に伴なう瓦廃棄土壙のものである。

礎石S1012掘形（図版549）　13～15は土師器の皿で、いずれも小片である。18は鉄釉で天目形になる京焼の碗である。19は鉄釉鍋の底部である。16・17は肥前系の染付で、16は高台内に二重枠「福」銘がある。18世紀前半の遺物である。

溝S1（図版549）　20～27は土師器の皿である。29はロクロ成形で灰白色の胎土を持つ土師質土器である。30～36は肥前系磁器で、35・36は白磁、その他は染付である。いずれも17世紀

後半代のものである。37の信楽擂鉢は暗赤褐色の焼締のものである。

溝Ｖ１（図版549）　38～49は土師器の皿である。Ⅺ期新相のものである。52・53は肥前系の染付碗で、17世紀中頃のものである。54は鉄釉の瀬戸・美濃系天目碗の小片である。

Ｘ区のその他（図版549）　55～57は土壙Ｘ３から出土した、高台内に「道光年製」の青花銘のある外面黄釉の小腕で、比較的厚い器壁と高い高台に特徴がある。同じ土壙Ｘ３から２個体以上出土している。58～61は大径木の植栽移転の際撹乱された土壙から出土したものである。58は鉄釉の掛花入である。裏面は無釉で、壁掛け用の穴の上部に「□清」銘の印がみられる。二次被熱を受けている。59は鉄釉の茶入で、底部に墨書がみられる。丁寧な作りであるが、産地を特定できない。60は灰釉の京・信楽系の蓋物で、高台内に「風袋/全皿共/六十八内」の墨書がある。61は暗褐色の胎土で、所々に鉄釉が飛ぶ炻器質の急須で、「亀玉」の小判印が把手付根にある。62は土壙Ｘ10から出土した、タイ産の四耳壺の肩口耳部の破片である。

第２節　瓦類

資料の選択的採取　瓦は土器・陶磁器類に次いで多量に出土している。とりわけ、火災時に掘削された焼瓦廃棄土壙からは、おびただしい量の瓦が出土している。これらをすべて持ち帰ることはできないため、遺物を選択的に採取する必要があった。そこで、京都における江戸時代瓦の瓦当文様の様式研究が未だなされていない現状を考慮し、文様を有する軒瓦類を中心に選択的に採取した。その際、軒瓦とともに様式研究の対象となる棟丸瓦や棟端瓦なども採取の対象とした。これ以外に、金箔を施したものや刻印・文字を有するものなどの特殊な瓦、あるいは完形もしくは完形に近い状態で遺存する丸瓦や平瓦及び桟瓦、あるいは多様な道具瓦類も随時採取した。こうして採取された瓦類のうち、共伴する土器・陶磁器類によって埋没時期が明確な遺構出土のものを中心に据えて報告の対象とすることとした。報告対象候補資料として再選択された瓦類は、遺物収蔵用コンテナ79箱、及びコンテナに収蔵できない瓦７個体に及んだ。

整理・報告の方針　江戸時代における瓦当文様の様式変遷研究に資する資料として、火災時の焼瓦廃棄土壙出土瓦を一括遺物として評価した。さらに、共伴する土器・陶磁器類と埋没状況から文献資料に記された火災に明確に比定でき、瓦当文様資料が豊富な遺構を報告対象とした。様式変遷資料として抽出した遺構と年代及び帰属する宅地は、以下の通りである。土壙Ｃ916（比定火災不明・17世紀前半・宅地19）、土壙Ｂ725（寛文期の火災に比定・17世紀後半・宅地２）、土壙Ｓ43（寛文期の火災に比定・17世紀後半・宅地17）、土壙Ｏ１（宝永大火に比定・18世紀前半・宅地１前の中筋通上）、土壙Ｓ６（宝永大火に比定・18世紀前半・宅地17）、土壙Ｒ21（天明大火に比定・18世紀後半・宅地24）、土壙Ｒ87（天明大火に比定・18世紀後半・宅地24）。また、これ以外に、明らかに天明大火以降と考えられる遺構出土の瓦資料と明治初年の公家町解体に伴なって埋没したと考えられる遺構出土の瓦資料を江戸時代後期の瓦当文様資料と

して選び出した。以上の遺構出土の瓦当資料は多くの種類にわたるものであるが、これを遺構ごとに一葉の図版に配列し、一時期に使用された瓦当文様の組合せが理解できるように配慮した。これに加えて、金箔瓦、家紋瓦、棟端瓦、刻印瓦を形態と文様に基づいて分類配列した。これらの瓦類の配列に際しては、年代や遺構ごとのまとまりを考慮していないが、観察表に出土遺構の年代を記した。また、井戸F1280の井戸枠に用いられていた特殊な平瓦を報告した。

棟丸瓦の分類　江戸時代の瓦屋根は、棟の瓦構造が多様化し様々な棟込瓦を生み出した。今回の調査では瓦当資料を中心にして資料を採取したが、最も多く得られた資料は棟にはめ込まれた菊花文の小型丸瓦当であった。これは従来、「菊丸瓦」、「小丸瓦」と呼称されてきた種類の瓦で、本報告では「棟丸瓦」と呼称した。棟丸瓦は、（1）量的に多く出土すること、（2）小型であるため完形や完形に近い状態で出土し型式を把握しやすいこと、（3）多くは菊花文で、江戸時代を通じて変化に乏しい巴文に比べて属性が多様であるため、時代による系統的な変化が理解しやすいこと、（4）また、瓦葺の屋根にも、桧皮葺の屋根にも用いられ普遍的に出土することなどの理由で、江戸時代の瓦の年代の指標になる遺物と評価した。そこで、菊花文棟丸瓦の系統的な分類を行なって、型式名称を定め、記載することにした。分類基準は周縁の有無、中房の形態、花弁の形態、花弁の数の4項目である。これを以下に述べる表記方式によって6桁の数字で示し、頭に菊花文を示すアルファベットKを冠して型式名とした。分類基準の第1は周縁の有無である。無周縁のものを「1」、有周縁のものを「2」とし数列の最左列に配した。分類基準の第2は、中房の形態である。直径が1cm以上あり平たい台状を呈するものをボタン状中房と呼び「1」、突線を円形にめぐらし中が窪んでいるものを環状中房と呼び「2」、環状中房で中央に小さな突起があるものを環状中央突起型中房と呼び「3」、直径0.9cm以下で粒状粘土の盛り上がり状を呈するものを粒状中房と呼び「4」とし、数列の左から2番目に配した。分類基準の第3は花弁の表現である。突線で輪郭を表現し花弁自体が窪むものを凹弁と呼び「1」、花弁全体が半肉状に盛り上がるものを凸弁と呼び「2」とした。この場合、主弁を放射状に一重のみめぐらすものと、主弁と主弁の間に間弁を配し二重に重なる花弁を表現するものがあり、これを区分する必要がある。そこで、前者を一重菊、後者を二重菊と呼び、主弁の形を数列の左から3列目に、間弁の形を数列の左から4列目に配した。一重菊の場合、間弁の弁形部分の表記は「0」とした。分類基準の第4は主弁の数である。これは残された下2桁を用いて8葉であるならば「08」、16葉であるならば「16」などとした。例えば、無周縁・ボタン状中房・凹弁・二重菊・主弁8葉凹弁、間弁凸弁の場合、「K111208式」と表記したのである。

表87　土壙C916出土瓦観察表（図版88・552）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1・2	土壙C916	棟丸瓦	浅黄橙～にぶい黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凸弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ、さし部裏面は不調整、側縁は糸引き痕のまま、背縁は不調整。1と2は同笵。図版553の3・4と同笵。	17世紀前半 K111208式
3	土壙C916	棟丸瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデでさし部両側縁ナデに連続、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ、さし部裏面は不調整、背縁は不調整。	17世紀前半 K111108式
4	土壙C916	棟丸瓦	灰～灰白、二次的被熱で変色・緻密	小型の棟丸瓦。瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁10葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデでさし部左側縁ナデに連続、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ＋接合部ナデで外縁ナデはさし部右側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ、さし部裏面は不調整。	17世紀前半 K111110式
5	土壙C916	棟丸瓦	灰白～にぶい黄橙・緻密、二次的被熱で変色	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁10葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ、さし部接合部にタテのキザミ目。	17世紀前半 K111110式
6	土壙C916	棟丸瓦	灰白、二次的被熱で変色・1mm以下の砂粒含	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁12葉一重菊。外縁下半はナデ、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ。	17世紀前半 K111012式
7～9	土壙C916	棟丸瓦	浅黄橙～褐灰、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁16葉一重菊。外縁下半はナデでさし部両側縁ナデに連続、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテナデ、さし部裏面と背縁は不調整、さし部接合部にタテのキザミ目。7～9は同笵。	17世紀前半 K111016式
10	土壙C916	棟丸瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁16葉一重菊。外縁下半はナデでさし部両側縁ナデに連続。瓦当裏面は指オサエの後、接合部ナデが裏縁ナデに螺旋状に連続、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ、さし部裏面は不調整。	17世紀前半 K111016式
11	土壙C916	棟丸瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁16葉一重菊。外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、瓦当裏面は接合部ナデ＋裏縁ナデでさし部右側縁ナデに連続、さし部外面はタテナデ、さし部裏面はタテナデ、背縁は糸引き痕のまま。	17世紀前半 K111016式
12	土壙C916	棟丸瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、環状中房、凹弁16葉一重菊。外縁下半はナデで両側縁ナデに連続、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテナデ。	17世紀前半 K111016式
13	土壙C916	棟丸瓦	灰白、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、環状中房、凹弁16葉一重菊。外縁下半はナデで右側縁ナデに連続、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ＋接合部ナデ、裏縁ナデは左測縁ナデに連続、さし部外面はタテナデ、さし部裏面は指オサエ。	17世紀前半 K111016式
14～16	土壙C916	軒丸瓦	浅黄橙～褐灰、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は13個。周縁内側を面取り、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、丸瓦部外面はタテケズリ、丸瓦部裏面は木挽き痕を不調整、側縁はヘラケズリ。14～16は同笵。	17世紀前半
17	土壙C916	軒丸瓦	浅黄橙・緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は16個。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ。	17世紀前半
18	土壙C916	軒丸瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は時計回りの三巴文。周縁内側を面取り。	17世紀前半
19～21	土壙C916	軒平瓦	にぶい橙～灰、二次的被熱で変色（19・21）・緻密	瓦当は均整凹型唐草文。瓦当上端は面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、側縁はナデ、平瓦部外裏面は両測縁近くはタテナデ中央部はヨコナデ、側縁はナデ。19～21は同笵。	17世紀前半
22・23	土壙C916	軒平瓦	淡黄～灰、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は均整凸型唐草文。瓦当上端は面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、側縁はナデ、平瓦部外裏面は両側縁近くはタテナデ中央部はヨコナデ、側縁はナデ。22と23は同笵。	17世紀前半

表88　土壙B725出土瓦観察表（図版89・553）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1・2	土壙B725	棟丸瓦	にぶい橙～灰白、二次的被熱で変色(1)・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凸弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ＋接合部ナデ、接合部にタテのキザミ目。1と2は同笵。3・4とよく似る。	17世紀後半K111208式
3・4	土壙B725	棟丸瓦	浅黄橙～灰、二次的被熱で変色(4)・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凸弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ＋接合部ナデ、接合部にタテのキザミ目。1と2は同笵。3と4は同笵。図版552の1・2と同笵。	17世紀後半K111208式
5・6	土壙B725	棟丸瓦	にぶい橙～浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ＋接合部ナデ、接合部にタテのキザミ目。5と6は同笵。	17世紀後半K111108式
7	土壙B725	棟丸瓦	灰白、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は指オサエの後ナデ、接合部にタテのキザミ目。	17世紀後半K111108式
8	土壙B725	棟丸瓦	にぶい橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、外縁畳半はタテケズリ、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ＋ナデ、接合部に円弧状のキザミ目。	17世紀後半K111108式
9	土壙B725	棟丸瓦	灰・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は指オサエの後ナデ＋裏縁ナデ。	17世紀後半K111108式
10・11	土壙B725	棟丸瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁10葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、外縁上半はタテナデ、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ、接合部に明瞭なキザミ目なし。	17世紀後半K111110式
12	土壙B725	棟丸瓦	灰・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉一重菊。外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、外縁上半はタテケズリ、瓦当裏面は指オサエの後裏縁ナデ、裏縁ナデは接合部ナデから連続し右側縁ナデに連続。	17世紀後半K111008式
13	土壙B725	棟丸瓦	淡黄・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁16葉一重菊。外縁下半はナデ、外縁上半はタテケズリ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ。	17世紀後半K111016式
14	土壙B725	棟丸瓦	灰白～灰・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁16葉一重菊、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデ、接合部にタテのキザミ目。	17世紀後半K111016式
15	土壙B725	棟丸瓦	灰白～オリーブ黒・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、環状中房、凹弁16葉一重菊。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ、さし部外面はタテケズリ、側縁はナデ、背縁はナデ。	17世紀後半K121016式
16	土壙B725	棟丸瓦	灰白、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ、さし部外面はタテケズリ＋ナデ、さし部裏面は不調整、側縁は不調整。	17世紀後半K241108式
17	土壙B725	棟丸瓦	にぶい橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、環状中房、凹弁16葉一重菊。外縁下半はナデ、瓦当裏面は接合部ナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテケズリ。	17世紀後半K221016式
18	土壙B725	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉一重菊花弁の周囲に円形の段があり外区状の空間あり。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、丸瓦部外面はタテケズリ。	17世紀後半
19	土壙B725	軒丸瓦	暗灰・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊。主弁に子葉あり、間弁は凹弁、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、丸瓦部外面はタテケズリ。	17世紀後半
20	土壙B725	軒丸瓦	灰白～オリーブ黒・緻密	瓦当は時計回りの三巴文、巴の尾部同士が接する。珠文は12個。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ丸瓦部外面はタテケズリ＋ナデ、丸瓦部裏面は木挽き・布目痕を不調整。	17世紀後半
21	土壙B725	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は時計回りの三巴文、巴の尾部同士が接する。珠文は15個。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ、丸瓦部裏面は布目痕を不調整。側縁は面取り状にケズリ＋ナデ。	17世紀後半
22	土壙B725	軒丸瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は13個。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続する。丸瓦部外面はタテナデ、丸瓦部裏面は木挽き痕をナデ消す。	17世紀後半
23	土壙B725	棟端瓦	灰白、二次的被熱で変色・緻密	棟端瓦の一部、瓦当は菊花文、有周縁、中房部分に穿孔、凹弁12葉二重菊、間弁は凹弁。外縁はナデ、瓦当裏面は接合のための縦横のキザミあり。	17世紀後半
24	土壙B725	切隅軒平瓦	灰白～灰・緻密	瓦当は均整凹型唐草文。顎部凸面と顎部裏面はナデ、平瓦部外面はケズリ、平瓦部裏面はナデ。	17世紀後半

表89　土壙S43出土瓦観察表（図版90・554）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1・2	土壙 S43	棟丸瓦	灰白～橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデで両側縁ナデに連続、瓦当裏面は指オサエ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ、接合部に弧状とタテのキザミ目、明瞭な笵キズあり。1と2は同笵。	17世紀後半 K111108式
3	土壙 S43	棟丸瓦	灰白～灰・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は裏縁ナデ＋接合部ナデ、接合部に弧状とタテのキザミ目。	17世紀後半 K111108式
4	土壙 S43	棟丸瓦	にぶい橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁10葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は裏縁ナデ＋接合部ナデ、接合部に弧状とヨコのキザミ目。	17世紀後半 K111110式
5・6	土壙 S43	棟丸瓦	橙～オリーブ黒、二次的被熱で変色(6)・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁10葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は裏縁ナデ＋接合部ナデ、接合部に弧状とタテのキザミ目。5と6は同笵。	17世紀後半 K111110式
7	土壙 S43	棟丸瓦	灰白～オリーブ黒、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁10葉一重菊。外縁下半はナデで両側縁ナデに連続、瓦当裏面は接合部ナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテケズリ。	17世紀後半 K111010式
8・9	土壙 S43	棟丸瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁16葉一重菊。外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、瓦当裏面は指オサエ＋接合部ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ、さし部裏面と背縁は不調整。8と9は同笵。	17世紀後半 K111016式
10・11	土壙 S43	棟丸瓦	にぶい黄橙～灰、二次的被熱で変色(11)・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁16葉一重菊。外縁下半はナデ、瓦当裏面は接合部ナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテケズリ、さし部接合部にキザミ目なし。10と11は同笵。	17世紀後半 K111016式
12	土壙 S43	棟丸瓦	灰白、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、無周縁、ボタン状中房、凹弁15葉一重菊。外縁下半はナデ、瓦当裏面は接合部ナデ＋裏縁ナデ、さし部接合部に弧状のキザミ目。	17世紀後半 K111015式
13・14	土壙 S43	棟丸瓦	灰・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、瓦当裏面は接合部ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ、さし部裏面はナデ。13と14は同笵。	17世紀後半 K211108式
15・16	土壙 S43	棟丸瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、ボタン状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、瓦当裏面は接合部ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ。15と16は同笵。	17世紀後半 K211108式
17	土壙 S43	棟丸瓦	灰白～灰黄、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は指オサエ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ。	17世紀後半 K241108式
18	土壙 S43	棟丸瓦	浅黄橙～オリーブ黒、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデで左側縁ナデに連続する、瓦当裏面は裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ、さし部裏面はタテナデ、右側縁は糸引き不調整、背縁はナデ。	17世紀後半 K241108式
19	土壙 S43	棟丸瓦	にぶい黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、環状中央突起型中房、凹弁8葉二重菊、間弁は凹弁。外縁下半はナデ、瓦当裏面は指オサエ＋裏縁ナデ。	17世紀後半 K231108式
20	土壙 S43	棟丸瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、環状中房、凹弁8葉一重菊。外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、瓦当裏面は指オサエ＋接合部ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ。	17世紀後半 K221008式
21	土壙 S43	軒丸瓦	灰白～灰・緻密	瓦当は時計回りの三巴文、巴尾部同士が接する、珠文は12個。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部接合部は弧状＋タテのキザミ目。	17世紀後半
22	土壙 S43	軒丸瓦	灰白・緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は15個。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部接合部は弧状のキザミ目。	17世紀後半
23	土壙 S43	軒丸瓦	にぶい褐、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は17個。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ、丸瓦部接合部は弧状＋タテのキザミ目、丸瓦部裏面は木挽き痕を残す。	17世紀後半

24	土壙 S43	軒丸瓦	灰白･緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は12個以上。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ、丸瓦部外面はタテナデ、丸瓦部裏面は木挽き痕を残す。	17世紀後半
25	土壙 S43	軒丸瓦	灰白～オリーブ･緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は14個。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ。	17世紀後半
26	土壙 S43	軒平瓦	オリーブ黒･緻密	瓦当は均整凹型唐草文。顎部凸面はヨコナデ、顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はヨコナデ。	17世紀後半
27	土壙 S43	軒平瓦	にぶい黄橙､二次的被熱で変色･緻密	瓦当は均整凹型唐草文。顎部凸面はヨコナデ、顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面は側縁近くはタテナデ中央部はヨコナデ、側縁はナデ。	17世紀後半
28	土壙 S43	軒平瓦	灰･緻密	瓦当は均整凸型唐草文。顎部凸面はヨコナデ、顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、平瓦部裏面はナデ、側縁はナデ。	17世紀後半
29	土壙 S43	棟端瓦	にぶい橙～黄灰､二次的被熱で変色･緻密	獅子口形式、経の巻は時計回りの巴文で珠文は16個。内外面ともナデ、経の巻の背面は接合のためのキザミ目。	17世紀後半

表90　土壙Ｏ１出土瓦観察表（図版91・555）

遺物番号	遺構	種類	色調･胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	土壙 O1	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、環状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、瓦当裏面は接合部ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ、さし部裏面は不調整。	18世紀前半 K221008式
2～4	土壙 O1	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はナデ、さし部裏面は不調整。２～４は同笵。明瞭な笵キズあり。	18世紀前半 K241008式
5～8	土壙 O1	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテケズリ＋ナデ、さし部裏面は不調整、側縁と背縁は不調整、接合部にタテのキザミ目（７）。５～８は同笵。	18世紀前半 K241008式
9・10	土壙 O1	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、ボタン状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデで両側縁ナデに連続、瓦当裏面は裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ、接合部にタテのキザミ目(10)。９と10は同笵。	18世紀前半 K211008式
11・12	土壙 O1	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデで両側縁ナデに連続、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ。11と12は同笵。	18世紀前半 K241008式
13	土壙 O1	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ。	18世紀前半 K241008式
14	土壙 O1	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁上半はナデ、瓦当裏面接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ。	18世紀前半 K241008式
15	土壙 O1	棟丸瓦	灰白～灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ、さし部裏面は不調整。	18世紀前半 K241008式
16	土壙 O1	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面は接合部ナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテケズリ、さし部接合部に縦横のキザミ目。	18世紀前半 K241008式
17～20	土壙 O1	棟丸瓦	灰白～灰､二次的被熱で変色(19)･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁12葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデで右側縁ナデに連続、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデで裏縁ナデは左側縁ナデに連続するもの（18）がある。側縁はナデ、背縁はナデ、さし部外面はタテナデ、さし部裏面は不調整。17～20は同笵。	18世紀前半 K241012式
21～23	土壙 O1	棟丸瓦	灰白～灰､二次的被熱で変色･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁12葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデで左側縁ナデに連続、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、側縁はナデ、背縁はナデ、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ、さし部裏面はナデ。21～23は同笵。	18世紀前半 K241012式
24～26	土壙 O1	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁12葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデ、側縁はナデ、背縁はナデ、さし部外面はタテナデ。24～26は同笵。	18世紀前半 K241012式
27・28	土壙 O1	棟丸瓦	灰白～灰､二次的被熱で変色･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁12葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面は指オサエ＋接合部ナデ＋裏縁ナデ、裏縁ナデは右側縁ナデに連続、側縁はナデ、さし部外面はタテケズリ。27と28は同笵。	18世紀前半 K241012式

29	土壙 O 1	軒丸瓦	浅黄、二次的被熱で変色·緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は16個。瓦当面にキラコ、周縁の内側と外側は面取り、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、接合部に弧状とタテのキザミ目。	18世紀前半
30	土壙 O 1	軒丸瓦	灰白、二次的被熱で変色·緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は13個。瓦当面にキラコ、周縁の内側は面取り、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ、接合部にタテのキザミ目。	18世紀前半
31	土壙 O 1	軒丸瓦	灰白、二次的被熱で変色·緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は6個以上。瓦当面にキラコ、周縁の内側と外側は面取り、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	18世紀前半
32	土壙 O 1	軒丸瓦	にぶい黄橙～灰、二次的被熱で変色·緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は7個以上。瓦当面にキラコ、周縁の内側と外側は面取り、丸瓦部外面はナデ、丸瓦部裏面は布目痕不調整。	18世紀前半
33	土壙 O 1	軒丸瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色·緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は4個以上。瓦当面にキラコ、周縁の内側と外側は面取り、丸瓦部接合部に弧状のキザミ目。	18世紀前半
34～37	土壙 O 1	軒平瓦	にぶい黄橙、二次的被熱で変色·緻密	瓦当は凸型均整雲形唐草文。瓦当面にキラコ、周縁内外面を面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面と裏面はナデ。34～36は同笵、37は同笵の可能性が高い。	18世紀前半
38・39	土壙 O 1	軒平瓦	淡黄～灰、二次的被熱で変色·緻密	瓦当は凸型均整唐草文。瓦当面にキラコ、周縁内外面を面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、平瓦部裏面は不調整。38と39は同笵。	18世紀前半

表91　土壙Ｓ６出土瓦観察表（図版92・556）

遺物番号	遺構	種類	色調·胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1～3	土壙 Ｓ６	棟丸瓦	灰黄～灰·緻密	瓦当は菊花文、有周縁、環状中房、凹弁８葉一重菊。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。１～３は同笵。	18世紀前半 K241008式
4～6	土壙 Ｓ６	棟丸瓦	灰黄～灰·緻密	瓦当は菊花文、有周縁、環状中房、凹弁８葉一重菊。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続。４～６は同笵。	18世紀前半 K221008式
7～9	土壙 Ｓ６	棟丸瓦	灰白～灰·緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続。さし部外面はタテケズリ、さし部裏面は不調整。７～９は同笵。	18世紀前半 K241008式
10～14	土壙 Ｓ６	棟丸瓦	灰·緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、瓦当裏面はナデの後接合部ナデ＋裏縁ナデ＋右側縁ナデと螺旋状に連続、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ、さし部裏面は不調整。背縁は不調整。10～14は同笵。	18世紀前半 K241008式
15・16	土壙 Ｓ６	棟丸瓦	灰·緻密	瓦当は菊花文、有周縁、ボタン状中房、凹弁8葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデの後裏縁ナデ、さし部外面はタテナデ、さし部裏面は不調整。15・16は同笵。	18世紀前半 K221008式
17	土壙 Ｓ６	棟丸瓦	灰·緻密	瓦当は菊花文、有周縁、中房の形状不明、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデの後裏縁ナデ。	18世紀前半 K221008式 もしくは K241008式
18	土壙 Ｓ６	棟丸瓦	灰白～灰·緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデの後裏縁ナデ＋接合部ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ。	18世紀前半 K241008式
19	土壙 Ｓ６	棟丸瓦	灰·緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。外縁下半はナデで左側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ。	18世紀前半 K241008式
20	土壙 Ｓ６	棟丸瓦	灰白～灰·緻密	瓦当は菊花文、有周縁、ボタン状中房、凹弁８葉一重菊。外縁下半はナデ、瓦当裏面は接合部ナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテケズリ、さし部裏面は不調整。	18世紀前半 K0221008式
21	土壙 Ｓ６	軒丸瓦	灰·緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は９個以上。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	18世紀前半
22	土壙 Ｓ６	軒丸瓦	灰黄、二次的被熱で変色·緻密	瓦当は逆時計回りの三巴文、珠文は６個以上。瓦当裏面はナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ、丸瓦部接合部に放射状のキザミ目。	18世紀前半
23	土壙 Ｓ６	軒丸瓦	灰白·緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は６個以上。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、丸瓦部外面はナデ。	18世紀前半
24	土壙 Ｓ６	軒丸瓦	淡黄～灰、二次的被熱で変色·緻密	瓦当は時計回りの三巴文、巴尾部同士が接する。珠文は７個以上。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	18世紀前半
25	土壙 Ｓ６	軒丸瓦	灰白、二次的被熱で変色·緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は６個以上。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ。	18世紀前半

26	土壙 Ｓ６	軒丸瓦	灰白、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は５個以上。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	18世紀前半
27	土壙 Ｓ６	軒平瓦	にぶい橙～褐灰、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は凸型均整唐草文。周縁は上端外面のみ面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ。	18世紀前半
28	土壙 Ｓ６	軒平瓦	にぶい黄橙、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は凸型均整唐草文。顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ。	18世紀前半
29・30	土壙 Ｓ６	軒平瓦	にぶい橙～灰白、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は凸型均整唐草文。顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、平瓦部裏面は不調整。	18世紀前半
31～33	土壙 Ｓ６	軒平瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は凸型均整唐草文。周縁の外面を面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、平瓦部裏面は不調整。	18世紀前半
34	土壙 Ｓ６	軒平瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は凸型均整唐草文。周縁は上端外面のみ面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、平瓦部裏面は不調整。	18世紀前半
35	土壙 Ｓ６	軒平瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は凹型均整唐草文。周縁は上端外面のみ面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、平瓦部裏面は不調整。	18世紀前半
36	土壙 Ｓ６	軒平瓦	灰白･緻密	瓦当は凹型均整唐草文で中心飾は凸型。顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ。平瓦部外面はナデ。	18世紀前半
37	土壙 Ｓ６	軒平瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は凸型均整唐草文。周縁は上端外面のみ面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、平瓦部裏面は不調整。	18世紀前半
38	土壙 Ｓ６	軒平瓦	にぶい橙、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は凸型均整唐草文。周縁は上端外面のみ面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、平瓦部裏面は不調整、側縁はナデ。	18世紀前半

表92　土壙Ｒ21出土瓦観察表（図版93・557）

遺物番号	遺構	種類	色調･胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
１～17	土壙 Ｒ21	棟丸瓦	橙～にぶい黄橙、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは両側縁ナデに連続、さし部外面はタテナデ、さし部裏面は不調整、背縁は糸引き痕を不調整。１～17は同笵。	18世紀後半 K241008式
18	土壙 Ｒ21	棟丸瓦	灰白～灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、さし部接合部にタテのキザミ目。	18世紀後半 K241008式
19～21	土壙 Ｒ21	軒桟瓦 丸部	淡黄～灰、二次的被熱で変色･緻密	丸付軒桟瓦の丸部で「結雁」文。瓦当面にキラコ、22などの平部に付く、周縁の外縁を面取り、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、桟瓦部外面はナデ、桟瓦部裏面は不調整、桟瓦部との接合部にはタテのキザミ目。19～21は同笵。	18世紀後半
22～29	土壙 Ｒ21	軒桟瓦 平部	浅黄橙～灰、二次的被熱で変色･緻密	丸付軒桟瓦の平部（22）と丸部が無い軒桟瓦（23・24）、22には19～21の丸部が付く、瓦当は凸型均整唐草文で中心飾りは宝珠。瓦当面にキラコ、いずれも周縁上端は面取り、周縁下端は、面取りするもの（22・26・27）とナデで丸く仕上げるもの（23・24・25・28・29）あり。顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面は側縁近くはタテナデ中央部はヨコナデ、平瓦部裏面はナデ、側縁はナデ。22～29は同笵。	18世紀後半
30	土壙 Ｒ21	丸付袖瓦	灰･緻密	時計回りの三巴文の丸部が付く袖瓦。丸部外縁はナデ、他の部分はナデ。	18世紀後半
31	土壙 Ｒ21	軒桟瓦か 軒平瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色･緻密	瓦当は凸型均整唐草文。周縁上端は面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ。おそらく軒桟瓦だが軒平瓦の可能性もあり。	18世紀後半
32	土壙 Ｒ21	軒桟瓦か 軒平瓦	灰･緻密	瓦当は凸型均整唐草文。周縁上端は面取り、顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、平瓦部裏面は不調整。おそらく軒桟瓦だが軒平瓦の可能性もあり。	18世紀後半

表93　土壙R87出土瓦観察表（図版94・558）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1～3	土壙 R87	棟丸瓦	にぶい黄褐～オリーブ黒、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは両側縁ナデに連続、さし部外面はタテナデ、さし部裏面は不調整、背縁は糸引き痕を不調整。1～3は同笵。	18世紀後半 K241008式
4～10	土壙 R87	棟丸瓦	にぶい黄褐～灰、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はタテナデ、さし部裏面は不調整、背縁は糸引き痕を不調整。4～10は同笵。	18世紀後半 K241008式
11	土壙 R87	軒丸瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は15個。瓦当面にキラコ、周縁外端を面取り、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ、丸瓦部裏面は不調整、側縁はナデ。	18世紀後半
12	土壙 R87	隅軒丸瓦	灰白～灰・緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は13個。瓦当中央部を焼成後に穿孔、外縁上半は面取り状に削って外縁を作る、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、筒状部外面はタテケズリ＋タテナデ、瓦当裏面と筒状部裏面は粗いナデ。	18世紀後半
13	土壙 R87	軒平瓦	灰白～灰・緻密	瓦当は凸型均整唐草文、中心飾りは菱形内に十文字。周縁外端はナデて丸く収める。顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部の調整は摩滅のため不明。	18世紀後半
14・15	土壙 R87	軒桟瓦	灰・緻密	丸瓦当は時計回りの三巴文、珠文は11個、平瓦当は凸型均整唐草文、中心飾りは花文。丸瓦当周縁外端と平瓦当周縁上端と下端は面取り、丸瓦当周縁下半はナデ、平瓦当顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、瓦当裏面はナデ、桟瓦部外面はタテナデ、桟瓦部裏面は不調整。14と15は同笵。	18世紀後半
16	土壙 R87	軒桟瓦 丸部	灰・緻密	丸付軒桟瓦の丸部で「結雁」文。瓦当面にキラコ、17などの平部に付く。周縁の外端を面取り、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、桟瓦部との接合部にはタテのキザミ目。図版557の19～21と同笵。	18世紀後半
17～19	土壙 R87	軒桟瓦 平部	にぶい黄橙～灰、二次的被熱で変色	丸付軒桟瓦（17）を含む軒桟瓦の平部、17には16の丸部が付く。瓦当は凸型均整唐草文で中心飾りは宝珠。瓦当面にキラコ、いずれも周縁上端は面取り、周縁下端は、面取りするもの（17）とナデで丸く仕上げるもの（18・19）あり。顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、平瓦部外面はナデ、平瓦部裏面はナデ、側縁はナデ。17の丸部接合部分にヨコのキザミ目。17～19は同笵。図版557の22～29と同笵。	18世紀後半
20～23	土壙 R87	軒桟瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色・緻密	丸部が付かない軒桟瓦、瓦当は凸型均整唐草文で中心飾りは花文。周縁上端は面取り、周縁下端は面取り後ナデで丸くおさめる。顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、桟瓦部外面は丸部はタテナデで平部はヨコナデ、桟瓦部裏面は粗いナデ、側縁はナデ。20～23は同笵。	18世紀後半
24	土壙 R87	棟端瓦	灰・緻密	海津形の棟先瓦、基部に弧状の切り込み、内区上部に2穴。周縁の内外端部は面取り、表面と外縁はナデ、周縁裏面はヘラでケズリ出す。他は不調整。	18世紀後半

表94　天明大火以降の遺構出土瓦観察表（図版95・559）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	土壙 B687	棟丸瓦	灰・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はナデ。	19世紀前半 K241008式
2	土壙 B721	棟丸瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色?・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉一重菊。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はナデ。	19世紀前半 K241008式
3	土壙 B716	棟丸瓦	灰・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉一重菊。明確な笵キズあり、瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はナデ。4と同笵。	19世紀前半 K241008式
4	土壙 B687	棟丸瓦	灰・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉一重菊。明確な笵キズあり、瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はナデ。3と同笵。	19世紀前半 K241008式
5	土壙 B687	棟丸瓦	灰・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉一重菊。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは両側縁ナデに連続、さし部外面はタテナデ、さし部裏面は不調整。	19世紀前半 K241008式
6	土壙 B687	棟丸瓦	黒褐・緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁8葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ、さし部裏面は不調整。	19世紀前半 K241008式

7	土壙 Ｂ718	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁８葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ、さし部裏面は不調整。	19世紀前半 K241008式
8	土壙 Ｂ687	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、環状中房、凹弁12葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面は指オサエ＋ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは両側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ。	19世紀前半 K221012式
9	土壙 Ｂ721	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、ボタン状中房、凹弁16葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	19世紀前半 K211016式
10	土壙 Ｂ687	棟丸瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色?･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凹弁16葉一重菊。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	19世紀前半 K241016式
11	土壙 Ｂ687	棟丸瓦	灰白～灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテナデ、さし部接合部にヨコのキザミ目。	19世紀前半・ K242016式
12	土壙 Ｂ687	棟丸瓦	灰白～灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは両側縁ナデに連続、さし部は棒状、さし部外面はタテナデ。	19世紀前半・ K242016式
13	土壙 Ｂ687	棟丸瓦	灰白･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは両側縁ナデに連続、さし部は棒状、さし部外面はタテナデ、さし部裏面は不調整。	19世紀前半・ K242016式
14	土壙 Ｂ721	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面は指オサエ＋ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ、さし部裏面は不調整。	19世紀前半・ K242016式
15	土壙 Ｂ687	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ、瓦当裏面は指オサエ＋ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは両側縁ナデに連続、さし部外面はタテナデ。	19世紀前半・ K242016式
16	土壙 Ｂ716	棟丸瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色?･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、周縁外端を面取り、さし部外面はタテナデ、さし部接合部にタテヨコのキザミ目。	19世紀前半・ K242016式
17	土壙 Ｂ718	軒丸瓦	灰白～灰、二次的被熱で変色?･緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は16個。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ、瓦当裏面は不調整で布目を残す。側縁はナデ。	19世紀前半
18	土壙 Ｂ716	軒丸瓦	灰白～灰･緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は15個、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ、瓦当裏面は不調整で木挽き痕を残す。側縁はナデ。	19世紀前半
19	土壙 Ｂ687	軒丸瓦	灰白～灰･緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は15個。瓦当面にキラコ、周縁外端を面取り、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ。	19世紀前半
20	土壙 Ｂ721	軒丸瓦	灰白～灰･緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は13個。瓦当面にキラコ、周縁内端を面取り、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ、瓦当裏面は不調整で布目を残す。側縁はナデ。	19世紀前半
21	瓦組 土壙 Ｂ636	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテナデ、さし部裏面は不調整、側縁はナデ、背縁は不調整。	19世紀中頃・ K242016式
22	溝Ｓ１ 上層	棟丸瓦	灰･緻密	瓦当は菊花文、有周縁、粒状中房、凸弁16葉一重菊。瓦当面にキラコ、周縁外端を面取り、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは右側縁ナデに連続、さし部外面はタテケズリ＋タテナデ。	19世紀中頃・ K242016式
23	溝Ｓ１ 上層	軒丸瓦	灰･緻密	瓦当は時計回りの三巴文、珠文は14個。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ。	19世紀中頃
24	溝Ａ７	丸付袖瓦	灰･緻密	時計回りの三巴文の丸部が付く袖瓦。丸部外縁はナデ、他の部分はナデ。	19世紀中頃
25	瓦組 土壙 Ｂ636	棟桟瓦	灰･緻密	丸部が付かない形の軒桟瓦。平部は凸型均整唐草文で瓦笵に三角形の記号あり。顎部凸面と顎部裏面はヨコナデ、桟瓦部外面は丸部がタテナデ、平部はヨコナデ、桟瓦部裏面は不調整。図版568の６と同じ。	19世紀中頃

表95　金箔瓦観察表（図版96・560）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	土壙 E311	軒丸瓦	灰・1～2mmの砂粒を含	瓦当は時計回りの三巴文。巴の尾部同士が接する。珠文は8個以上、周縁・巴・珠文・地部分の一部に金箔が残る。周縁外端を面取り、外縁下半はヘラケズリ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	17世紀後半～18世紀前半
2	堀 G1940	軒丸瓦	灰・1～2mmの砂粒を含	瓦当は時計回りの三巴文。巴の尾部同士が接する。珠文は11個以上、周縁と巴の一部に金箔が残る。周縁外端を面取り、外縁下半はヘラケズリ＋ナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	17世紀前半
3	土壙 E270	軒丸瓦	灰・1～2mmの砂粒を含	瓦当は時計回りの三巴文。巴の尾部同士が接する。珠文は6個以上、巴の一部に赤色の漆膜？が残る。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	18世紀中頃
4	土壙 E311	軒丸瓦	灰・1～2mmの砂粒を含	瓦当は時計回りの三巴文。珠文は6個以上。巴と周縁に金箔がよく残る。瓦当裏面はナデ、丸瓦部はタテケズリとナデ。	17世紀後半～18世紀前半
5	E区江戸時代層	棟端瓦	灰・1mm程度の砂粒を含	棟端瓦の丸瓦意匠の部分。瓦当は8葉二重菊花文。瓦当全体に金箔がよく残る。外縁はナデ、瓦当裏面は棟端瓦本体に接合するための縦横のキザミ目。	17世紀前半～19世紀中頃
6	土壙 C1	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は8葉一重菊花文、粒状中房、有周縁。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ。	18世紀前半
7～10	土壙 G1164	妻飾瓦	灰・1mm以下の砂粒を含	瓦当は16葉三重菊花文。菊花文部分と周縁に金箔が残る。地の部分には金箔が施されなかった可能性がある。周縁と外縁はナデ、裏面はケズリの後把手を接合する。屋瓦ではなく妻の飾りと思われる。いずれも瓦笵によって作られ、7～10は同笵。	17世紀中頃

表96　家紋瓦観察表1（図版97・561）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	土壙 B674	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は8葉二重菊花文、ボタン状中房、主弁に子葉あり、無周縁で8方を弧状にケズリ込む。外縁はケズリ＋ナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部接合部に丸瓦側のヨコのキザミ目が印される。2と同笵。	18世紀前半
2	土壙 D478	軒丸瓦	灰白～灰・緻密	瓦当は8葉二重菊花文、ボタン状中房、主弁に子葉あり、無周縁で8方を弧状にケズリ込む。外縁はケズリ＋ナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ、丸瓦部接合部に丸瓦側のヨコのキザミ目が印される。1と同笵。	17世紀前半
3	瓦組 土壙 B636	軒丸瓦	灰白・緻密	瓦当は8葉二重菊花文、ボタン状中房、主弁に子葉あり、無周縁で8方を弧状にケズリ込む。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部接合部に丸瓦側のヨコと弧状のキザミ目が印される。1・2と同笵の可能性あり。	19世紀中頃
4	土壙 B674	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は8葉一重菊花文、粒状中房、有周縁。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ。	18世紀前半
5	土壙 E235	棟丸瓦	灰白～灰・緻密	大型の棟丸瓦か棟止瓦であろう。瓦当は12葉二重菊花文、環状中央突起型中房、有周縁。外縁はナデ、裏面はナデ、さし部外面はタテナデ、さし部裏面はナデ。	17世紀後半
6	土壙 R200	軒丸瓦	灰・1mm以下の砂粒を含	瓦当はおそらく16葉の二重菊花文。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	17世紀前半
7	井戸 A11	軒丸瓦	にぶい黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は16葉一重菊花文、ボタン状中房、有周縁。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデ。	18世紀前半
8	C区調査区北壁	軒丸瓦	灰白～灰・緻密	瓦当は16葉二重菊花文、環状中央突起型中房、有周縁。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ＋タテナデ。	不明
9	土壙 R12	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当はおそらく16葉で一重菊花文。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	17世紀後半～18世紀前半
10・11	土壙 C587	軒丸瓦	にぶい黄橙、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は唐花文、有周縁。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部はタテナデ、丸瓦接合部は放射状キザミ目。10と11は同笵。	18世紀前半
12	土壙 D318B	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は唐花文、有周縁。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、丸瓦部はタテケズリ、丸瓦部裏面は布目痕と木挽き痕を残す。	18世紀前半
13	土壙 D238B	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は唐花文、有周縁。周縁外端を面取り、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、丸瓦部はタテケズリを軽くヨコナデ、丸瓦部裏面は布目痕と木挽き痕を残す。	18世紀前半
14	井戸 D296	軒丸瓦	灰黄・緻密	瓦当は唐花文、有周縁。瓦当面にキラコ、外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ。	18世紀前半
15	土壙 C641	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は水葵文、有周縁。周縁外端を面取り、外縁下半をナデ、ナデ＋裏縁ナデ。	18世紀前半

表97　家紋瓦観察表2（図版98・562）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	土壙 G639	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は酢漿草文。周縁内外端を面取り、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは側縁ナデに連続、丸瓦部外面はタテケズリ、丸瓦部裏面は不調整。2とは異笵。	17世紀後半
2	土壙 G799	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は酢漿草文。周縁内外端を面取り、外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデで裏縁ナデは側縁ナデに連続。1とは異笵。	18世紀中頃
3	土壙 D484 下層	軒丸瓦	灰白～灰・緻密	瓦当は牡丹文。周縁外端を一部面取り、外縁はナデ、ナデ＋接合部ナデ＋裏縁ナデ。	18世紀中頃
4	土壙 C626	棟丸瓦	灰白～灰・緻密	瓦当は牡丹文。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ、さし部外面はタテナデ、さし部裏面は不調整、側縁はナデ。	18世紀中頃
5	溝D4	棟丸瓦	灰・緻密	瓦当は牡丹文。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ。	19世紀前半～中頃
6	土壙 C1	軒丸瓦	灰白、二次的被熱で変色・緻密	瓦当は桐文。瓦当面にキラコ、周縁内外端に面取り、瓦当裏面はナデ、丸瓦部外面はナデ。	18世紀前半
7	土壙 D178	丸付袖瓦	灰・緻密	瓦当は六角形で桐文。周縁外端を面取り、袖部に線刻の唐草文、全体の外面はタテナデ、内面は不調整。	19世紀前半
8	土壙 B1000	棟丸瓦	灰黄・緻密	瓦当は桐文。さし部外面はタテナデ＋タテケズリ、さし部内面は布目を残す。全体に軟質で表面が摩滅し調整は不詳。軒丸瓦を小型にした形で棟丸瓦の初現型式か？	16世紀末～17世紀初
9	土壙 F1432	棟丸瓦	灰白・緻密	瓦当は桐文。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ、さし部外面はタテケズリ、さし部接合部は放射状のキザミ目。	17世紀中頃
10	土壙 F1223	軒桟瓦	暗灰・緻密	丸部の瓦当は無周縁で鶴文。瓦当裏面はナデ、桟瓦部外面は丸部がタテケズリ平部はヨコナデ、桟瓦部裏面は不調整、上下端を面取りしてナデ。	19世紀前半～中頃
11	土壙 D146	軒桟瓦	灰白・緻密	桟瓦の丸部のみの破片。瓦当は鶴文。外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、桟瓦部丸部外面はタテナデ、丸瓦当接合部にナナメ方向のキザミ目。	19世紀前半
12	C区 掘下げ	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は竹に雀文。周縁はナデ、瓦当裏面はナデ。	不明
13	土壙 C641	軒桟瓦	灰・緻密	軒桟瓦の丸部。瓦当は竹に雀文。瓦当面にキラコ、周縁外端を面取り、丸瓦当外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ、桟瓦部外面はタテナデ、桟瓦部裏面は不調整。	18世紀前半
14	土壙 C548	軒桟瓦	灰白～灰・緻密	軒桟瓦の丸部。瓦当は竹に雀文、竹笹の枝表現が周縁上に及ぶ。丸瓦当外縁はナデ、瓦当裏面はナデ、桟瓦部接合部にナナメ方向のキザミ目。	18世紀前半
15	土壙 E165	軒丸瓦	灰・緻密	瓦当は直違鍵文。16個の珠文あり。外縁下半はナデ、瓦当裏面はナデ＋裏縁ナデ＋接合部ナデ、丸瓦部外面はタテケズリ、丸瓦部裏面は不調整。	18世紀後半～19世紀前半
16	土壙 R2	軒桟瓦	灰・緻密	丸瓦当は結雁文。平瓦当は宝珠を中心飾りとした均整唐草文。瓦当面にキラコ、丸瓦当と平瓦当の周縁外端を面取り、瓦当裏面はナデ、桟瓦部外面は丸瓦部はタテケズリ＋ヨコナデ、平部はヨコナデ。	18世紀中頃

表98　家紋瓦観察表3（図版99・563）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	土壙 D10	棟端瓦	灰・緻密	獅子口系棟端瓦の一部。無周縁の丸瓦当で12葉二重菊花文。中房に裏面に貫通しない一孔あり。外縁はナデ、裏面に円形の凹みがあり内側をナデ、他はケズリ。	18世紀前半
2	土壙 S66	棟端瓦	灰白～灰・緻密	獅子口系棟端瓦の一部。有周縁の丸瓦当で12葉二重菊花文。中房に裏面に貫通しない一孔あり。外縁はナデ、裏面はケズリ、縁部が一部残りケズリ。	17世紀前半
3	礎石 S1012	棟端瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	獅子口系棟端瓦の一部。有周縁の丸瓦当でおそらく15葉の二重菊花文。外縁はナデ、裏面に円形の凹みがあり内側をナデで、接合部のキザミ目を残す。	18世紀前半～中頃
4	土壙 D126	棟端瓦	灰・緻密	獅子口系棟端瓦の基底部。有周縁の丸瓦当で16葉二重菊花文。中房に貫通しない一孔あり。丸瓦当外縁はナデ、獅子口外面はナデで、漆喰塗布のためのキザミ目と刺突孔あり。丸瓦当部裏面に円形の凹みあり。裏面は全体に粗いナデ。	18世紀前半
5	土壙 C3	棟端瓦	灰白、二次的被熱で変色・緻密	獅子口系棟端瓦の経の巻部分か。瓦当は16弁一重菊花文。瓦当面にキラコ、周縁内外端を面取り、外縁はタテケズリ、裏面は縦横のキザミ目。6と同笵。	19世紀前半～中頃

6	土壙 E268	棟端瓦	灰白、二次的被熱で変色·緻密	獅子口系棟端瓦の経の巻部分か。瓦当は16弁一重菊花文。中房は環状。瓦当面にキラコ、周縁内外端を面取り、外縁はタテケズリ、裏面は縦横のキザミ目。5と同笵。	18世紀後半
7	土壙 C566	棟端瓦	黄灰·緻密	獅子口系棟端瓦の経の巻部分か。瓦当は桐文。周縁内端を面取り、外縁は下半はナデ、外縁上半はタテケズリ。裏面は指オサエ。	18世紀中頃
8	C区 掘下げ	棟端瓦	灰·緻密	獅子口系棟端瓦の一部で藤文。笵によらず彫刻する。外面はナデ、裏面はケズリ＋ナデで弧状の把手が付く。	不明
9	土壙 G605	棟端瓦	淡黄～灰、二次的被熱で変色·緻密	獅子口系棟端瓦の一部で唐花文。笵によらず彫刻する。外面はナデ、裏面はケズリ＋ナデで弧状の把手が欠損。	18世紀前半
10	土壙 D111	棟端瓦	にぶい黄橙～灰、二次的被熱で変色·緻密	獅子口系棟端瓦の一部で唐花文。笵によらず彫刻する。外面はナデ、裏面はナデ。	18世紀前半
11	土壙 C2	棟端瓦	浅黄橙～灰、二次的被熱で変色·緻密	獅子口系棟端瓦の基底部で鶴文。笵によらず彫刻する。地の部分は漆喰塗布のためのヨコのキザミ目を満たす。裏面は基底部分はヨコナデで他は不調整。	18世紀後半
12	土壙 C2	棟端瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色·緻密	獅子口系棟端瓦の一部で鶴文。笵によらず彫刻する。裏面は基底部分は不調整。	18世紀後半

表99　棟端瓦観察表1（図版100・564）

遺物番号	遺構	種類	色調·胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	土壙 E268A	棟端瓦	浅黄橙~灰白、二次的被熱で変色·緻密	獅子口系の棟端瓦。経の巻の瓦当は中央のみ残り16葉の一重菊花文。無文の平瓦当部分を挟む。経の巻部分上部に紀年銘「明和八稔卯霜月吉日」を線刻。本体部分には2条の稜筋。側面に鶴文。正面に釘穴5個残る。地の部分は漆喰塗布のためのキザミ目で縁辺部はタテ方向、他はヨコ方向。丸瓦当外縁下半はナデ、丸瓦部はタテケズリ、裏面はケズリ＋粗いナデ。	18世紀後半
2	土壙 E268A	鰭	浅黄橙~灰白、二次的被熱で変色·緻密	右下がりの鰭。雲の意匠を彫刻する。側縁はケズリ＋ナデ、裏面は粗いナデ。側縁に釘穴。	18世紀後半
3	土壙 B703	鰭	浅黄橙、二次的被熱で変色·緻密	右下がりの鰭。16葉の菊花2個と葉を彫刻する。側縁はケズリ＋ナデ、裏面は粗いナデ。	19世紀前半
4	土壙 F1170	棟端瓦	浅黄橙~灰白、二次的被熱で変色·緻密	鬼瓦。左角と目部分と右髭部分が残る。連珠帯の圏線はヘラ描き沈線。連珠は円筒状の器具を押捺する。外面はナデ側縁はケズリ＋ナデ、裏面は粗いナデ。	19世紀中頃

表100　棟端瓦観察表2（図版101・102・565）

遺物番号	遺構	種類	色調·胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	土壙 C573	棟端瓦	にぶい黄橙～灰、二次的被熱で変色・5mm程度の砂粒を含	獅子口形の棟端瓦の側面と正面の一部で基底部が残る。表面に漆膜状のものが残るため金箔が施されていたもの思われる。側面に瓦笵による桐文の丸瓦当と連珠が付く。連珠は円筒状の器具を押捺する。正面は2条の山形稜筋が一部残る。丸瓦当の外縁はナデ、外面はナデ、裏面はヨコ方向の深いケズリを何条か施し器壁を薄くする。背縁はナデ、基底縁は不調整。	17世紀前半
2	土壙 C587	棟端瓦	浅黄橙～灰、二次的被熱で変色·緻密	獅子口形の棟端瓦の正面と側面の一部。正面中央に唐花文の丸瓦当。正面と側面に山形の稜筋2条。丸瓦当裏面は円形に凹める。正面と側面の裏面を架構するようにナナメの把手が付く。基底部は切据形。丸瓦当外縁と稜筋基部はヨコナデ、他は平明なナデ。基底縁はヘラケズリ。裏面は粗いナデ。	8世紀前半
3	土壙 E76	棟端瓦	橙～黒、二次的被熱で変色·緻密	海津形の棟端瓦。両裾をナナメに切下げ、中央に弧状の切込みを設けて跨形とする。縁帯裏面は溝状に深く抉り込む。裏面中央に弧状の把手がある。外面はナデ、外縁はヨコナデ、裏面は粗いナデ。	18世紀後半
4	井戸 A1	棟端瓦	にぶい橙~灰、二次的被熱で変色·緻密	海津形の棟端瓦。両裾をナナメに切下げる。縁帯内端近くに段を設ける。縁帯裏面は溝状に深く抉り込む。裏面中央に把手痕跡がある。外面はナデ、外縁はヨコナデ、裏縁はヨコナデ。裏面は粗いナデ。	19世紀中頃
5	土壙 R43	棟端瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色·緻密	海津形の棟端瓦。基部を弧状に切込んで跨形とする。正面上部に2穴の釘穴。縁帯裏面は溝状に深くケズリ込む。裏面中央に把手なし。外面はナデ、外縁はヨコナデ、裏縁は不調整。裏面は不調整。	18世紀後半
6	土壙 E235	棟端瓦	灰·緻密	風字形の棟端瓦。両裾からナナメ中央に弧状の切込みを設け跨形とする。縁帯内端近くに段を設ける。裏面は裏縁を残して一段下がり、全体の厚さを均一にしている。裏面中央上部に弧状の把手。外面はナデ、外縁はヨコナデ、裏縁は不調整。裏面は粗いケズリ。	17世紀後半

7	池 R1002	棟端瓦	浅黄橙～灰、二次的被熱で変色･緻密	風字形の棟端瓦。基部は両裾から緩やかな曲線でナナメに上がり中央に弧状の切込みに至る。縁帯内外端を面取り。正面凹部に漆喰塗布のための列点を施す。裏面は裏縁を残して箱状に深くし、全体の厚さを均一にしている。裏面中央上部に弧状の把手。外面はナデ、外縁はヨコナデ、裏縁は不調整、裏面は粗いナデ、型作りである。	19世紀中頃
8	土壙 F1236	棟端瓦	灰･緻密	海津形もしくは風字形の棟端瓦の一部。縁帯の内端近くに段を設ける。内区に菊花を彫刻する。焼成後の釘穴あり。外面はナデ、裏面は粗いケズリ。	18世紀後半
9	土壙 A27	棟端瓦	灰･緻密	風字形の棟端瓦。基部は両裾から緩やかに上がり正面で台形状を呈する跨形。縁帯裾部に葉の意匠を彫刻する。内区には笹竜胆文を彫刻する。裏面中央に弧状の把手。外縁上部に銘「□□藤原□　瓦司久左衛門作」を線刻する。外面はナデ、縁帯内外端を面取り、外縁はヨコナデ、裏縁と裏面はナデ。	19世紀中頃
10	土壙 B687	棟端瓦	灰･緻密	風字形の棟端瓦。縁帯裾部に何らかの意匠を彫刻する。内区には抱杏葉文を彫刻する。裏面中央に低い把手。外面はナデ。縁帯内外端を面取り。外縁はヨコナデ、裏縁は欠損。裏面は粗いケズリとナデ。	19世紀前半
11	井戸 F946	棟端瓦	灰･緻密	縁帯の無い跨形の棟端瓦。基部は深い弧状の切込みがあり琴柱形を呈する。中央に酢漿草文を彫刻する。裏面中央に弧状の把手。外面と外縁はナデ、裏縁と裏面は粗いナデ。	19世紀中頃
12	穴蔵 A366	棟端瓦	灰･緻密	縁帯の無い跨形の棟端瓦。基部は深い弧状の切込みがある。中央に宝袋の意匠を彫刻する。家文ではなく吉祥文と思われる。裏面中央を少し掘り凹め、粘土ヒモを架け低い把手とする。外面と外縁と裏縁はナデ。裏面は粗いケズリ。	17世紀前半～後半
13	土壙 E188	棟止瓦	灰･緻密	いわゆる棟止瓦で、背部は棟瓦となっている。上端は弧状。基部は二つの弧状を中央で合わせ滴水状の突起とする。瓦当は無文で外周に沈線を巡らす。瓦当面にキラコ、外面はナデ、外縁はナデ、裏面は不調整である。	18世紀後半
14	石組 土壙 E22	棟端瓦	灰白から灰･緻密	雲形の棟端瓦で基部は切据形。両裾部に雲形の意匠を彫刻する。裏面は箱状に凹む。裏面は中央に弧状の把手。周縁外端を面取りする。瓦当面にキラコ、外面はナデ、外縁はナデ、裏縁はナデ、裏面は粗いナデ。	19世紀中頃
15	土壙 E165 第2層 焼土層	棟端瓦	浅黄橙～暗灰、二次的被熱で変色･緻密	切据形の鬼瓦。鬼意匠を彫刻するが、両目と右側角部分が残り、下半を欠く。裏面に把手の痕跡あり。連珠は別作りのものを貼る。連珠は空洞で中央に一穴がある。外縁はナデ、裏縁は不調整、裏面は粗いケズリ。	18世紀後半

表101　井戸F1280井戸枠瓦観察表（図版103・566）

遺物番号	遺構	種類	色調･胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰･緻密	平瓦の凸面に、木材の角部を利用して三角形の押捺痕20箇所を施したもの。各部調整はナデ。凸面の木口端を焼成後に打ち欠く。木口に枠内刻印「ふかくさ　前右衛門」あり。これと同じ刻印の拓影は図版104・568に掲載。	19世紀前半
2	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰･緻密	平瓦の凸面に、木材の角部を利用して三角形の押捺痕23箇所を施したもの。各部調整はナデ。刻印なし。	19世紀前半
3	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰白～灰･緻密	平瓦の凸面に、木材の角部を利用して三角形の押捺痕20箇所を施したもの。各部調整はナデ。凸面の木口端を焼成後に打ち欠く。木口に1と同じ枠内刻印「ふかくさ　前右衛門」あり。これと同じ刻印の拓影は図版104・568に掲載。	19世紀前半
4	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰･緻密	平瓦の凸面に、木材の角部を利用して三角形の押捺痕20箇所を施したもの。各部調整はナデ。木口に1・3と同じ枠内刻印「ふかくさ　前右衛門」あり。これと同じ刻印の拓影は図版104・568に掲載。	19世紀前半
5	井戸 F1280	井戸枠瓦	にぶい黄橙から灰･緻密	平瓦の凸面に、木材の角部を利用して三角形の押捺痕24箇所を施したもの。各部調整はナデ。刻印なし。	19世紀前半
6	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰白～灰･緻密	平瓦の凸面に、木材の角部を利用して三角形の押捺痕24箇所を施したもの。各部調整はナデ。凸面の木口端を焼成後に打ち欠く。刻印なし。	19世紀前半
7	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰白～灰･緻密	平瓦の凸面に、何らかの角部を利用して三角形の押捺痕31箇所を施したもの。両側縁に2箇所ずつヘラ状工具による刺突痕あり。井戸枠組のズレを防止するための造作か。各部調整はナデ。刻印なし。	19世紀前半
8	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰･緻密	平瓦。凸面にキザミが無い。各部調整はナデ。木口に枠内刻印「山之内　長兵衛」あり。この刻印の拓影は図版104・568にあり。	19世紀前半
9	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰･緻密	平瓦。凸面にキザミが無い。各部調整はナデ。木口に枠内刻印「山之内　長兵衛」あり。この刻印の拓影は図版104・568にあり。	19世紀前半
10	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰白～灰･緻密	平瓦。凸面にキザミが無い。各部調整はナデ。両側縁に2箇所ずつヘラ状工具による刺突痕あり。井戸枠組のズレを防止するための造作か。刻印なし。	19世紀前半

表102　刻印瓦観察表（図版104・567）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	土壙 F1265 焼土層	丸瓦	灰白～灰・緻密	鈴形の記号印。丸瓦の外面中央の玉縁よりに押す。	19世紀前半
2	土壙 G1447	丸瓦	灰・緻密	渦形の記号印。丸瓦の外面中央に押す。	17世紀中頃
3	溝 F1250	平瓦か 熨斗瓦	灰白～灰・緻密	渦形の記号印。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	17世紀後半～ 18世紀前半
4	土壙 C360	平瓦か 熨斗瓦	灰・緻密	渦形の記号印。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	18世紀後半
5	土壙 C359	平瓦か 熨斗瓦	灰・緻密	8葉の花弁形の記号印。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	18世紀前半
6	C区 掘下げ	平瓦か 熨斗瓦	灰・緻密	8葉の花弁形の記号印。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	不明
7	土壙 C347 下層	角桟板 塀瓦	灰・緻密	8葉の花弁形の記号印。角桟板塀瓦の側縁に押す。	18世紀後半
8	土壙 C1025	丸瓦	にぶい黄橙～ 灰、二次的被熱 で変色・緻密	5葉の花弁形の記号印。丸瓦の中央玉縁よりに押す。	17世紀前半
9	土壙 F1236	丸瓦	にぶい黄橙～ 灰、二次的被熱 で変色・緻密	円形の圏線内に正方形4個を並べる。角立四目結文ふうの記号印。丸瓦の外面中央に押す。	18世紀後半
10	溝C11 下層	平瓦か 熨斗瓦	灰・緻密	円形の圏線内に正方形4個を並べる。角立四目結文ふうの記号印。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	19世紀中頃
11	土壙 E340	桟瓦	灰白～灰・緻密	V字に円形をはめ込む記号印。12と同じ記号か。桟瓦の木口に押す。	18世紀前半
12	土壙 E340	平瓦	灰・緻密	山笠に円形をはめ込む記号印。11と同じ記号か。平瓦の木口に押す。	18世紀前半
13	溝 F1250	平瓦	灰白～灰、二 次的被熱で変 色・緻密	三角形の圏線内にさらに三角形の凹みを設け、その内側に3個の丸形の浮文を俵状に組み合わす記号印。平瓦の木口に押す。	17世紀後半～ 18世紀前半
14	土壙 C1	丸瓦	灰白～灰、二 次的被熱で変 色?・緻密	三重の三角形の記号印。丸瓦外面の玉縁側の段のタテ面の側縁近くに押す。	18世紀前半
15	C区 焼土層 掘下げ	平瓦か 熨斗瓦	灰・緻密	円形の圏線内に十字の記号印。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	不明
16	溝 F1250	平瓦か 熨斗瓦	灰・緻密	円形の圏線内に十字の記号印。15と同じデザインであるが、15がネガティブ表現であるのに対し、ポジティブ表現。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	17世紀後半～ 18世紀前半
17	溝 F1250	熨斗瓦	灰・緻密	円形の凹み内に5葉の花形文。花形は浮文状で、5～8がネガティブ表現であるのに対し、ポジティブ表現。熨斗瓦の木口に押す。	17世紀後半～ 18世紀前半
18	土壙 C357	平瓦か 熨斗瓦	にぶい橙、二次 的被熱で変色・ 緻密	円形の圏線内に平行する3直線を表し「目」字状にする記号印。平瓦もしくは熨斗瓦の木口に押す。	18世紀後半
19	土壙 C470	平瓦	灰白～灰・緻密	円形の凹みの中に浮文状に「人」字形もしくは「レ」字形を表す記号印。平瓦の木口に押す。	19世紀中頃
20	土壙 C500	軒平瓦 か 軒桟瓦	灰・緻密	横線に2本の直線がほぼ直角に立ち上がる印。記号印のように見えるが、27～29のような「五」の文字印の可能性あり。軒平瓦もしくは軒桟瓦の瓦当面右の周縁に押す。	19世紀中頃
21	土壙 C357	丸瓦	灰・緻密	楕円形の圏線内に文字「義」を表す文字印。丸瓦外面の中央玉縁よりに押す。	18世紀後半
22	E区 撹乱	丸瓦	灰・緻密	円形の圏線内に文字「甚」を表す文字印。丸瓦外面の中央に押す。	近現代

23	池 Ｆ1200	平瓦か 桟瓦	灰～黒褐、二次的被熱で変色	楕円形の圏線内に文字「喜」を表す文字印。平瓦もしくは桟瓦の木口に押す。	19世紀中頃
24	土壙 Ｃ384	桟瓦	灰・緻密	円形の圏線内に文字「五」を表す文字印。桟瓦の木口に押す。	19世紀中頃
25	Ｃ区 掘下げ	桟瓦	灰・緻密	円形の圏線内に文字「五」を表す文字印。24と同印。桟瓦の木口に押す。	不明
26	土壙 Ｈ15	桟瓦	灰・緻密	方形もしくは長方形の圏線内に不明の文字を表す文字印。「大」、「六」、「元」などが考えられるが、上半を欠くため不明。桟瓦の木口に押す。	19世紀中頃
27	Ｃ区 掘下げ	棟止瓦	灰白～灰・緻密	円形の圏線内に文字「五」を表す文字印。棟止瓦の瓦当面に押す。	不明
28	溝Ｃ491 上層	軒平瓦 か 軒桟瓦	灰・緻密	円形の圏線内に文字「五」を表す文字印。軒平瓦もしくは軒桟瓦の右周縁に押す。27とよく似るが、同印か不明。	18世紀後半
29	溝Ｄ４	軒桟瓦	灰・緻密	円形の圏線内に文字「五」を表す文字印。軒桟瓦の左周縁に押す。27・28と書体は同じだが別印。	19世紀中頃
30	溝Ｃ617 下層	軒桟瓦	灰・緻密	円形の圏線内に文字「八」を表す文字印。軒桟瓦の左周縁に押す。	18世紀中頃
31	土壙 Ｒ86	軒平瓦か 軒桟瓦	灰・緻密	長方形の圏線内に「□半」の２字もしくは２字以上を表す文字印。上部を欠くため一字は不明。軒平瓦もしくは軒桟瓦の右周縁に押す。	18世紀中頃
32	溝 Ｆ1250	軒平瓦	にぶい黄橙、二次的被熱で変色・緻密	円形の凹み内に文字「上」をポジティブに表す。軒平瓦の左周縁に押す。	17世紀後半～18世紀前半
33	土壙 Ｄ10 下層	軒平瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色・緻密	菱形の圏線内に文字「上」を表す。軒平瓦の右周縁に押す。	18世紀前半
34	土壙 Ｄ28	軒丸瓦	にぶい橙、二次的被熱で変色・緻密	菱形の圏線内に文字「上」を表す。丸瓦の外面中央玉縁近くに押す。33とよく似るが、同印か不明。	19世紀前半

表103　刻印瓦・文字瓦観察表（図版104・568）

遺物番号	遺構	種類	色調・胎土	形態・手法の特徴	遺構年代・型式
1	Ｃ区 掘下げ	軒桟瓦	灰・緻密	楕円形の圏線内に文字「長」を表す文字印。軒桟瓦の周縁左に押す。	不明
2	土壙 Ｃ641 上層	軒平瓦	灰・緻密	長方形の圏線内に文字「松」？を表す文字印。軒平瓦の周縁左に押す。	18世紀前半
3	土壙 Ｈ15	軒桟瓦	灰・緻密	円形の圏線内に文字「与」を表す文字印。軒桟瓦の周縁右に押す。	19世紀中頃
4	土壙 Ｈ15	軒桟瓦	灰・緻密	円形の圏線内に文字「市」を表す文字印。軒桟瓦の周縁右に押す。	19世紀中頃
5	土壙 Ｖ16	軒平瓦	灰・緻密	軒平瓦の瓦当笵に刻まれた文字状の表現。判読不能。	17世紀中頃～後半
6	瓦組 土壙 Ｂ636	軒桟瓦	灰・緻密	軒桟瓦の瓦当笵に刻まれた記号表現。三角形の内側に３条の直線を配して、小三角形の組み合わせ状に表現する。図版559の25と同じ。	19世紀中頃
7	井戸 Ｆ1280	井戸枠 瓦	灰・緻密	長方形の圏線内に２行で「ふかくさ　前右衛門」と記す人名印。井戸枠瓦の木口に押す。	19世紀前半
8	井戸 Ｆ1280	井戸枠 瓦	灰白～灰・緻密	長方形の圏線内に２行で「ふかくさ　前右衛門」と記す人名印。井戸枠瓦の木口に押す。図版568の３の拓影。	19世紀前半
9	井戸 Ｆ1280	井戸枠 瓦	灰・緻密	長方形の圏線内に２行で「ふかくさ　前右衛門」と記す人名印。井戸枠瓦の木口に押す。図版568の４の拓影。	19世紀前半
10	井戸 Ｆ1280	井戸枠 瓦	灰・緻密	長方形の圏線内に２行で「ふかくさ　前右衛門」と記す人名印。井戸枠瓦の木口に押す。上半を欠く。	19世紀前半
11	井戸 Ｆ1280	井戸枠 瓦	灰・緻密	長方形の圏線内に２行で「ふかくさ　前右衛門」と記す人名印。井戸枠瓦の木口に押す。図版568の１の拓影。	19世紀前半
12	土壙 Ｄ179	板塀瓦	灰・緻密	長方形の圏線内に２行で「ふかくさ　孫左衛門」と記す人名印。板塀瓦の表面側縁よりに押す。	19世紀前半

13	E区 撹乱	谷丸瓦	灰·緻密	長方形の圏線内に2行で「ふかくさ　市右衛門」と記す人名印。谷丸瓦の外面中央に押す。	近現代
14	溝 C11	軒桟瓦	灰·緻密	長方形の圏線内に2行で「□かくさ　□兵衛」と記す人名印。一文字軒桟瓦の瓦当面右端に押す。	18世紀後半
15	土壙 H15	雁振瓦	灰·緻密	長方形の圏線内に2行で「洛東　平右衛門」と記す人名印。雁振瓦の桟部木口に押す。	19世紀中頃
16	土壙 E188	雁振瓦	灰·緻密	長方形の圏線内に2行で「左□　九良兵衛」と記す人名印。雁振瓦の桟部木口に押す。	18世紀後半
17	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰·緻密	長方形の圏線内に2行で「山之内　長兵衛」と記す人名印。井戸枠瓦の木口に押す。図版568の9の拓影。	19世紀前半
18	井戸 F1280	井戸枠瓦	灰·緻密	長方形の圏線内に2行で「山之内　長兵衛」と記す人名印。井戸枠瓦の木口に押す。図版568の8の拓影。	19世紀前半
19	土壙 H15	雁振瓦	灰·緻密	長方形の凹みの中に陽刻状に2行で「京大佛瓦師　西村彦右衛門」と記す人名印。雁振瓦の外面に押す。	19世紀中頃
20	瓦組 土壙 B636	桟瓦	灰·緻密	長方形の圏線内に2行で「五位川治兵衛」と記す人名印。下端を欠くので、文字が続く可能性あり。桟瓦の木口に押す。	19世紀中頃
21	井戸 F946 上層	軒丸瓦	灰·緻密	圏線は無く、2行で「…大佛任瓦師　…□彦右衛門尉」と記す人名印。上部を欠く。軒丸瓦の外面中央に押す。	19世紀中頃
22	土壙 C2	丸瓦	淡黄、二次的被熱で変色·緻密	丸瓦の裏面に「十七」とヘラ描きする	19世紀中頃
23	土壙 E268A	雁振瓦	淡黄、二次的被熱で変色·緻密	雁振瓦の裏面に「十口　十」とヘラ描きする。	18世紀後半
24	土壙 G1166	不明瓦	浅黄橙、二次的被熱で変色·緻密	幅約7cmの板状の瓦で、裏面に鰭状のものが付く。表面に「森田平兵衛□」のヘラ描きがある。	17世紀後半

第3節　その他の遺物

1　貨幣

貨幣は、土器・陶磁器類に混在して数多く出土している。大半は寛永通宝である。出土量が膨大であるため、すべての貨幣について錆落としなどの処理を施すことが不可能であった。また、もとよりすべての資料を報告できない。そこで、遺構の中で共伴する土器・陶磁器類によって年代が確かな資料を主として取り上げた。さらに、これに漏れた種類の銭貨と金貨・銀貨を網羅できるように報告資料の選択を行なった。その結果、約280点の報告対象候補資料を抽出し、錆落としなどの処理を施した。さらに、それらの中の55点を報告対象とした。江戸時代以来の古銭学の蓄積は、寛永通宝を1,000種以上に分類するレベルに到達している[57]。報告者は、それを区分する技量を欠くため、寛永通宝などの銭貨の分類と記載については永井久美男氏の3期区分に従った[58]。また、金貨・銀貨の名称と記載方法は西脇康氏に準拠した[59]。

表104　貨幣観察表１（図版105・106・569）

No.	遺構	種類	材質	特徴	出土遺構年代
1	溝Ｃ11	鏡屋銭	銅製鋳造	円形の中央に円孔を配し、５葉の葉もしくは花弁を表す。外径26.0mm、円孔径4.9mm、厚さ2.9mm、重さ11.987g。	19世紀中頃
2	蔵Ｇ694	小玉銀	銀製鋳造	いわゆる豆板銀。表裏に判読不明の極印がある。裏面には「キ」と三角形状の２つの験小極印がある。長径17.4mm、短径12.0mm、重さ6.000g。	17世紀後半
3	蔵Ｇ694	小玉銀	銀製鋳造	いわゆる豆板銀。表に判読不明の極印があるようだが、摩滅して不明。裏面は無印である。長径27.0mm、短径18.0mm、重さ17.648g。	17世紀後半
4	土壙Ｃ628	桐小判型大判金	金製鍛造	表面に断面Ｖ字形の鏨を横向きにタテ４列に打ちゴザ目装飾とする。上下端の円内に天地逆の桐紋極印を、中央上よりの長方形郭内に「大判」とする極印を打つ。裏面は無紋無印。長径40.4mm、短径21.7mm、重さ4.431g。金属成分は金90％、銀10％である。	18世紀後半
5	江戸時代整地層	一分金	金製鍛造	長方形の薄延金。表面上部の扇形郭内と下部とに桐紋、中央には横方向で右から左に文字「一分」、外縁には圏点を配する極印を打つ。裏面は右上隅に「元」字で、中央にタテに「光次」の花押、外縁に圏点を配した極印を打つ。「元」字下方に「中」字の験小極印、中央に円形の小桐極印を打つ。左右の側面にも２箇所ずつ計４個の験小極印がある。元禄一分金である。長さ15.2mm、幅10.5mm、重さ4.449g。金65％、銀34％である。	不明
6	土壙Ｂ776	一分金	金製鍛造	長方形の薄延金。表面上部の扇形郭内と下部とに桐紋、中央には横方向で右から左に文字「一分」、外縁には圏点を配する極印を打つ。裏面は中央にタテに「光次」の花押、外縁に圏点を配した極印を打つ。左右の上端に１箇所ずつ験小極印、中央下寄りに円形の小桐極印を打つ。左右の側面にも３箇所ずつ計６個の験小極印がある。享保一分金か。長さ17.8mm、幅10.6mm、重さ4.422g。金属成分は金90％、銀10％である。	18世紀前半
7	土壙Ｇ269	文久永宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順で「文久永寶」と記す。書体は真文。裏面は11波の波文。直径27.1mm、孔径5.8mm、重さ3.920g。	19世紀前半
8	土壙Ｇ269	文久永宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順で「文久永寶」と記す。書体は草文。裏面は11波の波文。直径27.2mm、孔径7.1mm、重さ4.392g。	19世紀前半
9	土壙Ｇ824	宝永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寶永通寶」と記す。裏面は周縁上に「永久世用」と４字記すようであるが、下の「久」字以外全く見えない。直径37.3mm、孔径8.9mm、重さ8.624g。	18世紀後半
10	土壙Ｃ641	宝永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寶永通寶」と記す。裏面は周縁上に「永久世用」と４字記すはずだが、全く見えない。直径37.5mm、孔径8.8mm、重さ8.698g。	18世紀後半
11	土壙Ｆ2672	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径23.9mm、孔径5.0mm、重さ3.069g。	18世紀中頃
12	土壙Ｆ1432下層	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径25.2mm、孔径5.5mm、重さ2.369g。	17世紀中頃（1650年代）
13	土壙Ｆ1432下層	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.6mm、孔径5.2mm、重さ3.099g。	17世紀中頃（1650年代）
14	土壙Ｆ1432下層	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.8mm、孔径5.1mm、重さ3.311g。	17世紀中頃（1650年代）
15	土壙Ｂ725	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.5mm、孔径5.6mm、重さ2.526g。	17世紀中頃～後半（1660年代～1670年代前半）
16	土壙Ｂ725	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.6mm、孔径6.2mm、重さ2.937g。	17世紀中頃～後半（1660年代～1670年代前半）
17	土壙Ｂ725	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径23.6mm、孔径6.3mm、重さ2.382g。	17世紀中頃～後半（1660年代～1670年代前半）
18	土壙Ｆ1244	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.0mm、孔径4.9mm、重さ3.675g。	17世紀後半（1680年代）
19	土壙Ｆ1244	寛永通宝	銀製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.0mm、孔径5.6mm、重さ3.405g。	17世紀後半（1680年代）
20	土壙Ｆ1244	寛永通宝	銀製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径25.5mm、孔径5.9mm、重さ4.144g。	17世紀後半（1680年代）

21	穴蔵Ｆ1387	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.9mm、孔径5.7mm、重さ2.921g。	17世紀末～18世紀初頭
22	穴蔵Ｆ1387	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径25.5mmm、孔径5.4mm、重さ4.432g。	17世紀末～18世紀初頭
23	穴蔵Ｆ1387	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径25.4mm、孔径5.3mm、重さ4.024g。	17世紀末～18世紀初頭
24	穴蔵Ｆ1387	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.8mm、孔径5.4mm、重さ3.756g。	17世紀末～18世紀初頭
25	穴蔵Ｆ1387	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径25.1mm、孔径5.2mm、重さ4.319g。	17世紀末～18世紀初頭
26	穴蔵Ｆ1387	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径25.4mm、孔径5.9mm、重さ3.619g。	17世紀末～18世紀初頭
27	穴蔵Ｆ1387	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.4mm、孔径5.0mm、重さ3.825g。	17世紀末～18世紀初頭
28	穴蔵Ｆ1387	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.9mm、孔径5.4mm、重さ3.804g。	17世紀末～18世紀初頭
29	穴蔵Ｆ1387	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径25.2mm、孔径5.4mm、重さ3.792g。	17世紀末～18世紀初頭
30	土壙Ｂ687	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文・無銘。いわゆる「古寛永」で１期。直径24.1mm、孔径5.4mm、重さ3.275g。	18世紀前半～中頃

表105　貨幣観察表２（図版107・570）

No.	遺構	種類	材質	特徴	出土遺構年代
1	穴蔵Ｆ1387下層	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「文」一字を配する。いわゆる「新寛永」の「文銭」で２期。直径25.6mm、孔径5.4mm、重さ3.627g。	17世紀末～18世紀初頭
2	穴蔵Ｆ1387下層	寛永通宝	銀製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「文」一字を配する。いわゆる「新寛永」の「文銭」で２期。直径26.0mm、孔径5.7mm、重さ3.283g。	17世紀末～18世紀初頭
3	穴蔵Ｆ1387下層	寛永通宝	銀製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「文」一字を配する。いわゆる「新寛永」の「文銭」で２期。直径25.6mm、孔径5.5mm、重さ3.358g。	17世紀末～18世紀初頭
4	穴蔵Ｆ1387下層	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「文」一字を配する。いわゆる「新寛永」の「文銭」で２期。直径25.8mm、孔径5.6mm、重さ3.524g。	17世紀末～18世紀初頭
5	土壙Ｆ1244	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「文」一字を配する。いわゆる「新寛永」の「文銭」で２期。直径25.8mm、孔径5.3mm、重さ3.629g。	17世紀後半（1680代）
6	穴蔵Ｆ1387下層	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「文」一字を配する。いわゆる「新寛永」の「文銭」で２期。直径25.9mm、孔径5.6mm、重さ4.209g。	17世紀末～18世紀初頭
7	穴蔵Ｆ1387下層	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「文」一字を配する。いわゆる「新寛永」の「文銭」で２期。直径25.8mm、孔径5.8mm、重さ3.670g。	17世紀末～18世紀初頭
8	土壙Ｈ33	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「文」一字を配する。いわゆる「新寛永」の「文銭」で２期。直径25.2mm、孔径5.6m、重さ3.518g。	18世紀後半
9	Ｂ区攪乱	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「仙」一字を配する。いわゆる「新寛永」で３期。直径24.7mm、孔径5.7mm、重さ3.821g。	現代
10	土壙Ｅ45	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「小」一字を配する。いわゆる「新寛永」で３期。直径22.8mm、孔径6.6mm、重さ2.477g。	18世紀後半
11	土壙Ｅ45	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「元」一字を配する。いわゆる「新寛永」で３期。直径22.9mm、孔径6.4mm、重さ2.142g。	18世紀後半
12	溝Ｈ30	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「元」一字を配する。いわゆる「新寛永」で３期。直径22.1mm、孔径5.7mm、重さ1.848g。	19世紀中頃
13	土壙Ｅ287	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「足」一字を配する。いわゆる「新寛永」で３期。直径22.0mm、孔径5.8mm、重さ2.261g。	18世紀末～19世紀初頭

14	土壙Ｅ48	寛永通宝	銀製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無文で、上部に「足」一字を配する。いわゆる「新寛永」で３期。直径22.6mm、孔径5.3mm、重さ1.870g。	19世紀前～中頃
15	土壙Ｆ1264	寛永通宝	銀製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は11波の波文。四文銭。直径28.7mm、孔径5.9mm、重さ4.264g。	18世紀末～19世紀初頭
16	土壙Ｅ45	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無銘・無文。いわゆる「新寛永」で３期。直径23.6mm、孔径6.0mm、重さ1.867g。	18世紀後半
17	土壙Ｅ45	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無銘・無文。いわゆる「新寛永」で３期。直径25.0mm、孔径6.3mm、重さ3.554g。	18世紀後半
18	土壙Ｅ45	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無銘・無文。いわゆる「新寛永」で３期。直径23.3mm、孔径6.2mm、重さ2.162g。	18世紀後半
19	土壙Ｅ45	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無銘・無文。いわゆる「新寛永」で３期。直径23.2mm、孔径6.3mm、重さ2.332g。	18世紀後半
20	土壙Ｂ716	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無銘・無文。いわゆる「新寛永」で３期。直径23.0mm、孔径5.7mm、重さ2.652g。	18世紀末～19世紀初頭
21	土壙Ｂ687	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無銘・無文。いわゆる「新寛永」で３期。直径24.4mm、孔径5.9mm、重さ2.300g。	19世紀前～中頃
22	土壙Ｂ687	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無銘・無文。いわゆる「新寛永」で３期。直径24.5mm、孔径5.7mm、重さ3.444g。	19世紀前～中頃
23	土壙Ｂ687	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無銘・無文。いわゆる「新寛永」で３期。直径22.6mm、孔径6.8mm、重さ2.121g。	19世紀前～中頃
24	Ｂ区掘下げ	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無銘・無文。いわゆる「新寛永」で３期。直径24.5mm、孔径5.7mm、重さ2.821g。	不明
25	Ｂ区掘下げ	寛永通宝	銅製鋳造	円形方孔の銭貨。表面は上下右左の順に「寛永通寶」と記す。裏面は無銘・無文。いわゆる「新寛永」で３期。直径23.1mm、孔径5.5mm、重さ2.166g。	不明

２　金属製品

金属製品は鉄釘などを主体として、多量に出土している。しかし、すべての出土品について錆落としなどの処理作業を実施することができず、鍍金などが施された優品中心の処理作業を行なわざるを得なかった。したがって、報告対象資料は共伴遺物などが明瞭でない資料を多く含むものになった。報告にあたっては、極力出土した全種類の遺物を掲載することに配慮した。また、金属の成分分析を経ていないので、記載された金属種類は肉眼観察によるものである点を明記しておきたい。

表106　金属製品観察表１（図版108・571）

No.	遺構	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙Ｅ235	煙管鐓	真鍮	鐓付煙管の鐓部分。板状の金属を輪状に曲げを連続させ５葉の花弁風とする。鍛造溶接。	17世紀後半
2	土壙Ｇ1447	煙管鐓	真鍮	鐓付煙管の鐓部分。輪花状の中央に１穴を開け、その周囲に小穴７個を巡らし花弁状とする。鍛造溶接。	17世紀中頃
3	土壙Ｇ1447	煙管鐓	真鍮	鐓付煙管の鐓部分か。輪花状の金属板の中央に１穴を開け、線彫で11葉の菊花を表す。鋳造して彫刻か。	17世紀中頃
4	土壙Ｆ1432	煙管鐓	真鍮	鐓付煙管の鐓部分か。輪花状の金属板の中央に１穴を開け、線彫で16葉の菊花を表す。鋳造して彫刻か。	18世紀中頃
5	土壙Ｇ1447	煙管鐓	真鍮	鐓付煙管の鐓部分か。方形金属板の四隅を落として変形の８角形とす、中央に１穴を開け、横に小穴１穴を配する。鋳造か。	17世紀中頃

6	土壙F1432	煙管	真鍮	火皿から吸口までの4つの部分である。1個体を構成するものか不明だが出土状態から一連のものとして配列した。火皿は深い。脂返しを介して火皿は高い位置にある。鍛造溶接。	17世紀中頃
7	土壙B725	煙管	真鍮	長い吸口と雁首である。火皿は深い。羅宇を介して1個体を構成するものと思われる。脂返しを介して火皿は高い位置にある。鍛造溶接。	17世紀中頃～後半
8	土壙E235	煙管	真鍮	長い雁首である。火皿下に補強体を巡らす。脂返しを介して火皿は高い位置にある。鍛造溶接。	17世紀後半
9	土壙B725	煙管	真鍮	長い雁首である。火皿下に細い補強体を1重巡らす。脂返しを介して火皿は高い位置にある。鍛造溶接。	17世紀中頃～後半
10	土壙G1447	煙管	真鍮	長い雁首である。火皿下に補強体が無い。脂返しを介して火皿は高い位置にある。火皿は変形する。鍛造溶接。	17世紀中頃
11	G区掘下げ	煙管	真鍮	短い雁首である。火皿の下に3重の補強体を巡らす。脂返しを介して火皿は高い位置にあり、火皿窓を有する。鍛造溶接。	不明
12	土壙B725	煙管	真鍮	短い雁首である。火皿の下に1重の補強体を巡らす。脂返しを介して火皿はやや高い位置にある。鍛造溶接。	17世紀中頃～後半
13	溝A7	煙管	真鍮	短い雁首である。火皿の下に補強体は無い。脂返しを介して火皿はやや高いやや高い位置にある。鍛造溶接。	19世紀中頃
14	穴蔵F1387	煙管	真鍮	短い雁首である。火皿の下に補強体は無い。脂返しを介して火皿はやや高い位置にある。鍛造溶接。	17世紀末～18世紀初頭
15	土壙B716	煙管	真鍮	短い雁首である。火皿の下に補強体は無い。脂返しを介して火皿はやや高い位置にある。鍛造溶接。	18世紀末～19世紀初頭
16	土壙H188	煙管	真鍮	短い雁首である。火皿の下に補強体は無い。脂返しを介して火皿は低い位置にある。鍛造溶接。	18世紀後半
17	土壙B716	煙管	真鍮	短い雁首である。火皿の下に補強体は無い。脂返しを介して火皿は低い位置にある。鍛造溶接。	18世紀末～19世紀初頭
18	土壙B716	煙管	真鍮	短い雁首である。火皿の下に補強体は無い。火皿は低く脂返しがない。鍛造溶接。	18世紀末～19世紀初頭
19	土壙E45	煙管	真鍮	短い雁首である。火皿の下に補強体は無い。火皿は低く脂返しがない。鍛造溶接。	18世紀後半
20	土壙B687	煙管	真鍮	短い雁首に同様の筒状金具を差し込み、雁首を長くする。火皿の下に補強体は無い。火皿は低く脂返しがない。鍛造溶接。	19世紀前半～中頃
21	G区掘下げ	煙管	真鍮	長い吸口である。口付部分を欠く。唐草文もしくは飛雲文を彫刻する。鍛造。	不明
22	土壙F1384	煙管	真鍮	短い吸口である。口付けに段を有する。肩に25条の平行条線がめぐる。鍛造。	19世紀中頃
23	S区掘下げ	煙管	真鍮	短い吸口である。口付けに段を有する。細い吸口から段を介して太い肩部に至る。段部分に細い突線が3状めぐる。鍛造。	不明
24	土壙E45	煙管	真鍮	短い吸口である。細い吸口から段を介して太い肩部に至る。鍛造。	18世紀後半
25	土壙E45	煙管	真鍮	短い吸口である。口付けから直線的に延び肩がない。鍛造。	18世紀後半
26	土壙B687	煙管	真鍮	短い吸口である。口付けから緩やかな曲線で肩に至る。鍛造。	19世紀前半～中頃
27	土壙B687	煙管	真鍮	短い吸口である。口付けから緩やかな曲線で肩に至る。鍛造。	19世紀前半～中頃
28	土壙E76	煙管銭	真鍮	火皿を潰して楕円形の有孔銭貨形とする。	18世紀末～19世紀初頭
29	土壙B687	煙管銭	真鍮	火皿を潰して円形の有孔銭貨形とする。	19世紀前半～中頃
30	土壙C651	髪飾り	銅	二股の小型簪。幼児用か。頭部に耳かき意匠はない。丸板部に4孔を穿ち花弁状とする。鍛造。	18世紀前半
31	土壙G593	髪飾り	銅	二股の小型簪。幼児用か。頭部に耳かき意匠はない。丸板部の片面は唐花文、反面は左右の天地を逆にした抱大根文である。 両面とも地は魚々子。鍛造。	18世紀前半
32	土壙E211	髪飾り	銅	二股の簪。頭部を欠く。丸板部分の片面は八重桜文？反面は沢瀉文である。両面とも地は魚々子。鍛造。	18世紀後半
33	土壙E48	髪飾り	銅	二股の簪。二股部を欠く。頭部に耳かき意匠。丸板部の表面に菊花文。鍛造。	19世紀中頃
34	土壙G639	髪飾り	銅	二股の簪。二股部は先端が欠損し大きく変形する。二股部に微細な文様を刻む。頭部に耳かき意匠。菱形の板部の両面にそれぞれ上下対鶴菱文を表す。両面とも地は魚々子。鍛造。	17世紀後半
35	穴蔵C548	髪飾り	銅	二股の簪。頭部に耳かき意匠。菱形の板部の両面に不明文様がある。鍛造。	17世紀前半

36	土壙Ｈ188	髪飾り	銀合金？	箆状一本形のびらびら簪。頭部に耳かき意匠。本体全体に唐草の細文を彫る。上部に竹笹意匠の飾板を鋲止めする。飾板の一端に小穴を穿ち、びらびらを吊る輪金具を付ける。鍛造鋲留。彫刻部分が銀色に残り、象眼風に見えるが、銀製の簪と考える。	18世紀後半
37	土壙Ｃ612	髪飾り	銅	箆状一本形の簪。頭部に耳かき意匠。飾板は結雁文。鍛造。	18世紀後半
38	土壙Ｆ1400	髪飾り	銅	二股の簪。頭部に耳かき意匠。飾板は揚羽蝶文。鍛造。	19世紀中頃
39	土壙Ｃ648	髪飾り	銅	二股の簪。頭部に耳かき意匠。飾りはなし。鍛造。	18世紀後半
40	溝Ｐ６	髪飾り	金銅	二股の簪。頭部に耳かき意匠なし。飾りはなし。鍛造。	不明
41	土壙Ｄ57	髪飾り	銅	二股の簪。棒状のものを二つ折りにし頭部を付ける技法だが、頭部を欠く。飾り板はなし。脚部上部に唐草の細文を彫る。鍛造。	19世紀前半
42	Ｄ区掘下げ	髪飾り	金銅	二股の簪。頭部に耳かき意匠。飾り板はないが、脚部に細文を彫る。鍛造。	不明
43	土壙Ｅ165	耳かき	銅	棒状の耳かき。鍛造。	18世紀後半～19世紀前半
44	土壙Ｇ46	耳かき	銅	棒状の耳かき。基部に１穴を開ける。基部側半分は断面四角形で横方向の条線などを刻んで、滑り止め、および装飾とする。鍛造。	19世紀前半

表107　金属製品観察表２（図版109・572）

No.	遺構	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙Ｂ687	包丁	鉄	包丁の切先である。鍛造。	19世紀前半～中頃
2	土壙Ｆ1605	包丁	鉄	包丁の刀身部分で茎を欠く。鍛造。	16世紀末～17世紀初頭
3	穴蔵Ｆ1387	包丁	鉄	包丁の刀身から茎部分である。切先を欠く。鍛造。	17世紀末～18世紀初頭
4	土壙Ｈ15	包丁	鉄	包丁の刀身から茎部分である。切先と茎の端部および刃部を欠く。鍛造。	19世紀中頃
5	土壙Ｈ306	包丁	鉄	全体がほぼ完存する。柄部分に螺旋状にまいた銅線が残る。	18世紀後半
6	穴蔵Ｇ749	燗鍋	鉄	椀形に注口と板状の把手が付く。鋳造か鍛造か不明。	17世紀後半
7	土壙Ｆ1265	目皿	鉄	輪条の金具の内側に板状金具を縦横に溶接する。焜炉の付属品と考える。鍛造。	19世紀前半
8	穴蔵Ｆ1387	鍋類把手	真鍮？	板状の長い金具を弧状に曲げるもの。両端に小穴を開ける。片側の穴には鋲が残る。鍛造。	17世紀末～18世紀初頭
9	土壙Ｂ674	鍋類把手	真鍮？	板状の長い金具を弧状に曲げるもの。両端に小穴を開ける。鍛造。	18世紀前半
10	土壙Ｇ1447	不明把手	真鍮？	棒状の金具を弧状に曲げ、両端を平らに潰し外反させ、鋲止めのための円孔を開ける。鍛造。	17世紀中頃
11	井戸Ｐ162	不明把手	真鍮？	板状の金具を弧状に曲げ、両端に円孔を開ける。片側に鋲止めめされた本体側の金具が残る。金具は特殊な意匠である。鍛造。	17世紀前半
12	Ｅ区清掃中	燗鍋把手	銅	銅線を編んで把手としたもの。京信楽系陶器の燗鍋に付く。鍛造。	不明
13	穴蔵Ｆ1475	灰よせ	真鍮？	棒状の先端に、板状金具から熊手状の足を切り出したものを付けたもの。鍛造。	17世紀後半
14	溝Ｈ31	杓子	鉄	板状の把手に浅い皿状部分が付く。皿状部分は端部の大半を欠く。鍛造。	19世紀中頃
15	土壙Ｇ1716	杓子	真鍮？	板状の把手に浅い皿状部分が付く。皿状部分は端部の大半を欠き、曲がる。鍛造。	17世紀後半
16	土壙Ｅ211	穴あき杓子	銅？	板状の把手に楕円形が付き、内側を六角形の透かしに抜く。鍛造	18世紀後半
17	穴蔵Ｆ1387	杓子	銅？	皿状部分のみ残る。鍛造。	17世紀末～18世紀初頭
18	土壙Ｇ863	杓子	銀？	浅い皿状部分に把手部分の筒状金具が鋲止めされる。ここに木製把手が装着されるものか。鍛造。	18世紀前半
19	土壙Ｈ271	杓子	真鍮？	板状の把手に浅い皿状部分が付く。把手の大半を欠く。皿状部は曲がる。鍛造。	18世紀中頃
20	Ｇ区遺構検出中	五徳	真鍮？	棒状のものを円形に曲げて、３本の棒状を溶接したもの。小型のもの。鍛造溶接。	不明
21	土壙Ｂ687	火打金	鉄	板状の両端に突起を付け、木製把手との装着部分とする。鍛造。	19世紀前半～中頃
22	土壙Ｆ1432	火打金	鉄	板状の両端に突起を付け、木製把手との装着部分とする。把手部分には木質が残る。鍛造。	17世紀中頃
23	土壙Ｆ1432	火打金	鉄	板状の両端に突起を付け、木製把手との装着部分とする。把手部分には木質が残る。鍛造。	17世紀中頃

表108　金属製品観察表3（図版110・573）

No.	遺構	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙F1244	灯芯押え	真鍮？	細長い板状の金具を円形に曲げ、一端を上に延ばす。上部はネジって螺旋状とする。先端は尖る。鍛造。	17世紀後半
2	土壙E235	灯芯押え	真鍮？	細長い板状の金具を円形に曲げ、一端を上に延ばす。上部はネジって螺旋状とする。先端は回転させて輪状とする。鍛造。	17世紀後半
3	土壙B702	灯芯押え	真鍮？	細長い板状の金具を円形に曲げ、一端を上に延ばす。先端を欠く。鍛造。	17世紀前半
4	土壙R123	灯芯押え	真鍮？	細長い板状の金具を円形に曲げ、一端を上に延ばす。上部はネジって螺旋状とする。先端は尖る。鍛造。	18世紀前半
5	土壙E235	灯芯押え	真鍮？	細長い板状の金具を円形に曲げ、一端を上に延ばす。上部はネジって螺旋状とする。先端は尖る。鍛造。	17世紀後半
6	B区掘下げ	灯芯押え	真鍮？	細長い板状の金具を円形に曲げ、一端を上に延ばす。上部はネジらず直線的に延びる。先端を欠く。鍛造。	不明
7	土壙G1211	提灯芯立て？	真鍮？	浅い皿状金具の中央に棒状金具をおそらく鋲止めする。蝋燭を立てる器具と考えるが、どのような灯火具の部位であるかよく判らない。鍛造。	17世紀中頃
8	土壙G804	提灯芯立て	真鍮？	円板状の薄い金具の中央を穿孔して、中空の棒状金具に止め金具を差し込んだものを通す。提灯の蝋燭を立てる部位の金具と考える。鍛造。	不明
9	土壙H529	灯明皿	真鍮？	薄い皿状の口縁の一端に板状の耳が付く。灯明皿と考える。別の円板状金具が近くから出土しており、これに伴う可能性がある。鍛造。	17世紀前半
10	土壙F1574	灯火具	真鍮？	板状の三足の上に中空の円柱状金具が付く。内部の中央に芯立てが立つ。円柱状の本体の上面には、芯立て上に1穴、その横に1穴の円孔がある。灯火具の一種である。鍛造溶接。	17世紀後半
11	G区遺構検出中	文鎮	銅？	薄く長い棒状の中央に球状のツマミを付ける。鍛造溶接？	不明
12	R区遺構検出中	分銅	銅？	直方体のタテ中央に円孔を開ける。円孔と外部を通ずるように細い切れ目がある。鋳造か。	不明
13	土壙E311	分銅	銅？	隅丸の直方体の一端に小さなツマミを付ける。ツマミは円孔を有する。鋳造か。	17世紀後半～18世紀前半
14	土壙H528	水滴	銅？	瓜状意匠の中央に口頸部を付け、一端に注口を設ける。鍛造溶接。	17世紀中頃
15	H区遺構検出中	水滴	銅？	滴水形の意匠の中央に三連円形の1孔を開け、一端に注口を設ける。鍛造溶接。	不明
16	小穴F2043	水滴	銅？	円形の中央部に口頸部を付け、注口が無い。鍛造溶接。	不明
17	土壙E235	水滴	銅？	ハート形意匠の中央に楕円形の口頸部を付け、一端に注口を設ける。鍛造溶接。	17世紀後半
18	土壙H61	水滴	銅？	ラグビーボール形意匠の中央に口頸部を付け、一端に注口を設ける。鍛造溶接。	不明
19	溝C491	水滴	銅？	天井部のみ残る。長方形意匠の中央に長方形の口頸部を付け、一隅に注口設ける。鍛造溶接。	18世紀後半
20	土壙B687	水滴	銅？	長方形の箱形で、天井部は少し膨らむ。中央部に長方形の口頸部を有する一隅に注口を設ける。鍛造溶接。	19世紀前半～中頃
21	土壙H300	水滴	銅？	長方形の箱形で、天井部は少し膨らむ。中央部に長方形の口頸部を有する。一隅に注口を設ける。鍛造溶接。	18世紀後半
22	土壙M13	水滴	銅？	長方形の箱形で、天井部は少し膨らむ。中央部に長方形の口頸部を有する。一隅に注口を設ける。鍛造溶接。	19世紀前半
23	土壙C548	水滴	銅？	長方形の箱形で、天井部は少し膨らむ。中央部に長方形の口頸部を有する。一隅に注口を設ける。鍛造溶接。	17世紀前半
24	井戸E40	水滴	銅？	長方形の箱形で、天井部は少し膨らむ。中央部に長方形の口頸部を有する。一隅に注口を設ける。鍛造溶接。	18世紀前半～後半
25	G区整地層	水滴	銅？	長方形の箱形で、中央に楕円形の口頸部を設ける。一隅に注口を設ける。天井部と側面に16弁の菊花と桐？文様を有する。	不明
26	E区清掃中	茶托	銅？	高台付きの皿状の内側中央に高い高台状の輪を設ける。鍛造溶接。	不明
27	F区清掃中	鍵	真鍮？	断面長方形の棒状で、把手部分が段を介して太くなる。把手の先端に円孔がある。先端を欠くがT字状に開く。鍛造？	不明
28	土壙G938	鍵	真鍮？	断面長方形の棒状で、把手部分が段を介して太くなり丸みを帯びた意匠とする。把手の先端に輪状の円孔がある。先端はT字状に開き90°手前に折れる。鍛造？	不明
29	土壙E165	鍵	真鍮？	輪状のツマミ部分に筒状の棒状金具を付け、先端部の2箇所に平行する突起を付けたもの。鍛造。	18世紀後半
30	F区撹乱	鍵	鉄	輪状のツマミ部分に筒状の棒状金具を付け、先端部の2箇所に平行する突起を付けたもの。鍛造。	不明
31	土壙E45	錠前	鉄	コの字形の本体は中空で、コの字の両端を棒状の金具が繋ぐ。カギ穴は錆で見えない。鍛造溶接。	18世紀後半

32	土壙Ｅ188	錠前	鉄	コの字形の本体は中空で、コの字の両端を棒状の金具が繋ぐ。本体内にはヨコ方向の棒状金具２本が入っている。カギ穴は錆で見えない。鍛造溶接。	18世紀後半
33	土壙Ｒ87	錠前	鉄	コの字形でカギ穴部分が突起する形式である。本体は中空で、コの字の両端を棒状の金具が繋ぐ。カギ穴が明瞭である。鍛造溶接。	18世紀後半
34	溝Ｃ605	匙	銅？	小型の匙。棒状の素材の先端を潰して広げる。鍛造。	18世紀前半
35	土壙Ｇ1447	匙	銅？	筒状の把手に板状の匙を装着する。把手には三角形状に配した小孔が３個ある。鍛造。	17世紀中頃
36	土壙Ｐ54	匙	銅？	棒状の素材の先端を潰して広げる。把手も薄板状。完形か。鍛造。	不明
37	土壙Ｅ45	匙	銅？	棒状の素材の先端を潰して広げる。把手は板状。鍛造。	18世紀後半
38	土壙Ｇ1447	匙	銅？	棒状の素材の先端を潰して広げる。把手は板状。鍛造。	17世紀中頃
39	土壙Ｂ725	匙	銅？	棒状の素材の先端を潰して広げる。把手は板状。完形。鍛造。	17世紀中頃～後半
40	土壙Ｂ687	匙	銅？	棒状の素材の先端を潰して広げる。把手も薄板状。完形。鍛造。	19世紀前半～中頃
41	土壙Ｂ687	匙	銅？	大型の匙。把手を欠く。鍛造。	19世紀前半～中頃

表109　金属製品観察表４（図版111・574）

No.	遺構	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙Ｈ33	掛金具	真鍮？	小型の釣り針状の掛金具。先端が尖る。断面形は円形。鍛造。	18世紀末
2	土壙Ｅ45	掛金具	真鍮？	中型の釣り針状の掛金具。先端を欠く。断面形は正方形。鍛造。	18世紀後半
3	蔵Ｇ694	掛金具	真鍮？	大型の釣り針状の掛金具。先端は丸い。断面形は円形。鍛造。	17世紀後半
4	土壙Ｇ863	掛金具	真鍮？	中型の釣り針状の掛金具。先端は尖る。断面形は正方形。上部の輪状部分に銅線が残る。鍛造。	18世紀前半
5	土壙Ｈ33	掛金具	真鍮？	大型の釣り針状の掛金具。先端が尖る。断面形は円形。鍛造。	18世紀末
6	土壙Ｇ1447	掛金具	真鍮？	中型の釣り針状の掛金具。先端は尖る。断面形は円形。鍛造。	17世紀中頃
7	土壙Ｂ687	掛金具	真鍮？	大型の釣り針状の掛金具。先端は丸い。断面形は円形。鍛造。	18世紀前半
8	土壙Ｇ1086	御簾掛金具	真鍮？	薄い板状の金具。片半を欠損する。無文。鍛造。	18世紀前半
9	土壙Ｇ1086	御簾掛金具	真鍮？	薄い板状のＵ字形の金具。片側端に１穴を穿ち、金属の輪を付ける部分とする。それ以下は縦横の線を彫り、横部から先は鏨の小点で唐草風の文様とする。鍛造。	18世紀前半
10	土壙Ｇ1086	御簾掛金具	真鍮？	薄い板状のＵ字形の金具。先端を欠損する。片側端に１穴を穿ち、金属の輪を付ける。それ以下は縦横の線を彫り、横部から先は鏨の小点で唐草風の文様とする。鍛造。	18世紀前半
11	土壙Ｇ1086	御簾掛金具	真鍮？	薄い板状のＵ字形の金具。先端側2／3を欠損する。片側端に１穴を穿ち、金属の輪を付ける。それ以下は縦横の線を彫り文様とする。鍛造。	18世紀前半
12	土壙Ａ518	掛金具？	真鍮？鍍金	棒状金具の上端を丸く曲げ吊下げ部とする。下部はＬ字形に曲げる。先端は丸い。断面円形。掛金具の一種と考える。鍛造。	17世紀前半
13	土壙Ｈ33	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具の上端を球状に作り出す。断面円形。鍛造。	18世紀末
14	土壙Ｍ12	火箸？	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端を球状に作り出すものと思われるが、欠損している。断面方形。鍛造。	17世紀後半
15	土壙Ｅ211	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端を截頭四角錐状に作り出す。断面方形。鍛造。	18世紀後半
16	土壙Ｇ1052	火箸	真鍮？鍍金	下部に向かって先細りする棒状金具。上端を壷形に作り出し、箸本体との境界に２状の沈線を巡らし３段を作り出す。断面六角形。鍛造。香道具などの火箸か。	18世紀後半
17	土壙Ｂ674	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端意匠を欠損する。上端意匠と箸本体との境界に２状の沈線を巡らし３段を作り出す。断面六角形。鍛造。香道具などの火箸か。	18世紀前半
18	土壙Ｆ1400	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端を半球状に作り出す。箸本体上部は断面六角形か。ここに文様あり。下部は断面円形。鍛造。	19世紀中頃
19	土壙Ｆ1400	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端を半球状に作り出す。箸本体上部は断面六角形か。ここに文様あり。下半は断面円形。鍛造。	19世紀中頃
20	土壙Ｇ1052	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端を丸く作り出し直下に２本の沈線を巡らし、さらに下部一条の沈線を巡らす。断面円形。鍛造。	17世紀中頃
21	埋甕Ｒ62	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端は横長の円柱状で大きく横に広がる。断面円形。鍛造。	18世紀後半～
22	溝Ｄ158	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端は球形で大きく横に広がる。断面円形。鍛造。	18世紀末～19世紀初頭

23	土壙G1447	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端は瓜形で上部に3方向のキザミ目を入れる。箸本体との境界に2条の沈線を巡らせ3段を作り出す。断面円形。鍛造。	17世紀中頃
24	土壙B674	火箸？	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具の一部。上下端を欠く。断面円形もしくは六角形。鍛造。	18世紀前半
25	土壙G1447	火箸	真鍮？	伸縮形の棒状品。先端部が上部のなかに仕込めるようになるものと思われる。断面円形。鍛造。	17世紀中頃
26	土壙P99	火箸	真鍮？ 鍍金	伸縮形の棒状品か。先端部のみ急激に細くなる。先端部が上部の中に仕込めるようになるものか、本来の形状がこうしたものか。断面円形。鍛造。	18世紀前半
27	土壙B776	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端を球状に作り出す。上端意匠と箸本体との境界に2状の沈線を巡らし3段を作り出す。断面は上半は六角形、下半は円形。鍛造。香道具などの火箸か。	18世紀前半
28	土壙G1447	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端は三角錐状に作り出し1条の沈線を介して下部を球状にし、さらに下に1条の沈線を巡らし2段を作り出す。断面円形。鍛造。	17世紀中頃
29	石組土壙P82	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端は球状に作り出し、さらに下に1条の沈線を巡らし2段を作り出す。断面円形。鍛造。	17世紀後半
30	土壙N18	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端を球状に作り出すものと思われるが、欠損している。断面円形。鍛造。	不明
31	土壙C641	火箸	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端意匠はなく、1孔を穿つ。断面方形。鍛造。	18世紀前半
32	土壙M12	火箸？	真鍮？	下部に向かって先細りする棒状金具。上端意匠はなく、平たく延ばして1孔を穿つ。断面円形。鍛造。	17世紀後半
33	土壙B670	火箸？	真鍮？	下部に向かって先細りする断面円形の棒状金具。上端を曲げ丸くし、下端を尖らせる。鍛造。	19世紀前半～中頃
34	土壙B776	火箸？	鉄	断面方形の棒状金具。上端を曲げ丸くし、下端を尖らせる。鍛造。	18世紀前半
35	土壙B674	蓋	銅？	水平な天井部から口縁部が垂下する。天井部中央に横長のツマミが付く。ツマミまで一体の作りである。鍛造。	18世紀前半
36	G区遺構検出中	蓋	銅？	水平な天井部からカエリが垂下する。天井部中央に縦長のツマミが付く。ツマミの作り方は不明。鍛造。	不明
37	土壙P78	蓋	銅？	水平な天井部からカエリが垂下する。天井部中央に縦長のツマミが付く。ツマミの作り方は不明。鍛造。	18世紀前半
38	土壙B716	蓋	銅？	板状水平の天井部に半球状のツマミを座金具と棒状金具とともに鋲止めする破片。鍛造	18世紀末～19世紀初頭
39	B区掘下げ	蓋	銅？	扁平な天井部からカエリが垂下する。天井部中央に縦長のツマミが付く。ツマミの作り方は不明。鍛造。内面に刻銘「賄」がある。	不明
40	土壙F1398	蓋	銅？	水平な天井部からカエリが垂下する。天井部中央に縦長のツマミが付く。ツマミの作り方は不明。鍛造。	19世紀前半～中頃
41	土壙G624	蓋	銅？	水平な天井部からカエリが垂下する。天井部中央に縦長のツマミが付く。ツマミの作り方は不明。鍛造。	不明
42	土壙G1721	蓋	銅？	水平な天井部からカエリが垂下する。天井部中央に縦長のツマミが付く。ツマミの作り方は不明。鍛造。	17世紀中頃
43	土壙G76	蓋	銅？	水平な天井部に高いツマミを鋲止めする。8葉菊文の座金具が付く。鍛造。	19世紀前半～中頃
44	土壙B674	蓋	銅？	水平な天井部から短い口縁部が垂下する。中央に高い円球状のツマミを鋲止めする。6葉菊文の座金具が付く。鍛造。	18世紀前半
45	H区掘下げ	蓋	銅？	水平な天井部からカエリが垂下する。天井部に球形のツマミを鋲止めする。ツマミに特殊な文様を彫刻？する口演端部は厚くする。天井部外面に3重に突線を巡らし、2つの文様帯を作る。内側の文様帯は渦巻き文を連続させ、外側の文様帯は放射状に蓮弁？を配する。鋳造。外国の製品か。	不明
46	池G1234	蓋	銅？	やや丸みを帯びた天井部から口縁部は水平に延びる。カエリは垂下する。天井部全面に、菊水文を表す。ツマミは截頭円錐形のものを鋲止めするが、ツマミ本体が欠損している可能性もある。鋳造。	17世紀後半

表110　金属製品観察表５（図版112・575）

No.	遺構	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙Ｈ271	不明	鉄	輪状の金具の破片。鍛造？。	18世紀中頃
2	土壙Ｅ188	鎌	鉄	切先を欠き、茎が残る。鍛造。	18世紀後半
3	土壙Ｅ45	鎌	鉄	茎を欠く。鍛造。	18世紀後半
4	土壙Ｂ674	鎌	鉄	茎の先端を欠くがほぼ完存する。木製把手先端部の輪状の金具が残る。鍛造。	18世紀前半
5	土壙Ｈ302	鎌	鉄	切先を欠き、茎が残る。鍛造。	18世紀中頃
6	Ｂ区掘下げ	十能	鉄	隅丸方形状の浅い皿状に中空の木製把手の差込み部が付く。 把手の断面形は台形で、内部に木質が残る。鋳造？	不明
7	土壙Ｇ1716・ 土壙Ｇ1795	十能	銅？	銅製十能の木製把手の差込み部。皿部を欠く。釘穴が１穴ある。鍛造。	17世紀後半
8	Ｆ区掘下げ	鑿	鉄	断面方形の太い棒状で、先端が尖る。頭部は平たい面をなす。鍛造。	不明
9	土壙Ｆ1265	鑿	鉄	断面長方形の太い棒状で、鑿状の刃部を有する。また上部には木製把手に連続する棗形の金具の一部と木質が残る。鍛造。	19世紀前半
10	土壙Ｈ40	鏝	鉄	瓜形の鉄板の一端に断面方形のＬ字形の金具を付け、木製把手の茎とする。鍛造。	19世紀前半～ 中頃
11	土壙Ｈ302	鑿	鉄	長方形の刃部から断面方形の茎が延びる。上部に木製把手に連続する棗形の金具と木質が残る。鍛造。	18世紀中頃
12	土壙Ｒ15	スキ鍬	鉄	三つ又のいわゆる「スキグワ」。全体が一連の金属で、茎から３つに分かれる。鍛造。	18世紀中頃
13	井戸Ｈ269	鋤先？ 鍬先？	鉄	いわゆるＵ字形の鋤先。鋳造か。	17世紀前半

表111　金属製品観察表６（図版113・576）

No.	遺構	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙Ｂ674	刀子？	鉄	刃物の切先部分と思われるが、不明。あるいは何かの茎か。全体に木質に覆われる。鍛造。	18世紀前半
2	土壙Ｂ687	刀子	鉄	切先を欠く。鍛造。	19世紀前半～ 中頃
3	土壙Ｈ271	刀子	鉄	切先を欠く。鍛造。	18世紀中頃
4	土壙Ｈ15	刀子	鉄	茎の先端を欠くが、ほぼ完存する。鍛造。	19世紀中頃
5	土壙Ｅ82	刀子	銅？	完存する。全体に薄い。硯箱の内部を構成する文房具の刀子か。鍛造。	17～18世紀
6	Ｇ区掘下げ	刀	鉄	柄側半分を欠く。鍛造。	不明
7	Ｅ区掘下げ	笄	銅？	板状で先細りの金具の先端に耳かき意匠が付く。左半に細い切込み状のスカシが入る。刀装具の笄。鍛造。	不明
8	土壙Ｊ90	笄	銅？	板状で先細りの金具。先端の耳かき意匠を欠く。左半に細い切込み状のスカシが入る。刀装具の笄。鍛造。	17世紀前半
9	土壙Ｆ1400	鐔	鉄	小柄穴のほかに不規則にスカシが入るが、何の意匠か不明。鍛造。	19世紀中頃
10	土壙Ｅ297	鐔	鉄	巴状のスカシと小柄穴とが残る。鍛造。	19世紀前半～ 中頃
11	Ａ区掘下げ	小柄	銅？＋鍍金＋鉄	鉄製の刀身と銅？製の柄部分。柄の中央に桐文があり、文様の部分のみ鍍金する。柄の先端には１穴を中心にして周囲に放射状に８個の穴がある。鍛造。	不明
12	Ａ区掘下げ	小柄	銅？＋鉄	銅？製の柄部分の内部に刀身が残る。柄の中央に２つの桐文がある。鍛造。	不明
13	土壙Ｆ1398	小柄	銅？＋鉄	銅？製の柄部分の内部に刀身が残る。柄の全体に栄螺、赤貝、鮑など海産の貝をレリーフ状に表現する。地模様は魚々子。鍛造。	19世紀前半～ 中頃
14	Ａ区掘下げ	小柄	銅？＋鉄	銅？製の柄部分の内部に刀身が残る。柄に円内に入った菊文と桐文とを交互に２個ずつ、計４個を配する。鍛造。	不明
15	土壙Ｆ1383	小柄	銅？＋鉄	銅？製の柄部分の内部に刀身が残る。柄に扇状の文様３個を配する。中央の扇状文のみ天地を逆にする。鍛造。	18世紀末
16	土壙Ｈ472	小柄	銅？＋鉄	銅？製の柄部分の内部に刀身が残る。柄に横方向の線文が上下に互い違いに配する。柄の先端部には１穴を中心にして周囲に放射状に８個の穴がある。鍛造。	不明
17	土壙Ｇ1494	小柄	銅？	銅？製の柄部分のみ残る。文様は無い。	17世紀前半
18	土壙Ｇ1093	小柄	銅？＋鉄	銅？製の柄部分の内部に刀身が残る。柄の先端が丸く、文様は無い。鍛造。	17世紀前半～ 後半
19	土壙Ｇ1180	小柄	銅？＋鉄	銅？製の柄部分の内部に刀身が残る。文様は無い。鍛造。	17世紀中頃
20	土壙Ｈ100	小柄	銀？＋鉄	銀？製の柄部分の内部に刀身が残る。文様は無い。鍛造。	18世紀後半
21	溝Ｐ119	小柄	銅？＋鉄	銅？製の柄部分の内部に刀身が残る。文様は無い。鍛造。	17世紀前半

22	池G1234	小柄	銅？＋鉄	銅？製の柄部分の内部に刀身が残る。魚々子風の地に不明の文様がある。鍛造。	17世紀後半
23	土壙H33	ハバキ	銅？	板状金具を断面三角形状に折り曲げ溶接したもの。鍛造。	18世紀末
24	E区清掃中	ハバキ	銅？	板状金具を断面三角形状に折り曲げ溶接したもの。右側に抉り込みがある。鍛造。	不明
25	T区掘下げ	ハバキ	銅？	板状金具を断面三角形状に折り曲げ溶接したもの。鍛造。	17世紀後半
26	土壙H221	ハバキ	銅？＋鍍金	板状金具を断面三角形状に折り曲げ溶接したもの。左側にもう1枚の板状金具を重ね、そこにタテの条線を施す。外面全体に鍍金する。鍛造。	18世紀後半～19世紀初頭
27	溝R234	切羽	銅？	楕円形の板状金具の中央を刀身断面状に抜いたもの。鍛造。	17世紀前半
28	土壙E188	切羽	銅？	楕円形の板状金具の中央を刀身断面状に抜いたもの。鍛造。	18世紀後半
29	G区掘下げ	切羽	銅？	楕円形の板状金具の中央を刀身断面状に抜いたもの。外縁に細かなキザミ目をめぐらす。鍛造。	不明
30	A区掘下げ	切羽	銅？	楕円形の板状金具の中央を刀身断面状に抜いたもの。片面のみ鍍金する。鍛造。	不明
31	土壙R87	柄縁	銅？	楕円形箱形の中央を刀身断面状に抜いたもの。側面に細かなタテの条線が入る。	18世紀後半
32	土壙F1673	目貫	銅？＋鍍金	騎馬武者をレリーフ状に表現する。表面に鍍金する。鋳造。	不明
33	G区清掃中	目貫	銅？	2尾の伊勢エビをレリーフ状に表現する。鋳造。	不明
34	穴蔵F1475	目貫	銅？＋鍍金	模様の全体は不明だが、中央に5葉の花弁を表現した花文がある。表面を鍍金する。	17世紀後半
35	穴蔵F1475	目貫	銅？＋鍍金	3個の燕をレリーフ状に表現する。表面に鍍金する。鋳造。	17世紀後半
36	土壙P99	目貫	銅？	菊水文を表す。菊花を2個表現する。鋳造。	18世紀前半
37	G区清掃中	目貫	銅？	菊花をレリーフ状に表現する。正面向きの菊花が3個、側面を見せる菊花が1個で、周囲に茎と葉を配す。鋳造。	不明
38	土壙G1211	目貫	銅？	円形の蓮華を表現した様な意匠を3個並べる。鋳造。	17世紀中頃
39	土壙C58	香匙	銀？	板状の細長い金具で、先端を欠く。上半に唐草風の文様を刻む。鍛造。香道具。	18世紀前半～
40	土壙B670	耳かき	銀？	断面正方形の棒状金具の一端を尖らせ、もう一端耳かき状とする。耳かき部分に近い部分は金属をネジって螺旋状とする。耳かきであろう。鍛造。	19世紀前半～中頃
41	土壙B703	香匙	銀？	断面長方形の棒状金具の先端を延ばして匙としたもの。把手部分の表面に唐草風の文様を、匙部分の表面に三角形の幾何学模様と藤の葉を表現したような細文がある。鍛造。香道具。	19世紀前半
42	土壙G749	不明金属製品	銅？＋鉄？	短い銅？製の把手に緩やかに曲げた鉄製？刃部が付く。小型のヤリガンナ風の道具か。鍛造。香道具の一種かとも考え、ここに掲載。	17世紀後半
43	埋甕E68	鴛	金	先端が尖った棒状。断面円形。把手部分は少しネジって螺旋状とする。鍛造。香道具。	18世紀末～19世紀初頭
44	G区掘下げ	鴛？	銅？＋鍍金	先端が尖った棒状。断面方形。先端部のみの破片。鍍金する。鍛造。香道具か？	不明
45	土壙G1052	不明飾金具	銅？	不明の花意匠をあしらった薄板の上下二方に薄棒状の金具を鋲止めする。型押し風の鍛造か。何の金具か不明。	18世紀後半
46	土壙P113	銀葉挟	銅？＋鍍金	先端をL字に曲げたピンセット状。断面は長方形。鍛造。香道具。	18世紀前半
47	土壙B674	灰押	銅？	断面方形の棒状の一端を篦状に平らにしたもの。香道具。	18世紀前半
48	土壙P55	灰押	銅？＋鍍金	断面長方形の棒状の一端を折り曲げS字状とし、もう一端に扇形の意匠を溶接する。扇形の表面には笹文様風の表現があり、裏面はタテの条線である。鍛造。	18世紀前半
49	土壙F1360	蓋	銅？	特殊な蓋のツマミ。5葉の花弁2枚を上下に球形に付けたツマミのなかを棒状の金具が貫通する。下部で蓋本体と鋲止めされるものである。スカシのある7葉の花弁風の座金具がつく。鍛造溶接。香炉の蓋の一部か。	17世紀末～18世紀初頭
50	土壙G639	香炉蓋	真鍮？	平面6角形でドーム状。下部に短い三足が付く。中央に円孔があり、周囲には放射状に笹風の表現があり、地部分はスカシとする。香炉の蓋と考える。鋳造。	17世紀後半
51･52	土壙F1265	香炉蓋	銅？	スカシからなる本体に球形のツマミを鋲止めする。スカシの意匠は垣に絡まる藤である。鍛造。51と52は同一個体。	19世紀前半
53	土壙H166	香炉蓋	銅？	平面は円形で、ドーム状に低く膨らむ。内側は六角形の亀甲文風のスカシを組み合わせる。鍛造。	18世紀前半
54	土壙P1	鴛？	銅？＋鍍金	長い棒状で一端を尖らす。断面形は全体に円形だが、先端と反対側は把手風に方形にする。鴛の大きなものと考えたいが不明である。鍛造。	19世紀前半～中頃

表112　金属製品観察表７（図版114・577）

No.	遺構	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙Ｄ11	八双金具	銅＋鍍金	折れ曲がり部で下半を欠く。魚々子地に唐草文を表す。上端に釘穴２穴を穿つ。鍛造。	18世紀後半
2	土壙Ｈ15	八双金具	銅＋鍍金	折れ曲がり部で右部分を欠く。魚々子地に唐草文を表す。６箇所の釘穴が残る。鍛造。	19世紀中頃
3	土壙Ｅ84	八双金具	銅＋鍍金	折れ曲がり部で右部分を欠く。魚々子地に唐草文を表す。７箇所に釘穴が残る。鍛造。	19世紀前半～中頃
4	土壙Ｇ731	八双金具	銅＋鍍金	下半を欠く。魚々子地に松文の一部が見えるが、全体は不明である。１箇所に釘穴が残る。鍛造。	18世紀前半
5	蔵Ｇ694	八双金具	銅＋鍍金	下端を欠く。魚々子地に連続する木葉文を表す。釘穴２穴が残る。鍛造。	17世紀後半
6	土壙Ｄ349	八双金具	銅＋鍍金	下端を欠く。魚々子地に唐草文と桐文を重ねる。釘穴２穴が残る。鍛造。	17世紀前半
7	土壙Ｃ641	八双金具	銅＋鍍金	右部分を欠く。魚々子地に唐草文を表す。釘穴５穴が残る。鍛造。	18世紀前半
8	Ａ区江戸時代整地層	八双金具	銅	小角材の先端を覆う箱形の飾り金具。両側面に唐草、木口面は桐文を表す。上面と下面は無文。下面の端部に釘を残し、内部には炭化した木材が残る。鍛造。	不明
9	土壙Ｇ1447	八双金具	銅＋鍍金	右半を欠く。無文である。釘穴1穴を残す。鍛造	17世紀中頃
10･11	土壙Ｇ1447	八双金具	銅＋鍍金	環状の部位に付けられた飾り金具。鏨による列点で唐草文を表す。３穴が残る。鍛造。	17世紀中頃
12	土壙Ｃ653	八双金具	銅＋鍍金	飾金具の断片。魚々子地に唐草文を表す。１穴が残る。鍛造。	17世紀前半
13	土壙Ｃ634	八双金具	銅＋鍍金	飾金具の断片。無文か。１穴が残る。鍛造。	18世紀前半
14	土壙Ｄ11	不明飾金具	銅＋鍍金	飾金具の断片。無文。２穴が残る。鍛造。	18世紀後半
15	Ｇ区掘下げ	不明飾金具	銅＋鍍金	飾金具の断片。26葉の菊花文を表す。鍛造。	不明
16	溝Ｃ491	釘隠	銅＋鍍金	５葉梅花文形の釘隠。鍛造。	18世紀後半
17	土壙Ｒ43	飾金具	銅	隅部に施された金具。３穴を残す。鍛造。	18世紀後半
18	土壙Ｆ1432	釘隠	銅＋鍍金	楕円形の小型の釘隠。中央に18葉の菊花文を表す。菊花文部と外縁に鍍金する。地は魚々子で、菊花の中房も魚々子とする。鍛造。	17世紀中頃
19	土壙Ｇ1447	不明飾金具	銅＋鍍金	神人像を表す金具破片。鋳造か。	17世紀中頃
20	土壙Ｐ20	不明飾金具	不明＋鍍金	輪状の金具。楕円形の中央を楕円形に抜く。表面のみ鍍金。鍛造。	19世紀前半～中頃
21	溝Ｃ491	紐金具？	銀	牡丹文形の板の中央を横楕円形に抜く。鐶座金具の一部か。鍛造。	18世紀後半
22	土壙Ｐ25	不明飾金具	銅＋鍍金	菊花文の円形金具。葉数は不明。鍛造。	18世紀後半
23	Ｇ区掘下げ	座金具	銅＋鍍金	23葉二重菊の菊花文を表す座金具。中央に長方形の１穴を穿つ。鍛造。	不明
24	Ｇ区掘下げ	座金具	銅＋鍍金	16葉の菊花文を表す座金具。中央に正方形の１穴を穿つ。鍛造。	不明
25	Ｄ区掘下げ	座金具	銅＋鍍金	16葉の菊花文を表す座金具。中央に長方形の１穴を穿つ。鍛造。	不明
26	土壙Ｇ348	座金具	銅＋鍍金	16葉の菊花文を表す座金具。菊花は中房を有する。中央に長方形の１穴を穿つ。鍛造。	19世紀中頃
27	Ｃ区遺構検出中	座金具	銅＋鍍金	16葉の菊花文を表す座金具。菊花は中房を有する。中央に長方形の１穴を穿つ。鍛造。	不明
28	Ｇ区遺構検出中	座金具	銅＋鍍金	16葉の菊花文を表す座金具。中央に長方形の１穴を穿つ。潰れて平板となる。鍛造。	不明
29	土壙Ｇ1447	座金具	銅＋鍍金	18葉以上の菊花文を表す座金具。中央に長方形の１穴を穿つ。鍛造。	17世紀中頃
30	Ｇ区清掃中	座金具	銅＋鍍金	21葉の菊花文を表す座金具。中央に長方形の１穴を穿つ。鍛造。	不明
31	土壙Ｅ211	座金具	銅＋鍍金	16葉の菊花文を表す座金具。菊花に中房を設ける。周縁状の外区を設け、平坦な飾り面から縁辺が垂下する。中央に長方形の１穴を穿つ。鍛造。	18世紀後半
32	土壙Ｇ1447	座金具	銅＋鍍金	22葉の菊花文を表す座金具。周縁状の外区を設ける。魚々子地に菊花を表す。中央に長方形の１穴を穿つ。鍛造。	17世紀中頃
33	道路Ｃ12	円形金具	銅＋鍍金	16葉の菊花文を表す円形の金具。魚々子地に菊花を表す。平坦な飾り面から縁辺が垂下する。中央に穴が無く、座金具ではない。鍛造。	18世紀前半～19世紀中頃
34	土壙Ｂ703	紐金具	銅	16葉の菊花文の鐶座金具に鐶台と鐶が付く。錆に覆われ鍍金の有無は不明。鍛造。	19世紀前半
35	集石土壙Ｅ３	紐金具	銅	22葉の菊花文を表す鐶座金具に鐶台と鐶座が付く。錆に覆われ鍍金の有無は不明。鍛造。	19世紀中頃
36	土壙Ｅ45	紐金具	銅	５葉の花文に鐶台と鐶座が付く。鍛造。	18世紀後半
37	土壙Ｅ76	紐金具	銅	５葉の花文に鐶台と鐶座が付く。鍛造。	18世紀後半

38	土壙F1384	紐金具	銅	鐶座と鐶である。鐶座は背部を欠く。鍛造。	18世紀末～19世紀中頃
39	土壙E235	紐金具	銅＋鍍金	鐶座と鐶である。鍛造。	17世紀後半
40	土壙B1000	紐金具	銅＋鍍金	鐶座と鐶である。鐶座は直方体で大きい。鍛造。	16世紀末～17世紀初頭
41	土壙E188	紐金具	銅	葉の意匠を表す飾り板に鐶座、鐶台、鐶の紐金具が付く。鍛造。	18世紀後半
42	穴蔵F1387	紐金具	銅	21葉の菊花文を表す鐶座金具に鐶台が付く。鐶台は幅広の板状を筒形に曲げたものである。鍛造。	17世紀末～18世紀初頭
43	土壙F1265	紐金具	銅	楕円形の鐶である。断面円形。鍛造	19世紀前半
44	土壙F1265	紐金具	銅	円形の鐶である。断面円形。鍛造	19世紀前半
45	井戸F1385	引手座金具	銅	長方形の板の両端に5葉の桜花の座金具を配し、鐶を装着した鐶台を差し込んで、長方形板裏面の棒状金具に固定する。引手の座金具となるものである。鍛造。	17世紀代
46	土壙D170	不明金具	銅	蒲鉾形の鐶の基部両端に鋲が1個ずつある。使用部位不明の金具。鍛造。	18世紀前半
47	土壙F1384	ツマミ金具	銅	菊菱の座金具に小さなツマミが付く。小さな箱状の容器蓋のツマミか。鍛造。	18世紀末～19世紀中頃
48	溝G5	引手金具	銅	断面楕円形の棒状金具をU字形に曲げ、両端を外側に曲げる。両端部を少し太くして、断面円形となる。蛭手形。小さな調度の引きだしの引手である。鍛造。	19世紀中頃
49	土壙R55	引手金具	銅	板状金具をU字形に曲げ、両端を外側に曲げる。両端部を少し太くして、断面円形となる。蛭手形。小さな調度の引きだしの引手である。鍛造。	18世紀中頃
50	土壙E45	引手金具	銅	断面円形の棒状金具をU字形に曲げ、そのまま両端を内側に曲げる。両端をたたいて少し太くしている。蕨手形。小さな調度の引きだしの引手である。鍛造。	18世紀後半
51	土壙H33	引手金具	銅	断面円形の棒状金具をU字形に曲げ、そのまま両端を内側に曲げる。両端をたたいて少し太くしている。蕨手形。両端に本体に固定するための環状鋲が付く。調度の引きだしの引手である。鍛造。	18世紀末
52	土壙N18	引手金具	銅	断面円形の棒状金具をU字形に曲げ、そのまま両端を内側に曲げる。両端をたたいて少し太くしている。蕨手形。両端に本体に固定するための環状鋲が付く。右側には座金具が残る。調度の引きだしの引手である。鍛造。	17世紀後半
53	土壙D238	引手金具	銅	断面円形の棒状金具をU字形に曲げ、そのまま両端を内側に曲げる。両端をたたいて少し太くしている。蕨手形。両端に本体に固定するための環状鋲と座金具が付く。座金具は16葉の菊花文である。調度の引きだしの引手である。鍛造。	18世紀前半
54	土壙B702	引戸引手金具	銅	ハート形をタテにした引戸の引手。家具の引戸に用いられたものであろう。鍛造。	17世紀前半
55	穴蔵F1475	引戸引手金具	銅	隅丸菱形の引戸の引手。家具の引戸に用いられたものであろう。鍛造。	17世紀後半
56	土壙E45	引戸引手金具	銅	ハート形をタテにした引戸引手の縁部分の金具。ハート形環状の片面に放射状の条線をめぐらす。家具の引戸に用いられたものであろう。鍛造。	18世紀後半
57	土壙R73	襖引手金具	銅	楕円形の四隅に緩やかな切込みを入れ花弁状にする。表面に放射状の条線をめぐらす環状金具をはめる。凹み部の側面には釘穴3穴が残る。鍛造。	18世紀中頃～
58	土壙G639	襖引手金具	銅＋鍍金	長楕円の円盤である。襖引手の底にあたる金具である。鍛造。	17世紀後半
59	土壙B721	襖引手金具	銅	板状で長楕円の環状金具である。襖引手の縁にあたる。鍛造。	19世紀前半
60	土壙B687	襖引手金具	銅	板状で長楕円の環状金具である。襖引手の縁にあたる。鍛造。	19世紀前半～中頃
61	土壙B716	襖引手金具	銅	板状で長楕円の環状金具である。襖引手の凹み部の側面を構成する。鍛造。	18世紀末～19世紀初頭
62	土壙B716	襖引手金具	銅	板状で長楕円の環状金具である。襖引手の凹み部の側面を構成する。鍛造。	18世紀末～19世紀初頭
63	土壙B721	襖引手金具	銅	長楕円の襖引手の縁部分と凹み部の側面が組み合ったものである。底部の板状金具を欠く。鍛造。	19世紀前半
64	土壙F1244	襖引手金具	銅＋鍍金	長楕円の襖引手である。底面に4穴の釘穴がある。鍛造。	17世紀後半
65	G区掘下げ	襖引手金具	銅＋鍍金	円形の襖引手の底部の板金具である。鍍金で平行線文様を表す。鍛造。	不明
66	土壙E45	不明金具	銅	長方形の箱状で、表面に長楕円の凹み部を設ける。用途不明である。鍛造。	18世紀後半
67	土壙G629	引戸引手金具	銅	楕円形の襖引手の底部の板金具である。七宝文風の中央に16葉の菊花文を表す。菊花の中房と地は魚々子。木瓜形の襖引手の底板部分であろう。鍛造。	17世紀後半
68	溝H31	襖引手金具	銅	円形の板状で3箇所に釘穴がある。襖引手金具の底板部分であろう。鍛造。	19世紀中頃
69	土壙G639	襖引手金具	銅	木瓜形の襖引手の縁部分の金具。8区の文様区に分け、菊唐草文を上下左右の4区に配し、宝相華文をその間の文様区に配する。地は魚々子。鍛造。	17世紀後半
70	土壙G639	襖引手金具	銅	木瓜形の襖引手の縁部分の裏面を構成する金具か。上下に2穴の釘穴が残る。「ち」とする刻銘あり。鍛造。	17世紀後半

表113　金属製品観察表８（図版115・578）

No.	遺構	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	穴蔵Ｆ1387	釘	真鍮？	丸い頭に断面円形の棒状が付く。先端が尖る。鍛造。	17世紀末～18世紀初頭
2	土壙Ｂ725	鋲	真鍮？	不定形の板状の頭に断面円形の棒状が付く。先端が尖る。鍛造。	17世紀中頃～後半
3	土壙Ｂ716	鋲	真鍮？	不定形の板状の頭に断面円形の棒状が付く。先端が尖る。鍛造。	18世紀末～19世紀初頭
4	土壙Ｆ1265	鋲	真鍮？	不定形の板状の頭に断面円形の棒状が付く。先端が尖る。鍛造。	19世紀前半
5	土壙Ｂ716	鋲	真鍮？	不定形の板状の頭に断面円形の棒状が付く。先端が尖る。鍛造。	18世紀末～19世紀初頭
6	土壙Ｒ43	鋲	真鍮？	不定形の板状の頭に断面円形の棒状が付く。先端が尖る。鍛造。	18世紀後半
7	土壙Ｂ716	鋲	真鍮？	不定形の板状の頭に断面円形の棒状が付く。先端が尖る。鍛造。	18世紀末～19世紀初頭
8	土壙Ｆ1265	鋲	真鍮？	不定形の板状の頭に断面円形の棒状が付く。先端が尖る。鍛造。	19世紀前半
9	土壙Ｒ43	鋲	真鍮？	不定形の板状の頭に断面円形の棒状が付く。先端が尖る。鍛造。	18世紀後半
10	土壙Ｆ1384	釘	真鍮？	長方形の頭部に断面ほぼ正方形の棒状が付く。先端が尖る。鍛造。	19世紀中頃
11	土壙Ｄ529	鋲	真鍮？＋鍍金	ドーム型の頭部から断面円形の太い棒状が延びる先端は尖らない。鍛造。	不明
12	土壙Ｐ42	釘	真鍮？	直方体の頭部から断面円形の棒状が延びる。先端が尖る。鍛造。	18世紀前半
13	土壙Ｆ1244	環状鋲	銅？＋鍍金	一連の板状金具を用いて、頭部が環状で、先端が尖る。表面のみ鍍金する。鍛造。	17世紀後半
14	土壙Ｇ1447	環状鋲	銅？＋鍍金	一連の板状金具を用いて、頭部が環状で、先端が尖る。表面のみ鍍金する。鍛造。	17世紀中頃
15	土壙Ｒ43	環状鋲	銅？	一連の板状金具を用いて、頭部が環状で、先端が尖る。鍛造。	18世紀後半
16	土壙Ｒ43	環状鋲	銅？	一連の板状金具を用いて、頭部が環状で、先端が尖る。鍛造。	18世紀後半
17	土壙Ｄ11	環状鋲	銅？＋鍍金	一連の板状金具を用いて、頭部が環状で、先端が尖る。表面のみ鍍金する。鍛造。	18世紀後半
18	土壙Ｆ1244	環状鋲	銅？＋鍍金	一連の板状金具を用いて、頭部が環状で、先端が尖る。表面のみ鍍金する。鍛造。	17世紀後半
19	土壙Ｇ1164	飾鋲	銅？＋鍍金	円柱状箱形の頭部の内側中央から、断面四角形の棒状が延びる。頭部表面に鍍金する。鍛造。	17世紀中頃
20	土壙Ｄ179	飾鋲	銅？＋鍍金	円柱状箱形の頭部の内側中央から、断面四角形の棒状が延びる。頭部上面には唐花文を表す。頭部表面に鍍金する。鍛造。	19世紀前半
21	井戸Ａ354	飾鋲	銅？	円柱状箱形の頭部の内側中央から、断面四角形の棒状が延びる。頭部上面には16～20弁程度の菊花文を表すが錆で見えにくい。鍛造。	19世紀前半～中頃
22	土壙Ｇ1447	飾鋲	銅？＋鍍金	円柱状箱形の頭部の内側中央から、断面四角形の棒状が延びる。頭部上面は錆で見えにくい。頭部表面に鍍金する。鍛造。	17世紀中頃
23	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約１寸の釘。鍛造。	18世紀後半
24	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約１寸半の釘。鍛造。	18世紀後半
25	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約２寸の釘。鍛造。	18世紀後半
26	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約２寸の釘。鍛造。	18世紀後半
27	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。１寸半から２寸の釘。鍛造。	18世紀後半
28	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。１寸半から２寸の釘。鍛造。	18世紀後半
29	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約２寸の釘。鍛造。	18世紀後半
30	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約２寸の釘。鍛造。	18世紀後半
31	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約２寸の釘。鍛造。	18世紀後半
32	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端を欠く。２寸の釘。鍛造。	18世紀後半
33	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約３寸の釘。鍛造。	18世紀後半
34	土壙Ｒ43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約３寸の釘。鍛造。	18世紀後半

35	土壙R43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。2寸以上の釘。鍛造。	18世紀後半
36	土壙R43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約3寸の釘。鍛造。	18世紀後半
37	土壙R43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約3寸の釘。鍛造。	18世紀後半
38	土壙R43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端が尖る。約3寸の釘。鍛造。	18世紀後半
39	土壙R43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端を欠く。約3寸の釘。鍛造。	18世紀後半
40	土壙R43	釘	鉄	叩いて延ばした不定形の頭部から断面方形の棒状が延びる。先端を欠く。約4寸の釘。鍛造。	18世紀後半
41	土壙H273	座金具	銅？＋鍍金	25葉の菊花文を表す座金具。中央に円孔を穿つ。表面に鍍金。鍛造。	18世紀前半～後半
42	土壙G741	座金具	銅？＋鍍金	4葉の唐花風の輪郭の座金具。中央に長方形の孔を穿つ。表面に鍍金。鍛造。	18世紀前半
43	池G1234	釘隠	銅？＋鍍金	6葉形の釘隠。ハート形のスカシを6方に穿つ。中央に小さな1穴がある。鍛造。	17世紀後半
44･45	土壙E235	不明金具	真鍮？	断面円形の棒状金具を長楕円形に環状に曲げたもの。用途・使部位不明。鍛造。	17世紀後半
46	土壙C587	不明金具	真鍮？	断面長方形の棒状をクランク状に曲げ、一端に円穴1個を穿つ。もう一端は欠損。建築用の金具か。鍛造。	18世紀前半
47･48	土壙E76	不明金具	鉄	棒状の金具に、一端を環状にしたL字形の金具を付け、さらに同様の金具を連続して付ける。各部が自在に動くようになっている。2つの破片があるが、同一個体もしくは部位であろう。鍛造。	18世紀後半
49	池G1234	飾金具	真鍮？	断面コの字形に両端を折り曲げた板状金具で、上部は緩やかな弧を描く。上面の中央に1円孔を中心に花弁形に6個の円孔を放射状に配し七曜文とする。その両側に丁子文をスカシで表現する。両側面に3個ずつ、計6個の釘穴がある。鍛造。	17世紀後半
50	土壙G1164	不明金具	銅？＋鍍金	何らかの縁状の長方形の金具。薄板状で断面は長方形。片面のみ鍍金する。鍛造。	17世紀中頃
51	土壙E211	小型額	真鍮？	額のミニチュア。波状の縁に片側3個ずつ、計6個の鋲が残る。額内の中央上端には2個の鋲が残裏面で別金具の残欠とつながっている。額中央の下端には鋲の穴のみ残る。額内に何らかの絵が線彫されるが、読み取れない。鍛造。	18世紀後半
52	溝D158	ミニチュア刀	銀？	刀もしくは長刀のミニチュアの刀身部分。人形などに付属するものか。鍛造。	18世紀末～19世紀初頭
53	土壙B1015	紅皿	銅？＋鍍金	12葉の菊花状を呈する輪花の椀形。外面のみ鍍金する。釘隠の可能性も有るが、類品の存在により化粧道具の紅皿と見る。	16世紀
54	井戸F1225	渡し金	銅？	長方形の薄い板状の縁辺を袋状に丸く折り返し、形状は八双形とする。鍛造。	18世紀後半～
55	土壙B703	軸端飾金具	銅？	円筒状の金具。板状を巻いて鋲止めする。一端は3つの花弁状に切り、内側に葵文を刻む。反対の端は連続する細長い蓮弁状の意匠があり、本体部分は魚々子地に唐草文である。軸端もしくは棒状の調度に付ける金具と考える。	19世紀前半
56	土壙C379	不明金具	銀？	砲弾状で中空の金具。基部に通しで貫通する2穴がある。鍛造。	18世紀後半
57	溝C11	不明金具	銅？＋鍍金	長方形の板状で一端を斜めにカットし、もう一端は丸くおさめる。全面に鍍金する。片刃石斧状。鍛造。	19世紀中頃
58	F区掘下げ	不明金具	銅？	中空で薄板状の金具。端部は広く反対側に向かって直線的に狭くなる。逆側は両側から斜めに切込み、中央部にハート形の切込みを入れる。板状の道具の端部に装着する金具である。鍛造。	不明
59	土壙B687	不明金具	銅？	薄板を箱形に加工したもの。基部は直線的だが、上端は緩やかな弧を描く。中央に隅丸長方形の穴を穿つ。鍛造。	19世紀前半～中頃
60	K区遺構検出中	不明金具	銅？＋鍍金	細長い板状をS字形に曲げたもの。表面のみ鍍金する。鍛造。	不明
61	土壙D194	不明金具	銀？	細長い板状をS字形に曲げて潰したような形。クリップ的なものか。鍛造。	18世紀前半
62	土壙R43	不明金具	銅？	板状で弱い台形。下端は緩やかな弧を描く。上端中央に1孔を穿つ。札状のものか。鍛造。	18世紀後半
63	土壙D538	目貫？	金	獅子形の目貫状。調度や装身具の装飾金具の可能性もあり。鍛造。	17世紀後半～18世紀初頭
64	R区掘下げ	トカゲ形金属製品	銅？	振り向くトカゲの造形。鎮子か。鋳造。	不明
65	土壙C1083	勾玉	銀＋鍍金	いわゆる勾玉。上部に1孔を開ける。反面を鍍金して金銀半々に見せる。片面に小さなガラスを1個のみ埋め込む。鋳造。	不明

3　骨製品

調査面積に比して骨製品の出土量は極めて少ない。図版に掲載したものが主な出土品のすべてである。

表114　骨製品観察表（図版116・578）

No.	遺構	種類	材質	形態・手法の特徴	出土遺構年代
66	土壙E270	双六の駒	骨	加工された円柱状の中央に円形の穴を穿ったものの小片。両木口面に俵状に組み合わされた円文を刻む。	18世紀中頃
67	土壙E311	櫛払い	骨	断面四角形の細い棒状に連続して7個以上の円孔を穿つ小片。	17世紀後半～18世紀前半
68	土壙H125	筒形骨製品	骨	高い円柱状の中央に両側から円孔を穿つ。両端部内側に段を有する。何らかの部材である。用途不明。	18世紀末
69	土壙E84	蓋	骨	浅く小さい蓋状。口縁部は垂下する。天井部外面の中央天井部、天井部外縁部に圏線が3条同心円状にめぐる。茶入の蓋であろう。	19世紀前半～中頃
70	土壙G749	蓋？	骨	不明小片。湾曲する破片の外面に円形の突線があり、裏面に浅い円形の小さな凹みがある。	17世紀後半
71	漆喰敷F1268	耳かき？髪飾り？	骨	断面扁平な棒状で、段を介して先端部を細くする。髪飾りか耳かきのようなものの一部と推定する。	19世紀前半
72	土壙F1360	耳かき	骨	一端を徐々に細くし耳かきとし、もう一端は抉りを入れて段を作りだす。耳かき部側は断面円形であるが、反対側は断面方形である。	17世紀末～18世紀前半
73	土壙E165	棹秤	骨	断面円形の棒状の破片で、表面に細かな列点で目盛を表現する。	18世紀後半～19世紀前半
74	穴蔵F1475	櫛払い	骨	厚手の細長い板状で、丸く納める一端が残る。表面には3列千鳥状に無数の円孔が穿たれる。	17世紀後半
75	土壙F1244	櫛払い	骨	細長い板状で、端部に向かって一旦細くなり次いで幅広となり端部に至る。もう一端には穿孔部が残る。穿孔部都の境界の表面には「×」記号を刻む。櫛払いの把手部分。	17世紀後半
76	E区採集	箆状製品	骨	厚手の細長い板状で、一端を幅広に段歩は丸く納め、もう一端は細くし先端を欠く。細い一端は、断面形がしだいに円形となる。表面は光沢を良く残す。髪飾りもしくは髪結い用のものであろう。	不明
77	E区清掃中	賽子	骨	立方体の各面に円形の凹みで1から6の数字を表す。いわゆる賽子である。数字の配列と各面の相互関係は現行のものと同じである。	不明
78	土壙G1447	賽子形の根付	骨	やや大振の賽子の中央に円孔を貫通させたもの。賽子形の根付と考える。通常の賽子を転用したものか。もともと根付として製作されたものか不明。	17世紀中頃

4　鋳型

鋳型は、発掘調査区で出土していない。ここに報告する鋳型は、立会調査で採集したものである（図版116・579）。出土地点は、発掘調査区を北に大きく離れた今出川通近くで、立会49と立会208の2箇所である。両地点は、別の日時に立会調査したものであるが、極めて近接している。採取した鋳型は同じ遺構埋土に包含されていたものと考える。掲載した鋳型のうち図版579の23・32・48・51・52は立会49で採集したものである。他はすべて立会208で採集したものである。

鋳型はすべて土製である。また、緑色の鉱滓が付着するものがあるので、銅製品もしくは真鍮製品の鋳型であると思われる。5種類に分類できる。1類（1～35）は円盤状の外形で、製品面である上面は環状に凹んでいる。中央部は高く残り頂部から基底部に向けて貫通する穴がある。23と2に真砂が残るが、文様の痕跡はない。2類（36～44）は浅い植木鉢状の外形で、碗形の製品の内型であろう。真砂は残存しない。底面に貫通する穴がある。また、鍔状部分の三方に半円形の切り込みがある。外型との合わせに関わるものであろう。3類（45～48）は口縁部が直線的に立ち上がる皿形で、外型である。底面に貫通する穴があり、口縁端部の一箇所

に灰皿にみられるような浅い切り込みがある。真砂は残らない。4類（51～53）は浅い皿形で、外型である。底面に貫通する穴があり、穴の内側の周囲は少し突起する。52に真砂が残る。真砂の表面に横方向の細かな平行条線が観察でき、挽型によって鋳型が作られていることがわかる。文様はない。5類（49・50）は4類と同形態で小型のものである。真砂は残らない。これらの鋳型によって製作された製品は不明である。

5　石製品

石製品は多量に出土しているが、形状がわかるものは少ない。砥石は最も普遍的に出土した石製品で、次いで、硯、碁石、臼類が比較的多く出土している。硯については、形状がよく残るものや特殊な装飾があるもの、文字が刻まれたものなどを中心に報告した。碁石と臼類は形状がよく残るものを報告した。

表115　石製品観察表1（図版117・580）

No.	遺構	種類	石材・色調	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙G73	嵯峨硯	不明・灰	板状の石に公家装束の男性を線刻する。縁辺は面取りする。顔部分に顔料が残る。天神形の嵯峨硯の破片である。	18世紀前半
2	土壙E187	硯	不明・灰	釣鐘形の板石の基底部を斜めに加工し、硯面を作り出す。縁部を面取りする。自然石の形状を生かした小型硯。	18世紀前半
3	埋甕R62	硯	不明・オリーブ灰	二連の小型硯。長方形の石材に長楕円形の硯面を2つ並べて配する。硯面に墨痕と朱痕、縁に朱痕が残る。	18世紀後半～
4	土壙D195	硯	不明・オリーブ灰	三連の小型硯。長方形の石材に長方形の硯面を3つ並べて配する。	19世紀前半
5	G区遺構検出中	硯	不明・灰白	小型の硯。長方形の板材に硯面を作る。	不明
6	土壙B687	硯	不明・オリーブ灰	小型の硯。長方形の板材に硯面を作る。	19世紀前半～中頃
7	土壙D143	硯	不明・オリーブ灰	小型の硯。長方形の板材に硯面を作る。	19世紀前半
8	土壙F1170	硯	不明・オリーブ黄	小型の硯。長方形の板材に硯面を作る。縁を面取りする。硯面に墨痕と朱痕が残る。	19世紀中頃
9	土壙G1370	硯	不明・灰	隅丸長方形の硯。縁を面取りする。	17世紀後半
10	土壙G1716	硯	不明・灰	長方形の板材に、海部を半円状にして、全体を蒲鉾形にした硯面を作る。	17世紀後半
11	溝G1195	硯	不明・灰	薄手で小判形の硯。上下端と縁の全部を欠く。	17世紀前半～中頃
12	土壙G1447	硯	不明・黒	隅丸長方形の硯。縁を面取りする。	17世紀中頃
13	堀G1940	硯	不明・黒と淡黄	長方形の硯。縁全部を欠く。黒色と淡黄色が層状になった石材を用いる。	17世紀初頭
14	土壙G276	硯	不明・暗灰	隅丸長方形の硯。縁の大半を欠く。	19世紀前半
15	土壙F1455	硯	不明・黒	四隅を斜めにカットした長方形の硯。海側の縁を欠く。	17世紀後半
16	土壙D477	硯	不明・黒	隅丸長方形の硯。縁に金箔を貼る。	17世紀中頃
17	穴蔵G749	硯	不明・灰赤	長方形の硯。丘の下端に水溜め風の凹みを作る。海部の右半を欠く。硯背に横方向のキズが無数に入る。	17世紀後半
18	土壙G1447	硯	不明・灰	長方形の硯。丘に摺込による深い凹部があり、硯背まで貫通する。	17世紀中頃
19	土壙G1447	硯	不明・暗オリーブ灰	長方形の硯。丘に摺込による深い凹部がある。	17世紀中頃
20	土壙B776	硯	不明・灰白	長方形の硯。硯面は隅丸長方形。丘に摺込による浅い凹部がある。	18世紀前半
21	石組土壙J57	硯	不明・灰オリーブ	長方形の硯の海側を打ち欠き、方形に加工したもの。縁の大半を欠く。裏面に浅い凹みがあり、「高嶋青石」の釘書銘がある。	18世紀前半
22	土壙G1370	硯	不明・オリーブ灰と灰	長方形の硯。オリーブ灰色に灰色部分が帯状・粒状に入る石材である。海部の右半を欠く。裏面の中央上部に「高嶋石」、左下隅に「中光」、右下隅に「松井」の釘書銘がある。	17世紀後半
23	土壙G1084	硯	不明・にぶい褐～灰褐	隅丸長方形の硯の残欠。二次的被熱で変色か。裏面に「□嶋石　　弥兵衛」と2行に釘書銘がある。	18世紀前半

表116　石製品観察表2（図版118・119・581）

No.	遺構	種類	石材・色調	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙A236	硯	不明・黒	長方形の硯。縁の大半を欠損する。丘に摺込による浅い凹みがある。丘部の硯背に隅丸長方形の浅い凹みを設ける。	17世紀前半～後半
2	土壙G43	硯	不明・暗灰	長方形の硯。海側の縁辺を欠損する。丘に摺込による浅い凹みがある。丘部の硯背に隅丸長方形の浅い凹みを設け、そのなかに「寛政十一未己正月吉祥日　本高嶋硯　藤田網次郎」の釘書銘がある。	18世紀末～19世紀
3	土壙G1447	硯	不明・オリーブ灰と灰	長方形の硯で4隅をカットする。海部を欠損する。オリーブ灰色の中に帯状・粒状に灰色部分がある石材を用いる。4、5および図版580－22と同じ特徴的な石材。	17世紀中頃
4	土壙B716	硯	不明・オリーブ灰と灰	長方形の硯。海部の縁を欠損する。丘部の硯背に隅丸長方形の浅い凹みを設ける。オリーブ灰色の中に帯状・粒状に灰色部分がある石材を用いる。3、5および図版580－22と同じ特徴的な石材。	18世紀末～19世紀初頭
5	溝C491	硯	不明・オリーブ灰と灰	長方形の硯。丘部の硯背に隅丸長方形の浅い凹みを設け、そのなかに「野原富之輔　野　正太□　野原正太良」の釘書銘がある。オリーブ灰色の中に帯状・粒状に灰色部分がある石材を用いる。3、4および図版580－22と同じ特徴的な石材。	18世紀後半
6	G区清掃中	硯	不明・にぶい褐色	長方形の硯の海部左隅の破片。縁に金箔で桐文を表す。二次的被熱で変形し焼けただれる。	不明
7	土壙D10	硯	不明・灰赤	長方形の硯の海側左隅の破片。海部と縁の境界は突帯状に高くなる。縁に九曜文や八卦文風のデザインを浮き彫りにする。	18世紀前半
8	土壙H166	硯	不明・灰赤	円面硯。円形で縁側の周囲を低くして海とする。	18世紀中頃
9	G区整地層	硯	不明・にぶい橙	形状不明で硯面は小判形。硯面と縁との境界は低い突線状。縁には波文を地として、樹木を表すと思われる浮き彫りが有るが表面を欠損する。硯背は鑿跡をそのまま残す。硯箱内に固定して使用されたものであろう。	不明
10	穴蔵E355	硯	不明・にぶい橙～灰	長方形の硯で左上隅と右下隅を欠く。硯面は円を二つ重ねた形で三日月状の部分を海とする。海と丘との境界は円形の輪郭が突線状に残る。硯面と縁の境界も突線状である。縁には緻密な彫刻が施される。右上隅には日輪もしくは月輪を配し、蕨手状の雲霞文の線彫を地として2尾の飛ぶ鶴と雲と霞のセット二つを浮き彫りにする。その下に三つの山を浮き彫りにする。硯面の右は青海波の線彫を地として笹を大きく表現した竹を浮き彫りにする。硯面の左下は青海波の線彫を地として松と山を浮き彫りにしている。朝鮮半島産の渭源石を用いる。	17世紀代
11	穴蔵G749	硯	不明・にぶい橙～灰	長方形の硯。中央やや右寄りに硯面を配する。縁の左下に松を浮き彫りにする。左上にはタテ方向の線刻があるが不明。全体に縁の表面が破損し、文様の残存状況が悪い。	17世紀後半
12	穴蔵G749	硯	不明・灰黄褐色	形状不明。硯面は卵形で縁より高く、突帯状を介して縁の装飾につながる。縁には葉脈を表すような線彫と彫刻が有るが、何の意匠か不明。硯背を欠く。	17世紀後半
13	土壙F1486	温石	頁岩か粘板岩・にぶい黄橙～灰	長方形の石板。上部の中央に1穴を穿つ。	17世紀後半
14	土壙E76	温石	頁岩か粘板岩・明緑灰	長方形の石板。上部の中央に1穴を穿つ。	18世紀後半

表117　石製品観察表3（図版119・582）

No.	遺構	種類	石材・色調	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙F1605	文鎮？	不明・暗青灰	断面長方形の棒状石材。文鎮か。	17世紀初頭
2	溝F1392	温石	不明・灰	長方形の破片。表裏面に細かな擦痕がある。温石を砥石に転用か。	18世紀前半～
3	堀G1940	砥石	泥岩・灰白	短冊形で一端を欠く。	17世紀初頭
4	T区掘下げ	砥石	泥岩・浅黄橙	短冊形で一端を欠く。	17世紀後半
5	土壙E189	砥石	泥岩・灰白	短冊形で一端を欠く。厚手。	18世紀代
6	土壙E76	砥石	砂岩・浅黄橙～にぶい橙	直方体状で各面が平滑である。玉砥石状の溝が2条ある。	18世紀後半
7	土壙G1447	砥石	泥岩・浅黄橙	短冊形で一端を欠く。	17世紀中頃
8	土壙G1447	砥石	泥岩・浅黄橙	短冊形で一端を欠く。	17世紀中頃
9	O区掘下げ	砥石	砂質ホルンフェルス	やや不定形な短冊形で両端を欠く。	不明
10	溝C10	印	不明・灰	円柱状で一端を欠く。印材であろう。	19世紀中頃
11	C区掘下げ	印	不明・灰白	直方体の印材で、側面に「五星」と刻む。別の側面には3本のタテの条線を彫る。	不明
12	C区掘下げ	印	不明・灰白	直方体の印材で、側面に「暫勞永逸」と刻む。別の側面には4本のタテの条線を彫る。	不明

13	土壙Ｅ165	印か文鎮	不明・灰白	断面長方形の棒状で側面に罫線でかこった内側に岩と植物の絵画を彫る。印材もしくは文鎮であろう。	18世紀後半～19世紀前半
14	土壙Ｇ1084	文鎮	不明･灰褐色	断面正方形の棒状破片。一面に「□聖之棹」と彫る。	18世紀前半
15	土壙Ｄ23	印	不明･灰白～灰	直方体の印材で、広い小口面に「□□之印」と彫る。	18世紀前半
16	土壙Ｂ674	印	不明･灰白	直方体の印材の破片。広い小口面に不明文字を彫る。	18世紀前半
17	Ｄ区掘下げ	印	不明･暗灰	直方体の印材。広い小口面文字を彫るが、印面が破損し不明。	不明
18	井戸Ｈ27	文鎮	不明・灰	断面長方形の棒状破片。広いほうの面に「石」と刻み、側面に「丸山□月石山秋□」の釘書銘、裏面には「藤」の釘書銘がある。	19世紀前半～中頃
19	土壙Ｇ348	文鎮	泥岩・浅黄橙	断面長方形の棒状破片。広いほうの面に「文鎮」、側面に「□□□四月朔日」、裏面に「常順」とある。また、小口面に不明篆刻文字を刻む。	19世紀中頃
20	土壙Ｍ９	文鎮	泥岩・淡黄	断面おそらく長方形の棒状の破片。裏面を欠く。塔と瓦屋根と霞を釘描きで描く。	19世紀前半～中頃
21	土壙Ｍ９	文鎮	泥岩・淡黄	おそらく20と同一個体の破片。帆掛船と雲と波を釘描きで描く。	19世紀前半～中頃
23	土壙Ｅ211	火打石	黒曜石･黒	石器状の剥離面をもつ石。各稜線は細かな打撃の反復によって潰れている。	18世紀後半
22	Ｃ区掘下げ	文鎮	不明･オリーブ灰と灰	断面長方形の棒状破片。表面に「満」と彫る。図版581の３～５と同じ石材を用いる。オリーブ灰色の中に帯状・粒状に灰色部分がある。	18世紀後半
24	土壙Ｅ211	火打石	黒曜石･黒	石器状の剥離面をもつ石。各稜線は細かな打撃の反復によって潰れている。自然面を残す。	18世紀後半
25	土壙Ｆ1145	火打石	チャート・緑灰～オリーブ黒	石器状の剥離面をもつ石。各稜線は細かな打撃の反復によって潰れている。徳島県太田井産の火打石。	19世紀前半～中頃
26	土壙Ｅ48	火打石	チャート・緑灰～灰	石器状の剥離面をもつ石。各稜線は細かな打撃の反復によって潰れている。徳島県太田井産の火打石。	19世紀前半～中頃
27	土壙Ｅ188	火打石	チャート・緑灰	石器状の剥離面をもつ石。各稜線は細かな打撃の反復によって潰れている。徳島県太田井産の火打石。	18世紀後半
28	溝Ｃ918	盆石	不明・灰	堆積岩が風化して固い部分が層状に残った不定形の石。	不明
29	溝Ｈ31	小箱	チャート・赤橙～灰白	浅い長方形の箱。	19世紀中頃
30	Ｃ区掘下げ	不明石製品	チャート・にぶい赤	円板状の破片。縁辺部から立ち上がりが延びるようで、箱状になる可能性がある。外面には花文を中心に置き、周囲に渦巻き文を配する釘描きがある。内面には不明植物を釘描きで描く。	不明
31	Ｅ区清掃中	軽石	軽石・灰白	リンゴ形の片面に亀甲文を刻む。上部に円孔がある。	不明
32	溝Ｃ10	碁石	溶結凝灰岩・緑	円形扁平の滑らかな石。	19世紀中頃
33	土壙Ｇ821	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	18世紀前半
34	小穴Ｇ921	碁石	溶結凝灰岩・緑	円形扁平の滑らかな石。	不明
35	Ｃ区掘下げ	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	不明
36	土壙Ｇ2105	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	17世紀前半～後半
37	土壙Ｇ1156	碁石	不明・黒	円形扁平の滑らかな石。	17世紀中頃
38	土壙Ｂ670	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	19世紀前半～中頃
39	Ｒ区清掃中	碁石	不明・明褐灰	円形扁平の滑らかな石。下半を欠く。	不明
40	溝Ｃ10	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	19世紀中頃
41	Ｃ区検出中	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	不明
42	土壙Ｇ1052	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	18世紀後半
43	土壙Ｃ677	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	18世紀前半～後半
44	Ｇ区掘下げ	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	不明
45	溝Ｄ１	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	19世紀中頃

46	塀D303	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	17世紀後半～18世紀初頭
47	C区検出中	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	不明
48	溝D9	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	18世紀末～19世紀初頭
49	C区清掃中	碁石	泥質ホルンフェルス・にぶい褐～灰	円形扁平の滑らかな石。二次的被熱で赤変する。	不明
50	土壙R152	碁石	不明・にぶい黄橙	円形扁平の滑らかな石。一部欠損。	18世紀前半～中頃
51	D区掘下げ	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	不明
52	土壙D216	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	不明
53	溝C1401	碁石	泥質ホルンフェルス・灰	円形扁平の滑らかな石。	不明

表118　石製品観察表4（図版120・583）

No.	遺構	種類	石材・色調	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙G639	茶臼	閃緑岩～斑糲岩・灰	茶臼上臼の破片である。中央に円孔が貫通し、側面に45度回転させた正方形の横打込穴がある。横打込穴の周囲には、正方形3段の意匠を彫刻する。上面は皿状に凹め、下面には鋸歯文状の目を刻む。	17世紀後半
2	土壙E76	茶臼	閃緑岩～斑糲岩・灰	茶臼上臼の破片である。中央に円孔が貫通し、側面に45度回転させた正方形の横打込穴がある。横打込穴の周囲には、正方形3段の意匠を彫刻する。上面は皿状に凹め、下面には鋸歯文状の目を刻む。	18世紀後半
3	土壙F1455	碾臼	花崗岩・灰白	碾臼の上臼である。茶臼上臼と同形態だが、石材が異なり、一回り大きく、目が粗い。製粉用。	17世紀後半
4	井戸R1034	碾臼	花崗岩・灰白	碾臼の上臼である。茶臼上臼と同形態だが、石材が異なり、一回り大きく、目が粗い。製粉用。	18世紀末～19世紀初頭
5	土壙B721	茶臼	閃緑岩～斑糲岩・灰	茶臼の下臼の破片である。中央に心棒孔が貫通する。心棒孔は下半で広がる。上面に鋸歯文状の目を刻み、下面は皿状に凹め高台風にする。高台風の内側は石材の加工痕を粗く残す。周囲に皿状の受けがめぐるが、欠損する。	19世紀前半
6	土壙E76	茶臼	閃緑岩～斑糲岩・灰	茶臼の下臼の破片である。中央に方形の心棒孔が貫通する。心棒孔は下半で広がる。上面に鋸歯文状の目を刻み、下面は皿状に凹め高台風にする。高台風の内側は石材の加工痕を粗く残す。周囲に皿状の受けがめぐる。	18世紀後半
7	土壙B721	茶臼	閃緑岩～斑糲岩・灰	茶臼の下臼の破片である。中央に方形の心棒孔が貫通する。心棒孔は下半で広がる。上面に鋸歯文状の目を刻み、下面は皿状に凹め高台風にする。高台風の内側は石材の加工痕を粗く残す。周囲に皿状の受けがめぐるが、欠損する。	19世紀前半
8	土壙S6	茶臼	閃緑岩～斑糲岩・灰	茶臼の下臼の破片である。中央に方形の心棒孔が貫通する。心棒孔は下半で広がる。上面に鋸歯文状の目を刻み、下面は皿状に凹め高台風にする。高台風の内側は石材の加工痕を粗く残す。周囲に皿状の受けがめぐるが、欠損する。	18世紀前半
9	穴蔵G749	茶臼	砂質ホルンフェルス・にぶい橙～灰	茶臼の下臼の破片で周囲にめぐる皿部のみ残る。下面を皿状に凹め高台風にする。高台風の内側は石材の加工痕を粗く残す。高台部から皿部端部との間の外面も粗い作りである。二次的被熱で赤く変色する	17世紀後半
10	穴蔵G749	茶臼	閃緑岩～斑糲岩・褐灰～灰	茶臼の下臼の破片で周囲にめぐる皿部のみ残る。下面を皿状に凹め高台風にする。二次的被熱で赤く変色する。	17世紀後半
11	井戸R1034	茶臼	砂質ホルンフェルス・灰	茶臼の下臼の破片である。中央に円形の心棒孔が貫通する。心棒孔は下半で広がる。上面に鋸歯文状の目を刻み、下面は皿状に凹め高台風にする。高台風の内側は石材の加工痕を粗く残す。高台部から皿部端部との間の外面も粗い作りである。周囲に皿状の受けがめぐる。	18世紀末～19世紀初頭

表119　石製品観察表5（図版120・121・584）

No.	遺構	種類	石材・色調	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	土壙G1386	石仏	花崗岩・灰白	船形の輪郭内に立像を彫刻する。下半を欠く。	17世紀前半～後半
2	土壙C1163	石仏	花崗岩・灰白	船形の輪郭内に座像を彫刻する。基底部を欠く。	17世紀前半
3	池F1685	石仏	花崗岩・灰白	船形の輪郭内に座像を彫刻する。基底部を欠く。	17世紀中頃
4	土壙P177	石仏	花崗岩・灰白	長方形の輪郭内に座像を彫刻する。基底部を欠く。	不明
5	土壙E316	石仏	花崗岩・灰白	船形の輪郭内に座像2体を彫刻する。上端が庇状に突出する。基底部を欠く。	不明

6	土壙Ｄ276	五輪塔	輝石安山岩・灰	一石五輪塔の風輪、火輪、水輪部分の破片。空輪と地輪を欠く。各部の一面に梵字を刻むようだが判読できない。	18世紀前半
7	Ｆ区掘下げ	墓標	花崗岩・灰白	墓石の破片。「南無妙」の３字が見える。	不明
8	土壙Ｇ45	墓標	花崗岩・灰白	墓石の破片。上端が庇状に突出する。「南無」の２字が見える。	19世紀前半～中頃
9	土壙Ｇ870	台座	砂岩・灰	石仏や墓標などの台座。四隅と各面中央に複弁の蓮弁８葉を表す。上部に置くものがズレないように上面は粗く削って浅い凹みを作る。	19世紀前半
10	井戸Ｆ961	七輪	礫岩・灰	上半を欠く。上に向かって少し広がる円筒状で、基底部に３足を削りだす。注ぎ口状の送風口を有する。	19世紀中頃

表120　石製品観察表６（図版121・585）

No.	遺構	種類	石材・色調	形態・手法の特徴	出土遺構年代
1	集石Ｆ1060	灯籠	花崗岩・灰白	灯籠の笠部である。頂部は六角形の平坦面を作り中央に蓮華座に乗る宝珠を置くための半円球形の凹みを彫る。屋根の傾斜は伏椀形で六角形の平坦面から放射状に降棟部分が延びる。棟の先端は蕨手状に上方に巻き込む。底面は火袋と合せるための六角形の浅い凹みを設ける。	18世紀前半～
2	土壙Ｈ77	灯籠	花崗岩・灰白	灯籠の地盤である。縁辺を欠くため平面的な形状は不明である。頂部は円形の平坦面で、伏鉢形の斜面には蓮弁が彫刻される。	18世紀後半

６　ガラス製品

ガラス製品は、全部で700点あまり出土している。ガラス製品は器壁が薄いものが多く、土中で細かく破損しているものがほとんどであった。そのため、器形が推定できる資料を報告対象とした。

ガラス製品は比重を計測することによって、おおまかに生産地や年代を知ることができる[60)]。北野信彦氏は、出土したほぼ全資料について、比重計測と、ガラスや着色材料などの定性分析を非破壊で行なった（付章１）。また、ヨーロッパ製の可能性があるものなどについての詳細な化学組成については、奈良文化財研究所の肥塚隆保氏が報告している（付章２）。分析した資料には、当研究所が試料番号を付したが、この番号は付章１の表130に「No.」として記されているものである。付章２で使用されている試料番号もこれに準じる。

表121　ガラス製品観察表１（図版122・586）

No.	遺構	種類	色	形態・手法の特徴	試料番号	出土遺構年代
1	土壙Ｇ320	髪飾り	青透明	簪の蕨手状の端。断面円形の棒状２本を溶着する。	361	19世紀前半～中頃
2	土壙Ｆ1398	髪飾り	無色透明	簪の蕨手状の端。断面円形の棒状２本を溶着して作るが、同化して断面楕円状となる。風化して白く濁る。	649	18世紀前半～後半
3	土壙Ｂ670	髪飾り	青透明	簪の蕨手状の端。断面円形の棒状。	484	19世紀中頃
4	土壙Ｅ293	髪飾り	無色透明	簪の丸板部分と耳かき部分。丸板部分には「結柏」文を型押しする。耳かき部分の軸は断面円形の棒状を４本四角に合せる。丸板部とは溶着する。耳かきの先端を欠損する。	613	19世紀前半～中頃
5	土壙Ｆ1400	髪飾り	無色透明、一部青透明	簪の無色透明の丸板部分。「鶴」文を型押しする。耳かき部に至る棒状部分は青色透明とする。	656	19世紀前半
6	土壙Ｆ1398	不明棒状製品	無色透明	葵をかたどる板状の破片。何かに装着するものか。	648	18世紀前半～後半
7	土壙Ｄ143	不明棒状製品	青＋黒	青色のアザラシの鰭状の意匠の基部に黒色の細帯を巻き付け溶着する。	147	18世紀前半
8	土壙Ｆ1400	不明棒状製品	白＋紫透明	白色の断面円形の棒状に紫透明のガラスを不定形に溶着しワンポイント風とする。端部に向かって太くなる。中国製か。	653	19世紀前半
9	土壙Ｂ687	不明棒状製品	青＋紫透明	断面円形の棒状の一部に紫透明のガラスを巻き付け溶着する。	489	19世紀中頃

10	土壙F1145	髪飾り	無色透明	簪の耳かき部分。棒状部は断面楕円形。	641	19世紀前半～中頃
11	土壙B670	髪飾り	無色透明	簪の耳かき部分。棒状部は断面隅丸長方形。	483	19世紀中頃
12	土壙C595	髪飾り	黄透明	簪の耳かき部分。棒状部は断面長方形。耳かき直下に桃の意匠を溶着する。付章2肥塚氏報告に化学分析の結果を示す。	121	19世紀中頃
13	G区清掃中	髪飾り	青透明	断面円形の棒状の先端をシメジの笠状とする。	422	18世紀前半
14	土壙M9	不明棒状製品	黄透明	断面円形の棒状2本を、ほぼ直角に溶着する。	694	18世紀前半～19世紀中頃
15	H区撹乱	髪飾り	無色透明	断面長楕円形の棒状にT字形に断面円形の棒状を溶着する。簪。	677	不明
16	H区撹乱	髪飾り	無色透明	断面長楕円形の棒状にT字形に断面円形の棒状を溶着したものと思われるが、横棒を失する。簪。	659	不明
17	石組土壙E354	不明棒状製品	白＋紫	白と紫のガラスを未撹拌のまま縞胎状にしたもので、断面円形の棒状4本を四角形に溶着したもの。	614	18世紀末
18	H区清掃中	不明棒状製品	紫透明	断面円形の棒状3本を横並びに溶着したもの。	658	不明
19	石組土壙F1386	不明棒状製品	無色透明	断面円形の棒状2本を溶着して、断面長蛇円形としたもの。上端は端部。	618	19世紀中頃
20	土壙F1195	不明棒状製品	無色透明	断面円形の棒状2本を溶着して、断面長蛇円形としたもの。上端は端部。	643	18世紀前半～19世紀中頃
21	土壙B687	髪飾り	黄透明	断面長方形の棒状。笄もしくは簪の端部。	578	19世紀中頃
22	土壙B687	不明棒状製品	不明	断面ほぼ方形の棒状。銀化して色調不明。	575	19世紀中頃
23	土壙G354	髪飾り	無色透明	断面長方形の棒状の端を少し細くして、断面長方形の短い棒状をT字に溶着する。端部斜め下に小鳥の意匠を溶着する。簪。	378	18世紀末～
24	土壙E45	不明板状製品	無色透明	細長い板状製品。	597	18世紀後半
25	土壙G354	髪飾り	黄透明	断面長楕円形の棒状の端を少し細くして、断面隅丸方形の短い棒状をT字に溶着する。端部斜め下に小鳥の意匠を溶着する。簪。	395	18世紀後半
26	溝D9	髪飾り	無色透明	断面長方形の棒状で下端を尖らす。上端は断面長方形の棒状をくねらせて竹節状に2度溶着し端部はつぶして平坦な笠状とする。簪。	223	18世紀末
27	土壙B681	不明棒状製品	無色透明	断面長楕円形の棒状の一部をねじって螺旋状とする。	488	19世紀前半～中頃
28	土壙M13	不明棒状製品	緑透明	断面正方形の棒状をねじって螺旋状とする。	698	18世紀後半～
29	F区撹乱	不明棒状製品	無色透明	断面円形の棒状で先端が尖る。風化して白く濁る。	639	不明
30	溝D158中層	不明棒状製品	無色透明	断面円形の棒状をねじって螺旋状とする。先端は太くして「く」の字に曲げる。	138	18世紀
31	M区検出中	不明棒状製品	無色透明	断面円形の棒状をねじって螺旋状とする。	693	不明
32	溝H220	不明棒状製品	無色透明	断面正方形の棒状をねじって螺旋状とする。先端を尖らす。	687	19世紀中頃
33	土壙B721	不明棒状製品	青透明	断面円形の棒状をねじって螺旋状とする。	492	18世紀末～19世紀初頭
34	H区撹乱	不明棒状製品	無色透明	断面正方形の棒状をねじって螺旋状とする。先端を尖らす。	661	不明
35	土壙B687	不明棒状製品	青	断面円形の棒状。	582	19世紀中頃
36	井戸F1280	不明棒状製品	無色透明	断面円形の棒状で、先端が尖る。	644	19世紀前半～中頃
37	土壙B687	髪飾り	黄透明	断面長楕円形の棒状で、先端が尖る。簪。	580	19世紀中頃
38	土壙D143B	髪飾り	無色透明	断面正方形の棒状で、先端が尖る。簪。	142	19世紀前半
39	土壙E67	髪飾り	青透明	断面長蛇円形の棒状で、先端が尖る。簪。	609	19世紀前半～中頃
40	土壙F1145	髪飾り	無色透明	断面長方形の棒状で、先端が尖る。簪。	642	19世紀前半～中頃
41	土壙F1400	髪飾り	無色透明	断面長方形の棒状で、先端が尖る。風化して白く濁る。簪。	652	19世紀前半～中頃

42	溝E50	髪飾り	無色透明	断面長方形の棒状で、先端が尖る。簪。	595	19世紀前半～中頃
43	H区撹乱	髪飾り	無色透明	断面長方形の棒状で、先端が尖る。簪。	664	不明
44	土壙H1	髪飾り	無色透明	断面長方形の棒状で、先端が尖る。簪。	662	19世紀中頃
45	土壙F1400	髪飾り	無色透明	断面長方形の棒状で、先端が尖る。簪。	651	19世紀前半～中頃
46	土壙B687	髪飾り	緑透明	断面長方形の棒状で、先端が尖る。簪。	574	19世紀中頃
47	土壙H117	髪飾り	無色透明	断面長方形の棒状で、先端が尖る。簪。	681	19世紀前半～中頃
48	土壙F1398	髪飾り	白	断面長方形の棒状で、先端が尖る。簪。	647	18世紀前半～後半
49	H区撹乱	髪飾り	無色透明	断面長方形の棒状で、先端が尖る。簪。	660	不明
50	F区撹乱	髪飾り	無色透明	断面長楕円形の棒状で、先端が尖る。風化して白く濁る。簪。	640	不明
51	石組土壙F1386	不明筒状製品	緑透明	断面長楕円形の筒状の表面に赤漆で菊唐草風の文様を描く。宙吹き。52と同一個体。	506漆絵	19世紀中頃
52	石組土壙F1386	不明筒状製品	緑透明	断面長楕円形の筒状の表面に赤漆で菊唐草風の文様を描く。宙吹き。51と同一個体。	507	19世紀中頃
53	土壙B687	不明筒状製品	無色透明	断面円形の筒状で、先端が尖る。宙吹き。風化する。	572	19世紀中頃
54	土壙G354	不明筒状製品	黄透明	段面長楕円形の筒状。宙吹き。銀化して濁る。	372	18世紀後半
55	土壙E188	不明筒状製品	緑透明	断面円形の筒状で先端が尖る。宙吹き。風化して濁る。	611	18世紀後半～
56	石組土壙F1386	不明筒状製品	無色透明	断面長楕円形の筒状。宙吹き。	623	19世紀中頃
57	石組土壙F1386	ポッペン	緑透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く感触がある。宙吹き。	616	19世紀中頃
58	石組土壙E22	ポッペン	緑透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。	591	19世紀前半～中頃
59	石組土壙F1386	ポッペン	無色透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。	626	19世紀中頃
60	石組土壙E22	ポッペン	緑透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。	590	19世紀前半～中頃
61	井戸H25	ポッペン	紫透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。風化する。	672	19世紀中頃
62	石組土壙F1386	ポッペン	緑透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。	615	19世紀中頃
63	土壙E45	ポッペン	紫透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。袋状部分の薄片も残るが接合できず、図化できない。宙吹き。表面風化する。	600	18世紀後半
64	土壙E45	ポッペン	無色透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。	604	18世紀後半
65	石組土壙F1386	ポッペン	紫透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。	630	19世紀中頃
66	土壙E45	ポッペン	黄透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。	605	18世紀後半
67	土壙E45	ポッペン	緑透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。	599	18世紀後半
68	土壙E204	ポッペン	無色透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。表面風化する。	612	18世紀後半～
69	穴蔵H47	ポッペン	緑透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。袋状部分の薄片も残るが接合できず、図化できない。宙吹き。	682	18世紀中頃～後半
70	石組土壙F1386	ポッペン	無色透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。宙吹き。表面風化する。	621	19世紀中頃
71	石組土壙F1386	ポッペン	無色透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。袋状部分の薄片が多量に残るが接合できず、図化できない。宙吹き。	625	19世紀中頃
72	石組土壙F1386	ポッペン	無色透明	断面円形の筒状。ポッペンの吹き口であろう。端部は小さな袋状に納め、先端に小さな穴がある。宙吹き。表面風化する。	622	19世紀中頃
73	土壙H222	ポッペン	無色透明	断面円形の筒状。下端の欠損部分から外側に開く。上端は吹き口近くである。宙吹き。表面風化する。	668	19世紀中頃

表122　ガラス製品観察表2（図版123・124・587）

No.	遺構	種類	色	形態・手法の特徴	試料番号	出土遺構年代
1	石組土壙 F1386	小杯	無色透明	小型の椀形。口縁端部が外反する。型吹き。	627	19世紀中頃
2	土壙G212	椀	無色透明	高い高台を持つ椀形。宙吹き。高台は溶着。32の底部と良く似る。あるいは瓶の底部か。	347	18世紀末～
3	井戸F1235	小杯	無色透明	菊花の小杯。口縁端部が外反する。型吹き。	638	18世紀後半
4	穴蔵H97	小杯	無色透明	菊花の小杯。口縁端部が外反する。風化する。型吹き。	683	18世紀中頃～後半
5	土壙B729	小杯	無色透明	菊花の小杯。口縁端部が外反する。銀化する。型吹き。	583	18世紀末～
6	土壙A236	小杯	無色透明	菊花の小杯。口縁端部が外反する。型吹き。	562	19世紀前半～中頃
7	土壙A140	脚付小杯	無色透明	杯部の破片。中央部の横方向の沈線より上は多角形状に面を作る。下半は斜格子を組み合わせる。切子。	702	19世紀前半～中頃
8	土壙G60	小型角鉢	無色透明	平面形が八角形の小型の角鉢。器壁は厚い。高台の周囲を花弁状にする。型吹き。	145	19世紀中頃
9	井戸A354	ボウル	無色透明	椀形で口縁部と高台部を残した体部外面全体に砂を吹きつけ、器壁をざらつかせる。体部外面に金彩があるが、図柄を判読できない。型吹き。ヨーロッパ製。付章2肥塚氏報告に化学分析の結果を掲載。	461	19世紀中頃
10	溝A 7	ボウル	緑透明	いわゆるボウル形。底部内側をわずかに上げる。型吹き。ヨーロッパ製。	482	19世紀中頃
11	土壙A140	鉢	無色透明	菊花状の浅い鉢。体部は内湾気味に立ち上がり。口縁端部はわずかに外反する。型吹き。ヨーロッパ製。付章2肥塚氏報告に化学分析の結果を報告。	564	19世紀前半～中頃
12	溝A14	皿	無色透明	平面楕円形の深めの皿。口縁端部は外に張り出し、外縁に小さな波文を連続させる。体部には雷文風の幾何学模様を施す。型吹き。ヨーロッパ製。	550	19世紀中頃
13	溝C491	脚付小杯	無色透明	方形の裾から脚部が立ち上がり、杯部下は8面にカットする。体部外面は斜格子のカットを施す。切子。風化して白くなる。雛道具の一部を構成するミニチュアである。	547	18世紀末～
14	溝C491	脚付小杯	無色透明	脚部を欠く。杯部の体部に亀甲形の凹みを連続して配す。型吹き。風化して白くなる。雛道具の一部を構成するミニチュアである。	546	18世紀末～
15	C区掘下げ	不明	緑透明	脚付小杯状だが不明。口縁部、脚部とも欠く。砲弾状の体部。宙吹き。	495	不明
16	D区掘下げ	蓋	青透明	袋状の体部から口縁部が垂下する。口縁端部を欠く。ツマミは背の高い宝珠形を溶着する。宙吹き。瓶の蓋。	192	不明
17	F区清掃中	蓋	無色透明	伏鉢状の体部から横に大きな張り出しを折り曲げて作る。先端はカエリを垂下させる。天井部、口縁端部を欠く。宙吹き。瓶の蓋。	657	不明
18	土壙H15	蓋	無色透明	伏鉢状の体部から横に大きな張り出しを折り曲げて作る。先端はカエリを垂下させる。ツマミは球形のものを溶着する。宙吹き。口縁端部を欠く。瓶の蓋。	666	19世紀中頃
19	土壙G678付近	栓	無色透明	下に向かってわずかに窄まる円柱状の頂部に球形のツマミを付ける。本体は中空で下面で塞ぎ溶着する。型吹きか。側面を擦り表面を粗くし、瓶本体との滑り止めとする。瓶の栓。	419	不明
20	土壙C595	蓋	無色透明	富士山形のツマミの頂部1個と裾周囲に8個の同心円花弁形の意匠を配する。基底部中央が突出する。型作り。デキャンターの蓋。ヨーロッパ産。	69	19世紀中頃
21	H区清掃中	小瓶	緑透明	ラッパ状に開く小瓶の口頸部。宙吹き。	690	不明
22	土壙D446	小瓶	緑透明	ラッパ状に開く小瓶の口頸部。頸部が長いもの。縞胎状に銀化する。宙吹き。	706	18世紀前半
23	溝H500付近	小瓶	無色透明	ラッパ状に開く小瓶の口頸部。宙吹き。	691	不明
24	土壙D227	小瓶	無色透明	直方体状の体部にラッパ状の口頸部が付く。宙吹き。風化して白くなる。付章2肥塚氏報告に化学分析の結果を掲載。	703	18世紀後半
25	石組土壙 F1386	小瓶	緑透明	直方体状で肩部を緩やかにした体部にラッパ状の口頸部が付く。宙吹き。	710	19世紀中頃
26	石組土壙 F1386	小瓶	青透明	直方体状で肩部を緩やかにした体部にラッパ状の口頸部が付く。宙吹き。	711	19世紀中頃
27	石組土壙 F1386	小瓶	無色透明	直方体状で肩部を緩やかにした体部にラッパ状の口頸部が付く。体部を欠く。宙吹き。	631	19世紀中頃
28	石組土壙 F1386	小瓶	緑透明	首が長く、肩が張らない徳利状の小瓶。体部を欠く。宙吹き。	628	19世紀中頃

29	土壙Ｇ52	小瓶	無色透明	円柱状の体部に、円柱状の頸部が付く。口縁部が大きく外に広がる。栓との密着のため、頸部内側を擦り、器面を粗くする。宙吹き。	312	18世紀末～
30	溝Ａ７	小瓶	無色透明	円柱状の頸部で、口縁部が大きく外に広がる。栓との密着のため、頸部内側を擦り、器面を粗くする。宙吹き。	553	19世紀中頃
31	Ｃ区遺構検出中	瓶	青透明	円柱状の口頸部。口縁部を帯状に厚くする。宙吹き。底部破片もあるが図化していない。	1	不明
32	土壙Ｇ212	瓶	無色透明	ラッパ状に開く頸部から蓋受け部を横方向に作り出す。口縁端部を欠く。椀状の底部には高い高台を溶着する。宙吹き。体部破片を欠く。口頸部の製作技法は、17、18の蓋に良く似る。	348	18世紀末～
33	土壙Ｄ130	不明	青	底部の破片。底部外面を円形に少し凹める。器形は不明。型吹きか。	272	18世紀後半
34	溝Ａ７	ボトル	青透明	円柱状の体部。底部外面は高台状に内側を凹める。この凹凸は底部内面ではドーム状の盛り上がりとなって現れる。型吹き。ワインボトル。ヨーロッパ産。	560	19世紀中頃
35	土壙Ｈ10	ボトル	緑透明	円柱状の体部。内側に向かって大きく凹む。型吹き。ワインボトル。宙吹き。ヨーロッパ産。	701	19世紀中頃
36	井戸Ｈ27	デキャンター	無色透明＋赤透明	徳利状の体部に長六角形にカットを施した細い頸部を経て外反する口縁部に至る。底部は平底。口頸部は無色透明だが肩部より無色の上に赤透明のガラスを重ねる。体部に木葉状の文様を刻むが、不明である。風化する。宙吹き、切子。ヨーロッパ産。付章２肥塚氏報告に化学分析の結果を掲載。	523・524	19世紀中頃
37	石組土壙Ｆ1386	壷	緑透明	広く短い口頸部が付く短頸壷。口縁端部はわずかに外反する。宙吹き。	620	19世紀中頃
38	Ｂ区重機掘削中	不明容器	無色透明	円筒状の器。底部は高台状に作り出し、体部は横方向の条線上に斜格子状に列点を配する。型作り。	587	不明
39	Ｂ区撹乱	印肉入	無色透明	浅い円筒状で、口縁部近くに蓋受けの段を有する。蓋受け部分の周囲に砂の吹き付けを行い、蓋合せのための荒れた器面とする。型作り。中国製か。	588	不明
40	井戸Ａ354	ランプ火屋	無色透明	辣韮形の筒状製品で下端を外反させる。複数を組み合わせたシャンデリアの一部か。宙吹き。	458	19世紀中頃
41	土壙Ｇ1156付近	玉	緑透明	半分を欠く。側面から押さえつけて、５葉の花弁状とする。中央に穴が貫通する。	405	不明
42	Ａ区断割り	玉	緑	タテ長の棗玉。中央に穴が貫通。	151	不明
43	Ｇ区遺構検出中	玉	白	横長の玉。中央に穴が貫通。	707	不明
44	Ｇ区清掃中	玉	青	球形の玉。中央に穴が貫通。風化する。	708	不明
45	土壙Ｂ827	眼鏡レンズ	無色透明	円形の板状。半分を欠く。	589	18世紀前半～後半
46	土壙Ｂ687	眼鏡レンズ	無色透明	円形の板状。半分を欠く。	584	19世紀中頃
47	土壙Ｆ1400	不明棒状製品	白＋青	断面円形の棒状。白と青を縞胎状に混ぜる。	654	19世紀前半
48	石組土壙Ｆ1386	不明袋状製品	紫透明	ソロバン玉状の袋物。口部分を欠損する。宙吹き。	629	19世紀中頃
49	石組土壙Ｈ25	不明袋状製品	緑	ソロバン玉状の袋物。口部分を欠損する。宙吹き。	671	19世紀中頃
50	石組土壙Ｆ1386	不明	無色透明	方形もしくは長方形の板状の上面に丸みを帯びた凹みを設ける。表面全体を擦って、粗い器面とする。硯か。	624	19世紀中頃
51	穴蔵Ｃ548Ｂ付近	不明	緑透明	器の上げ底状の底部か。ポッペンか。宙吹き。	139	不明

第４節　賢瓶とその内容物

１　賢瓶埋納土壙検出状況

竈Ｅ140の検出の際、賢瓶が出土した。当初竈内に含まれる遺物であろうとの認識から、竈の掘形確認のため断面観察を行なった結果、賢瓶は竈Ｅ140の下層の土壙であることが判明した。土壙規模は、上部が竈の掘形で壊されていたが、検出できた範囲は南北約55cm、東西約45cm、深さ約15cmであった。土壙の中央には長軸約30cm、厚さ約５cmの花崗岩の切石が据えられており、その上に賢瓶が置かれた状態であった（図57）。石材はやや東に傾斜していたが、本来は水平位置であったものが、土圧で下がったものと推定される。遺物は賢瓶以外には無く、他の埋納を思わす遺物も見つからなかった。この賢瓶埋納土壙は、18世紀代の遺構で、宅地５・６の中央やや南西寄りにあたる。この宅地は柳原邸である。柳原邸に関連する地鎮と考えられる賢瓶埋納土壙の検出を受けて、改めて出土位置の検討を行なった（図58）。密教修法上の輪宝、橛など他の鎮壇具や関連する遺構の検出に努めたが、屋敷地の四隅・埋納遺構周辺も含めて、屋敷地内では発見できなかった。

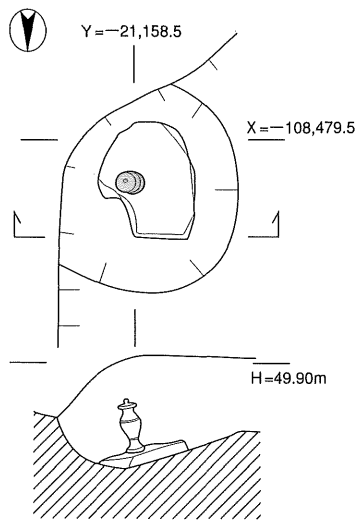


図57　賢瓶出土状況実測図

賢瓶埋納の時期は、竈Ｅ140が天明大火の整地層下の遺構であり、それに先行する埋納土壙も、周辺の他の遺構との関係や埋没状況などから、江戸時代中期に属する遺構と推定した。ただ、遺構周辺には宝永大火の焼土層が検出されず、賢瓶埋納土壙に関連する建物遺構も検出されていない状況であり、江戸時代前期に遡る可能性を否定できない。ここではこのような地鎮が執り行なわれる契機としては、大規模な屋敷配置替えを伴なった宝永大火後の屋敷再建の時が最も有力と考える。

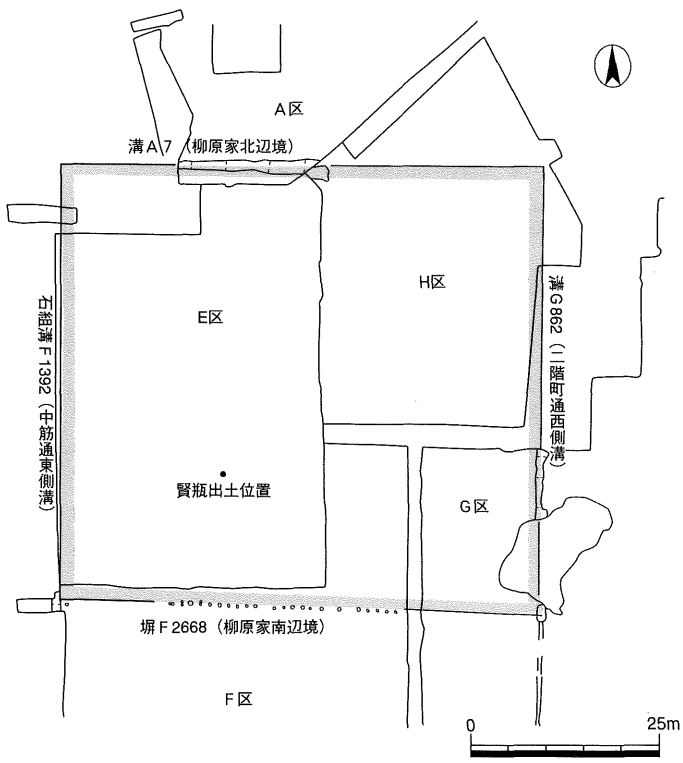


図58　柳原邸屋敷範囲と賢瓶出土位置

賢瓶の蓋は高さ2.8cm・口径5.7cm・重量70g、本体は高さ12.4cm・口径4.9cm・重量550gである。蓋を合わせた全体の高さは15.3cmであった。蓋は本体の口縁部に被せるようになっている。本体の口縁部直下には2箇所の突起があり、蓋口縁部内面には2箇所の縦方向の溝がある。本体の突起と蓋の溝を合せて、左右に捻って留める構造である。また、胴体表面には捻紐の痕跡が微かに残っていた（図59・図版125の1）。

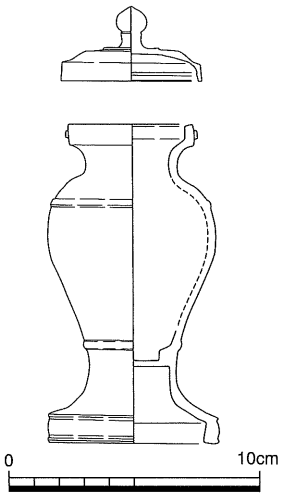


図59　賢瓶実測図

2　賢瓶の本体及び内容物の理化学的調査

賢瓶の本体と内容物の処理と分析は1999年10月から行なった。本体の開封の前に、奈良国立文化財研究所（現独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所、以下「奈文研」）埋蔵文化財センターにおいて、X線透過撮影装置を用い内容物の有無の確認を行なった。その結果、賢瓶上部の中心近くに穿孔された玉1点が鮮明に認められた（図版125の2）。その他は、判然としないものが写しだされていたが、内容物の材質が有機物か、もしくは質量が小さいため確認できなかった。

開封前の調査終了後、当研究所で内容物を取り出す作業を行なった。賢瓶の中には、多量の水が入っており、それとともに有機質の内容物がおびただしく存在していた。これを慎重に保管容器に移し、分別を行なった（図版125の3）。その結果、内容物は透明なガラス状のもの、穿孔玉、小玉、和紙の包み、金属箔粉、種子などが確認された（図版125の4）。

透明なガラス状のものについては奈文研埋蔵文化財センターの肥塚隆保氏により、実体顕微鏡観察を行なった。そして、その特徴から曇りが無い良質な水晶（3点）であると認められた。3点の重量は、0.627g・0.489g・0.383gあり、この重量から比重を導き出したところ、2.657・2.658・2.641という値が得られた。これは水晶の比重2.65に近似していた。

穿孔玉は、奈文研埋蔵文化財センターの松井章氏により実体顕微鏡観察の結果、象牙に現れる年輪（象牙年輪）が観察されたため象牙（1点）と同定した。

小玉については、三重大学水産学部名誉教授の和田浩爾氏により肉眼及び実体顕微鏡観察で材質同定を行なった。その結果真珠であることがわかった。真珠は、主に構造などの違いから真珠層真珠・稜柱層真珠・輝層真珠及び複合真珠と呼ばれる4種類に分類されるが、出土した全固体（38点）はすべてアコヤガイの天然真珠で、前記の4種類が揃っていることが判明した。

上記以外のもので、和紙の包み（3点）があり繊維標本を参考に同定の結果、楮の繊維であることが判明した。この和紙の包みの中には、後述する金属の箔粉が含まれていた。また和紙の包みは賢瓶内の水の中にあったため、繊維質が柔軟な状態になっていた。このため、常態下での形状の維持・保管ができるように真空凍結乾燥法で保存処理を行なった。

また、多数ある金属の箔粉のうち、数個をくらしき作陽大学の馬淵久夫氏・北野信彦氏に材質分析を依頼した結果、金及び銀の成分が検出された（図60）。他に、種子が数種検出されたが、

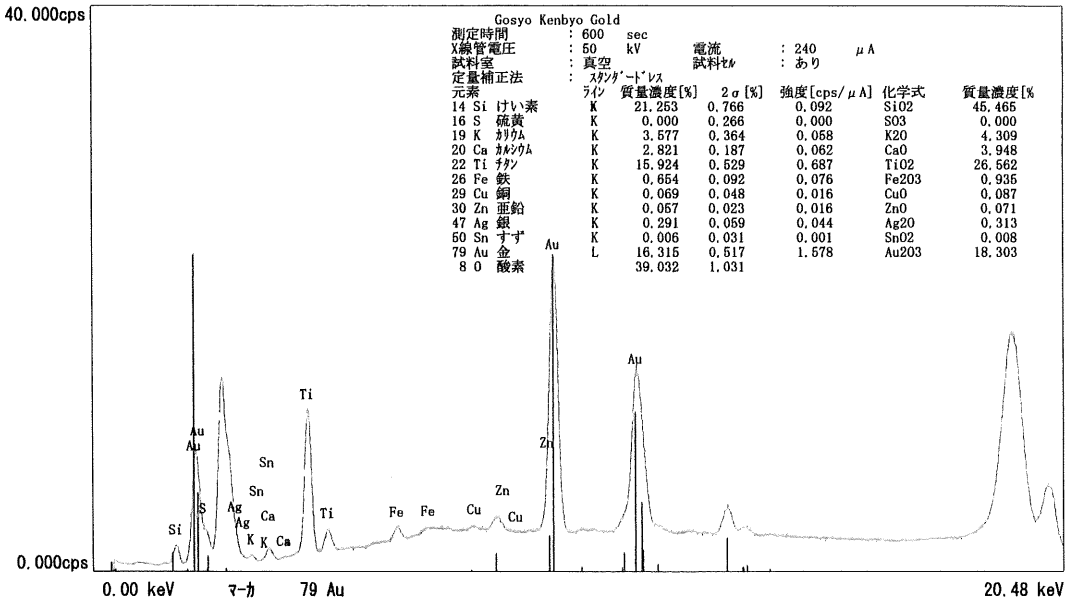


図60　箔粉蛍光Ｘ線分析チャート

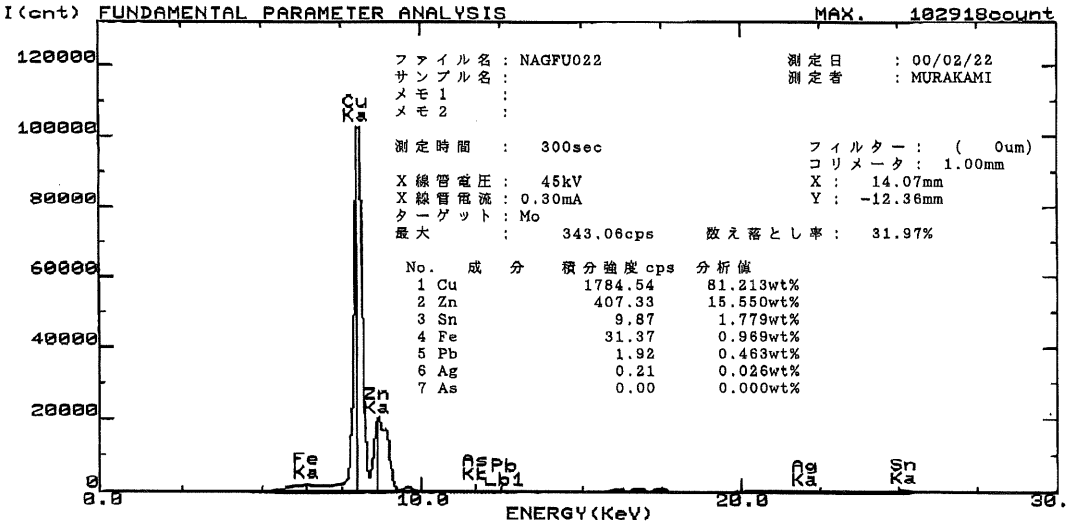


図61　賢瓶蛍光Ｘ線分析チャート

北野信彦氏による分析で、稲殻（12粒）・胡麻（約390粒）・麦（約25粒）・小豆（約65粒）であると判明した。なおこのうちの稲殻（米）の種類について、静岡大学農学部の佐藤洋一郎氏の肉眼観察の結果、温帯ジャポニカ種であろうとの見解が示された。この他、種類の特定のできない植物質（五薬や五香と呼ばれるもの）が多数検出されている。

本体の材質は、奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部の村上隆氏により蛍光Ｘ線分析（図61）を行ない、蓋・胴体ともに銅と亜鉛の合金（黄銅）であることが判明した。また、蓋・胴体とも亜鉛の成分含有が15％前後の数値を示した。この数値は、黄銅の中でも最も黄金色に近い色調になるものである。

最後に、あらためて調査分析に協力いただいた各位に謝辞を申し上げます。

参考資料として、江戸時代の地鎮具の類例を次に揚げる。

和歌山県和歌山市紅葉渓庭園（青銅製壷・水晶、真珠、金延板、稲殻、香木[61]）

和歌山県和歌山市和歌山城天守閣（銅製瓶・水晶、金箔、稲殻、抹香、香木片[62]）

和歌山県高野町金剛峯寺大門（銅製瓶・金箔、銀箔、瑠璃、水晶、稲殻、麦、小豆[63]）

京都府京都市総本山智積院境内祥雲寺客殿跡（輪宝、橛[64]）

奈良県奈良市興福寺南円堂（青銅製賢瓶・水晶、銀粉、真珠、稲殻、胡麻、麦、香、薬類[65]）

京都府京都市淀城跡（賢瓶・輪宝、橛[66]）

東京都千代田区飯田町遺跡（銅製壷・水晶、ガラス、金箔、梵字石[67]）

註

1） 東京大学埋蔵文化財調査室編『出土陶磁器・土器の分類（1）』東京大学構内遺跡調査研究年報2別冊、1999年。

2） 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、（財）京都市埋蔵文化財研究所、1996年。

3） 東京大学埋蔵文化財調査室編『出土陶磁器・土器の分類（1）』前掲。

4） 小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社、1998年。

5） 消費地ではあまり類例を見ないが、備前系の伊部南大窯跡周辺窯の東3号窯跡出土遺物の中に、類似形態の小型擂鉢がある（石井啓「伊部南大窯跡周辺窯跡群の出土遺物について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会、2000年）。

6） 畑中英二「近世信楽に於ける陶器生産」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁史研究会、2001年。

7） 同種のものが伊丹郷町の調査で出土しており、17世紀前半から中頃とされる（川口宏海「近世丹波焼の時期的変遷について－有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土遺物を中心として－」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁史研究会、2001年）。

8） 難波洋三「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究　第九』（財）大阪市文化財協会、1992年。

9） 渡辺誠「焼塩壺」江戸遺跡研究会編『江戸の食文化』吉川弘文館、1992年。小川望「『御壺塩師／堺湊伊織』の刻印をもつ焼塩壺について」『江戸在地系土器の研究』Ⅱ、江戸在地系土器研究会、1994年。

10） 小川望「『泉州麻生』の刻印をもつ焼塩壺に関する一考察」『日本考古学』第1号、1994年。

11） 明治大学記念館前遺跡調査団編『明治大学記念館前遺跡』明治大学考古学博物館、2000年。報告書では遺構出土の2例は、18世紀前半に廃絶された半地下室出土とされている。この調査例については、小平市教育委員会の小川望氏から御教示いただいた。

12） 難波洋三「徳川氏大坂城期の炮烙」前掲。

13） 「天盃」という箱書きの墨書名称を持つ三千院所蔵土師器皿（享和3年から文化5年にかけてのもの）とほぼ同法量のもので、遺構推定年代とも一致している（尾野善裕「三千院の天盃と土師器皿に関する二・三の問題」『学叢』第22号、京都国立博物館、2000年）。

14） 日下正剛「大谷焼・源内焼」『四国・淡路の陶磁器－生産と流通－』考古フォーラムくらもと・徳島大学総合科学部歴史学研究室、2000年。日下正剛「考古学からみた四国のやきもの－みん平焼と源内焼－」『陶説』566号、2000年。

15）『竹ノ鼻遺跡－蒲生郡蒲生町石塔－』滋賀県教育委員会、1998年。

16） 橋本久和「摂津古曽部焼について」『近世後期における関西窯業の展開－国焼と京焼－』関西陶磁史研究会、2003年。

17）『竹ノ鼻遺跡－蒲生郡蒲生町石塔－』前掲。

18） 難波洋三「徳川期大坂城期の炮烙」前掲。

19） 田中一廣「京都深草の『焼塩壺』伝世品」『研究紀要』2（財）大阪府埋蔵文化財協会、1994年。

20） 焼継を施した遺物の高台には、しばしば記号や屋号の様なものがみられる。本遺跡出土品でも○やW字状の記号が散見できる。通例、1個体に一箇所で焼継に使用するものと同じ素材の白玉で付けられており、記号化された顧客識別用のものと考えられている（日下正剛「南前川町1丁目遺跡出土陶磁器の補修痕」『南前川町1丁目遺跡』徳島県埋蔵文化財研究会、2002年）。

21）関西系磁器の産地として京焼・滋賀県の湖東焼・兵庫県の三田焼などが挙げられる。「道八」銘は三田焼の三輪明神窯跡出土資料（石神由貴「三輪明神窯跡の出土資料について」『関西陶磁史研究会第10回例会資料』関西陶磁史研究会、2002年）や伝世品などの染付磁器にも多くみられる。本報告書では高台銘の「道八」「平安陶工」などから、本歌である京焼の磁器とした。

22）『元屋敷窯跡範囲確認調査概報』岐阜県土岐市教育委員会、1995年。

23）以下のヨーロッパ陶磁器については、神戸市立博物館の岡泰正氏に御教示をいただいた。

24）陶器全集刊行会編『日本古陶銘款集　京都・補遺篇』平安堂書店、1973年。

25）小森俊寛「丸底小鉢考」『つちの中の京都　2』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2001年。

26）高台全周が残るものを1個体とした。破片は、単純に残存部を加えて100％を越える毎に1個体として数えた。

27）釈文は京都市歴史資料館の宇野日出生氏による。

28）朝鮮通信師を模した人形は、京都市内での出土報告例はないが、各地に伝世しており、江戸遺跡では東大構内遺跡などからの出土例がある（『こころの交流 朝鮮通信師』京都文化博物館、2001年）。

29）畑中英二「近世信楽に於ける陶器生産」『近世信楽焼をめぐって』関西陶磁史研究会、2001年。

30）田中一廣「京都深草の『焼塩壺』伝世品」前掲。

31）天明2年（1782）に大阪府三島郡桜井で、清水寛蔵が開窯したとされる（黒田和哉『茶碗窯別銘款』グラフィック社、1998年）。

32）釈文は京都市歴史資料館の宇野日出夫氏による。

33）野島寿三郎編『公卿人名大辞典』紀伊国屋書店、1994年。

34）「珉山」は、讃岐の陶工民山のことであるという。香川県大川郡志度町に窯が所在したという（陶器全集刊行会編『日本古陶銘款集　中国・四国編』平安堂書店、1973年）。

35）「賤」は賤機焼の刻印とされる。静岡市の北西の賤機山に窯が所在し、寛永末年の創窯と伝えられる（陶器全集刊行会編『日本古陶銘款集　東海・甲信編』平安堂書店、1973年）。

36）今までベトナム産とみられていたが、中国福建省磁竈窯の製品という見解がある（赤沼多佳「伝世品に見る南蛮茶道具の様相」『わび茶が伝えた名器　東南アジアの茶道具』茶道資料館、2002年）。

37）千葉豊「京都大学病院構内AG20・AF20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1996年度』京都大学埋蔵文化財研究センター、2000年。

38）オランダ製の染付陶器については、神戸市立博物館の岡泰正氏の御教示による。

39）駿府城本丸堀跡に出土例がある（『呉州赤絵・呉州染付・餅花手』愛知県陶磁資料館、1996年）。

40）この刻印は花塩壷の蓋にみられる刻印で、土器師権兵衛のものとされる（田中一廣「京都深草の「花焼壺」伝世品」前掲）。

41）ベトナム産の長胴瓶は茶道具の花入として珍重されている（『南蛮・島物－南海請来の茶陶－』根津美術館、1993年）。

42）辻井播磨は、深草焼の陶工で、享保年間の人とされる（『日本古陶銘款集　京都・補遺篇』陶器全集刊行会、1973年）。掲載した火入は18世紀後半以降のものであり、「辻井播磨」は屋号と考えられる。

43）渡辺誠「焼塩壺」『江戸の食文化』吉川弘文館、1992年。

44) 日下正剛「大谷焼・源内焼」『四国・淡路の陶磁器－生産と流通－』徳島城下町研究会、2000年。

45) 安芸毬子「遊・玩具3　箱庭道具」江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究辞典』柏書房、2001年。

46) 釈文は京都大学埋蔵文化財研究センターの千葉豊氏の御教示による。なお、釈文の括弧内は欠損部分である。

47)『府内城三の丸遺跡－大分県共同庁舎（仮名）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育委員会、1993年。

48) 吉弔は、亀の胴部に蛇の頭部が付く想像上の動物である（寺島良安『和漢三才図会』巻四十五）。

49) この刻印は、瀬戸窯の藤四郎銘に類似する（陶器全集刊行会編『日本古陶銘款集　東海・甲信編』前掲）。

50) 同様のものが、平安京左京四条四坊で出土している（「平安京左京四条四坊」『京都市内遺跡試掘・立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局、1990年。

51)「乾」の刻印は、京都の都の陶工音羽乾亭の印とされる（陶器全集刊行会編『日本古陶銘款集　京都・補遺編』前掲）。

52) 欠損部があるが、「いちじろく匂へるものをさくら花雲か雪かとなにまがふべき」と復元できる。釈文は京都大学埋蔵文化財研究センターの千葉豊氏による。太田蓮月作の類品は京都大学病院構内AG20・AF20区で出土している（『京都大学構内遺跡調査研究年報　1996年度』前掲）。

53) 渡辺誠「焼塩壺」前掲。

54)『有岡城跡・伊丹郷町Ⅵ』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所、1999年。松本和彦「高松城跡出土の京・信楽系陶器と理兵衛焼」『四国・淡路の陶磁器Ⅱ－理兵衛焼と京焼－』四国城下町研究会、2002年。

55) 肥前磁器が公家や社寺を中心に組物として流通していた過程は、17世紀後半の『隔冥記』の記載にもみられ、恒常化していたものと考えられる（岡佳子「『隔冥記』陶磁器年表」『史窓』第37号、1982年）。

56) 博多遺跡の編年では、Ⅰ－①類にあたるとみられる。森本朝子「博多遺跡群出土の天目」『唐物天目－福建省建窯出土天目と日本伝世の天目－』茶道資料館、1994年。

57) 増尾富房編『古寛永泉志（改訂版）』穴銭堂、1976年。小川吉儀編『新寛永銭鑑識と手引』ワールドコインサービス、1966年。

58) 永井久美男編『日本出土銭総覧　1996年版』兵庫県埋蔵銭調査会、1996年。

59) 東京国立博物館編『大川巧氏寄贈　日本金銀貨図録』東京国立博物館、2002年。

60) 岡泰正『びいどろ・ぎやまん図譜』淡交社、1996年。

61)『史跡和歌山城紅葉渓庭園復元整備報告書』和歌山市公園課、1968年。

62) 西山要一「資料紹介　和歌山城出土の地鎮・鎮壇具」『古代研究』28・29号、元興寺文化財研究所、1984年。

63)『重要文化財金剛峯寺大門修理工事報告書（本文編）』（社）和歌山県文化財研究会、1986年。

64)『智積院境内祥雲寺客殿跡の発掘調査』真言宗智山派総本山智積院、1995年。

65)『重要文化財興福寺南円堂修理工事報告書』奈良県教育委員会、1996年。

66) 時枝務「淀城跡出土の地鎮具－発見記録の紹介－」『史迹と美術』709号、2000年。

67)『掘り出された讃岐高松藩上屋敷跡』千代田区教育委員会、2002年。

第10章　立会調査の成果

埋設管の設置工事や樹木の移植が行なわれた地点350箇所で立会調査を実施した。調査地点を図で、調査成果を表で示す（図62・63、表123）。発掘調査区から南に遠く離れた京都御苑内の富小路テニスコート付近で実施した立会264～266については、図上に示していない。いくつかの特記事項について概要を述べる。

調査区北方の今出川通近くのＢ24、Ｂ25ブロックでは、江戸時代公家町の街路区画を知る上で重要なデータを得た。立会68・191・192・198では、江戸時代の路面跡を検出している。『洛中絵図　寛永後万治前』によれば、この付近に西の八条邸より東西に延びる「八条殿町」通が描かれている。この街路の路面が検出されたものと考える。発掘調査で得られた知見と組合わせれば、公家町北東部の全体的な復元が可能になるであろう。

この街路の南方の宅地内にあたる立会49・208では、江戸時代後期の土壙埋土から多量の金属製品鋳型が出土している（図版116・579）。近接する２箇所で同様の鋳型が出土しているので、同遺構を２度にわたって立会調査したものであろう。この鋳型で生産された製品は不明である。鋳型の出土地点は、『中むかし公家町之絵図』には「八条殿町屋」と記され、18世紀中頃に公家邸が一時期占地した時期もあったが、江戸時代前期から後期にかけて、ほとんどの時期において町家が維持されていた。町家工業が、公家町周辺に存在したものと思われる。なお、発掘調査地点では、工業生産関連の遺物がほとんど出土していない。

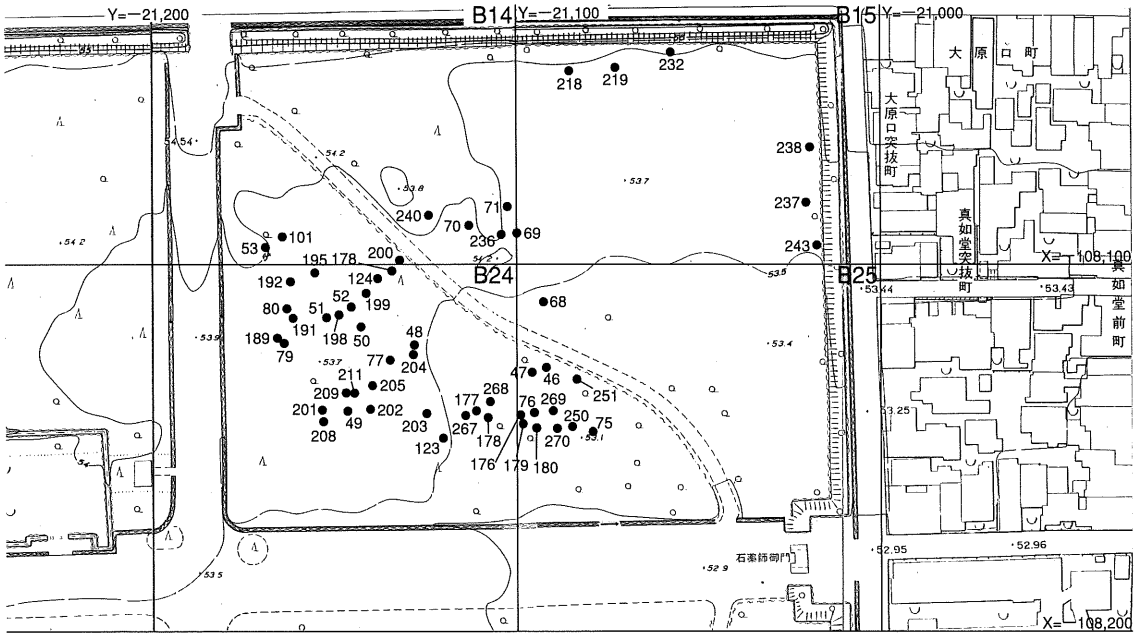


図62　立会調査地点図①（１：2000）

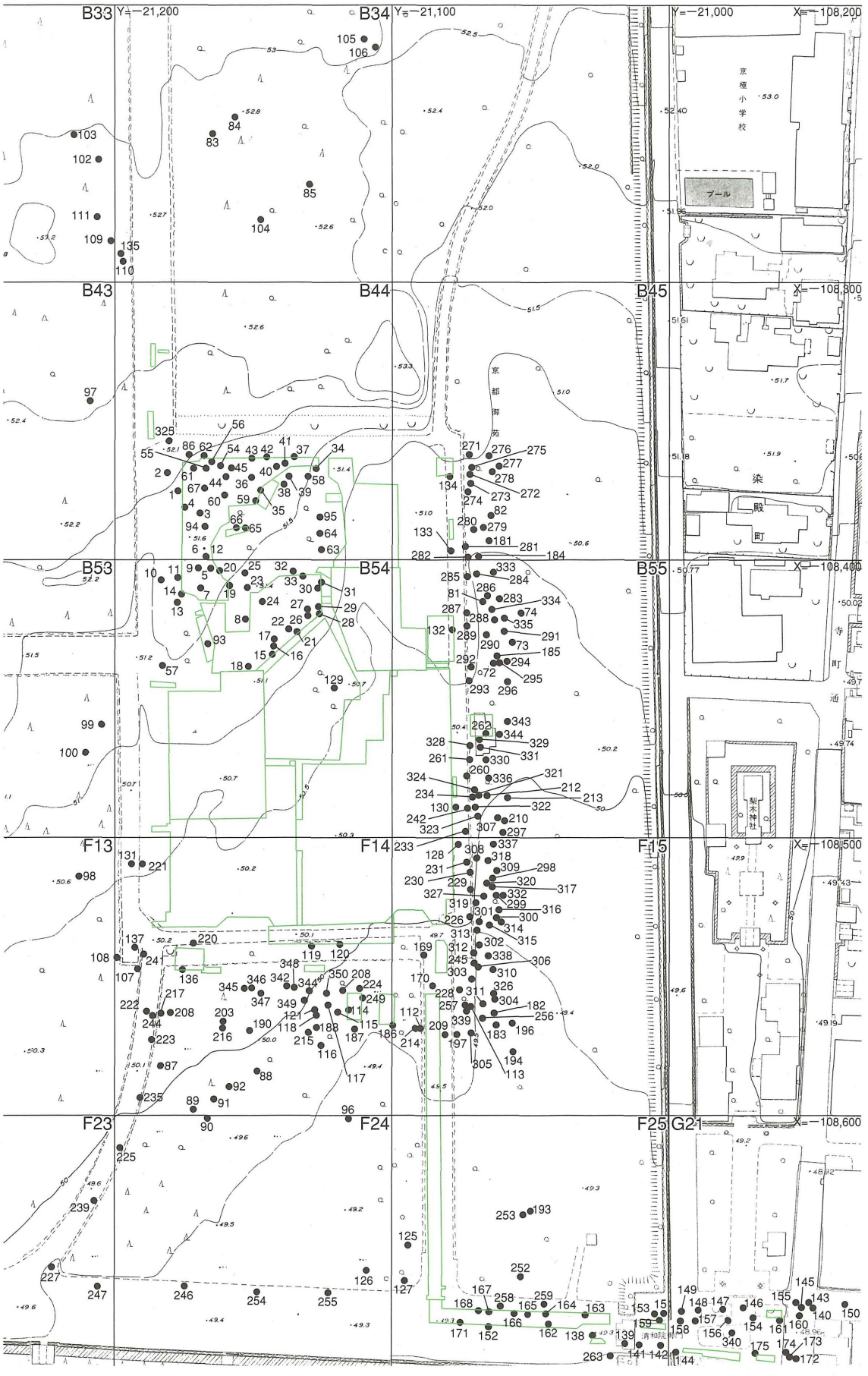


図63　立会調査地点図②（１：2000）

仙洞御所北側のＦ25ブロックでは、平安時代の土御門殿内の池状遺構の広がりを確認している。池状の堆積を確認したのは、立会162・164・165・166・167である。この池状堆積は、土御門殿の園池の一部の可能性がある。

Ｆ25・Ｇ21ブロックでは、各地点で江戸時代の路面や石組溝を確認して、公家町の街路復元に有益なデータを得ることができた。立会151・153で江戸時代前期の旧清和院通の南側溝である溝Ｓ１下層、江戸時代中期以降の清和院通内の排水路である溝Ｓ１の延長部分を確認した。また、立会157で宅地17の東限溝である溝Ｖ１を検出できた。小規模な掘削規模の工事に丹念に立会うことで、大きな成果を得ることができた。

表123　立会調査一覧表

調査地点	地区	調査年月日	掘削深(cm)	地山深(cm)	特記事項
No.1	B44	98.01.07	70	未検出	なし
No.2	B44	98.01.07	70	未検出	なし
No.3	B44	98.01.09	90	未検出	江戸整地層・焼土層確認
No.4	B44	98.01.09	未測	未検出	江戸漆喰層確認
No.5	B54	98.01.13	90	未検出	江戸整地層・焼土土壙確認
No.6	B44	98.01.13	100	未検出	江戸整地層もしくは土壙確認
No.7	B54	98.01.14	未測	未検出	江戸整地層・焼土層確認
No.8	B54	98.01.16	70	未検出	江戸整地層もしくは土壙確認
No.9	B54	98.01.16	未測	未検出	江戸瓦溜確認
No.10	B54	98.01.16	未測	未検出	平安須恵器出土
No.11	B54	98.01.16	90	63	江戸整地層・焼土層・洪水砂礫層確認、地山はシルト
No.12	B54	98.01.16	未測	未検出	江戸瓦溜確認
No.13	B54	98.01.19	95	未検出	江戸石組遺構確認
No.14	B54	98.01.19	未測	85	地山は砂礫
No.15	B54	98.01.20	90	未検出	江戸整地層・集石あるいは石材確認、土器陶器採集
No.16	B54	98.01.20	90	未検出	江戸整地層確認
No.17	B54	98.01.20	90	未検出	江戸整地層確認
No.18	B54	98.01.20	未測	未検出	肥前磁器色絵出土
No.19	B54	98.01.21	未測	未検出	江戸洪水砂礫層確認
No.20	B54	98.01.21	60	未検出	江戸焼土層・洪水砂礫層確認
No.21	B54	98.01.21	90	未検出	江戸焼土層・洪水砂礫層確認
No.22	B54	98.01.21	未測	未検出	江戸石組（排水？）遺構確認
No.23	B54	98.01.21	90	未検出	江戸整地層・焼土層･洪水砂礫層確認
No.24	B54	98.01.22	未測	未検出	江戸洪水砂礫層確認
No.25	B54	98.01.22	未測	未検出	レンガ撹乱
No.26	B54	98.01.23	100	未検出	江戸整地層・焼土層確認、土師皿採集
No.27	B54	98.01.23	95	未検出	江戸の土壙、中世の地層確認
No.28	B54	98.01.26	85	未検出	江戸整地層確認
No.29	B54	98.01.26	未測	未検出	18C後半代の遺物採集
No.30	B54	98.01.26	60	未検出	江戸整地層・瓦溜確認
No.31	B54	98.01.26	80	未検出	なし
No.32	B54	98.01.27	88	未検出	江戸整地層確認
No.33	B54	98.01.27	50	未検出	近現代盛土のみ
No.34	B44	98.01.27	30	未検出	なし
No.35	B44	98.01.27	80	未検出	江戸整地層確認、土師器・陶磁器採集
No.36	B44	98.01.27	未測	未検出	江戸整地層確認
No.37	B44	98.01.28	90	未検出	江戸焼土塊確認、18C～陶磁器採集
No.38	B44	98.01.29	80	未検出	江戸整地層確認、土師器・肥前刷毛目碗採集
No.39	B44	98.01.29	80	未検出	江戸整地層確認
No.40	B44	98.01.29	80	未検出	焼土を多く含む江戸整地層確認
No.41	B44	98.01.29	未測	未検出	江戸整地層・土間状遺構確認、18C～の硯・陶磁器採集
No.42	B44	98.01.30	80	未検出	江戸整地層・焼土層・石蓋漆喰溝検出、18～19Cの土師皿採集
No.43	B44	98.02.02	100	85	江戸整地層・焼土層確認、地山は砂礫
No.44	B44	98.02.03	90	未検出	江戸土器溜確認
No.45	B44	98.02.03	90	75	平安？～江戸整地層確認、地山は砂礫
No.46	B25	98.02.03	55	未検出	江戸整地層・焼土層確認

調査地点	地区	調査年月日	掘削深(cm)	地山深(cm)	特記事項
No.47	B25	98.02.03	未測	未検出	江戸石組裏面検出
No.48	B24	98.02.03	未測	未検出	江戸漆喰井戸？検出
No.49	B24	98.02.03	70	未検出	江戸土壙確認・鋳型採集
No.50	B24	98.02.03	60	未検出	江戸整地層・焼土層確認
No.51	B24	98.02.03	52	52	江戸焼土層確認、地山はシルト
No.52	B24	98.02.03	54	未検出	江戸整地層・焼土層確認
No.53	B14	98.02.03	60	50	江戸整地層、中世層確認、地山は砂礫
No.54	B44	98.02.04	85	未検出	江戸整地層確認
No.55	B44	98.02.05	110	未検出	なし
No.56	B44	98.02.05	100	100	地山は砂礫
No.57	B44	98.02.09	50	未検出	なし
No.58	B44	98.02.09	105	未検出	江戸整地層確認
No.59	B44	98.02.09	未測	未検出	江戸花崗岩切石２個検出
No.60	B44	98.02.09	90	未検出	なし
No.61	B44	98.02.09	120	未検出	江戸整地層・瓦溜確認
No.62	B44	98.02.09	120	70	江戸土器溜確認、地山はシルト
No.63	B44	98.02.10	50	未検出	江戸焼土層確認
No.64	B44	98.02.10	60	未検出	江戸整地層・焼土層確認
No.65	B44	98.02.10	100	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.66	B44	98.02.10	100	未検出	江戸漆喰暗渠検出
No.67	B44	98.02.10	120	120	土器溜検出、地山はシルト
No.68	B15	98.02.12	100	未検出	江戸整地層・路面、中世包含層確認
No.69	B15	98.02.12	90	未検出	中世？～江戸整地層確認
No.70	B14	98.02.12	78	未検出	中世？～江戸整地層確認
No.71	B14	98.02.12	100	未検出	江戸整地層・焼土焼瓦溜確認
No.72	B55	98.02.12	未測	未検出	江戸整地層確認
No.73	B55	98.02.12	未測	未検出	江戸整地層確認
No.74	B55	98.02.12	62	未検出	江戸整地層確認
No.75	B25	98.02.13	50	未検出	江戸整地層・集石土壙確認
No.76	B25	98.02.13	60	未検出	江戸整地層もしくは遺構埋土確認
No.77	B24	98.02.13	80	未検出	江戸整地層・焼土層・土壙確認
No.78	B24	98.02.13	68	未検出	江戸整地層・土壙確認
No.79	B24	98.02.13	65	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層・土壙確認
No.80	B24	98.02.13	70	未検出	江戸焼土層・焼土層確認
No.81	B55	98.02.13	90	60	江戸？土壙埋土、地山は粗粒砂
No.82	B45	98.02.13	75	未検出	室町～江戸整地層、江戸洪水砂礫層確認、室町土師器採集
No.83	B34	98.02.16	90	90	中世？整地層、地山は砂礫
No.84	B34	98.02.16	90	未検出	江戸整地層もしくは遺構埋土確認
No.85	B34	98.02.16	70	未検出	中世層確認、中世輸入白磁出土
No.86	B44	98.02.17	未測	未検出	コンクリートガラ検出
No.87	F14	98.02.17	70	未検出	江戸整地層確認
No.88	F14	98.02.17	30	未検出	江戸整地層確認
No.89	F14	98.02.17	50	未検出	江戸整地層確認
No.90	F24	98.02.17	50	未検出	江戸整地層確認
No.91	F14	98.02.17	30	未検出	現代盛土
No.92	F14	98.02.17	30	未検出	現代盛土
No.93	B54	98.02.18	80	未検出	江戸整地層確認
No.94	B44	98.02.18	80	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.95	B44	98.02.18	60	未検出	江戸整地層もしくは土壙埋土確認
No.96	F24	98.02.19	未測	未検出	遺物採集
No.97	B43	98.02.23	70	未検出	江戸土間確認、火災面確認
No.98	F13	98.02.25	72	72	江戸整地層・焼土焼瓦層確認、地山は砂礫
No.99	B53	98.02.25	72	63	江戸整地層、地山は砂礫
No.100	B53	98.02.26	105	98	江戸整地層・土壙埋土確認、地山はシルト
No.101	B14	98.02.27	未測	未検出	近代レンガ溝
No.102	B33	98.02.27	64	未検出	江戸整地層・中世砂礫層
No.103	B33	98.02.27	未測	未検出	なし
No.104	B34	98.03.03	60	未検出	江戸整地層・焼土層確認
No.105	B34	98.03.06	52	未検出	江戸焼土層・洪水砂礫層確認
No.106	B34	98.03.06	50	未検出	江戸焼土層・洪水砂礫層確認
No.107	F14	00.02.03	130	100	江戸路面・石組井戸・土器溜・瓦溜、中世土取穴確認、地山はシルト
No.108	F13	00.02.03	96	未検出	コンクリート基礎、江戸整地層確認
No.109	B33	00.02.04	192	100	江戸石組井戸・漆喰槽、平安包含層確認、地山はシルト
No.110	B33	00.02.04	120	70	室町時代の溝状遺構確認、地山はシルト

調査地点	地区	調査年月日	掘削深(cm)	地山深(cm)	特記事項
No.111	B33	00.02.04	170	120	江戸土壙埋土、中世包含層確認、地山はシルト
No.112	F15	00.02.08	90	未検出	江戸整地層・焼土層・洪水層・礎石確認
No.113	F15	00.02.08	100	未検出	江戸土器溜確認
No.114	F14	00.02.10～15	120	110	江戸整地層・洪水砂礫層・焼瓦溜・確認
No.115	F14	00.02.15～16	135	未検出	江戸時代整地層・土壙確認
No.116	F14	00.02.17	未測	未検出	なし
No.117	F14	00.02.18	未測	未検出	なし
No.118	F14	00.02.18	220	150	江戸整地層・洪水砂礫層、中世包含層、平安？土壙確認
No.119	F14	00.02.21	120	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層・土壙確認
No.120	F14	00.02.21	未測	未検出	江戸焼瓦溜、土器溜確認
No.121	F14	00.02.21	未測	未検出	江戸石組井戸確認
No.122	B14	00.02.22	126	未検出	江戸整地層・焼瓦溜確認
No.123	B14	00.02.24	100	未検出	江戸土壙確認
No.124	B14	00.02.23	120	110	江戸整地層・焼土層・洪水砂礫層・焼瓦溜確認、地山はシルト
No.125	F25	00.02.23	100	未検出	江戸整地層・焼土層・洪水砂礫層確認
No.126	F24	00.02.24	140	未検出	江戸整地層確認
No.127	F25	00.02.24	120	未検出	江戸整地層確認
No.128	F15	00.02.29	120	100	江戸路面・整地層確認、地山？は粗粒砂～シルト
No.129	B54	00.02.29	168	100	江戸整地層・土壙、室町時代堀確認、地山はシルト
No.130	B55	00.03.02	130	未検出	平安？～江戸整地層確認
No.131	F14	00.03.03	110	未検出	コンクリート基礎確認
No.132	B55	00.03.03	100	75	中世以前～江戸整地層確認、地山はシルト
No.133	B45	00.03.07	120	90	江戸整地層、室町土壙確認、地山はシルト
No.134	B45	00.03.07	115	80	江戸整地層・焼土層確認
No.135	B33	00.03.07	未測	未検出	なし
No.136	F14	00.03.13	未測	未検出	なし
No.137	F14	00.03.13	未測	未測	コンクリート基礎確認、地山はシルト
No.138	F25	01.11.19	117	未検出	江戸路面・土壙検出
No.139	F25	01.11.20	100	未検出	江戸整地層・火災焼土層・洪水砂礫層確認
No.140	G21	01.11.21	190	155	上半撹乱、地山は砂礫
No.141	F25	01.11.21	95	未検出	江戸路面・洪水砂礫層確認
No.142	G21	01.11.22	103	未検出	江戸路面・洪水砂礫層確認
No.143	G21	01.11.22	190	158	撹乱、地山は砂礫
No.144	G21	01.11.26	130	未検出	江戸路面・火災焼土層確認
No.145	G21	01.11.27	200	160	撹乱、地山は砂礫
No.146	G21	01.11.28	245	170	江戸路面・土壙確認、地山は砂礫
No.147	G21	01.11.29	260	180	江戸路面、中世以前～江戸整地層確認
No.148	G21	01.11.29	175	未検出	梨木通東側溝検出
No.149	G21	01.11.28	235	170	平安？～江戸整地層確認、地山は砂礫
No.150	G21	01.11.28	130	未検出	撹乱
No.151	F25	01.11.30	240	170	江戸道路側溝確認、地山の質不明
No.152	F25	01.11.30	297	116	江戸土壙確認、江戸土師皿採集、地山は砂礫
No.153	F25	01.12.03	90	未検出	江戸新道通側溝確認
No.154	G21	01.12.04	272	180	江戸路面、平安？～江戸整地層確認、中世以前の平瓦採集、地山は砂礫
No.155	G21	01.12.04	130	未検出	撹乱
No.156	G21	01.12.05	254	168	江戸整地層・火災焼土層・洪水砂礫層確認、平安？中世？整地層確認、地山は砂礫
No.157	G21	01.12.05	200	183	江戸路面・梨木通東側溝確認、地山は砂礫
No.158	G21	01.12.07	240	180	江戸路面、中世以前整地層確認、地山は砂礫
No.159	F25	01.12.07	241	176	平安時代東京極大路路面および側溝？確認、地山は砂礫
No.160	G21	01.12.10	115	未検出	撹乱
No.161	G21	01.12.11	85	未検出	江戸路面確認
No.162	F25	01.12.14	未測	210	平安池状堆積確認、地山は砂礫
No.163	F25	01.12.18	200	137	江戸清和院通側溝、中世以前溝確認、平安土師皿採集、地山は砂礫
No.164	F25	01.12.19	200	190	平安池状堆積確認、地山は砂礫
No.165	F25	01.12.19	205	200	平安池状堆積確認、平安土師皿採集、地山は砂礫
No.166	F25	01.12.19	未測	未検出	平安池状遺構西端確認
No.167	F25	01.12.19	210	160	江戸路面、平安池状堆積確認
No.168	F25	01.12.20	188	188	中世以前～江戸整地層確認、中世土師皿・中国青磁採集、地山の質不明
No.169	F15	01.12.20	290	150	江戸土壙、中世以前～江戸整地層確認、江戸平瓦・平安～中世土師器須恵器採集、地山は砂礫
No.170	F15	01.12.26	185	未検出	平安～江戸整地層確認、平安土師皿瓦片採集
No.171	F25	01.12.26	188	188	江戸洪水砂礫層、中世以前整地層確認、地山は砂礫
No.172	G21	02.01.10	100	未検出	撹乱

調査地点	地区	調査年月日	掘削深(cm)	地山深(cm)	特記事項
No.173	G21	02.01.11	150	120	江戸路面・焼土層確認、地山は砂礫
No.174	G21	02.01.17	92	未検出	江戸路面・焼土層確認
No.175	G21	02.01.18	125	未検出	撹乱
No.176	B25	02.01.23	100	未検出	江戸整地層確認、江戸土師皿陶磁器採集
No.177	B24	02.01.24	88	未検出	江戸整地層確認
No.178	B24	02.01.24	83	未検出	江戸整地層確認
No.179	B25	02.01.24	104	未検出	江戸整地層確認、江戸肥前磁器・煙管採集
No.180	B25	02.01.25	120	未検出	江戸土壙確認
No.181	B45	02.01.25	150	73	江戸整地層確認、江戸土師皿採集、地山はシルト
No.182	F15	02.01.28	84	未検出	江戸石組遺構・洪水砂礫層確認
No.183	F15	02.01.28	75	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認、平安～江戸土師皿須恵器施釉陶器採集
No.184	B44	02.01.28	160	94	江戸土壙？撹乱？確認、地山は砂礫
No.185	B55	02.01.28	115	108	江戸整地層・焼土層確認、地山は砂礫
No.186	F15	02.01.29	38	未検出	江戸整地層確認
No.187	F14	02.01.29	40	未検出	江戸整地層確認
No.188	F14	02.01.29	38	未検出	江戸整地層確認
No.189	B24	02.01.29	113	未検出	平安～江戸整地層確認
No.190	F14	02.01.29	40	未検出	江戸整地層確認
No.191	B24	02.01.29	120	未検出	江戸路面、中世以前整地層確認、江戸京信楽系施釉陶器燗鍋・平安土師皿採集
No.192	B24	02.01.30	115	未検出	江戸路面、中世以前整地層確認
No.193	F25	02.01.30	87	未検出	江戸遺構確認
No.194	F15	02.01.30	85	未検出	江戸整地層・焼土層・洪水層確認
No.195	B24	02.01.30	95	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.196	F15	02.01.30	85	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.197	F15	02.01.30	90	未検出	江戸土壙確認
No.198	B24	02.01.30	116	未検出	江戸路面・焼土層、中世以前整地層？確認
No.199	B24	02.01.30	85	未検出	撹乱
No.200	B14	02.01.30	113	未検出	江戸整地層・焼土層確認
No.201	B14	02.01.31	85	未検出	江戸整地層・土壙確認、江戸京信楽系施釉陶器碗採集
No.202	B24	02.01.31	100	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.203	F14	02.01.31	48	未検出	江戸整地層確認
No.204	B24	02.01.31	78	未検出	江戸整地層確認、江戸土師皿・肥前磁器・平瓦採集
No.205	B24	02.01.31	96	未検出	江戸整地層確認
No.206	B24	02.01.31	93	未検出	江戸整地層確認
No.207	F14	02.01.31	20	未検出	江戸整地層確認
No.208	B24	02.02.01	105	未検出	江戸整地層・土壙確認、江戸肥前磁器・鋳型採集
No.209	F15	02.02.01	42	未検出	江戸路面？確認
No.210	B55	02.02.01	105	未検出	江戸路面・　整地層確認
No.211	B24	02.02.01	103	未検出	江戸土壙確認
No.212	B55	02.02.01	102	未検出	江戸土壙確認
No.213	B55	02.02.01	69	未検出	江戸整地層・焼土層・礎石確認
No.214	F15	02.02.04	80	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層
No.215	F14	02.02.04	85	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層、時期不明土師皿採集
No.216	F14	02.02.04	82	未検出	江戸整地層・土壙確認
No.217	F14	02.02.04	88	未検出	江戸路面確認、江戸土師皿採集
No.218	B15	02.02.04	90	未検出	江戸整地層確認
No.219	B15	02.02.04	100	未検出	江戸整地層確認
No.220	F14	02.02.04	137	137	平安～江戸整地層確認、時期不明土師皿焼締陶器採集、地山は砂礫
No.221	F14	02.02.05	80	未検出	江戸整地層確認
No.222	F14	02.02.05	100	未検出	江戸整地層・土壙確認、江戸土師皿陶磁器採集
No.223	F14	02.02.05	96	未検出	江戸路面・整地層・土壙確認
No.224	F24	02.02.05	150	未検出	江戸土壙確認
No.225	F24	02.02.05	100	未検出	江戸整地層・埋甕確認
No.226	F15	02.02.05	95	未検出	江戸時代整地層確認
No.227	F23	02.02.05	90	未検出	江戸時代整地層確認
No.228	F15	02.02.05	138	未検出	江戸時代整地層確認
No.229	F15	02.02.05	90	未検出	江戸時代整地層・土壙確認
No.230	F15	02.02.05	100	未検出	江戸時代整地層確認
No.231	F15	02.02.05	110	未検出	江戸土壙確認
No.232	B15	02.02.05	70	未検出	江戸時代整地層確認
No.233	B55	02.02.05	130	未検出	平安～江戸整地層確認、時期不明土師皿採集
No.234	B55	02.02.05	170	120	江戸整地層確認、地山は砂礫
No.235	F14	02.02.06	48	未検出	江戸整地層確認

調査地点	地区	調査年月日	掘削深(cm)	地山深(cm)	特記事項
No.236	B14	02.02.06	138	120	江戸整地層・焼土層・洪水砂礫層、中世？整地層確認、時期不明土師皿採集、地山はシルト
No.237	B15	02.02.06	80	未検出	江戸整地層確認
No.238	B15	02.02.06	120	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.239	F23	02.02.06	50	未検出	江戸整地層確認
No.240	B14	02.02.06	125	未検出	江戸整地層確認、江戸土師皿陶磁器採集
No.241	F14	02.02.07	40	未検出	江戸整地層確認
No.242	B55	02.02.07	120	未検出	江戸整地層確認
No.243	B15	02.02.07	105	未検出	江戸整地層・焼土層・洪水砂礫層確認
No.244	F14	02.02.08	50	未検出	江戸整地層確認
No.245	F15	02.02.08	88	未検出	江戸整地層確認
No.246	F24	02.02.08	95	未検出	江戸整地層・土壙確認、江戸瓦類採集
No.247	F23	02.02.12	42	未検出	江戸整地層確認
No.248	F24	02.02.12	120	未検出	江戸整地層もしくは土壙確認
No.249	F14	02.02.12	140	未検出	江戸整地層確認
No.250	B25	02.02.12	105	未検出	江戸土壙、平安～江戸整地層確認、中世土師皿採集
No.251	B25	02.02.12	90	未検出	江戸整地層確認
No.252	F25	02.02.12	100	未検出	江戸整地層・土壙確認、江戸土師皿採集
No.253	F25	02.02.12	87	未検出	江戸整地層確認
No.254	F24	02.02.13	39	未検出	江戸路面確認
No.255	F24	02.02.13	105	未検出	江戸路面確認、江戸土師皿焼締陶器採集
No.256	F15	02.02.13	77	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.257	F15	02.02.13	97	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.258	F25	02.02.14	104	未検出	江戸路面確認
No.259	F25	02.02.14	83	未検出	江戸路面確認
No.260	B55	02.02.14	140	66	平安～江戸整地層確認、地山は砂礫
No.261	B55	02.02.14	145	130	江戸整地層確認、地山は砂礫
No.262	B55	02.02.14	117	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層・土壙確認
No.263	F25	02.02.15	90	未検出	江戸路面・洪水砂礫層確認
No.264	富小路広場	02.02.18	160	未検出	江戸整地層確認
No.265	富小路広場	02.02.18	93	未検出	江戸？近代？路面、江戸整地層確認
No.266	富小路広場	02.02.18	106	未検出	江戸？近代？路面、江戸整地層確認
No.267	B24	02.02.19	100	90	平安～江戸整地層確認、江戸土師皿肥前陶器採集、地山は砂礫
No.268	B25	02.02.19	105	70	江戸整地層確認、地山は砂礫
No.269	B25	02.02.19	115	未検出	平安～江戸整地層確認、中世土師皿採集
No.270	B25	02.02.19	100	未検出	江戸土壙確認、江戸土師皿採集
No.271	B45	02.02.20	50	未検出	江戸整地層確認
No.272	B45	02.02.20	50	未検出	江戸整地層確認
No.273	B45	02.02.20	55	未検出	江戸整地層確認
No.274	B45	02.02.20	50	未検出	江戸整地層確認
No.275	B45	02.02.20	50	未検出	江戸整地層確認
No.276	B45	02.02.20	65	未検出	江戸整地層確認
No.277	B45	02.02.20	50	未検出	江戸整地層確認
No.278	B45	02.02.20	60	未検出	江戸整地層確認
No.279	B45	02.02.20	55	未検出	江戸整地層確認
No.280	B45	02.02.20	70	未検出	江戸整地層確認
No.281	B45	02.02.20	60	未検出	江戸整地層確認
No.282	B45	02.02.20	65	未検出	江戸整地層・土壙確認
No.283	B55	02.02.20	70	未検出	江戸整地層・土壙確認
No.284	B55	02.02.20	90	未検出	江戸土壙・洪水砂礫層確認
No.285	B55	02.02.20	65	未検出	江戸整地層確認
No.286	B55	02.02.20	55	未検出	江戸整地層確認
No.287	B55	02.02.20	60	未検出	江戸整地層・土壙確認
No.288	B55	02.02.20	90	未検出	江戸整地層確認、江戸土師皿焼締陶器採集
No.289	B55	02.02.20	75	未検出	江戸整地層確認
No.290	B55	02.02.20	70	未検出	江戸路面・整地層確認、江戸土師皿施釉陶器採集
No.291	B55	02.02.20	80	未検出	江戸整地層・土壙確認
No.292	B55	02.02.20	70	未検出	江戸整地層確認
No.293	B55	02.02.20	70	45	江戸整地層確認、地山は砂礫
No.294	B55	02.02.20	75	未検出	江戸整地層確認
No.295	B55	02.02.20	85	未検出	江戸整地層確認
No.296	B55	02.02.20	65	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.297	B55	02.02.21	110	未検出	江戸整地層・土壙、室町整地層確認、江戸土師皿・平安灰釉･瓦類採集
No.298	F15	02.02.21	110	未検出	江戸整地層・土壙確認

調査地点	地区	調査年月日	掘削深(cm)	地山深(cm)	特記事項
No.299	F15	02.02.21	105	未検出	江戸整地層確認、江戸土師皿・瓦質土器採集
No.300	F15	02.02.21	90	未検出	江戸整地層・土壙・焼土層・洪水砂礫層確認、江戸土師皿採集
No.301	F15	02.02.21	105	未検出	撹乱
No.302	F15	02.02.21	90	未検出	江戸整地層確認
No.303	F15	02.02.21	70	未検出	平安～江戸整地層確認
No.304	F15	02.02.21	70	未検出	江戸整地層・焼土層確認
No.305	F15	02.02.21	48	未検出	江戸整地層確認
No.306	F15	02.02.21	70	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.307	B55	02.02.25	70	未検出	江戸土壙もしくは撹乱確認
No.308	F15	02.02.25	65	未検出	江戸整地層確認
No.309	F15	02.02.25	90	未検出	江戸整地層確認
No.310	F15	02.02.25	60	未検出	撹乱
No.311	F15	02.02.25	75	未検出	江戸整地層確認
No.312	F15	02.02.25	55	未検出	江戸整地層確認
No.313	F15	02.02.25	65	未検出	江戸整地層確認
No.314	F15	02.02.25	65	未検出	江戸整地層・焼土層・洪水砂礫層確認
No.315	F15	02.02.25	60	未検出	江戸整地層確認
No.316	F15	02.02.25	65	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層・火災処理穴確認
No.317	F15	02.02.25	70	未検出	江戸整地層確認
No.318	F15	02.02.25	65	未検出	江戸整地層確認
No.319	F15	02.02.25	65	未検出	江戸整地層・焼土層確認、中世土師皿・中国白磁採集
No.320	F15	02.02.25	75	未検出	江戸整地層確認
No.321	B55	02.02.25	60	未検出	江戸整地層確認
No.322	B55	02.02.25	65	未検出	江戸整地層確認
No.323	B55	02.02.25	60	未検出	江戸整地層確認
No.324	B55	02.02.25	70	未検出	江戸？路面確認、江戸土師皿・銭貨採集
No.325	B44	02.02.26	42	未検出	江戸路面・側溝検出、中世～江戸土師皿・施釉陶器・瓦類採集
No.326	F15	02.02.27	68	未検出	江戸整地層確認
No.327	F15	02.02.27	55	未検出	江戸整地層確認
No.328	B55	02.03.01	85	未検出	江戸洪水砂礫層、室町～江戸整地層確認
No.329	B55	02.03.01	60	未検出	江戸焼土層・洪水砂礫層確認
No.330	B55	02.03.04	55	未検出	近代?路面、江戸整地層確認
No.331	B55	02.03.04	未測	未検出	江戸焼土層・洪水砂礫層確認
No.332	F15	02.03.04	55	未検出	江戸整地層・焼土層・洪水砂礫層確認
No.333	B55	02.03.05	55	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.334	B55	02.03.05	60	未検出	江戸整地層確認
No.335	B55	02.03.05	65	未検出	平安～江戸整地層確認、時期不明土師皿採集
No.336	B55	02.03.05	50	未検出	江戸路面・整地層確認
No.337	F15	02.03.05	40	未検出	江戸整地層確認
No.338	F15	02.03.06	50	未検出	江戸整地層確認
No.339	F15	02.03.06	60	未検出	江戸整地層確認
No.340	G21	02.03.07	72	未検出	江戸路面確認
No.341	F14	02.03.07	70	未検出	江戸整地層確認
No.342	F14	02.03.07	65	未検出	江戸整地層確認
No.343	B55	02.03.11	70	未検出	江戸整地層・洪水砂礫層確認
No.344	B55	02.03.11	65	未検出	江戸整地層確認
No.345	F14	02.03.13	75	未検出	江戸整地層確認
No.346	F14	02.03.13	90	未検出	江戸整地層確認
No.347	F14	02.03.13	85	未検出	江戸整地層確認
No.348	F14	02.03.13	80	未検出	江戸整地層確認
No.349	F14	02.03.13	50	未検出	江戸整地層確認
No.350	F14	02.03.13	60	未検出	江戸土壙確認

第11章　まとめ

第１節　公家町の成立と構造の変遷

桃山時代以降、内裏周辺に公家町が形成されたことが周知されており、それは文献や古絵図などの資料からも判明している。そして、聚楽第の建設や御土居造築などの京都改造事業の一環として、武家地とともに公家町も形成されたと考えられていた。しかし、具体的にいつの時点で公家町が成立したのかは不明であった。公家町が描かれた最初の絵図は1610年代に成立した『中むかし公家町之絵図』である。それによれば公家町は街路によって大きく区画され、その中に屋敷が配置されていることがみてとれる。江戸時代中期の絵図では、宝永５年（1708）の大火を境に、それ以前と以後で街路や宅地の配置に大きな変化があったことがわかる。その後の天明８年（1788）に再度大火に見まわれ、若干の宅地割や屋敷主の変更を遂げながら幕末まで存続している。

今回の発掘調査は、京都の市街地においては例のない約14,000㎡の面積があり、さらに調査例の少ない京都御苑内であることから、調査によって様々な成果が得られるものとして期待された。調査では、公家町の成立時期や街路の構造、屋敷内の建物配置、公家町の変遷などを解明することを調査の主眼とした。

ここでは、調査で検出された遺構をもとにして公家町の成立期から廃絶期までの街路と屋敷群を復元してみる。また、発掘した遺構と古絵図との対比から、公家町の変遷をみてみる。

１　北半部

A　公家町成立直前の状況

公家町成立直前の遺構の状況について、概述する（図64）。調査地中央には幅約６m、深さ約２mに達する大規模な南北の堀Ｇ1940がある。断面形は逆台形をしており、御所の東側に位置することから内裏を防御する施設と考えられる。この堀が最終的に埋められた時期は、17世紀の初頭である。掘られた時期を明らかにすることはできないが、底部に堆積する大量の砂礫層の中に16世紀中頃の土器類を包含していることが判明した[1)]。堀の西側では路面・溝・井戸・土壙・集石・埋納土壙などの遺構が分布している。建物遺構は検出できなかったが、井戸は不規則に点在し、Ａ区に集中している部分がある。そして富小路推定位置には南北の路面が存在した。また、堀Ｇ1940の約40m東側には、断面形がＶ字形の南北方向の堀Ｇ1195Ｂがあり、防御的な性格をもつとともに区画を示す遺構と考える。この２条の堀の間には井戸・土壙・池などの遺構が点在する。東の堀Ｇ1195Ｂ沿いには、大型の景石が据えられた池Ｇ2180や池Ｇ2385がみられる。しかし、全体的にみると遺構密度は低く、公家町を設ける条件に合致していたと考えられる。

富小路の路面上には、16世紀から17世紀初頭の道路廃絶に伴なうと考える２基の埋納遺構が

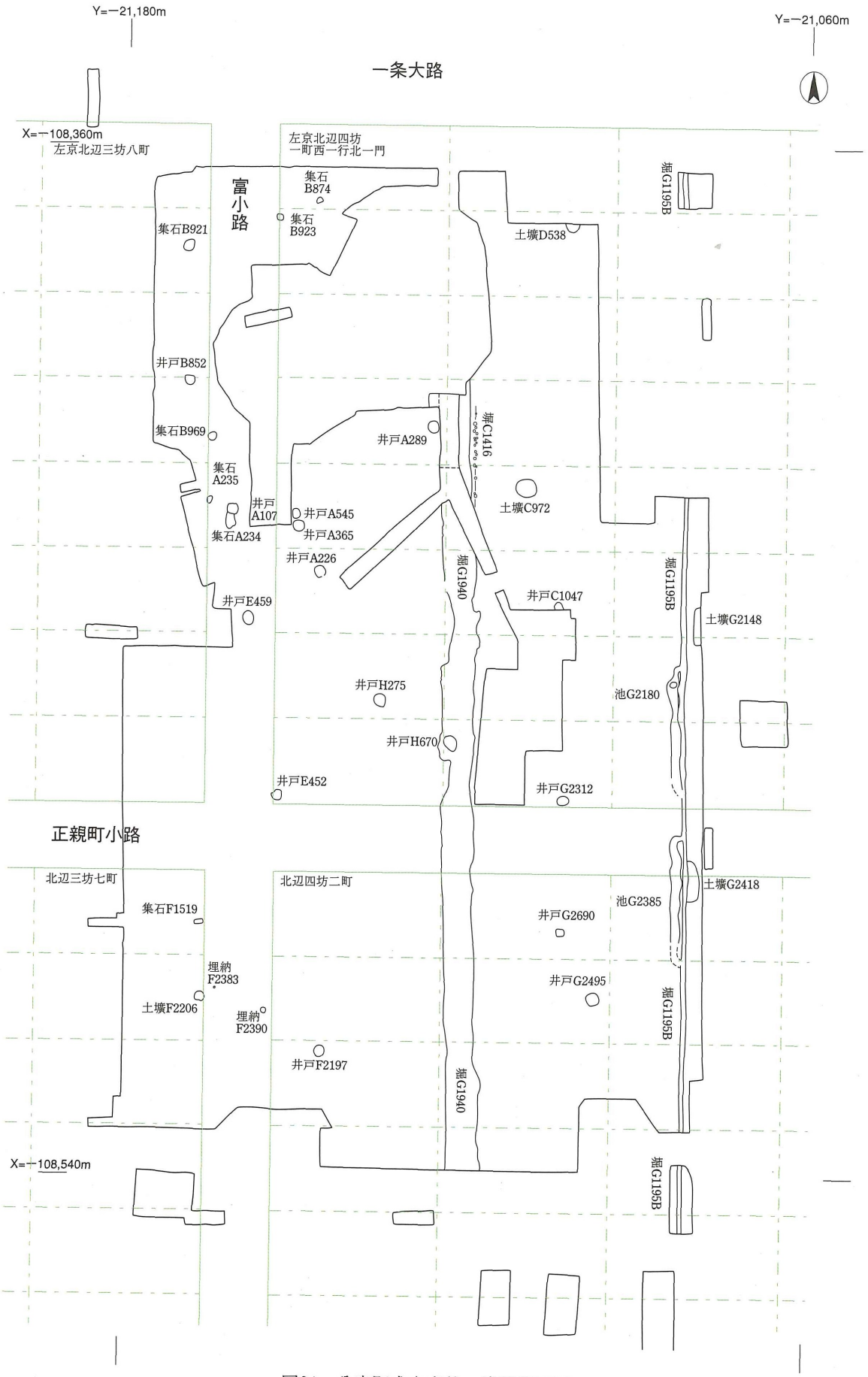


図64　公家町成立直前の遺構概要図

作られており、この頃、条坊制を引き継ぐ道路が廃絶されたと考えられる。次いで1610年代には、堀Ｇ1940が埋められている。また、同時期の公家屋敷建設前の大規模な土取穴も確認している。すなわち、内裏の東方に位置する中筋・二階町一帯の公家町の造成は、16世紀末から開始され、『中むかし公家町之絵図』が描かれる1610年代には完成していたものと思われる。

Ｂ　公家町成立期から宝永大火までの様相

17世紀前半から18世紀初頭の遺構群は、街路・礎石建物・塀などである。古絵図との対比によって、これらは江戸時代前期の公家町の遺構であることが明らかである。

該当する時期の古絵図として『中むかし公家町之絵図』（1610年代成立、図１）、『寛永十四年洛中絵図』（1637年成立[2]）、『洛中絵図寛永後万治前』（1642年頃成立、巻頭図版）などがある。これらを参考に街路や宅地割、屋敷の主について考える。

街路と宅地割の基本的な構造としては、調査区の西端に南北道路である中筋通、東端には同じく南北方向の二階町通が通る。堀Ｇ1940が埋没した後、堀の東肩を利用するかたちで背割溝Ｈ270が通り、これによって宅地群が東西２列に分けられている。後に溝Ｈ270は石組の溝Ｇ918・Ｈ500に造り替えられる。

中筋通の構造は、西側の２箇所の拡張区で明らかになった。それぞれ江戸時代の中筋通の路面と東側溝を検出した。なお、中筋通の幅は、『中むかし公家町之絵図』には「七間二尺」と記載される。

二階町通は路面と西側溝を検出した。石組の西側溝である溝Ｒ150はＪ区とＧ区で検出している。この溝の東約３ｍの位置には、桃山期の堀Ｇ1195Ｂの上半が溝Ｇ1195として継続している。溝Ｇ1195は、溝Ｒ150に先行する二階町通西側溝の可能性がある。しかし、Ｒ区では、溝Ｇ1195は二階町通路面上に検出され、溝Ｒ150に先行する別の西側溝の可能性がある溝が検出されている。東側溝はＱ区の調査では確認していない。二階町通の幅は、『中むかし公家町之絵図』には「二間半」と記載されている。

初めに、中筋通に面する西側宅地群の宅地割について検出した遺構と絵図を対応させて検討してみる。宅地の奥行は、中筋通東側溝Ｆ2035の中心から塀Ｈ914間で、この間の距離は約61mである。『中むかし公家町之絵図』の記載は「三十間」とある[3]。この距離は宅地まわりの施設などの存在を考慮すれば妥当な数値と考えられる。

この西側宅地群では数箇所で、東西方向に並ぶ柱列や布堀溝を検出している。これらの遺構は塀と考えている。北から塀Ｂ1097、塀Ｂ1096、塀Ａ1093、塀Ｈ917、塀Ｆ1740、塀Ｐ266である。これらは屋敷の境界を示す施設と考える事ができる。

塀Ｂ1097以北が宅地２、塀Ｂ1097から塀Ｂ1096間が宅地３、塀Ｂ1096から塀Ａ1093間が宅地４、塀Ａ1093から塀Ｈ917間が宅地５、塀Ｈ917から塀Ｆ1740間が宅地６、塀Ｆ1740から塀Ｐ266間が宅地７、塀Ｐ266・Ｘ84以南が宅地８となる。それぞれの距離を求めると、宅地３の間口が約30m、宅地４の間口が約28m、宅地５の間口が約36m、宅地６の間口が約34m、宅地７の間口が塀Ｐ266までで約34mとなる。

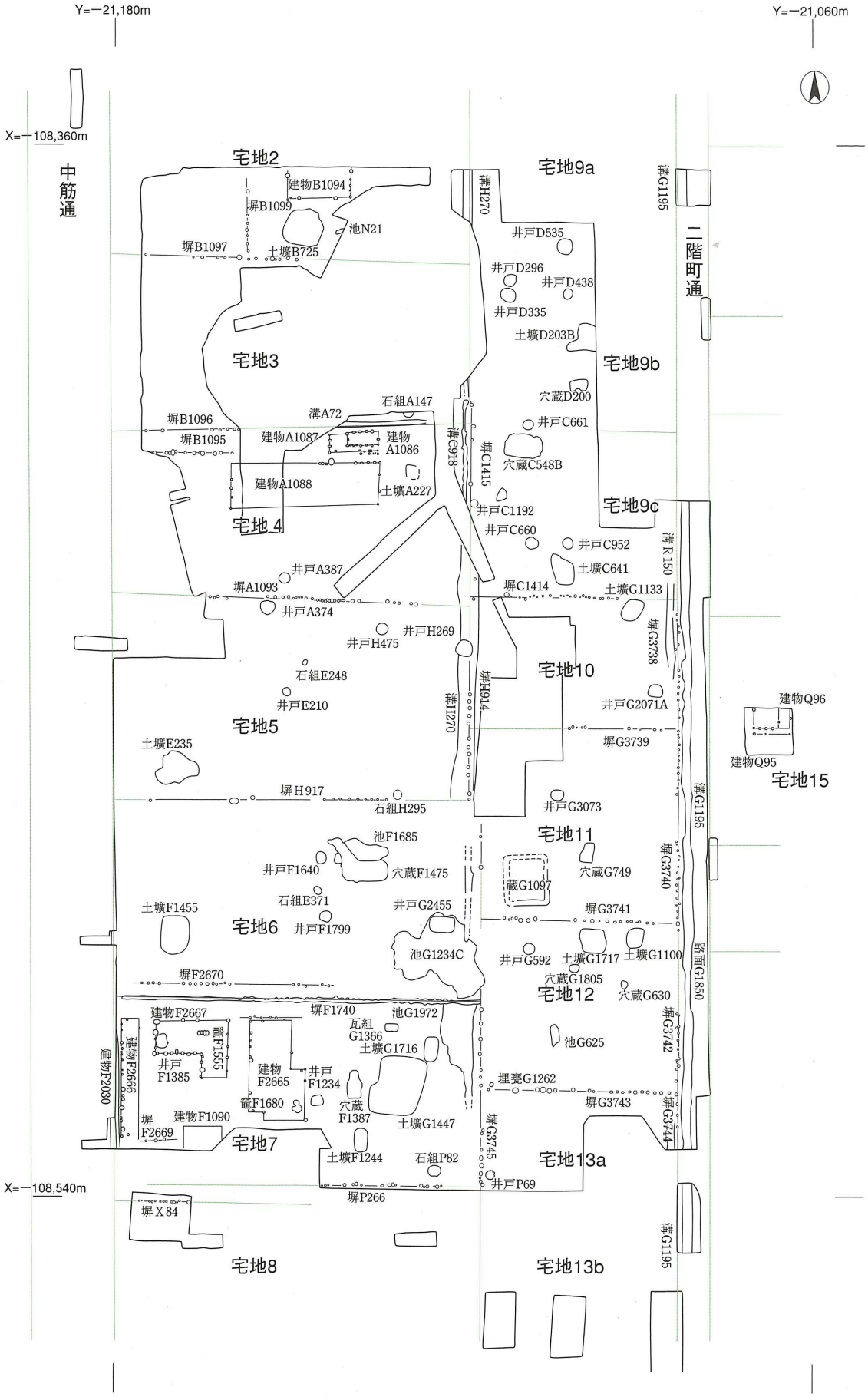


図65　公家町成立期から宝永大火までの遺構概要図

先の３点の絵図には、敷地の南北幅が数値で記載されている。しかもその数値は３絵図ともほぼ等しい。『中むかし公家町之絵図』を例にすると、北から宅地２は18間５尺（約36.3m）、宅地３は15間２尺（約29.8m）、宅地４は14間半（約28.4m）、宅地５は17間（約33.3m）、宅地６は17間半（約34.3m）、宅地７は16間（約31.4m）と記される。これは調査で検出した実際の門口幅と一部でズレはあるがよく一致する。

『中むかし公家町之絵図』の記載によれば、宅地の奥行は宅地10の北辺部分では17間（33.3m）と記される。二階町通西側溝に溝Ｇ1195を想定し、この西側の塀Ｇ3738から背割沿いの塀Ｃ1415の間の距離を測ると、約35mある。また、宅地13の北辺部分では、宅地の奥行は16間（31.4m）と記される。この部分での溝Ｇ1195西側の塀Ｇ3744から背割沿いの溝Ｃ3745との間の距離は、約34mである。これも宅地まわりの施設などを考慮すれば妥当な数値と考えられる。

東側宅地群でも数箇所で東西方向の塀を検出している。北から、塀Ｃ1414、塀Ｇ3739、塀Ｇ3741、塀Ｇ3743である。こちらも西側と同様に塀Ｃ1414以北が宅地９、塀Ｃ1414から塀Ｇ3739間が宅地10、塀Ｇ3739から塀Ｇ3741間が宅地11、塀Ｇ3741から塀Ｇ3743間が宅地12、塀Ｇ3743以南が宅地13となる。それぞれの距離を求めると、宅地10の間口が約22m、宅地11の間口が約33m、宅地12の間口が約29mとなる。

西側と同様に『中むかし公家町之絵図』を例にすると、北から宅地９は47間６尺（93.3m）、宅地10は11間２尺（約22.0m）、宅地11は16間半（約32.3m）、宅地12は15間（約29.4m）と記される。

次に、宅地内の遺構配置について、順に主要遺構を中心に概略を述べる。

宅地２　ここは宅地南半のみの調査である。西に宅地内を区画する機能を持つ南北塀Ｂ1099がある。中央の東西建物Ｂ1094は北側が不明である。建物の南には小規模な池Ｎ21がある。北側の構造は不明である。

宅地３　調査部分は西側のみであった。内部構成はまったく不明である。中央部から東方に建物範囲が想定できる。南東に円形石組Ａ147があり、他には土壙が数基あった。宅地面積はおよそ1,780㎡、約540坪を復元する。

宅地４　礎石建物が良好な状態で残存していた。建物は中央北に東西建物Ａ1086・Ａ1088の２棟が南北に並んで配置され、その間には礫を敷いた通路や溝がある。北西に東西方向の塀Ｂ1095があり、その北側が通路であった可能性がある。中央南端には井戸Ａ387がある。この宅地の背割部分は、素掘の溝Ｈ270から石組の溝Ｈ500に作りかえられている。宅地面積はおよそ1,810㎡、約550坪を復元する。

宅地５　宅地内全域を調査した。井戸や石組遺構、大規模な土壙が多数掘られていたが、建物遺構はまったく検出できなかった。北側に井戸Ａ374があり、北東部に井戸Ｈ475・Ｈ269がある。また中央にも井戸Ｅ210があり、近くには排水施設とみられる円形石組Ｅ248があり、宅地中央から北辺にかけてが台所とみられる。奥の南東隅にも排水関連の円形石組Ｈ295がある。表側には大型のごみ穴土壙Ｅ235が作られた。宅地面積はおよそ2,140㎡、約650坪の広さを復元す

る。

宅地６　宅地内全域を調査した。ここでは建物礎石がわずかに確認できた。宅地内部でも大規模な土壙が多数掘られていたが、中でも穴蔵1475は肩部に階段を付設した地下式の貯蔵庫である。中央に井戸Ｆ1799や井戸Ｆ1640などがあり、この部分が台所であろう。中央北東寄りに粘土貼りの池Ｆ1685がある。南東隅には規模の大きい池Ｇ1234がある。２回の造り替えがあり、次第に規模が小さくなる。この池の範囲は背割溝部分を越えて東側の柳原家にまで広がっている。宅地６と宅地12は、ともに17世紀前半より柳原邸である。池の北側には井戸2455がある。階段が付いた石室の床部分に井戸が造られるもので、半地下式の特殊な構造になっている。宅地の南西に大型のごみ穴の土壙Ｆ1455がある。宅地面積はおよそ2,160㎡、約655坪を復元する。

宅地７　ここでは建物礎石が保存されており、建物Ｆ2665を中心に配置された屋敷の様子が判明した。屋敷表側に面して建物と門が一体化した「長屋門」を配置していた。門をくぐると屋敷正面には前庭となっていたことが遺構の配置から推定できる。建物の東には井戸Ｆ1234や穴蔵Ｆ1387が配される。南東隅には井戸Ｐ82がある。北東隅に礫を敷き詰めた池1972がある。池は浅く緩やかに蛇行している。西側には大型の土壙Ｇ1716があり、17世紀前半から後半の土師器が多量に投棄されている。宅地面積はおよそ2,020㎡、約610坪を復元する。

宅地９　この宅地は絵図によると間口が広く、奥行が少ない構造になっている。北と東を除く部分を調査した。東側には粘土層が広がっていたため、土取穴が多く掘られ、遺構の残りは良くなかった。井戸は主に西側にあり、北側にＤ335、中央にＣ661、南側にはＣ661・Ｃ1192などがある。建物遺構は検出できなかったが、穴蔵Ｃ548Ｂ・穴蔵Ｄ200の様な地下収蔵施設が西側に作られている。絵図によるとこの宅地は延宝火災後に３分割されている。北側の井戸Ｄ296は宅地19ｂの時期にあたる。南側の井戸Ｃ1192や南端のごみ穴土壙Ｃ614は宅地19ｃの時期にあたる。

宅地10　主に東半分の調査である。この宅地では建物遺構は検出できなかったが、表側となる東端に井戸Ｇ2071がある。表側に井戸のある例は少ない。宅地面積はおよそ820㎡、約250坪を復元する。

宅地11　北西隅以外のほとんどの部分を調査した。宅地内の奥には井戸Ｃ3073がある。南西隅には土蔵Ｇ1097があるが、他の建物遺構は検出できなかった。中央部にある穴蔵Ｇ749からは17世紀後半の火災による廃棄遺物が一括出土している。宅地面積はおよそ1,155㎡、約350坪の広さである。

宅地12　全域を調査した。中央北側に穴蔵Ｇ630・Ｇ1805など小規模の収蔵施設がある。北西の奥に井戸Ｇ592があり、南西の奥側には小規模な池Ｇ625がある。北西部には東側宅地の池Ｇ1234が入り込んでいる。東側宅地も「柳原家」と考えられるため、池を共用している可能性がある。南西隅には瓦質甕を便槽に据えた便所である埋甕Ｇ1262がある。北の宅地境には土壙Ｇ1717・Ｇ1100の廃棄土壙がある。宅地面積はおよそ985㎡、約300坪の広さである。

宅地13　北の一部のみの調査である。奥の塀Ｇ3745の近くに井戸Ｐ69がある。井戸Ｐ69は、

宝永大火時に埋まっており、宅地13ａ時代の遺構である。建物遺構はさらに南に展開するとみられる。

宅地15　二階町通の東側に位置する。宅地の西半部に東西方向の礎石建物Ｑ１・Ｑ２がある。建物の北側や他の施設は不明である。

Ｃ　宝永大火後から天明大火までの様相

絵図によれば宝永大火後には、街路と宅地割に大きな変化が読みとれる。それは中筋通は江戸時代前期と同じ位置にあるが、西側に新しく二階町通が付け替えられたことである。この中期以降の街路を「新二階町通」と呼ぶ。屋敷は中筋通と新二階町通間が１列になる。新二階町通と梨木通間の宅地は２列に分けられる部分が多い。

調査で検出した遺構も同様の状況を示した。前期の背割溝の位置とほぼ同様の位置に新二階町通の西側溝Ｇ862を検出した。中筋通側宅地を維持するかたちで、その東側に新二階町通がおかれたものであろう。前期の西側溝の位置からは約35m西に移っている。新二階町通には両側に石組の側溝が付属する。溝心々間の幅は約17mとなり、前期の約３倍に拡がっている[4)]。北端はＤ区で南端はＺ区までの検出長は約200mである。新二階町通の西半には、廃棄土壙Ｇ593・Ｇ245などがある。東半には、廃棄土壙はなく、しっかりとした路面が残る。道路としては、主に東半が利用されたものであろう。道路を拡幅しているのは、火災による延焼を極力防ぐためと考えられる。二階町通は３分の１程度の道路幅で交通量が十分まかなえたとみられ、火除地としての機能を持ち併せていたと考えられる。

中筋通に面する西側宅地の奥行は、新二階町通の西側溝が前期背割溝とほぼ同位置のため変化が少ない。中筋通東側溝Ｆ1392から新二階町通西側溝Ｇ862間で、この距離は約64mである。この間では４箇所で東西方向の塀を検出している。北から溝Ｂ678Ｂ、溝Ａ７、塀Ｆ2668、塀Ｘ14である。溝Ｂ678Ｂ以北が宅地２、溝Ｂ678Ｂから溝Ａ７間が宅地３・４、溝Ａ７から塀Ｆ2670間が宅地５・６、塀Ｆ2670から塀Ｘ14間が宅地７、塀Ｘ14以南が宅地８となる。当時の状況を描く絵図は数種類あり、家主は判明するが、宅地の間口間数は記されていない。『増補再板京大絵図乾』（1741年作成、図３）によると、宅地２が「富小路家」、宅地３・４が「園家」、宅地５・６が「柳原家」、宅地７が「櫛笥家」、宅地８が「甘露寺家」となる。

新二階町通の東側では、残念ながら宅地の東側半分が調査区外となるが、ここでは５箇所で東西方向の塀や溝を検出している。北から、塀Ｃ1412Ｂ、溝Ｃ135Ｂ、溝Ｇ535Ｂ、塀Ｇ3746、塀Ｇ3747である。溝Ｃ135Ｂ・溝Ｇ535Ｂ間は東西道路である。ここでは塀Ｃ1412Ｂ以北が宅地20、溝Ｇ535Ｂから塀Ｇ3746間が宅地21、塀Ｇ3746から塀Ｇ3747間が宅地22、塀Ｆ2670以南が宅地23となる。宅地21が「梅園家」、宅地23が「今城家」で、他の宅地は絵図によって様々な家主が記される。東西道路は「切通し」と記される。

次に宅地内の遺構配置について、宅地ごとに主要遺構について述べる。

宅地２　北半は調査区外である。宅地南端の溝Ｂ678Ｂは江戸時代前期の境界と同位置である。南端に石列Ｎ３がある。緩やかに曲がる配置がなされるため庭に関係するとみられる。宅地の

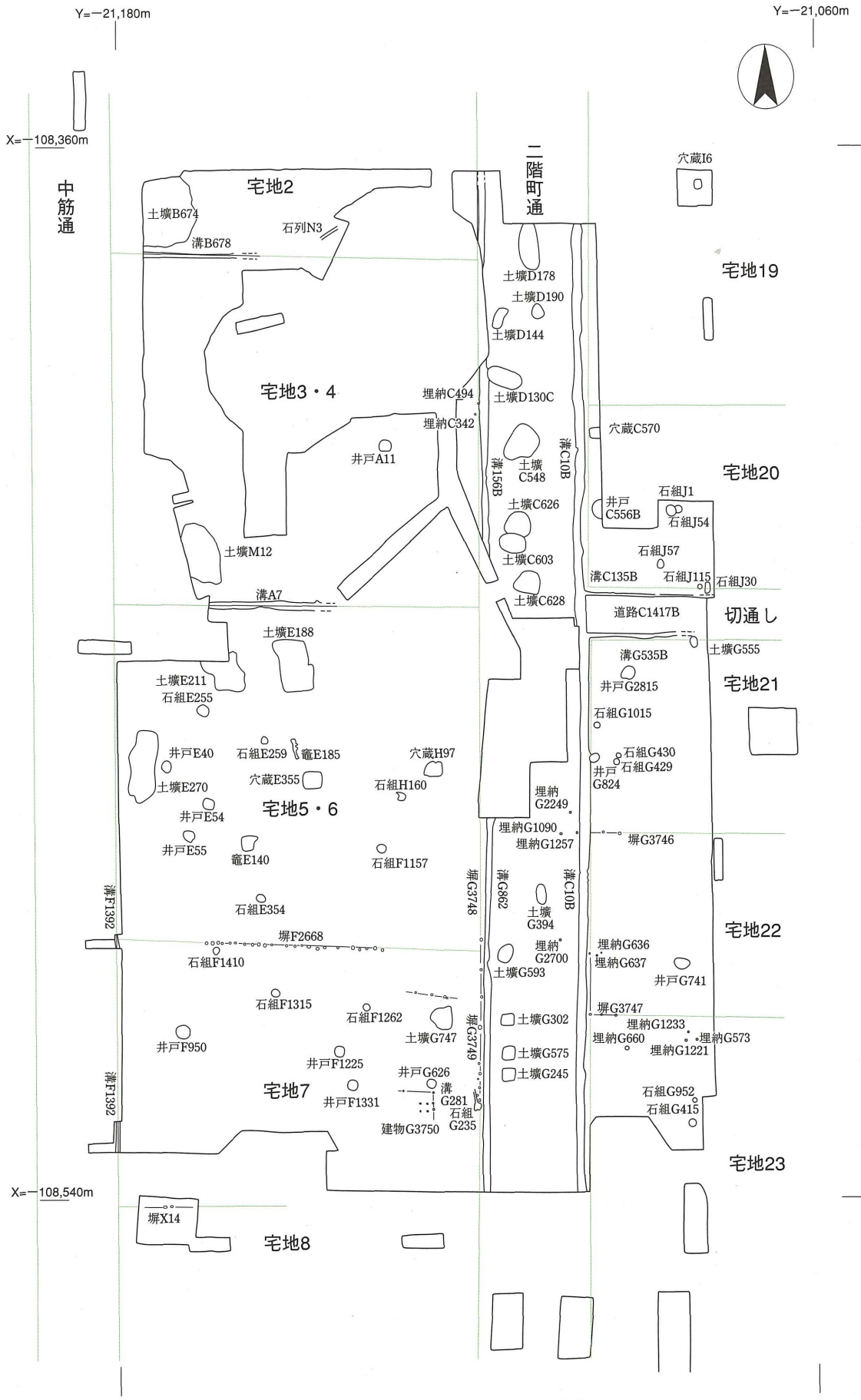


図66　宝永大火後から天明大火以前の遺構概要図

南西隅には大規模なごみ穴土壙Ｂ674がある。

宅地３・４　北東部は調査区外である。江戸時代前期にあった北側の宅地３の敷地を取り込んだために宅地の間口が２倍以上になった。南端の溝Ａ７は、江戸時代前期の境界と同位置である。中央東寄りに井戸Ａ11がある。東端には胞衣壷埋納土壙Ｃ342・Ｃ494がある。南西隅には大規模なごみ穴土壙M12がある。間口が約60mとなる。宅地面積はおよそ3,810㎡、約1,155坪を復元する。

宅地５・６　ほぼ全域を調査した。江戸時代前期にあった北側の宅地５の敷地を取り込んだため宅地の間口がほぼ２倍になった。南端の塀Ｆ2668は江戸時代前期の境界より約２m北側に移動している。中央部に竈Ｅ140・Ｅ185があり、この位置に台所を含む建物が想定できる。周囲には穴蔵Ｅ355や石組土壙Ｅ259などの収蔵施設に加え、３基の井戸がある。奥には石組Ｈ160・Ｆ1157などの小規模な収蔵施設の他に、大型の穴蔵Ｈ97など収蔵施設が配置される。宅地北西部から西辺には大規模なごみ穴土壙Ｅ211・Ｅ260が作られた。なお、宅地の中央西寄りで、密教法具である賢瓶が埋納された状態で出土した。間口が約57mとなる。宅地面積はおよそ3,590㎡、約1,090坪を復元する。

宅地７　南西部は調査区外である。西側に井戸Ｆ950があり、北部には石組Ｆ1315・石組Ｆ1262などの小規模な収蔵施設がある。中央やや東寄りに井戸Ｆ1225・Ｆ1331が配置される。斜め方向の石組溝Ｆ1250は南東側で深い枡につながる。奥に礎石建物Ｇ3570があるが、南と東側は不明である。建物のすぐ北に井戸Ｇ626がある。間口が約46mとなる。宅地面積はおよそ2,875㎡、約870坪を復元する。

宅地19　西端と北の一部のみの調査となった。絵図では二階町通に面して西側に門が描かれている[5)]。遺構は不明である。宅地の北部に穴蔵Ｉ６がある。南の宅地20との境の施設は確認できなかったがX=－108,407m付近を想定しておく。

宅地20　西側のみの調査である。絵図では切通しに面して南側に門が描かれており、石組Ｊ30が門に関係する遺構と考えられる。門を入って西側の部分には石組Ｊ１・Ｊ54などの小規模な収蔵施設や便所とみられる石組土壙Ｊ57がある。北西隅に穴蔵Ｃ570があり、西辺には井戸Ｃ556Ｂが配置される。奥行は約28mとみられる。

切通し　東西方向の路面Ｃ1417Ｂである。側溝は溝Ｃ135Ｂ・溝Ｇ535Ｂで、溝心々間の幅は約7.5mである。絵図によれば新二階町通から梨木町通につながる道路である。

宅地21　西半を調査した。絵図では北側に門が描かれている。側溝が瓦で護岸される部分が暗渠の構造とみられ、この部分が門の位置に当たると考えられる。宅地の西端には井戸Ｇ2815・Ｇ824、石組土壙Ｇ430・Ｇ1050などの排水施設などが集中しており、この位置に台所を含む建物が想定される。奥行が約34mとなる。

宅地22　西半を調査した。絵図では西側に門が描かれているが遺構は不明である。西端の中央に近い位置に胞衣壷埋納土壙Ｇ636・Ｇ637が並ぶ。井戸Ｇ741がある位置は宅地のやや南寄りである。ここでは間口が約31mとなる。この宅地は、江戸時代中期を通じて２～３の宅地に分

割されることが、複数の絵図から読みとれる。しかし、その過程を遺構から復元することはできなかった。

宅地23　北西と南端の一部を調査した。南半部の記載で触れるが、石列Ｒ297はこの宅地の南の境の施設である。北端に胞衣壷埋納土壙Ｇ573・Ｇ660・Ｇ1221・Ｇ1233が４基集中している。中央に石組Ｇ415・Ｇ952などの小規模な排水施設があり、この付近に台所が想定できる。絵図では西側に門が描かれている。

Ｄ　天明大火後の様相

検出した遺構から復元できる街路と宅地割の基本的な構造は、江戸時代中期と同様であり、天明大火以後に描かれた絵図の内容ともほぼ符合する。

江戸時代中期と同じ位置に新二階町通があり、両脇には石組の側溝が付属する。南側では道路を斜め方向に横断する石組暗渠Ｐ８も確認している。絵図によれば、この道に表門を設けるのは東側宅地のみで、宅地19、宅地22が門を設けている[6)]。調査では、新二階町通の西半にあたる部分では廃棄土壙が多く作られ、路面の状態をなしていない。道路は東端３分の１が道路面として整備され使われていたと思われる。中筋通も江戸時代中期から変更が無く、同じ位置にあることが確認できた。

中筋通に面する西側宅地の奥行は、中筋通東側溝Ｆ1392から新二階町通西側溝Ｃ156間で、江戸時代中期と同様で約64mである。屋敷を南北に分ける境界施設は３箇所あり、北から塀Ｄ637、溝Ａ７、漆喰溝Ｆ970である。塀Ｄ637以北が宅地２、塀Ｄ637から溝Ａ７間が宅地３・４、溝Ａ７から漆喰溝Ｆ970間が宅地５・６、漆喰溝Ｆ970以南が宅地７となる。また、Ｘ区の遺構配置状況から宅地７と宅地８の境界は中期と同様の位置にあるとみられる。絵図記載の家主は中期から継続しているため、宅地２が「富小路家」、宅地３・４が「園家」、宅地５・６が「柳原家」、宅地７が「櫛笥家」、宅地８が「甘露寺家」である。

新二階町通の東側では数箇所で東西方向の塀や溝を検出している。北から、塀Ｃ1410、塀Ｃ1412、溝Ｃ135、溝Ｇ535、集石Ｇ370、石列Ｇ485である。塀Ｃ1410以北を宅地19、塀Ｃ1410から塀Ｃ1412間を宅地20、溝Ｃ135・溝Ｇ535間は東西道路、溝Ｇ535から集石Ｇ370間を宅地21、集石Ｇ370から石列Ｇ485を宅地22、石列Ｇ485以南が宅地23となる。宅地21が「梅園家」、宅地23が「今城家」の屋敷で、宅地22は判読できない絵図もあるが、「聖護院里坊」であったようである。宅地20は絵図によって、様々な家主が記されている。

次に推定した宅地内の遺構配置について、宅地ごとに主要遺構について述べる。

宅地２　北半は調査区外である。建物遺構が検出されておらず不明である。

宅地３・４　建物遺構が検出されておらず不明な部分が多い。中央西寄りに井戸Ｂ620、中央東寄りに井戸Ａ28・Ａ１がある。井戸の周囲には石組土壙Ａ６が配置される。南東部に井戸Ａ159、南端には石組土壙Ｈ５がある。宅地の東端には二階町通西側溝Ｃ156からの水取溝Ｃ113があり、取り入れた水は瓦組Ｃ153に溜まる。西側の各所に大規模な土壙Ａ1101などのごみ穴が掘られる。なお、土壙Ｂ1103は天明大火時の瓦廃棄土壙である。間口が約60mとなる。宅地面積

はおよそ3,685㎡、約1,115坪の広さである。

宅地５・６　宅地の南西に能舞台Ｅ2664がある。能舞台の南には池Ｅ25があり、池への導水路溝Ｅ35は北西から蛇行して池に達する。能舞台の存在は、この宅地の特徴である。宅地の東側には、井戸や石組の貯蔵施設、蔵、排水用の溝、便所などが作られていた。いずれも宅地の奥側にあたるため、実生活に密着した遺構が集中する空間と思われる。池Ｆ1200は池Ｅ25と連続しており中島が作られる。さらに東奥には漆喰造りの池Ｇ364・Ｇ250が配置され、奥の中寄りには小規模の池Ｇ253がある。北端にも小規模な池Ａ57や土壙Ｅ１が作られる。北西には大きなごみ穴土壙Ｅ165がある。ここの間口は約58mとなる。宅地面積はおよそ3,715㎡、約1,125坪を復元する。

宅地７　ここでは井戸や石組の貯蔵施設、ごみ処理の土壙を検出したが、この時期の建物配置は明らかにできなかった。北側に井戸Ｆ961など３基が並んである。中央にも井戸Ｆ1235などがある。北東には埋甕Ｇ258・Ｇ240の便槽がある。東端には漆喰の貯水槽Ｇ200があり、新二階町通西側溝につながる排水溝が数箇所にある。この宅地部分の新二階町通西側溝を構成する石材は他の部分に比べかなり大型である。奥の北隅には東西棟の礎石建物Ｇ572があるが全体の構造は不明である。

宅地19　北側には、南北方向の雨落溝Ｉ１があることから南北棟の建物が西側にあるとみられる。西側の道路に面する塀Ｃ1409を検出した。南端は東西の塀Ｃ1410である。絵図では西側に門が描かれるが関係する遺構は不明である。ほとんどが調査区外である。

宅地20　ここでは塀Ｃ1411の下を瓦組の溝Ｃ35が通る。宅地内から側溝への排水溝である。南側には小規模な収納施設の石組土壙Ｊ５がある。絵図では南側の切通しに面して門が描かれているが、関係する遺構は不明である。奥行が約27mとなる。

切通し　東側の梨木町通へ続く東西方向の路面Ｃ1417である。北側溝Ｃ135と南側溝Ｇ535があり、溝心々間幅は約7.5mである。

宅地21　絵図では東側の梨木町通に面して門が描かれており、宅地の奥側を調査したものとみられる。宅地の西側に石組土壙Ｇ500がある。二階町通側溝に流れる排水溝が確認できた。この宅地部分の新二階町通の東側溝には底部に石が敷かれている。帯状集石370は南境界施設の基礎部分である。宅地の南北幅は約37mとなる。

宅地22　宅地の北西部に石組土壙Ｇ392がある。この宅地では北端に石組の溝Ｇ77と円形石組土壙Ｇ393がある。この施設は宅地内に水を引き込み、石組Ｇ393に溜める構造である。間口が約19mとなる。絵図では西側に門が描かれているが、関係する遺構は不明である。

宅地23　ここでは北側に小規模な漆喰張りの池Ｇ460がある。この宅地も北側に漆喰の溝Ｇ４と石組土壙Ｇ277がある。この施設は宅地内から水を排出する構造である。南には井戸Ｇ420があり、近接して埋甕Ｇ439がある。溝Ｇ590も宅地内から排水する構造である。南には埋甕Ｇ387があり、ここに便所が想定できる。絵図からは東側に門があると思われる。

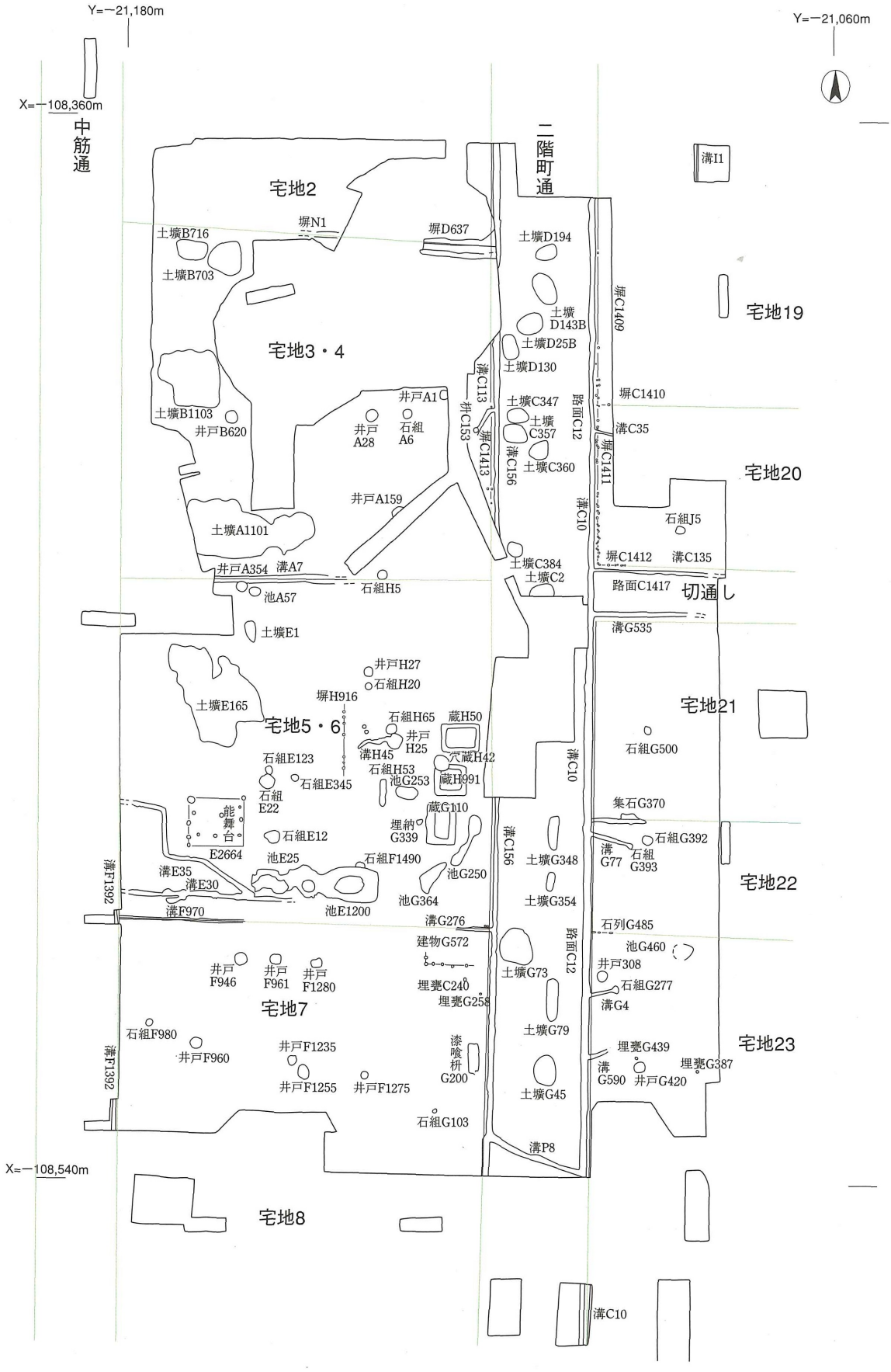


図67　天明大火後の遺構概要図

2　南半部

A　公家町成立期から宝永大火までの様相

R区では調査区全体に江戸時代前期の二階町通の西側溝と路面を検出した。しかし、南半部で確認した二階町通西側溝と路面の状況は、北半部で得られた所見と整合しない部分があった。調査者は、それぞれの事実を総合し、議論を重ねて、統一的な見解を示すことに努めたが、それに至らなかった。以下にまず、二階町通とその西側溝の解釈をめぐる二つの見解を明記し、後考を待つものである。北半部から南半部に連続する石組の溝R150が17世紀中頃に作られた二階町通西側溝であり、それより東側に17世紀中頃以降の二階町通の路面が広がること、この石組側溝と路面が改修を経つつ宝永大火まで存続すること、の2点は調査者が共有する見解である。

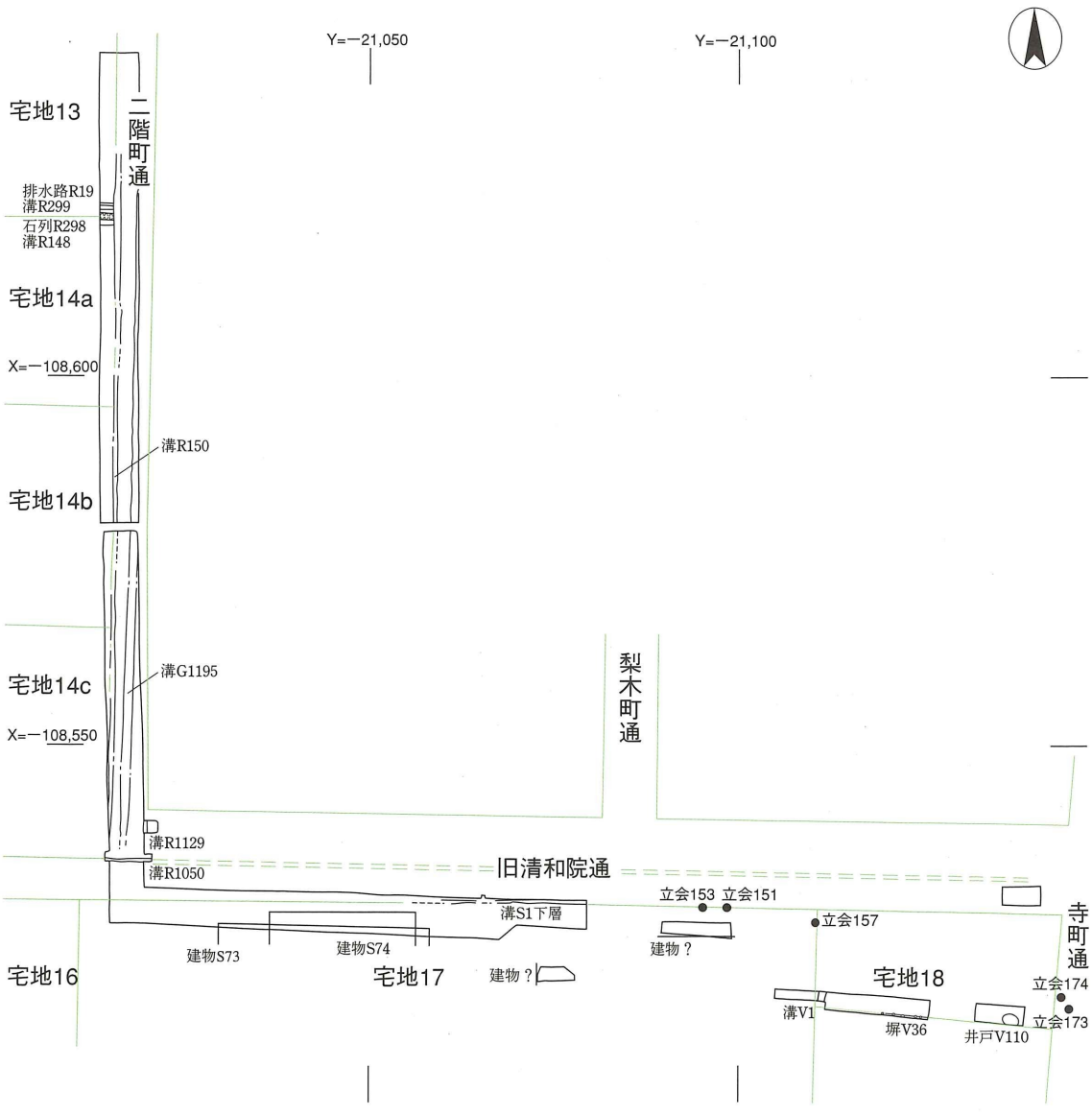


図68　公家町成立期から宝永大火までの遺構概要図（南半）

北半部では、この石組側溝Ｒ150より約３m東に検出された溝Ｇ1195を溝Ｒ150に先行する17世紀前半の二階町通西側溝とみなした。その根拠の第１は、二階町通路面の小礫敷が２面検出され、上層の路面が溝Ｇ1195の埋土を覆って溝Ｒ150の東肩口まで達するのに対し、下層の路面が溝Ｇ1195の東側にのみ検出されることである。第２は、溝Ｇ1195の西肩部に掘立柱の塀Ｇ3740、塀Ｇ3742などが検出され、これが宅地の塀を形成するものと考えられたことである。溝Ｇ1195の埋没年代は、出土土器・陶磁器類から17世紀中頃である。このことから、17世紀中頃に旧側溝である溝Ｇ1195が埋められ、新側溝である溝Ｒ150が新たに設けられたと解釈したのである。北半部のデータで見る限り、以上の解釈は合理的である。

南半部では、溝Ｒ150とほぼ同じ位置の下層に石組をもたない溝Ｒ241を検出し、これを溝Ｒ150に先行する17世紀前半の二階町通西側溝とみなした。その根拠の第１は、この溝の西側に併行して塀Ｒ243と塀Ｒ1130が検出され、これが宅地の塀を形成するものと考えられたことである。第２は、溝Ｇ1195の埋土が路面の小礫敷で覆われる点は北半部と同じであるが、溝Ｇ1195の検出面及びその下層においても溝の両側に路面の小礫敷があり、これが溝Ｒ241の東肩部まで達する点である。以上から、溝Ｒ241が17世紀前半の二階町通西側溝であり、公家町成立当初から宝永大火に至るまで、二階町通は同じ場所に変更されることなく維持されたとみなした。北半部で17世紀前半の二階町通西側溝とみなした溝Ｇ1195は、何らかの機能を期待され路面中央に穿たれた溝と解釈したのである。南半部で得られた情報は、北半部での17世紀前半の二階町通の位置の解釈とは、異なる見解を導いたのである。以下、南半部の調査成果をまとめるにあたって、南半部での見解にしたがって、記載することとする。なお、他の街路と宅地割部分の復元については、統一的な見解に達している。

17世紀前半の二階町通西側溝の可能性がある溝Ｒ241は、素掘もしくは木材で護岸したものであるが、17世紀の中頃から後半にかけて石組の溝Ｒ150に変わる。17世紀前半の宅地と街路の境界施設の可能性がある塀Ｒ243と塀Ｒ1130は、側溝が石組に変わる17世紀中頃から後半にはなくなる。溝Ｒ150の宅地側の石組は大きな切石をしっかりと組合わせた堅固なものであることから、17世紀中頃以降の宅地と街路の境界施設は長屋建物に変化するものと考える。Ｒ区の南端では二階町通の東側溝Ｒ1129を検出しており、これによって同道路の道幅が明らかになった。両側溝間の距離は約4.5m、側溝の幅を含めると約５mとなり、「中むかし公家町之絵図」に記された二階町通の道幅「二間半」にほぼ合致する。

17世紀中頃までの二階町通西側の宅地割を知る材料は得ていない。しかし、17世紀後半の宅地境界施設である石列Ｒ298は「中むかし公家町之絵図」の宅地13と宅地14の境界に合致する。この遺構は17世紀後半の遺構であるので、実際には宅地13ｂと宅地14ａとの境界ということになる。「新改内裏之図　御紋入」（延宝５年刊）によれば、宅地13ｂは「菊亭内亢」邸、宅地14ａは「薮」邸である。宅地14ａと宅地14ｂ、宅地14ｂと宅地14ｃの境界施設を検出していないが、溝Ｒ150の石組手法の違いから、前者をＸ＝－108,604m付近、後者をＸ＝－108,634m付近に想定する。「新改内裏之図　御紋入」によれば、宅地14ｂは「葉室」邸、宅地14は「速水右京」

邸である。

S区では、東西道路の南側溝S１下層と宅地17の北辺を検出している。溝S１下層の北側には、路面があるが、これを江戸時代中・後期の「清和院通」の前身とみなし、「旧清和院通」と呼称した。また、宅地17の東境界である溝V１を検出している。溝R1050は清和院通の北側溝のようにみえるが、これには少し説明が必要である。『寛永十四年洛中絵図』、『洛中絵図　寛永後、万治前』、『新改内裏之図　御紋入』を参照すると二階町通より西部で旧清和院通北側溝となる溝が、二階町通より東では旧清和院通の道幅が北へ拡張しているにもかかわらず、道路内を直線的に東に延びている様子が描かれている。溝R1050はこの道路内排水路状の溝であると考える。また、溝R1050を旧清和院通北側溝と考えると旧清和院通の道幅は５m程度のものとなるが、「中むかし公家町之絵図」では、宅地17に隣接する部分の旧清和院通の道幅は「六間」とされている。清和院通の路面は溝R1050を越えて北に広がっていたのであろう。このことを確認するために、R区南端付近で東に一部調査区を拡張したところ、二階町通東側溝の東側に路面の小礫敷の広がりを確認することができた。また、W区でも江戸時代前期の路面を確認しており、上記の推定を裏付けることができた。

宅地17　宅地17の北辺部の状況は、17世紀前半段階では明確な遺構を検出できず不明である。17世紀中頃から宝永大火までの間には、継続して建物礎石が分布する状況を確認できた。この建物は、一部で土間が残り、４連の便所遺構が検出されていることから、雑舎などの機能をもつ長屋建物であると考える。宅地内の遺構は、これ以外にT区、U区、V区で検出しているが、全体の構造を復元するまでには至っていない。なお、以上のような位置に宅地17が存在する事実によって、江戸時代前期の仙洞御所（『中むかし公家町之絵図』では「高台院」邸）の北辺は、現在よりもかなり南に下がった位置にあったことが明らかである。

宅地18　V区では、17世紀中頃以降の宅地境の掘立柱の塀跡と井戸、宅地奥のごみ穴などを検出している。これらは典型的な町家の遺構配置である。宅地18は、『中むかし公家町之絵図』と『寛永十四年洛中絵図』では空地で、『洛中絵図　寛永後万治前』では「町家」と表記され、『新改内裏之図　御紋入』には北部に「小野門跡」邸が記されている。V区で検出した遺構は、「町家」とされた時期の遺構であろう。

B　宝永大火後の様相

宝永大火後の区画整理で二階町通が西に大きく移動するため、江戸時代中期以降のR区から道路遺構は姿を消す。R区にはこれに代わって宅地内の遺構群が検出されている。R区の北端部で検出した溝R88と石列R297は宅地境の遺構である。これより北が宅地23、これより南が宅地24である。宅地23は宝永大火以降明治初年まで「今城」邸、宅地24は宝永大火以降明治初年まで「三条転法輪」邸である。宅地24の南に宅地25が存在するはずであるが、明確な宅地境の遺構を検出していない。しかし、X＝－108,580m付近を境にして北と南で遺構分布に差異を認める。この地点より北側には天明大火期の廃棄土壙や生活ごみ穴が多数検出されているのに対し、南側にはこうした遺構の分布は希薄で、石組土壙や井戸あるいは池などが分布する。また、

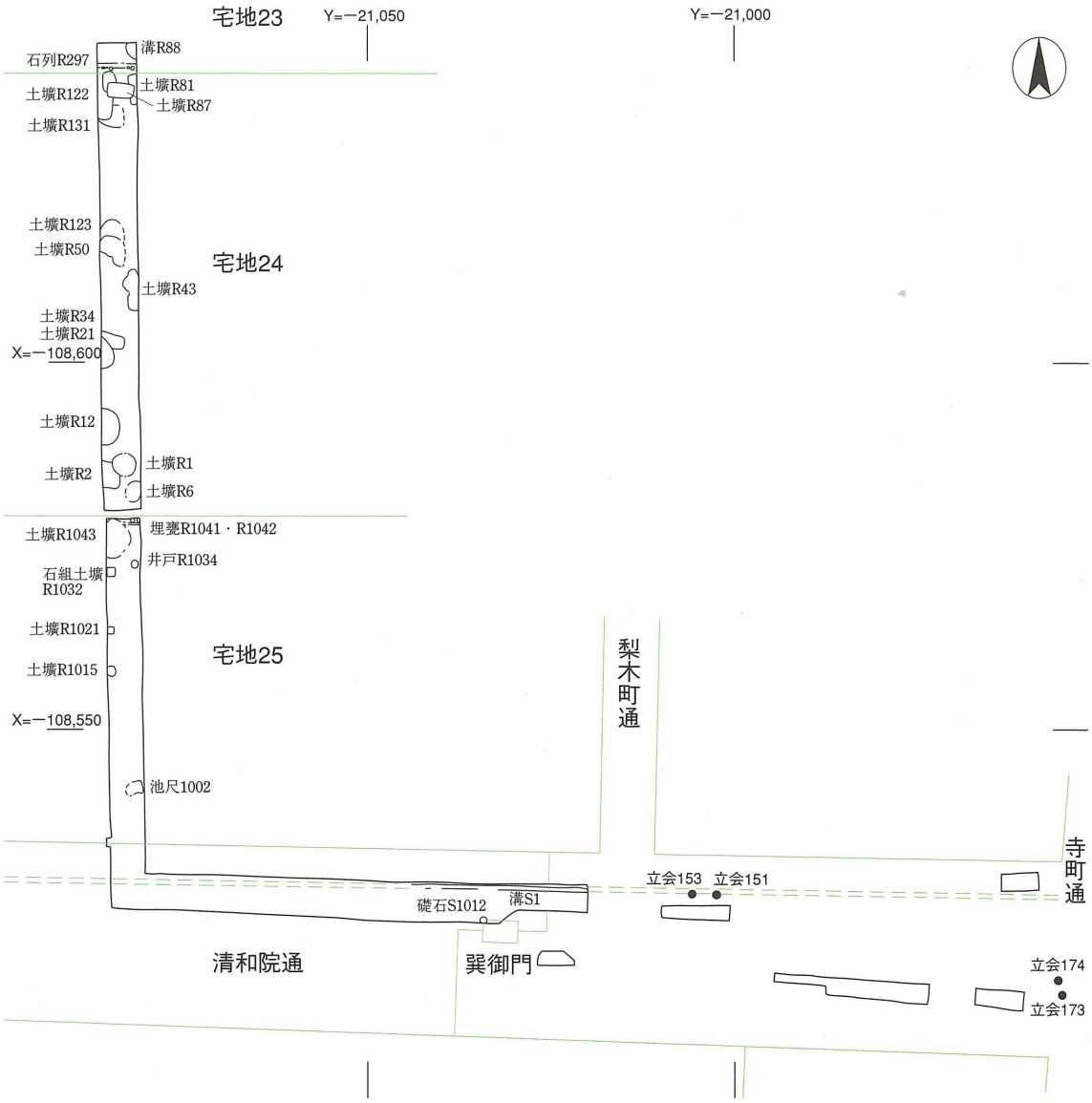


図69　宝永大火後の遺構概要図（南半）

後節で述べるように、三条転法輪家の家紋「結雁」を有する軒桟瓦が石列Ｒ297とＸ＝－108,580mラインの間のみから出土する。以上から宅地24と宅地25の境界はＸ＝－108,580m付近と考えて大過ない。宅地25は宝永大火以降明治初年まで「葉室」邸である。

江戸時代中期以降のＳ区、Ｔ区、Ｕ区、Ｖ区、Ｗ区では、全体に路面が検出されている。宝永大火以降、宅地17、宅地18を含むこの地域が清和院通内に取り込まれたことを示すものである。しかし、江戸時代前期の旧清和院通南側溝である溝Ｓ１下層は、新たに加工されて同様の位置に維持される。これが溝Ｓ１である。これは、立会151、立会153でも確認されている。また、この溝より北側にあたるＷ区では宝永大火以降明治期に至る路面が検出されており、清和院通が溝Ｓ１の北側にも広がることが明らかである。宝永大火以降の清和院通の北辺を知る資料を欠くが、江戸時代前期の溝Ｒ1050上に維持されたものと想像しておく。溝Ｓ１は清和院通上の北寄りを東西に延び、排水路の機能を果たしていたものと考える。また、礎石1012は、宝

永大火直後に設けられた巽御門（のち清和院御門）の礎石であることは明らかである。古絵図によれば、江戸時代後期の巽御門は二階町通の西側に存在していたようだが、今回の調査で、18世紀前半から中頃にかけては、二階町通の東側で梨木町通近くに存在したことが明らかになった。対になる礎石を検出できなかったため、門の規模や構造は不明であるが、後代の絵図を参考にして街路と平行する方向で復元した。

なお、復元図の仙洞御所北辺は、現在の仙洞御所北辺側溝を図上に落とし込んだものである。また、現寺町通上で行った立会173、立会174の成果により、江戸時代の寺町通は、ほぼ現行位置に維持されていたことを確認している。

第２節　饗宴殿について

Ｅ区・Ｆ区ではコンクリート製の独立基礎とそれらをつなぐ梁を検出した。これは昭和３年（1928）に行なわれた昭和天皇の即位大礼（「昭和の御大典」ともいう）の時に建てられた仮設の建物、饗宴殿の遺構である。即位式後に実施された大饗の舞台となった建物であり、この運動広場が「饗宴場跡広場」と呼ばれる由来の建物でもある[7]（図70）。

調査ではコンクリート製の基礎とそれをつなぐ梁を検出した。建物基礎は東面・北面・南面の三面を検出したことで、建物東面の規模が確定した。身舎部分は19間あり、四面に庇がつく。柱間は3.6mの等間である。建物方位は北で東に１度58分振れている。身舎の両端から５間内側には、それぞれ内側方向へ延びる基礎列がある。この部分の柱間は、５間を３間で割るため、広くなっている[8]。

コンクリート基礎はすべて独立しており、方形の掘形底に据え付けられている。基礎は一辺１m前後の台形で、高さは1.0～1.5mまで残存する。本来は上に梁が接合されていたが、解体時にすべて取り外され、付近に横倒しの状態で廃棄されていた。上部の梁が部分的に残された破片もある（図72－４）。これらの基礎は、すべて現地に下半部が据わった状態で検出しており、調査ではそれらを重機で排除したが、壁付近のものは現地に留めた（図72－１）。

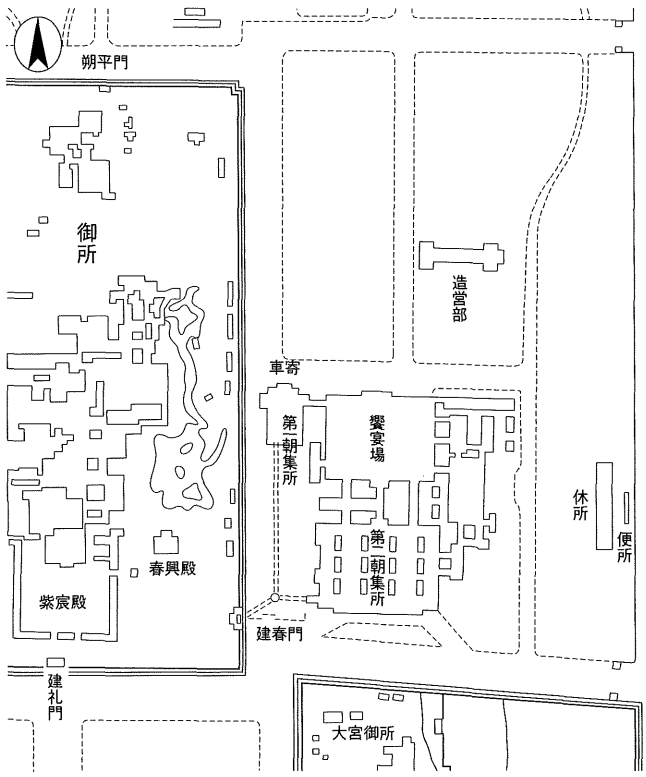


図70　昭和大礼での饗宴殿の位置（註７掲載図を参考）

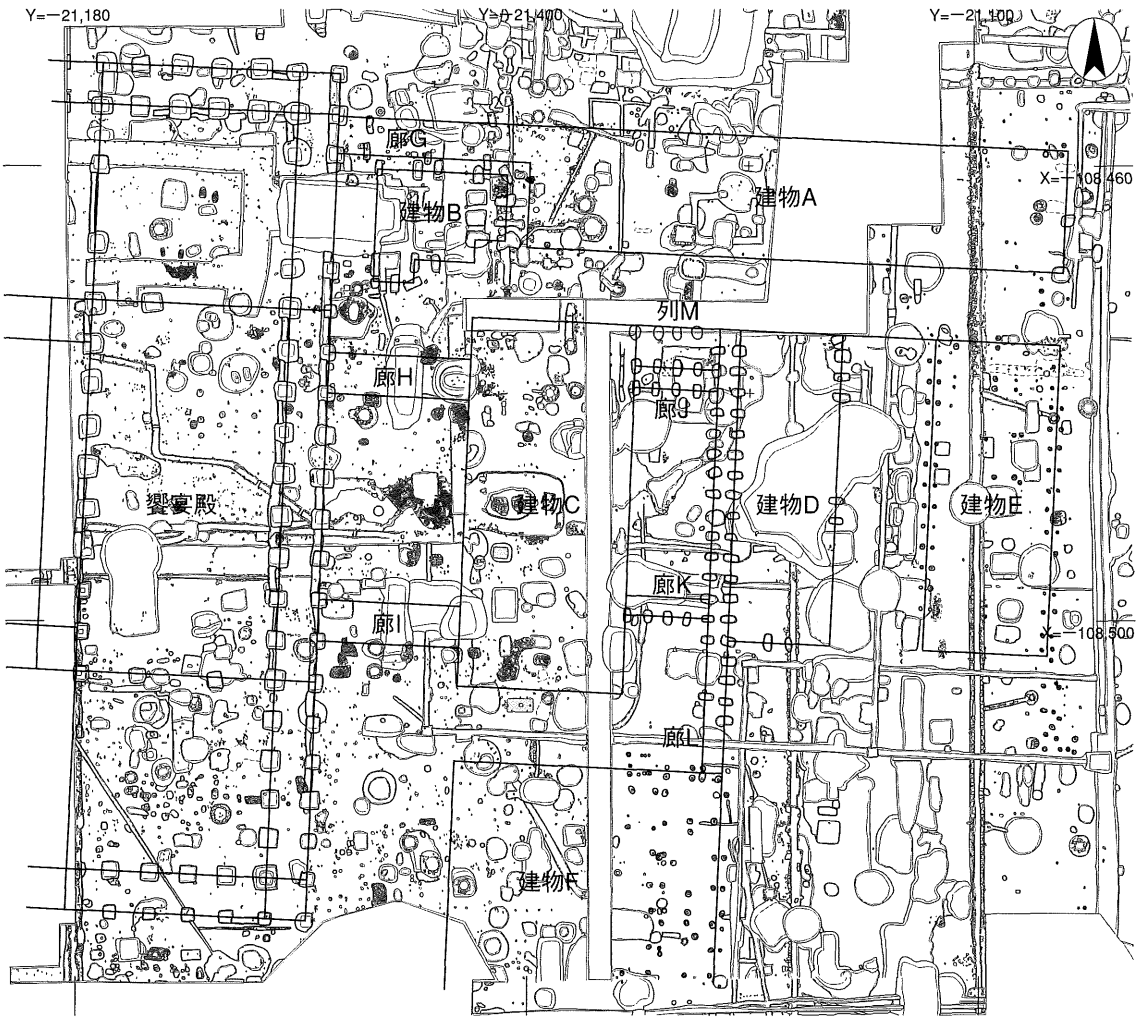


図71　饗宴殿とその東側の建物配置　（註９掲載図を参考に作成）

また調査では、饗宴殿の東側に展開していた建物の遺構も検出している。『別冊歴史読本　図説天皇の即位礼と大嘗祭』[9]に掲載された図をそれらに重ねると、大方は掲載図と一致することが判明した（図71）。検出した遺構は建物数棟分とそれらをつなぐ廊である。以下、建物Ａ～Ｅ、廊Ｇ～Ｌと仮称して記述を進める。なお掲載図によれば、建物Ａは「椅子置場」、Ｃは「付立所」、Ｆは「調理場」と表記されている。

建物ＢはＥ区、Ｈ区にまたがり検出したもので、饗宴殿北東部にあり、南東部が隅欠きする建物に該当する。長方形の掘形をもつ土壙が建物の基礎であり、掘形は建物柱筋に直交する方向に掘られている。北東、並びに南東隅の掘形は、斜め方向に掘られている点が注意を引く。Ｇ区西半部には長方形の掘形が南北に18間連続する箇所がある。これを建物Ｄの西面、並びに建物Ｄから南へ延びる廊Ｌに復元した。またこれと直交し、西に延びる掘形列をそれぞれ、廊Ｊ、廊Ｋに復元した。建物Ｄは南北棟で、南北15間×東西６間と推定した。建物北端、並びに南端は不明確であるが、２基の堀形から建物Ｄの南側を決定した。東側では６基の基礎を検出したことで東西６間と確定できた。この建物Ｄは西側に２列の掘形が並ぶことから、西面に廊を取り込んだ構造であったと推定できる。廊Ｊは建物Ｄから西に延び、長さ４間、幅１間とみ

られる。廊Ｋも建物Ｄから西に延び、長さ４間、幅１間に復元できるが、北側の掘形列は検出できなかった。なお列Ｍとしたものは、Ｇ区の北壁にかかり検出した長方形の掘形で、掲載図では柵のように表記された箇所に該当する。

建物Ｅは建物Ｄの東に接し同じ規模をもつ南北建物であるが、長方形の掘形はなく、２個の柱穴が半間間隔で並ぶものが建物の基礎とみられる。一見すると基礎の形態が異なるようにみえるが、長方形の掘形内部には柱穴が２個掘られるため、柱穴のみが残存したとすると、構造は同じであったとみてよい。建物Ｆは廊Ｌの南にある南北建物で、東面、北面は建物Ｅと同じ２個１組の柱穴が検出できた。西面は遺構が未検出であるが、東西幅は15間と推定される。この建物Ｆは東半の３間分に柱穴が集中し、内部に間仕切りがあったことがかわる。この建物は調理所とされるため、間仕切り内は炊事や調理に関わる施設が配備されていたものと推定できる。建物Ｃは四面とも明確な遺構がないが、一応、掲載図を参考に、南北18間×東西８間と推定した。廊Ｈ、廊Ｉは建物Ｃと饗宴殿をつなぐ廊であるが、遺構としての検出はない。これらも掲載図からの推定で、饗宴殿身舎両端から７間目の位置に廊が設置されていたと想定した。



1 饗宴殿基礎（Ｆ区西壁、東から）



2 饗宴殿北縁と雨落溝（Ｅ区、東から）



3 饗宴殿基礎（排除後）



4 饗宴殿基礎（排除後、逆さま）



5 建物Ｂ基礎掘形（Ｈ区、東から）

図72　饗宴殿基礎

建物Ａは東西に長い建物であるが、基礎の遺構が確定できたものは少ない。一応、北端は廊Ｇの北端、東端は建物Ｅの東端と一致すると考え、小規模な柱穴をもとに復元した。ただし建物Ｅ、建物Ｆの復元で採用した２個１組の柱穴が部分的に検出できていることで、該当性は高いと考えられる。この建物Ａは椅子置場と表記されるため、簡単な上部構造であったとも考えられる。地下遺構が残りにくかった原因もこうした点にあったのだろう。廊Ｇは建物Ｂの北にあり、長方形の掘形を４基検出した。間隔は１間半あり、いずれのものより広い。

以上の饗宴殿とその東に展開した付属施設がどのように利用されたかは、当時の記録からうかがい知ることができる。それらによると、饗宴殿が使用されたのは昭和３年11月16日・17日に実施された「大饗の儀」である。この儀では、天皇・皇后は北面中央の御座に座し、式に出席した皇族・王公族以下、大使・使節・随員ならびに夫人らには飲食が振る舞われた。その際、中央の舞台では雅楽が演じられたという。検出した遺構にこれらをあてはめると、建物Ｆが調理所であるため、ここで炊事・調理された飲食物は廊Ｌを通じて建物Ｃに運ばれ、ここで膳として整えられた後、儀式場に運ばれたと推定できる。そのため、建物間には廊が通じる構造となっていたのであろう。昭和３年の御大典は、日本が「昭和」時代に入る出発点となった儀式である。したがって、本遺跡が激動の昭和史を研究する上で重要な遺跡と判断できるため、ここに整理・報告した。

第３節　近世の土師器皿

A　近世土師器皿の型式と変遷

今回の発掘調査の対象地は、京都御苑内の御所に近接する近世公家町域の内部に位置する。都市域内としては、大規模な発掘調査を実施することができた。この結果、近世の全時期にわたる大量の陶磁器類とともに、各時期の膨大な土師器皿類も出土した。京域内から出土する土器・陶磁器類は、平安京建都以来、全域で大量の出土が継続していた土師器皿類が、町家地域では江戸時代中期以降、急速に減少することが明らかとなってきている。しかし、公家町では、天皇家を中心に古代以来の伝統的生活様式を江戸時代を通じて保持していたと見られ、各種儀式や饗宴での土師器皿の使用が江戸時代中期以降にも継続されていた可能性が高いと想定された。その一例として、土壙Ｇ1447を挙げる。この遺構は平面約100㎡で、深さ約１mの大土壙である。この内の２㎥分の出土破片総数では、土師器皿片は11万2331個を数える。100㎥分を単純に試算すると、土壙全体で約500万片が埋没していたと推定される。調査地全体で見ると、この様な土壙は規模の違いはあるが各宅地内に３～５基が検出されている。調査地全体分を推算すると、かなりの量の土師器皿が出土しているものと考えられる。このような膨大な土師器皿類の出土が示している歴史的事実を理解し、歴史の中に位置付けることが重要である。公家社会とその文化に、伝統的な生活様式が土師器皿という形をとって、連綿として生きつづけていたことを示しているものと考える。ここでは、今回の調査で出土した土師器皿類の、型式変化の連続体としての全体像を、型式編年表の形をとって提示する。

型式編年表について　平安京域内や近郊遺跡から出土している近世の土師器食器形態の型式編年の大筋は、当研究所の小森俊寛と上村憲章が呈示している[10)]。しかし、近世の各期の古・中・新段階を呈示することには至っていない。今回の調査での出土資料は、Ⅻ期からⅩⅣ期までの各期において、複数の一括資料が確認できている。これによって、これまで空白となっていた部分の型式を埋める形で資料を呈示したい。以下では、前記小森・上村編年で提示された資料を「既資料」と呼称し、各期と各段階の特徴などを順次記していく。土師器食器形態の形式・型式名称については、既資料で使用している名称を踏襲するが、新たに追加したものがあり、先の名称との関連を記す。

近世の土師器食器形態の基本的組成は、最も小法量側に位置するのが中世の赤（褐）色系に連なる皿Nr形式の大・小と中世の白土器（白色系）の系譜に属す皿Ｓによって構成される。新たに名称を追加したのは、皿Nrのうちで底部が少し押し上げられてヘソ皿状を呈するもので、これを皿Nrhとした。皿Ｓ系では、凹状圏線を持たないものを皿Sbとしているが、技法痕跡的には同様でありながら、同径ぐらいのものと、それより小径で底部が少し押し上げられたヘソ皿状のものが、Ⅺ期以降に散見できる。これらは、中世のヘソ皿Ｓ大の系譜に直接つながりを確認できないので皿Sbh大・皿Sbh小とした。また、同じ皿Ｓ系の主力的位置を占めている皿Ｓは名称上での区分を明確化する意味で皿Saとした。

XI期については、若干の資料増加が認められるが、基本的には変化がないので、既資料に修正及び加筆した形で記す。

XI期古段階では、良好な資料が少なかったので既資料のものも掲載した（図74）。X期新段階と比べると成形技法に変化は見られないが、法量的にはやや小型化したものが見られるようになる。形態的にも大きな変化は認められないが、器高の浅いものなどが多くなっている。この段階でも、皿Nr大の中に皿Nrhが少量含まれる。皿Nr大は、口径6.5cm台～7.0cm台で器高1.0cm前後が主である。皿Nr小は、口径5.0cm台～6.0cm台で器高1.0cm弱が主である。皿Sa・Sbは、X期新段階より若干厚手化が進んでおり、口縁端部の処理も丸味のあるものが見られるようになるが、この段階では端面をもつものが多い。皿Saの内面の立ち上がり部分の凹線状圏線は、ほぼすべての個体で明瞭となっている。皿Sbは、口径9.0cm台～10.0cm台で器高2.0cm前後が主である。図75の６～10は埋納土壙Ｆ2390出土資料で既資料より法量拡大が進んでいる。皿Saと競合する状態となっており、競合する法量の皿Sa中は、ほとんど出土が見られなくなる。皿Sa大１は、口径10.0cm台～11.0cm強程で器高2.0cm前後である。口径12.0cm台～13.0cm強で器高2.0cm程の一群は、皿Sa大２とする。これらより大型のものは、口径16.0cm台のものなど少数の確認にとどまる。

XI期中段階では、皿Nrは、形態、法量ともにXI期古段階とは変化はない。この段階では、皿Nrhが見られなくなり、生産が終了している可能性が高いが、XIII期中段階に少量見られる。皿Sa・Sbは、器壁がやや厚目のものが多くなり、口縁部処理もそれに応じるように丸味を増したものが中心的となる。相対的に大きい口径のものに、端面をもつものが見られるが少数となる。皿Saにも、体部と底部の境が不明瞭になるものが見られるが、それらの内面の凹線状圏線は、逆に強く明瞭なものが多い。皿Sbは、口径9.5cm台も見られるが、10.0cm台のものが多数出土する。皿Sbは、この段階で法量が最大に達する。皿Saは、口径11.0cm前後～12.0cm台の一群が数多く出土する。皿Sbの法量との位置関係から皿Sbに押し上げられて、全体に大型化する。皿Saでは他に口径13cm前後、14cm前後、16cm台のものが出土しているが出土数は少ない。口径14.0cm前後のものは埋納土壙Ｆ2383から出土した資料で、大半が口径14.0cm台に収まるものだけで構成されている。

XI期新段階では、皿Nrは口径5.0cm台～5.5cm台のものを小、口径6.0cm台～7.0cm台のものを大とする。皿Sa・Sbは、厚手のものが大勢を占めるようになり、体部から口縁部の断面形態に変化が認められる。体部から口縁部が短縮していく変化の方向は変わらない。体部がやや外反し、口縁部の外面が若干肥厚し端部を上方へ突り気味に収めた結果、端部が三角形状を呈する形態のものが多数となる。内傾する端面をもつ古相の形態のものも見られる。皿Saでは、底部が若干丸味をもつものが多くなり、それらは体部との境がやや不明瞭となる。この中には、内面の凹線状圏線が立ち上がり部より、少しずり上がって位置するものがあり、またこれらの凹線状圏線には、結果的な技法痕跡ではなく、後でヘラ先などの工具で圏線を意図的に施したものが認められるようになる。XI期新段階の変化は、凹線状の圏線が単なる技法痕跡から京都

の土師器皿の標徴へと変化し始めたことを示す。皿Sbは、口径9.5cm台～10.0cm強で器高2.0cm前後が中心的となる。皿Sbは、この段階で法量縮小へと変化の方向が転換している。器壁の薄手化したものが少数認められる。口径8.5cm台のものに底部を押し上げた皿Sbhが少数認められる。皿Sa大１は、口径10.5cm台～11.0cm台で、器高は2.0cm前後である。皿Sa大２は、口径11.5cm台～12.0cm台が中心で器高は2.0cm台である。今回の資料では口径13.0cm台、15.5cm～16.0cm台、17.5cm台の大型のものも一定数確認できた。皿Saは、皿Sbの法量縮小への転換によって、法量縮小が再び明確となる。

Ⅻ期古段階では、皿Nrは、形態的にはⅪ期新段階とは大きな変化を示さない（図75）。皿Sa・Sbは法量縮小の基調は継続している。器壁の厚手化から一転して薄手化が進行し、それに伴なうように体部から口縁部の形態も変化を遂げている。皿Saの凹線状圏線が、技法痕跡が主体であった段階から付加型の加飾的な凹線状圏線に主体が変化する。皿Sbは、口径7.5cm台～8.0cm強で器高1.0cm台のものもあるが、口径8.5cm～10.0cm台で、器高2.0cm前後が主である。Ⅺ期では少数であった皿Sbhが口径7.0cm台～8.0cm台のものが一定数認められる。皿Sa大１は、口径10.0cm台～11.0cm台で、器高2.0cm前後である。皿Sa大２は、口径11.5cm台～12.5cm台で、器高2.0cm台が主である。口径13.0cm台、14.0cm強、16.5cm台、18.0cm台の大型のものも確認している。既資料が町家などを中心としたもので、大型のものを欠いていた。大型器形が一定数見られることは公家町的特徴の一つと考えられる。

Ⅻ期中段階では、皿Nrは、法量縮小の方向に変化する。皿Nr小は、口径5.0cm弱～6.0cm台が中心である。皿Nr大は、口径6.5cm台～7.0cm台である。皿Sa・Sbは、薄手のものが主体を占めるようになり、体部から口縁部の形態に変化が認められる。体部から口縁部の短縮化が進み、口縁端部は丸味を呈する形態ものが多数となる。皿Saは、内面の凹線状圏線の加飾化が顕著になり、底部の丸味をもつものが大勢を占める。皿Sbは、口径8.5cm台～9.5cm台で、器高は2.0cm前後が主体である。皿Sbhは、口径7.0cm台の小と口径8.5cm台の大があり、ともに器高2.0cm前後である。皿Sa大１は、口径10.0cm台で、器高2.0cm前後である。皿Sa大２は、口径11.0cm台～12.5cm台で、器高2.0cm台が主体である。口径13.0cm台、15.5cm台の大型のものも確認される。

Ⅻ期新段階では、皿Nrは、縮小化が進み、小型化したものが見られる。皿Nr小は、口径4.5cm台～5.5cm台が主である。皿Nr大は、口径6.0cm台が中心である。皿Sa・Sbは、薄手のものが主体で、法量縮小化傾向は変わっていないが、体部から口縁部の短縮していく変化は急速に進み最小に達する。口縁端部は尖るものが基本形を占めるようになっている。内面の凹線を付加する圧力から器形に影響を与える。この段階では一部の薄手のものに凹線の外面部が屈曲したものが認められる。凹線状圏線は、この段階では先が丸く細い棒状の工具で付加されているものと考えられる。皿Sbは、口径8.0cm台～9.0cm強で、器高1.5cm台のものが主体である。皿Sbhは、この段階では資料はなく、次の段階には認められる。皿Sa大１は、口径9.0cm台～9.5cm台で器高2.0cm前後である。皿Sa大２は、口径10.0cm台～11.5cm台で器高2.0cm前後が主

である。口径12.0cm台、13.0cm台、14.0cm台、15.0cm台のものが認められる。

XIII期古段階では、皿Nrは、口径5.0cm台～5.5cm台が主である（図76）。皿Sa・Sbは縮小化と器壁の薄手化がさらに進む。皿Saは、器壁の薄手化で、内面の凹線の付加した部分の外面に突起している形態のものが少数見られる。皿Sbは、口径8.0cm弱～8.5cm台で、器高2.0cm前後のものが中心である。皿Sbhは、口径8.0cm台である。皿Sa大１は、口径9.5cm台～10.5cm台で、器高2.0cm台である。皿Sa大２は、口径11.0cm台～12.0cm台で器高2.0cm台が主である。口径14.5cm台、16.0cm台、17.0cm台の大型のものが一定数認められる。

XIII期中段階では、縮小化は進むが薄手化は止まり、器壁がやや厚目のものが見られる。皿Nr小は、口径4.5cm台～5.5cm台が主である。口径6.0cm台のものも少数見られる。皿Nrhは、再び見られ、口径5.5cm台～6.0cm台である。皿Sbは、口径7.5cm台～8.0cm台で、器高は1.5cm台が主である。皿Sa大１は、口径9.5cm台～10.5cm台で、器高が1.5cm台となるものが主である。皿Sa大２は、口径11.5cm台～12.5cm台で器高2.0cm弱が主である。口径13.5cm台、14.5cm台、18.0cm台の大型のものも認められる。

XIII期新段階では、皿Nrは、少数しか見られなくなり、皿Nr小は、口径5.0cm台が主である。口径6.0cm台も少数見られる。皿Sa・Sbは、法量の縮小化は継続しているが、体部から口縁部の長さが短縮していく変化は転換し、拡大したものが見られるようになる。皿Sbは、口径7.0cm台～8.0cm台で器高1.5cm弱が主である。皿Sa大１は、口径9.5cm台～10.5cm台で器高1.5cm台が主である。皿Sa大２は、口径11.0cm台～12.5cm台で器高2.0cm前後が主である。口径13.5cm台、14.5cm台の大型のものも認められる。

XIV期古段階では、皿Nrは、少数しか認められなくなる（図77）。口径4.0cm台～5.0cm強が主である。皿Sa・Sbは、縮小化は進むが、体部から口縁部の長さが拡大したものが主流を占める。内面の凹線が付加された部分が突起し、口縁部は上方につまみ上げられたものが主体となる。皿Sbは、口径7.0cm弱～8.0cm弱で、器高1.5cm弱で扁平化が目立つ。皿Saは、法量分化が進み、３つに分かれる傾向が現れてきている。皿Sa大１は、口径8.0cm台～9.0cm台で、器高1.5cm強である。皿Sa大２は、口径10.0cm弱～10.5cm台で、器高2.0cm前後である。皿Sa大３は、口径11.0cm台～12.0cm台で器高2.0cm台である。口径14.0cm台～14.5cm台の大型のものも認められる。

XIV期中段階では、皿Nrは、少数のみである。口径5.0cm台～5.5cm弱が主である。皿Sa・Sbは、縮小化は継続している。皿Saは器高が短縮したものが主を占める。皿Sbは、今回の資料では口径7.0cm台～8.0cm弱で、器高1.0cm強である。皿Sa大１は、口径8.5cm台～9.5cm台で、器高1.5cm弱である。皿Sa大２は、口径10.0cm前後で、器高1.5cm弱である。皿Sa大３は、口径10.5cm台～11.5cm台で、器高2.0cm前後が主である。口径12.0cm台、16.0cm台の大型のものも認められる。

図73は、皿Sbの口径の変遷をXI期古段階からXIV期中段階までをグラフ化したものである。X期新段階からXI期古段階までは口径9.5cm台が中心であったものが、XI期中段階で口径

10.0cm台へと大型化する。これ以降は、縮小化傾向が進行していきXIV期古・中の段階で縮小化は口径6.0cm台前後でピークに達して以後は、法量は一定し、縮小化は止まるものと考えられる。今回は、グラフ化していないが、この皿Sbの法量の変化に連動するのが、皿Saである。皿Saは皿Sbと一定の距離を保ちながら共存していることがわかる。

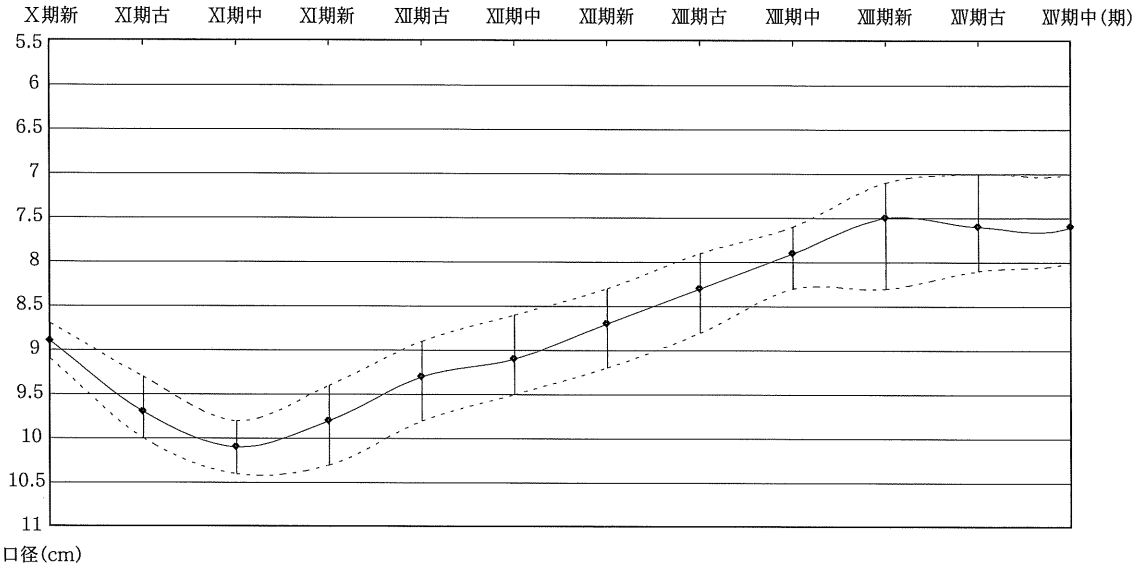


図73　皿Sbの口径変化

期・段階の年代観　小森・上村編年で示されている近世土師器の期・段階の年代観については、実年代を考察し得る資料が少なかった。今回の公家町の調査によって実年代を考察し得る資料が増加したので、それに基づく年代観をここに記しておく。

XI期の始まりは1580～90年頃、XI期の終わりは1660年頃と推定する。これは小森・上村編年と基本的に変わらない。XII期中段階～XII期新段階の時期に関連する文献記録では宝永５年（1708）の宝永大火がある。この期と考えている土器群は、掲載した資料では土壙G1133、土壙G639、土壙G302である。土壙G1133は、宝永大火後に設置された、切通し路面直下で検出した遺構である。土壙G639も検出層位や埋土などから宝永大火に関連していると見られる。出土している土師器皿は、XII期新段階に属するものである。これらの資料は、火災直前まで使用されていたものが、火災後の整理で廃棄されたと考えられる。土壙G302は、宝永大火以降に成立する遺構面で検出された遺構である。出土した土師器皿類は、先に記した遺構のものと大きな型式差を観取することは難しく、同一段階内に属すると考えるべき資料である。このような観点から宝永大火は、XII期新段階の持つ時間幅の内にある。

XII期古段階と考えている土器群にも火災に関連している遺構がある。掲載した資料では穴蔵G749、土壙G1447である。穴蔵G749、土壙G1447とも焼土や二次被熱を受けた遺物から火災に関連しているとみられる資料である。この時期に関連する文献記録から寛文11年（1671）の公家町火災がある。穴蔵G749と土壙G1447は、ともにこの火災時に埋められたものと考えられる。したがって、寛文11年火災はXII期古段階の持つ時間幅の内にある。

天明８年（1788）の天明大火は、京都の大半が焼失しており、今回の調査においてもこの火災に関連した遺構が多数検出されている。掲載した資料では、溝Ｆ1265、土壙Ｃ628である。出土している土師器皿類は、Ⅻ期中段階に位置付けられるものが主体である。このⅫ期中段階の土師器皿類が、天明大火と関連する資料と見ることができる。なお土壙Ｃ628からは、明和元年（1764）の墨書銘が記された施釉陶器の急須蓋が出土している。天明大火後と見られる遺構群から出土している土師器皿類で最も古い型式のものは、掲載した資料では井戸Ｒ1034、土壙Ｂ721である。これらはⅫ期新段階に属するものである。以上から天明大火があった天明８年（1788）はⅫ期中段階が持つ時間幅の内に含まれており、その位置もⅫ期新段階に近い頃と考えられる。

公家町の土師器皿として最終段階に位置する一群は、ⅩⅣ期中段階のものである。東京遷都後に埋められた遺構は、掲載した資料では池Ｇ253、溝Ｃ10、土壙Ｇ45である。明治時代初期の公家町解体期がⅩⅣ期中段階の内に含まれていることがわかる。

以上の実年代の推定から、各期の年代を総合的に判断すれば、Ⅻ期は1660年頃から1720年代頃まで、Ⅻ期は1720年代頃から1820年頃まで、ⅩⅣ期は1820年頃以降と考えられる。

Ｂ　公家町における土師器皿の使用

調査地において、江戸時代通じて大量の土師器皿類が出土する。これらの土師器皿類は、公家屋敷に居住した人々が使用と廃棄を続けた結果である。公家町以外の町家地域では江戸時代中期以降土師器皿類の出土量の減少が顕著になるが、公家町はこれ以降も一定量の土師器皿が出土する。このことは、町家地域で見られる土師器皿の減少傾向については、17世紀後半以降の国内向けの生産拡大に伴なう陶磁器類の普及によるものと考えられる。一方、公家町においては年中行事化した伝統儀式の中に、古代的な土師器食器形態を維持してきたものと思われる。

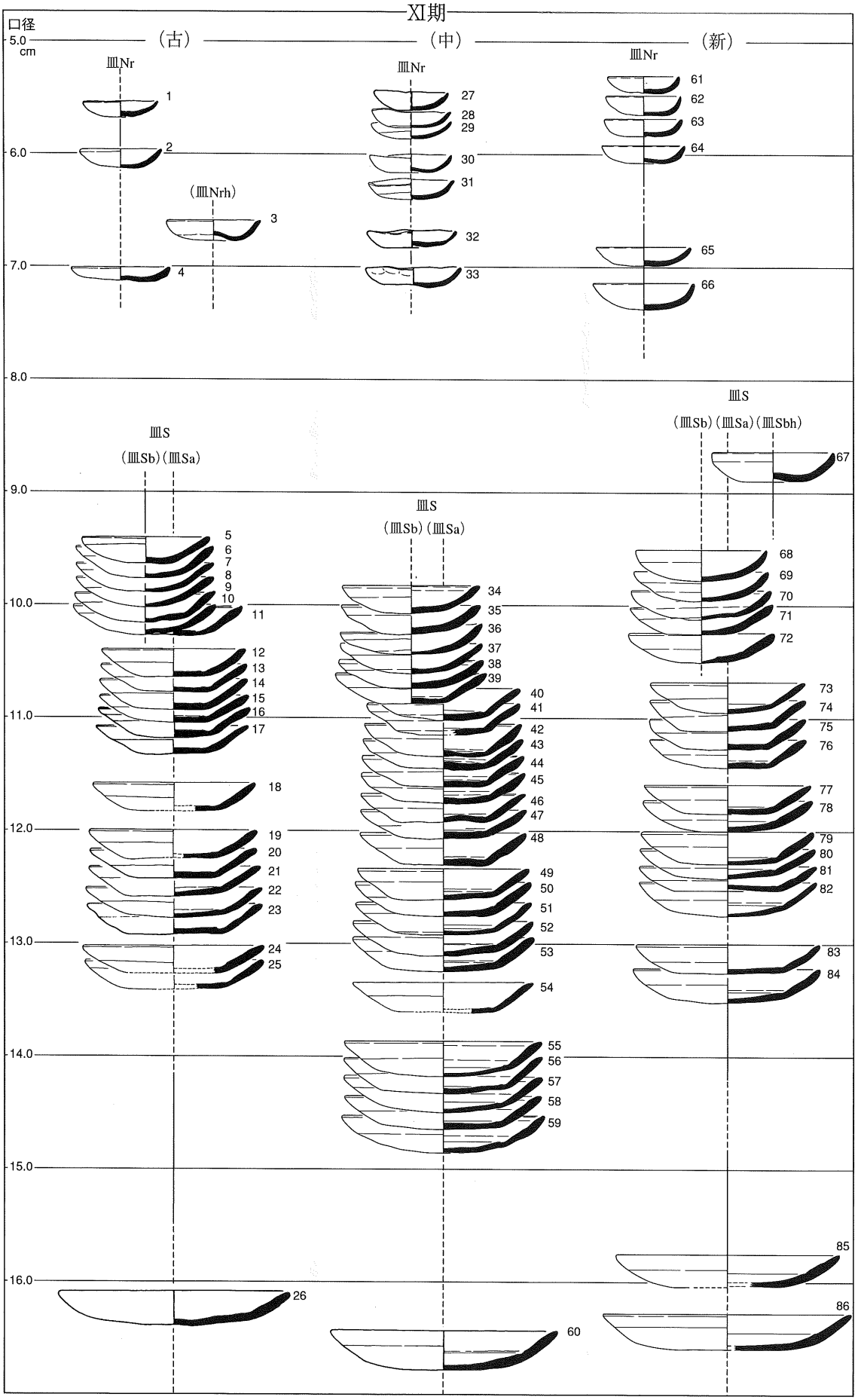

XI期
口径
5.0
cm
（古）
（中）
（新）
皿Nr
皿Nr
皿Nr
1
2
（皿Nrh）
3
4
27
28
29
30
31
32
33
61
62
63
64
65
66
6.0
7.0
8.0
皿S
（皿Sb）（皿Sa）
皿S
（皿Sb）（皿Sa）
皿S
（皿Sb）（皿Sa）（皿Sbh）
67
9.0
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0

図74　XI期土師器

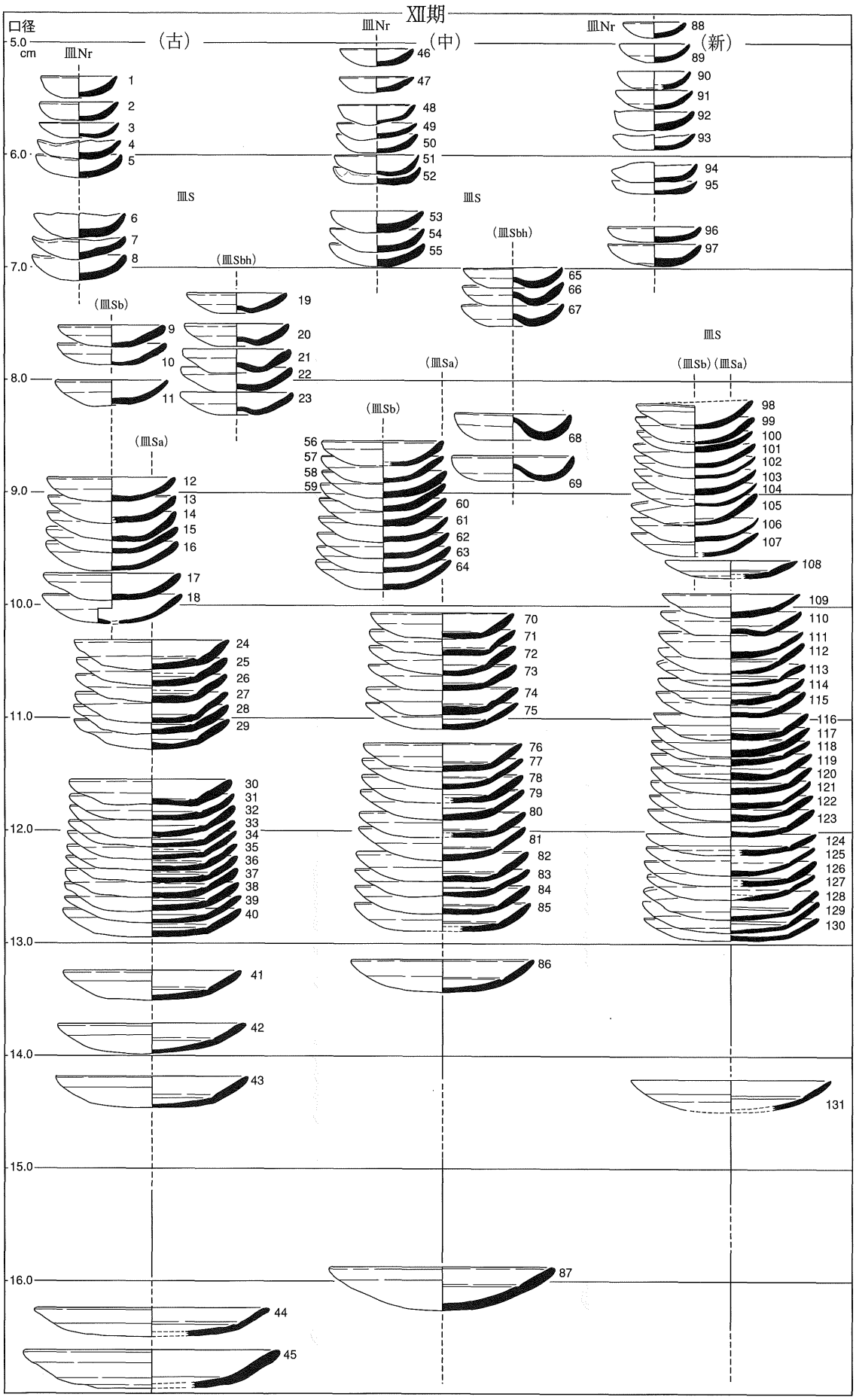

XII期
口径
cm
5.0
6.0
7.0
8.0
9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
皿Nr
（古）
皿Nr
（中）
皿Nr
（新）
皿S
（皿Sbh）
（皿Sb）
（皿Sa）
皿S
（皿Sbh）
皿S
（皿Sb）（皿Sa）

図75　XII期土師器

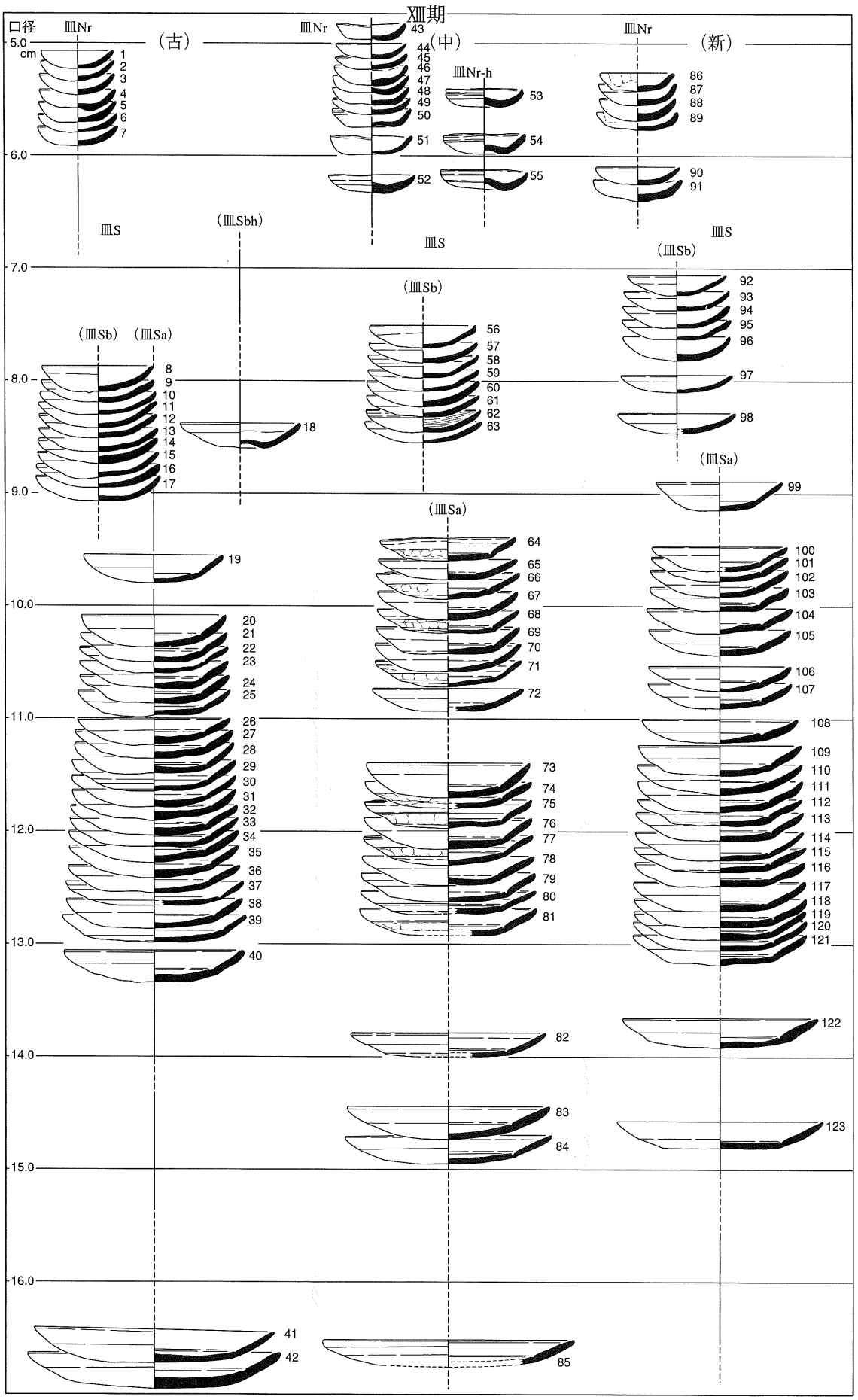


図76　XIII期土師器

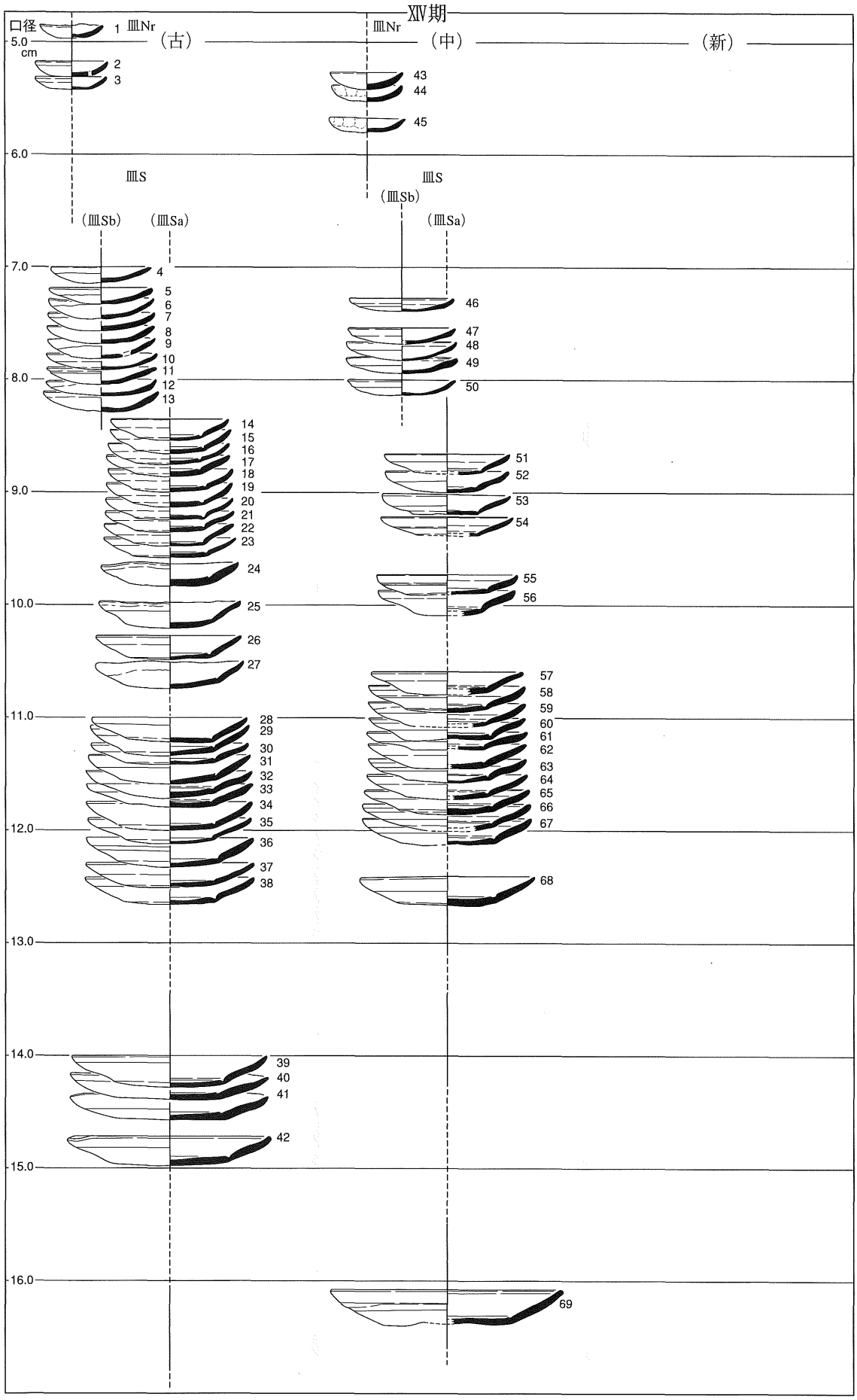

XIV期
口径
皿Nr
（古）
皿Nr
（中）
（新）
cm
5.0
6.0
7.0
8.0
9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
皿S
（皿Sb）
（皿Sa）
皿S
（皿Sb）
（皿Sa）
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69

図77　XIV期土師器

表124　土師器皿出典遺構一覧表

期 年代	型式 (段階)	出典遺構	参考資料	備考
1580～90頃	古	土壙Ｆ2390、土壙Ｆ2383	左京四条三坊十三町土壙532（１） 六波羅政庁10区落込み焼土・湿地（２） 公家屋敷二条家東辺井戸1008（３） 伏見城第３面（４） 烏丸線No.39土壙４（５）	江戸幕府（1603）
XI	中	土壙Ｆ2200、溝Ｇ1195	左京四条二坊十一町溝955（６） 左京一条二坊五町井戸300（７） 左京二条四坊十町井戸353（８） 武家屋敷中井家土壙77・78（９） 左京二条四坊十町土壙813（８）	
	新	井戸Ｄ335（中～）、土壙Ｆ1980、溝Ｈ270 土壙Ｇ1164、土壙Ｇ1156	武家屋敷中井家土壙25（９）	
1660頃	古	土壙Ｂ725、土壙Ｅ235 土壙Ｇ1447、穴蔵Ｇ749	左京二条四坊ごみ穴353（10） 公家屋敷二条家東辺土壙1001（３）	寛文元年火災（1661） 寛文11年火災（1671）
XII	中	土壙Ｆ1475、土壙Ｆ1244、 土壙Ｆ1387 土壙Ｇ1716	公家屋敷二条家東辺土壙1032（３） 押小路殿第３次土壙204（11） 左京二条四坊十町土壙190（８）	貞享火災（1684）
	新	土壙Ｇ1273（中～）、土壙Ｇ1133 土壙Ｇ639 土壙Ｇ302（～古）	左京内膳町井戸96、SF02直上火災層（12）	宝永大火（1708）
1720～30頃	古	土壙Ｇ555 土壙Ｂ776、土壙Ｈ271 土壙Ｅ188	公家屋敷二条家東辺土壙14（３）	
XIII	中	土壙Ｆ1265、土壙Ｅ45、土壙Ｃ628	左京四条三坊十三町土壙２（１） 京大病院構内AH19区SD22（13） 公家屋敷二条家東辺焼土だめ59（３）	天明大火（1788）
	新	土壙Ｂ721、井戸Ｒ1034 土壙Ｂ687、整地Ａ３	三千院伝世資料（14）	
1820頃	古	土壙Ｇ348、溝Ｅ50	京大病院構内AF19区SX１（15） 武家屋敷中井家土壙２（９）	
XIV	中	溝Ｃ10、土壙Ｇ45、土壙Ｅ48 池Ｇ253、土壙Ｈ15	樋木家伝世資料（16）	安政火災（1855） 元治火災（1864） 明治元年（1868）

（）は文献No.

表125　土師器皿出典リスト

図75	XI期		
番号	出土遺構	図版No.	土器No.
1	研究紀要3	図−12	1
2	研究紀要3	図−12	2
3	研究紀要3	図−12	3
4	研究紀要3	図−12	4
5	研究紀要3	図−12	5
6	埋納土壙F2390	430	47
7	埋納土壙F2390	430	39
8	埋納土壙F2390	430	45
9	埋納土壙F2390	430	66
10	埋納土壙F2390	430	68
11	研究紀要3	図−12	10
12	研究紀要3	図−12	11
13	研究紀要3	図−12	12
14	研究紀要3	図−12	13
15	研究紀要3	図−12	14
16	研究紀要3	図−12	15
17	研究紀要3	図−12	16
18	研究紀要3	図−12	17
19	研究紀要3	図−12	18
20	研究紀要3	図−12	19
21	研究紀要3	図−12	20
22	研究紀要3	図−12	21
23	研究紀要3	図−12	22
24	研究紀要3	図−12	23
25	研究紀要3	図−12	24
26	研究紀要3	図−12	25
27	研究紀要3	図−12	26
28	溝G1195	538	1
29	溝G1195	538	3
30	溝G1195	538	4
31	溝G1195	538	6
32	研究紀要3	図−12	28
33	研究紀要3	図−12	29
34	土壙F2200	430	3
35	土壙F2200	430	4
36	溝G1195	538	4
37	溝G1195	538	12
38	土壙F2200	430	5
39	土壙F2200	430	6
40	溝G1195	538	16
41	溝G1195	538	17
42	土壙F2200	430	9
43	土壙F2200	430	12
44	土壙F2200	430	13
45	土壙F2200	430	16
46	土壙F2200	430	17
47	土壙F2200	430	19
48	土壙F2200	430	20
49	土壙F2200	430	21
50	土壙F2200	430	23
51	溝G1195	538	27
52	土壙F2200	430	26
53	土壙F2200	430	28
54	研究紀要	図−12	43
55	埋納土壙F2383	430	76
56	埋納土壙F2383	430	82
57	埋納土壙F2383	430	78
58	埋納土壙F2383	430	72
59	埋納土壙F2383	430	73
60	研究紀要	図−12	44
61	溝H270	520	1
62	溝H270	520	2
63	溝H270	520	4
64	溝H270	520	9
65	溝H270	520	12
66	溝H270	520	13
67	溝H270	520	15
68	溝H270	520	16
69	溝H270	520	17
70	溝H270	520	20
71	溝H270	520	21
72	井戸D335	392	10
73	井戸D335	392	14
74	井戸D335	392	15
75	井戸D335	392	31
76	井戸D335	392	33
77	井戸D335	392	21
78	井戸D335	392	22
79	井戸D335	392	23
80	井戸D335	392	24
81	井戸D335	392	25
82	溝H270	520	36
83	井戸D335	392	28
84	溝H270	520	38
85	土壙G1164	449	19
86	土壙G1156	447	19
図76	XII期		
番号	出土遺構	図版No.	土器No.
1	穴蔵G749	454	1
2	穴蔵G749	454	4
3	穴蔵G749	454	5
4	土壙B725	306	18
5	土壙B725	306	19
6	土壙B725	306	20
7	土壙B725	306	22
8	土壙B725	306	29
9	土壙B725	306	27
10	土壙B725	306	28
11	土壙G1447	468	11
12	土壙E235	401	11
13	穴蔵G749	454	7
14	土壙G1447	468	13
15	土壙G1447	468	12
16	穴蔵G749	454	6
17	土壙G1447	468	18
18	土壙G1447	468	19
19	土壙B725	306	2
20	土壙B725	306	10
21	土壙G1447	468	7
22	土壙G1447	468	9
23	土壙G1447	468	10
24	土壙B725	306	47
25	土壙B725	306	42
26	土壙B725	306	43
27	土壙B725	306	44
28	土壙B725	306	45
29	穴蔵G749	454	21
30	土壙B725	306	51
31	土壙B725	306	52
32	土壙B725	306	53
33	土壙B725	306	54
34	土壙B725	306	55
35	土壙B725	306	56
36	土壙B725	306	57
37	土壙B725	306	58
38	土壙B725	306	59
39	土壙G1447	468	25
40	土壙G1447	468	27
41	土壙G1447	468	28
42	土壙G1447	468	29
43	土壙G1447	468	30
44	土壙G1447	468	31
45	土壙G1447	468	33
46	土壙F1432	303	1
47	土壙F1432	303	2
48	穴蔵F1387	323	2
49	穴蔵F1387	323	6
50	穴蔵F1387	323	8
51	穴蔵F1387	323	10
52	穴蔵F1387	323	12
53	穴蔵F1387	323	16
54	穴蔵F1387	323	18
55	穴蔵F1387	323	19
56	穴蔵F1387	323	23
57	土壙G1716	482	17
58	土壙G1716	482	15
59	土壙G1716	482	16
60	土壙G1716	482	18
61	穴蔵F1387	323	25
62	穴蔵F1387	323	26
63	穴蔵F1475	432	20
64	穴蔵F1475	432	21
65	穴蔵F1387	323	27
66	穴蔵F1387	323	29
67	穴蔵F1387	323	30
68	穴蔵F1387	323	31
69	穴蔵F1387	323	32
70	穴蔵F1387	323	33
71	穴蔵F1475	432	24
72	穴蔵F1475	432	25
73	穴蔵F1475	432	26
74	穴蔵F1475	432	27
75	穴蔵F1387	323	34
76	穴蔵F1387	323	35
77	穴蔵F1475	432	32
78	穴蔵F1387	323	38
79	穴蔵F1475	432	33
80	穴蔵F1387	323	41
81	穴蔵F1387	323	39
82	穴蔵F1387	323	43
83	穴蔵F1387	323	44
84	穴蔵F1387	323	45
85	穴蔵F1387	323	47
86	穴蔵F1387	323	48
87	穴蔵F1475	432	39
88	土壙G1133	492	1
89	土壙G1133	492	2
90	土壙G1133	492	3
91	土壙G1133	492	4
92	土壙G1133	492	5
93	土壙G1133	492	7
94	土壙G1133	492	9
95	土壙G302	503	4
96	土壙G1133	492	10
97	土壙G639	497	1
98	土壙G1273	490	5
99	土壙G1273	490	6
100	土壙G639	497	7
101	土壙G1273	490	7
102	土壙G302	503	7
103	土壙G302	503	8
104	土壙G302	503	10
105	土壙G1273	490	8
106	土壙G302	503	11
107	土壙G639	497	8
108	土壙G1133	492	11
109	土壙G639	497	9
110	土壙G302	503	13
111	土壙G302	503	15
112	土壙G1273	490	11
113	土壙G1273	490	14
114	土壙G639	497	11
115	土壙G302	503	20
116	土壙G639	497	15
117	土壙G639	497	17
118	土壙G639	497	20
119	土壙G639	497	18
120	土壙G639	497	19
121	土壙G302	503	22
122	土壙G639	497	22
123	土壙G639	497	24
124	土壙G1133	492	20
125	土壙G302	503	26
126	土壙G1133	492	21
127	土壙G302	503	23
128	土壙G1273	490	17
129	土壙G1273	490	19
130	土壙G639	497	26
131	土壙G1273	490	20
図77	XIII期		
番号	出土遺構	図版No.	土器No.
1	土壙B776	327	1
2	土壙E188	414	1
3	土壙B776	327	2
4	土壙E188	414	4
5	土壙E188	414	2
6	土壙B776	327	7
7	土壙B776	327	10
8	土壙E188	414	9
9	土壙E188	414	8
10	土壙G555	504	27
11	土壙G555	504	28
12	土壙E188	414	13
13	土壙E188	414	14
14	土壙E188	414	16
15	土壙E188	414	15
16	土壙G555	504	6
17	土壙B776	327	12
18	土壙G555	504	31
19	土壙G555	504	34
20	土壙B776	327	13
21	土壙E188	414	20
22	土壙G555	504	26
23	土壙E188	414	22
24	土壙B776	327	17
25	土壙B776	327	18
26	土壙E188	414	23
27	土壙E188	414	24
28	土壙B776	327	19
29	土壙G555	504	37
30	土壙E188	414	27
31	土壙B776	327	21
32	土壙E188	414	29
33	土壙B776	327	22
34	土壙E188	414	35
35	土壙E188	414	34
36	土壙B776	327	24
37	土壙G555	504	29
38	土壙B776	327	25
39	土壙G555	504	40
40	土壙E188	414	38
41	土壙E188	414	39
42	土壙E188	414	40

43	土壙E45	333	1
44	土壙E45	333	2
45	土壙E45	333	4
46	土壙E45	333	5
47	土壙E45	333	7
48	土壙E45	333	8
49	土壙E45	333	11
50	土壙C628	387	6
51	土壙E45	333	12
52	土壙C628	387	9
53	土壙C628	387	5
54	土壙C628	387	7
55	土壙C628	387	8
56	土壙E45	333	13
57	土壙F1265	437	17
58	土壙C628	387	12
59	土壙E45	333	14
60	土壙E45	333	17
61	土壙E45	333	15
62	土壙C628	387	13
63	土壙F1265	437	19
64	土壙C628	387	14
65	土壙F1265	437	20
66	土壙C628	387	19
67	土壙E45	333	18
68	土壙C628	387	20
69	土壙E45	333	21
70	土壙E45	333	22
71	土壙C628	387	21
72	土壙F1265	437	22
73	土壙E45	333	24
74	土壙C628	387	22
75	土壙C628	387	23
76	土壙E45	333	26
77	土壙C628	387	23
78	土壙F1265	437	25
79	土壙F1265	437	24
80	土壙C628	387	26
81	土壙C628	387	27

82	土壙C628	387	28
83	土壙E45	333	27
84	土壙C628	387	29
85	土壙C628	387	30
86	土壙B721	378	1
87	土壙B721	378	2
88	整地A3	367	2
89	土壙B721	378	3
90	整地A3	367	3
91	土壙B721	378	4
92	井戸R1034	547	1
93	土壙B721	378	5
94	土壙B721	378	6
95	土壙B721	378	7
96	整地A3	367	5
97	井戸R1034	547	2
98	井戸R1034	547	3
99	井戸R1034	547	4
100	井戸R1034	547	5
101	土壙B721	378	10
102	土壙B721	378	11
103	土壙B721	378	12
104	土壙B721	378	21
105	土壙B721	378	16
106	土壙B721	378	19
107	土壙B721	378	20
108	井戸R1034	547	6
109	土壙B721	378	26
110	土壙B721	378	27
111	土壙B721	378	28
112	整地A3	367	12
113	土壙B721	378	31
114	井戸R1034	547	16
115	井戸R1034	547	17
116	土壙B721	378	34
117	井戸R1034	547	19
118	土壙B721	378	38
119	土壙B721	378	37
120	土壙B721	378	40

121	土壙B721	378	39
122	井戸R1034	547	21
123	整地A3	367	19
図78	XIV期		
番号	出土遺構	図版No.	土器No.
1	溝E50	426	1
2	土壙G348	345	2
3	土壙G348	345	1
4	土壙G348	345	3
5	土壙G348	345	4
6	土壙G348	345	5
7	土壙G348	345	6
8	土壙G348	345	7
9	土壙G348	345	8
10	土壙G348	345	11
11	土壙G348	345	9
12	土壙G348	345	10
13	土壙G348	345	12
14	土壙G348	345	14
15	土壙G348	345	15
16	土壙G348	345	16
17	土壙G348	345	17
18	土壙G348	345	18
19	土壙G348	345	19
20	土壙G348	345	20
21	土壙G348	345	21
22	土壙G348	345	22
23	土壙G348	345	23
24	土壙G348	345	24
25	土壙G348	345	25
26	土壙G348	345	26
27	土壙G348	345	27
28	土壙G348	345	28
29	土壙G348	345	29
30	土壙G348	345	30
31	土壙G348	345	31
32	溝E50	426	2
33	溝E50	426	3

34	土壙G348	345	34
35	土壙G348	345	32
36	土壙G348	345	35
37	土壙G348	345	36
38	土壙G348	345	37
39	土壙G348	345	38
40	土壙G348	345	39
41	土壙G348	345	40
42	土壙G348	345	41
43	池G253	511	1
44	溝C10	512	1
45	溝C10	512	2
46	土壙G45	513	1
47	溝C10	512	4
48	土壙G45	513	3
49	土壙G45	513	2
50	溝C10	512	3
51	土壙G45	513	4
52	溝C10	512	5
53	溝C10	512	6
54	土壙G45	513	5
55	土壙G45	513	6
56	池G253	511	2
57	池G253	511	3
58	土壙G45	513	7
59	土壙G45	513	8
60	土壙G45	513	9
61	土壙E48	427	1
62	溝C10	512	7
63	土壙G45	513	11
64	池G253	511	5
65	土壙G45	513	10
66	土壙G45	513	13
67	土壙G45	513	12
68	溝C10	512	11
69	土壙G45	513	14

参考資料文献一覧

1　『平安京跡研究調査報告第11輯　平安京左京四条三坊十三町－長刀鉾町遺跡－』（財）古代学協会、1984年。

2　「六波羅政庁跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2002年。

3　『公家屋敷二条家東辺地点の調査－同志社同窓会・幼稚園新築に伴う調査－』同志社大学校地学術調査委員会調査資料No.20　同志社大学校地学術調査委員会、1988年。

4　「伏見城跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2002年。

5　『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ　1976年』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1982年。

6　「左京四条二坊」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1999年。

7　「左京一条二坊」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1987年。

8　『平安京左京二条四坊十町　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第19冊』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2001年。

9　『同志社埋蔵文化財委員会調査報告Ⅰ　京の公家屋敷と武家屋敷－同志社女子中・高校清和館地点、校友会新島会館別館地点の発掘調査－』学校法人同志社、1994年。

10　「左京二条四坊１」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2000年。

11　『平安京跡研究調査報告第12輯　平安京押小路殿跡第３次調査』（財）古代学協会、1984年。

12　『埋蔵文化財発掘調査概報第３分冊　平安京（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要』京都府教育委員会、1980年。

13　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度』京都大学埋蔵文化財研究センター、1993年。

14　尾野善裕「三千院の天盃と土師器皿に関する二・三の問題」『学叢』22号　京都国立博物館、2000年。

15　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』京都大学埋蔵文化財研究センター、1987年。

16　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　（財）京都市埋蔵文化財研究所、1996年。

第４節　出土陶磁器の様相

本遺跡で出土した桃山時代以降の土器・陶磁器類は圧倒的な量が出土している。今回の調査で明らかになった遺構の状況と、出土陶磁器類のこれまでの研究をもとに13の基準資料を抽出した。基準資料の抽出にあたっては、比較的短期間の使用を想定しうる小規模なごみ穴を中心に、器種構成や産地組成の多いものを対象とした。ここではそれらの資料を中心に陶磁器にみられる特徴を整理しておきたい。

Ａ　基準資料について

基準資料の１は公家町建設に先行する整地に伴なう土壙と推定している遺構出土遺物である。陶磁器類の特徴としては磁器類が中国や朝鮮などの輸入品で占められ、瀬戸・美濃系陶器に織部製品が含まれないことが挙げられる。擂鉢は、信楽・丹波・備前産のものがあるが、信楽擂鉢の中に口縁端部が外反しないものが現れる。遺物組成では瓦質土器・土師質土器の占める割合は40％近くあり、特に瓦質土器は23.32％で最も高い。ほぼ同時期の遺物構成のものとして、堀Ｇ1940出土遺物（図版445・518・519）が挙げられようが、瀬戸・美濃系の織部製品や肥前系陶器の砂目の皿が含まれていることなどから、これはやや後出のものである。

基準資料の２は肥前系磁器出現期の資料である。ただし、肥前系磁器に高台無釉の碗類などが出現しない時期である。肥前系陶器は内野山窯系の碗類が多くなる。また、図版302の１・２の鉄釉碗は、成形技法や胎土・釉調などから瀬戸・美濃系、肥前系のものとは考えられず、高火度焼成の京焼の可能性が高い資料である。ただ窯跡出土資料ではなく消費地での出土資料であり、直ちに断定できるものではない。同時期の資料としては、溝Ｇ1195（図版539）出土遺物などが挙げられる。大坂城跡のOJ92－18SK330出土資料とほぼ平行期と考えている[11)]。

基準資料の３は寛文火災（1661）以前の資料と推定している。堺系焼塩壷の刻印が「ミなと/藤左衛門」銘の承応３年（1654）以前のものであることから、下限年代もこの頃に求められる[12)]。

表126　基準資料一覧表

	遺　構	遺構の性格	推定年代
1	土壙Ｆ1605	公家町成立期整地に伴なう土壙	1590～1600年代
2	穴蔵Ｃ548	正親町三条家の穴蔵	1620～30年代
3	土壙1432	櫛笥家ごみ穴	1640～50年代
4	土壙Ｂ725	富小路家ごみ穴	1660～70年前半代
5	土壙Ｆ1455	柳原家ごみ穴	1670年代
6	土壙Ｆ1244	櫛笥家ごみ穴	1680年代
7	穴蔵Ｆ1387	櫛笥家ごみ穴転用の穴蔵	1690～1700年代
8	土壙Ｂ776	富小路家ごみ穴	1730年代
9	土壙Ｈ166・Ｈ271	柳原家ごみ穴	1750年代
10	土壙Ｅ45	柳原家ごみ穴	1760～70年代
11	土壙Ｂ716	園家ごみ穴	1780～1800年代
12	土壙Ｇ348・Ｂ687	二階町通路面土壙・園家ごみ穴	1810～50年代
13	土壙Ｈ15	柳原家廃絶時整理土壙	1850～60年代

磁器類の組成では中国製品が肥前系磁器を10％ほど上回るが、これはこの遺構の特殊性である可能性が高い。これよりやや古い様相を示す溝H270の資料（図版520～523）では中国製品と肥前系磁器の組成が拮抗している（図78）。本来はこの時期に肥前系磁器が組成比で上回ると推定している。肥前系磁器は高台無釉の碗や天目形の碗など、いわゆる初期伊万里類で占められている。陶器類では備前系のものがほぼ姿を消し、信楽擂鉢は大型で直立する縁帯部を持つものが現れ、様相が一変する。また瓦質土器は出土量が激減する。

種類	破片数
中国陶磁器	544
肥前系磁器	537
肥前系陶器	270
瀬戸・美濃	253
信楽	42
丹波	194
備前	33
土師質土器	582
瓦質土器	153
土製品	14
不明・その他	17
前代遺物	279
計	2918

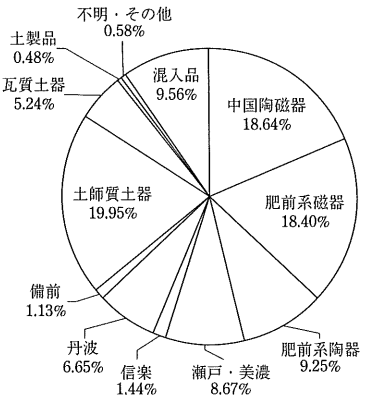


図78　溝H270出土遺物産地組成

基準資料の４は京焼の出土が本格化する時期と捉えている。京焼は前段階から出土し始めるが、錆絵染付や色絵が揃うのはこの時期からである。磁器類では中国磁器が極端に減少し、肥前系磁器が増大する。肥前系磁器の碗類の高台がいわゆる三角高台の製品が主体になる。ただ、皿類には高台径の小さい前段階のものも一定量含まれている（図79）。また白磁や色絵も出土量が増加する。色絵にはいわゆる古九谷様式と仁清手の製品があり、柿右衛門様式のものは含まれない。遺物組成比では肥前系磁器の増加に伴ない、陶器類が減少する。特に瀬戸・美濃系の陶器類は１％代になる。擂鉢類は信楽と丹波の製品があるが、丹波のものはこの時期までで、以後はほとんどみられなくなる。信楽製品は焼締のものがほとんどであるが、口縁端部内外面に鉄泥を塗るものが現れ、以後の主流になる。肥前系磁器の様相や焼塩壷の年代観から、1660～70年前半代の年代を想定している。

器形	破片数
碗	3056
小杯	156
皿	480
大皿	21
鉢	53
壷	102
香炉	8
不明・その他	60
計	3936

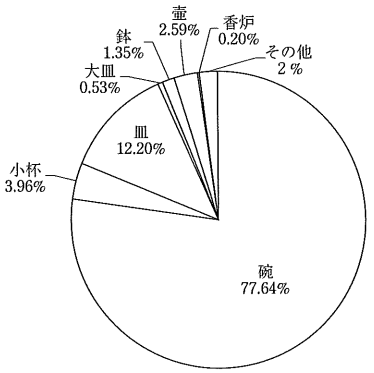


図79　土壙Ｂ725肥前系磁器器形分類

基準資料の５・６・７は比較的規模の小さいゴミ穴の出土資料から、1670年から宝永大火以前の期間を充てている。土師器類に大きな変化はなく、編年資料として明瞭な変化を示す堺系の焼塩壷の刻印を指標としている[13)]。基準資料５では二重枠と一重枠の「天下一堺ミなと/籐左衛門」がみられる。肥前系磁器では柿右衛門様式の色絵製品が現れ、碗類と同じく皿類も三角高台の製品になる。擂鉢類は丹波製品がなくなり、信楽製品で占められる。基準資料６では焼塩壷の刻印資料はいわゆる輪積み成形の製品に「御壺塩師/堺湊伊織」の刻印が押される資料が出土する。刻印資料には、この他に同じ堺系の「泉州麻生」銘のものや京都産「なんばん里う/七度やき志不」などの花塩壷が出土する。籐左衛門系の製品は「御壺塩師/堺湊伊織」銘だけであ

り、かなり使用時期を限定できる資料である。したがって、この遺構出土資料は幕府より「天下一」の使用が禁止される天和２年（1682）以降長くても10年の間に限定できよう。この他、肥前系磁器では型紙摺りの製品が出土するようになる。陶器類では京焼に灯明皿や鍋類が出現し、日常雑器の生産も開始され始めたものと思われる。基準資料の７は宝永大火（1705）に伴なう整地層に土壙上面を覆われたごみ穴で、下限が特定できるものである。焼塩壷は輪積み成形と板作りの両製品に「御壺塩師/堺湊伊織」銘の前代と同じ刻印が押されている。肥前系磁器には「U」字状高台のものがあり、また菊花文を配した禁裏からの注文品とみられる質の高い製品が出現する。陶器類では京焼がもっとも多くなる。擂鉢は信楽の鉄泥を全面に掛けたものが主体になり、胎土も灰白色の粗いものになる。

基準資料の８は18世紀前半の資料であるが、他に良好な一括資料が少なく不明な点が多い。ただ、土壙Ｂ674出土遺物が宝永大火に伴なう整地層を切込む資料として比較的良好な資料と考えている。肥前系磁器類は粗製のいわゆる「くらわんか碗」と薄手の碗が混在している。陶器類では京焼の製品とともに、京・信楽系と分類される製品が出現する。基準資料には含まれないが、擂鉢類には信楽製品の他に堺・明石系のものが現れる。

基準資料の９は土師器皿の編年観や遺構・層位の関係から18世紀半頃に比定したものである。肥前系磁器は粗製の梅樹文碗、薄手半球碗、蛇ノ目凹形高台(低)などが含まれる。陶器類は京・信楽系の丸碗、平碗、半筒碗、蓋物類が出揃い、土瓶や鉄釉鍋類など日常雑器の生産が本格化する。この時期以降、京焼と京・信楽系陶器の区別が困難になる。信楽擂鉢は小型のものに高台が付くものが現れる。また、土製品は人形やミニチュアなど様々な成形技法や形態のものが一挙に増加する。

基準資料の10は天明大火の整地層直下のもので、遺構の埋没時期の下限が1778年にある資料である。肥前系磁器類は粗製の青磁染付碗、筒形碗が少なく、比較的上手の製品が多い。町家地域と比べやや特殊な器種構成であり、公家町の特徴であろう。禁裏注文品の出土量も多いが、これは18世紀後半の遺構に広くみられる傾向である。京・信楽系陶器が肥前系磁器と組成比で拮抗する。京・信楽系陶器の碗類にみられる錆絵染付や上絵が簡略化する。

基準資料の11は天明大火整地層を掘り込む遺構出土資料である。肥前系磁器類に広東碗があり、焼継の資料もみられる。瀬戸・美濃系磁器は含まれない。陶器類は京・信楽系のものが組成比で50％を超え、特に灰釉の土瓶・行平、鉄釉の鍋類が圧倒的になる。18世紀末～19世紀初頭の操業年代を持つ、信楽の石塔窯出土遺物[14]に類品がある。

基準資料の12のうち土壙Ｇ348は、磁器類は肥前系磁器の端反碗、山水文輪花皿などに加えて、瀬戸・美濃系磁器の蓋付端反碗、三田青磁、薄手酒杯類などがみられる。陶器類はイッチン描きや白化粧に鉄釉や緑釉で上絵する土瓶類が目立つ。基準資料の12の土壙Ｂ687は産地や器形が豊富であり、ほぼこの時期の陶磁器類を網羅していると思われる。19世紀前半代にわたる幅広い年代観を持つ資料であるが、内容が豊富であるため基準資料に加えた。肥前系磁器は禁裏の注文品や鍋島藩窯製品から、粗製の白磁の紅皿まで幅広く出土している。他の磁器類には瀬

戸・美濃系のものを始め、中国の景徳鎮窯系や徳化窯系の製品がある。図示していないが、三田青磁、珉平焼の小片も含まれている。陶器類には京焼の禁裏注文品、京・信楽系、瀬戸・美濃系、丹波焼、堺焼、萩焼の他、産地を特定できない鉄釉製品などがある。摺鉢類は堺・明石系の様々な法量を持つものが主流になる。信楽摺鉢は大型のものが少量残る。

基準資料の13は明治初年の公家町廃絶時に下限があるものである。日常のごみ穴ではなく、公家の東京移転や公家屋敷の解体の際に不用なものを廃棄した様相を示すものである。肥前系磁器は色絵のものを中心に時代幅がある。瀬戸・美濃系の木型打込みの皿や、京都産の磁器急須類は19世紀中頃のものである。陶器類の碗・皿類は前段階のものとあまりは変化ないが、鍋や行平類は鉄釉・灰釉のものから、飛びカンナ・イッチン描きのものが主体となる。大型の信楽甕や鉢、丹波の貼付文の焼締植木鉢などが多いのも特徴である。

以上、基準資料の陶磁器類について概観したが、本来出土遺物は調査地の性格や遺構のあり方が色濃く反映されるものである。特に今回の調査地は公家町という他地域に例をみない都市空間であり、陶磁器にもその特徴が表れている。しかし、大半の陶磁器類は町家地域のものと基本的に大きな違いはないと考えている。

B　禁裏注文の肥前系磁器について

本調査地の公家町の特徴を最もよく表している、肥前系磁器の禁裏注文品の資料について見ていきたい。これらは、禁裏と肥前系磁器の関係を示す注目すべき資料である。今回の調査では、当初から18世紀後半の遺構を中心に菊花文の共通意匠を持つ、碗・皿類が一定量出土しており、その成形技法の丁寧さや、染付の技法、発色の良さなどが注目された。そこで発掘調査終了後、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏に出土資料の年代的位置付けと評価を依頼し多くの御教示を得た。その結果、これら一連の染付磁器は、当時禁裏御用を務めていた辻家を中心とする有田の窯元の製品と断定できるものであり、他の消費地遺跡出土例にはみられないものであった。

辻家は、三代の喜右衛門（1716年没）の頃に「禁裏御用命を蒙りたるは此の代より始まる」とされ、以後安永３年（1774）には常陸大掾源朝臣愛常の官位を授かり「天杯を賜う」とされる[15]。また、明和９年（1772）の伊万里陶器商前川家に残る、公家用の注文帖『誂物之雛形』には「ツマミハきや志やニ辻細工之様ニ随分御念入られ可被下」と記されており、その高い技術力を知られていた[16]。禁裏御用の窯元は「禁裏御用例年焼立候窯焼之儀、上幸平山辻喜平次、泉山市助・九兵衛三人ニ相極リ居候故、」（『皿山代官旧記覚書』）とあり、辻家だけでなく泉山にも２軒あったことがわかる[17]。また文化11年（1828）の禁裏御用品の注文が「天気続も宜、存外ニ細工方墓取、一番仕送之儀ハ去年十月五日いまり津出船之末、同閏十一月到着之返答落手仕候由、右一番船ニ而正月御事始之陶器ハ大概揃候得共、其内蓋物等少々焼損有之候故、不足之処、二番船ニ而差遣候、勿論、右之不足品ハ仙洞御用品ニ御座候処、」「右弐番船之儀、十月十四日いまり出船、三番船同閏十一月廿三日同所出船仕、」（『皿山代官旧記覚書』）とあり、３回に分けて京都に送られ正月用の什器に当てられていた。禁裏や仙洞御所などで正月に使用され

る肥前系磁器の総量は3隻の船を必要とする量に達しており、かなりの数量であったことが理解される。今回の調査で出土した遺物はこの様にして、京都に運ばれたものであったと思われる。

出土した製品を概観すると、高台周辺の削りや、絵付、染付の発色など高い技術力を示す技法上の特徴がみられる。また、器形は、碗・皿が基本で、他の特殊な器形がみられない。文様構成にも共通した特徴が見いだせる。18世紀後半の最盛期の文様の主な特徴を挙げれば、以下の通りとなる。

1　文様は16弁の菊花文を基本とし、檜垣文、亀甲文、松川菱、草花文などの散らし文で構成される。なお、これらの散らし文は、前川家注文帖『誂物之雛形』にもみられる。

2　高台内に銘款や圏線が入らない。

3　平碗・嗽碗以外の碗類は、内面に文様をもたない。

4　皿は見込に白抜部分をもち、外面は梅花に輪郭線とダミで特徴のある繋ぎ文を描く。

また、同じ文様をもつ複数の器形が確認され、組物を構成していたと思われる。

この共通した文様意匠から抽出した出土遺物を、遺構年代からみると穴蔵F1387（図版324の9・42)、土壙H33（図版525の17）など17世紀末から18世紀初頭のものが最も古いものであることがわかる。この時期は、辻家三代の喜右衛門の時代に相当する。しかし、文様を検討すると、図版324の42の皿は見込は白抜ではなく5弁花風の手描文があり、高台内にも圏線がある。図版525の17の嗽碗には、外面の菊花文だけで、通常みられる見込の菊花文がみられないなど微妙な差異があり、初期のものは規格文様が定まらなかったものと考えられる（図版83)。図版327の48・52など、18世紀前半代のものは規格化された文様であることから、この頃までには禁裏様式といえるものが確立したと思われる（図版84)。また18世紀末から19世紀代の土壙B716出土遺物では図版342の9・15のような鳳凰文を持つものや菊花文を持たないものが現れ、新しい様相を呈するようになる（図版85)。

同様の特徴をもつ肥前系磁器について、公家町関連の周辺調査事例や伝世資料の類例を探したところ、公家町の発掘調査事例では、同志社大学構内遺跡の出土例がある[18]。他地域の出土例としては大分市の府内城城下町跡遺跡で出土している[19]。一方、伝世資料では冷泉家所蔵のものが知られている[20]。また、佐賀県立九州陶磁文化館所蔵の柴田コレクションにも存在する[21]。いずれも禁裏との関連が想定できる資料である。

C　出土京焼資料について

京都における本焼窯の開窯は、粟田口窯が最も古く、『本朝陶器攷証』の記載などから、遅くとも寛永年間の前半を下らないとされている[22]。しかし、編年研究に欠かせない京焼の窯跡調査がなされていないことから、その具体的な変遷は不明な部分が多い。ただ近年は、江戸遺跡をはじめ各地の消費地遺跡での発掘調査が進み、京焼の出土報告例も増え、その流通過程も次第に明らかになっている[23]。今回の調査では、調査地が京焼との関係が深い公家町であることから、その具体的な関連を示す遺物の出土が予想された[24]。調査の結果、禁裏注文品とみられる京焼製

品（図版86）が一定量確認できたことに加え、その他にもいくつかの特徴的な出土遺物があった。以下に列挙する。

1　初現期に近い高火度焼成の京焼と推定される碗が出土した（図版302の１・２）。現時点で京焼と断定できる資料ではなく、今後の研究課題資料として提示しておきたい。

2　1660年代の遺構から完成度の高い上絵陶器の出土が確認された（図版312）。上絵陶器は17世紀前半の軟質施釉陶器や17世紀中頃の仁清の上絵陶器の存在から、比較的早い段階からの出現が予想されていた。このことが今回の調査でも裏付けられた。

3　碗類の各種器形の変遷を一定程度明らかにできた（図80・81）。丸碗や平碗、半筒碗など日常の基本的な器形の消長はこれまで必ずしも明らかではなかった。今回の調査で、それぞれの器形の出現期とその型式が提示できたと考えている。小杉碗、半筒碗など18世紀後半以降に江戸遺跡などで普及する器形が今回の調査ではあまり出土していない。江戸と上方では使用される器形の選択がされている可能性がある。また、皿類が17世紀代にはなく、18世紀後半になって登場することも確認できた。

4　京焼の日常雑器の生産が、17世紀後半から始まることが明らかになった。土瓶や鍋類、灯明皿といった日常雑器の出土は、これまで18世紀初頭のものが最も早い例とされていた[25)]。今回の調査では、1680年代に比定した土壙F1244出土遺物に鉄釉の鍋（図版322の11・12）と灰釉の灯明皿（９）があり、1670年代頃の土壙F1475出土遺物からも、灰釉の鍋（図版435の20）が出土している。これらの製品は胎土及び釉調が、京焼の碗類と同じものである。鍋や灯明皿、土瓶などの日常雑器は、以後の京焼及び京・信楽系陶器の主力生産品に成長していくものと考えられる。

江戸時代前期の京焼は、京都の町家域や他地域での出土量は少ない。今回の調査で出土した多くの京焼資料は、京焼と公家との関連を改めて認識させるものである。その中でも、「仁清」銘をもつ御室窯製品が、全国の出土資料総数に匹敵する数が出土したことは、象徴的な事象であろうと思われる[26)]（表127）。以後、京焼は日常雑器の生産を通して、信楽など周辺の窯業地を含む京・信楽系陶器として、生産と流通を拡大していったものと考えられる。

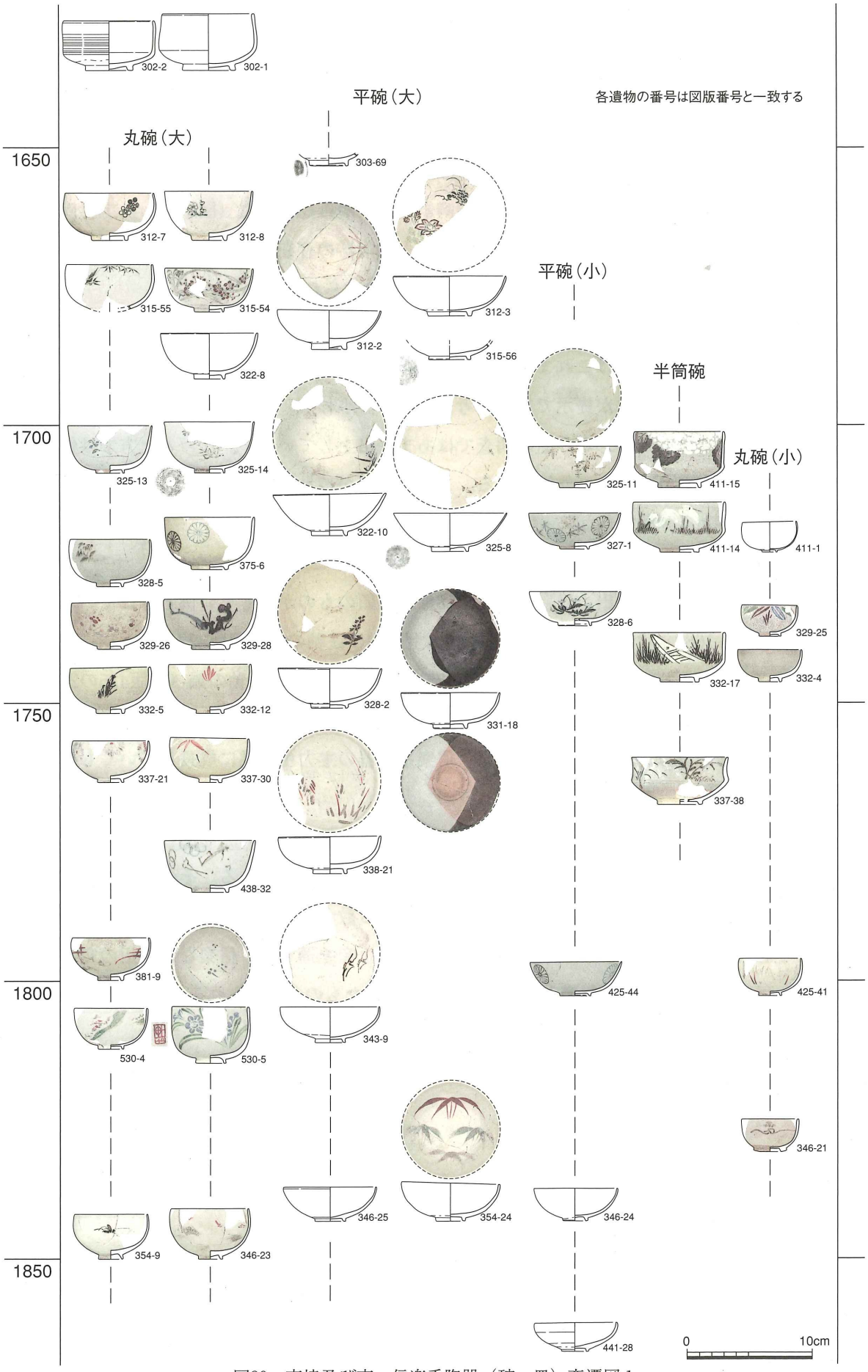


図80　京焼及び京・信楽系陶器（碗・皿）変遷図１

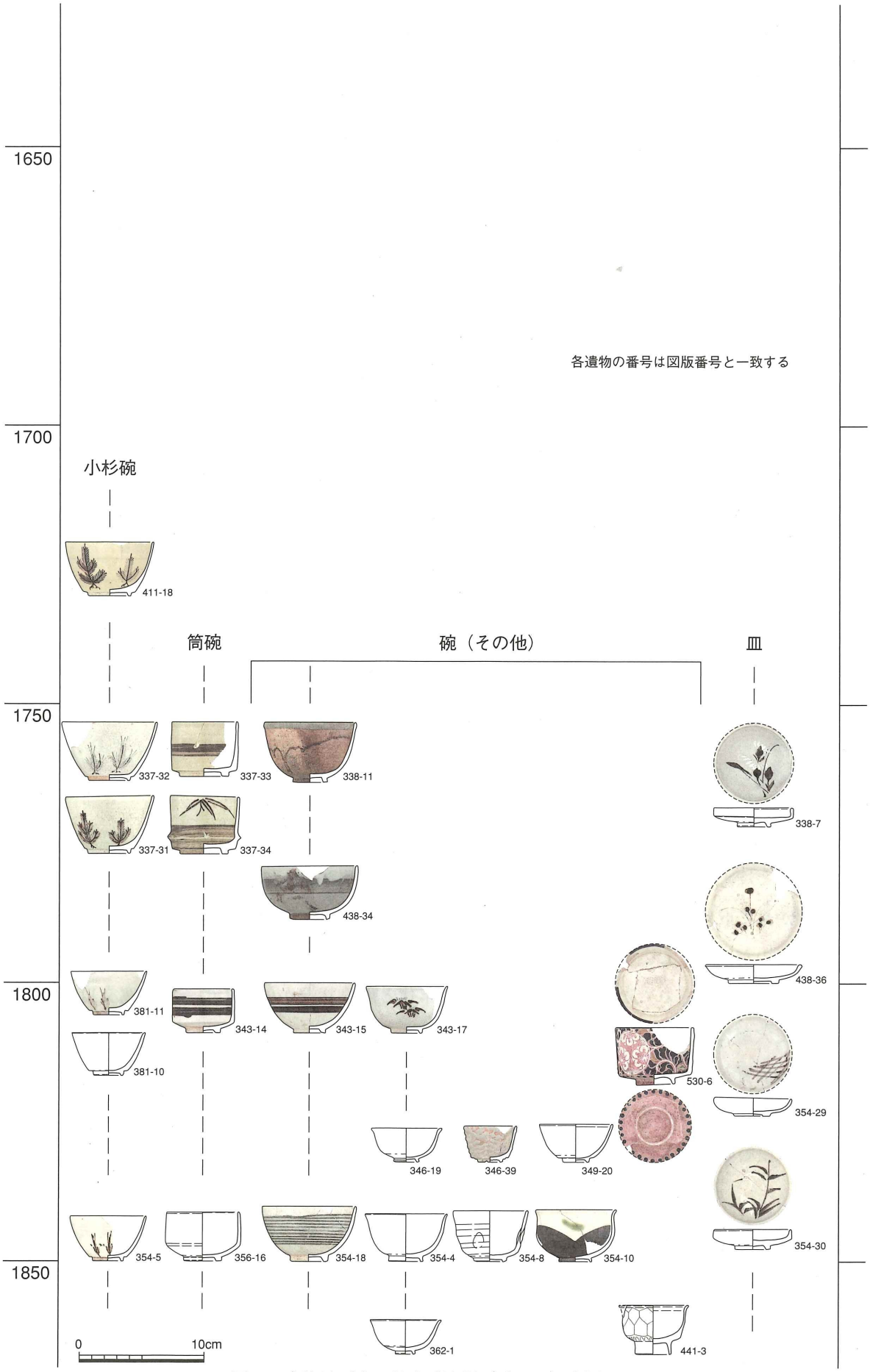


図81　京焼及び京・信楽系陶器（碗・皿）変遷図２

表127　「仁清」刻印資料一覧表

No.	遺構名	年代	器種	法量（cm）			胎土	釉薬	備　考
				口径	器高	底径			
図版312－５	土壙Ｂ725	1660代	碗		3.3(残)	5.0	灰白	灰	
図版383－４	土壙Ｅ718	18～19c	碗			5.4	黄白	灰釉(橙)	京焼風陶器か　小判、渦兜巾
図版384－15	土壙Ｂ703	19c前	碗			4.2	淡黄灰	灰	繭印
図版384－16	土壙Ｂ703	19c前	鉢	21.6(推定)	9.5	11.6(推定)	黄白	白濁	幕印
図版400－１	土壙Ｅ310	1660～70	碗			4.9	白	灰	繭印
図版407－１	土壙Ｅ302	17c後半	碗			4.6	灰白	錆絵	高台内スリップ　繭印
図版413－８	土壙Ｅ265	18c後半	碗			4.3	灰白	上絵	金・青彩か　高台内施釉
図版429－７	Ｅ区南北断割		碗			4.6	白	灰	
図版435－17	穴蔵Ｆ1475	17c末	花入	14.4(推定)	22.0(推定)	8.9	灰黄	白濁	鼓形花入 平底無釉　幕印
図版435－18	穴蔵Ｆ1475	17c末	碗	11.2(推定)	8.7	4.6(推定)	淡黄	錆+透明	高台内施釉　渦兜巾
図版443－１	土壙Ｆ933	18c前	碗			3.9	灰白	灰	繭印
図版443－２	井戸Ｆ961	19c前	筒形容器	4.8	6.4	4.5	灰白	鉄	入隅筒形向付　繭印
図版443－６	土壙Ｆ1170	19c中	小杯	6.8	2.9	1.3	黄橙	錆絵染付	幕末期　内面に呉須でお多福
図版444－23	土壙Ｆ1247	18c後半	碗			4.4	灰白	灰	繭印
図版498－25	整地Ｇ3752	17末～18初	碗	12.3(推定)	8.4	4.9	黄	透明	全面施釉 高台畳付３箇所目痕繭印
図版517－16	土壙Ｇ1405	18c初	碗		2.4(残)	5.0	灰黄	灰	高台内施釉
図版517－17	Ｇ区３面掘下げ	18c初	碗		1.9(残)	4.6	灰白	錆絵	兜巾　繭印
図版517－18	土壙Ｇ1128	17c末	碗		2.5(残)	3.3	灰白	灰	幕印
図版517－19	土壙Ｇ1278	17c末	碗		3.1(残)	4.6	褐灰	鉄	高台兜巾　繭印
図版517－20	井戸Ｇ592	18c初	鉢				灰黄	灰	高台無釉　大判
図版517－21	土壙Ｇ1278	17c末	香合か		1.2(残)	3.0	淡黄橙	上絵	碁笥底　内面無釉
図版517－22	Ｇ区３面掘下げ	18c初	鉢		4.9(残)	8.5	紫灰	灰	
図版526－10	土壙Ｈ33	17末～18初	扇形合子	16.3(長さ)	3.3(蓋･身)		乳白	透明	蓋・身セット
図版531－21	土壙Ｈ36	19c	碗		5.1(残)	4.8	灰白	灰	高台焙着痕アリ　繭印
図版532－13	土壙Ｎ20	17c末	碗		1.2(残)	3.2	灰白		錆絵か
図版542－52	石組溝Ｒ150	18c初	碗		095(残)	4.2	灰白	灰	繭印
図版549－58	Ｘ区撹乱		掛花入		16.2(残)		灰黄	鉄	二次被熱　幕印か

第５節　穴蔵Ｇ749出土陶磁器について

江戸時代前期の穴蔵Ｇ749からは、整理箱に38箱分の土器・陶磁器類が出土した。この穴蔵跡はほとんど焼土と炭だけで埋められており、土層断面の観察からは、全体に遺物が分散している状態が見て取れた。各個体の残存・復元率がかなり高いことから、この穴蔵の中に収納されていたものが被災したと考える。火災後の整理で中のものを掘り出し、使用できない陶磁器類などが再び埋め戻されたと考える。出土遺物の年代と埋没状況から、この資料は寛文11年火災によって穴蔵に収納されていた陶磁器類が焼けて廃棄された、17世紀後半の一括資料である。陶磁器の品質が良く、数揃い物が多いのが特徴である。特に茶道具をはじめとする日用品ではない陶磁器類が多い。その内容は、当時の公家の好みが反映されていると考えられる。ここでは、公家階層の所有した陶磁器を知るうえで良好な資料である、穴蔵Ｇ749出土資料について述べたい。

陶磁器の製作年代　出土遺物の中で最も古い時期のものは輸入の青磁である。竜泉窯産で皿（図版458の９）と香炉（図版459の２）がある。皿は14世紀後半から15世紀中頃にあたる。それに対し、新しい時期の遺物には肥前系青緑釉碗（13）、五彩蓋付壷（図版456の８・９）、五彩蓋付鉢（10・11）、赤絵皿（図版455の９）、金銀彩組み碗（図版454の44～48）、染付蝶文中皿（図版455の６）、白磁杯（図版454の50・51）などがあげられる。これらは1670年代のものとされて

いる。最も新しい遺物には土師器皿類（図版454の１～24）があり、これらはⅫ期古段階の新相に属している。

16世紀後半からのものには景徳鎮窯系の青花小鉢（図版457の12)、朝鮮産白磁鉢（図版459の３)、ベトナム産白磁碗（４）などがある。17世紀初頭には景徳鎮窯系の青花芙蓉手兜鉢（図版457の13～17)、青花文字鉢（18）がある。17世紀前半になると景徳鎮窯系に加えて、漳州窯系の青花碗・皿類（５～７、図版458の５・６）や印判手の大皿（７）などがみられる。京都市内では出土例がほとんどみられない徳化窯の白磁碗（８）も含まれている。

国産陶器では、肥前系に17世紀初頭のものがある。絵唐津沓形碗（図版459の15)、絵唐津鉢(18)、広口壷（図版460の13）などである。高取系では水指（図版460の14）がある。17世紀前半には肥前系の鍔縁皿（図版459の16）[27]がある。高取系では鉢（17）や筒形碗（12）などがある。17世紀中頃には京焼の碗類（７～10）がある。

肥前系磁器の碗では、蓋付碗（図版454の36）や面取碗（37）など1630～40年代のものが少しある以外はほとんどが1650～70年代である。皿には兎文中皿（図版455の５)、錆釉染付皿（１～３)、宝文中皿（８）など1630～40年代のものが25％強の割合であるが、1650～70年代のものが最も多い。他には白磁香炉（図版456の４）や瓶類（図版457の１～３）などの1630～40年代のものがある。

揃い物　国産・輸入ともに同一器形・同一文様の碗や皿などが10個体・20個体の単位で出土しており、数揃い物の含まれる割合が高いことが挙げられる。輸入磁器では芙蓉手鉢（図版457の10)、兜鉢（13～17）は５個体ある。青花小鉢（12)、青花文字碗（８）はそれぞれ10個体ある。国産磁器では染付の杯（図版454の33）が19個体ある。染付の碗では（38）が９個体あり、碗（34・42）はそれぞれ５個体以上ある。皿では染付算木文皿（図版455の４）が10個体あり、赤絵金彩皿（９）は10個体ある。陶器にも揃い物があり、鍔縁皿（図版459の16）が10個体である。食器類に各種の数揃い物を必要とする生活様式がうかがえる。

白磁　白磁には杯・碗・皿類・香炉がある。図版454の52・53は丸碗で20個体以上を確認している。図版455の10、図版456の１～３は皿である。すべて型作りで、小型の木瓜形のもの、輪花状や菱形、口紅が付くタイプなどがあり、器形が豊富である。口紅が付く図版456の３は４枚、それ以外は各々10枚揃いである。端反の杯の図版454の50・51は器壁が薄く作られている。他にはミニチュア盃、香炉２点、瓶３点などがある。磁器の中で白磁が占める割合はおよそ３割である。

吉祥文　図版457の８の輸入碗は「福 寿 康 寧」の吉祥文字が外面四方に書かれており、10個体出土している。国産磁器には、図版455の４の算木文皿があり、これも10個体揃っている。この算木文は「乾」を表している。他には宝文皿、寿文鉢など吉祥に関係する文様を描くものがみられる。

注文品　揃い物の中には特殊なものも含まれている。肥前系磁器の金銀彩赤絵碗と皿はその

例である（図版454の44～48）。４種の碗と１種の皿で構成される５点セットで、これが３組以上出土している。大型の碗（48）は高台が高く、端反形の器形で、漆器碗に類似する。体部外面と見込に描かれた紋章風の装飾からも漆器碗を連想する。製作年代は金銀彩の手法から1655年から1670年代のものとみられる。特殊な意匠の揃い物であること、製作技法が丁寧であること、生産地や他の遺跡での出土例がないことなどから、特別に生産された注文品とみられる。

茶の湯に関連した遺物　出土した茶道具類には桃山時代のものが多く含まれ、これらは伝世品として位置付けることができる。注目される遺物には茶入がある。この遺構からは、16点出土しており際だって多い。輸入と国産のものがあり、輸入と考えられるものは３点ある。国産では瀬戸・美濃系が多い。形も肩衝、小海、擂座、手付と種類も豊富である。碗は10点ほどが出土している。瀬戸・美濃系の天目碗１点、高取系の筒碗２点、絵唐津の沓碗２点がある。これ以外に京焼の碗類が図示していないものも含めて５点あり、これらも茶の湯に使用された可能性がある。他には丹波産建水（図版460の19）があり、伊賀産肩付壷（20）、高取系四耳壷（図版461の２・３）などは茶壷とみられる。肥前系磁器の香炉には白磁（図版456の４）、祥瑞写し（７）があり、陶器の香炉には高取系（図版459の23）と肥前系（22）がある。

煎茶に関連した遺物　今回出土した中国の宜興窯の紫泥茶罐（図版459の５・６）は、日本での出土例としては初期のもので、国内ではまだ出土例が少ない。今回の調査ではこの遺構の他にも17世紀後半の土壙Ｇ1128から宜興窯の朱泥水注（図版517の23～25）が出土しており、この時期には確実に煎茶の風習が行なわれていたとみられる。宜興窯の紫泥茶罐は、長崎の1663年の火災層から同様のものが出土している[28]。煎茶碗としては端反形の杯が使われた可能性がある。中でも染付杯（図版454の33）は同じものが19個体出土しており、煎茶碗として使用されたものの有力な候補である。17世紀の後半には、公家の生活の中に煎茶が取り入れられていることがわかる貴重な資料となった。



図82　茶の湯道具

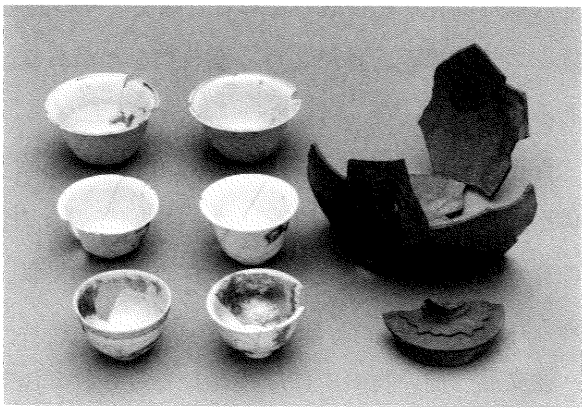


図83　煎茶道具

輸出用の肥前系磁器　肥前系磁器の五彩の蓋付壷（図版456の８・９）や蓋付鉢（10・11）は、1670年代のもので当時最新の調度品であり、これらはヨーロッパ向けの輸出用製品とみられる。

陶磁器の組成　出土遺物の総破片を分類すると、磁器の割合は全体の52％で、その内肥前系のものがほとんどを占める。中国などの輸入品は10％弱である。陶器は約25％あり、輸入品も含まれる。生産地の判別できない破片が多いため、施釉陶器と焼締陶器に分類した。やや焼締陶器が多い。土師器類の出土は約16％に留まり、他のこの時期の遺構に比べ少ない。

種類	点数
肥前系磁器	3530
中国磁器	667
施釉陶器	966
焼締陶器	1189
土師皿	1158
土師質他	194
瓦	64
金属	321
石製品	164
骨製品	1
不明･その他	58
計	8312

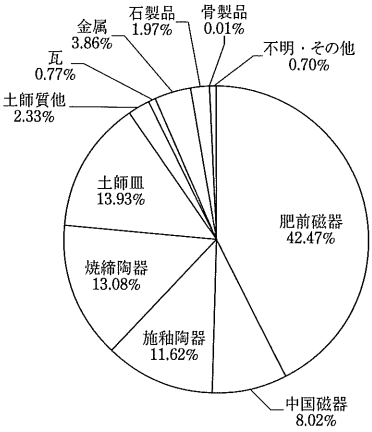
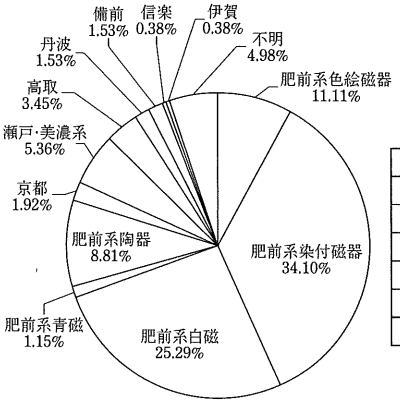


図84　総破片数分類

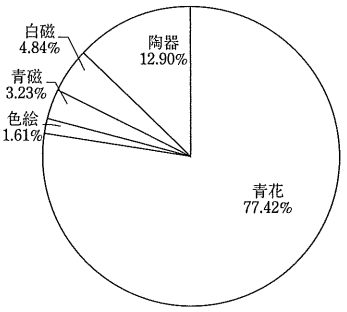
破片接合後、種類と器形が判明した、国産の陶磁器は261個体ある。その中で磁器は187個体で、約75％を占める。染付は89個体で磁器の50％弱である。次に白磁が66個体あり多い割合を占める。色絵は29個体あり、約15％である。青磁はごく少量である。陶器では肥前系が最も多く23個体ある。次いで瀬戸・美濃系が14個体、高取系が９個体である。これに京都、備前、丹波と続く。信楽、伊賀は少ない。破片接合後、種類と器形が判明した、輸入の陶磁器62個体の中では青花が48個体で、75％以上を占めている。

種類	点数
肥前系色絵磁器	29
肥前系染付磁器	89
肥前系白磁	66
肥前系青磁	3
肥前系陶器	23
京都	5
瀬戸･美濃系	14
高取	9
丹波	4
備前	4
信楽	1
伊賀	1
不明	13
計	246



国産陶磁器

種類	点数
青花	48
色絵	1
青磁	2
白磁	3
陶器	8
計	62

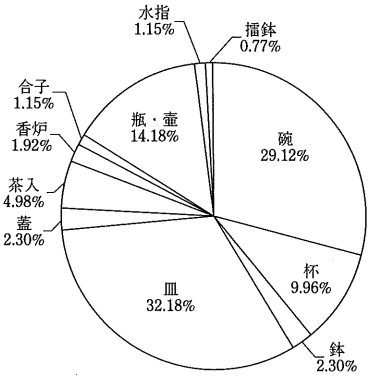


輸入陶磁器

図85　陶磁器種類別組成

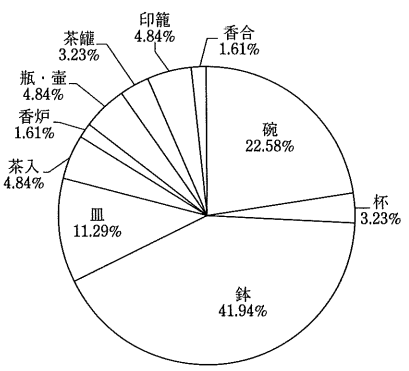
国産の陶磁器261個体の中では、碗が76個体、皿が84個体と多く、66％を越える。次いで杯が26個体ある。壷・瓶が14％になる。茶入が13個体あり、特に多いのが特色である。鉢は６個体で割合が低い。輸入の陶磁器62個体の中では、鉢が26個体で41％を占める。擂鉢などの調理具はきわめて少なく、壷類に関しても茶壷とみられる物がほとんどである。食膳具以外は茶入を始めとして水指、建水、香炉、合子など茶の湯に関連するものがほとんである。このような陶磁器の組成は日常生活での食器組成ではない。

器種	点数
碗	76
杯	26
鉢	6
皿	84
蓋	6
茶入	13
香炉	5
合子	3
瓶・壷	37
水指	3
擂鉢	2
計	261



国産陶磁器

器種	点数
碗	14
杯	2
鉢	26
皿	7
茶入	3
香炉	1
瓶・壷	3
茶罐	2
印籠	3
香合	1
計	62



輸入陶磁器

図86　陶磁器器形別組成

穴蔵G749の所有者　『中むかし公家町之絵図』、『寛永十四年洛中絵図』、『洛中絵図寛永後万治前』の3種の絵図によると、穴蔵G749がある屋敷は「安禅寺御門跡」にあたる。最も時期的に近接する絵図『新改内裏之図　御紋入』(1677) では、宅地の間口幅が記載されていないため判断しにくいが「杁之坊」屋敷にあたるとみられる。「安禅寺」は「杉之坊」と号されており[29]、この屋敷が「安禅寺御門跡」にあたり、穴蔵G749の所有者と考えられる。

これら江戸時代前期の公家屋敷内で出土した一括遺物は、当時の公家が蔵に収納していた陶磁器類であり、この遺物を検討することにより公家の生活の一部分を明らかにすることができる。公家と武家、あるいは公家と町人など、文化的な特徴の相違点を考えていく上で大変参考となる資料である。

第6節　公家町の瓦

A　公家町の屋瓦構造

今回の調査で得られた瓦類は、寛文頃の火災、宝永大火、天明大火などの火災後に掘られた廃棄土壙出土のものが多い。これらの瓦類は、火災時に屋瓦として使用されていた瓦類である。従って、廃棄土壙出土の瓦類を詳細に分析すれば、その地点に存在していた建築の屋根構造をある程度復元できるはずである。しかし、瓦の出土量は膨大であり、軒瓦や棟端瓦など文様を有するものを中心に採取したことは、既に述べた通りである。それゆえ、公家屋敷の屋根構造の復元に資するデータを提示することはできない。そこで、調査時の所見と採取された軒瓦類の観察から、ある程度の見通しを述べておく。

寛文期の火災及び宝永大火に伴なう廃棄土壙は、土砂中に多量の瓦が包含されるといった状況であった。また、軒丸瓦、軒平瓦の出土量が少ないのに比して、棟丸瓦は多く出土している。以上から、宝永大火以前の公家屋敷の建築は、丸瓦や平瓦を全体に葺いた屋根ではなく、棟部分にのみ瓦を用いた桧皮葺や板葺の屋根であったことが想像できる。一方、天明大火に伴なう

廃棄土壙は、土砂をほとんど含まず、瓦類のみがぎっしり詰まる状況であった。出土している瓦は桟瓦が大半を占め、丸瓦や平瓦は極端に少ない。軒瓦も軒桟瓦が主で、軒丸瓦や軒平瓦は少ない。また、棟丸瓦は多量に出土する。以上から、宝永大火以降の公家屋敷の建築には総瓦葺のものが現れたこと、それは桟瓦葺であったこと、桟瓦葺の建築にも棟丸瓦が多く用いられたことなどが指摘できる。

近世京都の町家地域では、総瓦葺の建築は桟瓦の普及に伴なって18世紀の前半から中頃に一般化すると言われてきた。今回の調査では、公家町においても同様の傾向にあることを確認できた。他方、町家地域では宝永大火以前には屋瓦がほとんど用いられないのに対し、公家町では棟丸瓦などで重厚に飾られた棟が存在したことが明らかになった。

B　菊花文棟丸瓦の変遷

以上のように、近世公家町においては、屋根構造が変化しても棟丸瓦や棟端瓦は普遍的に存在した。とりわけ棟丸瓦は各時代において常に一定の出土量を認めることができ、今回の調査でもっとも多く得られている瓦資料である。本報告では、各火災時の廃棄土壙から出土する瓦資料を用いて、江戸時代における瓦当文様の変遷を跡付ける資料を提示した。その結果、菊花文棟丸瓦の瓦当文様の大まかな変遷過程を明らかにできた。以下、概要を述べる。

17世紀前半　土壙C916出土資料を標準とする。出土瓦は二次的な被熱を受けているが、この時期の火災を伝える記録を知らない。菊花文棟丸瓦の周縁は無周縁である。中房はボタン状が一般的で、これに環状中房が加わる。花弁の数は様々であるが、８葉の場合は二重菊を基本とする。花弁の形は二重菊の間弁を除けば、すべて凹弁である。

17世紀中頃　土壙B725と土壙S43を標準とする。いずれも寛文期の公家町火災に伴なう廃棄土壙で、出土瓦は二次的な被熱を受けている。土壙C916資料と同様の無周縁型の棟丸瓦に加えて、有周縁型が現れる。無周縁型は17世紀前半に生産され継続使用されていたもの、有周縁型は17世紀中頃に加わったものと考える。有周縁型の中房はボタン状、環状、粒状など様々である。花弁の形は凹弁である。花弁の数は８葉二重菊を基本とするが、16葉一重菊が存在し、後代に主流となる８葉一重菊も登場する。

17世紀後半から18世紀初頭　土壙Ｏ１と土壙Ｓ６を標準とする。いずれも宝永大火に伴なう廃棄土壙で、出土瓦は二次的な被熱を受けている。出土菊花文棟丸瓦はすべて有周縁型で、中房は粒状を基本とし、環状中房やボタン状中房が少量存在する。花弁の形は凹弁である。花弁は８葉一重菊が主流となる。

18世紀中頃から後半　土壙R21と土壙R87を標準とする。いずれも天明大火に伴なう廃棄土壙で、出土瓦は二次的な被熱を受けている。出土菊花文棟丸瓦はすべて有周縁型で、中房は粒状、花弁の形は凹弁、弁数は８葉で統一される。

18世紀後半から19世紀中頃　この時期の良好な一括資料を得られなかったため、検出遺構面や共伴遺物によって19世紀前半と思われる遺構出土の資料（土壙B687、土壙B721など）と、明治初年の公家町廃絶時に埋められたと考えられる遺構から出土した資料（瓦組土壙B636、溝

Ｓ１上層）を標準とした。従って、掲載した資料には、想定された時期を大きく遡るものが含まれている可能性がある。また、両時期の様式的な差異を観取するには至っていないので、天明大火以降幕末期までを一つの段階として捉える。出土菊花文棟丸瓦はすべて有周縁型で、前代の主流であった有周縁粒状中房凹弁８葉一重菊式が一部残存する。他方、全く新たに粒状中房凸弁16葉一重菊式が登場して、こちらが主流となる。

さし部（軒丸瓦でいう丸瓦部）の変化についても述べておく。17世紀前半の無周縁型では、さし部は幅広の板状の生地を瓦当裏面の上端に弧状に接合する。さし部の幅は、時代が下るにつれて少しずつ狭くなり、18世紀には板状、19世紀に至ると棒状のものが現れる。16世紀末から17世紀初頭の土器類と共伴する桐文棟丸瓦例（図版562の８）は、さし部裏面に布目を残し、小型の丸瓦成形台で製作されているものである。すなわち、棟丸瓦は当初は軒丸瓦と同様の手法で製作されていたが、17世紀前半にはアラジから切り取られた板状の生地を直接接合する技法に代わり、当初留めていた軒丸瓦状のさし部形態も、機能にあわせて簡略化されていったものと考える。

また、さし部の接合方法にも変化がみられる。17世紀前半代の製作と考える無周縁型の棟丸瓦は一様に瓦当が厚い。一方、後出する有周縁型の瓦当は薄い。この違いは、瓦当にさし部を接合する際の技法の違いとして説明できる。無周縁型は、瓦当笵に円板状の生地を押捺した後、上半に刻みを入れ、板状のさし部を接合し、その後さらに、瓦当裏面に生地を重ねるため、瓦当が厚くなる。これは、さし部を瓦当に強固に密着させるための製作過程と考える。他方、後出の有周縁型は、さし部を接合した後、瓦当裏面に生地を足さないため、瓦当が薄い。これは、さし部の小型化・軽量化に伴なう瓦当裏面との接合法の簡略化の流れと見る。さし部の板状・棒状化と接合方法の簡略化の流れは、棟丸瓦１個体あたりに使用される原料粘土を少なく押さえ、棟丸瓦１個体あたりの製作にかかる労働時間を著しく短縮したものと考える。

Ｃ　金箔瓦

今回の調査では、江戸時代前期の金箔瓦が出土しており、公家屋敷の建築に金箔を施した瓦が使用されていたことが明らかになった。しかし、金箔瓦の出土量は極めて少ない。図版560に掲げたものと、図版565の１の獅子口以外は図化できない小片が数点あるのみである。金箔瓦が少ない理由の第１は、公家屋敷の屋根構造に求められると考える。上述したように、江戸時代前期の公家屋敷の建築は棟以外には瓦を用いない桧皮葺であった。そのため、軒丸瓦・軒平瓦はあまり使用されていない。金箔瓦の主要な使用部位は軒部分であるため、公家町においてはその出土量が少ないのであろう。理由の第２は、公家屋敷の成立時期に求められると考える。調査結果で明らかなように、調査地点付近に公家町が成立するのは、豊臣秀吉による京都改造の時期を大きく下る慶長末年（1610年代）である。桃山時代に盛行する金箔瓦は、この時期には既に盛期を過ぎていたことが予測できる。これ以外に、主として城郭や武家屋敷に用いられた金箔瓦の公家屋敷への受容の問題などを考えることもできるが、論じるための材料を欠く。

図版560の７～10は、屋根に葺かれたものではなく、殿舎の妻に飾られたものと考える。江戸

時代前期の宅地６（「やうりんいん」邸もしくは「柳原」邸）で使用されていたものである。この資料によって、金箔瓦の特殊な使用法の一端が明らかになった。

D　家紋瓦の分布

今回の調査では、家紋を表した軒瓦や棟端瓦が出土しており、公家屋敷に家紋瓦が用いられていたことが明らかになった。家紋は各家に固有のものであり、家紋瓦は建築意匠に現れた各家を示す固有の記号と見なすことができよう。従って、その平面的な出土分布に注意すれば、各宅地の家主を類推することができるはずである。今回の調査では、豊富に残された公家町古絵図と検出遺構との対比によって、公家町の宅地割と各公家屋敷との対比を行なった。これを補強・検証する目的で、各家紋瓦の出土分布図を作成した（図87・88)。最も多量に出土している家紋は天皇家、宮家、門跡などが用いる菊花文であるが、これは公家邸でも盛んに用いられた紋章であるため、この作業からは除外した。同様の理由で、桐文も除外した。

江戸時代前期の家紋瓦は、４種類が出土している。出土地点が明確な資料は、唐花文が29点、牡丹文が９点、笹竜胆文が２点、水葵文が１点、である。唐花文はＣ区の南東部分に集中し、Ｄ区の全域にも分布がみられる。この分布域は宅地９にあたる。宅地９は、公家町成立期から17世紀中頃まで正親町三条邸が占地し、これが17世紀後半に北から難波邸（宅地９ａ)、正親町三条邸（宅地９ｂ)、三条転法輪隠居邸（宅地９ｃ）に分割される。これらの諸家の内、唐花文を用いるのは三条転法輪家である。唐花文が特に集中するＣ区は宅地９ｃにあたり、古絵図による宅地割復元と一致する。また、出土した唐花文瓦は、大半が二次的被熱によって赤変していること、共伴する土器・陶磁器類が18世紀初頭の年代を示すことから、宝永大火によって焼け落ちた建物の瓦であることが明らかである。出土した唐花文瓦は、17世紀後半に占地し、宝永大火で焼け落ちた三条転法輪家の殿舎の屋根を飾っていたものであることは明らかである。牡丹文瓦は、Ｄ区の北部に分布が集中する。この地点は、上記と同様17世紀中頃までは正親町三条邸、17世紀後半から宝永大火までは難波邸が所在した。牡丹文は難波家が用いる家紋である。これも古絵図による宅地割復元と一致する。唐花文瓦と同様、牡丹文瓦も二次的被熱で赤変しており、宝永大火で消失した建物に葺かれていたものであることが推測できる。笹竜胆文瓦は、Ａ区の北端部に２点分布する。この地点は宅地３の南端部にあたる。宅地３は公家町成立当初には六条邸、次いで千種邸、17世紀中頃には空地となり、17世紀後半には園邸が占地する。笹竜胆文は千種家が用いる家紋である。出土した笹竜胆文瓦は、17世紀前半の千種邸の屋根に葺かれていたものであろう。水葵文瓦は出土量が少ない上、帰属する公家が不明である。

江戸時代中期から後期の家紋瓦は、６種類が出土している。出土地点が明確な資料は、結雁文が24点、竹に雀文が12点、鶴文が10点、酢漿草文が10点、抱杏葉文が１点、直違鍵文が１点ある。結雁文瓦はＲ区の中央部から北半に集中して分布する。古絵図による宅地割復元では、宅地24に該当する。宅地24は宝永大火以降明治初年まで、三条転法輪邸が占地した。結雁文は、三条転法輪家が用いる家紋の一つであり、古絵図による宅地割復元と一致する。竹に雀文瓦は、Ｃ区に出土分布の中心がある。古絵図による宅地割復元によれば、宅地20の前の二階町通の路

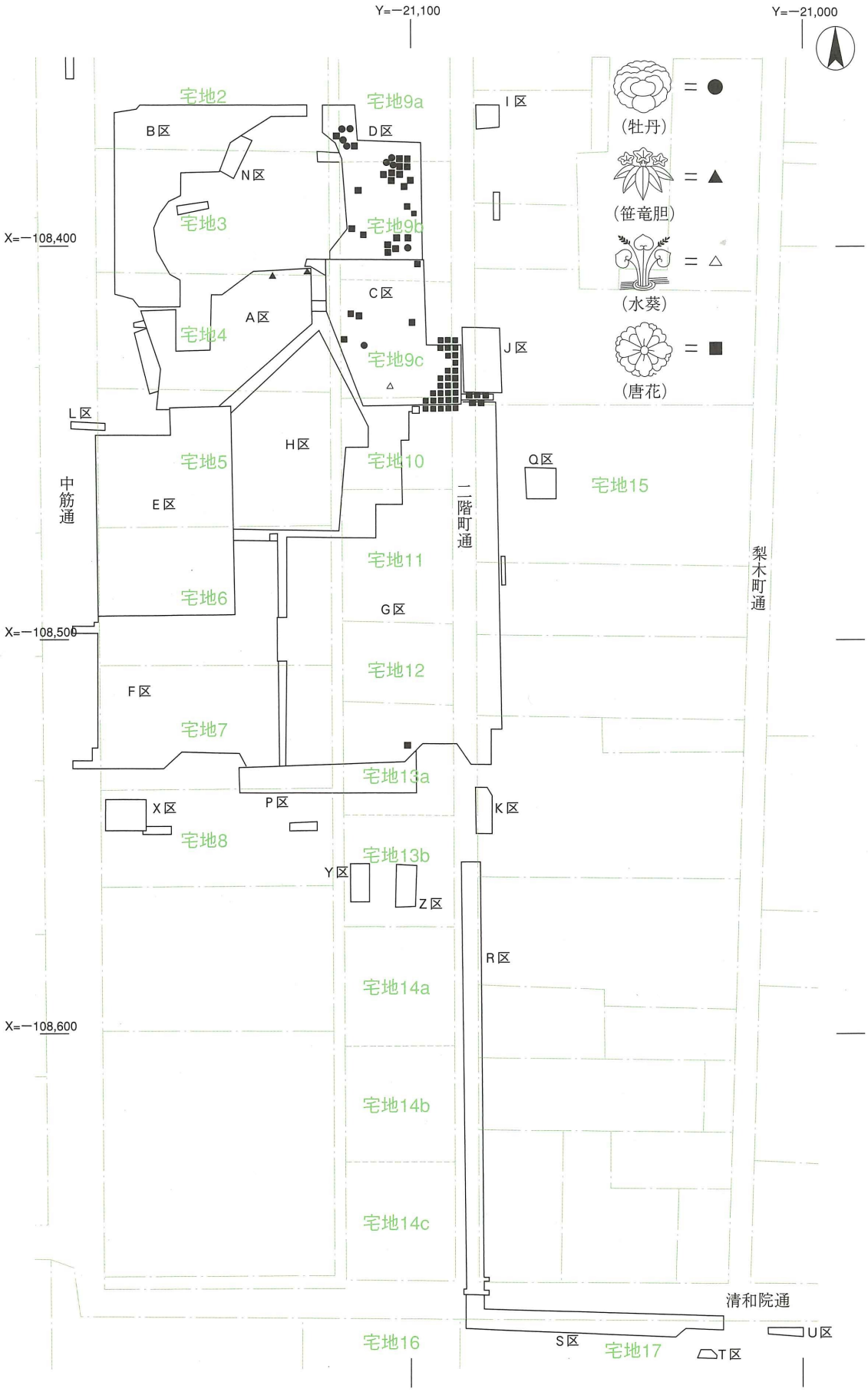


図87　家紋瓦の分布１（宝永大火以前）

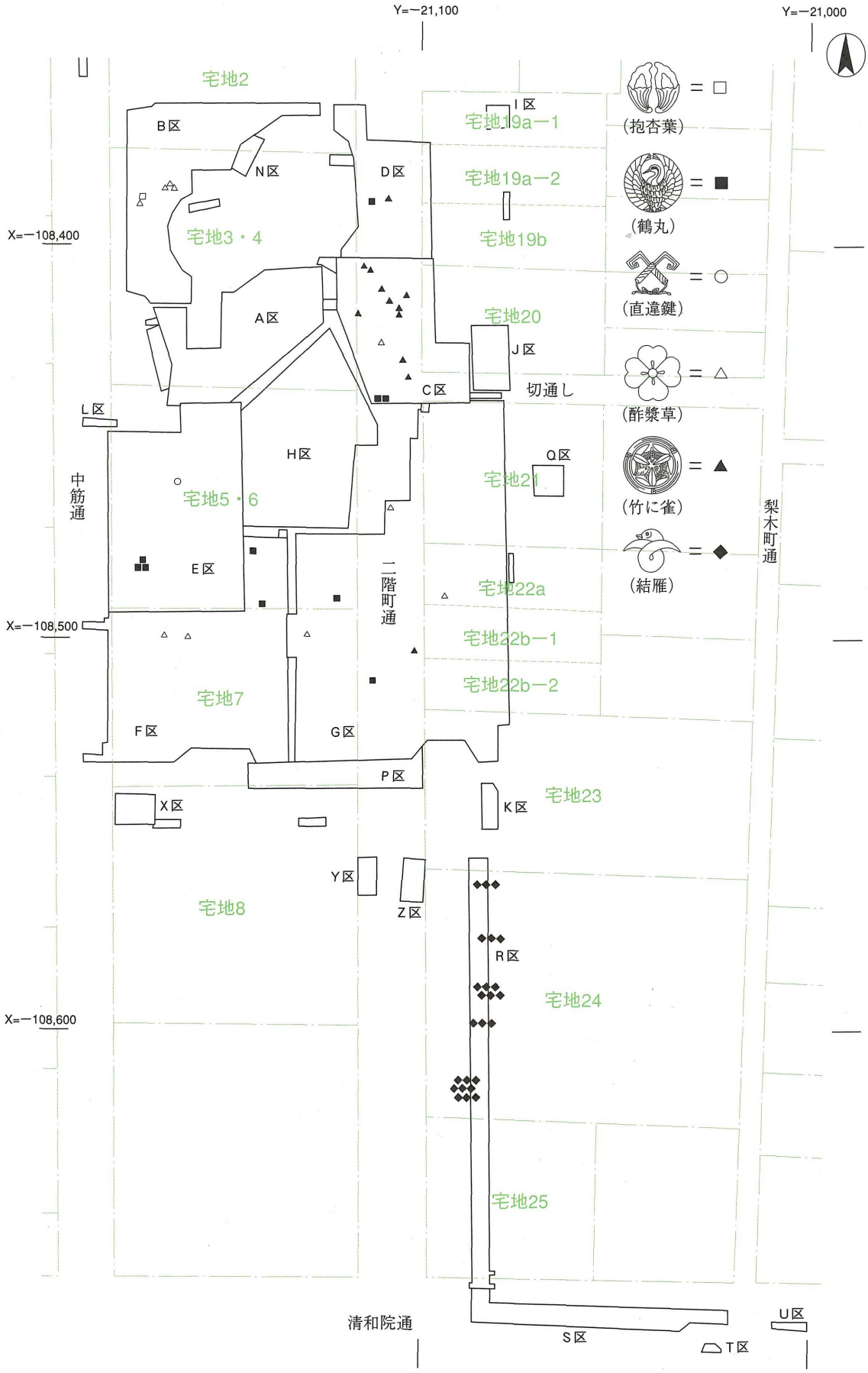


図88　家紋瓦の分布２（宝永大火以後）

面上にあたる。宅地20は頻繁に家主が替るが、竹に雀文を用いるのは、18世紀後半と19世紀中頃に占地した甘露寺家である。また、北隣の宅地19ｂに、19世紀を通じて占地した堤家も竹に雀文を用いる。出土した竹に雀文瓦は甘露寺邸か堤邸で使用されたものであろう。鶴文瓦は、Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ区にわたって広範囲に分布するが、分布の中心はＥ区南半からＦ区東北部にある。この地点は、古絵図による宅地割復元の宅地５・６にあたる。宅地５・６は宝永大火以降明治初年まで柳原邸が占地した。鶴文は柳原家が用いる家紋であり、古絵図による宅地割復元と一致する。酢漿草文瓦はＢ区中央部とＦ区北部の２つの集中部がある。古絵図による宅地割復元では、Ｂ区中央部は宅地３・４に該当し、宝永大火以降明治初年まで園邸が占地した。Ｆ区は宅地７にあたり、江戸時代を通じて櫛笥邸が占地した。酢漿草文は櫛笥家が使用する家紋であり、Ｆ区については古絵図に基づく宅地割復元と一致する。園邸推定地に３点集中する酢漿草文瓦については瓦の廃棄後に移動したものと考える。抱杏葉文瓦１点は、Ｂ区中央部で出土している。Ｂ区中央部は上述のように宅地３・４にあたり、宝永大火以降明治初年まで園家が占地した。抱杏葉文は園家が用いた家紋であり、古絵図に基づく宅地割復元と一致する。直違鍵文瓦については、出土量が少ない上帰属する公家が不明である。

以上のように、出土家紋瓦の分布は、各大火の後や明治初年の公園化整備に伴なって移動している場合があるものの、古絵図情報と検出遺構の対比によって導かれた宅地割復元に良く合致する。

Ｅ　棟端瓦

今回の調査では、多様な形式の棟端瓦が出土している。その中でも最も多く出土している棟端瓦は獅子口である。数量的なデータを示し得ないが、公家屋敷の屋根の棟は主として獅子口で飾られていたものと思われる。また、獅子口の編年研究に資する好資料を得ることができた。図版565の１は17世紀前半の土器・陶磁器類を伴なうものである。図版565の２は三条転法輪隠居邸所要の獅子口で、宝永大火で焼け落ちたものである。図版564の１は明和８年銘を有する柳原邸所要の獅子口で、天明大火で焼け落ちた棟端瓦である。

Ｆ　井戸枠瓦

井戸Ｆ1280の井戸枠に使用された瓦は、厚手の平瓦状で一部のものの凸面に連続的に刻み目を入れるものである。この井戸は、『守貞謾稿』巻之三に「京阪井」として図示されたものと同様の形式であり、瓦凸面に施された刻み目についても記載がある[30]。同時代の史料の記載と一致する興味深い資料である。

Ｇ　刻印瓦

刻印を押した瓦が数多く出土している。これらを記載にするにあたって、記号印、文字印、人名印の３種類に分類した。記号印は鈴形や花弁型などの幾何学的な記号を表すものである。文字印は基本的に「五」、「上」などの１文字を圏線内に表すものである。人名印は「ふかくさ前右衛門」などと長方形の圏線内に地名などと人名を表すものである。３種とも、押す部位は概ね共通する。軒丸瓦・丸瓦の場合は一般的に丸瓦部凸面の頂部に押す。平瓦・桟瓦類は一般

的に小口か側縁に押す。軒平瓦・軒桟瓦は一般的に周縁の左右どちらかに押す。３種は時期的に相前後して登場するようである。記号印は、江戸時代以前からの伝統的な刻印の形式で、公家町では17世紀前半から存在し、18世紀中頃までは残るようである。文字印は、17世紀後半から出現し、江戸時代を通じて存続するようである。人名印は18世紀後半に出現し、商標化しつつ近代まで存続するようである。

第７節　その他の遺物

A　貨幣

今回の調査では、出土例に乏しい金銀貨資料５点を得ることができた。とりわけ、一分金を判に延ばしたものと思われる桐小型大判金（図版569－４）は、天正期に遡る遺品で、希少な資料である。出土貨幣の大半を占める寛永通宝を１期（古寛永・1636～1659年鋳銭）、２期（新寛永の文銭・1668～1683年鋳銭）、３期（新寛永・1697～1747年、1767～1781年鋳銭）に区分して記載した。これらが出土した遺構の年代を見ると、１期と２期の寛永通宝は、概ね18世紀初頭までの遺構から出土する。３期の寛永通宝は18世紀後半以降の遺構から出土する。18世紀初頭以降、１期と２期の寛永通宝は基本的に流通していない状況が観取できる。古銭貨が回収・改鋳され、新銭貨が流通していく状況を認めることができる。

B　金属製品・石製品

今回の調査で出土した金属製品・石製品に示された公家生活をよく示すと考えられる要素を挙げる。金属製品では、装身具系統の遺物としては、家紋表現のある髪飾り類や、金銅製の刀装具などがある。飾金具系統の遺物は、金銅製の八双金具や紐金具など調度に用いられたと考えられるものや、釣金具や襖の引手、釘隠などの建築部材がある。また、香匙、銀葉鋏、灰おさえ、鳶、香炉などの香道具の出土は近世の公家生活の一端を示す。これらはいずれも、精巧な細工や鍍金が施される贅沢なものである。石製品では、金箔や精巧な彫刻を施した硯、特殊な石材を用いた印や文鎮などの文房具があり、近世公家の文人趣味をうかがうことができる。また、石臼は製粉用よりも茶臼の割合が多く、日常生活における喫茶比率の高さがうかがわれる。一方、鋤鍬・鎌などの農具・土木具や、鑿・鏝・鏨などの工具類も出土している。使用人層などによって、公家屋敷内に小規模な菜園が営まれたり、建物や施設の恒常的なメンテナンスが行なわれていたことを示す資料であると考える。

C　ガラス製品

ガラス製品は18世紀後半以降、出土量が劇的に増加する。日常生活の中にガラス製品が普遍的になるのは江戸時代後期とみてよい。ガラス製品の中で公家生活をよく示すと類推するものは、輪花の器類や切子の雛道具類であろう。ボウル、皿、ワインボトル、デキャンター、ランプ火屋などは、化学分析の結果などからヨーロッパ産と判断できるものである。これらはいずれも19世紀中頃の遺構から出土し、出土地点は宅地５・６の近辺に集中する。宅地５・６は江

戸時代後期を通じて柳原邸が占地したが、東京遷都以降は空き家となり、明治８年（1875）から明治11年（1878）の間には、米合衆国の宣教師Ｊ・Ｄ・デイヴィスが柳原家から借り受け、自らの住居とした。また、同時に同志社女学校が開校されていた[31]。この時、旧柳原邸内に西欧風の生活用具が持ち込まれたことが想像でき、出土ヨーロッパ産ガラス製品は、デイヴィス邸で使用されていた可能性がある。無論、柳原家が使用した器物である可能性も否定できない。いずれにせよ、19世紀中頃のヨーロッパ産ガラス製品の良好な資料であることは疑いない。また、ガラス製品には、国内にもいくつかの産地がある。現状では、出土ガラス製品の生産地を知ることはできないが、北野信彦氏が示されたデータは、今後こうした作業に生かされるであろう（付章１）。

Ｄ　製品の生産地と流通

石製品の石材は多くは京都で産出されたものではなく、搬入されたものである。しかし、産地が判明しているものは少ない。硯は「高嶋」銘を持つもの（図版580－21～23・図版581－２）があり、これと類似の石材のものが多い。近江高嶋から搬入されたものであろう。緻密な装飾が施された硯（図版581－９～12）は、いずれも海外から搬入されたものの可能性がある[32]。産地は判らないが、印材や碁石なども特別な地域のものが好まれたものと想像する。火打石は黒曜石製のものとチャート製のものがある。チャート製の火打石は緑灰色の特殊なもので徳島県大田井産のものである[33]。黒曜石製火打石の産地は不明である。土器・陶磁器類に比べて、金属製品、石製品、骨製品、ガラス製品などの生産地同定の作業は、立ち遅れている。今後の課題である。

註

1）Ⅹ期中～新段階の遺物が出土している。文献からは応仁・文明の大乱以後、たびたび朝廷は幕府に命じて内裏周辺に堀を掘らせていることがわかる（第1分冊、第6章、第1節を参照）。堀G1940はこうした内裏周辺の防御に関わる施設の可能性がある。あるいは、豊臣秀吉の京都改造に伴なって、設置された内裏防衛の施設の可能性もあろう。

2）宮内庁書陵部『寛永十四年洛中絵図』吉川弘文館、1979年。

3）川上貢氏は、絵図作成の縮尺を検討し、1間長を6尺5寸として換算していることを明らかにした（川上貢「洛中絵図寛永後万治前　解題」『洛中絵図寛永後万治前』臨川書店、1979年）。従って、30間は京間1間1.96mとして、約58.8mである。

4）第5回現地説明会（2000年12月24日実施）において新二階町通東側溝の位置をY=－21,105mの位置に想定し、道路幅を約10mと報告した経過がある。北側調査区での所見やその後に実施した南側の調査状況から再考を要する事となった。現地説明会の当時の見解とは異なった結果になった事を述べておく。

5）『内裏之図』宝永6年刊。以下、江戸時代中期の記載で「絵図」とするものは、この絵図を指す。

6）『校正再版内裏細見之図』慶応2年刊。以下、江戸時代後期の記載で「絵図」とするものは、この絵図を指す。

7）『昭和大礼京都府記録』上・下　京都府、1929年。

8）図上の計測で1間＝1.825mと算出した。

9）『別冊歴史読本　図説天皇の即位礼と大嘗祭』1988年11月号　新人物往来社、1988年。

10）小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所、1996年。

11）森　毅「大坂出土の十六・十七世紀の陶磁器－美濃陶器を中心に－」『東洋陶磁』26、1997年。

12）渡辺誠「焼塩壺」江戸遺跡研究会編『江戸の食文化』吉川弘文館、1992年。

13）小川望「焼塩壺」江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究辞典』柏書房、2001年。

14）『竹ノ鼻遺跡－蒲生郡蒲生町石塔－』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会、1999年。

15）宮田幸太郎編『有田町史』陶業編　有田町史編纂委員会、1986年。

16）前山博「前川家資料」『国内出土の肥前磁器』佐賀県立九州陶磁資料館、1984年。

17）池田史郎編『皿山代官旧記覚書』金華堂、1966年。

18）同志社大学構内遺跡では2例の出土品がある。1点は旧藤谷家跡のFuSE104出土の平碗で、18世紀後半代の資料である（『同志社大学徳照館地点・新島会館地点の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会編、1990年）。もう1点は、桜の御所跡隣接地のA地点出土の皿で、瀬戸・美濃系の銅版転写磁器と共伴するものである（『上京・西大路町遺跡桜の御所跡隣接地点の発掘－同志社大学育真館地点の発掘調査－』同志社大学校地学術調査委員会編、1997年）。なお、遺物の実見に当たって、同志社女子大学の角谷江津子氏に御配慮いただいた。

19）この出土例については、大分県教育庁文化財課の吉田寛氏から御教示いただいた。また、調査を担当された大分市教育委員会文化財課の高畠豊氏からは、出土状況の詳細を御教示いただいた。高畠氏によれば、出土した資料は口径15.4cmの皿で、見込は菊花と牡丹・鶴の文様が3単位あり、裏文様は梅花繋文である。焼継されており、所有者を示すと思われる「光正寺」の文字が焼継材のフリットによって書かれている。幕末期の土壙出土である。光正寺から焼継に出されたものが、

何らかの理由で返却されずに、焼継業者の居住地付近の土壙に廃棄されたものと推定されている。今回の公家町調査の知見をふまえれば、光正寺は真宗大谷派の寺院であることから、禁裏から京都の本願寺へ下賜されたものが光正寺に伝来したものと推定される。

20) 冷泉家の伝世資料には、禁裏からの下賜と考えられる肥前系磁器と、公家の注文品と思われる肥前系磁器が含まれており、なかでも孝明天皇（1845～1867在位）拝領品の箱書のある「染付菊文水入」や「染付鳳凰菊花文水盤」、「染付葡萄菊花文蓋付鉢」は禁裏拝領品の可能性が高いと推定されている（鈴田由起夫「京都と伊万里焼」『冷泉家展－近世公家の生活と伝統文化－』冷泉家時雨亭文庫・朝日新聞社、1999年）。

21) ２点が確認されている。１点は染付菊花根笹文皿である（『柴田コレクション（Ⅴ）』佐賀県立九州陶磁文化館、1997年、図版334）。もう１点は染付菊花文嗽碗である（『柴田コレクション（Ⅷ）』佐賀県立九州陶磁文化館、2002年、図版534）。以上の例については、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏が確認し、御教示いただいた。

22) 中ノ堂一信「粟田焼の開窯『本朝陶器攷証』記述をめぐって」小川金三編『粟田焼』粟田焼保存会、1989年。

23) 最近の報告例では、及川登「江戸遺跡における京都・信楽系製品の流通について」（『江戸の物流』江戸遺跡研究会、1999年）、鈴木裕子「京焼出土資料の変遷－17・18世紀の江戸を中心に－」（『京焼－消費地出土の様相－』徳島城下町研究会、1999年）などがある。

24) 17世紀に始まる京焼諸窯には、門跡寺院領や禁裏・公家領内で開窯しているものが多い。主なものを例示すれば、御室窯と仁和寺領、鳴滝の乾山窯と二条家領、粟田口窯と青蓮院領などである。

25)『大阪市福島区堂島蔵屋敷跡　1998年度大阪第5地方合同庁舎建設に伴う福島1丁目所在遺跡発掘調査報告』（財）大阪市文化財協会、1999年。下村節子「枚方宿遺跡の実年代資料－三矢町地区第23次調査を中心として－」『関西近世考古学研究Ⅸ』関西近世考古学研究会、2001年。

26) 鈴木裕子「出土資料から見た仁清」『研究紀要』第10号　野村美術館、2001年。

27) 内野山北窯１期、1610～17世紀第２四半世紀。『内野山北窯跡』佐賀県教育委員会、1996年。

28) 扇浦正義「長崎出土の清朝陶磁」『貿易陶磁研究』No.19　日本貿易陶磁研究会、1999年。

29)『京都坊目誌』上京第九学区之部、『京都叢書』18巻、Ｐ272　臨川書店、1968年。

30) 喜田川守貞（宇佐美英機校訂）『近世風俗史（一）』岩波書店、1996年。

31) Ｊ．Ｄ．デイヴィス（北垣宗治訳）『新島襄の生涯』小学館、1977年。『同志社女子部の百年』同志社女子部創立百周年記年誌編集委員会、1978年。上野直蔵編『同志社百年史　通史編１』同志社、1979年。上野直蔵編『同志社百年史　資料編１』同志社、1979年。

32) 図版581－10が朝鮮半島産の硯である旨、宮本佐知子氏より御指摘をいただいた。

33) 北野隆介氏より御教示をいただいた。

第12章　発掘調査の成果と課題

この調査は、1997年に発掘調査に先行する試掘調査を開始し、2002年インフラ整備に伴なう立会調査・樹木移植に伴なう調査に至るまで、延べ６年間にわたり実施した。調査では、各年代にわたり豊富な資料を得ることができた。最終的な発掘調査面積は14,678㎡に及び、出土遺物は遺物収納コンテナで9,600箱以上になる。本体部分の調査終了後、インフラ整備に伴なう調査と併行しながら、整理作業及び報告書作成を行なってきた。以下に調査の目的と、本調査で得た成果と問題点を要約し、本報告のまとめとする。

当地は平安京の東北隅、左京北辺四坊にあたる。平安京北辺及び東京極の調査例は少なく、その様相を知り、前期から後期までの遺構の変遷を明らかにすることは、平安京研究の上で貴重な資料を得るものと期待できた。平安時代前期の遺構の検出は概して少なく、造営からの変遷を知り得る資料は乏しかった。しかし、前期の井戸を推定富小路西築地上で検出しており、このことから左京北辺四坊六・七町に所在したとする藤原良房の染殿が、東西二町を占地する敷地であったことをうかがわせた。平安時代中期になると遺構の検出例が増加する。条坊遺構は明らかになっていないが、正親町小路北側溝の推定位置に北側溝を検出している。その他で注目すべき遺構に白色土器を多量に廃棄した土壙Ｂ1013がある。白色土器という限定された儀式様食器が多量に廃棄された遺構の存在の背景に、藤原道長に関連した遺跡である一条四坊十五・十六町にあった土御門殿または東京極の東に接して造営された法成寺などの存在が導き出される。平安時代後期になると遺構が、さらに増加する。条坊遺構では正親町小路は、推定位置に側溝・路面が検出できたが、富小路は依然として規模が判明しない。七町北半にあたるＧ区では園池とみられる遺構が形成されるが、西側に存在したであろう建物は明らかとすることはできなかった。文献資料からは、調査地における平安時代の土地利用の変遷は、六・七町を染殿が占地していたが、中期になって、染殿の西側六町部分が具平親王に譲渡され土御門第として別区画の宅地になったとされる。発掘調査では、以上については確証は得られなかった。また、後期では、七町で清和院の池の可能性がある園池を検出し、八町でも池の遺構と建物を検出している。しかし、条坊の遺構については不明な部分が多い。

鎌倉時代では、井戸や土壙とともに建物に伴なうと思われる地業Ｇ1937を検出した。遺物も一定量出土しており、宅地や施設が維持されていたことを示している。

室町時代前半代の遺構は希薄である。しかし、戦国期前半代の遺構を多数検出することができた。この段階の遺構は堀を鍵の手状にめぐらせ、内部には建物、柵、井戸、土壙がある。これらは、一種の防御的な施設である。室町時代には、現在の位置に御所が固定化され、その東の備えとしてこれらの遺構群が形成されたと考える。戦国期末期の遺構は少なく、この時期当地は空地化していたことを示している。桃山時代には、ここに公家町が形成されるが、開発に

好都合な環境が備わっていたのであろう。

豊臣秀吉によって行なわれた京都改造のひとつに、内裏の周囲に公家屋敷を集めたことが挙げられる。これは、天正17年（1589）に新造内裏の修築を開始し、同18年暮れ、新造内裏へ天皇が遷幸したのち、武家屋敷の屋敷替え、公家屋敷を集めるため上京の町家を移住させることにより進められた。今回の調査では、公家町の成立過程を考古学的に解明することは重要であると思われた。

調査区の中心で南北方向の堀Ｇ1940を検出した。この堀が掘られた時期は結論を出すに至っていないが、17世紀初頭に埋められている。その上に公家町の背割溝である溝Ｈ270が作られる。溝Ｈ270を挟んで中筋通沿いの屋敷と二階町通沿いの屋敷とが背面を接しており、公家町の宅地割は公家町に先行する堀Ｇ1940に規制されていることが明らかになった。堀Ｇ1940の西肩は平安京左京北辺四坊六・七町の西一行の推定線に一致する。しかし、調査で判明した公家町宅地割は平安京条坊とは全く異なるものであった。

公家町は寛文元年火災（1661）、寛文11年火災（1671）、宝永大火（1705）、天明大火（1788）など数度の火災に遭っている。調査でもこのことが確認できた。そこで、大火を画期として便宜的な時期区分をした。すなわち、宝永大火以前を江戸時代前期、宝永大火から天明大火までを江戸時代中期、天明大火から明治時代初期の公家町廃絶までを江戸時代後期としたのである。

調査地での公家町成立期の街路と宅地の境界は、掘立柱の塀であった。それが宅地７（櫛笥邸）・宅地17（九条邸）では、17世紀中頃から後半には長屋建物となり、街路側溝も17世紀中頃に素掘溝から石組溝へと変化し、背割溝の一部も石組溝になることを明らかにすることができた。宅地内の様相は、礎石は概して残存状況が悪く、建物の復元は困難であったが、その中で宅地２（富小路邸）、宅地３・４（園邸）、宅地７では建物を検出することができた。また、宅地６（柳原邸）と宅地７では宅地奥に園池を配する構造が明らかとなった。

宝永大火後に、公家町の大幅な区画整理が行なわれたことは古絵図・文献から推定できたが、今回の発掘調査でその様相を具体的に明らかにすることができた。中筋通は江戸時代前期から変更はなく、二階町通は西へ移動し道幅も広げられた。旧清和院通は宅地17の北半を取込んで拡幅され、現在の御苑内の通路とほぼ同規模となった。これらは宝永大火を契機として、火災時における類焼を避けることを意図した区画整理によるものと思われる。また、このころの宅地内の様相は江戸時代前期に比べると、明らかにできなかったが、宅地５・６（柳原邸）では地鎮に用いたとみられる賢瓶が出土しており、公家屋敷の建築儀礼を知る上で注目される。

古絵図などによると天明大火を契機とする区画整理は行なわれず、大幅な宅地替えもみられない。このことは発掘調査によっても確認できた。宅地内の様相については、井戸、土蔵、穴蔵、便所などを多数検出したが、建物配置などは不明な点が多かった。宅地５・６（柳原邸）では南側に園池と能舞台を設ける公家屋敷の一端を遺構の上で明らかにすることができた。

公家町成立以前では、古墳時代から桃山時代にわたる各時代の遺物が出土した。これは調査地に連綿と人々が生活していたことを示す具体的な資料である。その中で平安時代の緑釉瓦が

注目できる。これまでも、調査地周辺では、緑釉瓦が採集されていたが、今回の調査では、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、熨斗瓦などがまとまって出土した。これらの緑釉瓦は法成寺に関連するとみられる。

出土遺物の大半は公家町に関連する江戸時代の遺物が占める。公家町出土遺物の特色をまとめると次のようになる。

京都の町家地域の出土遺物と比べて、土師器皿の出土比率が高い。京都では土師器皿を主体とする食器文化は平安時代から続くものであるが、江戸時代には食器の中心が土師器皿から陶磁器類に移り、土師器皿の出土量は減少する。調査では江戸時代後期まで土師器皿の出土量が一定量を保つことが判明しており、公家社会では儀礼や伝統的な食事作法を通じて、土師器皿が残ったことを示している。

公家町を特徴づける特筆すべき陶磁器類の資料として、宅地11（安禅寺門跡邸）の穴蔵G749の出土資料がある。これは、穴蔵に収蔵されていた高級陶磁器類が寛文年間（1661～1672）の火災によって焼けて埋まった一括資料である。陶磁器類は品質が高く、枚数も揃っており、江戸時代前期の門跡・公家が所持した高級陶磁器の実態を如実に示す資料である。

陶磁器以外の出土遺物では、印材や緻密な彫刻を施した硯、盆石、香道具などがあり、公家の文人趣味をうかがうことができる。

江戸時代後期のヨーロッパ陶磁器・ガラス製品の出土が注目できる。これらの品々は公家邸内で使用された可能性もあるが、宅地５・６に明治時代初年におかれたＪ・Ｄ・デイヴィス邸と同志社女学校で使用された可能性も否定できない。

手工業生産に関わる遺物はほとんど出土していないが、樹木移植に伴なう立会調査では、銅製品の鋳型を多量に投棄した土壙を検出している。公家町縁辺に配された町家部分にあたり、公家町の周囲に展開したとみられる町家での手工業生産が、公家町の需要を支えたと考えられる。

今回の発掘調査は、平安京跡では、これまでに例を見ない大規模な調査面積を対象とした。また京都御苑内での発掘調査も例が少なく、様々な成果が期待された。この報告書では、調査開始当初の目的に据えた諸問題をすべて解決できたとは考えていない。しかし、平安京東京極や北限の様相は一定程度解明でき、公家町ができる直前の様相、並びに江戸時代の公家町の町割や屋敷内の様相を明らかにし、古絵図資料がよく照合するという重要な所見を得ることができた。近世の土器・陶磁器類の年代基準資料を提示するとともに、近世瓦の年代基準資料を提示した。近年目覚ましい発展を遂げる近世考古学において、各方面から「京都」の資料が渇望されていた。今回の調査は、近世考古学の発展に十分寄与する成果を得たと考えている。

表128　遺構概要表

時代	A区・M区	B区・N区	C区	D区	E区・L区
古墳～平安前・中期	溝A419 土壙A416 溝A459 土壙A531	井戸B1060 溝B1058 土壙B1013	流路C1222 土壙C948 土壙C1288 土壙C1303	土壙D579	流路E900・井戸E765 溝E827・溝E845 溝E881
平安後期・鎌倉時代	井戸A309 土壙M28	井戸B1061 井戸B1068 溝B1054 溝B1055 土壙B1037	柱列C1408 柱穴C1335 柱穴C1346 溝C1226 土壙C1233	土壙D597 土壙D608 土壙D615	井戸E743・井戸E783 溝E858・溝E864 溝E922A・土壙E734 土壙E738・土壙E742 土壙E763・井戸L31 土壙L28
室町・戦国期	土壙A359 建物A1105 建物A1106 建物A1109 柱列A1104 柱列A1107 柱列A1108 柱列A1110 柱列A1111	井戸B916・井戸B917 井戸B918・井戸B963 井戸B1059 土壙B962 土壙B992 土壙B996 土壙B1035 土壙B1036 土壙B1043 土壙B1047 建物B1112	井戸C1189・井戸C1249B 溝C670・塀C1112・塀C1113 溝C1159・土壙C756B・土壙C777 土壙C846・土壙C853・土壙C872 土壙C879・土壙C917・土壙C976 土壙C985・土壙C1024 土壙C1030・土壙C1045 土壙C1046・土壙C1091 土壙C1116・土壙C1191 土壙C1223・土壙C1253 土壙C1292・土壙C1298 土壙C1321	柱穴D522 井戸D535B 池D529B・塀D540 土壙D427・土壙D491 土壙D492・土壙D509 土壙D512・土壙D514 土壙D519・土壙D524 土壙D549・土壙D564 土壙D595・土壙D596 土壙D602・土壙D625	井戸E400・井戸E448 井戸E665・溝E455 溝E749・溝E756 溝E785・土壙E500 土壙E531・土壙E584 土壙E729・土壙E753
桃山期	土壙A282 井戸A289・井戸A233 井戸A107	土壙B1000 土壙B1015	塀C1416 土壙C972 井戸C1047	土壙D538	土壙E544 井戸E452 井戸E459
江戸時代前期	塀A1093 建物A1086 建物A1087 建物A1088 通路A1090 溝A72 側溝A213 穴蔵A366 井戸A387	塀B1096 塀B1095 塀B1097 塀B1098 建物B1094 塀B1099 土壙B878 土壙B725 石敷B1100 池N21	溝C918 塀C1415 塀C1414 井戸C660 井戸C661 井戸C952 井戸C1192 穴蔵C548B 土壙C916	井戸D535 井戸D438 井戸D318C 石組土壙D346 塀D303 穴蔵D200 土壙D451 井戸D296 井戸D335	土壙E235 井戸E210・土壙E311 石組土壙E371 土壙E315・土壙E302 土壙E310 土壙E340・土壙E301 土壙E280・埋甕E68 集石E134
江戸時代中期	溝A7 集石A157 集石A165 土壙A184 井戸A11 埋納土壙A45 土壙M12	溝B675 土壙B776 土壙B674・溝B678 土壙B730 土壙B702 柱穴N9・N10 石列N3	穴蔵C570 埋納土壙C342 埋納土壙C494 土壙C628	溝D189	竈E140・竈E185 穴蔵E355・土壙E211 土壙E290・石組土壙E354 土壙E297・土壙E188 土壙E45 井戸E55・土壙E265 土壙E76 土壙E270
江戸時代後期	土壙A21・土壙A27 塀A1091・塀A1092 土壙A140 石組土壙A6・池A57 整地A3 井戸A354 埋納土壙A341	土壙B1103 土壙B718 土壙B716・土壙B721 土壙B703・土壙B670 井戸B620・土壙B687 塀N1・石列N5 瓦組土壙B636	道路C12・溝C10・溝C156 塀C1409・塀C1410・塀C1411 塀C1412・塀C1413・道路C1417 溝C135・溝C35・溝C113 瓦組枡C153	塀D637	溝E50・能舞台E2664 石組土壙E123 石組土壙E12 石組土壙E345 溝E30・溝E35 土壙E1・土壙E165 池E25・土壙E48 石組土壙E22・溝L2

F区・X区	G区・P区	H区	I・J・K・Q区	O区	R・S・U・V区
流路F2550・井戸F2505 井戸F2510・井戸F2570 溝F2500・土壙F2612 土壙F2631・土壙F2639	流路G3579・土壙G1755・井戸G2657・溝G3415 土壙G3220・土壙G3392・土壙G3551 土壙G3573・石敷G3578・(流路G2925)	(流路H820)	(流路J191)		
溝F2503 溝F2520 土壙F1238 土壙F2506 土壙F2547 土壙F2580 土壙F2600	地業G1937・礎石列G3727・礎石列G3728 路面G1865・井戸G2462・井戸G2530・井戸G2665 井戸G2684・井戸G3068・井戸G3110 池G2940・溝G1938・溝G3360・土壙G2405 土壙G2407・土壙G2457・土壙G2477 土壙G2498・土壙G2712・土壙G2973 土壙G2990・土壙G3201・土壙G3255 土壙G3290・土壙G3300・土壙G3660 土壙G3373・整地層G2500 建物G3730・柱列G3732・柱列G3733・(池P195) 溝P124・土壙P108・土壙P242・土壙P247	土壙H833 土壙H841 土壙H842	土壙K46 土壙K50 土壙K52 土壙K79 土壙K81 整地層K85	溝O19	池状遺構S70 土壙S71 柱穴S72 土壙U35
井戸F1709・井戸F1777 井戸F1800・井戸F1901 溝F2107・溝F2360 溝F2410・土壙F2567 土壙F2588・土壙F2633	塀G3729・柱列G3734・柱列G3735 柱列G3736・柱列G3737・井戸G1146 井戸G2555・堀G965・堀G2630・塀G2933 土壙G1363・土壙G1874・土壙G1897 土壙G1984・土壙G2073・土壙G2083 土壙G2125・土壙G2126・土壙G2207 土壙G2214・土壙G2234・土壙G2270 土壙G2318・土壙G2413・土壙G2512 土壙G2631・土壙G2649・土壙G2736 土壙G2821・土壙G2877・土壙G2897 土壙G3097・土壙G3226・土壙G3304 井戸P162	地業H666 建物H918 柱列H919 柱列H920 柱列H921 柱列H922 柱列H923 井戸H328 井戸H705 石組H695 集石H555 土壙H723	(堀J87) 溝J179 土壙J92 土壙J142 土壙J151 土壙J168 土壙J175 土壙J182	溝O18 堀O17	溝R1119 溝R1125
土壙F2200 埋納土壙F2390 埋納土壙F2383 土壙F1605 土壙F1779・土壙F1780 土壙F2020・土壙F2028	堀G1195B・池G2180・池G2385・井戸G2690 土壙G2418・土壙G2148・井戸G2495 堀G1940・土壙P177		塀J193		
土壙F1980・井戸F1799 塀F1740・溝F2030 建物F2665・建物F2666 建物F2667・塀F2669 池F1685・井戸F1234 土壙F2208・竈F1555 土壙F1432・竈F1680 埋甕F1582・井戸F1385 土壙F1455・溝F2110 穴蔵F1475・塀F2671 土壙F1244・溝F1090 溝F2110・塀F2670 穴蔵F1387・塀X84 塀X83・集石土壙X32 集石土壙X33・集石土壙X42	溝G1195・塀G3738・塀G3739 塀G3740・塀G3741・塀G3742・井戸G2071A 集石G1150・穴蔵G749・石組土壙G1606 穴蔵G630・穴蔵G1805・蔵G1097・埋甕G1262 池G625・井戸G3073・土壙G1273・土壙G1133 土壙G1717・井戸G592・溝G1961・池G1234 井戸G2455・池G1972・土壙G1164 土壙G1156・井戸G1239・土壙G1447 土壙G1647・土壙G1370・土壙G1716 整地G3751・土壙G639・塀P266・井戸P69 石組土壙P82・集石土壙P49・集石土壙P126 土壙P99	塀H912 塀H913・塀H914 塀H917・溝H270 溝H500 土壙H33	溝J75 建物Q96 建物Q95	土壙O1	溝R241・塀R243 塀R1130・溝R1195 溝R190・柱列R1131 溝R150・溝R1050 溝R1129 石列R298 溝S1・土壙S43 溝S15・溝S16 埋桶S8−1～4 土壙S6・溝V1
塀F2668 井戸F950 溝F1250 石組土壙F1315 土壙F1360	溝G862・溝G535B・塀G3746・塀G3747 集石G429・井戸G2815・石組土壙G1015 埋納土壙G637・集石G725・石組土壙G430 埋納土壙G1221・井戸G741・埋納土壙G573 埋納土壙G660・石組土壙G415・石組土壙G952 埋納土壙G1090・埋納土壙G2700・土壙G593 井戸G824・土壙G302・土壙G471・井戸G3691 井戸G2665・井戸G626・蔵G694・溝G887 溝G281・建物G3750・土壙G747・土壙G555	溝H865 土壙H267 土壙H485 土壙H166 土壙H271 穴蔵H97 土壙H222 土壙H300 土壙H317	穴蔵I6 石組土壙J54 石組土壙J115 石組土壙J1 石組土壙J57 土壙K14 石組土壙Q10		石列R297 土壙R21 土壙R87 礎石S1012
溝F1392・井戸F1280 井戸F1275・漆喰敷F1268 集石F1060・土壙F1400 石組土壙F1496 漆喰溝F970 土壙F1159 石組土壙F1153 石組土壙F1386 石組土壙F980 土壙F1265・井戸F1235 土壙F1170	集石G370・石列G485・石列G650 石組土壙G392・溝G77・石組土壙G393・井戸G420 溝G4・石組土壙G277・池G460・埋甕G439 埋甕G387・溝G590・土壙G348・土壙G45 井戸G308・埋納土壙G339・土壙G593・井戸G824 池G253・池G253B・石組土壙G3690・池G250 池G364・蔵G110・建物G572・埋甕G240 埋甕G258・埋納土壙G182・溝P8・溝P7	蔵H50・土壙H211 溝H45・井戸H120 溝H78 石組土壙H25 石組土壙H65 埋甕H52 埋甕H53 埋納土壙H35 井戸H27・溝H31 溝H220・土壙H15 塀H916 土壙H137	溝I1 石組土壙J5 土壙K27		埋甕R1041・R1042 土壙R1043 井戸R1034 石組土壙R1032 池R1002

表129　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳・飛鳥時代	土師器・須恵器		土師器21点、須恵器24点	0	
平安時代	土師器・黒色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白色土器・輸入磁器		土師器728点、黒色土器40点、瓦器14点、須恵器131点、灰釉陶器47点、緑釉陶器58点、白色土器76点、輸入磁器45点	2箱	
	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・緑釉瓦・塼・鴟尾		軒丸瓦60点、軒平瓦64点、緑釉瓦20点、塼2点、鴟尾1点	7箱	
	その他		土製品12点、石帯5点	0	
鎌倉時代	土師器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・焼締陶器・白色土器・輸入磁器		土師器277点、瓦器41点、須恵器9点、灰釉陶器1点、焼締陶器2点、白色土器15点、輸入磁器20点	2箱	
	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦		軒丸瓦13点、軒平瓦5点、鬼瓦1点	4箱	
	その他			0	
室町・戦国期	土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・施釉陶器・輸入磁器		土師器556点、瓦器129点、須恵器16点、焼締陶器30点、施釉陶器34点、輸入磁器44点	6箱	
	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦		軒丸瓦10点、軒平瓦5点	4箱	
	その他		石製品58点、滑石製品17点、銭貨105点、鋳造遺物44点	1箱	
桃山時代	土師器・土師質・瓦質・磁器・陶器		土師器159点、土師質14点、瓦質7点、磁器15点、陶器46点	17箱	
江戸時代	土師器・土師質・軟質施釉・瓦質・磁器・陶器		土師器2,214点、土師質834点、軟質施釉105点、瓦質30点、磁器2,690点、陶器2,238点	469箱	
	瓦		瓦類369点	84箱	
	その他		土製品152点、銭貨55点、金属製品356点、骨製品13点、鋳型53点、石製品113点、ガラス製品124点、漆器1点	26箱	
計		9,678箱	12,368点（478箱）	622箱	8,578箱

付章１
出土ガラス製品の定性分析と保存に関する基礎的調査

北野信彦（くらしき作陽大学）

１　はじめに

京都和風迎賓施設建設計画に関わる事前の埋蔵文化財発掘調査では、京都御所周辺の東方公家町関連の遺溝と遺物が多数検出され、この中にはガラス製品も多く含まれている。これら出土ガラス製品のうち８点については肥塚隆保氏により詳細な定量分析が行なわれ、その結果に関する論考も為されている。本報では、本遺跡出土のほぼ全体像が把握される711点の資料について、器型や色調・劣化状態などを肉眼観察するとともに、蛍光Ｘ線分析装置による資料非破壊の定性分析を行なった。この調査の目的は、本遺跡出土ガラス製品の器型と製法、劣化状態などの相互関係を把握することで、これらを的確に取り扱うための方法を理解することにある。

２　調査方法

一般に近世ガラス製品の製作は、珪石原料とアルカリ硝石、着色着材などを溶解混合してガラス種を作成する粗煮～精煮工程と、型吹き成形や切子カットなどでガラス製品に仕上げる成型工程から成り立っている。このようなガラス製品の材質を調査することは、個々の資料の性格を正確に理解する上で有効な方法である。本報では、この調査方法として、まず器型の形態や色調・色系統などを表面観察した後、（１）個々の劣化状態、（２）比重値測定、（３）原料や着色材料などの各組成の定性分析、に分けた調査を行なった。以下、項目別に調査方法を記す。

（１）個々の器型や色調・色系統と劣化状態

個々の出土ガラス製品の器型および色調・色系統の把握には、肉眼による表面観察を行ない、それぞれ幾つかの基本的なグループに分類した。また個々の資料の劣化状態は、表面の風化もしくは錆化の程度を実体顕微鏡および金属顕微鏡を用いて観察した。このうち、特に数量が多く個々の劣化状態が著しい異なる透明ガラスの場合、劣化の程度を４段階に分けて分類してた。

（２）比重値測定

本報では近世ガラス製品を、アルカリ珪酸塩ガラス（カリガラス）と鉛珪酸塩ガラス（鉛ガラス）の二系統に大別するが、通常、鉛ガラス系はカリガラス系に比較して鉛が多く含まれているため比重値が大きい。この基本的な理論を応用して棚橋淳二・岡泰正・土屋良雄氏らは、伝世の近世ガラス製品を（空中重量－水中重量）/空中重量＝比重値（カリガラスは平均比重値2.4～2.9台、鉛ガラスは平均比重値3.0～3.7台）として算定して、その軽重を相対的に比較することで上記２つのガラスの種類を簡便に判別する方法とした。本報では（財）京都市埋蔵文化財研究所の竜子正彦氏により比重値測定が算出されているのでこの数値を参照した。

（３）ガラス原料や着色材料などの定性分析

ガラス製品の定性分析は、個々の資料を（株）堀場製作所MESA－500型の蛍光X線分析装置に非破壊で設置して、検出されるNa（ナトリウム）,Mg（マグネシウム）,Al（アルミニウム）Si（ケイ素）,P（リン）,S（硫黄）,K（カリウム）,Ca（カルシウム）,Ti（チタン）,Mn（マンガン）,Fe（鉄）,Co（コバルト）,Cu（銅）Zn（亜鉛）,Sn（すず）,As（砒素）,Pb（鉛）元素の二次電子線強度をカウントした。なお分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、X線管電圧は15kV、電流300uA、検出強度は50.000cps、定量補正法はスタンダードレスの設定条件である。

3　調査結果

今回調査を行なった出土ガラス資料は合計711点である。これらの分析結果を（表128）に示す。

まず本資料は、簪や捻り棒・ぽっぺん管などの棒状製品、徳利や皿・鉢・碗・瓶類などの立体製品に大分類されるが、飲食容器や装飾品・玩具など什器用途も多岐にわたっている。そして、日本・中国・ヨーロッパ製など生産地もさまざまであると考えられる。このなかには、伝世品として製作年代が明らかな近世ガラス製品と同器型の破片資料も幾例か見出された。

ガラスの色調は、透明感のあるColor lessタイプの資料が多いが、これらも鉄成分を含むために青色や緑色系統の発色を有するもの、マンガン成分を意図的に添加してこの青みを消色して透明感を強調するもの、消泡効果のために砒素を添加するものなど、基本となるガラス製法技術自体もさまざまであろう。資料によっては表面が白色もしくは黄褐色にチョーキング風化しているものも多かった。また色ガラスは、白色もしくは乳白色系、緑色系、青色系（透明感のあるブルー系と乳濁感のある空色系に分かれる）、黄色系、紫色系、紺もしくは藍色系に分類された。

肥塚氏による定量分析結果、本ガラス製品の化学組成は、大きくアルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラス、ホウ珪酸ガラスに分類され、さらにアルカリ珪酸塩ガラスは酸化ナトリウムと酸化カリウムを混合する混合アルカリガラス系やソーダ石灰ガラス系などに、鉛珪酸塩ガラスはカリウム鉛ガラスなどに細分化される。本報では個々の出土ガラス資料の定性分析結果のうち、鉛元素の検出量の多過（Si/Pb）でアルカリ珪酸塩ガラス（カリガラス）と鉛珪酸塩ガラス（鉛ガラス）の二系統に大別したが、後者の比率が高かった。通常、長崎交易を通じた西欧や中国からの輸入ガラスであったとされる近世のアルカリガラスは、硬く、膨張係数が低いので耐火性にも優れるという特徴があるが、溶解には1200～1400℃の高温を必要とするために高度な製法技術が必要とされる。一方、江戸時代中期以降になって国産ガラスの量産化が技術的にも可能となった鉛ガラスは、膨張係数が高いため低温（800℃前後）で溶解し、透明感も高いという利点がある反面、熱に弱く脆いという欠点がある。本報では、ホウ珪酸ガラスやアルカリ珪酸塩ガラスのうちの混合アルカリガラス系やソーダ石灰ガラス系などの小分類は定性分析結果では困難であると判断して、詳細な識別は行なわなかった。いずれにしても、本資料の場合、

国産ガラス・中国産ガラス・西欧ガラスなど履歴は多岐におよぶことが想定された。

次に、色ガラスの分析結果では、白色もしくは乳白色系ガラスはカルシウム、黄色系ガラスは鉄、緑色系ガラスは銅、紺もしくは藍色系ガラスはコバルト、紫色系色材にはマンガン、赤色系ガラスには銅が特徴的に検出された。江戸時代の文献史料に記述された和製ガラスの製作技術として、カルシウムや錫を添加して乳白色の発色を得る技法や、紫色の発色を得るには紫呉須（酸化マンガン）、紺もしくは藍色の呈色には呉須（コバルト）、緑色の呈色着色剤には緑青（酸化銅）黄色の呈色着色材には酸化鉄、赤色の呈色には銅コロイドを用いることが管見されるが、今回の分析結果は、紫系と紺もしくは藍色系の中間色の色ガラス製品ではコバルトとマンガンの両者が検出されたため混合材料を用いたことが理解された他は、いずれも各種文献史料に示された技術を実証する結果となった。いずれにしても、これまで近世ガラス製品の化学分析調査は、東京都内の近世遺跡出土資料のうちの数遺跡で総点数200点内外の調査は行なわれているものの、京都や長崎などの他地域では、これまで比重測定以外の基本的な科学分析はほとんど行なわれていない。また、近世公家社会における生活什器としてのガラス製品についても、近世初頭から江戸時代前期頃の公家日記に僅かに管見されるが、その実体については不明な点が多い。その点でも極めて貴重な資料群である。

今後はさらに調査点数の充実を計り、江戸時代におけるガラス製品の文化財保存学的研究の基礎資料としたい。

（謝辞）

本調査を行なうにあたり、（財）京都市埋蔵文化財研究所の鈴木久男・長宗繁一・平方幸雄・永田信一氏をはじめとする多くの方には資料調査の件で大変お世話になりました。また、（独）文化財研究所 奈良文化財研究所の肥塚隆保・降幡順子両先生、神戸市立博物館の岡泰正先生には国産ガラスの製法についていろいろと貴重な御教示を受けました。併せて厚く謝意を表します。

参考文献

二宮修治・今野春樹・中村瑞絵（1998）「第５章 理化学的分析　第４節　千駄ヶ谷五丁目遺跡２次調査出土のガラス及び焼継ぎ材の理化学的分析について」『千駄ヶ谷五丁目遺跡２次調査報告書』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会

岡泰正編（2000）『特別展　びいどろ・ぎやまん・ガラス　図録』神戸市立博物館

（財）冷泉家時雨邸文庫編（2002）『冷泉家展　図録』京都文化博物館

岡泰正（2000）『江戸時代のガラス・粋と美　びいどろ　ぎやまん』淡交社

表130　ガラス分析結果

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺溝番号	公家屋敷名
1	瓶	Blue cobalt		2.540	0.063	0.105	4.677	0.400	2.512	0.023	0.120	0.171	0.009	0.048	0.014	0.026	0.015	0.01	0.02	0.09	0.54	0.03	0.04	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		C区検出中	
2	ビー玉	Colorless	Blue	2.505	0	0.050	2.306	0.412	1.863	0.054	0.140	0.373	0.037	0	0.085	0	0.017	0.00	0.02	0.18	0.81	0.06	0.16	0.02	0.04	0.00	0.01	カリガラス		C区検出中	
3	ワインボトル	Dark Green	Brown	2.598	0.052	0.335	4.184	0.654	2.429	0.088	2.030	0.814	0.006	0	0	0	0	0.01	0.08	0.16	0.58	0.49	0.19	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区検出中	
4	瓶	Yellow		2.513	0.105	0.169	5.892	0.545	2.552	0.023	0.152	0.111	0	0	0.001	0.042	0	0.02	0.03	0.09	0.43	0.03	0.02	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		撹乱C39	
5	瓶	Blue		2.511	0.080	0.300	7.166	0.690	3.782	0.045	0.098	0.356	0.012	0	0.021	0.055	0.016	0.01	0.04	0.10	0.53	0.01	0.05	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		撹乱C39	
6	板	Colorless	Blue	2.565	0.041	0.120	5.837	0.271	4.238	0.035	0.018	0.220	0.001	0	0.002	0	0	0.01	0.02	0.05	0.73	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		撹乱C39	
7	瓶栓	Colorless		1.685	0.088	0.214	7.351	0.942	4.283	0.035	0.181	0.109	0	0	0	0	0	0.01	0.03	0.13	0.58	0.02	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		撹乱C39	
8	瓶	Colorless		2.538	0.012	0.032	1.020	0.175	0.547	0.004	0.038	0.018	0	0	0.002	0.003	0	0.01	0.03	0.17	0.54	0.04	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		撹乱C39	
9	ワインボトル	Dark Green		2.745	0	0.420	6.845	0.462	10.192	0.150	0.026	2.465	0.005	0	0	0.011	0	0.00	0.06	0.07	1.49	0.00	0.36	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区検出中	
10	棒状	Blue		3.003	0.001	0.112	3.943	0.430	0.085	0.003	0.02	0.187	0.567	0	0	0	0.705	0.00	0.03	0.11	0.02	0.01	0.05	0.14	0.00	0.00	0.18		18C末～19C中頃	土壙C59	二階町通より東
11	容器2	Colorless		2.531	0.091	0.228	7.494	1.025	4.580	0.035	0.181	0.102	0	0	0	0	0	0.01	0.03	0.14	0.61	0.02	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区検出中	
12	板	Colorless	Blue	2.530	0.066	0.025	6.478	0.054	4.702	0.090	0.279	0.161	0	0	0.004	0	0.002	0.01	0.00	0.01	0.73	0.04	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区掘下げ	
13	棒状	Green		3.295	0.002	0.075	5.78	0.666	0.149	0.008	0.011	0.610	1.020	0	0	0	0.858	0.00	0.01	0.12	0.03	0.00	0.11	0.18	0.00	0.00	0.15			C区検出中	
14	棒状	Colorless 1		3.425	0	0.031	3.062	0.871	0.082	0	0	0.04	0	0	0	0.053	0.848	0.00	0.01	0.28	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.28		19C中頃	土壙C136	二階町通
15	棒状	Colorless 2		3.853	0	0.014	4.575	0.241	0.017	0	0	0.038	0.001	0	0	0.021	0.541	0.00	0.00	0.05	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.12		18C末～19C中頃	土壙C153	宅地2
16	棒状	YelloW		3.896	0.001	0.066	1.530	0.172	0.220	0.015	0.002	1.008	0	0	0	0.012	0.627	0.00	0.04	0.11	0.14	0.00	0.66	0.00	0.00	0.01	0.41		18C前半	土壙C22	二階町通・宅地19
17	容器2	Colorless		3.362	0.001	0.026	3.669	0.463	0.034	0	0.034	0.038	0.001	0	0.341	0.029	0.705	0.00	0.01	0.13	0.01	0.01	0.01	0.00	0.09	0.01	0.19			C区検出中	
18	立体	ColorlessW2		3.511	0.006	0.057	4.354	0.061	0.055	0.016	0.002	0.108	0.003	0	0	0.007	0.710	0.00	0.01	0.01	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.16			C区検出中	
19	棒状	Blue		3.631	0.005	0.026	3.924	0.819	0.034	0.002	0.003	0.075	0.185	0	0	0.052	0.969	0.00	0.01	0.21	0.01	0.00	0.02	0.05	0.00	0.01	0.25			C区掘下げ	
20	立体	Colorless 2		3.190	0	0.052	4.490	1.445	0.932	0.009	0.028	0.086	0.002	0	0	0.065	1.045	0.00	0.01	0.32	0.21	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.23			C区掘下げ	
21	板	Colorless	Blue	2.540	0	0.040	8.275	0.056	6.538	0.022	0.262	0.185	0	0	0	0	0	0.00	0.00	0.01	0.79	0.03	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区掘下げ	
22	棒状	Green		3.650	0	0.119	5.109	0.284	0.192	0.009	0	0.895	0.653	0	0	0.02	0.726	0.00	0.02	0.06	0.04	0.00	0.18	0.13	0.00	0.00	0.14			C区あげ土	
23	棒状	Colorless 2		3.449	0	0.011	2.980	0.575	0.163	0	0.006	0.024	0.001	0	0	0.032	0.72	0.00	0.00	0.19	0.05	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24			C区検出中	
24	立体	ColorlessW1		3.566	0	0.020	2.148	0.207	0.101	0.011	0	0.092	0.001	0	0	0.004	0.916	0.00	0.01	0.10	0.05	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.43			C区検出中	
25	棒状	Purple		3.750	0	0.030	3.268	0.531	0.027	0.006	0.148	0.091	0.022	0	0	0.046	0.695	0.00	0.01	0.16	0.01	0.05	0.03	0.01	0.00	0.01	0.21		18C前半	土壙C498	二階町通
26	容器2	Colorless		2.412	0	0.020	9.406	2.881	2.624	0.003	0.005	0.054	0.010	0	0.128	0.184	0	0.00	0.00	0.31	0.28	0.00	0.01	0.00	0.01	0.02	0.00	カリガラス	18C末～19C中頃	柱穴C517	二階町通
27	瓶	Blue		2.561	0.075	0.398	5.312	0.789	3.670	0.066	0.003	0.392	0	0	0	0.041	0	0.01	0.07	0.15	0.69	0.00	0.07	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	18C前半～後半？	土壙C525	宅地3,4
28	棒状	Colorless 2	Blue	3.200	0.013	0.007	2.699	0.774	0.781	0	0.014	0.06	0.015	0	0	0.03	0.637	0.00	0.00	0.29	0.29	0.01	0.02	0.01	0.00	0.01	0.24		18C前半～後半	土壙C532	二階町通
29	ワインボトル	Dark Green		2.672	0.015	0.290	6.319	0.608	8.353	0.093	0.066	1.715	0.003	0	0	0.02	0	0.00	0.05	0.10	1.32	0.01	0.27	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区掘下げ	
30	棒状	Colorless 1		3.315	0.003	0.028	4.477	0.816	0	0	0.014	0.034	0.001	0	0	0.051	0.956	0.00	0.01	0.18	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.21		18C末～19C中頃	土壙C343	二階町通
31	棒状	Colorless 1	Blue	3.183	0.007	0.012	1.891	0.537	0.548	0.004	0.011	0.039	0.008	0	0	0.026	0.398	0.00	0.01	0.28	0.29	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.21			土壙C532	
32	タンブラー2	ColorlessW2		3.760	0	0.065	7.001	0.420	0.158	0.004	0.009	0.076	0.001	0	0	0.041	1.100	0.00	0.01	0.06	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.16		19C中頃	土壙C549	二階町通
33	棒状	Colorless 1	Blue	3.230	0.011	0.022	3.062	0.893	0.866	0.006	0.017	0.067	0.017	0	0	0.039	0.702	0.00	0.01	0.29	0.28	0.01	0.02	0.01	0.00	0.01	0.23		19C中頃	土壙C549	二階町通
34	酒杯菊	White		2.430	0	0.105	8.604	3.887	2.912	0.020	0	0.312	0	0	0	0.23	0.002	0.00	0.01	0.45	0.34	0.00	0.04	0.00	0.00	0.03	0.00	カリガラス	19C中頃	土壙C549	二階町通
35	棒状	Colorless 1		3.208	0	0.051	4.797	0.819	0.023	0	0	0.058	0.001	0	0	0.063	1.101	0.00	0.01	0.17	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.23		19C中頃	土壙C550	二階町通
36	立体	Colorless 1		3.789	0	0.013	5.191	0.806	0.085	0.006	0	0.071	0.001	0	0	0.055	1.173	0.00	0.00	0.16	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.23		19C中頃	土壙C549	二階町通
37	棒状	Colorless 2	Blue	3.281	0.003	0.039	2.879	0.821	0.471	0.003	0.017	0.038	0.018	0	0	0.035	0.624	0.00	0.01	0.29	0.16	0.01	0.01	0.01	0.00	0.01	0.22			C区掘下げ	
38	立体	Green		2.285	0	0.027	1.103	0.339	0.502	0.015	0.041	0.833	0.932	0	0	0.012	0.707	0.00	0.02	0.31	0.46	0.04	0.76	0.84	0.00	0.01	0.64			C区掘下げ	
39	タンブラー2	ColorlessW2		3.520	0	0.039	4.524	0.013	0.103	0.001	0.009	0.253	0.001	0	0	0.011	0.906	0.00	0.01	0.00	0.02	0.00	0.06	0.00	0.00	0.00	0.20		18C前半	土壙C548	二階町通・宅地19
40	棒状	Colorless 1	透明	3.375	0	0.006	1.566	0.425	0.035	0.003	0.003	0.020	0	0	0	0.019	0.379	0.00	0.00	0.27	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24			C区掘下げ	
41	棒状	Colorless 2		3.816	0	0.159	4.470	0.435	0.051	0.015	0.006	0.160	0.008	0	0	0.027	0.781	0.00	0.04	0.10	0.01	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01	0.17			C区掘下げ	
42	板	Colorless	Blue	2.690	0	0.488	6.621	1.789	6.272	0.103	0.749	0.727	0.009	0	0	0.059	0.01	0.00	0.07	0.27	0.95	0.11	0.11	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		C区掘下げ	
43	酒杯菊	White		2.432	0	0.073	8.463	4.036	2.859	0.030	0.001	0.298	0.003	0	0	0.213	0	0.00	0.01	0.48	0.34	0.00	0.04	0.00	0.00	0.03	0.00	カリガラス	19C中頃	土壙C549	二階町通
44	棒状	Green		3.580	0	0.055	4.814	0.679	0.081	0.003	0.004	0.523	0.866	0	0	0.041	0.771	0.00	0.01	0.14	0.02	0.00	0.11	0.18	0.00	0.01	0.16		18C前半	土壙C575	宅地19
45	棒状	Colorless 1		3.368	0	0	3.930	0.880	0	0	0	0.038	0.001	0	0	0.046	0.914	0.00	0.00	0.22	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.23			C区掘下げ	
46	棒状	Colorless 1		3.067	0.017	0.030	3.869	1.006	0.920	0.007	0.068	0.091	0.026	0	0	0.043	0.769	0.00	0.01	0.26	0.24	0.02	0.02	0.01	0.00	0.01	0.20			C区掘下げ	
47	棒状	YelloW		4.029	0	0.060	3.702	0.353	0.021	0.006	0	0.919	0.040	0	0	0.017	0.826	0.00	0.02	0.10	0.01	0.00	0.25	0.01	0.00	0.00	0.22			C区掘下げ	
48	瓶口	Colorless		3.569	0	0.042	3.095	0.243	0.124	0.006	0.015	0.075	0.001	0	0	0.005	0.745	0.00	0.01	0.08	0.04	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.24		19C中頃	土壙C549	二階町通
49	棒状	Colorless 2		3.319	0	0.028	3.114	0.280	0.031	0.002	0.004	0.052	0.001	0	0	0.022	0.538	0.00	0.01	0.09	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.17		19C中頃	土壙C549	二階町通
50	棒状	YelloW		3.649	0	0.045	1.798	0.176	0.086	0.003	0	0.709	0	0	0	0.009	0.320	0.00	0.03	0.10	0.05	0.00	0.39	0.00	0.00	0.01	0.18		19C中頃	土壙C549	二階町通
51	棒状	Purple	透明	3.643	0	0.028	3.391	0.008	0.108	0.011	0.191	0.302	0.016	0	0	0.032	0.529	0.00	0.01	0.00	0.03	0.06	0.09	0.00	0.00	0.01	0.16		19C中頃	土壙C549	二階町通
52	板	Colorless	Blue	2.531	0.075	0.030	8.312	0.069	6.105	0.034	0.106	0.204	0.002	0	0	0.013	0.004	0.01	0.00	0.01	0.73	0.01	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	土壙C549	二階町通
53	棒状	Colorless 1	透明	3.133	0.007	0.005	2.040	0.748	0.498	0.003	0.017	0.035	0	0	0	0.033	0.417	0.00	0.00	0.37	0.24	0.01	0.02	0.00	0.00	0.02	0.20		19C中頃	土壙C549	二階町通
54	棒状	Colorless 2		2.396	0.013	0.011	2.938	0.786	0.810	0.004	0.04	0.047	0.016	0	0	0.041	0.607	0.00	0.00	0.27	0.28	0.01	0.02	0.01	0.00	0.01	0.21		19C中頃	土壙C549	二階町通
55	棒状	Purple	透明	3.396	0.003	0.021	3.352	0.247	0.062	0.006	0.209	0.080	0.02	0	0	0.031	0.595	0.00	0.01	0.07	0.02	0.06	0.02	0.01	0.00	0.01	0.18		19C中頃	土壙C549	二階町通
56	棒状	White		2.424	0.013	0.310	6.668	3.632	1.696	0.073	0.003	0.221	0.007	0	0	0.217	0	0.00	0.05	0.54	0.25	0.00	0.03	0.00	0.00	0.03	0.00	カリガラス		C区掘下げ	
57	棒状	YelloW		3.909	0	0.077	2.614	0.413	0.462	0.011	0	1.333	0.001	0	0	0.020	0.952	0.00	0.03	0.16	0.18	0.00	0.51	0.00	0.00	0.01	0.36		19C中頃	土壙C549	二階町通
58	棒状	Colorless 1	Blue	3.348	0	0.023	4.098	0.537	0.059	0.003	0	0.030	0.005	0	0	0.036	0.918	0.00	0.01	0.13	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.22		19C中頃	土壙C549	二階町通
59	棒状	Colorless 2		3.302	0	0.037	2.428	0.354	0.121	0.013	0	0.834	0.007	0	0	0.019	0.661	0.00	0.02	0.15	0.05	0.00	0.34	0.00	0.00	0.01	0.27		19C中頃	土壙C549	二階町通
60	棒状	ColorlessW1		3.782	0	0.050	1.729	0.204	0.348	0.005	0	0.109	0.001	0	0	0.006	0.579	0.00	0.03	0.12	0.20	0.00	0.06	0.00	0.00	0.00	0.33		19C中頃	土壙C549	二階町通

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺溝番号	公家屋敷名
61	板？	Colorless		3.811	0.005	0.145	3.701	0.879	0.047	0.017	0	0.198	0.031	0	0	0.046	1.154	0.00	0.04	0.24	0.01	0.00	0.05	0.01	0.00	0.01	0.31		18C前半	土壙C606	二階町通
62	棒状	YelloW		3.827	0	0.257	3.938	0.323	0.247	0.036	0	2.052	0.007	0	0	0.021	0.830	0.00	0.07	0.08	0.06	0.00	0.52	0.00	0.00	0.01	0.21		C区掘下げ		
63	酒杯菊	Green		3.456	0	0.043	1.691	0.682	0.175	0.017	0.027	1.541	0.576	0	0	0.045	0.964	0.00	0.03	0.40	0.10	0.02	0.91	0.34	0.00	0.03	0.57		C区掘下げ		
64	板	Colorless	Blue	2.529	0.057	0.035	8.305	0.078	6.095	0.036	0.265	0.23	0	0	0	0.012	0.008	0.01	0.00	0.01	0.73	0.03	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	土壙C595	二階町通
65	棒状	Colorless 2		3.219	0.010	0.018	3.560	1.262	0.804	0.002	0.022	0.048	0.001	0	0	0.053	0.873	0.00	0.01	0.35	0.23	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.25		19C中頃	土壙C549	二階町通
66	棒状	Colorless 1	透明	3.375	0.002	0	2.764	0.319	0.003	0	0	0.014	0.001	0	0	0.021	0.595	0.00	0.00	0.12	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.22		19C中頃	土壙C549	二階町通
67	棒状	YelloW		3.538	0	0.201	5.225	0.968	0.341	0	0.008	1.150	0.001	0	0	0.062	1.094	0.00	0.04	0.19	0.07	0.00	0.22	0.00	0.00	0.01	0.21		19C中頃	土壙C549	二階町通
68	棒状	Colorless 1		3.384	0	0.022	3.252	0.409	0.031	0	0.009	0.025	0.001	0	0	0.026	0.693	0.00	0.01	0.13	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.21		19C中頃	土壙C595	二階町通
69	タンブラー1栓	Colorless 1		2.525	0.034	0.011	4.586	0.105	2.406	0.016	0.080	0.072	0.002	0	0	0.003	0.157	0.01	0.00	0.02	0.52	0.02	0.02	0.00	0.00	0.00	0.03	カリガラス	19C中頃	土壙C595	二階町通
70	棒状	ColorlessW1		3.757	0	0.038	3.999	0.088	0.246	0.008	0	0.136	0.001	0	0	0.004	0.579	0.00	0.01	0.02	0.06	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.14		19C中頃	土壙C549	二階町通
71	棒状	ColorlessW1		3.646	0	0.016	2.288	0.037	0.220	0.009	0	0.084	0.001	0	0	0.004	0.769	0.00	0.01	0.02	0.10	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.34		19C中頃	土壙C549	二階町通
72	酒杯菊	YelloW		3.458	0	0.030	4.512	1.030	0.015	0	0.003	1.912	0.033	0	0	0.062	1.099	0.00	0.01	0.23	0.00	0.00	0.42	0.01	0.00	0.01	0.24		18C前半	土壙C604	二階町通
73	棒状	Green		3.554	0	0.149	3.689	0.886	0.139	0	0.011	0.829	0.853	0	0	0.038	0.929	0.00	0.04	0.24	0.04	0.00	0.22	0.23	0.00	0.01	0.25		18C前半	土壙C604	二階町通
74	棒状	White		3.498	0	0	4.901	0.042	0.084	0.006	0	0.069	0.001	0	0	0.019	0.626	0.00	0.00	0.01	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.13		18C前半	土壙C604	二階町通
75	棒状	Green	Blue	2.510	0.002	0.034	2.006	0.527	1.822	0.054	0.051	0.612	0.006	0	0	0.005	0.04	0.00	0.02	0.26	0.91	0.03	0.31	0.00	0.00	0.00	0.02	カリガラス	19C中頃	土壙C549	二階町通
76	棒状	White		3.278	0	0.024	6.828	0.479	0.053	0.005	0.003	0.042	0.001	0	0	0.041	0.918	0.00	0.00	0.07	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.13		19C中頃	土壙C549	二階町通
77	板	Colorless		2.539	0.077	0.031	8.303	0.037	6.676	0.021	0.007	0.171	0	0	0	0	0	0.01	0.00	0.00	0.80	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	土壙C595	二階町通
78	棒状	Colorless 1	透明	3.385	0	0.011	2.376	0.284	0.062	0.001	0.005	0.028	0.001	0	0	0.017	0.593	0.00	0.00	0.12	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.25		19C中頃	土壙C595	二階町通
79	棒状	Colorless 1	透明	3.145	0	0.004	2.500	0.332	0.013	0.001	0	0.047	0	0	0	0.024	0.487	0.00	0.00	0.13	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.19		19C中頃	土壙C549	二階町通
80	その他	Green	濃い	3.426	0	0.168	3.445	0.533	0.281	0.012	0.008	0.587	0.862	0	0	0.035	0.548	0.00	0.05	0.15	0.08	0.00	0.17	0.25	0.00	0.01	0.16		19C中頃	土壙C549	二階町通
81	棒状	Purple	透明	3.568	0	0.027	3.806	0.670	0.008	0	0.220	0.031	0.001	0	0	0.040	0.696	0.00	0.01	0.18	0.00	0.06	0.01	0.00	0.00	0.01	0.18		19C中頃	土壙C549	二階町通
82	棒状	Purple		2.956	0.001	0	1.578	1.343	1.238	0.009	0.577	0.194	0.523	0	0	0.054	0.690	0.00	0.00	0.85	0.78	0.37	0.12	0.33	0.00	0.03	0.44		19C中頃	土壙C549	二階町通
83	棒状	Colorless 1	透明	3.458	0.001	0	2.958	0.788	0.011	0	0	0.033	0	0	0	0.047	0.796	0.00	0.00	0.27	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.27		19C中頃	土壙C549	二階町通
84	立体	Colorless 1		3.414	0	0	2.258	0.899	0.160	0	0	0.018	0	0	0	0.05	0.634	0.00	0.00	0.40	0.07	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.28		19C中頃	土壙C549	二階町通
85	立体	Colorless 1		3.403	0.001	0.046	5.225	1.211	0	0.003	0.016	0.064	0.001	0	0	0.125	1.145	0.00	0.01	0.23	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.22		19C中頃	土壙C549	二階町通
86	棒状	Colorless 1	透明	3.488	0	0	2.730	0.952	0	0	0	0.023	0.001	0	0	0.113	0.877	0.00	0.00	0.35	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.04	0.32		19C中頃	土壙C549	二階町通
87	立体	ColorlessW1		3.644	0	0.009	4.972	0.708	0.036	0	0	0.136	0.018	0	0	0.045	1.145	0.00	0.00	0.14	0.01	0.00	0.03	0.00	0.00	0.01	0.23		19C中頃	土壙C595	二階町通
88	酒杯菊	Green		3.584	0.001	0.089	6.171	0.584	0.159	0.003	0.009	0.607	1.286	0	0.329	0.054	0.644	0.00	0.01	0.09	0.03	0.00	0.10	0.21	0.05	0.01	0.10		19C中頃	土壙C595	二階町通
89	酒杯菊	Green		3.579	0	0.088	6.335	0.745	0.151	0.008	0.013	0.686	1.479	0	0	0.067	1.019	0.00	0.01	0.12	0.02	0.00	0.11	0.23	0.00	0.01	0.16		19C中頃	土壙C595	二階町通
90	立体	Colorless 1		3.912	0.074	0	5.038	0.552	0.026	0	0	0.042	0.004	0	0	0.038	1.065	0.01	0.00	0.11	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.21		19C中頃	土壙C549	二階町通
91	容器 2	Colorless		3.509	0.003	0.031	4.419	1.159	0	0	0.017	0.028	0	0	0	0.046	1.170	0.00	0.01	0.26	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.26			C区清掃中	
92	酒杯菊	ColorlessW2		3.540	0	0.003	5.344	0.489	0.086	0.003	0	0.066	0.006	0	0	0.046	0.955	0.00	0.00	0.09	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.18			C区掘下げ	
93	タンブラー 2	Colorless	緑白	3.546	0	0	5.870	0.447	0.108	0.000	0.001	0.055	0.011	0	0	0.037	1.091	0.00	0.00	0.08	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19			C区掘下げ	
94	棒状	Colorless 2		3.785	0	0.043	3.138	0.394	0.021	0.003	0	0.060	0.001	0	0	0.029	0.627	0.00	0.01	0.13	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.20			C区掘下げ	
95	立体	Green		3.47	0	0.031	1.139	0.126	0.082	0.002	0.002	0.079	0.149	0	0	0.006	0.189	0.00	0.03	0.11	0.07	0.00	0.07	0.13	0.00	0.01	0.17			C区掘下げ	
96	ワインボトル	Dark Green		2.672	0	0.543	5.352	0.635	2.807	0.180	0.404	1.072	0.010	0	0	0.028	0.008	0.00	0.10	0.12	0.52	0.08	0.20	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		C区清掃中	
97	立体	ColorlessW2		3.539	0	0.010	1.976	0.116	0.614	0.019	0	0.051	0.011	0	0	0	1.018	0.00	0.01	0.06	0.31	0.00	0.03	0.01	0.00	0.00	0.52		18C前半	土壙C651	二階町通・宅地19
98	棒状	ColorlessW2		3.694	0.001	0.029	7.607	0.076	0	0.006	0.010	0.089	0.001	0	0	0.022	0.856	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.11			C区検出中	
99	棒状	Colorless 2	Green	2.650	0.006	0.459	4.486	0.251	1.868	0.169	0.289	0.933	0.006	0	0	0.008	0.004	0.00	0.10	0.06	0.42	0.06	0.21	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区検出中	
100	棒状	White		3.431	0	0.054	2.327	0.240	0.687	0.005	0.005	0.056	0.001	0	0	0.009	0.766	0.00	0.02	0.10	0.30	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.33			撹乱C14	
101	板	Colorless	Blue	2.511	0.060	0.414	7.481	0.971	3.785	0.060	0.107	0.512	0.007	0	0.034	0.043	0.028	0.01	0.06	0.13	0.51	0.01	0.07	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		C区検出中	
102	立体	Colorless 2		2.513	0.082	0.071	8.453	0.273	4.609	0.007	0.162	0.105	0	0	0.008	0.025	0.023	0.01	0.01	0.03	0.55	0.02	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C末～19C中頃	土壙C356	二階町通
103	板	Colorless	Blue	2.525	0.081	0.056	8.273	0.051	6.267	0.024	0	0.209	0	0	0	0.005	0.005	0.01	0.01	0.01	0.76	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C末～19C中頃	土壙C363	二階町通
104	棒状	Colorless 2	Green	3.496	0.001	0.076	2.476	0.053	0.116	0.005	0.001	0.094	0.011	0	0	0.034	0.455	0.00	0.03	0.02	0.05	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01	0.18		18C末～19C中頃	土壙C363	二階町通
105	容器 2	Colorless		3.950	0	0.035	4.638	1.278	0.011	0	0.023	0.027	0	0	0	0.062	1.156	0.00	0.01	0.28	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.25		18C末～19C中頃	土壙C363	二階町通
106	立体	ColorlessW1		3.687	0	0.077	7.142	0.542	0.050	0	0	0.085	0.002	0	0	0.05	1.154	0.00	0.01	0.08	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.16			C区掘下げ	
107	立体	Green		3.511	0	0.015	2.804	0.225	0.070	0.005	0.007	0.612	0.222	0	0	0.026	0.444	0.00	0.01	0.08	0.02	0.00	0.22	0.08	0.00	0.01	0.16		18C前半	土壙C801	二階町通・宅地19
108	棒状	Green		3.471	0	0.043	2.547	0.282	0.080	0.005	0	0.823	0.877	0	0	0.022	0.593	0.00	0.02	0.11	0.03	0.00	0.32	0.34	0.00	0.01	0.23		18C前半	土壙C801	二階町通・宅地19
109	酒杯菊	Colorless 1		3.534	0	0.049	3.881	0.758	0.014	0	0	0.096	0.020	0	0	0.044	1.068	0.00	0.01	0.20	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.28		18C前半	土壙C890	二階町通
110	棒状	Colorless 2	Blue	3.313	0	0.042	4.272	0.547	0.073	0.003	0.006	0.057	0.013	0	0	0.033	1.052	0.00	0.01	0.13	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.25		18C前半	土壙C657	二階町通・宅地19
111	棒状	White		3.184	0	0.154	4.272	0.463	0.938	0.012	0.013	0.106	0.018	0	0	0.021	0.827	0.00	0.04	0.11	0.22	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.19		19C中頃	土壙C34	二階町通・宅地19
112	棒状	Colorless 1	透明	3.347	0.005	0.004	3.418	0.356	0	0.001	0.001	0.018	0.001	0	0	0.032	0.730	0.00	0.00	0.10	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.21		19C中頃	土壙C34	二階町通・宅地19
113	棒状	Green		3.023	0	0.267	4.761	0.640	0.235	0	0.021	0.310	0.666	0	0	0	0.773	0.00	0.06	0.13	0.05	0.00	0.07	0.14	0.00	0.00	0.16		18C末～19C中頃	土壙C59	二階町通より東
114	容器 2	Colorless		3.428	0.006	0.051	4.457	1.196	0.001	0.004	0.013	0.06	0.001	0	0	0.057	1.145	0.00	0.01	0.27	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.26		19C中頃	土壙C136	二階町通
115	棒状	YelloW		3.793	0	0.142	4.563	0.673	0.058	0.011	0.007	0.994	0.120	0	0	0.051	1.003	0.00	0.03	0.15	0.01	0.00	0.22	0.03	0.00	0.01	0.22			C区清掃中	
116	ワインボトル	Dark Green		2.639	0	0.504	6.124	0.927	3.678	0.209	0.399	1.353	0.008	0	0	0.059	0	0.00	0.08	0.15	0.60	0.07	0.22	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		C区清掃中	
117	棒状	Colorless 2		3.179	0.002	0.109	3.334	0.409	0.651	0.004	0.021	0.054	0.002	0	0	0.022	0.538	0.00	0.03	0.12	0.20	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.16		19C中頃	土壙C34	二階町通
118	棒状	Colorless 2		3.738	0	0	2.861	0.279	0	0.002	0	0.040	0.009	0	0	0.018	0.443	0.00	0.00	0.10	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.15			C区清掃中	
119	棒状	Green		3.780	0	0.024	2.454	0.417	0.162	0.010	0.006	0.345	0.726	0	0	0.034	0.896	0.00	0.01	0.17	0.07	0.00	0.14	0.30	0.00	0.01	0.37			C区廃土内	
120	酒杯菊	ColorlessW2		3.438	0	0.058	1.975	0.121	0.559	0.016	0.006	0.071	0	0	0	0	0.814	0.00	0.03	0.06	0.28	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.41			撹乱C５	

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺溝番号	公家屋敷名
121	棒状	Yellow		3.803	0	0.059	4.162	0.531	0.005	0	0.001	0.666	0.004	0	0	0.024	0.707	0.00	0.01	0.13	0.00	0.00	0.16	0.00	0.00	0.01	0.17		19C中頃	土壙C595	二階町通
122	棒状	Purple		3.201	0	0.139	5.064	1.325	0.609	0.020	0.984	0.735	0.958	0	0	0.085	0.793	0.00	0.03	0.26	0.12	0.19	0.15	0.19	0.00	0.02	0.16		18C前半	土壙C22	二階町通・宅地19
123	ガラス以外			1.128	0	0	0.023	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	琥珀		C区掘下げ	
124	その他	White	乳白Blue	2.669	0	0.203	2.274	0.191	0.786	0.078	0.138	0.541	0.003	0	0	0.007	0.002	0.00	0.09	0.08	0.35	0.06	0.24	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C前半～後半	土壙C579	宅地19
125	タンブラー2	ColorlessW2		3.873	0.002	0.048	7.385	0.548	0.018	0	0	0.059	0.024	0	0	0.053	1.063	0.00	0.01	0.07	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.14			C区清掃中	
126	ワインボトル	Dark Green		2.739	0	0.035	0.655	0.043	1.018	0.013	0.003	0.230	0.001	0	0	0	0	0.00	0.05	0.07	1.55	0.00	0.35	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区掘下げ	
127	ワインボトル	Dark Green		2.755	0.010	0.391	6.541	0.485	9.651	0.138	0.029	2.332	0.005	0	0	0	0	0.00	0.06	0.07	1.48	0.00	0.36	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区検出中	
128	棒状	Colorless 1	YelloW	3.846	0.004	0.027	3.077	0.317	0.018	0	0.001	0.056	0.001	0	0	0.018	0.515	0.00	0.01	0.10	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.17		18C末～19C中頃	柱穴C302	二階町通
129	立体	Colorless 2		3.695	0	0.094	6.548	0.64	0.017	0	0	0.084	0.001	0	0	0.058	1.108	0.00	0.01	0.10	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17		18C末～19C中頃	柱穴C244	二階町通より東
130	徳利口	Green		3.425	0	0.096	6.686	0.363	0.179	0.020	0.006	0.774	0	0.923	0	0.042	0.966	0.00	0.01	0.05	0.03	0.00	0.12	0.00	0.00	0.01	0.14		17C前半～18C初	土壙C1163	宅地9
131	立体	Colorless 2		3.168	0.014	0.016	4.249	1.354	0.919	0.005	0.029	0.064	0.001	0	0	0.076	0.943	0.00	0.00	0.32	0.22	0.01	0.02	0.00	0.00	0.02	0.22			C区掘下げ	
132	コップ底	Colorless		3.414	0	0.070	4.928	1.038	0.022	0	0.012	0.027	0.001	0	0	0.061	0.966	0.00	0.01	0.21	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.20		19C中頃	土壙C550	二階町通
133	容器2	Colorless		3.406	0	0.136	4.454	0.519	0.663	0.009	0.023	0.086	0.001	0	0	0.031	1.019	0.00	0.03	0.12	0.15	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.23		19C中頃	土壙C550	二階町通
134	板	Colorless	Blue	2.537	0.014	0.283	5.461	0.287	2.443	0.104	0.028	0.871	0.002	0	0	0.030	0.004	0.00	0.05	0.05	0.45	0.01	0.16	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		C区掘下げ	
135	ワインボトル	Dark Green		2.749	0	0.386	6.528	0.429	9.825	0.138	0.026	2.330	0.005	0	0.004	0.008	0	0.00	0.06	0.07	1.51	0.00	0.36	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区掘下げ	
136	その他	White	乳白Blue	2.611	0.011	0.140	2.455	0.533	3.403	0.100	0.33	0.812	0.071	0	0	0.014	0.002	0.00	0.06	0.22	1.39	0.13	0.33	0.03	0.00	0.01	0.00	カリガラス		C区掘下げ	
137	その他	White	乳白	2.634	0.012	0.150	2.882	0.570	3.640	0.087	0.319	0.711	0.025	0	0	0.022	0.001	0.00	0.05	0.20	1.26	0.11	0.25	0.01	0.00	0.01	0.00	カリガラス		C区掘下げ	
138	酒杯	Green	YelloW	3.612	0	0.021	2.158	0.648	0.201	0.005	0.009	0.341	1.09	0	0	0.013	1.050	0.00	0.01	0.30	0.09	0.00	0.16	0.51	0.00	0.01	0.49		18C前半	土壙C548B	二階町通・宅地19
139	酒杯菊	Green		3.558	0.002	0.093	7.326	0.652	0.191	0.018	0.008	0.585	1.045	0	0	0.057	1.044	0.00	0.01	0.09	0.03	0.00	0.08	0.14	0.00	0.01	0.14		18C前半	土壙C548	二階町通・宅地19
140	立体	ColorlessW1	Blue	3.763	0.001	0.042	10.27	0.235	0.012	0	0.001	0.1	0.029	0	0	0.043	1.086	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.11			C区掘下げ	
141	立体	Dark		2.556	0	0.483	4.316	0.217	2.797	0.390	3.237	2.732	0.025	0	0.004	0.017	0.004	0.00	0.11	0.05	0.65	0.75	0.63	0.01	0.00	0.00	0.00	カリガラス		C区検出中	
142	瓶口	Colorless		3.530	0.001	0.012	2.885	0.697	0.006	0	0.012	0.015	0.001	0	0	0.035	0.768	0.00	0.00	0.24	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.27			C区掘下げ	
143	棒状	ColorlessW1	Blue	3.562	0	0.042	6.359	0.151	0.093	0.012	0.001	0.128	0.018	0	0	0.019	1.044	0.00	0.01	0.02	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.16			C区掘下げ	
144	棒状	ColorlessW2		3.629	0	0.076	3.082	0.025	0.056	0.008	0.004	0.208	0.098	0	0	0.019	1.024	0.00	0.02	0.01	0.02	0.00	0.07	0.03	0.00	0.01	0.33			C区掘下げ	
145	コップ底	Colorless		3.419	0	0.018	4.008	1.293	0	0	0.011	0.011	0.001	0	0	0.065	1.131	0.00	0.00	0.32	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.28		19C中頃	土壙C549	二階町通
146	棒状	Purple		2.932	0.015	0.119	4.642	1.699	1.396	0.016	0.621	0.234	0.163	0	0	0	0.701	0.00	0.03	0.37	0.30	0.13	0.05	0.04	0.00	0.00	0.15		19C中頃	土壙C549	二階町通
147	立体	ColorlessW2		3.537	0	0.022	2.887	0.365	0.584	0.01	0	0.054	0.016	0	0	0.029	1.092	0.00	0.01	0.13	0.20	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.38		18C前半	土壙C651	二階町通・宅地19
148	酒杯菊	Green		3.517	0	0.095	5.122	0.205	0.205	0	0.006	0.757	0.417	0	0	0.023	0.854	0.00	0.02	0.04	0.04	0.00	0.15	0.08	0.00	0.00	0.17			C区掘下げ	
149	ガラス以外			2.649	0	0	11.91	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	水晶	16C末～17C初	土壙C953	
150	酒杯	Green	YelloW	3.410	0	0.020	2.057	0.304	0.179	0.022	0.004	0.789	0.793	0	0	0.03	0.978	0.00	0.01	0.15	0.09	0.00	0.38	0.39	0.00	0.01	0.48		18C前半	土壙C548B	二階町通・宅地19
151	立体	ColorlessW2		3.789	0	0.103	6.501	0.372	0.103	0.012	0.012	0.105	0.001	0	0	0.033	1.101	0.00	0.02	0.06	0.02	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.17			C区清掃中	
152	容器2	Colorless		3.416	0.005	0.012	3.824	1.110	0	0	0.011	0.01	0.001	0	0	0.06	1.072	0.00	0.00	0.29	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.28		19C中頃	土壙C549	二階町通
153	棒状	ColorlessW1		3.621	0	0.026	3.929	0.847	0.009	0	0.032	0.029	0.001	0	0	0.065	0.951	0.00	0.01	0.22	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.02	0.24			D区検出中	
154	ランプ口	Colorless		2.470	0.073	0.001	8.869	0.041	3.040	0.024	0.168	0.051	0.001	0	0	0.002	0.055	0.01	0.00	0.00	0.34	0.02	0.01	0.00	0.00	0.00	0.01	カリガラス	16C末	溝D4	
155	容器2	Colorless		2.475	0.024	0.112	7.921	0.071	3.432	0.030	0.165	0.110	0	0	0	0	0.053	0.00	0.01	0.01	0.43	0.02	0.01	0.00	0.00	0.00	0.01	カリガラス	18C末～19C中頃	柱穴D5	二階町通より東
156	ワインボトル	Dark Green		2.749	0	0.412	6.902	0.447	9.739	0.141	0.028	2.332	0.005	0	0	0.002	0	0.00	0.06	0.06	1.41	0.00	0.34	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	16C末	土壙D10	混入
157	棒状	White		2.770	0	0.974	5.564	0.049	0.045	0.077	0.006	0.128	0	0	0	0.028	0.001	0.00	0.18	0.01	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		溝D9	
158	棒状	Colorless 2		3.264	0	0.029	2.976	0.287	0.018	0	0.006	0.055	0.001	0	0	0.023	0.515	0.00	0.01	0.10	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.17			D区検出中	
159	ワインボトル	Dark Green		2.744	0	0.460	6.491	0.428	9.403	0.133	0.036	2.268	0.004	0	0	0.002	0	0.00	0.07	0.07	1.45	0.01	0.35	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		D区掘下げ	
160	棒状	Green		3.536	0.002	0.047	4.150	0.634	0.053	0.004	0.005	0.558	0.412	0	0	0.052	0.673	0.00	0.01	0.15	0.01	0.00	0.13	0.10	0.00	0.01	0.16			D区掘下げ	
161	ワインボトル	Dark Green		2.727	0	0.080	2.123	0.504	7.906	0.144	0.049	1.980	0.003	0	0	0	0	0.00	0.04	0.24	3.72	0.02	0.93	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		D区掘下げ	
162	容器2	Colorless		3.612	0	0.029	3.691	0.990	0.026	0	0.031	0.037	0.001	0	0	0.066	1.075	0.00	0.01	0.27	0.01	0.01	0.01	0.00	0.00	0.02	0.29		18C前半	溝D6	宅地19
163	棒状	Green		3.804	0	0.131	3.959	0.189	0.134	0.016	0.009	0.653	0.467	0	0	0.018	0.558	0.00	0.03	0.05	0.03	0.00	0.16	0.12	0.00	0.00	0.14		18C前半	土壙D25B	二階町通・宅地19
164	棒状	Colorless 2		3.325	0	0.086	3.140	0.293	0.038	0.010	0.01	0.112	0.001	0	0	0.023	0.581	0.00	0.03	0.09	0.01	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01	0.19		18C末～19C中頃	土壙D69	二階町通
165	ワインボトル	Dark Green		2.745	0	0.445	6.427	0.477	9.156	0.131	0.035	2.225	0.002	0	0	0.024	0	0.00	0.07	0.07	1.42	0.01	0.35	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C前半	溝D6	宅地19
166	容器2	Colorless		3.668	0.001	0.061	5.000	0.941	0.011	0.002	0.02	0.047	0	0	0	0.073	1.058	0.00	0.01	0.19	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.21		18C末～19C初	溝D9	二階町通
167	棒状	Colorless 2		3.37	0	0.038	3.541	0.402	0.023	0.003	0.003	0.058	0	0	0	0.035	0.696	0.00	0.01	0.11	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.20		18C末～19C初	溝D9	二階町通
168	棒状	YelloW		3.725	0	0.069	1.562	0.175	0.071	0.009	0.004	0.780	0.003	0	0	0.003	0.355	0.00	0.04	0.11	0.05	0.00	0.50	0.00	0.00	0.00	0.23		18C前半	土壙D25B	二階町通・宅地19
169	棒状	Colorless 2	Blue	3.197	0.005	0.067	3.756	1.173	0.683	0.007	0.025	0.075	0.022	0	0	0.068	0.799	0.00	0.02	0.31	0.18	0.01	0.02	0.01	0.00	0.02	0.21		18C前半	土壙D25B	二階町通・宅地19
170	容器2	Colorless		3.337	0.004	0.036	4.009	1.303	0.290	0	0.014	0.044	0.001	0	0	0.086	1.007	0.00	0.01	0.33	0.07	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.25			D区掘下げ	
171	棒状	Blue Navy		3.388	0.003	0.091	4.216	0.269	0.045	0.017	0.120	0.202	0.031	0	0	0.025	0.650	0.00	0.02	0.06	0.01	0.03	0.05	0.01	0.00	0.01	0.15		16C末	溝D4	
172	ワインボトル	Dark Green		2.742	0	0.513	6.931	0.468	10.263	0.152	0.04	2.518	0.004	0	0	0	0	0.00	0.07	0.07	1.48	0.01	0.36	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		土壙D99	
173	ワインボトル	Dark Green		2.637	0.008	0.322	7.907	0.215	9.057	0.100	0.060	1.718	0	0	0	0	0.029	0.00	0.04	0.03	1.15	0.01	0.22	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		D区掘下げ	
174	ワインボトル	Dark Green		2.714	0.009	0.329	6.563	0.342	8.879	0.128	0.132	2.206	0.005	0	0	0	0	0.00	0.05	0.05	1.35	0.02	0.34	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		D区掘下げ	
175	酒杯菊	Green		3.526	0	0.147	5.624	0.799	0.230	0.009	0.014	0.896	0.877	0	0	0.068	0.974	0.00	0.03	0.14	0.04	0.00	0.16	0.16	0.00	0.01	0.17		18C前半	土壙D25B	二階町通・宅地19
176	棒状	Colorless 2		3.35	0.001	0.005	2.756	0.565	0.210	0	0	0.036	0.001	0	0	0.035	0.537	0.00	0.00	0.21	0.08	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		18C末～19C中頃	土壙D25B	二階町通の東
177	ワインボトル	Dark Green	Brown	2.584	0.035	0.458	6.389	0.841	2.998	0.141	3.428	1.623	0.005	0	0	0.04	0	0.01	0.07	0.13	0.47	0.54	0.25	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	18C末～19C中頃	土壙D100	二階町通の東
178	瓶口	Colorless		2.476	0.051	0.002	7.24	0.049	3.145	0.027	0.267	0.037	0	0	0	0	0.094	0.01	0.00	0.01	0.43	0.04	0.01	0.00	0.00	0.00	0.01	カリガラス	17C中頃～18C初	土壙D109	宅地9
179	切子	Colorless 1		2.464	0.064	0.118	8.176	0.563	2.668	0.024	0.015	0.141	0.003	0	0	0.034	0.044	0.01	0.01	0.07	0.33	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.01	カリガラス		D区掘下げ	
180	コップ底	Colorless		3.453	0	0.125	4.315	1.089	0.279	0.006	0.021	0.096	0.005	0	0	0.081	1.055	0.00	0.03	0.25	0.06	0.00	0.02	0.00	0.00	0.02	0.24			D区掘下げ	

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺溝番号	公家屋敷名
181	コップ底	Colorless		2.959	0.019	0.040	5.094	1.540	0.348	0.010	0.044	0.047	0	0	0	0.092	0.988	0.00	0.01	0.30	0.07	0.01	0.01	0.00	0.00	0.02	0.19			D区掘下げ	
182	立体	Green		2.537	0.091	0.091	7.561	0.295	4.200	0.052	0.139	0.284	0	0	0.247	0.029	0.052	0.01	0.01	0.04	0.56	0.02	0.04	0.00	0.03	0.00	0.01	カリガラス		D区掘下げ	
183	酒杯	Green	YelloW	3.531	0	0.010	1.833	0.283	0.099	0.012	0.007	0.391	0	0.660	0	0.018	0.655	0.00	0.01	0.15	0.05	0.00	0.21	0.00	0.00	0.01	0.36			D区掘下げ	
184	ワインボトル	Dark Green		2.761	0.005	0.220	6.214	0.481	9.555	0.075	0.084	1.965	0.008	0	0	0.009	0	0.00	0.04	0.08	1.54	0.01	0.32	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		D区掘下げ	
185	ワインボトル	Dark Green		2.729	0	0.456	6.522	0.440	9.148	0.135	0.035	2.276	0.003	0	0	0.006	0.002	0.00	0.07	0.07	1.40	0.01	0.35	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		D区攪乱	
186	棒状	Colorless 2	YelloW	3.542	0	0.121	4.687	0.746	0.026	0.009	0	0.121	0.022	0	0	0.054	0.895	0.00	0.03	0.16	0.01	0.00	0.03	0.00	0.00	0.01	0.19			D区検出中	
187	棒状	ColorlessW2		3.561	0	0.036	5.249	0.007	0.055	0	0.012	0.057	0	0.003	0	0	0.794	0.00	0.01	0.00	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.15			D区掘下げ	
188	立体	Green		3.494	0.001	0.008	1.941	0.384	0.065	0.004	0.005	0.739	0.359	0	0	0.018	0.737	0.00	0.00	0.20	0.03	0.00	0.38	0.18	0.00	0.01	0.38			D区掘下げ	
189	棒状	ColorlessW2		3.365	0	0.034	4.149	0.244	0.110	0.002	0.006	0.058	0.001	0	0	0.022	0.705	0.00	0.01	0.06	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17		18C末～19C中頃	溝D9	二階町通
190	棒状	Blue		2.900	0	0.104	4.163	0.334	0.068	0.017	0.013	0.220	0.366	0	0	0.036	0.662	0.00	0.02	0.08	0.02	0.00	0.05	0.09	0.00	0.01	0.16			D区掘下げ	宅地9
191	ワインボトル	Dark Green		2.761	0.005	0.218	6.267	0.516	9.304	0.072	0.082	1.938	0.008	0	0	0.017	0	0.00	0.03	0.08	1.48	0.01	0.31	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C前半	土壙D130	
192	チロリ蓋	Cobaltblue		3.774	0.001	0.068	6.358	0.647	0.028	0	0.314	0.151	0.036	0.040	0	0.048	0.988	0.00	0.01	0.10	0.00	0.05	0.02	0.01	0.00	0.01	0.16			D区掘下げ	
193	タンブラー2	ColorlessW2		4.067	0	0.030	6.515	0.158	0.026	0.008	0.007	0.169	0.001	0	0	0.028	1.053	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.16		18C末～19C中頃	溝D9	二階町通
194	立体底	ColorlessW2		3.671	0.004	0.024	4.912	0.823	0	0.014	0.016	0.031	0.001	0	0	0.086	0.951	0.00	0.00	0.17	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.19		18C末～19C初	溝D9	二階町通
195	立体	Colorless 1		2.449	0.071	0.025	8.543	0.048	2.452	0.021	0.147	0.063	0	0	0	0.005	0.007	0.01	0.00	0.01	0.29	0.02	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C末～19C初	溝D9	二階町通
196	棒状	YelloW		3.681	0	0.133	2.329	0.374	0.071	0.013	0.007	1.070	0.01	0	0	0.027	0.520	0.00	0.06	0.16	0.03	0.00	0.46	0.00	0.00	0.01	0.22		18C前半	土壙D130	二階町通
197	立体	Colorless 1		2.966	0.007	0.094	5.097	1.414	0.377	0.013	0.055	0.069	0.001	0	0.427	0.093	0.656	0.00	0.02	0.28	0.07	0.01	0.01	0.00	0.08	0.02	0.13			D区掘下げ	
198	ワインボトル	Dark Green		2.747	0	0.373	6.554	0.442	10.235	0.136	0.028	2.311	0.001	0	0	0.009	0	0.00	0.06	0.07	1.56	0.00	0.35	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	16C末	溝D4	
199	棒状	Colorless 1		3.974	0	0.071	3.595	0.462	0.056	0.014	0.007	0.147	0.002	0	0	0.038	0.637	0.00	0.02	0.13	0.02	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01	0.18		18C末～19C初	溝D9	二階町通
200	棒状	Colorless 1		3.799	0.003	0.006	3.477	0.372	0.010	0.001	0	0.028	0.001	0	0	0.029	0.536	0.00	0.00	0.11	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.15		18C前半	土壙D130D	二階町通
201	棒状	Green		3.467	0.001	0.042	5.047	0.398	0.193	0.013	0.003	0.147	0.975	0	0	0.037	0.785	0.00	0.01	0.08	0.04	0.00	0.03	0.19	0.00	0.01	0.16			D区掘下げ	
202	立体	ColorlessW2		3.500	0	0.033	1.631	0.154	0.199	0.016	0.006	0.386	0.023	0	0	0.009	1.023	0.00	0.02	0.09	0.12	0.00	0.24	0.01	0.00	0.01	0.63			D区掘下げ	
203	ワインボトル	Dark Green		2.746	0.000	0.488	6.492	0.468	8.839	0.161	0.035	2.397	0.005	0	0	0	0	0.00	0.08	0.07	1.36	0.01	0.37	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C末～19C中頃	土壙D155	二階町通
204	ワインボトル	Dark Green		2.642	0.015	0.204	5.424	0.136	6.288	0.070	0.040	1.201	0.002	0	0	0	0.022	0.00	0.04	0.03	1.16	0.01	0.22	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		D区掘下げ	
205	棒状	Blue		2.466	0.005	0.252	6.905	3.996	1.984	0.066	0.008	0.321	0.91	0	0	0.272	0.008	0.00	0.04	0.58	0.29	0.00	0.05	0.13	0.00	0.04	0.00	カリガラス	18C末～19C初	土壙D143B	二階町通
206	棒状	Colorless 1	透明	3.260	0.001	0.004	2.182	0.368	0.018	0	0.001	0.027	0.009	0	0	0.027	0.474	0.00	0.00	0.17	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.22		18C末～19C初	土壙D143B	二階町通
207	棒状	ColorlessW1		3.635	0	0.002	6.081	0.297	0.001	0	0.002	0.071	0.015	0	0	0.02	0.699	0.00	0.00	0.05	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.11			D区掘下げ	
208	棒状	Colorless 1	透明	3.376	0.001	0.003	3.059	0.274	0.003	0	0.01	0.02	0.001	0	0	0.019	0.543	0.00	0.00	0.09	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.18			D区掘下げ	
209	棒状	Blue	透明	3.052	0.002	0.016	2.170	0.186	0.045	0.002	0.004	0.037	0.202	0	0	0.017	0.354	0.00	0.01	0.09	0.02	0.00	0.02	0.09	0.00	0.01	0.16		18C末～19C初	溝D9	二階町通
210	棒状	Colorless1	透明	3.411	0.001	0.007	1.753	0.366	0.027	0.014	0.007	0.198	0.001	0	0	0.014	0.764	0.00	0.00	0.21	0.02	0.00	0.11	0.00	0.00	0.01	0.44		18C前半～後半	土壙D168	宅地19
211	板	Colorless 1		2.531	0.080	0.026	7.787	0.055	5.800	0.020	0	0.197	0	0	0	0	0.003	0.01	0.00	0.01	0.74	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C末～19C初	溝D158	二階町通
212	猪口	Green	White	3.735	0	0.173	7.113	0.770	0.406	0.016	0.002	0.229	0.052	0	0	0.470	0.903	0.00	0.02	0.11	0.06	0.00	0.03	0.01	0.00	0.07	0.13		18C末～19C初	溝D158	二階町通
213	板	Colorless	Blue	2.564	0.101	0.149	7.596	0.496	5.871	0.038	0.001	0.227	0	0	0	0.019	0	0.01	0.02	0.07	0.77	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C末～19C初	溝D158	二階町通
214	ワインボトル	Dark Green		2.741	0.010	0.444	6.530	0.445	9.555	0.136	0.036	2.340	0	0	0	0	0	0.00	0.07	0.07	1.46	0.01	0.36	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C末～19C初	溝D158	二階町通
215	立体	White		2.486	0.066	0.405	6.698	1.306	3.800	0.028	0.128	0.263	0	0	0	0.075	0	0.01	0.06	0.19	0.57	0.02	0.04	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		D区掘下げ	
216	棒状	Colorless 2		3.363	0	0.029	4.633	0.537	0.000	0	0.009	0.026	0.001	0	0	0.057	0.917	0.00	0.01	0.12	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.20		18C末～19C初	溝D9	二階町通
217	ワインボトル	Dark Green		2.768	0	0.447	6.736	0.538	9.834	0.144	0.043	2.256	0.005	0	0	0.013	0	0.00	0.07	0.08	1.46	0.01	0.33	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C末～19C初	溝D158	二階町通
218	棒状	YelloW		3.679	0.002	0.130	4.720	0.270	0.170	0.021	0.006	1.458	0.003	0	0	0.011	0.897	0.00	0.03	0.06	0.04	0.00	0.31	0.00	0.00	0.00	0.19		18C末～19C初	溝D158	二階町通
219	棒状	Colorless 1	透明	3.313	0	0.014	2.728	0.544	0.008	0	0	0.034	0.001	0	0	0.030	0.596	0.00	0.01	0.20	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.22		18C末～19C初	溝D158	二階町通
220	棒状	Colorless 1	透明	3.385	0	0.015	2.167	0.545	0.008	0	0	0.021	0.001	0	0	0.035	0.565	0.00	0.01	0.25	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.26		18C末～19C初	溝D158	二階町通
221	棒状	Colorless 2		3.607	0	0.021	3.052	0.373	0.010	0	0	0	0.004	0	0	0.023	0.586	0.00	0.01	0.12	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.19		18C末～19C初	溝D158	二階町通
222	棒状	Colorless 1	Blue	3.249	0	0.009	4.856	0.840	0.405	0.002	0.033	0.146	0.080	0	0.390	0.072	0.689	0.00	0.00	0.17	0.08	0.01	0.03	0.02	0.08	0.01	0.14		18C末～19C初	溝D9	二階町通
223	棒状	Colorless 1	透明	3.317	0	0.008	2.960	0.556	0.000	0.001	0.01	0.02	0.001	0	0	0.036	0.582	0.00	0.00	0.19	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.20		18C末～19C初	溝D9	二階町通
224	棒状	ColorlessW2		3.388	0.000	0.011	1.552	0.042	0.279	0.006	0	0.041	0.001	0	0	0.006	0.592	0.00	0.01	0.03	0.18	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.38		18C末～19C初	溝D9	二階町通
225	棒状	Colorless 1	透明	3.028	0.018	0.018	3.873	1.032	0.962	0.006	0.067	0.082	0.025	0	0	0.060	0.759	0.00	0.00	0.27	0.25	0.02	0.02	0.01	0.00	0.02	0.20		18C前半	土壙D141	二階町通
226	立体	White	乳白色	2.492	0.071	0.399	7.231	1.139	4.030	0.034	0.190	0.255	0.001	0	0.013	0.046	0.002	0.01	0.06	0.16	0.56	0.03	0.04	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	17C中頃～18C初	溝D110	宅地9
227	瓶口	Colorless		3.385	0	0.022	4.137	0.632	0	0	0	0.015	0.001	0	0	0.050	1.057	0.00	0.01	0.15	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.26			D区掘下げ	
228	板	Colorless	Blue	3.861	0	0.004	1.060	0.587	0.005	0	0	0.026	0.03	0	0	0.033	1.091	0.00	0.00	0.55	0.00	0.00	0.02	0.03	0.00	0.03	1.03			D区掘下げ	
229	棒状	Colorless 1	ブルー7	3.383	0	0.015	3.501	0.837	0.001	0	0.002	0.032	0.001	0	0	0.063	0.808	0.00	0.00	0.24	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.23			D区掘下げ	
230	棒状	Colorless 1	透明	3.144	0.001	0.034	4.288	0.677	0.010	0	0.006	0.058	0.003	0.001	0	0.049	1.074	0.00	0.01	0.16	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.25			D区掘下げ	
231	棒状	ColorlessW2		3.284	0	0.023	4.440	0.203	0.015	0.004	0.013	0.101	0.001	0	0	0.017	0.553	0.00	0.01	0.05	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.12			D区掘下げ	
232	棒状	Blue		3.188	0	0.015	1.280	0.329	0.062	0.005	0.008	0.167	0.336	0	0	0.030	0.745	0.00	0.01	0.26	0.05	0.01	0.13	0.26	0.00	0.02	0.58			D区掘下げ	
233	棒状	Colorless 1	透明	3.553	0.002	0.012	2.842	0.867	0.000	0	0.001	0.035	0.001	0	0	0.057	0.836	0.00	0.00	0.31	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.29		18C末～19C初	溝D158	二階町通
234	棒状	Blue	透明	2.975	0	0.038	3.243	0.280	0.036	0.007	0.007	0.112	0.484	0	0	0.025	0.501	0.00	0.01	0.09	0.01	0.00	0.03	0.15	0.00	0.01	0.15		18C末～19C初	溝D158	二階町通
235	板	Colorless		2.583	0.079	0.032	7.963	0.082	7.063	0.034	0.505	0.159	0	0	0	0	0	0.01	0.00	0.01	0.89	0.06	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C末～19C中頃	土壙D170	二階町通
236	棒状	Colorless 1	Blue	3.256	0.006	0.022	2.159	0.576	0.595	0.004	0.011	0.045	0.010	0	0	0.031	0.443	0.00	0.01	0.27	0.28	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.21		18C末～19C中頃	土壙D167	二階町通
237	棒状	ColorlessW1		3.922	0	0.015	3.209	0.228	0.073	0.002	0.001	0.029	0.001	0	0	0.005	0.52	0.00	0.00	0.07	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.16		18C末～19C中頃	土壙D167	二階町通
238	板	Colorless	Blue	2.522	0.090	0.017	6.112	0.072	3.438	0.014	0.012	0.168	0	0	0	0	0.002	0.01	0.00	0.01	0.56	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C前半	土壙D173	宅地2
239	棒状	Green		3.556	0	0.019	3.971	0.314	0.057	0.003	0.004	0.562	0.263	0	0	0.029	0.534	0.00	0.00	0.08	0.01	0.00	0.14	0.07	0.00	0.01	0.13		18C前半	土壙D173	宅地2
240	棒状	Colorless 1		3.312	0	0.002	2.818	0.378	0.024	0	0.002	0.019	0	0	0	0.047	0.655	0.00	0.00	0.13	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.23		18C末～19C初	溝D158	二階町通

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺溝番号	公家屋敷名
241	棒状	ColorlessW1		3.225	0	0.064	5.081	0.592	0.055	0.007	0.019	0.068	0	0	0	0.043	0.859	0.00	0.01	0.12	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17		18C末～19C初	溝D158	二階町通
242	棒状	ColorlessW1		3.708	0.002	0.005	3.394	0.256	0.129	0.005	0	0.037	0.001	0	0	0.017	0.566	0.00	0.00	0.08	0.04	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17		18C末～19C中頃	土壙D167	二階町通
243	棒状	ColorlessW1		3.485	0	0.091	2.451	0.128	0.762	0	0.005	0.075	0.001	0	0	0	1.008	0.00	0.04	0.05	0.31	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.41		18C前半～後半	土壙D183	二階町通
244	棒状	ColorlessW2		3.780	0.002	0.001	3.721	0.112	0.048	0.007	0	0.050	0.013	0	0	0.008	0.518	0.00	0.00	0.03	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.14			土壙D183	二階町通
245	板	Colorless	Blue	2.563	0.080	0.112	5.682	0.438	4.487	0.023	0.005	0.162	0	0	0	0.015	0.001	0.01	0.02	0.08	0.79	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	16C末	溝D4	
246	鉢	ColorlessW1		3.664	0.001	0.003	9.189	0.408	0.031	0.003	0.003	0.129	0	0	0	0.078	1.073	0.00	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.12		18C前半～後半	土壙D149	宅地19
247	棒状	Colorless 1	Blue	3.594	0.004	0.012	3.094	0.416	0.026	0	0	0.025	0.001	0	0	0.021	0.564	0.00	0.00	0.13	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.18		18C末～19C初	溝D158	二階町通
248	ワインボトル	Dark Green		2.769	0.013	0.440	6.322	0.486	9.104	0.132	0.041	2.11	0.005	0	0	0	0	0.00	0.07	0.08	1.44	0.01	0.33	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		D区掘下げ	
249	瓶	Blue		2.518	0.078	0.378	6.515	0.839	3.220	0.067	0.311	0.684	0.006	0	0	0.036	0.004	0.01	0.06	0.13	0.49	0.05	0.10	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	17C前半～18C初？	土壙D205	宅地9
250	ワインボトル	Dark Green	Blue	2.548	0.068	0.416	5.982	0.941	3.483	0.077	0.745	1.253	0	0	0	0.036	0.010	0.01	0.07	0.16	0.58	0.12	0.21	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	17C前半～18C初？	土壙D205	宅地9
251	板	Colorless	Blue	2.550	0.077	0.137	7.284	0.498	5.538	0.030	0	0.203	0	0	0	0.022	0	0.01	0.02	0.07	0.76	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	17C前半～18C初？	土壙D205	宅地9
252	ワインボトル	Dark Green		2.749	0	0.484	6.261	0.463	8.791	0.153	0.036	2.322	0.005	0	0	0	0	0.00	0.08	0.07	1.40	0.01	0.37	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C前半～後半	土壙D225	二階町通・宅地19
253	棒状	Colorless 1		3.829	0.001	0.005	1.507	0.680	0.016	0	0.004	0.072	0.019	0	0	0.025	1.108	0.00	0.00	0.45	0.01	0.00	0.05	0.01	0.00	0.02	0.74		18C末～19C初	土壙D222	二階町通・宅地19
254	ワインボトル	Dark Green		2.707	0.001	0.008	0.421	0.070	1.444	0.018	0.010	0.201	0.001	0	0	0	0	0.00	0.02	0.17	3.43	0.02	0.48	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		D区掘下げ	
255	酒杯	Green	Blue	3.742	0.001	0.011	2.461	0.658	0.085	0.006	0.008	0.212	0.340	0	0	0.035	1.085	0.00	0.00	0.27	0.03	0.00	0.09	0.14	0.00	0.01	0.44			D区掘下げ	
256	酒杯	Green	Blue	3.669	0.001	0.086	6.800	0.837	0.086	0.009	0.010	0.217	0.352	0	0	0.082	1.092	0.00	0.01	0.12	0.01	0.00	0.03	0.05	0.00	0.01	0.16			D区検出中	
257	棒状	Colorless 1		3.387	0.001	0.025	4.281	0.377	0.008	0.001	0.005	0.035	0.001	0	0	0.035	0.708	0.00	0.01	0.09	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17		18C前半～後半？	土壙D373	二階町通・宅地19
258	鉢底	ColorlessW2		3.704	0	0.018	4.217	0.003	0.227	0.011	0	0.094	0.001	0	0	0	1.078	0.00	0.00	0.00	0.05	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.26		18C前半	土壙D469	二階町通
259	棒状	Blue		2.499	0	0.305	6.744	2.796	2.403	0.087	0.007	0.222	0.306	0.003	0	0.214	0.012	0.00	0.05	0.41	0.36	0.00	0.03	0.05	0.00	0.03	0.00	カリガラス	16C末	土壙D511	混入
260	立体	ColorlessW2		4.105	0.005	0.023	5.414	0.376	0.068	0	0.004	0.216	0.001	0	0	0.043	1.051	0.00	0.00	0.07	0.01	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01	0.19		18C末～19C初	溝D9	二階町通
261	立体	ColorlessW2		3.880	0	0.086	5.005	0.200	0.042	0.012	0.003	0.331	0.001	0	0	0.033	1.018	0.00	0.02	0.04	0.01	0.00	0.07	0.00	0.00	0.01	0.20		18C末～19C初	溝D9	二階町通
262	棒状	ColorlessW2		3.350	0.001	0.011	5.715	0.269	0.012	0.009	0.023	0.537	0.001	0	0	0.019	0.673	0.00	0.00	0.05	0.00	0.00	0.09	0.00	0.00	0.00	0.12		18C末～19C中頃	柱穴D73	二階町通
263	立体	ColorlessW2		3.642	0.002	0.019	1.717	0.053	0.071	0.015	0.014	0.219	0.001	0	0	0	1.008	0.00	0.01	0.03	0.04	0.01	0.13	0.00	0.00	0.00	0.59			D区検出中	
264	立体	ColorlessW2		3.630	0	0.062	6.318	0.134	0.035	0.009	0.012	0.074	0.001	0	0	0.034	0.889	0.00	0.01	0.02	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.14		18C末～19C初	溝D9	二階町通
265	棒状	Colorless 2		3.535	0	0.0333	3.592	0.214	0.004	0	0.001	0.025	0.001	0	0	0.013	0.492	0.00	0.01	0.06	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.14			D区掘下げ	
266	立体	ColorlessW2		3.750	0.003	0.057	4.095	0.105	0.022	0.006	0.001	0.030	0.001	0	0	0.055	1.072	0.00	0.01	0.03	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.26			D区掘下げ	
267	チロリ蓋	ColorlessW		3.758	0.007	0.020	5.200	0.195	0.008	0.002	0	0.100	0.003	0.004	0	0.027	1.063	0.00	0.00	0.04	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.20		18C前半	土壙D130	二階町通
268-1	棒状	Colorless1		3.700	0.004	0.115	4.656	0.715	0.082	0.015	0.004	1.279	0.025	0	0	0.054	0.96	0.00	0.02	0.15	0.02	0.00	0.27	0.01	0.00	0.01	0.21		18C末～19C初	溝D9	二階町通
268-2	棒状	Yellow		3.7	0.003	0.016	2.796	0.547	0	0.001	0.001	0.047	0.007	0	0	0.035	0.643	0.00	0.01	0.20	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.23		18C末～19C初	溝D9	二階町通
269	立体	ColorlessW1		3.651	0	0.024	2.127	0.406	0.050	0.018	0.031	0.114	0.001	0	0	0.026	1.004	0.00	0.01	0.19	0.02	0.01	0.05	0.00	0.00	0.01	0.47		18C末～19C初	溝D9	二階町通
270	棒状	ColorlessW1		3.280	0.003	0.071	5.506	0.500	0.065	0.012	0.007	0.121	0.001	0	0	0.046	0.989	0.00	0.01	0.09	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.18		18C末～19C初	溝D9	二階町通
271	ワインボトル	Dark Green		2.761	0.007	0.198	5.890	0.468	9.111	0.067	0.083	1.857	0.004	0	0	0.009	0	0.00	0.03	0.08	1.55	0.01	0.32	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C後半	土壙D130C	二階町通
272	酒杯	Blue		2.505	0.004	0.051	5.515	3.286	2.043	0.022	0.011	0.393	0.839	0	0.01	0.227	0.007	0.00	0.01	0.60	0.37	0.00	0.07	0.15	0.00	0.04	0.00	カリガラス	18C後半	土壙D130	二階町通
273	立体	White	Yellow	3.653	0.001	0.030	1.981	0.782	0.103	0.01	0.005	0.124	0.001	0	0	0.331	0.953	0.00	0.02	0.39	0.05	0.00	0.06	0.00	0.00	0.17	0.48		18C末～19C初	土壙D143B	二階町通
274	棒状	ColorlessW2		3.796	0.002	0.050	5.230	0.157	0.097	0.010	0.004	0.215	0.012	0	0	0.021	0.922	0.00	0.01	0.03	0.02	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.18			D区掘下げ	
275	酒杯蓋	Green		3.798	0	0.053	4.503	0.530	0.020	0.004	0.001	0.050	0.611	0	0	0.040	0.933	0.00	0.01	0.12	0.00	0.00	0.01	0.14	0.00	0.01	0.21			D区掘下げ	
276	タンブラー2	ColorlessW2		3.721	0.002	0.024	7.224	0.104	0.123	0.012	0.001	0.162	0.020	0	0	0.031	1.095	0.00	0.00	0.01	0.02	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.15		18C末～19C初	溝D9	二階町通
277	棒状	ColorlessW2		3.512	0.002	0.022	0.993	0.053	0.908	0.009	0	0.017	0.001	0	0	0	0.717	0.00	0.02	0.05	0.91	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.72		18C末～19C初	溝D158	二階町通
278	棒状	ColorlessW2		3.698	0.001	0	3.049	0.061	0.042	0.004	0	1.632	0.02	0	0	0.009	0.562	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.54	0.01	0.00	0.00	0.18		18C末～19C初	土壙D144	二階町通
279	棒状	YelloW		4.021	0	0.084	2.787	0.144	0.173	0.019	0.004	1.371	0.026	0	0	0.024	0.658	0.00	0.03	0.05	0.06	0.00	0.49	0.01	0.00	0.01	0.24		18C前半	土壙D166	二階町通
280	タンブラー2	ColorlessW2		3.820	0.002	0.006	4.912	0.353	0.206	0.004	0	0.039	0.016	0	0	0.025	0.956	0.00	0.00	0.07	0.04	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		18C末～19C中頃	土壙D170	宅地2・二階町通
281	棒状	YelloW		3.768	0	0.027	4.439	0.105	0.038	0.003	0.005	2.141	0.022	0	0	0.009	0.825	0.00	0.01	0.02	0.01	0.00	0.48	0.00	0.00	0.00	0.19			D区掘下げ	
282	容器2	Colorless		3.389	0.002	0.015	4.234	0.676	0	0	0	0.013	0.001	0	0	0.053	1.056	0.00	0.00	0.16	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.25			D区掘下げ	
283	立体	ColorlessW2		3.783	0.002	0.022	3.209	0.064	0.347	0.005	0.018	0.054	0.001	0	0	0	1.050	0.00	0.01	0.02	0.11	0.01	0.02	0.00	0.00	0.00	0.33		18C前半	土壙D194	二階町通・宅地19
284	立体	ColorlessW1		3.742	0	0.015	2.131	0.592	0.032	0.002	0.002	0.038	0.001	0	0	0.023	0.994	0.00	0.01	0.28	0.02	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.47			D区掘下げ	
285	立体	ColorlessW1		3.833	0.001	0.048	6.405	0.650	0.012	0.003	0	0.057	0.001	0	0	0.060	1.045	0.00	0.01	0.10	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.16			D区掘下げ	
286	棒状	YelloW		3.772	0	0.094	2.749	0.558	0.129	0.01	0.004	1.120	0.033	0	0	0.035	0.828	0.00	0.03	0.20	0.05	0.00	0.41	0.01	0.00	0.01	0.30		18C末～19C初	溝D158	二階町通
287	棒状	ColorlessW1		3.547	0.001	0.025	2.475	0.529	0.038	0.001	0.001	1.306	0.014	0	0	0.049	0.539	0.00	0.01	0.21	0.02	0.00	0.53	0.01	0.00	0.02	0.22		18C前半	土壙D381	二階町通
288	タンブラー2	ColorlessW2		3.778	0.002	0.029	7.500	0.41	0.042	0.003	0	0.051	0.018	0	0	0.034	1.088	0.00	0.00	0.05	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.15			D区廃土内	
289	棒状	Blue		3.333	0.001	0.040	1.695	0.468	0.146	0.018	0.024	0.161	0.348	0.002	0	0.023	0.644	0.00	0.02	0.28	0.09	0.01	0.09	0.21	0.00	0.01	0.38		18C末～19C中頃	D区壁土	
290	タンブラー2	ColorlessW2		3.805	0.001	0.006	9.794	0.016	0.061	0.003	0	0.068	0.001	0	0	0.022	1.002	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.10		18C末～19C中頃	D区壁土	
291	棒状	Colorless 2		3.509	0	0.042	3.547	0.303	0.009	0.003	0.003	0.052	0.014	0	0	0.018	0.676	0.00	0.01	0.09	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		17C中頃～18C初	土壙D129	宅地9
292	棒状	White		3.017	0	0.171	3.206	0.520	0.011	0.001	0.009	0.191	0.019	0	0	0	0.506	0.00	0.05	0.16	0.00	0.00	0.06	0.01	0.00	0.00	0.16		17C中頃～18C初	土壙D129	宅地9
293	容器2	Colorless		3.437	0	0.030	5.589	0.431	0.049	0.007	0.041	0.053	0	0	0	0.040	1.123	0.00	0.01	0.08	0.01	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.20			G区掘削	
294	棒状	Colorless 1		3.390	0	0.029	3.857	0.388	0.081	0.003	0.006	0.049	0	0	0	0.027	0.926	0.00	0.01	0.10	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24			G区掘削	
295	瓶	Blue		2.505	0.062	0.452	6.683	1.085	3.448	0.086	0	0.595	0.002	0	0	0.043	0	0.01	0.07	0.16	0.52	0.00	0.09	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	17C中頃	溝G3	宅地13
296	瓶	Blue		2.520	0.078	0.192	7.129	0.630	3.511	0.052	0.049	0.646	0	0	0	0.020	0	0.01	0.03	0.09	0.49	0.01	0.09	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		G区掘削	
297	棒状	ColorlessW2		3.281	0	0	5.879	0.099	0.031	0	0	0.033	0	0	0	0.022	0.777	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.13		18C末～19C中頃	溝G5A	二階町通
298	棒状	Colorless 2		3.451	0	0.018	2.917	0.364	0	0.003	0	0.03	0.003	0	0	0.022	0.597	0.00	0.01	0.12	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.20			溝G7	
299	棒状	ColorlessW1		3.381	0	0.062	4.287	0.322	0.080	0.009	0.008	0.107	0.002	0	0	0.025	0.812	0.00	0.01	0.08	0.02	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.19		18C末～19C中頃	溝G5A	二階町通

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺溝番号	公家屋敷名
300	ワインボトル	Dark Green		2.678	0.018	0.313	6.656	0.417	8.706	0.125	0.101	2.083	0.005	0	0	0.009	0.004	0.00	0.05	0.06	1.31	0.02	0.31	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C末～19C中頃	溝G5A	二階町通
301	立体	ColorlessW2		3.608	0	0.033	7.713	0.133	0.083	0.007	0.011	0.108	0.001	0	0	0.022	0.968	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.13		18C末～19C中頃	溝G5A	二階町通
302	チロリ身	Colorless 2		3.445	0	0.032	5.416	0.520	0.018	0.003	0.042	0.055	0.001	0	0	0.053	1.062	0.00	0.01	0.10	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.20		18C末～19C中頃	溝G5A	二階町通
303	棒状	ColorlessW2		3.679	0.001	0.004	8.554	0.294	0.006	0.006	0	0.063	0.001	0	0	0.047	0.932	0.00	0.00	0.03	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.11		18C末～19C中頃	溝G5A	二階町通
304	棒状	YelloW		4.008	0.003	0.082	3.417	0.487	0.051	0.010	0	2.572	0.018	0	0	0.006	1.004	0.00	0.02	0.14	0.01	0.00	0.75	0.01	0.00	0.00	0.29		18C末～19C中頃	溝G5A	二階町通
305	棒状	YelloW	透明	3.489	0	0.004	3.898	0.856	0.000	0.000	0	1.318	0.034	0	0	0.071	0.920	0.00	0.00	0.22	0.00	0.00	0.34	0.01	0.00	0.02	0.24		18C末～19C中頃	溝G5A	二階町通
306	棒状	Colorless 1	透明	3.478	0.003	0.019	3.484	0.523	0.027	0	0	0.024	0.011	0	0	0.054	0.948	0.00	0.01	0.15	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.27		18C末～19C中頃	溝G5A	二階町通
307	ガラス以外			2.665	0	0	10.29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	水晶		G区検出中	
308	棒状	Blue navy		3.257	0	0.031	3.489	0.343	0.026	0	0.134	0.064	0.024	0	0	0	0.721	0.00	0.01	0.10	0.01	0.04	0.02	0.01	0.00	0.00	0.21			G区検出中	
309	棒状	Colorless 1	Blue	3.275	0	0.040	3.959	0.567	0.272	0.004	0.033	0.128	0.068	0	0	0	0.799	0.00	0.01	0.14	0.07	0.01	0.03	0.02	0.00	0.00	0.20		18C前半	G区検出中	宅地7
310	立体	ColorlessW2		3.653	0	0.017	7.635	0.076	0.075	0.018	0.004	0.297	0.001	0	0	0	0.893	0.00	0.00	0.01	0.01	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.12		18C末～19C中頃	溝G5A	二階町通
311	ワインボトル	Dark Green		2.718	0	0.288	6.427	0.232	9.324	0.106	0.046	1.954	0.004	0	0	0	0	0.00	0.04	0.04	1.45	0.01	0.30	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		溝G5B	二階町通
312	瓶口	Colorless		3.403	0.001	0.004	2.244	0.188	0.071	0	0.012	0.015	0.001	0	0	0.015	0.431	0.00	0.00	0.08	0.03	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		18C末～19C中頃	土壙G52	二階町通
313	チロリ蓋	ColorlessW		3.649	0	0.051	7.268	0.250	0.128	0	0	0.097	0.011	0	0	0.032	0.982	0.00	0.01	0.03	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.14		18C末～19C中頃	土壙G52	二階町通
314	鉢	ColorlessW2		3.736	0	0.021	3.582	0.048	0.290	0.012	0	0.079	0.001	0	0	0.025	0.821	0.00	0.01	0.01	0.08	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.23		18C末～19C中頃	土壙G52	二階町通
315	立体	ColorlessW2		3.910	0.001	0.034	6.089	0.456	0.108	0.003	0.006	0.051	0.005	0	0	0.032	1.060	0.00	0.01	0.07	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17		18C末～19C中頃	土壙G52	二階町通
316	棒状	ColorlessW2		3.489	0	0.146	4.699	0.320	0.471	0.045	0.034	0.39	0.001	0	0	0.008	1.006	0.00	0.03	0.07	0.10	0.01	0.08	0.00	0.00	0.00	0.21		18C末～19C中頃	土壙G60	二階町通
317	棒状	Colorless 1		3.550	0.002	0.013	4.388	0.308	0.010	0.002	0.002	0.031	0.001	0	0	0.035	0.704	0.00	0.00	0.07	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.16		18C前半	土壙G70	二階町通
318	棒状	Colorless 2	White	3.401	0	0.027	2.989	0.303	0.026	0.003	0.005	0.041	0.015	0	0	0.035	0.562	0.00	0.01	0.10	0.01	0.00	0.01	0.01	0.00	0.01	0.19		17C中頃～18C初	土壙G73	二階町通
319	棒状	Purple		3.639	0.005	0.087	5.306	0.865	0.083	0.007	0.560	0.119	0.032	0	0	0.062	0.961	0.00	0.02	0.16	0.02	0.11	0.02	0.01	0.00	0.01	0.18		17C中頃～18C初	土壙G73	二階町通
320	容器 2	Colorless		3.461	0	0.038	4.408	0.354	0.021	0.001	0.031	0.037	0.001	0	0	0.039	0.915	0.00	0.01	0.08	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.21			土壙G70	
321	棒状	Colorless 1		3.509	0	0.028	3.830	0.506	0.119	0.004	0.006	0.037	0.001	0	0	0.038	0.916	0.00	0.01	0.13	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24		18C前半	G区検出中	二階町通
322	棒状	YelloW		3.590	0	0.074	1.601	0.176	0.028	0.009	0.004	0.310	0.01	0	0	0.017	0.301	0.00	0.05	0.11	0.02	0.00	0.19	0.01	0.00	0.01	0.19		18C前半	溝G51	二階町通
323	鉢	ColorlessW2		3.748	0.003	0.008	2.395	0.087	0.219	0.013	0	0.056	0.001	0	0	0.014	0.814	0.00	0.00	0.04	0.09	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.34		18C前半	土壙G70	二階町通
324	鉢	ColorlessW2		3.613	0	0.000	9.140	0.000	0.120	0.007	0.002	0.335	0.001	0	0	0	0.852	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.11		18C前半	土壙G70	二階町通
325	酒杯菊	ColorlessW2		3.655	0.004	0.006	5.589	1.043	0.024	0	0.002	0.092	0.002	0	0	0.059	1.151	0.00	0.00	0.19	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.21		18C前半	土壙G70	二階町通
326	棒状	Colorless 2		3.448	0.001	0.025	2.675	0.354	0.076	0.003	0.003	0.038	0.001	0	0	0.024	0.596	0.00	0.01	0.13	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.22		18C前半	土壙G73	二階町通
327	棒状	Colorless 2		3.454	0.001	0.079	3.955	0.365	0.058	0.008	0.01	0.051	0.001	0	0	0.028	0.707	0.00	0.02	0.09	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.18		18C末～19C中頃	土壙G73	二階町通
328	鉢	ColorlessW2		3.740	0.003	0.021	4.572	0.051	0.565	0.01	0	0.111	0.001	0	0	0.05	1.011	0.00	0.00	0.01	0.12	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.22		18C前半	土壙G70	二階町通
329	棒状	YelloW		3.771	0	0.043	2.713	0.173	0.086	0.003	0	2.632	0.002	0	0	0	0.868	0.00	0.02	0.06	0.03	0.00	0.97	0.00	0.00	0.00	0.32		18C前半	土壙G70	二階町通
330	棒状	ColorlessW2		3.295	0	0.026	4.847	0.235	0.062	0.004	0.067	0.049	0.001	0	0	0.012	0.795	0.00	0.01	0.05	0.01	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00	0.16		18C前半	土壙G70	二階町通
331	棒状	Blue navy		3.422	0.001	0.033	2.143	0.283	0.087	0.031	0.011	0.196	0.01	0.036	0	0.008	0.883	0.00	0.02	0.13	0.04	0.01	0.09	0.00	0.00	0.00	0.41			G区清掃中	
332	棒状	Colorless 2		2.493	0	0.163	3.200	1.606	1.210	0.064	0.251	0.474	0.001	0	0.019	0.096	0.004	0.00	0.05	0.50	0.38	0.08	0.15	0.00	0.01	0.03	0.00	カリガラス		G区検出中	
333	容器 2	Colorless		2.531	0.057	0.192	7.887	0.132	3.857	0.033	0.004	0.214	0.002	0	0	0.009	0	0.01	0.02	0.02	0.49	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	17C初	撹乱G3	宅地6
334	酒杯菊	Blue		3.608	0	0.116	3.416	1.182	0.077	0.007	0.010	0.209	0.181	0	0	0.082	1.037	0.00	0.03	0.35	0.02	0.00	0.06	0.05	0.00	0.02	0.30			土壙G1121	
335	棒状	Colorless 2		3.478	0.001	0.006	6.786	0.356	0.02	0	0.013	0.033	0.001	0	0	0.039	0.810	0.00	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.12			溝G5A	二階町通
336	チロリ身	Colorless 2		3.443	0	0.015	6.596	0.419	0.029	0.002	0.04	0.041	0.001	0	0	0.043	0.938	0.00	0.00	0.06	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.14			溝G5A	二階町通
337	棒状	YelloW		3.712	0	0.098	4.800	0.877	0.089	0.004	0.005	1.812	0.033	0	0	0.057	1.066	0.00	0.02	0.18	0.02	0.00	0.38	0.01	0.00	0.01	0.22		18C前半	溝G5A	二階町通
338	棒状	ColorlessW1		3.300	0	0	4.473	0.029	0.014	0.005	0.008	0.052	0.001	0	0	0.004	0.478	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.11			溝G5B	
339	棒状	Colorless 2		3.486	0	0.000	1.723	0.132	0.024	0.002	0.008	0.019	0.001	0	0	0.003	0.488	0.00	0.00	0.08	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.28			溝G5B	
340	酒杯菊	ColorlessW2		3.479	0	0.008	7.284	0.076	0.071	0.005	0.009	0.508	0.021	0	0	0.044	0.944	0.00	0.00	0.01	0.01	0.00	0.07	0.00	0.00	0.01	0.13			溝G5B	
341	鉢	ColorlessW2		3.36	0	0	6.566	0.010	0.080	0.008	0.009	0.544	0.005	0	0	0.036	0.928	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00	0.08	0.00	0.00	0.01	0.14			溝G5B	
342	棒状	Colorless 2	purple	3.308	0	0.044	2.971	0.413	0.112	0.001	0.007	0.038	0.001	0	0	0.027	0.701	0.00	0.01	0.14	0.04	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24			溝G5B	
343	棒状	Colorless 2		3.457	0.001	0.030	3.350	0.576	0.006	0.003	0.006	0.071	0.001	0	0	0.042	0.807	0.00	0.01	0.17	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.24		17C中頃～18C初	溝G5B	二階町通
344	ワインボトル	Dark Green		2.730	0	0.286	6.662	0.259	9.554	0.108	0.044	2.008	0	0	0	0	0	0.00	0.04	0.04	1.43	0.01	0.30	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	17C中頃～18C初	溝G5B	二階町通
345	立体	ColorlessW2		3.465	0.001	0	3.875	0.028	0.042	0.006	0.074	0.114	0.001	0.001	0	0	0.876	0.00	0.00	0.01	0.01	0.02	0.03	0.00	0.00	0.00	0.23		17C中頃～18C初	溝G5B	二階町通
346	容器 2	Colorless		3.470	0	0.057	5.831	0.661	0.024	0.003	0.017	0.038	0.001	0	0	0.070	1.034	0.00	0.01	0.11	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.18		18C末～19C中頃	土壙G212	二階町通
347	チロリ	ColorlessW		3.798	0	0.023	4.174	0.141	0.055	0.005	0.006	0.017	0.001	0.010	0	0.017	0.901	0.00	0.01	0.03	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.22		18C末～19C中頃	土壙G212	二階町通
348	チロリ蓋	ColorlessW		3.592	0	0.091	2.905	0.177	0.237	0.006	0.011	0.067	0.001	0.013	0	0.006	1.078	0.00	0.03	0.06	0.08	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.37		18C末～19C中頃	土壙G212	二階町通
349	立体	ColorlessW1	Blue	3.714	0.001	0.030	8.769	0.382	0.006	0.004	0.003	0.073	0.024	0	0	0.065	1.011	0.00	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.12			溝G5B	
350	棒状	Colorless 2		3.325	0	0.048	4.211	0.621	0.088	0.002	0	0.057	0.007	0	0	0.057	1.046	0.00	0.01	0.15	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.25		18C前半	土壙G247	二階町通
351	棒状	Colorless 1		3.147	0.007	0.019	2.323	0.644	0.651	0.008	0.019	0.074	0	0	0	0.030	0.505	0.00	0.01	0.28	0.28	0.01	0.03	0.00	0.00	0.01	0.22		17C中頃	土壙G255	二階町通
352	立体	ColorlessW2		3.468	0	0.058	3.055	0.017	0.102	0.009	0.002	0.101	0.001	0	0	0.008	1.178	0.00	0.02	0.01	0.03	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.39		18C前半	土壙G250	宅地6,7
353	棒状	Purple		3.250	0.011	0.037	3.144	0.982	0.714	0.005	0.625	0.120	0.195	0	0	0.057	0.748	0.00	0.01	0.31	0.23	0.20	0.04	0.06	0.00	0.02	0.24			土壙G280	
354	棒状	Blue	透明	3.320	0	0.007	2.410	0.722	0.335	0.004	0.013	0.038	0.207	0	0	0.041	0.562	0.00	0.00	0.30	0.14	0.01	0.02	0.09	0.00	0.02	0.23			土壙G280	
355	立体	Colorless 2		3.834	0	0	3.701	0.723	0	0	0	0.028	0.001	0	0	0.059	1.053	0.00	0.00	0.20	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.28		18C末～19C中頃	土壙G278	二階町通
356	棒状	Colorless 2	Blue	2.901	0.006	0.056	4.585	1.375	1.234	0.015	0.061	0.136	0.018	0	0	0.071	0.697	0.00	0.01	0.30	0.27	0.01	0.03	0.00	0.00	0.02	0.15			土壙G1174	
357	板	Colorless	Blue	2.531	0.005	0	3.052	0.035	5.344	0.032	0.005	0.146	0	0	0	0	0	0.00	0.00	0.01	1.75	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	17C中頃～18C初	溝G51	宅地13
358	棒状	Colorless 1	透明	2.761	0	0.054	3.605	0.116	0.301	0.002	0.046	0.068	0.002	0	0	0.010	0.496	0.00	0.01	0.03	0.08	0.01	0.02	0.00	0.00	0.00	0.14			土壙G284	
359	立体	ColorlessW2		3.882	0	0.004	2.790	0.086	0.089	0.013	0	0.068	0.001	0	0	0.005	1.030	0.00	0.00	0.03	0.03	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.37		18C前半	土壙G289	二階町通

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺構番号	公家屋敷名
360	棒状	Colorless 2	Blue	3.741	0	0.049	4.150	0.130	0.417	0	0.006	0.067	0.028	0	0	0	0.847	0.00	0.01	0.03	0.10	0.00	0.02	0.01	0.00	0.00	0.20		17C中頃～18C初	土壙G1172	宅地6
361	棒状	Blue	透明	2.748	0	0.029	4.621	0.222	0.039	0.005	0.042	0.147	0.568	0.002	0	0.03	0.590	0.00	0.01	0.05	0.01	0.01	0.03	0.12	0.00	0.01	0.13			土壙G320	
362	棒状	White		3.108	0.001	0.203	3.547	0.718	0.282	0	0.003	0.168	0.001	0	0	0	0.569	0.00	0.06	0.20	0.08	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.16			G区検出中	
363	棒状	Blue	透明	2.852	0	0.098	3.730	0.448	0.038	0.034	0.019	0.372	0.887	0	0	0.04	0.575	0.00	0.03	0.12	0.01	0.01	0.10	0.24	0.00	0.01	0.15		18C前半～後半	溝G6	宅地7
364	棒状	Colorless 2		3.302	0.001	0.007	2.545	0.253	0.005	0.003	0	0.034	0	0	0	0.017	0.463	0.00	0.00	0.10	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.18			土壙G328	
365	棒状	YelloW		3.424	0	0.117	3.357	0.684	0.154	0.008	0.003	2.266	0.021	0	0	0.033	0.991	0.00	0.03	0.20	0.05	0.00	0.68	0.01	0.00	0.01	0.30		18C前半	整地層G285	二階町通
366	棒状	Blue		3.314	0.004	0.039	2.398	0.659	0.311	0.004	0.012	0.057	0.206	0.002	0	0.036	0.545	0.00	0.02	0.27	0.13	0.01	0.02	0.09	0.00	0.02	0.23		18C末～19C初	土壙G356	二階町通
367	板	Colorless	Blue	2.565	0.002	0.031	3.099	0.089	4.828	0.034	0.003	0.187	0	0	0	0	0	0.00	0.01	0.03	1.56	0.00	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C前半	土壙G348	宅地22-a
368	タンブラー2	ColorlessW2		3.818	0	0.065	5.301	0.439	0.156	0.004	0.003	0.043	0	0	0	0.037	1.050	0.00	0.01	0.08	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.20		18C前半	土壙G348	宅地22-a
369	棒状	ColorlessW2		3.800	0.001	0.027	1.044	0.052	0.175	0.014	0.008	0.146	0.001	0	0	0	0.709	0.00	0.03	0.05	0.17	0.01	0.14	0.00	0.00	0.00	0.68		18C後半	土壙G354	宅地22-a
370	立体	ColorlessW2		3.648	0	0.012	3.253	0.144	0.128	0.013	0.01	0.118	0.001	0	0	0.008	1.088	0.00	0.00	0.04	0.04	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.33		18C後半	土壙G354	宅地22-a
371	立体	ColorlessW2		3.802	0	0.013	6.141	0.617	0.051	0.004	0.004	0.051	0.001	0	0	0.053	1.066	0.00	0.00	0.10	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17		18C前半	整地層G285	宅地22-a
372	棒状	YelloW		3.577	0	0.081	3.233	0.504	0.103	0.006	0	1.494	0.011	0	0	0.026	0.724	0.00	0.03	0.16	0.03	0.00	0.46	0.00	0.00	0.01	0.22		18C後半	土壙G354	宅地22-a
373	棒状	Purple		2.949	0.005	0.060	4.219	1.005	0.97	0.009	0.417	0.147	0.117	0	0	0.054	0.499	0.00	0.01	0.24	0.23	0.10	0.03	0.03	0.00	0.01	0.12		18C末～19C初	土壙G348	二階町通
374	棒状	ColorlessW1		3.711	0	0.045	5.030	0.081	0.250	0.010	0	0.072	0	0	0	0.008	0.876	0.00	0.01	0.02	0.05	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.17		18C末～19C初	土壙G348	二階町通
375	タンブラー2	ColorlessW2		3.800	0	0.028	6.822	0.190	0.139	0	0.007	0.085	0	0	0	0.022	1.045	0.00	0.00	0.03	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.15		18C前半	土壙G354	宅地22-a
376	棒状	ColorlessW2		3.601	0.001	0.103	5.776	0.064	0.049	0.024	0.01	0.133	0.001	0	0	0.010	0.796	0.00	0.02	0.01	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.14		18C前半	G区検出中	宅地6,7
377	立体	Yellow		3.658	0.001	0.003	1.184	0.669	0.021	0.002	0.008	1.734	0.041	0	0	0.035	0.929	0.00	0.00	0.57	0.02	0.01	1.46	0.03	0.00	0.03	0.78			土壙G375	
378	棒状	Colorless 1		3.546	0.002	0.008	3.103	0.436	0	0.003	0.003	0.030	0.001	0	0	0.041	0.575	0.00	0.00	0.14	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		18C末～19C中頃	土壙G354	二階町通
379	棒状	Colorless 1		3.157	0	0.021	4.232	0.547	0.010	0	0.002	0.025	0.001	0	0	0.04	0.949	0.00	0.00	0.13	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.22		18C末～19C中頃	土壙G354	二階町通
380	棒状	Colorless 1	Blue	3.183	0.010	0.016	2.799	0.816	0.807	0.004	0.014	0.058	0.016	0	0	0.05	0.589	0.00	0.01	0.29	0.29	0.01	0.02	0.01	0.00	0.02	0.21		18C末～19C中頃	土壙G354	二階町通
381	容器2	Colorless		2.891	0.003	0.031	5.671	1.858	0	0.010	0.019	0.043	0	0	0	0.13	0.944	0.00	0.01	0.33	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.17		18C末～19C中頃	土壙G354	二階町通
382	棒状	ColorlessW1		3.745	0.002	0.027	1.429	0.552	0.101	0.007	0.018	0.105	0.001	0	0	0.036	0.906	0.00	0.02	0.39	0.07	0.01	0.07	0.00	0.00	0.03	0.63		18C末～19C中頃	土壙G354	二階町通
383	棒状	White	透明	3.198	0.002	0.074	7.083	0.950	0.001	0	0.007	0.087	0.003	0	0	0	0.936	0.00	0.01	0.13	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.13			G区掘下げ	
384	棒状	Colorless 2		3.243	0	0.024	2.865	0.318	0.045	0.003	0.004	0.053	0	0	0	0.031	0.605	0.00	0.01	0.11	0.02	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.21			G区掘下げ	
385	ワインボトル	Dark Green		2.656	0.018	0.216	6.741	0.877	7.357	0.092	0.884	1.081	0.005	0	0	0.022	0.039	0.00	0.03	0.13	1.09	0.13	0.16	0.00	0.00	0.00	0.01	カリガラス	17C初	土壙G354	二階町通
386	瓶	Blue		2.522	0.075	0.347	6.018	0.969	3.025	0.033	0.040	0.675	0	0	0	0.049	0	0.01	0.06	0.16	0.50	0.01	0.11	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	18C前半	溝G378	宅地22
387	立体	Blue	透明	3.623	0	0.256	3.084	0.774	0.080	0.077	0.054	0.550	0.298	0	0	0.052	0.867	0.00	0.08	0.25	0.03	0.02	0.18	0.10	0.00	0.02	0.28			土壙G1120	
388	立体	Colorless 2		2.888	0	0.009	5.721	1.622		0.010	0.019	0.025	0	0	0	0.106	1.023	0.00	0.00	0.28	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.18			土壙G392	
389	立体	White		2.757	0.010	0	6.254	0.876	0	0.025	0.035	0.049	0	0	0	0.074	0.957	0.00	0.00	0.14	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.15			土壙G392	
390	瓶	Blue		2.538	0.114	0.394	6.630	1.099	3.415	0.037	0.054	0.788	0	0	0	0.057	0	0.02	0.06	0.17	0.52	0.01	0.12	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	17C初	溝G397	宅地12
391	立体	ColorlessW2		3.540	0	0	6.275	0.060	0.272	0.003	0.007	0.118	0.001	0	0	0.033	1.167	0.00	0.00	0.01	0.04	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.19		18C前半	G区検出中	宅地21
392	立体	Colorless 2		3.704	0	0.055	6.227	0.669	0.017	0.004	0	0.082	0.001	0	0	0.058	1.160	0.00	0.01	0.11	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19			溝G5B	
393	立体	Green		2.454	0.003	0.027	2.725	0.484	3.576	0.036	0.001	0.116	0.027	0	0	0.009	0	0.00	0.01	0.18	1.31	0.00	0.04	0.01	0.00	0.00	0.00	カリガラス		溝G5B	
394	瓶	Blue		2.526	0.081	0.379	7.117	1.144	3.618	0.030	0.067	0.757	0.003	0	0	0.035	0	0.01	0.05	0.16	0.51	0.01	0.11	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		土壙G441	
395	棒状	YelloW		3.869	0	0.117	3.040	0.337	0.218	0.006	0	1.463	0.003	0	0	0.021	0.729	0.00	0.04	0.11	0.07	0.00	0.48	0.00	0.00	0.01	0.24		18C後半	土壙G354	二階町通
396	棒状	Blue		3.347	0	0.046	2.220	0.571	0.294	0.038	0	0.297	0.427	0	0	0.282	0.968	0.00	0.02	0.26	0.13	0.00	0.13	0.19	0.00	0.13	0.44		18C後半	土壙G354	二階町通
397	棒状	Colorless 1	透明	3.499	0	0	3.130	0.516	0	0	0	0.016	0.001	0	0	0.033	0.879	0.00	0.00	0.16	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.28		18C後半	土壙G354	二階町通
398	棒状	Colorless 2		3.522	0	0.003	6.023	0.568	0.062	0.003	0	0.029	0.001	0	0	0.055	1.105	0.00	0.00	0.09	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.18		18C後半	土壙G354	二階町通
399	棒状	ColorlessW2		3.391	0	0.184	4.038	0.194	0.695	0.027	0.002	0.147	0.001	0	0	0.001	1.007	0.00	0.05	0.05	0.17	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.25			溝G488	
400	ワインボトル	Dark Green	Green	2.619	0.009	0.295	6.632	0.418	6.232	0.129	1.240	1.361	0.015	0	0	0.019	0.007	0.00	0.04	0.06	0.94	0.19	0.21	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C前半	溝G488	宅地21
401	タンブラー1	Colorless 1	Purple	3.727	0	0.069	1.963	0.049	0.032	0.013	0.042	0.102	0	0	0	0.005	0.286	0.00	0.04	0.02	0.02	0.02	0.05	0.00	0.00	0.00	0.15		18C前半	溝G488	宅地21
402	瓶	Green		2.543	0.074	0.269	4.281	0.723	2.403	0.012	0.247	0.189	0	0	0	0.028	0	0.02	0.06	0.17	0.56	0.06	0.04	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		G区掘下げ	
403	立体	White	透明	2.484	0	0.087	2.558	1.130	3.221	0.025	0.131	0.230	0	0	0	0.026	0	0.00	0.03	0.44	1.26	0.05	0.09	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	18C前半	G区掘下げ	切通し通
404	瓶	Green		2.542	0	0.392	6.050	1.006	3.334	0	0	0.260	0.003	0	0	0.047	0	0.00	0.06	0.17	0.55	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	18C前半	G区掘下げ	切通し通
405	棒状	Green		3.819	0	0.026	0.981	0.288	0.158	0.020	0.01	0.197	0.198	0	0	0.02	0.584	0.00	0.03	0.29	0.16	0.01	0.20	0.20	0.00	0.02	0.60			土壙G1156	
406	瓶	Colorless		2.506	0.081	0.071	7.409	0.396	3.825	0.024	0.177	0.149	0	0	0.123	0.040	0.086	0.01	0.01	0.05	0.52	0.02	0.02	0.00	0.02	0.01	0.01	カリガラス		柱穴G593	
407	棒状	Dark	虹色	3.875	0	0	2.007	0.454	0	0	0.002	0.052	0.02	0	0	0.045	0.763	0.00	0.00	0.23	0.00	0.00	0.03	0.01	0.00	0.02	0.38		18C前半	土壙G582	二階町通
408	その他	Green		2.605	0	0.133	4.905	0.114	0.097	0.017	0.004	0.571	0.123	0	0	0.035	0.659	0.00	0.03	0.02	0.02	0.00	0.12	0.03	0.00	0.01	0.13			土壙G1447	宅地7
409	棒状	Colorless 2		3.405	0	0.110	4.609	0.460	0.042	0.010	0.009	0.122	0.017	0	0	0.046	0.861	0.00	0.02	0.10	0.01	0.00	0.03	0.00	0.00	0.01	0.19			G区掘下げ	
410	板	Colorless		2.518	0.040	0.124	8.238	0.130	3.075	0.043	0.008	0.328	0	0	0	0.015	0	0.00	0.02	0.02	0.37	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	17C中頃	溝G378	宅地12
411	瓶	Blue		2.525	0.087	0.387	6.842	1.073	3.289	0.035	0.048	0.717	0	0	0	0.057	0	0.01	0.06	0.16	0.48	0.01	0.10	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	17C中頃	溝G378	宅地12
412	棒状	Green		3.821	0.006	0.102	5.372	0.734	0.044	0.006	0.003	0.143	0.163	0	0	0.059	1.174	0.00	0.02	0.14	0.01	0.00	0.03	0.03	0.00	0.01	0.22			土壙G441,452	宅地22
413	立体	ColorlessW1		3.536	0	0.032	5.995	0.318	0.130	0.002	0.008	0.045	0	0	0	0.03	0.889	0.00	0.01	0.05	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.15		17C中頃	G区検出中	宅地22
414	瓶	Blue		2.523	0.056	0.237	4.708	0.760	2.251	0.021	0.036	0.473	0	0	0	0.031	0	0.01	0.05	0.16	0.48	0.01	0.10	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	17C中頃	溝G378	宅地22
415	酒杯菊	ColorlessW2		3.605	0	0.034	1.566	0.047	0.678	0	0.007	0.058	0.002	0	0	0.003	1.169	0.00	0.02	0.03	0.43	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.75			土壙G367	
416	立体	Colorless 2		3.623	0	0.070	4.225	0.271	0.085	0.010	0.011	0.084	0	0	0	0.029	0.617	0.00	0.02	0.06	0.02	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.15		17C中頃	土壙G685	宅地7
417	棒状	YelloW		3.717	0	0.075	3.483	0.227	0.045	0.007	0	1.086	0.013	0	0	0.026	0.605	0.00	0.02	0.07	0.01	0.00	0.31	0.00	0.00	0.01	0.17		17C中頃	G区検出中	宅地7
418	瓶	Blue cobalt		2.666	0.025	0.006	6.435	0.805	1.967	0.012	0.087	0.072	0.002	0	0.496	0.042	0.381	0.00	0.00	0.13	0.31	0.01	0.01	0.00	0.08	0.01	0.06	カリガラス	17C中頃	柱穴G682	宅地22b-1,b-2
419	瓶栓	Colorless		1.464	0.023	0.159	5.461	0.607	2.398	0.032	0.081	0.156	0	0	0.067	0.038	0	0.00	0.03	0.11	0.44	0.01	0.03	0.00	0.01	0.01	0.00	カリガラス	17C後半～18C初	土壙G678	宅地12

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺溝番号	公家屋敷名
420	酒杯菊	ColorlessW2		3.539	0	0.013	5.295	0.080	0.297	0.010	0	0.087	0.025	0	0	0.014	1.096	0.00	0.00	0.02	0.06	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.21		17C初	土壙G357	宅地7・宅地6
421	立体	Blue		3.573	0	0.016	1.750	0.011	0.280	0.003	0	0.106	0.186	0	0	0	1.053	0.00	0.01	0.01	0.16	0.00	0.06	0.11	0.00	0.00	0.60			土壙G1717	宅地12
422	棒状	Blue	透明	3.247	0	0.155	4.355	0.438	0.260	0.023	0.005	0.174	0.236	0	0	0.036	0.501	0.00	0.04	0.10	0.06	0.00	0.04	0.05	0.00	0.01	0.12		18C前半	G区清掃中	宅地21
423	棒状	ColorlessW1		3.454	0	0.094	3.151	0.328	0.720	0.004	0.006	0.078	0	0	0	0.015	0.942	0.00	0.03	0.10	0.23	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.30		18C末～19C中頃	土壙G710	二階町通
424	立体	ColorlessW1		3.110	0	0.086	5.090	0.509	0.037	0.011	0.016	0.114	0.001	0	0	0	1.018	0.00	0.02	0.10	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.20		17C中頃	土壙G835	宅地11
425	立体	ColorlessW2		3.560	0	0	2.226	0.013	0.215	0	0.007	0.11	0.001	0	0	0	1.090	0.00	0.00	0.01	0.10	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.49		17C中頃	土壙G804	宅地21
426	棒状	Colorless 1		3.102	0.010	0.020	2.990	0.791	0.661	0	0.012	0.051	0.001	0	0	0.039	0.622	0.00	0.01	0.26	0.22	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.21		18C前半	土壙G417	宅地22b-1,b-2
427	棒状	Blue	透明	3.387	0	0.019	1.552	0.720	0.054	0.010	0.016	0.157	0.367	0	0	0.035	0.917	0.00	0.01	0.46	0.03	0.01	0.10	0.24	0.00	0.02	0.59		17C中頃	溝G381	宅地7
428	酒杯菊	Blue		3.617	0	0.092	4.185	0.274	0.359	0.014	0.016	0.443	0.113	0	0	0.03	1.129	0.00	0.02	0.07	0.09	0.00	0.11	0.03	0.00	0.01	0.27			土壙G917	
429	タンブラー2	ColorlessW2		3.673	0	0.008	1.257	0.006	0.275	0.006	0	0.062	0.218	0	0	0	1.067	0.00	0.01	0.00	0.22	0.00	0.05	0.17	0.00	0.00	0.85			土壙G1717	宅地12
430	棒状	Green		4.141	0	0.044	1.064	0.038	0.154	0.014	0	0.227	0.064	0	0	0.001	0.589	0.00	0.04	0.04	0.14	0.00	0.21	0.06	0.00	0.00	0.55		18C前半	土壙G979	宅地22b-1,b-2
431	立体	ColorlessW2		3.702	0	0.014	5.761	0.101	0.063	0.008	0	0.164	0.002	0	0	0.023	0.790	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.14			土壙G848	
432	ワインボトル	Dark Green	Green	2.541	0.102	0.453	6.664	0.975	3.141	0.122	1.143	1.640	0	0	0	0.052	0	0.02	0.07	0.15	0.47	0.17	0.25	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		土壙G1000	
433	ワインボトル	Dark Green	Green	2.511	0.035	0.343	7.082	0.810	3.011	0.077	1.226	1.473	0.012	0	0	0.042	0	0.00	0.05	0.11	0.43	0.17	0.21	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス		柱穴G1001	
434	酒杯菊	ColorlessW2		3.573	0	0	1.760	0.597	0.037	0.010	0.004	0.075	0.023	0	0	0.046	1.093	0.00	0.00	0.34	0.02	0.00	0.04	0.01	0.00	0.03	0.62		18C前半	土壙G1017	宅地21
435	タンブラー2	ColorlessW2		3.849	0	0.014	2.916	0.046	0.273	0	0.01	0.181	0.061	0	0		1.132	0.00	0.00	0.02	0.09	0.00	0.06	0.02	0.00	0.00	0.39		18C前半	土壙G1025	宅地21
436	棒状	Green	Blue	2.524	0.003	0.046	1.981	0.471	2.217	0.057	0.532	0.582	0.019	0	0.046	0.024	0	0.00	0.02	0.24	1.12	0.27	0.29	0.01	0.02	0.01	0.00	カリガラス		G区検出中	
437	立体	Green		3.652	0	0.024	1.919	0.842	0.144	0.004	0	1.135	1.217	0	0	0.055	1.050	0.00	0.01	0.44	0.08	0.00	0.59	0.63	0.00	0.03	0.55		17C中頃	土壙G1052	宅地11
438	立体	Yellow		3.667	0	0.033	0.855	0.678	0.420	0.018	0	3.167	0.012	0	0	0.04	1.066	0.00	0.04	0.79	0.49	0.00	3.70	0.01	0.00	0.05	1.25		17C中頃	土壙G1052	宅地11
439	棒状	Colorless 2		3.412	0	0.110	4.615	0.518	0.460	0.009	0	0.053	0.001	0	0	0.035	0.850	0.00	0.02	0.11	0.10	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.18			土壙G73	
440	棒状	ColorlessW2		4.182	0.001	0.082	1.314	0.404	0.116	0.067	0	0.713	0.263	0	0	0	0.612	0.00	0.06	0.31	0.09	0.00	0.54	0.20	0.00	0.00	0.47			I区掘下げ	
441	棒状	ColorlessW1		3.594	0	0.036	6.361	0.015	0.091	0.010	0	0.275	0.024	0	0	0.004	0.760	0.00	0.01	0.00	0.01	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.12			土壙J2	
442	棒状	YelloW		3.612	0.001	0.032	4.250	0.930	-0.018	0	0	1.384	0.043	0	0	0.061	1.060	0.00	0.01	0.22	0.00	0.00	0.33	0.01	0.00	0.01	0.25		18C前半	土壙J20	宅地19
443	板	Colorless		2.534	0.077	0.016	8.159	0.053	6.303	0.021	0.014	0.194	0	0	0	0	0	0.01	0.00	0.01	0.77	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	18C前半	土壙J2	宅地19
444	棒状	Colorless 1		3.128	0.013	0.010	3.244	0.866	0.658	0.006	0.013	0.043	0	0	0	0.042	0.711	0.00	0.00	0.27	0.20	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.22			土壙J2	
445	猪口	Green	White	3.737	0	0.166	7.634	0.727	0.407	0.018	0.002	0.281	0.058	0	0	0.475	0.96	0.00	0.02	0.10	0.05	0.00	0.04	0.01	0.00	0.06	0.13			土壙J2	
446	棒状	White		2.947	0	0.445	4.409	0.566	0.317	0.099	0.019	0.867	0.063	0	0	0.038	0.971	0.00	0.10	0.13	0.07	0.00	0.20	0.01	0.00	0.01	0.22			土壙J2	
447	小瓶口	Green		3.401	0	0.011	1.269	0.109	0.282	0.020	0	0.428	0.139	0	0	0.017	0.803	0.00	0.01	0.09	0.22	0.00	0.34	0.11	0.00	0.01	0.63			路面J66	
448	タンブラー2	ColorlessW2		3.534	0	0.030	3.212	0.255	0.032	0.005	0.011	0.060	0.001	0	0	0.02	0.612	0.00	0.01	0.08	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.19		18C末～19C中頃	土壙P1	二階町通
449	立体	ColorlessW2		3.515	0	0.018	4.527	0.318	0.009	0.001	0.018	0.030	0.001	0	0	0.038	1.076	0.00	0.00	0.07	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24		18C末～19C中頃	土壙P1	二階町通
450	棒状	Blue	透明	3.000	0	0.009	0.622	0.297	0.036	0.003	0.004	0.033	0.235	0	0	0.024	0.405	0.00	0.01	0.48	0.06	0.01	0.05	0.38	0.00	0.04	0.65		18C末～19C中頃	土壙P1	二階町通
451	棒状	ColorlessW2		3.136	0	0.069	2.550	0.168	0.527	0.008	0.009	0.070	0.001	0	0	0.005	0.434	0.00	0.03	0.07	0.21	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.17		18C前半	土壙G354	二階町通
452	棒状	Colorless 2		3.439	0	0.113	5.153	0.517	0.248	0	0	0.036	0.001	0	0	0.040	0.682	0.00	0.02	0.10	0.05	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.13		18C前半	土壙G354	二階町通
453	棒状	YelloW		3.778	0	0.174	4.962	0.277	0.265	0.029	0.006	1.721	0.008	0	0	0.018	1.033	0.00	0.04	0.06	0.05	0.00	0.35	0.00	0.00	0.00	0.21		18C前半	土壙G354	二階町通
454	ランプロ	Colorless		2.879	0.085	0.011	8.474	0.132	3.887	0.017	0.14	0.047	0	0	0	0.016	0.003	0.01	0.00	0.02	0.46	0.02	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	井戸A354	宅地5,6
455	板	Colorless	Blue	2.532	0.064	0.03	6.484	0.065	5.240	0.017	0.006	0.184	0	0	0.001	0.009	0.006	0.01	0.00	0.01	0.81	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	井戸A354	宅地5,6
456	コップ底	Colorless		2.481	0.094	0.017	7.909	1.266	2.007	0.030	0.062	0.033	0	0	0.678	0.096	0	0.01	0.00	0.16	0.25	0.01	0.00	0.00	0.09	0.01	0.00	カリガラス	19C中頃	井戸A354	宅地5,6
457	瓶	Blue cobalt		2.551	0.067	0.091	6.359	0.154	6.062	0.037	0.015	0.390	0.001	0.103	0.319	0.004	0	0.01	0.01	0.02	0.95	0.00	0.06	0.00	0.05	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	井戸A354	宅地5,6
458	ランプロ	Colorless		2.512	0.005	0.015	3.325	0.958	0.958	0.007	0.071	0.090	0.008	0	0	0.035	0.412	0.00	0.00	0.29	0.29	0.02	0.03	0.00	0.00	0.01	0.12		19C中頃	井戸A354	宅地5,6
459	瓶	Colorless	Green	2.611	0.061	0.035	5.368	0.067	5.247	0.013	0.274	0.158	0.001	0	0.009	0.007	0.002	0.01	0.01	0.01	0.98	0.05	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	井戸A354	宅地5,6
欠番																															
461-1	碗	ColorlessW	金彩部分	2.436	0	0.162	2.793	0.278	0.220	0.048	0.012	0.392	0.07	0	0.410	0.005	0.571	0.00	0.06	0.10	0.08	0.00	0.14	0.03	0.15	0.00	0.20	金彩部分	19C中頃	井戸A354	宅地5,6
461-2	碗	Colorless	透明部分	2.436	0.025	0	5.961	2.171	1.649	0.005	0.020	0.029	0.001	0	0.066	0.180	0.001	0.00	0.00	0.36	0.28	0.00	0.00	0.00	0.01	0.03	0.00	カリガラス	19C中頃	井戸A354	宅地5,6
462	瓶	Blue cobalt		2.631	0.043	0.282	6.897	0.202	5.890	0.039	0.024	0.399	0	0.106	0.332	0.019	0	0.01	0.04	0.03	0.85	0.00	0.06	0.00	0.05	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
463	瓶	Blue		2.520	0.021	0.196	8.118	0.210	3.767	0.060	0.027	0.400	0.001	0	0.014	0.021	0.021	0.00	0.02	0.03	0.46	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
464	瓶	Blue cobalt		2.637	0.082	0.090	6.698	0.168	6.393	0.037	0.023	0.379	0	0.108	0.334	0.015	0	0.01	0.01	0.03	0.95	0.00	0.06	0.00	0.05	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
465	立体	Dark Green	薄色	2.720	0.011	0.428	6.389	0.501	8.955	0.198	0.048	1.15	0.003	0	0	0.018	0.006	0.00	0.07	0.08	1.40	0.01	0.18	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
466	容器2	Colorless	Green	2.535	0.062	0.030	6.349	0.050	4.823	0.015	0.081	0.145	0	0	0.085	0	0.001	0.01	0.00	0.01	0.76	0.01	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
467	容器2	Colorless	Green	2.604	0.037	0.017	3.158	0.049	3.203	0.008	0.164	0.098	0	0	0.005	0	0.002	0.01	0.01	0.02	1.01	0.05	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
468	瓶	Blue cobalt		2.664	0.039	0.229	7.207	0.202	6.609	0.046	0.024	0.456	0.001	0.119	0.359	0.024	0	0.01	0.03	0.03	0.92	0.00	0.06	0.00	0.05	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
469	立体	Dark Green	薄色	2.702	0.017	0.429	6.381	0.486	8.995	0.193	0.047	1.155	0.003	0	0	0.011	0	0.00	0.07	0.08	1.41	0.01	0.18	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
470	瓶	Blue		2.560	0.073	0.096	7.455	0.137	5.425	0.042	0.069	0.380	0.001	0.002	0.24	0.008	0.018	0.01	0.01	0.02	0.73	0.01	0.05	0.00	0.03	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
471	瓶	Green		2.606	0.081	0.053	7.342	0.106	7.170	0.017	0.357	0.235	0.002	0	0.005	0.019	0.007	0.01	0.01	0.01	0.98	0.05	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
欠番																															
欠番																															
欠番																															
475	棒状	Colorless 2		3.616	0	0.047	4.617	0.472	0.019	0	0.004	0.070	0.019	0	0	0.030	0.792	0.00	0.01	0.10	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.17		17C中頃	土壙B725	宅地2・混入
476	その他	White	乳白Green	2.946	0	0.023	1.104	0.116	0.106	0.018	0.012	0.690	0.069	0	0	0.028	0.189	0.00	0.02	0.11	0.10	0.01	0.63	0.06	0.00	0.03	0.17		18C末～19C初	土壙B720	宅地3,4
477	酒杯菊	ColorlessW1		3.523	0.010	0.052	7.186	0.325	0.138	0.007	0.006	0.278	0.838	0	0	0.025	1.059	0.00	0.01	0.05	0.02	0.00	0.04	0.12	0.00	0.00	0.15		18C前半	土壙B776	宅地2
478	容器2	Colorless	Green	2.600	0.087	0.035	7.123	0.072	7.003	0.017	0.357	0.218	0.002	0	0.006	0	0.005	0.01	0.00	0.01	0.98	0.05	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺構番号	公家屋敷名
479	酒杯	Blue		2.498	0.002	0.098	7.615	4.771	2.956	0.027	0.019	0.588	1.201	0.004	0.013	0.253	0.009	0.00	0.01	0.63	0.39	0.00	0.08	0.16	0.00	0.03	0.00	カリガラス		B区清掃中	
480	ワインボトル	Dark Green		2.691	0.021	0.277	5.379	0.741	7.445	0.100	0.679	0.970	0.002	0	0	0	0.002	0.00	0.05	0.14	1.38	0.13	0.18	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		B区掘下げ	
481	棒状	Colorless 1		3.299	0.005	0.039	3.453	1.153	0.518	0.003	0.026	0.064	0.001	0	0	0.044	0.86	0.00	0.01	0.33	0.15	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.25		19C中頃	土壙B680	宅地2
482	ガラスボール	Green	透明	2.775	0.046	0.014	5.723	0.720	2.362	0.009	0.051	1.356	1.035	0	0	0.063	0.642	0.01	0.00	0.13	0.41	0.01	0.24	0.18	0.00	0.01	0.11		19C中頃	溝A7	宅地5,6
483	棒状	Colorless 1	透明	3.373	0.003	0.025	4.923	0.460	0.005	0	0.003	0.038	0.001	0	0	0.033	0.773	0.00	0.01	0.09	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.16		19C中頃	土壙B670	宅地2
484	棒状	Blue	透明	3.227	0	0.011	2.032	0.262	0.362	0.005	0.009	0.061	0.138	0	0	0.016	0.409	0.00	0.01	0.13	0.18	0.00	0.03	0.07	0.00	0.01	0.20		19C中頃	土壙B670	宅地2
485	棒状	Colorless 1	透明	3.605	0	0.011	2.603	0.650	0	0	0.001	0.017	0.001	0	0	0.029	0.678	0.00	0.00	0.25	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.26		19C前半～中頃	土壙B677	宅地2
486	棒状	Blue	透明	2.791	0	0	2.956	0.300	0.017	0.003	0.025	0.069	0.437	0	0	0.025	0.466	0.00	0.00	0.10	0.01	0.01	0.02	0.15	0.00	0.01	0.16		19C前半～中頃	土壙B677	宅地2
487	棒状	Colorless 1		3.317	0.004	0.018	2.872	0.941	0.402	0	0.017	0.035	0.001	0	0	0.026	0.684	0.00	0.01	0.33	0.14	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24		19C？	土壙B681	宅地2
488	棒状	Colorless 1		3.418	0.002	0.014	2.678	0.401	0.01	0	0	0.026	0.001	0	0	0.022	0.630	0.00	0.01	0.15	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24		19C？	土壙B681	宅地2
489	棒状	Blue		2.434	0.005	0.119	3.200	1.683	0.894	0.024	0.037	0.181	0.211	0	0.001	0.072	0.002	0.00	0.04	0.53	0.28	0.01	0.06	0.07	0.00	0.02	0.00	カリガラス	19C中頃	土壙B687	宅地3,4
490	棒状	ColorlessW1		3.662	0	0.039	1.915	0.069	0.309	0.019	0	0.125	0.006	0	0	0.005	0.613	0.00	0.02	0.04	0.16	0.00	0.07	0.00	0.00	0.00	0.32		18C末～19C初	土壙B721	宅地3,4
491	棒状	Green		3.663	0.007	0.066	4.208	0.899	0.117	0	0	0.106	0.39	0	0	0.050	0.989	0.00	0.02	0.21	0.03	0.00	0.03	0.09	0.00	0.01	0.24		18C末～19C初	土壙B721	宅地3,4
492	ねじり棒	Colorless 1		3.824	0.002	0	1.565	0.332	0.010	0	0	0.029	0.001	0	0	0.023	0.439	0.00	0.00	0.21	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.28		18C末～19C初	土壙B721	宅地3,4
493	棒状	YelloW		3.594	0.002	0	3.017	0.574	0.053	0.004	0.005	0.732	0.018	0	0	0.066	0.595	0.00	0.00	0.19	0.02	0.00	0.24	0.01	0.00	0.02	0.20		18C末～19C初	土壙B721	宅地3,4
494	棒状	YelloW		3.709	0.002	0.097	3.334	0.484	0.143	0.005	0.004	0.886	0.011	0	0	0.028	0.579	0.00	0.03	0.15	0.04	0.00	0.27	0.00	0.00	0.01	0.17		18C後半～19C中頃	土壙B703	宅地3,4
495	花瓶底	Green		3.769	0.004	0.062	5.387	0.845	0.066	0.002	0.002	0.301	0.821	0	0	0.059	1.13	0.00	0.01	0.16	0.01	0.00	0.06	0.15	0.00	0.01	0.21			C区掘下げ	
496	ランプロ	Colorless		2.489	0.085	0	8.556	0.048	4.266	0.015	0.342	0.092	0	0	0.286	0.02	0	0.01	0.00	0.01	0.50	0.04	0.01	0.00	0.03	0.00	0.00	カリガラス		E区清掃中	
497	ランプロ	Colorless		2.487	0.035	0.017	5.935	0.031	2.321	0.018	0.122	0.058	0	0	0.045	0.002	0.003	0.01	0.00	0.01	0.39	0.02	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	カリガラス	19C前半	溝E30	宅地5,6
498	棒状	ColorlessW1	White	3.459	0.001	0.047	0.493	0.155	0.179	0.030	0.015	0.194	0.001	0	0	0.01	0.538	0.00	0.10	0.31	0.36	0.03	0.39	0.00	0.00	0.02	1.09		18C後半～19C中頃	土壙E45A	宅地5,6
499	棒状	Colorless 2		3.340	0.005	0.051	3.734	0.553	0.040	0.001	0.002	0.058	0.001	0	0	0.026	0.666	0.00	0.01	0.15	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.18		19C	土壙E84	宅地5,6
500	棒状	ColorlessW2		3.608	0.001	0.017	1.533	0.019	0.289	0.005	0	0.069	0.008	0	0	0.007	0.695	0.00	0.01	0.01	0.19	0.00	0.05	0.01	0.00	0.00	0.45		18C中以降	土壙E180	宅地5,6
501	棒状	ColorlessW2		3.473	0.001	0.011	4.397	0.049	0.062	0.002	0	0.114	0.001	0	0	0.013	0.697	0.00	0.00	0.01	0.01	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.16		17C末～18C初	土壙E211	宅地5,6
502	酒杯菊	*Colorless 1*		*3.530*	*0.001*	*0.041*	*2.058*	*0.156*	*0.610*	*0*	*0.008*	*0.065*	*0.001*	*0*	*0*	*0*	*1.051*	*0.00*	*0.02*	*0.08*	*0.30*	*0.00*	*0.03*	*0.00*	*0.00*	*0.00*	*0.51*			土壙E211	
503	棒状	YelloW		3.500	0.001	0.046	1.088	0.279	0.264	0.008	0.002	1.609	0.018	0	0	0.012	0.505	0.00	0.04	0.26	0.24	0.00	1.48	0.02	0.00	0.01	0.46		18C後半	土壙E45	宅地5,6
504	棒状	ColorlessW1		3.491	0.010	0.036	7.396	0.022	0.262	0.013		0.147	0.01	0	0	0.014	1.050	0.00	0.00	0.00	0.04	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.14		18C後半	土壙E45	宅地5,6
505	棒状	Green	透明	3.610	0	0.037	3.729	0.372	0.009	0.003	0	0.106	0.388	0	0	0.01	0.579	0.00	0.01	0.10	0.00	0.00	0.03	0.10	0.00	0.00	0.16		18C後半～19C中頃	池E1200	宅地5,6
506	不明筒状製品		緑透明	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–		19C中頃	石組土壙F1386	
507	不明筒状製品		緑透明	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–		19C中頃	石組土壙F1386	
508	棒状	Colorless 1	透明	3.304	0	0.032	3.907	0.598	0.015	0.002	0	0.048	0.001	0	0	0.033	0.75	0.00	0.01	0.15	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		18C後半～19C中頃	池E1200	宅地5,6
509	酒杯菊	Colorless 1		3.650	0	0.029	5.633	0.431	0.116	0.003	0.003	0.078	0.026	0	0	0.028	1.145	0.00	0.01	0.08	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.20			集石F1307	
510	棒状	Green	Blue	4.333	0	0.016	2.427	0.566	0.047	0.005	0	0.424	0.939	0	0	0.02	0.987	0.00	0.01	0.23	0.02	0.00	0.17	0.39	0.00	0.01	0.41			集石F1307	
511	棒状	Green	Blue	3.413	0	0.015	2.602	0.691	0.042	0.006	0	0.455	1.014	0	0	0.016	1.06	0.00	0.01	0.27	0.02	0.00	0.17	0.39	0.00	0.01	0.41			集石F1307	
512	棒状	Colorless 2	White	3.750	0	0.043	4.788	0.837	0.023	0	0	0.086	0.027	0	0	0.041	1.207	0.00	0.01	0.17	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.25			溝F1392	
513	棒状	Colorless 1		3.422	0	0.091	6.095	0.267	0.025	0.015	0	0.044	0.005	0	0	0.022	0.782	0.00	0.01	0.04	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.13			F区清掃中	
514	棒状	Blue		3.128	0.006	0.300	5.900	1.083	0.65	0.021	0.021	0.235	0.347	0	0	0.050	0.860	0.00	0.05	0.18	0.11	0.00	0.04	0.06	0.00	0.01	0.15			F区西壁	
515	棒状	Colorless 2		3.327	0.005	0.082	3.815	0.348	0.138	0.006	0.007	0.101	0.001	0	0	0.04	0.806	0.00	0.02	0.09	0.04	0.00	0.03	0.00	0.00	0.01	0.21		18C前半？	土壙F1398	宅地5,6
516	その他	Gray	Yellow	3.831	0.004	0.129	0.712	0.100	0.636	0.040	0.023	0.565	0.001	0	0	0.015	0.863	0.01	0.18	0.14	0.89	0.03	0.79	0.00	0.00	0.02	1.21		19C前半	土壙F1400	宅地7
517	棒状	Green		3.436	0	0.027	4.434	0.279	0.053	0.005	0	0.623	0.197	0	0	0.022	0.745	0.00	0.01	0.06	0.01	0.00	0.14	0.04	0.00	0.00	0.17			F区掘下げ	
518	棒状	Colorless 1	Blue	3.367	0.007	0.047	5.020	0.280	0.015	0.003	0.001	0.077	0.009	0	0	0.018	0.960	0.00	0.01	0.06	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.19			H区清掃中	
519	棒状	ColorlessW1		3.653	0.002	0.062	3.697	0.101	0.749	0.003	0.004	0.136	0.001	0	0	0.006	1.010	0.00	0.02	0.03	0.20	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.27			H区清掃中	
520	棒状	YelloW	透明	3.425	0.002	0.036	4.126	0.294	0.052	0.006	0.004	1.481	0.022	0	0	0.019	0.679	0.00	0.01	0.07	0.01	0.00	0.36	0.01	0.00	0.00	0.16		18C後半～19C中頃	土壙H29	宅地5,6
521	棒状	Colorless 2		3.354	0.001	0.038	4.276	0.468	0.150	0.003	0.017	0.099	0.009	0	0	0.032	1.126	0.00	0.01	0.11	0.04	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.26			H区清掃中	
522	棒状	Blue	透明	3.210	0	0.024	3.947	0.288	0.028	0.006	0.018	0.030	0.604	0	0	0.035	0.620	0.00	0.01	0.07	0.01	0.00	0.01	0.15	0.00	0.01	0.16		19C中頃～後半	土壙H10	宅地5,6
523	タンブラー1	Colorless 1	Red	2.303	0.008	0.103	9.188	0.282	0.298	0.025	0	0.583	1.440	0	0	0.051	0.033	0.00	0.01	0.03	0.03	0.00	0.06	0.16	0.00	0.01	0.00	カリガラス	19C中頃	井戸H27	
524	タンブラー1	ColorlessW1	透明部分	2.210	0	0.017	3.889	0.019	0.130	0.004	0	0.229	0	0	0.002	0.005	0.010	0.00	0.00	0.00	0.03	0.00	0.06	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	井戸H27	
525	棒状	Colorless		3.559	0.005	0.006	3.468	0.669	0.007	0	0.005	0.046	0.017	0	0	0.029	0.828	0.00	0.00	0.19	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24			H区掘下げ	宅地5,6
526	棒状	Colorless 2	Blue	2.920	0	0.012	2.965	0.206	0.016	0	0.008	0.058	0.001	0	0	0	0.584	0.00	0.00	0.07	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.20			H区掘下げ	
527	タンブラー2	ColorlessW2		3.500	0	0.022	5.386	0.118	0.060	0.008	0	0.077	0.004	0	0	0.009	0.763	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.14		18C後半	土壙H92	宅地5,6
528	棒状	Colorless 1	透明	3.336	0	0.021	5.549	0.734	0.038	0	0.004	0.054	0.014	0	0	0.05	1.300	0.00	0.00	0.13	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.23			H区焼土層	
529	棒状	YelloW	透明	3.720	0	0.015	3.361	0.401	0.022	0.002	0.001	0.834	0.022	0	0	0.078	0.595	0.00	0.00	0.12	0.01	0.00	0.25	0.01	0.00	0.02	0.18			H区撹乱	
530	棒状	Colorless 1	Blue	3.705	0.004	0.021	3.226	0.511	0.025	0.001	0.001	0.043	0.023	0	0	0.026	0.782	0.00	0.01	0.16	0.01	0.00	0.01	0.01	0.00	0.01	0.24			H区掘下げ	
531	棒状	White		3.168	0	0.021	3.490	0.261	0.001	0	0.005	0.077	0.011	0	0	0	0.615	0.00	0.01	0.07	0.00	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.18			H区掘下げ	
532	棒状	Yellow		3.872	0	0.045	2.918	0.291	0.058	0.004	0.002	0.554	0.019	0	0	0.018	0.494	0.00	0.02	0.10	0.02	0.00	0.19	0.01	0.00	0.01	0.17		19C初	土壙H135	宅地5,6
533	立体	Colorless	Blue	3.889	0	0.020	4.147	0.032	0.017	0.003	0.001	0.22	0.005	0	0	0.006	0.696	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.17		19C初	土壙H135	宅地5,6
534	棒状	Colorless 2		3.567	0.003	0.015	1.995	0.396	0.137	0.003	0	0.056	0.002	0	0	0.014	0.512	0.00	0.01	0.20	0.07	0.00	0.03	0.00	0.00	0.01	0.26			H区検出中	
535	ワインボトル	Dark Green	薄色	2.642	0	0.406	7.186	0.586	6.690	0.101	0.055	1.396	0.005	0	0	0.022	0	0.00	0.06	0.08	0.93	0.01	0.19	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		H区検出中	
536	棒状	White		3.747	0	0.006	3.104	0.239	0.295	0.003	0.003	0.060	0.017	0	0	0.005	0.919	0.00	0.00	0.08	0.10	0.00	0.02	0.01	0.00	0.00	0.30		18C後半～19C中頃	土壙H200	宅地5,6
537	酒杯菊	Green		3.579	0.001	0.016	1.247	0.028	0.288	0.011	0.005	0.876	0.364	0	0	0.02	0.958	0.00	0.01	0.02	0.23	0.00	0.70	0.29	0.00	0.02	0.77		19C前半？	土壙H222	宅地5,6
538	棒状	Colorless 2		3.319	0.006	0.107	4.431	0.339	0.119	0.004	0	0.026	0.001	0	0	0.019	0.687	0.00	0.02	0.08	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.16		19C前半？	土壙H222	宅地5,6

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺溝番号	公家屋敷名
539	立体	ColorlessW2		3.681	0	0.016	1.266	0.157	0.587	0.008	0.002	0.104	0.001	0	0	0.006	0.917	0.00	0.01	0.12	0.46	0.00	0.08	0.00	0.00	0.00	0.72		19C前半？	土壙H222	宅地5,6
540	立体	ColorlessW2		3.793	0	0.314	6.927	0.363	0.507	0.026	0.032	0.718	2.499	0	0	0.068	0.991	0.00	0.05	0.05	0.07	0.00	0.10	0.36	0.00	0.01	0.14		18C末	土壙H223	宅地5,6
541	棒状	YelloW	透明	3.711	0.002	0.117	5.965	0.554	0.222	0.010	0.008	0.977	0.041	0	0	0.033	0.928	0.00	0.02	0.09	0.04	0.00	0.16	0.01	0.00	0.01	0.16		18C中頃～19C中頃	石組H260	宅地5,6
542	瓶	Green		2.546	0.076	0.113	6.576	1.093	3.097	0.034	0.178	0.576	0.003	0	0	0.054	0	0.01	0.02	0.17	0.47	0.03	0.09	0.00	0.00	0.01	0.00	カリガラス	17C初～中頃	土壙H525	宅地6,9・混入？
543	棒状	Purple	透明	3.283	0.001	0.006	2.376	0.010	0.067	0.014	0.033	0.131	0.021	0	0	0.011	0.57	0.00	0.00	0.00	0.03	0.01	0.06	0.01	0.00	0.00	0.24		18C末～19C初	土壙H81	宅地5,6
544	棒状	ColorlessW2		3.515	0	0.030	4.462	0.071	0.035	0.010	0.123	0.161	0.012	0	0	0.011	0.455	0.00	0.01	0.02	0.01	0.03	0.04	0.00	0.00	0.00	0.10		18C末～19C初	土壙H81	宅地5,6
545	酒杯菊	ColorlessW2		3.583	0	0.007	1.893	0.157	0.639	0	0.006	0.031	0.001	0	0	0.002	0.989	0.00	0.00	0.08	0.34	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.52		18C後半	土壙H306	宅地5,6
546	ワイングラス	ColorlessW1		3.419	0.002	0.058	3.565	0.095	0.433	0.004	0.005	0.034	0.001	0	0	0.004	0.613	0.00	0.02	0.03	0.12	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.17		18C末～19C中頃	溝C491	二階町通
547	ワイングラス	ColorlessW1		3.792	0.000	0.259	7.056	0.213	0.093	0.036	0.026	0.274	0.001	0	0	0.029	1.065	0.00	0.04	0.03	0.01	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.15		18C末～19C中頃	溝C491	二階町通
548	ワインボトル	Dark Green		2.728	0	0.058	1.729	0.377	6.140	0.068	0.047	1.304	0.003	0	0	0	0.001	0.00	0.03	0.22	3.55	0.03	0.75	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C前半	土壙A183	宅地3,4
549	立体	Colorless 1		2.488	0.034	0.036	5.581	0.407	1.924	0.017	0.068	0.059	0	0	0.105	0.019	0.019	0.01	0.01	0.07	0.34	0.01	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	カリガラス		土壙A237	宅地5,6
550	ランプ口	Colorless		2.594	0.042	0.081	4.618	0.315	1.926	0.020	0.13	0.091	0	0	0.276	0.02	0.18	0.01	0.02	0.07	0.42	0.03	0.02	0.00	0.06	0.00	0.04	カリガラス	19C中頃	井戸A354	宅地5,6
551	板	Colorless	Blue	2.525	0.056	0.048	8.084	0.064	5.745	0.024	0.173	0.214	0	0	0.068	0.022	0.010	0.01	0.01	0.01	0.71	0.02	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	井戸A354	宅地5,6
552	ランプ口	Colorless		2.485	0.060	0.008	5.185	0.093	3.003	0.013	0.103	0.036	0	0	0.035	0.01	0.014	0.01	0.00	0.02	0.58	0.02	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	カリガラス	18C中頃	土壙A163	宅地5,6
553	瓶口	Colorless		3.639	0.004	0.013	1.978	0.321	0.01	0.001	0.013	0.011	0	0	0	0.021	0.373	0.00	0.01	0.16	0.01	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
554	瓶	Blue		2.527	0.017	0.207	8.038	0.215	3.687	0.053	0.033	0.406	0.001	0	0.019	0.01	0.015	0.00	0.03	0.03	0.46	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
555	板	Colorless	Blue	2.520	0.067	0.063	8.298	0.084	5.903	0.022	0.017	0.233	0	0	0	0.026	0.007	0.01	0.01	0.01	0.71	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
556	切子	Colorless 1		2.492	0.060	0	7.879	0.062	2.928	0.015	0.118	0.039	0.001	0	0.059	0.002	0	0.01	0.00	0.01	0.37	0.01	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A14	宅地3,4,5,6
557	容器 2	Colorless		3.304	0	0.035	2.987	0.292	0.022	0.002	0.026	0.036	0.001	0	0	0.021	0.604	0.00	0.01	0.10	0.01	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.20		18C中頃	土壙A163	宅地3,4
558	ガラスボール	Green	透明	2.790	0	0.002	1.944	0.532	1.819	0.010	0.044	1.158	0.901	0	0	0.015	0.563	0.00	0.00	0.27	0.94	0.02	0.60	0.46	0.00	0.01	0.29		19C中頃以降	井戸A354	宅地3,4
559	容器 2 底	Colorless		3.301	0.007	0.012	5.438	0.592	0	0	0.056	0.054	0.001	0	0	0.037	1.132	0.00	0.00	0.11	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.21		19C前半	土壙A162	宅地3,4
560	ワインボトル	Blue cobalt		2.622	0.082	0.111	7.165	0.211	6.904	0.043	0.028	0.410	0	0.120	0.36	0.028	0	0.01	0.02	0.03	0.96	0.00	0.06	0.00	0.05	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	溝A7	宅地3,4,5,6
561	容器 2	Colorless		2.903	0	0.073	6.196	1.534	1.823	0.015	0.133	0.189	0.019	0	0	0.076	0.800	0.00	0.01	0.25	0.29	0.02	0.03	0.00	0.00	0.01	0.13		19C中頃～後半	土壙A237	宅地3,4
562	酒杯菊	Colorless 1		3.625	0.005	0.022	3.649	0.894	0.010	0.001	0.017	0.039	0.001	0	0	0.039	1.08	0.00	0.01	0.24	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.30		19C前半～中頃	土壙A236	宅地5,6
563	容器 2	Colorless		2.492	0.058	0.084	7.867	0.483	2.083	0.019	0.100	0.125	0	0	0.354	0.036	0.032	0.01	0.01	0.06	0.26	0.01	0.02	0.00	0.04	0.00	0.00	カリガラス	19C前半～中頃	土壙A236	宅地5,6
564	酒杯菊	Colorless 1		3.520	0.001	0.055	3.579	0.635	0.010	0	0.021	0.034	0.001	0	0	0.075	0.972	0.00	0.02	0.18	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.02	0.27		19C前半～中頃	土壙A140	宅地3,4
565	立体	Colorless 1		2.488	0.080	0.017	8.466	0.180	4.541	0.020	0.156	0.042	0	0	0.075	0.022	0.012	0.01	0.00	0.02	0.54	0.02	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	カリガラス	19C前半～中頃	土壙A140	宅地3,4
566	酒杯菊	Dark		3.733	0.001	0.077	5.095	0.011	0.062	0.032	0.120	0.602	0.004	0	0	0.015	0.985	0.00	0.02	0.00	0.01	0.02	0.12	0.00	0.00	0.00	0.19			A区検出中	
567	棒状	Colorless 1	Blue	3.535	0.003	0.008	2.355	0.316	0.013	0.001	0.002	0.034	0.011	0	0	0.017	0.607	0.00	0.00	0.13	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.26		19C中頃	土壙B677	宅地2
568	棒状	Colorless 1		3.353	0.005	0.037	3.407	1.106	0.492	0.003	0.018	0.067	0.001	0	0	0.038	0.848	0.00	0.01	0.32	0.14	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.25		19C中頃	土壙B680	宅地2
569	棒状	Colorless 2		3.333	0.003	0.018	2.318	0.740	0.330	0.003	0.015	0.036	0.001	0	0	0.019	0.571	0.00	0.01	0.32	0.14	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.25		19C中頃	土壙B680	宅地2
570	棒状	Colorless 2		3.409	0.005	0.005	3.604	0.428	0	0	0.017	0.018	0.001	0	0	0.034	0.844	0.00	0.00	0.12	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.23		19C中頃	土壙B680	宅地2
571	棒状	White	透明	2.409	0.003	0.288	4.311	2.562	1.163	0.064	0.005	0.156	0.001	0	0	0.104	0.001	0.00	0.07	0.59	0.27	0.00	0.04	0.00	0.00	0.02	0.00	カリガラス	19C中頃	土壙B680	宅地2
572	棒状	ColorlessW1		2.992	0.003	0.043	3.535	0.438	0.031	0.002	0	0.04	0.04	0	0	0.017	0.669	0.00	0.01	0.12	0.01	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.19		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
573	棒状	YelloW		3.890	0	0.121	1.821	0.184	0.354	0.010	0.001	1.583	0.02	0	0	0.012	0.580	0.00	0.07	0.10	0.19	0.00	0.87	0.01	0.00	0.01	0.32		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
574	棒状	Green	透明	3.676	0	0.039	4.359	0.766	0.100	0.003	0.001	0.103	0.33	0	0	0.032	0.843	0.00	0.01	0.18	0.02	0.00	0.02	0.08	0.00	0.01	0.19		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
575	棒状	YelloW		3.733	0	0.058	0.991	0.033	0.583	0.006	0	0.611	0.127	0	0	0.013	0.915	0.00	0.06	0.03	0.59	0.00	0.62	0.13	0.00	0.01	0.92		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
576	棒状	ColorlessW1		3.814	0	0.039	1.884	0.259	0.514	0.006	0.006	0.052	0.025	0	0	0.010	0.713	0.00	0.02	0.14	0.27	0.00	0.03	0.01	0.00	0.01	0.38		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
577	棒状	Colorless 2		3.445	0	0.008	3.254	0.450	0.103	0	0	0.029	0.001	0	0	0.023	0.791	0.00	0.00	0.14	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
578	棒状	YelloW		3.781	0.001	0.067	2.633	0.599	0.169	0.003	0.002	1.166	0.020	0	0	0.040	0.764	0.00	0.03	0.23	0.06	0.00	0.44	0.01	0.00	0.02	0.29		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
579	ワインボトル	Dark Green		2.703	0	0.067	1.286	0.118	1.799	0.031	0.010	0.388	0	0	0	0	0.001	0.00	0.05	0.09	1.40	0.01	0.30	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	土壙B687	宅地3,4
580	棒状	YelloW	透明	3.867	0.002	0.057	3.253	0.605	0.176	0.003	0.001	0.835	0.046	0	0	0.032	0.839	0.00	0.02	0.19	0.05	0.00	0.26	0.01	0.00	0.01	0.26		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
581	棒状	YelloW		3.537	0	0.100	4.099	0.594	0.153	0.004	0.004	1.619	0.021	0	0	0.030	0.822	0.00	0.02	0.14	0.04	0.00	0.39	0.01	0.00	0.01	0.20		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
582	棒状	Blue		2.485	0.007	0.185	4.931	2.925	1.920	0.039	0.011	0.293	0.399	0.001	0.008	0.144	0.007	0.00	0.04	0.59	0.39	0.00	0.06	0.08	0.00	0.03	0.00	カリガラス	19C中頃	土壙B687	宅地3,4
583	酒杯菊	ColorlessW2		3.551	0	0.026	1.955	0.112	0.468	0.006	0.011	0.218	0.001	0	0	0	1.036	0.00	0.01	0.06	0.24	0.01	0.11	0.00	0.00	0.00	0.53		18C末以降	土壙B729	宅地3,4
584	板	Colorless		3.423	0.006	0	4.381	0.761	0.010	0	0.056	0.017	0.001	0	0	0.038	1.157	0.00	0.00	0.17	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.01	0.26		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
585	棒状	ColorlessW2		3.494	0.004	0.029	2.244	0.277	0.460	0.011	0	0.058	0.062	0	0	0.178	1.039	0.00	0.01	0.12	0.20	0.00	0.03	0.03	0.00	0.08	0.46		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
586	棒状	Green	透明	3.751	0	0.157	8.382	0.575	0.194	0.011	0.006	0.334	0.512	0	0	0.069	1.115	0.00	0.02	0.07	0.02	0.00	0.04	0.06	0.00	0.01	0.13		19C中頃	土壙B687	宅地3,4
587	コップ底	Colorless		2.533	0.031	0.119	5.085	0.198	2.994	0.004	0.032	0.021	0	0	0	0.015	0.003	0.01	0.02	0.04	0.59	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		B区掘削中	
588	瓶	Colorless		2.477	0.030	0.046	2.476	0.186	1.028	0.004	0.021	0.018	0	0	0.094	0.009	0	0.01	0.02	0.08	0.42	0.01	0.01	0.00	0.04	0.00	0.00	カリガラス		B区撹乱	
589	棒状	ColorlessW2		3.491	0	0.026	2.688	0.024	0.676	0.004	0.011	0.068	0.001	0	0	0	1.188	0.00	0.01	0.01	0.25	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.44		18C前半～後半	土壙B827	宅地3,4
590	棒状	Green	透明	3.500	0	0.002	2.797	0.445	0.015	0.000	0	0.231	0.254	0	0	0.026	0.501	0.00	0.00	0.16	0.01	0.00	0.08	0.09	0.00	0.01	0.18		19C前半～中頃	石組土壙E22	宅地5,6
591	棒状	Green		3.558	0	0.009	4.269	0.22	0.022	0	0.001	0.292	0.217	0	0	0.02	0.547	0.00	0.00	0.05	0.01	0.00	0.07	0.05	0.00	0.00	0.13		19C前半～中頃	石組土壙E22	宅地5,6
592	棒状	YelloW	透明	3.735	0.002	0.046	3.711	0.692	0.030	0.004	0.002	0.743	0.013	0	0	0.046	0.832	0.00	0.01	0.19	0.01	0.00	0.20	0.00	0.00	0.01	0.22			E区清掃中	
593	棒状	ColorlessW2		3.494	0	0.005	1.151	0.032	0.257	0.005	0	0.034	0.005	0	0	0	0.510	0.00	0.00	0.03	0.22	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.44		18C後半	土壙E45	宅地5,6
594	徳利口	Cobaltblue		3.275	0.001	0.022	2.065	0.101	0.038	0.004	0.169	0.091	0.008	0.037	0	0	0.348	0.00	0.01	0.05	0.02	0.08	0.04	0.00	0.00	0.00	0.17		18C後半	土壙E45	宅地5,6
595	棒状	Colorless 2		3.347	0	0.034	3.477	0.452	0.015	0	0.011	0.027	0.003	0	0	0.027	0.635	0.00	0.01	0.13	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.18		19C	溝E50	宅地5,6
596	チロリ蓋	ColorlessW	Green	3.904	0	0.062	2.322	0.444	0.366	0	0.008	0.064	0.029	0.008	0	0.303	1.068	0.00	0.03	0.19	0.16	0.00	0.03	0.01	0.00	0.13	0.46		19C	溝E50	宅地5,6
597	棒状	ColorlessW1		3.502	0.004	0.058	6.130	0.583	0.199	0.004	0	0.079	0.018	0	0	0.049	1.148	0.00	0.01	0.10	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		18C後半	土壙E45	宅地5,6
598	棒状	YelloW		3.634	0	0.071	1.659	0.266	0.294	0.004	0	1.746	0.007	0	0	0.014	0.532	0.00	0.04	0.16	0.18	0.00	1.05	0.00	0.00	0.01	0.32		18C後半	土壙E45	宅地5,6

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類		遺溝番号	公家屋敷名
599	棒状	Green		3.539	0	0.080	3.371	0.457	0.118	0.004	0.001	0.577	0.601	0	0	0.026	0.529	0.00	0.02	0.14	0.04	0.00	0.17	0.18	0.00	0.01	0.16		18C後半	土壙E45	宅地5,6
600	棒状	Purple	透明	3.498	0	0.009	2.756	0.263	0.122	0.021	0.431	0.247	0.018	0.020	0	0	0.928	0.00	0.00	0.10	0.04	0.16	0.09	0.01	0.00	0.00	0.34		18C後半	土壙E45	宅地5,6
601	棒状	Green		3.494	0	0.056	4.216	0.328	0.113	0.002	0.004	0.558	0.285	0	0	0.025	0.576	0.00	0.01	0.08	0.03	0.00	0.13	0.07	0.00	0.01	0.14		18C後半	土壙E45	宅地5,6
602	棒状	Green		3.934	0	0.047	2.542	0.023	0.165	0.014	0	0.123	0.168	0	0	0	0.605	0.00	0.02	0.01	0.06	0.00	0.05	0.07	0.00	0.00	0.24		18C後半	土壙E45	宅地5,6
603	棒状	Colorless 2	Blue	3.501	0.001	0.015	2.932	0.717	0.019	0	0	0.034	0.012	0	0	0.038	0.846	0.00	0.01	0.24	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.29		18C後半	土壙E45	宅地5,6
604	棒状	ColorlessW1		3.522	0	0.015	2.560	0.411	0.036	0.002	0.001	0.041	0.011	0	0	0.033	0.669	0.00	0.01	0.16	0.01	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.26		18C後半	土壙E45	宅地5,6
605	棒状	YelloW		3.596	0.002	0.018	2.681	0.544	0.013	0.001	0.004	1.444	0.01	0	0	0.027	0.561	0.00	0.01	0.20	0.00	0.00	0.54	0.00	0.00	0.01	0.21		18C後半	土壙E45	宅地5,6
606	棒状	Green		3.509	0	0.013	2.175	0.037	0.260	0.013	0	0.458	0.203	0	0	0	0.929	0.00	0.01	0.02	0.12	0.00	0.21	0.09	0.00	0.00	0.43		18C後半	土壙E45	宅地5,6
607	立体	ColorlessW2		3.553	0	0.018	2.804	0.045	0.239	0.006	0.006	0.174	0.001	0	0	0	1.120	0.00	0.01	0.02	0.09	0.00	0.06	0.00	0.00	0.00	0.40		18C後半	土壙E45	宅地5,6
608	立体	Colorless 2		3.507	0	0.010	3.847	0.498	0.045	0	0	0.053	0.013	0	0	0.039	0.998	0.00	0.00	0.13	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.26		18C後半	土壙E45	宅地5,6
609	棒状	Blue navy		3.521	0.003	0.026	2.684	0.198	0.024	0.006	0.085	0.119	0.056	0.012	0.225	0.010	0.326	0.00	0.01	0.07	0.01	0.03	0.04	0.02	0.08	0.00	0.12		19C前半～中頃	土壙E67	宅地5,6
610	棒状	Colorless 1	透明	3.371	0	0.009	1.201	0.273	0.037	0	0	0.019	0	0	0	0.011	0.321	0.00	0.01	0.23	0.03	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.27		19C前半～中頃	土壙E67	宅地5,6
611	棒状	Green		3.320	0	0.032	5.092	0.330	0.151	0.008	0.001	0	0.125	0	0	0.033	1.019	0.00	0.01	0.06	0.03	0.00	0.00	0.02	0.00	0.01	0.20		18C後半～	土壙E188	宅地5,6
612	棒状	*ColorlessW1*		3.534	*0*	*0.008*	*1.518*	*0.131*	*0.343*	*0.008*	*0.003*	*0.083*	*0.001*	*0*	*0*	*0.004*	*1.001*	0.00	0.01	0.09	0.23	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.66		18C後半～	土壙E204	宅地5,6
613	棒状	Colorless 2	ブルー黄	3.301	0	0.020	3.174	0.529	0.014	0.001	0	0.043	0.001	0	0	0.028	0.609	0.00	0.01	0.17	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		19C前半～中頃	土壙E293	宅地5,6
614	棒状	Blue navy	White有	3.040	0.001	0.113	7.061	0.369	0.013	0.001	0.331	0.196	0.055	0.040	0	0	0.811	0.00	0.02	0.05	0.00	0.05	0.03	0.01	0.00	0.00	0.11		18C末	石組土壙E345	宅地5,6
615	棒状	Green		3.526	0.002	0.034	3.189	0.508	0.037	0.003		0.325	0.355	0	0	0.033	0.49	0.00	0.01	0.16	0.01	0.00	0.10	0.11	0.00	0.01	0.15		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
616	棒状	Green		3.558	*0*	*0.039*	*3.805*	*0.227*	*0.111*	*0.010*	*0.020*	*0.223*	*0.937*	*0*	*0*	*0.050*	*0.528*	*0.00*	*0.01*	*0.06*	*0.03*	*0.01*	*0.06*	*0.25*	*0.00*	*0.01*	*0.14*		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
617	棒状	YelloW		3.776	0	0.039	2.375	0.177	0.117	0.006	0	1.12	0.017	0	0	0.016	0.611	0.00	0.02	0.07	0.05	0.00	0.47	0.01	0.00	0.01	0.26		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
618	棒状	Colorless 1		3.586	0	0.013	2.657	0.445	0.004	0	0	0.039	0.003	0	0	0.027	0.729	0.00	0.00	0.17	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.27		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
619	棒状	ColorlessW2		2.977	0	0.016	3.266	0.019	0.045	0.003	0	0.094	0.009	0	0	0.022	0.409	0.00	0.00	0.01	0.01	0.00	0.03	0.00	0.00	0.01	0.13		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
620	壺	Green		3.578	0	0.081	6.025	0.725	0.178	0	0.003	0.951	0.432	0	0	0.084	1.038	0.00	0.01	0.12	0.03	0.00	0.16	0.07	0.00	0.01	0.17		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
621	棒状	Colorless 2		3.587	0	0.017	3.916	0.204	0.082	0.007	0	0.043	0.008	0	0	0.026	0.659	0.00	0.00	0.05	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
622	棒状	Colorless 2		3.560	0	0.002	1.989	0.121	0.119	0.003	0.001	0.071	0.001	0	0	0.02	0.777	0.00	0.00	0.06	0.06	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01	0.39		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
623	棒状	Colorless 2		3.576	0	0.015	3.187	0.345	0.017	0	0	0.030	0.01	0	0	0.034	0.618	0.00	0.00	0.11	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
624	立体	Colorless 2		3.671	0	0	6.750	0.461	0.129	0.010	0.01	0.096	0.001	0	0	0.049	1.101	0.00	0.00	0.07	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.16		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
625	板	Colorless 1		3.552	0	0.027	4.840	0.798	0.012	0	0	0.056	0.016	0	0	0.059	1.092	0.00	0.01	0.16	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.23		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
626	棒状	Colorless 1		3.722	0.004	0.002	3.039	0.419	0	0	0	0.023	0.014	0	0	0.025	0.576	0.00	0.00	0.14	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
627	酒杯	Colorless 1	透明	3.577	0	0.007	3.514	1.151	0.008	0	0	0.040	0.001	0	0	0.071	1.104	0.00	0.00	0.33	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.02	0.31		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
628	小瓶口	Green	透明	3.568	0.008	0.035	5.568	0.826	0.029	0.003	0.001	0.672	0.957	0	0	0.056	0.952	0.00	0.01	0.15	0.01	0.00	0.12	0.17	0.00	0.01	0.17		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
629	チロリ蓋	Purple	透明	3.612	0	0.004	1.515	0.608	0.032	0.001	0.096	0.101	0.043	0.001	0	0.042	1.08	0.00	0.00	0.40	0.02	0.06	0.07	0.03	0.00	0.03	0.71		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
630	棒状	Purple	透明	3.676	0.002	0.015	6.326	0.402	0.024	0.017	0.211	0.234	0.021	0	0	0.054	0.958	0.00	0.00	0.06	0.00	0.03	0.04	0.00	0.00	0.01	0.15		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
631	小瓶口	Colorless 1	透明	3.624	0.002	0	3.354	0.915	0	0	0	0.032	0.023	0	0	0.064	1.017	0.00	0.00	0.27	0.00	0.00	0.01	0.01	0.00	0.02	0.30		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
632	棒状	Colorless 2		3.506	0	0.017	2.529	0.106	0.065	0.005	0	0.053	0.006	0	0	0.034	0.679	0.00	0.01	0.04	0.03	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.27		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
633	立体	Yellow		3.594	0	0.037	3.96	0.754	0.150	0	0	2.148	0.025	0	0	0.056	1.027	0.00	0.01	0.19	0.04	0.00	0.54	0.01	0.00	0.01	0.26		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
634	立体	Yellow		3.719	0	0.062	3.354	0.607	0.121	0	0	2.360	0.021	0	0	0.046	1.061	0.00	0.02	0.18	0.04	0.00	0.70	0.01	0.00	0.01	0.32		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
635	棒状	Colorless 2		3.521	0	0.027	6.520	0.189	0.066	0.002	0	0.079	0.004	0	0	0.052	0.900	0.00	0.00	0.03	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.14		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
636	立体	Colorless 1		3.525	0	0.002	1.538	0.326	0.021	0	0	0.044	0.009	0	0	0.011	0.778	0.00	0.00	0.21	0.01	0.00	0.03	0.01	0.00	0.01	0.51		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
637	酒杯	Colorless 1	透明	3.603	0	0	3.413	1.147	0.010	0	0	0.044	0.028	0	0	0.068	1.170	0.00	0.00	0.34	0.00	0.00	0.01	0.01	0.00	0.02	0.34		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
638	酒杯菊	Colorless 1		3.536	0	0.009	4.445	0.691	0.044	0	0	0.070	0.026	0	0	0.044	1.039	0.00	0.00	0.16	0.01	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.23		18C後半	井戸F1235	
639	棒状	ColorlessW1		3.334	0	0.062	2.036	0.145	0.416	0.011	0.003	0.092	0.001	0	0	0.003	0.817	0.00	0.03	0.07	0.20	0.00	0.05	0.00	0.00	0.00	0.40			F区撹乱	
640	棒状	Colorless 2		3.337	0	0.085	2.332	0.314	0.591	0.010	0.001	0.093	0.007	0	0	0.015	0.622	0.00	0.04	0.13	0.25	0.00	0.04	0.00	0.00	0.01	0.27			F区撹乱	
641	棒状	Colorless 2		3.226	0	0.024	2.189	0.509	0.347	0.094	0.018	0.036	0.003	0	0	0.024	0.486	0.00	0.01	0.23	0.16	0.01	0.02	0.00	0.00	0.01	0.22		19C前半～中頃	土壙F1145	宅地7
642	棒状	Colorless 2		3.361	0	0.024	2.373	0.290	0.193	0.005	0.001	0.036	0.001	0	0	0.015	0.574	0.00	0.01	0.12	0.08	0.00	0.02	0.00	0.00	0.01	0.24		19C前半～中頃	土壙F1145	宅地7
643	棒状	*Colorless 2*		3.355	*0*	*0.089*	*3.239*	*0.282*	*0.058*	*0*	*0*	*0.089*	*0.001*	*0*	*0*	*0.021*	*0.593*	*0.00*	*0.03*	*0.09*	*0.02*	*0.00*	*0.03*	*0.00*	*0.00*	*0.01*	*0.18*		18C前半～19C中頃	土壙F1195	宅地7
644	棒状	Colorless 1		3.576	0.004	0.014	2.991	0.205	0.005	0	0	0.018	0.001	0	0	0.012	0.503	0.00	0.00	0.07	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.17		19C前半～中頃	井戸F1280	宅地7
645	棒状	ColorlessW1		3.360	0	0.070	3.596	0.160	0.068	0.012	0.008	0.0116	0.001	0	0	0.008	0.491	0.00	0.02	0.04	0.02	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.14		19C前半～中頃	井戸F1280	宅地7
646	棒状	Colorless 1	Blue	3.395	0.004	0.010	3.825	0.274	0.035	0	0	0.036	0.014	0	0	0.021	0.734	0.00	0.00	0.07	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.19		19C	土壙F1284	宅地7
647	棒状	White	透明	3.189	0.003	0.062	4.640	*0.577*	0	0	*0.002*	*0.045*	*0.001*	*0*	*0*	*0*	*0.696*	*0.00*	*0.01*	*0.12*	*0.00*	*0.00*	*0.01*	*0.00*	*0.00*	*0.00*	*0.15*		18C前半～後半	土壙F1398	宅地5,6
648	棒状	ColorlessW1		3.507	0	0.000	1.131	0.086	0.360	0.010	0.018	0.038	0.002	0	0	0	1.001	0.00	0.00	0.08	0.32	0.02	0.03	0.00	0.00	0.00	0.89		18C前半～後半	土壙F1398	宅地5,6
649	棒状	ColorlessW1		3.540	0	0.024	1.763	0.120	0.247	0.007	0.013	0.026	0.001	0	0	0.004	0.683	0.00	0.01	0.07	0.14	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00	0.39		18C前半～後半	土壙F1398	宅地5,6
650	棒状	YelloW		3.861	0.004	0.058	2.910	0.924	0.047	0	0.000	1.305	0.073	0	0	0.051	1.088	0.00	0.02	0.32	0.02	0.00	0.45	0.03	0.00	0.02	0.37		19C前半	土壙F1400	宅地7
651	棒状	Colorless2		3.161	0.001	0.169	7.006	0.406	0.323	0		0.056	0.001	0	0	0.041	1.036	0.00	0.02	0.06	0.05	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.15		19C前半	土壙F1400	宅地7
652	棒状	Colorless 2		3.391	0	0.117	5.037	0.381	0.574	0.006	0.007	0.095	0.02	0	0	0.022	1.042	0.00	0.02	0.08	0.11	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.21		19C前半	土壙F1400	宅地7
653	棒状	Purple	透明。白有	2.430	0.002	0.220	5.183	2.770	1.414	0.045	0.508	0.503	0.079	0.031	0	0.160	0.019	0.00	0.04	0.53	0.27	0.10	0.10	0.02	0.00	0.03	0.00	カリガラス	19C前半	土壙F1400	宅地7
654	棒状	Blue		2.458	0.001	0.099	2.521	3.405	1.920	0.073	0.015	0.348	0.782	0.002	0	0.173	0.018	0.00	0.04	1.35	0.76	0.01	0.14	0.31	0.00	0.07	0.01	カリガラス	19C前半	土壙F1400	宅地7
655	棒状	Blue		3.168	0.004	0.224	5.13	0.583	0.377	0.003	0.004	0.083	0.337	0.001	0	0.033	0.605	0.00	0.04	0.11	0.07	0.00	0.02	0.07	0.00	0.01	0.12		19C前半	土壙F1400	宅地7
656	棒状	Blue		3.304	0.005	0.077	4.018	0.647	0.097	0	0	0.060	0.001	0	0	0.028	0.878	0.00	0.02	0.16	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.22		19C前半	土壙F1400	宅地7
657	チロリ蓋	ColorlessW		3.718	0	0.012	1.564	0.114	0.274	0.003	0.011	0.027	0	0	0	0.003	0.959	0.00	0.01	0.07	0.18	0.01	0.02	0.00	0.00	0.00	0.61			F区清掃中	
658	棒状	Purple		3.562	0	0.042	4.498	0.467	0.046	0.006	0.226	0.102	0.014	0.010	0	0.043	0.900	0.00	0.01	0.10	0.01	0.05	0.02	0.00	0.00	0.01	0.20			H区清掃中	

No.	形状	色	色系統	比重値	Na	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Co	As	Sn	Pb	Na/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	As/Si	Sn/Si	Pb/Si	ガラスの種類	時代	遺溝番号	公家屋敷名
659	棒状	Colorless 2		3.470	0	0.065	4.654	0.617	0.074	0.002	0.005	0.065	0.003	0	0	0.05	1.050	0.00	0.01	0.13	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.23			H区撹乱	
660	棒状	Colorless 2		3.382	0	0.063	6.576	0.491	0.063	0.002	0.003	0.05	0.019	0	0	0.049	1.135	0.00	0.01	0.07	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17			H区撹乱	
661	棒状	Colorless 1	透明	3.22	0.004	0	3.015	0.355	0.015	0	0	0.029	0.001	0	0	0.025	0.707	0.00	0.00	0.12	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.23			H区撹乱	
662	棒状	Colorless 1		3.357	0	0	2.584	0.391	0	0	0	0.010	0.001	0	0	0.019	0.590	0.00	0.00	0.15	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.23		19C中頃	土壙H1	宅地5,6
663	棒状	Green		3.866	0	0.079	3.312	0.135	0.396	0.012	0.001	0.72	0.204	0	0	0	0.97	0.00	0.02	0.04	0.12	0.00	0.22	0.06	0.00	0.00	0.29		19C中頃	土壙H1	宅地5,6
664	棒状	Colorless 2		3.328	0	0.033	3.516	0.293	0.068	0.002	0.004	0.033	0.001	0	0	0.023	0.728	0.00	0.01	0.08	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.21			H区撹乱	
665	棒状	Colorless 2		2.515	0.062	0.054	5.540	0.081	2.831	0.026	0.001	0.143	0	0	0	0.011	0	0.01	0.01	0.01	0.51	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス		H区撹乱	
666	チロリ蓋	ColorlessW		3.470	0.002	0	1.014	0.279	0.092	0	0	0.022	0.001	0	0	0.020	0.757	0.00	0.00	0.28	0.09	0.00	0.02	0.00	0.00	0.02	0.75		19C中頃	土壙H15	宅地5,6
667	立体	ColorlessW2		3.561	0	0.030	7.047	0.232	0.092	0	0	0.031	0.001	0	0	0.115	1.059	0.00	0.00	0.03	0.01	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.15		19C中頃	土壙H15	宅地5,6
668	棒状	Colorless 1		3.354	0.006	0.005	4.086	0.545	0	0	0	0.017	0.001	0	0	0.033	0.846	0.00	0.00	0.13	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.21		19C中頃	溝H31	宅地5,6
669	棒状	White	透明	2.500	0.001	0.191	4.435	1.167	1.183	0.027	0.002	0.122	0	0	0	0.071	0.001	0.00	0.04	0.26	0.27	0.00	0.03	0.00	0.00	0.02	0.00	カリガラス	19C中頃	溝H31	宅地5,6
670	棒状	Colorless2		3.687	0.002	0.030	2.844	0.430	0.009	0	0	0.048	0.021	0	0	0.025	0.602	0.00	0.01	0.15	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.21		19C中頃	溝H31	宅地5,6
671	棒状	ColorlessW1		3.705	0	0.029	1.849	0.958	0.326	0.002	0.002	0.256	0.008	0	0	0.642	0.904	0.00	0.02	0.52	0.18	0.00	0.14	0.00	0.00	0.35	0.49		19C中頃	井戸H25	宅地5,6
672	棒状	Purple	透明	3.343	0.008	0.044	5.621	0.022	0.045	0.024	0.085	0.54	0.042	0	0	0.007	0.745	0.00	0.01	0.00	0.01	0.02	0.10	0.01	0.00	0.00	0.13		19C中頃	井戸H25	宅地5,6
673	立体	ColorlessW2		3.640	0	0.005	1.395	0.747	0.018	0	0	0.065	0.033	0	0	0.033	1.041	0.00	0.00	0.54	0.01	0.00	0.05	0.02	0.00	0.02	0.75		19C中頃？	井戸H25	宅地5,6
674	立体	ColorlessW2		3.674	0	0.034	4.904	0.072	0.150	0	0.008	0.123	0.001	0	0	0.008	1.190	0.00	0.01	0.01	0.03	0.00	0.03	0.00	0.00	0.00	0.24		19C中頃？	井戸H25	宅地5,6
675	棒状	Green	Blue	3.494	0	0.108	6.65	0.609	0.219	0.008	0.008	0.676	0.944	0	0	0.063	0.94	0.00	0.02	0.09	0.03	0.00	0.10	0.14	0.00	0.01	0.14		19C中頃？	井戸H25	宅地5,6
676	棒状	White	透明	2.968	0	0.010	2.845	0.301	0.002	0	0.010	0.026	0.001	0	0	0	0.509	0.00	0.00	0.11	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.18			H区撹乱	
677	棒状	Colorless 2		3.407	0	0.008	3.212	0.289	0.03	0	0	0.039	0.001	0	0	0.011	0.705	0.00	0.00	0.09	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.22			H区撹乱	
678	棒状	Colorless 1		3.415	0.007	0.029	4.988	0.645	0.007	0	0	0.046	0.001	0	0	0.043	0.978	0.00	0.01	0.13	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.20			H区撹乱	
679	棒状	Colorless 2		3.900	0	0.026	3.576	0.242	0.262	0.006	0.001	0.046	0.013	0	0	0.014	0.750	0.00	0.01	0.07	0.07	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.21			H区掘下げ	
680	棒状	YelloW	透明	3.747	0.001	0	3.126	0.453	0.038	0.003	0.004	0.773	0.023	0	0	0.039	0.653	0.00	0.00	0.14	0.01	0.00	0.25	0.01	0.00	0.01	0.21			H区掘下げ	
681	棒状	Colorless 2		3.428	0.002	0.107	4.453	0.320	0.133	0.015	0.001	0.039	0.001	0	0	0.024	0.747	0.00	0.02	0.07	0.03	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17		19C前半～中頃	土壙H117	宅地5,6
682	棒状	Green		3.528	0	0.034	1.614	0.290	0.042	0.004	0	0.214	0.424	0	0	0.016	0.313	0.00	0.02	0.18	0.03	0.00	0.13	0.26	0.00	0.01	0.19		18C中頃～後半	穴蔵H97	宅地5,6
683	酒杯菊	ColorlessW2		3.511	0.006	0.003	4.272	0.753	0.026	0	0.001	0.044	0.016	0	0	0.04	1.021	0.00	0.00	0.18	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.24		18C中頃～後半	穴蔵H97	宅地5,6
684	酒杯菊	ColorlessW2		3.524	0.006	0	4.091	0.752	0.023	0	0	0.050	0.020	0	0	0.043	1.122	0.00	0.00	0.18	0.01	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.27		18C中頃～後半	穴蔵H97	宅地5,6
685	棒状	Colorless 2		3.724	0	0.025	4.214	0.254	0.091	0.005	0.001	0.047	0.009	0	0	0.016	0.733	0.00	0.01	0.06	0.02	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.17		19C前半？	土壙H137	宅地5,6
686	棒状	Colorless 1	透明	3.215	0.001	0.012	2.825	0.229	0.009	0	0.007	0.026	0.001	0	0	0.012	0.479	0.00	0.00	0.08	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.17		19C中頃	石組H20	宅地5,6
687	棒状	ColorlessW1		3.841	0	0.046	3.994	0.150	0.079	0.003	0.001	0.065	0.019	0	0	0.009	0.600	0.00	0.01	0.04	0.02	0.00	0.02	0.00	0.00	0.00	0.15		19C中頃	溝H220	宅地5,6
688	棒状	ColorlessW1		3.597	0	0.009	2.329	0.215	0.215	0.004	0.003	0.063	0.007	0	0	0.019	0.958	0.00	0.00	0.09	0.09	0.00	0.03	0.00	0.00	0.01	0.41		19C中頃	土壙H222	宅地5,6
689	立体	Green		3.542	0	0.161	5.959	0.685	0.291	0.003	0.003	1.044	1.057	0	0	0.058	1.003	0.00	0.03	0.11	0.05	0.00	0.18	0.18	0.00	0.01	0.17		19C中頃	土壙H222	宅地5,6
690	小瓶口	Green		3.587	0	0.001	0.286	0.092	0.011	0	0	0.100	0.118	0	0	0.007	0.130	0.00	0.00	0.32	0.04	0.00	0.35	0.41	0.00	0.02	0.45			H区清掃中	
691	徳利口	ColorlessW1		3.374	0	0.032	5.932	0.466	0.014	0	0	0.052	0.011	0	0	0.047	0.982	0.00	0.01	0.08	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.17			溝H500	
692	棒状	YelloW		3.967	0.001	0.037	3.346	0.394	0.098	0.009	0	1.742	0.023	0	0	0.025	1.060	0.00	0.01	0.12	0.03	0.00	0.52	0.01	0.00	0.01	0.32			H区清掃中	
693	棒状	Colorless 1	Blue	3.741	0.004	0.021	3.118	0.314	0.010	0	0	0.031	0.007	0	0	0.018	0.449	0.00	0.01	0.10	0.00	0.00	0.01	0.00	0.00	0.01	0.14			M区検出中	
694	棒状	YelloW	透明	3.804	0.001	0.035	2.634	0.317	0.063	0.002	0.002	0.507	0.012	0	0	0.023	0.541	0.00	0.01	0.12	0.02	0.00	0.19	0.00	0.00	0.01	0.21		18C前半～19C中頃	土壙M9	宅地3,4
695	棒状	Green		3.763	0	0.091	3.328	0.319	0.102	0.004	0.004	0.145	0.187	0	0	0.018	0.502	0.00	0.03	0.10	0.03	0.00	0.04	0.06	0.00	0.01	0.15		18C前半～19C中頃	土壙M9	宅地3,4
696	棒状	ColorlessW1		3.318	0.003	0.015	2.474	0.325	0	0	0	0.043	0.022	0	0	0.008	0.605	0.00	0.01	0.13	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.00	0.24		18C前半～19C中頃	土壙M9	宅地3,4
697	棒状	Green		3.607	0	0.090	4.404	0.160	0.200	0.009	0.001	0.455	0.575	0	0	0.015	0.636	0.00	0.02	0.04	0.05	0.00	0.10	0.13	0.00	0.00	0.14		18C後半以降	土壙M13	宅地3,4
698	棒状	Green	透明	3.682	0	0.024	2.513	0.215	0.010	0.002	0.004	0.049	0.128	0.001	0	0.01	0.322	0.00	0.01	0.09	0.00	0.00	0.02	0.05	0.00	0.00	0.13		18C後半以降	土壙M13	宅地3,4
699	棒状	Blue		2.496	0.014	0.252	4.463	2.711	1.491	0.054	0.009	0.316	0.469	0	0.001	0.136	0.006	0.00	0.06	0.61	0.33	0.00	0.07	0.11	0.00	0.03	0.00	カリガラス	18C後半以降	土壙M13	宅地3,4
700	立体	ColorlessW1	Green	3.759	0	0.005	0.601	0.031	0.027	0	0	0.008	0.002	0	0	0.003	0.116	0.00	0.01	0.05	0.04	0.00	0.01	0.00	0.00	0.00	0.19		18C後半以降	土壙M13	宅地3,4
701	ワインボトル	Dark Green		2.735	0.017	0.219	6.038	0.437	8.983	0.092	0.237	1.109	0.002	0	0	0	0.001	0.00	0.04	0.07	1.49	0.04	0.18	0.00	0.00	0.00	0.00	カリガラス	19C中頃	土壙H10	宅地5,6
702	切子	Colorless 1		3.368	0	0.043	4.239	0.452	0.066	0.002	0.037	0.039	0.001	0	0	0.033	1.076	0.00	0.01	0.11	0.02	0.01	0.01	0.00	0.00	0.01	0.25		19C前半～中頃	土壙A140	宅地3,4
703	切子	Colorless 1		3.435	0.004	0.026	4.560	0.565	0.022	0.002	0.025	0.032	0.001	0	0	0.022	1.048	0.00	0.01	0.12	0.00	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00	0.23		18C前半	土壙G60	二階町通
704	酒杯菊	Colorless 1		3.571	0.003	0	3.753	0.932	0.009	0.001	0	0.059	0.035	0	0	0.047	1.111	0.00	0.00	0.25	0.00	0.00	0.02	0.01	0.00	0.01	0.30			土壙C628	
705	小瓶	ColorlessW2		3.446	0.000	0.027	1.858	0.089	0.710	0	0.013	0.015	0.001	0	0	0	1.028	0.00	0.01	0.05	0.38	0.01	0.01	0.00	0.00	0.00	0.55		18C前半	土壙D227	二階町通
706	徳利口	Green		3.457	0.006	0.027	4.175	0.179	0.067	0.012	0	0.314	0.223	0	0	0.007	0.551	0.00	0.01	0.04	0.02	0.00	0.08	0.05	0.00	0.00	0.13		18C前半	土壙D446	二階町通
707	棒状	White	透明	3.572	0.007	0	1.106	0.769	0.269	0.006	0.003	0.095	0.001	0	0	0.012	0.853	0.01	0.00	0.70	0.24	0.00	0.09	0.00	0.00	0.01	0.77			G区検出中	
708	その他	Blue		3.712	0	0.004	0.804	0.728	0.014	0.003	0.006	0.095	0.379	0	0	0.023	0.924	0.00	0.00	0.91	0.02	0.01	0.12	0.47	0.00	0.03	1.15		17C中頃	G区清掃中	
709	根付玉	Green		2.479	0	0.030	1.566	2.506	1.371	0.036	0.007	1.891	0.513	0	0.001	0.120	0.002	0.00	0.02	1.60	0.88	0.00	1.21	0.33	0.00	0.08	0.00	カリガラス		A区断割り	
710	小瓶	Green	透明	3.639	0	0.029	4.754	1.134	0.011	0	0.001	0.558	0.814	0	0	0.077	1.041	0.00	0.01	0.24	0.00	0.00	0.12	0.17	0.00	0.02	0.22		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6
711	小瓶	Purple	透明	3.616	0.002	0.036	4.257	1.066	0.021	0.003	0.264	0.094	0.026	0	0	0.068	1.110	0.00	0.01	0.25	0.00	0.06	0.02	0.01	0.00	0.02	0.26		19C中頃	石組土壙F1386	宅地5,6

付章２　出土ガラス製品の化学分析

独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所　肥塚隆保

測定試料

分析試料は表131に示した。いずれの試料も見掛け上、風化しておらず保存状態は良好であるが、試料524の表面には風化によって生じた虹彩がみられた。また、試料461の表層には金箔を溶着したとみられる痕跡が、スリガラス状を呈する状態で残存していた。その他の試料は透明感が優れていた。

表131　分析試料一覧

分析番号	資料番号	調査区	色調	器種	図版番号
1	461	A区	無色透明（金箔）	瓶（ボトル）	587－9
2	524	H区	無色	瓶（デキャンター）、3と同一個体	587－36
3	524	H区	赤色	瓶（デキャンター）、2と同一個体	587－36
4	564	A区	無色	容器（角小鉢）	587－11
5	703	G区	無色	容器（皿）	587－8
6	556	A区	無色	容器	587－12
7	121	C区	黄色透明	簪	586－12
8	457	A区	濃青色透明	容器片	なし
9	250	D区	緑色透明	瓶	なし

分析方法

各試料の化学組成を調べるため、蛍光Ｘ線分析およびICP（誘導結合プラズマ発光分光分析）、AA（原子吸光分析法）によった。また、一部の試料については二次的な腐食生成物を調べるためＸ線回折法による測定を実施した。

まず、各試料の大まかな組成を調べるため、蛍光Ｘ線分析法（非破壊測定）により主要成分を同定した後、BCN、SG等の標準試料を使用してFP法において定量した。測定に使用した装置はＸ線分析顕微鏡（XGT-2000W：堀場製作所）および微少領域蛍光Ｘ線分析装置（TREX-650：テクノス）である。前者は大気中で試料を密着するためほとんど空気層が生じないように調整しており、後者は真空中での測定である。さらに精密な分析を行なうため、試料をICP、AA法により測定した。測定対象とした元素は、Na（ナトリウム）、Si（珪素）、Mg（マグネシウム）、Al（アルミニウム）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Fe（鉄）、Mn（マンガン）、Co（コバルト）、Cu（銅）、Zn（亜鉛）、Pb（鉛）、Sn（錫）に一部の試料についてはＢ（ホウ素）も加えた。なお、Na,K,PbについてはAA法により（564、703、121のPbについてはICP法）、それ以外はICP法によった。

なお、分析試料はダイヤモンドカッターで切断した後、表面をアセトンで洗浄して表面の汚染を取り除いた。各試料はタングステンカーバイト製ボールミルにて粉砕した。分析試料の調

整は、試料0.1gにホウ酸リチウム１ｇ（ホウ素分析用には炭酸ナトリウム）を加えて白金ルツボ内で高温融解した。冷却後、希塩酸溶液に溶融塩を溶解し、内標準溶液（Y/10mg）を加え、純水で100mlに希釈定容とし、ICP、AA法により定量した。なお、検量線溶液にはSPEX標準溶液の合成溶液とBCS、NBSの標準試料溶液を用いた。

分析結果

定量分析結果については、表132にまとめた。

表132　分析結果一覧表

分析番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
試料番号	461	524	524	564	703	556	121	457	250
SiO_2	77.6	63.5	62.5	44.3	45.9	72.8	38.8	63.7	63.4
Na_2O	5.21	10.5	9.60	0.17	0.14	14.2	0.17	11.2	11.8
CaO	6.03	0.15	0.18	0.06	0.04	6.72	0.04	15.4	9.69
K_2O	9.35	0.38	0.36	11.1	12.1	0.20	9.15	0.45	3.00
MgO	0.16	0.06	0.06	0.05	0.05	4.00	0.04	5.93	0.44
Al_2O_3	0.23	0.68	0.97	0.32	0.29	0.30	0.16	1.64	8.77
Fe_2O_3	0.08	0.32	0.37	0.10	0.10	0.05	2.07	0.44	1.40
B_2O_3	-	23.5	21.1	-	-	-	-	-	-
TiO_2	0.01	0.02	0.03	0.02	0.03	0.03	0.01	0.08	0.14
MnO	0.03	<0.01	<0.01	0.06	0.06	0.10	<0.01	0.02	0.77
CuO	0.01	0.02	0.70	0.01	0.01	<0.01	0.04	0.02	0.01
Co_3O_4	0.01	0.03	0.02	0.01	0.01	0.02	0.01	0.12	0.01
SnO_2	0.01	0.02	0.02	0.02	0.01	<0.01	0.01	0.03	0.01
PbO	<0.01	0.21	0.15	41.9	39.5	<0.01	46.6	0.03	<0.01
ZnO	0.03	0.02	0.02	0.04	0.07	0.02	0.45	0.01	0.01
P_2O_5	0.08	0.06	0.06	0.05	<0.01	0.02	0.02	<0.01	0.05
Total	98.84	99.47	96.14	98.21	98.31	98.46	97.57	99.07	99.50
(Na+K)	14.56	10.88	9.96	11.27	12.24	14.40	9.32	11.65	14.80
(Ca+Mg)	6.19	0.21	0.24	0.11	0.09	10.72	0.08	21.33	10.13
(Si+Al+Fe)	77.9	64.5	63.8	44.7	46.3	73.2	41.0	65.8	73.6
(Na/K)	0.56	27.63	26.67	0.02	0.01	71.00	0.02	24.89	3.93
(Ca/Mg)	37.69	2.50	3.00	1.20	0.80	1.68	1.00	2.60	22.02

－：測定せず、(Na＋K) $=Na_2O+K_2O$、(Ca＋Mg) $=CaO+MgO$、(Si＋Al＋Fe) $=SiO_2+Al_2O_3+Fe_2O_3$、(Na/K) $=Na_2O/K_2O$、(Ca/Mg) $=CaO/MgO$.

試料461は金箔を表面に張り合わせたガラスで、定量には本体部分の測定をおこなった。なお、蛍光Ｘ線分析では金箔を張り合わせたガラス表面（多数の凹凸が観察される）から多量の鉛と珪素が検出され、含有量はSiO_2：60％、PbO：40％前後で、数％のK_2Oが検出されたが、ベ

ースのガラスに含有するカリが励起され検出したものと考えられ、実際は２成分系の鉛ガラスが低融点のフラックスとして使用された可能性がある。

また、試料461、556、457からは砒素が検出され、それぞれ0.1％、0.04％、0.22％を示した。

今回調査したガラスはその化学組成から分類すると、アルカリ珪酸塩ガラスと鉛珪酸塩ガラス、ホウ珪酸ガラスに分類される。

アルカリ珪酸塩ガラスに相当するものは、試料461、556、457、250であるが、その組成は微妙に異なっている。試料461は酸化ナトリウムと酸化カリウムをフラックスとして用いた混合アルカリガラスで、試料556は典型的なソーダ石灰ガラスである。試料457もソーダ石灰ガラス系であるが、酸化カルシウムと酸化マグネシウム含有量が多く、試料250は酸化アルミニウムが多く、酸化カルツシウムもやや多い特徴を有するなど変化に富んでいる。鉛珪酸塩ガラスは試料564、703、121でいずれもカリウム鉛ガラス（$K_2O-PbO-SiO_2$系）であり、その組成は比較的まとまっており、酸化カリウムはほぼ10～12％、酸化鉛は40～47％である。また、前述した試料461の金箔表面のガラスはカリウム鉛ガラスではなく鉛ガラスである。試料524は表層部に薄い透明感のある赤色ガラスとベースの透明ガラスで成り立っており、分析したところ典型的なホウ珪酸ガラス（$Na_2O-B_2O_3-SiO_2$系）である。ホウ砂（$Na_2O/2B_2O_3/10H_2O$）を原料としたホウ珪酸ガラスがいつごろ出現するのか明確ではないが、13世紀頃につくられた可能性があるが、17世紀のヨーロッパではすでにその処方が知られていたので、少なくとも江戸時代には日本へ伝えられていた可能性がある。ただ、江戸時代のガラスの分析例が少ないので、時代的なものについては良くわからない。赤色の着色は分析番号３を見る限り銅のコロイドによっていると考えられる。

風化した表面のＸ線回折により、風化物を同定したが、その表面は非晶質な物質が形成しており、結晶性物質は検出されなかった（図89）。

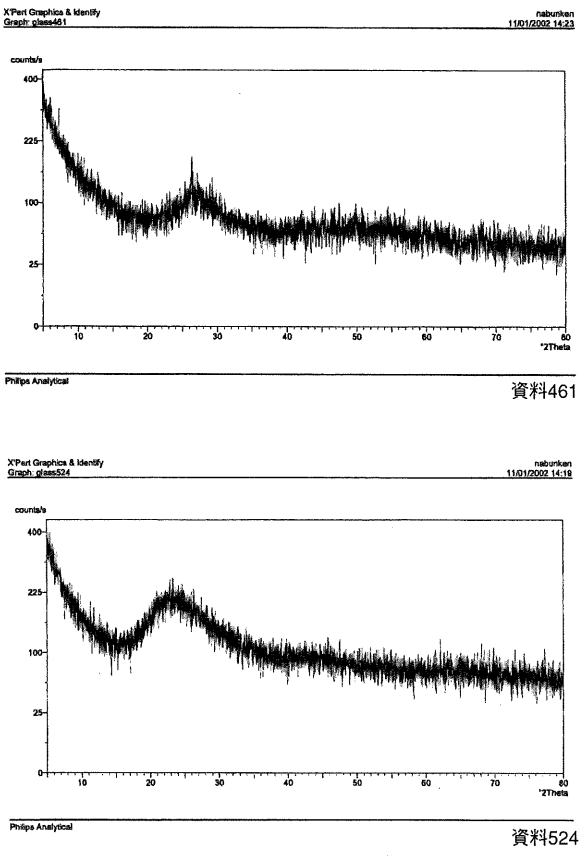


図89　表面に析出する風化生成物のＸ線回析図

付章３　出土漆器資料の材質と製作技法に関する調査

北野信彦（くらしき作陽大学）

１　はじめに

京都和風迎賓館施設埋蔵文化財発掘調査では、京都御所内における東方公家町関連の遺構や遺物が多数検出され、この中には漆器資料も含まれている。

今回（財）京都市埋蔵文化財研究所の御厚意により、これらの材質と製作技法について文化財科学的な調査を行なう機会を得た。本報では、この調査結果を報告するとともに、そこから派生する幾つかの諸問題についても言及する。

２　出土漆器資料の調査

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり、挽き物・板物の形態にする『木胎製作』の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、蒔絵・漆絵などの加飾や研磨作業を行なう『漆工』の工程からなっている。本報では、これら個々の出土漆器資料の生産技術面を調査する方法として、まず各資料の形態、漆塗り面の状況を表面観察した後、（１）漆膜面の塗り構造の分類、（２）漆絵や蒔絵の加飾技法、（３）赤色系漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析、などの項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行なった。以下、その調査方法と調査結果を記す。

１．調査方法

（１）漆膜面の塗り構造の分類

まず肉眼で個々の漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に１mm×３mm程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトGY1251JP、ハードナHY837）に包埋した後、断面を研磨して薄層プレパラートに仕上げた。その上で、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態などについて金属顕微鏡および生物顕微鏡による落射および透過観察を行なった。

（２）漆絵や蒔絵の加飾技法

肉眼で漆絵や蒔絵加飾の状態を観察した後、実体顕微鏡および金属顕微鏡を用いて、【１】色漆の使用顔料や蒔絵粉の粒型と粒度、【２】色漆や蒔絵粉の接着度合や劣化の状態、に関する細部の観察を行なった。

（３）赤色系漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

赤色系漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉に関する定性分析は、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、走査電子顕微鏡（日立製作所Ｓ－415型）に、エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー:堀場製作所EMAX－2000型）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒とした。

また、微量成分の検出には、あらかじめ分析用カーボンテープに固定した分析試料を、（株）

堀場製作所MESA－500型の蛍光Ｘ線分析装置に設置して、電子線（Ｘ線）を照射し、特性Ｘ線を検出した。測定条件は以下の通りである。分析設定時間：600秒、　試料室内は真空状態、Ｘ線管電圧：15kVおよび50kV、電流：240uAおよび20uA、検出強度：50.000cps、定量補正法：スタンダードレス。

２．調査結果

今回調査を行なった漆器資料は、東方公家町関連の各屋敷跡の遺構から検出された漆器破片29点である。これらには蒔絵や梨子地加飾が施された資料や赤色漆で家紋や漆絵が加飾された資料も幾例か含まれているが、いずれも埋蔵環境の影響からか木胎部が残存しておらず、漆塗り膜面のみの資料群であった。個々の漆器の器型は、文箱などの箱物や膳破片などの板物類、椀や酒盃などの飲食器類にそれぞれ相当しようが、何分漆器の残存状況が極めて不良であるため、一部の箱物や椀類を除き不明であった。なお、それぞれの年代観は、出土状況と共伴遺物の検討から、近世初頭期・江戸時代前期・江戸時代中期・江戸時代後期から幕末期と、近世全般におよぶ。以下各項目別の調査結果を述べる（表133）。

表133　漆器分析結果一覧表

No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考
				内	外	文様	内	外	内	外	文様	
1	膜面のみ			黒	黒	外－絵－赤	Ⅱ	Ⅰ	ベンガラ		ベンガラ	
2	膜面のみ			赤	黒		Ⅴ	Ⅴ	朱+ベンガラ			
3	器物			赤	黒	外－絵－赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
4	椀型			赤	黒	外－紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		朱	
5	椀型			赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ			
6	膜面のみ			赤	赤		Ⅶ+Ⅴ	Ⅶ+Ⅴ	朱	朱		
7	膜面のみ			茶	-		Ⅰ	－	朱+ベンガラ			
8	椀型			赤	赤		Ⅴ	Ⅴ	朱	朱		
9	椀型			赤	黒	外－紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ			
10	膜面のみ			金	金		Ⅵ	Ⅵ	Au	Au		金箔
11	文箱			黒	黒	外－紋－金蒔絵・梨子他	Ⅶ	Ⅷ			Au・朱	布着補強
12	膜面のみ			黒	黒		Ⅴ	Ⅴ				
13	板物			赤	赤		Ⅴ	Ⅴ	朱	朱		
14	杓子			赤	黒	外－絵－金蒔絵	Ⅶ	Ⅷ	朱		Au・朱	布着補強
15	板物			黒	黒	外－絵－金梨子他	Ⅶ	Ⅷ			Au・朱	
16	膜面のみ			赤	黒		Ⅴ	Ⅴ	朱+ベンガラ			
17	膜面のみ			赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ			
18	膜面のみ			黒	黒		Ⅴ	Ⅴ				
19	膜面のみ			赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ			
20	膜面のみ			赤	黒	外－紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ	
21	膜面のみ			赤	黒	外－紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ	
22	膜面のみ			赤	黒	外－紋－赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ	
23	膜面のみ			赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ			
24	膜面のみ			赤	黒	外－絵－金梨子他	Ⅶ	Ⅷ	朱		Au+ベンガラ	
25	器物			黒	黒	外－絵－金蒔絵	Ⅶ	Ⅷ			Au・朱	布着補強
26	椀型			赤	赤		Ⅴ	Ⅴ	朱	朱		
27	膜面のみ			赤	-		Ⅴ	－	朱+ベンガラ		朱	
28	膜面のみ			黒	黒		Ⅴ	Ⅴ			朱	
29	器物			赤	黒	外－紋－金蒔絵梨子他・	Ⅶ	Ⅷ	朱		Au・Au+Ag・朱	菊・五三桐文様

（１）漆膜面の塗り構造の分類

漆器表面の漆塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋などの漆絵文様を地外面に描く資料、さらには蒔絵や梨子地加飾などのきわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に、各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出だされない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の２種類に分けられた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することにより、前者を炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると認識した[1)]。地の漆塗り層は、１層塗りから３層塗りまで確認され、漆絵や家紋などの加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた（図90）。本漆器資料のなかには炭粉下地に上塗り漆を一層塗布するような、廉価な材質と簡便な塗り構造からなる一般的な日用漆器の範疇に属する資料もあるが、その一方では、明らかな塗り直し補修の痕跡や堅牢性を重視したサビ下地に布着せ補強を施すなどの多層塗り構造を有する資料、蒔絵や梨子地などの高度な加飾技法を有する優品資料（図95）も含まれており、品質の多様性が見出された[2)]。

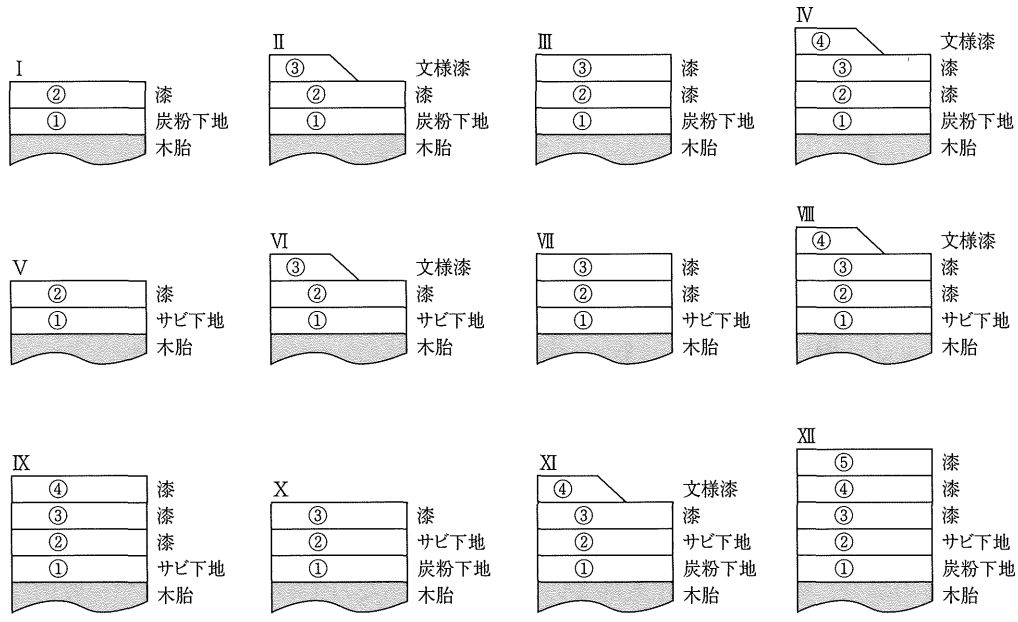


図90　漆塗り構造の分類

（２）赤色系漆の性質

赤色系漆の使用顔料の定性分析と顕微鏡観察を行なった結果、それぞれベンガラ（酸化第二鉄Fe_2O_3）、朱（水銀朱HgS）、朱とベンガラの両者の混合、の三種類の異なる顔料を用いた赤色系漆であると理解した（図91）。ベンガラ・朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の色漆顔料としては、幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、江戸時代中期以降は人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となるようである[3)]。

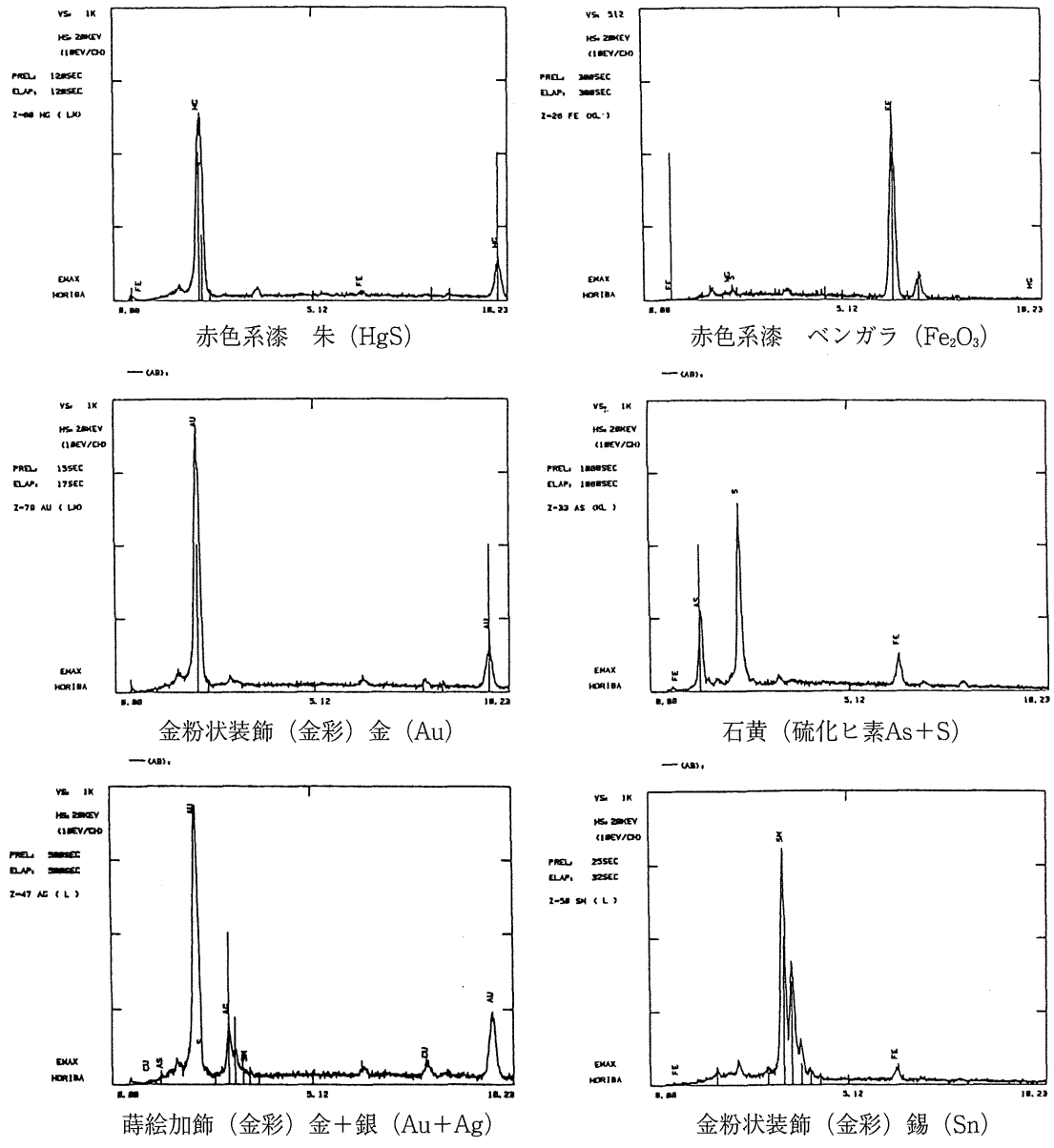


図91　赤色系漆および蒔絵材料の電子線マイクロアナライザー（EPMA）の分析結果

本漆器資料の場合、朱の使用が比較的多いことが特徴となっているが、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ資料には朱を、また地内面にはベンガラを地外面の家紋などの加飾部分のみに朱を使用するなど、明らかな朱・ベンガラの使い分け事例も見出された。

（３）蒔絵および梨子地粉の材質・技法

表面観察において金粉もしくは金箔によるとみられる菊や五三桐などの御紋、各種絵柄の蒔絵もしくは梨子地技法による加飾部分の定性分析を行なった結果、１点を除きいずれもAu（金）の使用が確認された。そして、蒔絵粉や梨子地粉の粒度や粒形態はそれぞれ異なっており、いずれもベンガラ漆の下絵漆の上に蒔かれ、梨子地粉の場合は梨子地漆を上塗りした上で一部研ぎ出しが行なわれていた（図94）。すなわちこれらには高度な加飾技術が用いられていることが

わかった。

報告者によるこれまでの一般的な消費地遺跡出土漆器における蒔絵材料の調査では、金（Au）自体を使用した蒔絵や梨子地加飾漆器の占有率は数％程度と少なく、基本的には金の場合でも金と銀の合金である青金（Au+Ag）、もしくは銀（Ag）や錫（Sn）、石黄（As_2S_3）などの代用金蒔絵粉材料が使用されている場合が大半である（図91）。この背景としては、江戸期の各種文献史料に記述される、漆器に蒔絵や梨子地などの加飾を施すこと自体、寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたことや、これら金・銀・錫などの材質別の蒔絵漆器に明確な価格差が存在したことなどが大きく関係していよう[4]。

この点を考慮に入れてみると、本漆器資料の場合、１点を除きいずれも金が使用されていたことは、大きな特徴の一つといえよう。

3　考察

以上、前章では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、京都御苑内の東方公家屋敷跡出土の漆器資料は、漆塗り技法・赤色漆の使用顔料ともに炭粉下地・ベンガラ漆や赤褐色系上塗り漆を一層塗布するだけの簡便なつくりの一般的で廉価な日常什器資料から、サビ下地とともに布着せ補強を施し、朱漆や金蒔絵・金梨子地などの高度な加飾技法を有するなどの優品資料に至るまで、幾つかのランク別のグループに分類された。次にこれらの全体的な傾向を把握するため、最も一般的な９つの材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出してそれぞれの比率を総出現数の中で集計した[5]。その結果、本漆器資料は、実用に即した生活什器類である飲食器類を中心としているものの、優品資料の占有比率が他の性格の異なる近世遺跡出土の一括漆器資料群と比較して、やや優勢であるという傾向が認められた（図92）。

このような漆器資料のグループ毎の違いは、文化的背景を含むそれぞれの漆器資料の製作年代（年代観）、これら什器を使用し、さらには投棄した使用階層の社会的・経済的背景（生活様式）、地域性、什器類の使用目的や方法、さらには個々の漆器生産地の製作技術の違い、さらにはゴミ処理や投棄に際しての何らかの事情など、さまざまな条件が反映されたものであろうが、本漆器資料群の場合、近世公家社会における生活什器としての漆器資料であるという意味合いがある[6]。それでは、天皇や公家らを中心とした近世公家社会において、宮中（禁裏）ではどのような飲食器などの生活什器類が使用されていたのであろうか。限定された幾つかの文献史料や口承資料、さらには各門跡寺院などに歴代天皇が御下賜された伝世品資料などによると、日常生活什器としての飲食器類には皇室ゆかりの菊十六花弁や有職故実である公家模様などを呉須であしらった肥前磁器碗が中心であったとされるもの[7]、実体には不明な点が多い[8]。とりわけ近世公家社会における生活什器としての漆器資料の性格についてはこれまでほとんど検証されておらず、本漆器資料はその点でも重要な資料群であるといえよう[9]。

今後の課題は、まずは各漆器資料の器型分類との照合を行なうこと。そのうえで陶磁器類を

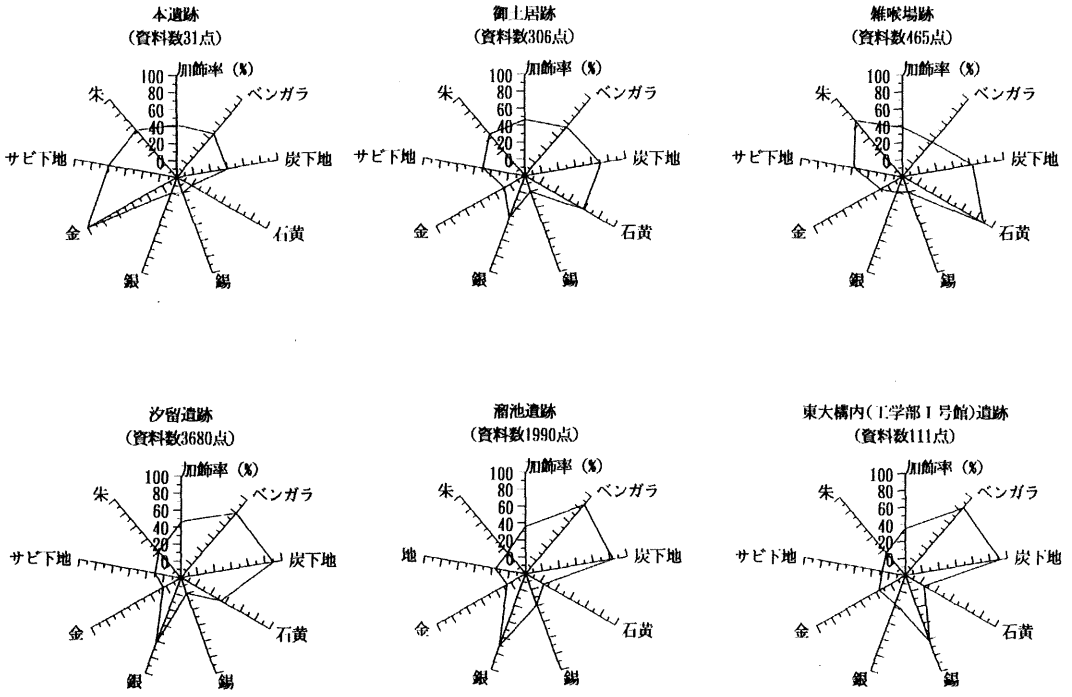


図92　本遺跡をはじめとする各近世遺跡一括出土漆器の組成（集計例）

はじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことが、本漆器資料の性格を的確に理解する上で必要なことであると考える。

謝辞

本調査を行なうにあたり、(財）京都市埋蔵文化財研究所の鈴木久男・長宗繁一・平方幸雄・永田信一氏はじめとする多くの方々には、資料調査などで大変お世話になりました。厚く謝意を表します。

註

1）サビ下地を用いた漆器の生産自体は、『延喜式』の黒漆技法をみるまでもなく、その歴史は古い。しかしその生産体制が地方の漆器生産地においても普及・一般化するのは、漆器の需要とそれに伴なう漆器生産量が増大化した江戸時代後期～幕末期以降のようである。この状況を知る事例として、近世輪島塗の台頭や、炭粉下地による廉価な日用漆器の生産では奥州会津，近江日野とともに三大生産地の一つといわれていた紀州黒江生産地へのサビ下地（堅地物）技術の導入などがあげられよう。なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわなどに混ぜて用いる泥下地（堅下地・本下地より堅牢性に欠ける）の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。

北野信彦（1993）「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点Ⅰ－文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として－」『古文化財之科学第38号』Ｐ65－79、古文化財科学研究会

2）このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の１つに、新潟県糸魚川市大所の小椋丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器椀の製作技法に関する口承資料がある。それによると［上品］布着せ補強（椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆）の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。［下品］炭粉下地（柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地）～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆）。［中品］下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編（1974）『木地師の習俗　民俗資料選集２』　国土地理協会

また、寛延四年（1751）の『名古屋諸色直段集，寛延四未年小買物諸色直段帳』には、漆器の黒漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蝋色塗（上品）：常溜塗（中品）：常拭漆塗（下品）の相対価格差は、約51：3.4：１と算定される。

3）江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんどみられない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差がみられ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野信彦（2000）「朱・ベンガラ　項目」『日本民俗大辞典（下巻）』福田アジオ編、吉川弘文館

4）江戸時代前期から徐々に定着化しつつあった雛道具類について、享保20年（1735）の尾張名古屋城下町の町衆に対する禁令には、「一、同諸道具、梨子地ハ勿論、蒔絵無用ニ可仕候、上之道具たりとも、黒塗ニ可仕候。（名古屋叢書第三巻）」という記述がみられる。又、武家社会内部でも、万治３年（1660）の紀州徳川家（御家中祝言道具達）では、藩士のランクを１万石から200石までの８段階に分け、道具揃や仕様を細かく規定している。その上で漆器である貝桶は2400石以下の者には調達が認められておらず、諸道具の蒔絵仕上げも同様に許されていない（南紀徳川史法令制度第四）。また、伊勢菰野藩土方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、約18：６：１と算定される。いずれの事例からも生産技術面（ここでは材質や製作技法）の違いにより、漆器には明確な価格差が存在したことが理解される。

北野信彦・肥塚隆保（2000）「近世出土蒔絵漆器の材質・技法に関する調査」『考古学と自然科学

日本文化財科学会誌　第38号』P.67－92、日本文化財科学会

５）分析結果の集計方法

個々の漆器資料からもっとも一般的な９つの材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総個体数の中で計算する。この結果をレーダーチャート方式で図化するものである。（集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・スズ（Sn）粉・石黄（As_2S_3）粉などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴をとり、それと相対する左側には、朱・サビ下地・金（Au）粉などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもスズ・石黄と金のほぼ中間に位置すると考えられる銀（Ag）粉の占有比率（%）をそれぞれ配置した。

６）北野信彦（1993）「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民具』Ｐ.81－101、日本民具学会編　雄山閣出版

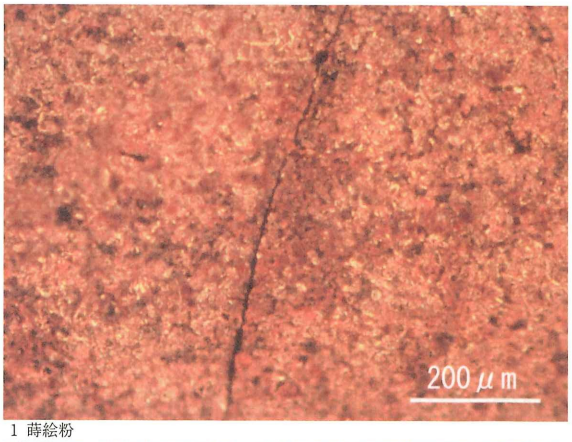
北野信彦（2000）「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学第９号』Ｐ５－24、日本考古学協会、吉川弘文館、など参照されたい。

７）伊万里の磁器商前川家の明和年（1788）「雛形注文帖」には各種有職故実文様のデザイン雛形が掲載されており、御所へ納められた肥前磁器の様子がある程度具体的に理解される。

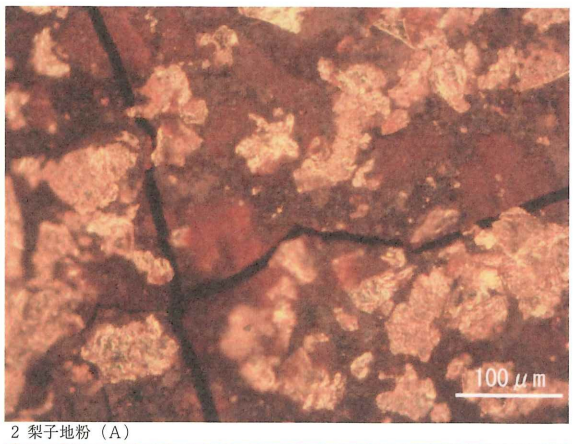
８）装束召具方として幕末の禁裏に出仕した一条摂政家侍の下橋敬長は、御所内の様子を詳細な口述記録として残しているが、このなかで孝明天皇の日常の飲食器は「お三方の上に載せたまことに綺麗な御膳（お茶碗）」であったと述べる。この伝承資料の解説者である羽倉敬尚氏は、この記述に関連して、「ご飯・お汁の器などは全部白地の陶器で、花びら十六枚の菊の模様が青色の呉須であしらってあり、多くは京の東山清水焼だったようである。」との補足説明を加えている。また、宮中で供される食事に関連しては「御上・摂家・親王・大臣以下六位以上は茶碗（磁器碗）七位以下無位無官は皆椀（漆器椀）、非蔵人は無位無官でも六位扱いで茶碗（磁器碗）、有位有官の武家でも口向侍として出仕する場合は皆椀（漆器椀）」膳についても「御上・摂家・親王・大臣は白木三方、以下は白木の平付」という規定があったとする。

下橋敬長・羽倉敬尚（注釈）『幕末の宮廷』、東洋文庫353　平凡社刊

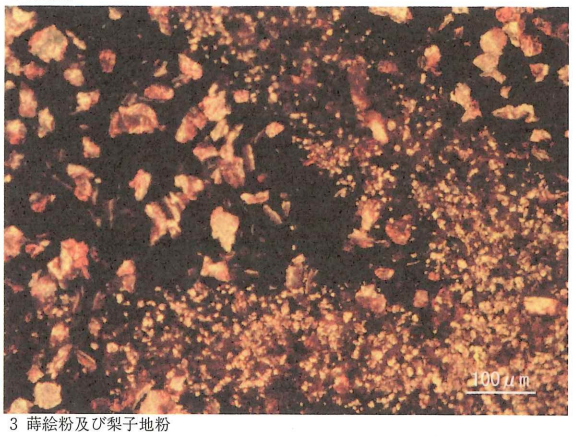
９）近世公家社会における飲食器などの生活什器としての漆器の使用について、江戸時代後期の光格天皇の食生活の様子を記述した津田宗仙の文化５年（1808）『禁裏御膳式目』には、「御飲食　弐汁七菜之年中御祝日ハ三汁九菜之　常ハ弐汁七菜之　御飲食ハ二汁五菜なり　右　壱弐木ぐりの御三宝御茶碗ハいまり物之　尚　御茶碗一ヶ月限　毎月朔日ニ替リ申候　毎月御精進日　其節御かけばん（懸盤）になしの（梨子地）の御茶わんなり」という記述がある。また、幕末期の三條家における食生活を中心とした年中行事を記録した安政２年（1855）「三條家奥向恒例年中行事」にも「あかの御膳、朱の小重（重箱）、御硯蓋」などの漆器の使用が詳細な図柄入りで記録されている。こら文献史料からは、近世公家社会内部においても漆器椀の使用は少ないとされるものの、若干ながら存在したことが管見される。



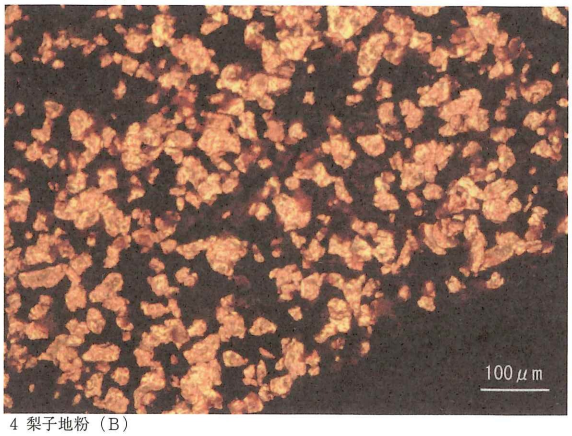
1 蒔絵粉



2 梨子地粉（A）

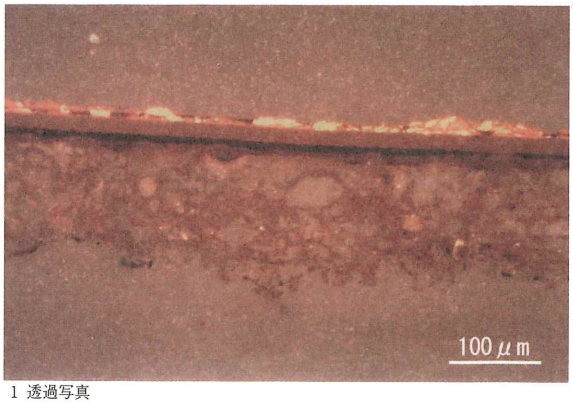


3 蒔絵粉及び梨子地粉



4 梨子地粉（B）

図93　各種蒔絵及び梨子地加飾の粉形態



1 透過写真

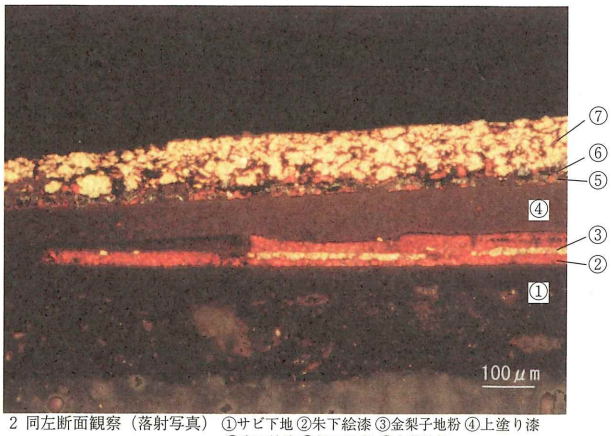


2 偏光落射写真

図94　蒔絵及び梨子地加飾の断面観察



1 蒔絵及び梨子地加飾の粉形態



2 同左断面観察（落射写真）　①サビ下地 ②朱下絵漆 ③金梨子地粉 ④上塗り漆 ⑤朱下絵漆 ⑥銀下地粉 ⑦金蒔絵粉

図95　十六花弁菊御紋の蒔絵及び梨子地加飾の一例

付章４　動物遺存体の分析

岡山理科大学理学部　富岡直人

１　分析資料

京都市御所周辺遺跡は、京都市埋蔵文化財研究所によって調査・発掘が実施され、中世から近世に属する遺構から数多くの動物遺存体が検出された。本報告は、この資料群について岡山理科大学富岡研究室とくらしき作陽大学北野信彦研究室が分析した結果を富岡が代表して記すものである。

多くの資料は、保存が良好で色調の変化は見られなかった。この状況を検討するために、柳原家区画内にあった土壙180（18世紀後半の所属年代と推定されている）で検出された骨格１－１の動物遺存体群に多量に付着していたアッシュを含む乾燥土壌約100mlを２つ採集し、そのpHを常法に則って測定したところ、7.53と7.60の数値が得られた。このようにpH８に近い値の土壌は、骨格の主体であるリン酸カルシウムと、貝殻の主体である炭酸カルシウムの保存に良好な条件といえる。他の遺構についての計測は出来ていないが、同様にアッシュが含まれている例が見られていることから、pH８前後の動物遺存体の保存に適した環境であった可能性が高いと考えられる。

２　出土動物遺存体の特徴

京都市御所関連遺跡出土動物遺存体資料を分類・同定し、個体数算定を行なうとともに、常法によって計測し、実体顕微鏡、生物顕微鏡、微小部測定用レーザー変位計で観察・測定し、解体痕跡の分析、死亡年齢の推定を実施した。

表134　分析した動物遺存体群の帰属遺構と年代

Tab.1　List of animal remains group belonging to archaeological feature

土壙Ｆ1476	宅地７（櫛笥家）	17世紀代
土壙Ｆ1244	宅地７（櫛笥家）	17世紀後半上限ごみ穴
土壙Ｅ235	宅地６（柳原家）	17世紀後半ごみ穴
土壙Ｅ180	宅地５・６（柳原家）	18世紀後半ごみ穴
土壙Ｅ260	宅地５・６（柳原家）	18世紀中頃ごみ穴

表135　京都御所関連遺跡出土動物遺存体種名表

Tab.2　List of the animal remains from Gosho site, Kyoto city

腔腸動物門	Coelenterata	マダカアワビ	*Haliotis* (*Nordotis*) *madaka* Habe
花虫綱	Anthozoa	クロアワビ	*Haliotis* (*Nordotis*) *discus discus*
イシサンゴ目	Scleractinia		Reeve
軟体動物門	Mollusca	リュウテンサザエ科	Turbinidae
腹足綱	Gastropoda	サザエ	*Batillus conutus* (Lightfoot)
オキナエビスガイ目	Archaeogastropoda	バイ目	Neogastropoda
ミミガイ科	Haliotidae	エゾバイ科	Buccinidae
アワビ属	*Haliotis* sp. indet.	バイ	*Babylonia japonica* (Reeve)

テングニシ科	Melongenidae
テングニシ	*Hemifusus tuba* (Gmelin)
アクキガイ科	Muricidae
アカニシ	*Rapana venosa venosa* (Valenciennes)
ニナ目	Mesogastropoda
スズメガイ科	Hipponicidae
キクスズメガイ	*Sabia conica* (Schumacher)
斧足綱	Bivalvia
ウグイスガイ目	Pteriomorphia
フネガイ科	Arcidae
アカガイ	*Scapharca broughtonii* (Schrenck)
イタボガキ科	Ostreidae
マガキ	*Crassostrea gigas* (Thunberg)
イワガキ	*Crassostrea nippona* (Seki)
シジミガイ科	Corbiculidae
マシジミ	*Corbicula* (*Corbiculina*) *leana* Prime
イシガイ目	Unionoida
イシガイ科	Unionidae
イシガイ	*Unio* (*Nodularia*) *douglasiae nipponensis* Martens
ハマグリ目	Heterodonta
マルスダレガイ科	Veneridae
ハマグリ	*Meretrix lusoria* (Rödding)
チョウセンハマグリ	*Meretrix lamarcki* Deshayes
節足動物門	Arthropoda
甲殻綱	Crustacea
完胸目	Thoracica
フジツボ科	Balanidae
脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
ニシン目	Clupeiformes
カタクチイワシ科	Engraulididae
カタクチイワシ	*Engraulis japonicas* (Houttuyn)
ウナギ目	Angulliformes
ハモ科	Muraenesocidae
ハモ属	*Muraenesox* sp. indet.
タラ目	Gadiformes
タラ科	Gadidae
マダラ	*Gadus macrocephalus* Tilesius
コイ目	Cypriniformes
コイ科	Cyprinidae
コイ	*Cyprinus carpio* Linnaeus
スズキ目	Perciformes
タイ科	Sparidae
マダイ	*Pagrus major* (Temminck et Schlegel)
キダイ	*Dentex tumifrons* (Temminck et Schlegel)
チダイ	*Evynnis japonica* Tanaka
アマダイ科	Branchiostegidae
アマダイ属	*Branchiostegus* sp. indet.
サバ科	Scombridae
カマス科	Sphyraenidae
カマス属	*Sphyraena* sp. indet.
ボラ科	Mugilidae gen. et sp. indet.
ボラ属	*Mugil cephalus cephalus* Linnaeus
アジ科	Carangidae gen. et sp. indet.
ブリ	*Seriola quinqueradiata* Temminck et Schlegel
カサゴ目	Scorpaeniformes
コチ科	Platycephaliae
コチ属	*Platycephalus* sp. indet.
ダツ目	Beloniformes
トビウオ科	Exocoetidae
トビウオ	*Cypselurus agoo agoo* (Temminck et Schlegel)
カレイ目	Pleuronectiformes
ヒラメ科	paralichthyidae
ヒラメ	*Paralichthys olivaceus* (Temminck et Schlegel)
両生綱	Amphibia
カエル目	Anura
鳥　綱	Aves
キジ目	Galliformes
キジ科	Phasianidae
キジ属	*Phasianidus* sp. indet.
ニワトリ	*Gallus gallus domesticus* Brisson
ガンカモ目	Anseriformes
ガンカモ科	Anatidae
マガン	*Anser albifrons* (Scopoli)
カモ類Aタイプ	wild ducks A type
カモ類Cタイプ	wild ducks C type
カモ類Eタイプ	wild ducks E type
哺乳綱	Mammalia
ウシ目	Artiodactyla
ウシ科	Bovidae
ウシ	*Bos taurus domesticus* Gmelin
ウマ目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	*Equus caballus* Linnaeus

検出された動物遺存体は、京都市埋蔵文化財研究所と岡山理科大学、くらしき作陽大学によって選別・分類された。これらのうち綱目科属種の分類が明らかになったものについて、標準和名を表136に掲げる。＊は算定部位が出土しなかったもののそれ以外の破片が出土した場合付している。さらに地点別出土量を表136に掲げる。

表136　動物遺存体出土量表（最小個体数）　List of numbers of Animal remains (MNI)

調査区	遺構名	所属	年代	花虫綱	腹足綱							斧足綱								
				イシサンゴ目	サザエ		アカニシ	テングニシ	ミミガイ科		その他	アカガイ	シジミガイ科		マルスダレガイ科			イタボガキ科		その他
				殻質	最小個体数	蓋 完形	最小個体数	最小個体数	最小個体数	その他		最小個体数	マシジミ 最小個体数	シジミ属種不明 最小個体数	ハマグリ 最小個体数	チョウセンハマグリ 最小個体数	種不明 最小個体数	マガキ 最小個体数	種不明 最小個体数	
H	土壙 H33	宅地3・4（園）	17～18c初				1							8						
F	土壙 F2050	宅地7（櫛笥）	16～17c初	*									1							
F	土壙 F1265	宅地7（櫛笥）	18c末～19c				5		*			1				1				イワガキ4
F	土壙 F1145	宅地7（櫛笥）	19c		*							2								
F	石組井戸 F946	宅地7（櫛笥）	19c中				1								1					
E	溝 E50	宅地5・6（柳原）	19c中																	
E	土壙 E235	宅地6（柳原）	17c後半		3		1		*											目不明*
H	穴蔵 H97	宅地5・6（柳原）	18c後半		1	1		*		クロアワビ1	目不明*	3	23	種不明1 ヤマトシジミ?1	8	1	ハマグリ属1			
E	土壙 E260	宅地5・6（柳原）	18c中		1			*							1					
E	土壙 E260 上層 −30cm	宅地5・6（柳原）	18c後半						*			*					ハマグリ属*			
E	土壙 E260 セクション西側	宅地5・6（柳原）	18c中		1			1				2			1		ハマグリ属*			
E	土壙 E260	宅地5・6（柳原）	18c後半		*							*								
H	土壙 H100	宅地6（柳原）	18c後半		5	3			1		バイ*	1	5	1	33	1		1		
H	土壙 H99	宅地5・6（柳原）	17～18c初		*	2		3	1		バイ*	9	57		11					
H	石組 H5	宅地5・6（柳原）	19c中							マダカアワビ1					12					
E	土壙 E180	宅地5・6（柳原）	18c後半										2							イシガイ1
F	土壙 F1360	宅地5・6（柳原）	18c前半																	
F	土壙 F1360 セクション下層	宅地5・6（柳原）	18c初頭																	
F	穴蔵 F1475	宅地6（柳原）	17c後半																	
E	土壙 E311	宅地6（柳原）	17c末																	
H	土壙 E317	宅地5・6（柳原）	18c中																	
F	土壙 F1400 −A	宅地5・6（柳原）	19c																	
E	土壙E 316	宅地6（柳原）	17c前半																	

＊は算定部位以外の破片が出土していることを示す。

硬骨魚綱																																		鳥綱			哺乳綱
タイ科				ハモ科				スズキ科					アジ科				サバ科				ニシン目				その他	ガンカモ科	キジ科	その他	
マダイ	種不明			その他	ハモ属			その他	スズキ				その他																						キジ科		
最小個体数	腹椎M	尾椎M			最小個体数	腹椎M	尾椎M		最小個体数	腹椎M	尾椎M	椎骨M		最小個体数	腹椎M	尾椎M	その他	最小個体数	腹椎M	尾椎M	その他	最小個体数	腹椎M	尾椎M	その他			キジ属		
																	1																			
																									目不明1 腹椎1										
1		1																							目不明1										
			タイ科 1																																	
1			タイ科 1					1																													
4	22	34	チダイ 1 タイ科 1	2		1					1	スズキ科1	2	5	5	楯鱗 1								カタクチイワシ1	目不明2 腹椎3 尾椎7 椎骨3	カモA タイプ 1		目不明 1	
4	1	2	キダイ 1 タイ科 1	1				1								ブリ 尾椎 1									マダラ1 尾椎5 目不明1 腹椎2 鱗 複数					
3	1		アマダイ 1 キダイ 1		1	1																		ニシン目 腹椎 1 イワシ尾椎 2	カマス属2 コイ科1 腹椎1 コイ1 尾椎2 コチ属1 マダラ1 腹椎3 目不明2 腹椎1 尾椎1				目不明 1
2																									コイ科1 マダラ1 目不明1	カモB タイプ1 カモC タイプ2 マガン タイプ1		目不明 1 アオサギ 2	
5			タイ科 1 尾椎 6	2												ブリ 尾椎 2									コチ属 尾椎1 ボラ属1 マダラ1 目不明2 腹椎1	カモC タイプ1 マガン タイプ1	キジ属 1 ニワトリ 1	目不明 1	
3	1	1	タイ科 1																																	
																									マダラ1 目不明1	カモA タイプ 1		目不明 1	ニホンジカ 1	
																																			ウマ 1	

1）　腔腸動物門　　Coelent
　　花虫綱　　Anthozoa
　　イシサンゴ目　　Scleractinia

花虫綱の中でも、イシサンゴ目に分類されるサンゴ類である。出土資料は、外表面の規則的な彫刻状の模様が美しいタイプで通称菊目石とよばれるものの一種であり、西日本に多く分布するキクメイシ科の可能性があるが特定しかねた。今後詳細な検討によって種までの分類は可能であろう。資料は、脆弱で小破片となっているが、本来は一つの個体であった可能性がある。この種のサンゴ類は、江戸遺跡（近世）、岡山県岡山市岡山城跡（近世）、岡山市天瀬遺跡（近世）、長崎市出島遺跡（近世）で発見されており、観賞用の置物や漢方薬、防湿剤に用いられた可能性が指摘されている。

2）　軟体動物門　　Mollusca
　　腹足綱　　Gastropoda
　　オキナエビスガイ目　　Archaeogastropoda
　　ミミガイ科　　Haliotidae
　　アワビ属　　*Haliotis* sp. indet.

アワビ属が検出された。種が特定されたものは、マダカアワビ *Haliotis* (*Nordotis*) *madaka* Habeとクロアワビ *Haliotis* (*Nordotis*) *discus discus* Reeveであった。マダカアワビは外洋岩礁底群集で10～50mの水深に生息する。クロアワビは岩礁底群集で、潮間帯から25m程度の水深に生息する。

　　リュウテンサザエ科　　Turbinidae
　　サザエ　　*Batillus conutus* (Lightfoot)

有棘タイプと無棘タイプの両方が検出されている。内湾～外海岩礁底潮間帯群集に属する種であるが、特に有棘タイプは外洋に多い傾向が知られている。このことは、御所関連遺跡には、複数の底質の地域からサザエがもたらされたことをうかがわせる。

　　バイ目　　Neogastropoda
　　エゾバイ科　　Buccinidae
　　バイ　　*Babylonia japonica* (Reeve)

水深10～20mの内湾～半外海泥底群集に属する。

　　テングニシ科　　Melongenidae
　　テングニシ　　*Hemifusus tuba* (Gmelin)

水深10～30m程度の半外海砂泥底に生息する。非常に大型の個体が検出されている。殻ごと火にかけて調理した可能性も考えられるが、明確に熱によって変色したり殻を破損した例は見られなかった。これはアカニシやサザエでもほぼ同様であった。

　　アクキガイ科　　Muricidae

アカニシ　*Rapana venosa venosa* (Valenciennes)

内湾砂泥底群集に属し、水深10～20mに生息する。非常に大型の個体が検出されている。

ニナ目　Mesogastropoda
スズメガイ科　Hipponicidae
キクスズメガイ　*Sabia conica* (Schumacher)

アワビ類やサザエ、レイシガイ等の殻表に強く付着し、生息する小型腹足綱で、積極的に食用に利用されることはないと予想される。

斧足綱　Bivalvia

外洋に面する沿岸から内湾奥部と河口域とにいたる岩礁生息種・砂礫底・砂底・泥底に生息する斧足綱が数多く検出された。淡水域に生息する種も稀に検出された。

ウグイスガイ目　Pteriomorphia
フネガイ科　Arcidae
アカガイ　*Scapharca broughtonii* (Schrenck)

大型のアカガイが検出された。内湾泥底域群集に属し、水深10～50mに生息する。中～近世に広く食用とされていた貝種で、大坂をはじめ、瀬戸内海沿岸でも出土例は多い。

イタボガキ科　Ostreidae

左殻を底質に付着させて生息する。種が特定できたものはマガキとイワガキであった。

マガキ　*Crassostrea gigas* (Thunberg)

内湾奥部砂泥底～岩礁部の潮間帯に生息する。広く食用とされる貝種である。

イワガキ　*Crassostrea nippona* (Seki)

潮間帯下の岩礁底に生息する。春夏に旬を持ち、マガキの旬とずれることが知られている。

シジミガイ科　Corbiculidae

ヤマトシジミの可能性のある個体も見られたものの、種が特定できたものはマシジミであった。

マシジミ　*Corbicula* (*Corbiculina*) *leana* Prime

河川や池沼の砂底、砂礫底に生息する。

イシガイ目　Unionoida
イシガイ科　Unionidae
イシガイ　*Unio* (*Nodularia*) *douglasiae nipponensis* Martens

淡水の河川や池沼に生息する。わずか一点のみが土壙E180（柳原家18世紀後半頃）より検出された。淡水に生息することから、河川付近の土砂が遺構覆土となった場合は混入する可能性が考えられ、食料残滓か判別は困難となる。前側歯と主歯が失われており、カタハガイやタテボシガイの可能性も考えられるが、貝殻の形状よりイシガイと同定した。

ハマグリ目　Heterodonta
マルスダレガイ科　Veneridae
ハマグリ　*Meretrix lusoria* (Rödding)

内湾奥部砂泥底群集で潮間帯に生息する。御所関連遺跡で最も多く出土した斧足綱である。ハマグリについては貝殻の形態分析と貝殻成長線分析を実施した。

【貝殻形態】

貝殻の形態は、殻長 (shell length)、殻高 (shell height)、殻厚 (shell depth) の三カ所を計測し分析した。貝類は同種であっても微妙な形態の差異を生じることが知られており、その原因には底質や系統の相違が予想される。今回分析を行なった資料では、殻長の変位が最も大きいことが判明した。これは殻長方向に貝殻の形態が変異が大きく、入手先の底質が多様であったことをうかがわせる結果である。

【貝殻成長線分析】

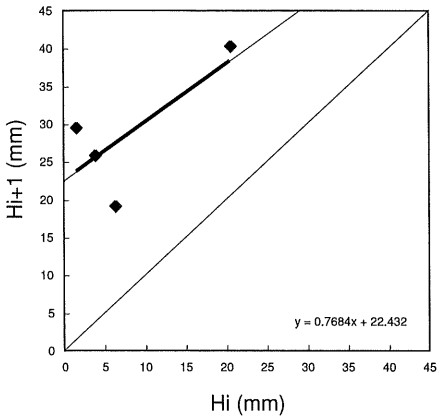
ハマグリの採集季節分析は、結果が得られた資料が数少なかったので、17世紀から18世紀の結果をまとめて記載する。詳細は表137に示す。資料数が確保できなかった理由は、風化や破損が原因であり、エッチングの程度の調整に難渋したことが影響している。今後丁寧にプレパラート製作に取り組み直せば、データが増加する可能性が残されている。貝殻成長線分析では、死亡直前とその前年の冬輪が確認できると、測定の信頼度が増加する。今回の分析では、信頼度が高いデータは４点のみであった。まず、春前半の２月27日、夏前半の５月28日、夏後半の７月１日、冬前半の11月28日が推定された。さらに前年の冬輪が確認できず、測定値が参考値に止まるものとしては、春前半の３月28日、春後半の４月21日、夏前半の６月５日、夏後半の７月17日、冬後半の12月29日が推定されている。以上を総合すると、ほぼ通年捕獲されていたものが遺跡には搬入されていたが、春から夏にかけての件数がやや多かった可能性がある。

ハマグリの成長速度は、Walfordの定差図においてy=0.7684x＋22.432の一次方程式が算出され、小池（1982）が算出した、現生の福岡県博多湾奈多海岸（1935年採集）のハマグリのy=0.60x+20.31や、有明海熊本県緑川産ハマグリのy=0.64x+22.60や縄文時代後期の熊本県松橋

表137　出土ハマグリの貝殻成長線分析結果

所属年代・時代	地点	登録番号	殻頂x座標	殻頂y座標	1年目x	1年目y	1年目殻高	2年目x	2年目y	2年目殻高	最終冬輪中心～死亡日までの日成長線数	死亡推定日
18世紀前半	宅地7（櫛笥家）	KYO SK747 L3	125.50	23.00	134.40	4.40	20.62	160.00	2.20	40.29	13	2月27日
17世紀末～18世紀初頭	宅地5・6（柳原家）	KYO 貝1-7 R22	131.00	4.60	144.90	19.70	20.52				42	参考値 3月28日
17世紀末～18世紀初頭	宅地5・6（柳原家）	KYO貝1-7 R14	135.50	3.40	155.50	24.50	29.07				66	参考値 4月21日
16後半～17世紀初頭	宅地7（櫛笥家）	KYO貝1-1 L12	140.80	13.80	141.10	7.40	6.41	156.00	2.30	19.06	103	5月28日
16後半～17世紀初頭	宅地7（櫛笥家）	KYO貝1-1 R5	131.20	5.50	157.50	22.50	31.32				111	参考値 6月5日
17世紀後半	宅地10（ぜんち院）	KYO SK928 R3	133.00	4.30	130.40	7.20	3.89	149.90	23.80	25.80	137	7月1日
17世紀～18世紀初頭	宅地4（園家）	KYO貝1-5 2係貝1 L5	134.50	19.20	143.40	4.20	17.44				153	参考値 7月17日
17世紀後半	宅地10（ぜんち院）	KYO SK928 R4	133.30	5.30	132.80	6.80	1.58	156.30	23.70	29.45	287	11月28日
18世紀前半	宅地23（今城家）	KYO SK676 L1	130.60	21.80	136.90	6.00	17.01				318	参考値 12月29日

表138　京都御所関連遺跡出土ハマグリ
Walfordの定差図



大野貝塚出土ハマグリのy=0.74x+19.25の結果に近く、初期成長や成熟期以降も緩慢に成長を続け、大型化できる特徴を示している。以上から、良好な生息地点から採集されたことが推定されるが、日本海側か大平洋側や瀬戸内海で捕獲されたものか、特定は困難であった。

貝殻成長線パターンを観察したところ、満潮時に形成された成長増量が幅広く、成長線が弱い不鮮明帯が形成される個体が数多く観察された。これは、太平洋側より潮汐の運動が穏やかな日本海側や太平洋側でも水深が深い地点に生息する個体にみられる特徴であり、今後現生標本の分析を経て慎重に峻別を図りたい。

チョウセンハマグリ　*Meretrix lamarcki* Deshayes

外洋性砂底群集に属する。破片になるとハマグリに似るので、峻別が出来ない個体はハマグリ属として集計した。出土は18世紀後半と18世紀末～19世紀の遺構からのみであった。

節足動物門　Arthropoda
甲殻綱　Crustacea
フジツボ科　Balanidae

岩礁や海から突き出た構造物等に多生する。食用にされることもあるが、キクスズメガイのように、他の食用動物に付着して、遺跡にもたらされた可能性が考えられる。

3）　脊椎動物門　Verte
硬骨魚綱　Osteichthyes

御所遺跡からは海水～淡水性の魚類が検出された。大型の魚類では、タラ科マダラがあげられる。特に、日本海側で中近世に捕獲されていたサケ科やトゲウオ科が検出されるか注目していたが、一切検出されなかった。

ニシン目　Clupeiformes
カタクチイワシ科　Engraulididae

カタクチイワシ *Engraulis japonicas* (Houttuyn) の可能性のある尾椎が検出された。カタクチイワシであれば、沿岸部の表層を遊泳し、日本全域で捕獲が可能な魚種である。

ハモ科　Muraenesocidae
ハモ属　*Muraenesox* sp. indet.

ハモ *M.cinereus*、スズハモ *M.bagio*のいずれかであると考えられる。水深100m以浅に生息する。現在でも京都の食材を代表する魚類の一つであるが、御所関連遺跡でも大量の出土を見た。特に前頭骨に明確な切創がほぼ決まった部分に見られ、料理方法が定式化して行なわれて

いたことをうかがわせる。

タラ目　Gadiformes
　タラ科　Gadidae
　　マダラ　*Gadus macrocephalus* Tilesius

大陸棚および大陸棚斜面域に主に遊泳し、北緯34度以北に生息するとされる（中坊編1993）、比較的北寄りに分布を持つ魚類である。近隣地域としては日本海側からもたらされた可能性が高いと考えられる。

コイ目　Cypriniformes
　コイ科　Cyprinidae
　　コイ　*Cyprinus carpio* Linnaeus

河川の中下流域や湖沼の中底層に生息する。日本料理の代表的な食材の一つである。

スズキ目　Perciformes
　タイ科　Sparidae

マダイ、キダイ、チダイが検出された。一方で、瀬戸内海沿岸地域で時代を通じて大量に消費されているクロダイは一切検出されていない。

　　マダイ　*Pagrus major* (Temminck et Schlegel)

北海道以南の水深30～200mの海水域の岩礁底、砂礫、砂底の底層に生息する。御所関連遺跡で最も多く出土した魚類であり、遺跡を性格づける食材とも評価できる。

　　キダイ　*Dentex tumifrons* (Temminck et Schlegel)

南日本の大陸棚縁辺域に遊泳する。遺跡周辺では瀬戸内海、太平洋岸で漁獲されたものがもたらされた可能性が考えられる。

　　チダイ　*Evynnis japonica* Tanaka

北海道南部以南の大陸棚上の岩礁、砂礫底、砂底に遊泳する。

　アマダイ科　Branchiostegidae
　　アマダイ属　*Branchiostegus* sp. indet.

水深30～300mの泥底～砂底に生息する。シロアマダイ、ハナアマダイ、アカアマダイ、キアマダイの可能性が考えられる。

　サバ科　Scombridae

サバ属 *Scomber*（マサバは沿岸表層群遊性、日本列島近海。ゴマサバは沿岸表層群遊性、北海道南部以南）、ソウダガツオ属 *Auxis*（ヒラソウダは沿岸表層遊泳性、南日本。マルソウダは沿岸表層群遊性、南日本）、ハガツオ属 *Sarda*（沿岸表層群遊性、南日本）、イソマグロ属 *Gymnosarda*（沿岸表層群遊性、南日本）、スマ属 *Euthynnus*（沿岸表層性、南日本）、カツオ属 *Katsuwonus*（沿岸表層群遊性、日本近海（日本海には稀））、マグロ属 *Thunnus*（ビンナガとキハダとメバチは外洋表層性、日本近海（日本海には稀）。クロマグロは外洋表層性、日本近海。コシナガは外洋表層性、南日本。）、カマスサワラ属 *Acanthocybium*（表層遊泳性、南日本）、サワラ属 *Scomberomorus*（ウシサワラは沿岸表

層性、時には河へ入る、南日本。ヨコシマサワラは沿岸表層群遊性、南日本。サワラとタイワンサワラとヒラサワラは沿岸表層性、南日本。）が含まれる可能性が考えられる。

カマス科　Sphyraenidae
　カマス属　*Sphyraena* sp. indet.

オニカマス *S.barracuda*（内湾やサンゴ礁域の浅所、南日本）、アカカマス *C.pinguis*（沿岸浅所、琉球列島を除く南日本）、ヤマトカマス *S.japonica*（沿岸浅所、南日本）、が含まれる可能性がある。

ボラ科　Mugilidae gen. et sp. indet.

ワニグチボラ属 *Oedalechilus*（沿岸浅所、千葉県以南）、フウライボラ属 *Crenimugil*（珊瑚礁域の浅所、千葉県以南）、オニボラ属 *Ellochelon*（沿岸浅所、河川汽水域.和歌山県以南）、ボラ属 *Mugil*（沿岸浅所、河川汽水域、北海道以南）、メナダ属 *Chelon*（セスジボラは内湾浅所、河川汽水域、北海道～琉球列島。メナダは内湾浅所、河川汽水域、九州～北海道。コボラは沿岸浅所、河川汽水域～淡水域、千葉県以南。）、タイワンメナダ属 *Moolgarda*（タイワンメナダは沿岸浅所、河川汽水域、和歌山県以南。ナンヨウボラは内湾浅所、河川汽水域、東京湾以南。）が含まれる可能性が考えられる。海水～汽水域に生息する。

アジ科　Carangidae gen. et sp. indet.
　ブリ　*Seriola quinqueradiata* Temminck et Schlegel

琉球列島を除く日本各地の沿岸中・下層に遊泳する。わずかに検出された。

カサゴ目　Scorpaeniformes
　コチ科　Platycephaliae
　　コチ属　*Platycephalus* sp. indet.

本州中部以南に分布し、深さ2～50mの砂泥底に生息する。

ダツ目　Beloniformes
　トビウオ科　Exocoetidae
　　トビウオ　*Cypselurus agoo agoo* (Temminck et Schlegel)

南日本に生息し、表層を遊泳することが多い。

カレイ目　Pleuronectiformes
　ヒラメ科　paralichthyidae
　　ヒラメ　*Paralichthys olivaceus* (Temminck et Schlegel)

千島列島以南の水深10～200mの砂底に遊泳することが多い。

両生綱　Amphibia
　カエル目　Anura

河川池沼や湿地に生息する。遺構中に混入した可能性が考えられ、食用としたのかは不明である。

鳥綱　Aves
　キジ目　Galliformes

キジ科　Phasianidae
キジ属　*Phasianidus* sp. indet.

陸上の山野に生息する。キジ、ヤマドリの可能性が考えられる。

ニワトリ　*Gallus gallus domesticus* Brisson

家禽として飼育されていた個体である。時告鳥として食用は憚られた可能性があるが、出土資料には切断や肉を削ぎ切るような作業の際に残されやすい切創が多くみられ、加工処理がなされていたことは確実である。

ガンカモ目　Anseriformes
ガンカモ科　Anatidae

水域に飛来する渡鳥あるいは留鳥である。体格から、マガン、マガモやカルガモ程度の大きさであるカモ類Ａタイプ wild ducks A type、カモ類Ｃタイプ wild ducks C type、コガモ程度の大きさであるカモ類Ｅタイプ wild ducks E typeに分類している。

哺乳綱　Mammalia
偶蹄目（ウシ目）　Artiodactyla
ウシ科　Bovidae
ウシ　*Bos taurus domesticus* Gmelin

骨１－２で検出された。いわゆる在来和牛の特徴を持つ小型のウシであった。Dlaタイプの切創がみられ、加工処理されていたことが明確である。

大腿骨のSDは33.60mmであり、西中川（1989）と比較すると現生口之島産の個体程度の体格である体高115cmと推定され、比較的小型の在来牛と考えられる。

ウマ目　Perissodactyla
ウマ科　Equidae
ウシ　*Equuscaballus* Linnaeus

骨１－６から上顎臼歯（図98）、骨２－17から下顎臼歯が検出された。骨１－６から検出されたものはGreatest palatal breadthが124.43mmで、第２前臼歯～第４前臼歯の歯冠長が92.24mmであり、御崎馬の雄のやや大型サイズと同程度と推定された。一方、第１後臼歯～第３後臼歯の歯冠長は74.56mmであり、御崎馬の雌程度という値が導かれ、現生御崎馬の頭蓋と比較すると、異なるバランスの頭蓋構成であることが推定される。

３　考察

今次の調査で検出された御所関連遺跡資料の多くは、土壙より検出され、溝からはそれほど多く検出されることはなかった。多くの土壙は食料残滓とともに、食具や生活用具を伴なっており、この地点の日常生活で生じた生活残滓を、手近に設けた廃棄坑に集めたものと理解される。

動物遺存体を出土した土壙は、その共伴遺物の特徴から大きくは二群に分けられる。

表139　主要動物遺存体に基づく土壙の分類

Tab.4　List of pits' classification based on Major Animal Remains

分類名	内容	土壙番号
1類	貝類の出土量が多いもの。	F1476（17c代、宅地7（櫛笥家））、F1244（17c後半、宅地7（櫛笥家）） F1364（19c前半、宅地5・6（柳原家））
2類	魚類の出土量が多いもの。	F235（17c後半、宅地6（柳原家））、E180（18c後半、宅地5・6（柳原家）） E260（18c中頃、宅地5・6（柳原家））

現在までの集計では、貝類が多量に出土する土壙からはハモ属の様な夏を代表する魚類の検出は少ない。これは、土壙内の廃棄物が季節的に廃棄されていた可能性をうかがわせる。つまり、表139に示した1類は春や秋、2類は夏に廃棄された可能性が高い。ただし、この所見は今後、貝殻成長線分析等により変更が生じる可能性があることを付言する。

溝から出土した動物遺存体は、ハマグリとアカニシのみであったので、その特徴の違いは明確に把握できなかった。岡山城では、溝出土動物遺存体では、切創のみられる率が若干低いことが特徴として指摘されており、今後研究事例が増加すれば、京都市内の遺跡でも生活残滓の質的相違が指摘できるかもしれない。

現在、日本各地の同時期の生活残滓は、城郭とその周辺から出土する資料が中心に研究されており、公家をはじめとする京域の上級階層の生活残滓や一般市民の生活残滓の研究は進んでいない。このため比較には制限があるが、その範囲内でも他遺跡の残滓群と共通点と相違点が指摘できることが判明した。

まず、同時期の城郭関連遺跡との共通点として、魚貝類をベースとした食料残滓が多く発見される点をあげることができる。切創や破損痕跡、出土の様相からみて、出土動物遺存体の多くは当該地域の住民への食用に供されたものが中心であろうが、一部は屋敷で飼育されていた可能性のある動物、例えばイヌやワシタカ類への餌用として消費されたものかもしれない。

一方で相違点は、手工業産品と考えられる、骨角製品の端（はした）や未製品、完成品の出土量が、御所関連遺跡で極めて少ない点である。今回の発掘資料では、用途不明のニホンジカ鹿角製品とサンゴ類がこれにあたる。これは、この地域における骨角製品生産や生産物の消費が低調であったことを示すものと予想される。しかし、この予想は、今後の周辺遺跡の精査を通して証明されるべき課題ともいえるであろう。

また、相違点とは言い切れないものの、特徴としては、温暖な瀬戸内海、大平洋岸側と寒冷な日本海側の海産物を多数入手し、活用している可能性が高い点である。当時は極めて贅沢な食生活であったのではないかと予想される。

紙幅の制限から詳細な属性表の掲載ができなかった。データは京都市埋蔵文化財研究所に保管してあることを付言しておく。

謝辞

京都市埋蔵文化財調査研究所の各位とくらしき作陽大学の北野信彦先生には資料の提供とと

図96　貝類（集合写真）



１～３ 花虫綱 サンゴ類、４～６ 腹足綱（４：アカニシ、５：テングニシ、６：サザエ（有棘タイプ））、７～10 斧足綱（７：イワガキ L、８：アカガイ R、９：マシジミ R、10：イシガイ L）

［S：32.5%］

図97　魚・獣骨類（集合写真）



１～14 魚上綱 硬骨魚綱（１：マダイ 上後頭骨 骨幹部、２：マダイ 前頭骨 R 外側、３：マダイ 主上顎骨 R 完形、４：マダイ 角骨 R 完形、５：タイ科 前上顎骨 R 完形（上位一部欠損）、６・７：マダイ 主鰓蓋骨 R 前位+骨幹部、８～10：マダイ 歯骨 L（８：完形（前後位一部欠損）９：完形（下位一部欠損）10：完形）、11：スズキ 腹椎 椎体、12：ボラ属 主鰓蓋骨 L 完形（上位一部欠損）、13：ボラ属 第１椎骨 椎体、14：カマス属 腹椎 椎体）、15・16：哺乳綱（15：ウシ 大腿骨 L 遠位端+骨幹部、16：ニホンジカ角 LR？小枝角幹部）、17・18：鳥綱（カモ B タイプ 上腕部 R 完形、18：ニワトリ 脛骨 R 近位端+骨幹部）

［S：46.5%］

赤字は破損パターンを示す。

図98　ウマ上顎臼歯



哺乳綱 ウマ ＬＲ 上顎臼歯
歯冠部上面（手前が右側）
［S：33.5%］

規則性の高い創傷：ヒトによる加工の可能性		
Aタイプ　切断（対象を完全に切断している切創：cut mark）		a　溝面が平滑あるいはゆるやかなカーブ（含：刃こぼれの傷）切創・切削痕跡：cut or scrape mark
Bタイプ　切創（5mm以上の深さ）	1　線状に伸びた痕跡	b　溝片面が破断打撃叩切痕跡：chop or huck mark
Cタイプ　切創（1～5mm以上の深さ）	2　刺突状に止まった痕跡	c　断面に多数の平行線状痕跡鋸引痕跡：saw mark
Dタイプ　切創（1未満の深さ）	3　水平様に刃器を滑らせた痕跡	
規則性の低い創傷：動物による損壊の可能性		
局部的かつ集中的にクレーター状や断面半円の孔・溝を生じる→イヌ等食肉目の噛痕→**イヌ噛痕** 二条の溝が一対になり、局部的に損壊される→ゲッ歯目の噛痕→**ネズミ噛痕** （日本の多くの遺跡の場合は大きさからネズミ類と考えられる）		

もに様々な御教示御援助を頂いた。また、分析と資料抽出にあたっては　岡山理科大学宮本葵さん、藤原圭子さん、塩谷勇一郎君、太田謙君、上岡真帆さん、谷村彩さん、くらしき作陽大学北野信彦研究室の土手由佳里さん、甲美鶴さん、諸屋千津子さん、山田麻千子さんに御助力頂いた。さらに、東北大学文学部考古学研究室須藤　隆先生、奈良国立文化財研究所松井章先生に比較標本の提供と御助言、御教示を頂いた。記して感謝の意を表します。

参考文献

阿部　永他　1994　『日本の哺乳類』（東海大学出版局）
阿部宗明　1987　『原色魚類大図鑑』（北隆館）
今泉吉典、岡田弥一郎　1983『学研生物図鑑　動物』（学研）
内田　亨　1979　『新編日本動物図鑑』（北隆館
内田　亨他　1972　『谷津・内田　動物分類名辞典』（中山書店）
内田　亨　1979　『新編日本動物図鑑』（北隆館）
大泰司紀之　1980　「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』13：pp.51－74
大泰司紀之　1983　「シカ」『縄文文化の研究 2 生業』：pp.122－135
岡田　要（校閲）今泉吉典（著）　1960『原色日本哺乳類図鑑』（保育社）

岡田　要、内田清之助、内田　亨　1965『新日本動物図鑑』下（北隆館）
金子浩昌、牛沢百合子　1980「池上遺跡出土の動物遺存体」『池上・四ツ池遺跡』
第６分冊・自然遺物編：pp.９－32
金子浩昌 1984　『貝塚の獣骨の知識　人と動物とのかかわり』考古学シリーズ⑩（東京美術）
金子浩昌 1995　「津寺遺跡出土の動物遺体」『津寺遺跡２　山陽自動車道建設に伴う発掘調査』
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98：pp.597－604
金子浩昌 1996　「津寺遺跡中屋調査区出土のウマ遺骸」
『津寺遺跡３　山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104：pp.282－285
蒲原稔治 1966　『標準原色図鑑全集　第４巻　魚』（保育社）
紀平　肇 1990　『琵琶湖淀川　淡水貝類』（たたら書房）
小池裕子、大泰司紀之 1984「遺跡出土ニホンシカの齢構成からみた狩猟圧の時代変化」
『古文化財の自然科学的研究』：pp.508－517
小池裕子、林　良博 1984「遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」
『古文化財の自然科学的研究』：pp.519－524
後藤仁敏、大泰司紀之編 1986『歯の比較解剖学』（医師薬出版株式会社）
高野伸二 1982　『フィールドガイド日本の野鳥』（日本野鳥の会）
富岡直人 1998　「御所遺跡出土の動物遺存体」
『中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告　御所遺跡』：pp.136－163
富岡直人 2000　「新蔵町３丁目遺跡出土動物遺存体」『新蔵町３丁目遺跡徳島保健所地点』
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書31：pp.427－438
富岡直人 2000　「井手天原遺跡出土動物遺存体」
『岡谷大溝散布地、三須今溝遺跡、三須河原遺跡、三須畠田遺跡、井手見延遺跡、井手天原遺跡－国道429号線改良に伴う発掘調査－』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156（岡山県教育委員会）：pp.224－237
富岡直人 2001　「岡山県天瀬遺跡出土動物遺存体の分析」
『岡山県埋蔵文化財調査報告書154、天瀬遺跡・岡山城外堀跡』
（岡山県教育委員会）：pp.89－121
西中川　駿　1989　『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究－特に日本在来種との比較』（昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書）
林　壽郎 1968　『標準図鑑全集　動物Ⅰ』（保育社）
林　壽郎 1968　『標準図鑑全集　動物Ⅱ』（保育社）
林田重幸、山内忠平　1954「日本石器時代馬について」『日本畜産会報』２（２－４）：pp.122－126
林田重幸、山内忠平　1957「馬における骨長より体高の推定法」
『鹿児島大学農学部学術報告』６：pp.146－156
林田重幸 1957　「中世日本の馬について」『日本畜産会報』28（５）：pp.301－306
松井　章 1995　「古代・中世の村落における動物祭祀」
『国立歴史民俗博物館研究報告』61：pp.55－71
Angela von den Driesch 1976 "A Guide to the Mesurement of Animal Bones from Archaeological Sites"
Peabody Museum Bulletin １, Museum of Archaeology, Harvard University

English Summary

This archaeological investigation was carried out due to the scheduled construction of the tentatively named Kyoto Japanese-style State House. This area is located in the *Kyoto-Gyoen* national park in Kamigyo ward in Kyoto city. The archaeological excavations were carried out for 6 years between 1997 and 2002, and covered on area of 14,687m^2. More than 9,600 store boxes (59cm×38cm×15cm) of material was unearthed.

The following is an outline of the history of this area according to historic texts. The present Kyoto city is based on the Heiankyo Capital established in 794. Heiankyo was modeled after the Grid Plan of the Chinese Capital during the Tang dynasty. The *Jobosei*, or grid system is characterized by streets running north to south and east to west, divided systematically at 120m intervals. This site lies on the northeast corner of the Heiankyo Capital. By the *Jobosei* rule, this site corresponds to 5th, 6th, 7th and 8th divisions of the fourth ward of the northern edge of Sakyo and the 16th division of the fourth ward of the first street of Sakyo. Also, this site includes a part of the east outer part of the Capital. In the Heian period (from the end of the eighth century to the end of the twelfth century), this site was a residential area for high ranked nobles, and was the location of residences such as *Fujiwarano Yoshifusa*'s *"Somedono"*, Prince *Tomohira*'s *"Tsuchimikadodai"*, ex-emperor *Seiwa*'s *"Seiwain"*, and *Fujiwarano Michinaga*'s *"Tsuchimikadoden"*. *"Hojoji"*, *Michinaga*'s private temple was located on the eastern side of the area. During the Muromachi period (from the first half of the fourteenth century to the latter half of the sixteenth century) the Imperial Palace was located 260m west from this excavation area, the 2nd division of the fourth ward of the northern edge of Sakyo. In the seventh century, the political center was moved to Edo under the authorization of the Shogunate regime, but the Emperor and the nobles remained in Kyoto. During this period, nobles' residences surrounded the Imperial Palace, making up the nobles' town called *Kugemachi*. Illustrations from the period suggest that this town was not made according to the *Jobosei* rule. The *Kugemachi*'s divided system was changed by the Kyoto Conflagration in 1708. In the middle of the nineteenth century, the Tokugawa shogunate was overthrown, and a modern monarchy was formed in Tokyo (formerly Edo). As a result, the Emperor moved to Tokyo, and the nobles followed. After they settled in Tokyo, *Kugemachi* was abolished and was replaced with a park.

Our excavation survey yielded features and artifacts from a broad time span encompassing the Kofun period (from the third century to the sixth century), the Asuka period (the seventh century), the Heian period, the Kamakura period (from the end of the twelfth century to the first half of the fourteenth century), the Muromachi period, the

Momoyama period and the Edo period (from the end of the sixteenth century to the middle of nineteenth century).

There are several diagonally oriented natural flows in features older than the Heiankyo Capital, and artifacts from the Kofun and the Asuka period were unearthed here. These natural flows were buried in the Heian period. The east-west street "*Oogimachi-oji*" and the north-south avenue "*Tomino-koji*" were discovered where we had presumed them to be located. Inside the residence area, we found structures such as a well and garbage pits. A particularly notable accomplishment was the discovery of the features of a pond in what we know is *Seiwain*'s garden. It is also remarkable that we unearthed green-glazed roof-tiles that were probably used at *Hojoji*. Features of a foundation platform from the Kamakura period were also found. As for the features of the Sengoku period (from the latter half of the fifteenth century to the latter half of the sixteenth century), numerous moats, stockades and wells were found. These were supposedly fortifications for the east side of the Imperial Palace. As for *Kugemachi* in the Edo period, the features of streets and residences which conform to the old pictures that were found. 23 residences from before the Kyoto Conflagration in 1708, and 17 residences from after that time were found, clearly showing the process of consolidation and division of the land. Remains such as buildings, wells, ovens, cellars (underground sheds), toilets, especially a Noh play stage and garden pond were found in residences. Also, *Kenbyo* or a ritual pot that was buried for a purification of the building compound was excavated. There are very few examples of such an artifact, the contents were determined through scientific analysis.

Other artifacts, mainly earthenware from the Kofun period to the Edo period, were also unearthed. Particularly, numerous earthenware and porcelain items dating from the Edo period were unearthed, representing data for the makeup of dishware in the society of the imperial court. In addition to the pottery and porcelain items produced near Kyoto, many were from Kyushu and Tokai region. Furthermore some porcelain items came not only from China but also from Europe. This data shows the actual conditions about the circulation of goods in that era. Such earthenware, pottery and porcelain items represent vital chronological criteria for archaeological study about Kyoto in the Edo period.

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょう　さきょう　ほくへん　しほう
書　　名	平安京左京北辺四坊　第１分冊（公家町形成前）　第２分冊（公家町）
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所調査報告
シリーズ番号	第22冊
編著者名	平方幸雄　丸川義広　小松武彦　小檜山一良　加納敬二　布川豊治　内田好昭　木下保明　大立目道代　能芝　勉 卜田健司　菅田　薫
編集機関	財団法人京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の１
発行所	財団法人京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	2004年１月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 きょうとぎょえんさん 京都御苑３ きょうえんじょうあと 饗宴場跡	26100		35度 01分 20秒	135度 46分 06秒	1997年 ５月19日～ 2002年 ３月20日	14,678m^2	京都和風 迎賓館 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡	都城	古墳・飛鳥時代	流路	土師器・須恵器	自然流路のみ検出
		平安時代	道路・井戸・溝・柱穴・ 土壙・園池	土師器・黒色土器・ 須恵器・白色土器・ 陶器・輸入陶磁器・ 瓦類・土製品・石製品・ 銭貨	条坊は計画通りに施工されていない。遺構は後期に増加する。
		鎌倉時代	道路・地業・柱穴・ 柱列・井戸・溝・土壙	土師器・瓦器・須恵器・ 陶器・輸入陶磁器・ 瓦類・石製品	遺構は少ない。
		室町・戦国期	道路・地業・建物・ 柵・溝・井戸・土壙	土師器・瓦器・陶器・ 輸入陶磁器・瓦類・ 土製品・石製品・銭貨・ 鋳造遺物・壁土	戦国期の遺構が多い。堀と柵で防御された配置が見られる。
		桃山時代	堀・土取穴・土壙・ 井戸	土師器・陶器・ 輸入陶磁器・瓦質土器・ 瓦類	大型の防御用堀を検出した。また、公家町建設に先立って大規模な土取穴が穿たれる。建物遺構はない。
		江戸時代	道路・建物・能舞台・ 園池・塀・井戸・溝・ 土壙・埋納遺構・ 土取穴・焼瓦廃棄穴	土師器・土師質土器・ 瓦質土器・陶器・磁器・ 輸入陶磁器・瓦類・ 貨幣・金属製品・ 石製品・土製品・鋳型・ 骨製品・漆器・ ガラス製品・動物遺存体	公家町の道路遺構と宅地遺構を検出した。道路と宅地割は18世紀初頭の宝永大火で大幅に変わる。

平安京左京北辺四坊
－第２分冊（公家町）－

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊

発行日　2004年１月30日
編　集
発　行　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の１
〒602－8435　TEL.075－415－0521
http://www.kyoto－arc.or.jp
印　刷　日本写真印刷株式会社
住　所　京都市中京区壬生花井町３
〒604－8551　TEL.075－811－8111